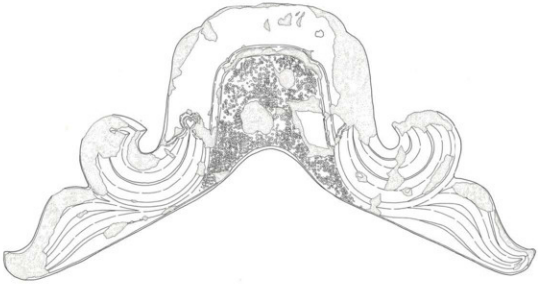
ISSN 1341-6952

東北大学埋蔵文化財調査年報18

仙台城跡二の丸第17地点の調査



仙台城跡二の丸第 17 地点出土鬼瓦

東北大学埋蔵文化財調査研究センター

2005

東北大学埋蔵文化財調査年報18

仙台城跡二の丸第17地点の調査

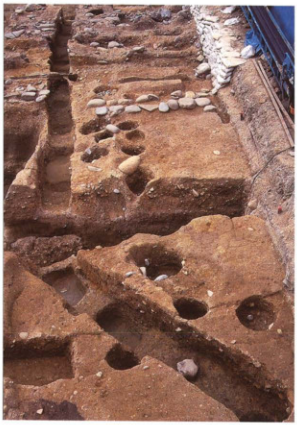
東北大学埋蔵文化財調査研究センター

2005

1．仙台城跡二の丸第17地点69号溝・70号溝（北から　Ⅲｂ１期）

2．仙台城跡二の丸第17地点中区Ⅲｂ２・３期の遺構群（西から）

3．仙台城跡二の丸第17地点２号建物跡（南から　Ⅳa期）



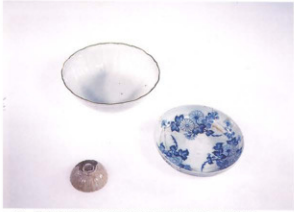
4．仙台城跡二の丸第17地点３・４号塀跡（南から　Ⅳb期）

5．仙台城跡二の丸第17地点便槽遺構（北から　Ⅱ期）

6．仙台城跡二の丸第17地点２号溝出土の陶磁器（18世紀末～19世紀初頭）

7．仙台城跡二の丸第17地点３層出土の陶磁器（18世紀末～19世紀初頭）

8．仙台城跡二の丸第17地点出土の鬼瓦・軒丸瓦・軒平瓦



9．仙台城跡二の丸第17地点便槽遺構出土の陶磁器

10．仙台城跡二の丸第17地点出土の焼塩壺・壷

11．仙台城跡二の丸第17地点出土の櫛

12．仙台城跡二の丸第17地点出土の簪類

序

東北大学の構内には、川内キャンパスを始め、各地区に周知の遺跡がある。東北大学では、1983年に埋蔵文化財調査委員会を設置し、その後の組織改編を経て、本センターが施設整備に伴う埋蔵文化財の調査を実施してきた。

本年報は、2000年度における埋蔵文化財調査の報告である。文系総合研究棟新営に伴って実施した、仙台城跡二の丸第17地点の調査成果を掲載した。川内キャンパスの南地区に所在する仙台城跡二の丸地区は、本学構内の遺跡の中でも最も重要なものである。二の丸地区の調査としては、1993年度に実施した第12地点の調査以来の大規模な調査となった。

今回の調査地点は、二の丸地区の中では西端に近い部分ではあったが、江戸時代初頭から幕末に至るまで、各時期の遺構の変遷がとらえられている。また出土遺物も膨大で、文献記録に残る文化元年（1804年）の火災の際に、まとめて廃棄されたと考えられる一括資料も出土しており、当該期の基準資料となるものである。

仙台城跡については、国史跡への部分指定も行われ、仙台市教育委員会による本丸などの調査が進められている。本センターが実施してきた二の丸地区の調査成果と、本丸などの調査成果を総合的に検討し、仙台城全体の具体的な姿を明らかにしていくことが可能となってきたと言える。それとともに、仙台城跡全体をどのように保存し活用していくのかを、考えていくことが必要となってくるであろう。本書に掲載した調査の成果が、仙台城の解明のため、また近世考古学の発展の上で、広く活用されることを願うものです。

おわりに、これらの調査を進める上でご指導ご助言をいただいた、大学内外の関係者および関係機関に厚く御礼を申し上げます。とりわけ、調査の実施から報告書の刊行に至るまで、多くの協力を賜った本学の施設部、文系４学部の関係各位には、ここに深く感謝申し上げる次第です。

埋蔵文化財調査研究センター長
阿子島　香

例　言

1．本年報は、東北大学構内において、東北大学埋蔵文化財調査研究センターが2000年度に行った遺跡調査、ならびに　研究成果をまとめたものである。

2．報告される遺跡と略号、調査期間、調査担当者は以下の通りである。

仙台城跡二の丸第17次調査地点（NM17）

試掘調査　1998年　6月1日～8月7日　藤沢敦・関根達人　本調査　2000年　3月1日～12月21日　藤沢敦・関根達人・柴田（旧姓京野）恵子

3．調査・整理作業は、東北大学埋蔵文化財調査研究センターが行った。

4．本年報の編集は、阿子島香の指導のもとに、藤沢敦・柴田恵子・高木暢亮が担当した。

5．本文は、藤沢敦・柴田恵子・高木暢亮が分担執筆した。分担は、以下のとおりである。

第Ⅰ章：藤沢敦

第Ⅱ章：1高木暢亮、2～4藤澤敦、5(1)～(4)・(6)柴田恵子、(5)・(7)～(9)高木暢亮、6(1)藤澤敦、(2)柴田恵子、7藤澤敦

英文要旨については、高木暢亮が作成し、阿子島香が校訂した。

6．発掘調査および整理・報告書作成にあたっては、以下の方々や関係機関から御指導・御協力を賜った。記して感謝申し上げる（敬称略）。

仙台市教育委員会・東北大学大学院文学研究科考古学研究室

7．出土遺物・調査記録は、東北大学埋蔵文化財調査研究センターで保管・管理している。

凡　例

1．方位は、真北に統一してある。
2．図１と図２は、それぞれ国土地理院作成の、２万５千分の１地形図「仙台西北部」と「仙台西南部」、１万分の１地形図「青葉山」を使用した。
3．川内地区の仙台城二の丸跡、および北方の武家屋敷地区にあたる地域の地形測量図は、仙台市教育委員会の作成による「仙台城跡地形図」（縮尺500分の１）を使用した。
4．遺物の実測図および写真の縮尺はそれぞれに示した。
5．引用・参考文献は、巻末にまとめた。また本文中で、『東北大学埋蔵文化財調査年報』を引用する場合は、年報１という形で略記した。
6．挿図中のスクリーントーンは、特に指示しないものについては、以下の通りである。

遺構断面図　磔：　木：

遺物断面図　青磁：　炭化物：

発掘調査参加者

青井恭子　赤井文人　安芸隆広　安食洋志　芦野徳松　石田公子　井出達郎　伊藤啓祐　今泉八重子
岩井広成　遠藤政彦　大内松夫　大塚玲子　大森芳子　小川優　奥井亮介　小野章太郎　門脇隆志　鹿又喜隆
神田和彦　北村英二郎　黒田篤史　小林亜矢　小松美穂　古山友子　斎藤慶吏　佐伯史子　堺沢亜紀
佐々木智穂　佐々木陽子　佐々木好夫　笹原麻里　佐藤ケイコ　佐藤二郎　佐藤新子　佐藤隆信　佐藤てる子
佐藤とみ子　佐藤彦二　佐藤公保　佐藤みえ子　庄司明美　鈴鹿久子　鈴木隆　鈴木英子　関敦司　高井淳
高根沢祐　高野操　高橋和子　千葉直樹　津川育実　土屋和章　常盤健　新沼よしえ　布川寛人　野口隆太郎
羽石智治　原田雄紀　東影悠　肥後光佑　平井真理　平沢里沙　藤田早苗　伏見寿真　細田裕司　前田尚志
三浦しげ子　水野沙織　三田地敏博　村上裕次　茂泉真由美　森山隆　谷津ミツ子　山田浩一郎　山中佑介
横井寿未　吉田学　吉野久美子　若松かおり

整理作業参加者

青井恭子　今泉八重子　岩井広成　遠藤政彦　大内真希　大塚玲子　小山久美子　古山友子　佐藤新子　庄司明美　白石浩子　千葉直美　布川寛人　平井真理　三達さやか　茂泉真由美　森山隆　湯瀬さおり

東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（2000年度）

委員長	センター長（文学研究科　教授）	須藤　隆
委　員	川内地区協議会協議員（教育学研究科　教授）	菊池武彦
	青葉山地区協議会協議員（薬学研究科　教授）	小笠原國郎
	星陵地区協議会協議員（医学研究科　教授）	菅村和夫
	片平地区協議会協議員（電気通信研究所　教授）	沢田康次
	文学研究科　教授	今泉隆雄
	文学研究科　教授	大藤　修
	文学研究科　教授	阿子島　香
	東北アジア研究センター　教授	入間田宣夫
	理学研究科　教授	藤巻宏和
	工学研究科　教授	飯澗康一
	総合学術博物館　教授	柳田俊雄
	施設部長	黒岩七三
幹事	施設部　企画課長	佐々木紀安

東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会専門委員会（2000年度）

委員長	センター長（文学研究科　教授）	須藤　隆
委　員	文学研究科　教授	今泉隆雄
	文学研究科　教授	大藤　修
	文学研究科　教授	阿子島　香
	東北アジア研究センター　教授	入間田宣夫
	理学研究科　教授	藤巻宏和
	工学研究科　教授	飯澗康一
	総合学術博物館　教授	柳田俊雄
	調査研究員（文学研究科　助手）	藤沢　敦
	調査研究員（文学研究科　助手）	関根達人
	調査研究員（文学研究科　助手）	京野恵子
	施設部　企画課長	佐々木紀安
	教育学研究科　事務長	佐々木健一

目　次

巻頭カラー図版
序
例言
凡例
東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会
東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会専門委員会
目次
図目次
表目次
図版目次

第Ⅰ章　2000年度（平成12年度）事業の概要 …… 1
1．はじめに …… 1
2．運営委員会・専門委員会 …… 1
3．埋蔵文化財調査の概要 …… 4
(1) 川内地区の調査 …… 4
(2) 青葉山地区の調査 …… 9
(3) 富沢地区の調査 …… 9
4．遺物整理作業 …… 10
5．保存処理事業 …… 11
6．資料保管状況 …… 11
7．研究活動 …… 12
(1) 受託研究・共同研究等 …… 12
(2) 学会発表等 …… 12
(3) 資料調査 …… 13
(4) 科学研究費採択状況 …… 13
8．教育普及活動 …… 13
(1) 非常勤講師 …… 13
(2) 保管資料の貸出 …… 13
(3) 外部からの派遣依頼等 …… 13
(4) 広報活動 …… 14

第Ⅱ章　仙台城跡二の丸第17地点（NM17）の調査 …… 15
1．仙台城跡二の丸地区の立地と歴史 …… 15
2．調査経緯 …… 16
(1) 1999年度までの調査 …… 16
(2) 調査地点の位置 …… 16
(3) 調査の方法と経過 …… 16
①1998年度試掘調査 …… 16
②2000年度本調査 …… 18
③記録方法 …… 20
④遺構の名称について …… 22
⑤遺物の取り上げについて …… 22
⑥整理作業 …… 23
3．基本層序と時期区分 …… 28
(1) 基本層序 …… 28
(2) 遺構の変遷段階の設定 …… 29
①変遷段階の大別 …… 29
②Ⅲａ期とⅢｂ期の区分 …… 32
③Ⅲｂ期の細分 …… 32
④Ⅳ期の細分 …… 33
(3) 各期の推定時期 …… 34
①文化元年の火災とⅣ期の推定時期 …… 34
②Ⅲａ期の遺構と元禄年間の二の丸大改造 34
③伝伊達宗泰の屋敷と二の丸造成 …… 35
④各期の推定時期 …… 35
4．検出遺構 …… 36
(1) Ⅰ期の遺構 …… 36
(2) Ⅱ期の遺構 …… 39
(3) Ⅲａ期の遺構 …… 50
(4) Ⅲｂ１期の遺構 …… 56

(5) Ⅲb2期の遺構 ……67
(6) Ⅲb3期の遺構 ……77
(7) Ⅲb4期の遺構 ……86
(8) Ⅳa期の遺構 ……89
(9) Ⅳb期の遺構 ……99
(10) Ⅳc期の遺構 ……106
5．出土遺物 ……114
(1) 陶磁器 ……114
(2) 軟質施釉陶器 ……118
(3) 土師質・瓦質土器 ……118
(4) 土人形・土製品 ……119
(5) 瓦 ……120
(6) 木製品・漆塗製品 ……123
(7) 金属製品 ……126
(8) 石器・石製品 ……126
(9) ガラス製品 ……127
6．考察 ……231
(1) 検出遺構の検討 ……231
①文献記録等に見える二の丸地区の変遷 ‥231
②二の丸造営以前の遺構 ……231
③改造前の二の丸期の遺構 ……233
④改造後の二の丸期の遺構 ……236
⑤文化元年の火災とⅣa期の建物群 ……240
⑥建物の柱間寸法 ……241
⑦塀・柱列の柱間寸法と構造 ……242
(2) 陶磁器・土器の検討 ……243
①陶磁器・土器の種類別組成の検討 ……243
②陶磁器の器種組成の検討 ……243
③陶磁器の産地別組成の検討 ……244
④土師質土器の検討 ……245
⑤小結 ……246
7．まとめ ……252

引用・参考文献
英文要旨

写真図版

図 目 次

図1　東北大学と周辺の遺跡 ……2
図2　仙台城と二の丸の位置 ……3
図3　仙台城跡二の丸・武家屋敷地区調査地点 ……5
図4　青葉山地区調査地点 ……7
図5　富沢地区と周辺の遺跡 ……9
図6　横穴墓の残存状況（1985年撮影）……10
図7　収蔵遺物量の推移 ……12
図8　二の丸第17地点現地説明会開催状況 ……14
図9　二の丸第17地点調査区の位置 ……17
図10　二の丸第17地点調査区模式図 ……18
図11　二の丸第17地点作業状況 ……20
図12　二の丸第17地点基本層序模式図 ……29
図13　二の丸第17地点外周壁断面図(1) ……30
図14　二の丸第17地点外周壁断面図(2) ……31
図15　二の丸第17地点Ⅰ期遺構配置図 ……37
図16　二の丸第17地点Ⅰ期の遺構 ……38
図17　二の丸第17地点Ⅱ期遺構配置図 ……40
図18　二の丸第17地点Ⅱ期の遺構(1) ……41
図19　二の丸第17地点Ⅱ期の遺構(2) ……44
図20　二の丸第17地点Ⅱ期の遺構(3) ……45
図21　二の丸第17地点Ⅱ期の遺構(4) ……46
図22　二の丸第17地点Ⅱ期の遺構(5) ……48
図23　二の丸第17地点Ⅱ期の遺構(6) ……49
図24　二の丸第17地点Ⅲａ期遺構配置図 ……51
図25　二の丸第17地点Ⅲａ期の遺構(1) ……52
図26　二の丸第17地点Ⅲａ期の遺構(2) ……53
図27　二の丸第17地点Ⅲａ期の遺構(3) ……54
図28　二の丸第17地点Ⅲａ期の遺構(4) ……55
図29　二の丸第17地点Ⅲｂ１期遺構配置図 ……57
図30　二の丸第17地点Ⅲｂ１期の遺構(1) ……58
図31　二の丸第17地点Ⅲｂ１期の遺構(2) ……59
図32　二の丸第17地点Ⅲｂ１期の遺構(3) ……60
図33　二の丸第17地点Ⅲｂ１期の遺構(4) ……62
図34　二の丸第17地点Ⅲｂ１期の遺構(5) ……63
図35　二の丸第17地点Ⅲｂ１期の遺構(6) ……64
図36　二の丸第17地点Ⅲｂ１期の遺構(7) ……65
図37　二の丸第17地点Ⅲｂ２期遺構配置図 ……69
図38　二の丸第17地点Ⅲｂ２期の遺構(1) ……70
図39　二の丸第17地点Ⅲｂ２期の遺構(2) ……71
図40　二の丸第17地点Ⅲｂ２期の遺構(3) ……72
図41　二の丸第17地点Ⅲｂ２期の遺構(4) ……73
図42　二の丸第17地点Ⅲｂ２期の遺構(5) ……74
図43　二の丸第17地点Ⅲｂ２期の遺構(6) ……75
図44　二の丸第17地点Ⅲｂ３期遺構配置図 ……79
図45　二の丸第17地点Ⅲｂ３期の遺構(1) ……80
図46　二の丸第17地点Ⅲｂ３期の遺構(2) ……81
図47　二の丸第17地点Ⅲｂ３期の遺構(3) ……82
図48　二の丸第17地点Ⅲｂ３期の遺構(4) ……83
図49　二の丸第17地点Ⅲｂ３期の遺構(5) ……84
図50　二の丸第17地点Ⅲｂ４期遺構配置図 ……87
図51　二の丸第17地点Ⅲｂ４期の遺構 ……88
図52　二の丸第17地点Ⅳａ期遺構配置図 ……90
図53　二の丸第17地点Ⅳａ期の遺構(1) ……91
図54　二の丸第17地点Ⅳａ期の遺構(2) ……93
図55　二の丸第17地点Ⅳａ期の遺構(3) ……94
図56　二の丸第17地点Ⅳａ期の遺構(4) ……95
図57　二の丸第17地点Ⅳａ期の遺構(5) ……96
図58　二の丸第17地点Ⅳａ期の遺構(6) ……97
図59　二の丸第17地点Ⅳｂ期遺構配置図 ……101
図60　二の丸第17地点Ⅳｂ期の遺構(1) ……102
図61　二の丸第17地点Ⅳｂ期の遺構(2) ……103
図62　二の丸第17地点Ⅳｂ期の遺構(3) ……104
図63　二の丸第17地点Ⅳｃ期遺構配置図 ……109
図64　二の丸第17地点Ⅳｃ期の遺構(1) ……110
図65　二の丸第17地点Ⅳｃ期の遺構(2) ……111
図66　二の丸第17地点Ⅳｃ期の遺構(3) ……112
図67　二の丸第17地点Ⅳｃ期の遺構(4) ……113
図68　瓦分類概念図 ……120
図69　瓦当直径と周縁幅の関係 ……121
図70　蟹管分類模式図 ……127
図71　二の丸第17地点出土磁器(1) ……128
図72　二の丸第17地点出土磁器(2) ……129
図73　二の丸第17地点出土磁器(3) ……130
図74　二の丸第17地点出土磁器(4) ……131

図75　二の丸第17地点出土縄器(5)……132
図76　二の丸第17地点出土縄器(6)……133
図77　二の丸第17地点出土縄器(7)……134
図78　二の丸第17地点出土陶器(1)……135
図79　二の丸第17地点出土陶器(2)……136
図80　二の丸第17地点出土陶器(3)……137
図81　二の丸第17地点出土陶器(4)……138
図82　二の丸第17地点出土陶器(5)……139
図83　二の丸第17地点出土陶器(6)……140
図84　二の丸第17地点出土陶器(7)……141
図85　二の丸第17地点出土陶器(8)……142
図86　二の丸第17地点出土陶器(9)……143
図87　二の丸第17地点出土陶器(10)……144
図88　二の丸第17地点出土陶器(11)……145
図89　二の丸第17地点出土陶器(12)……146
図90　二の丸第17地点出土土器(1)……147
図91　二の丸第17地点出土土器(2)……148
図92　二の丸第17地点出土土器(3)……149
図93　二の丸第17地点出土土器(4)……150
図94　二の丸第17地点出土土器(5)・
土製品・人形……151
図95　二の丸第17地点出土軒丸瓦類(1)……152
図96　二の丸第17地点出土軒丸瓦類(2)……153
図97　二の丸第17地点出土軒丸瓦類(3)・
軒平瓦類(1)……154
図98　二の丸第17地点出土軒平瓦類(2)……155
図99　二の丸第17地点出土軒桟瓦……156
図100　二の丸第17地点出土丸瓦(1)……157
図101　二の丸第17地点出土丸瓦(2)……158
図102　二の丸第17地点出土丸瓦(3)……159
図103　二の丸第17地点出土丸瓦(4)……160
図104　二の丸第17地点出土丸瓦(5)……161
図105　二の丸第17地点出土平瓦(1)……162
図106　二の丸第17地点出土平瓦(2)・
板斯瓦(1)……163
図107　二の丸第17地点出土板斯瓦(2)・
板状瓦(1)……164
図108　二の丸第17地点出土板状瓦(2)……165
図109　二の丸第17地点出土板状瓦(3)……166
図110　二の丸第17地点出土
面戸瓦・輪違い・袴瓦……167
図111　二の丸第17地点出土T字瓦(1)……168
図112　二の丸第17地点出土T字瓦(2)・
その他の瓦(1)……169
図113　二の丸第17地点出土その他の瓦(2)……170
図114　二の丸第17地点出土刻印瓦……171
図115　二の丸第17地点出土鬼瓦(1)……172
図116　二の丸第17地点出土鬼瓦(2)……173
図117　二の丸第17地点出土漆椀(1)……174
図118　二の丸第17地点出土漆椀(2)・
その他の漆塗製品……175
図119　二の丸第17地点出土円板状木製品・櫛……176
図120　二の丸第17地点出土溶状木製品……177
図121　二の丸第17地点出土曲物・桧……178
図122　二の丸第17地点出土楔……179
図123　二の丸第17地点出土下駄・桶類……180
図124　二の丸第17地点出土
その他の木製品(1)……181
図125　二の丸第17地点出土
その他の木製品(2)……182
図126　二の丸第17地点出土
その他の木製品(3)……183
図127　二の丸第17地点出土
その他の木製品(4)……184
図128　二の丸第17地点出土古銭(1)……185
図129　二の丸第17地点出土古銭(2)……186
図130　二の丸第17地点出土古銭(3)……187
図131　二の丸第17地点出土古銭(4)……188
図132　二の丸第17地点出土櫛管……189
図133　二の丸第17地点出土その他の金属製品・
石器・石製品……190
図134　二の丸第17地点出土
石器・石製品・ガラス製品……191
図135　二の丸第17地点Ⅰ期の遺構と
周辺の調査区の関係……232
図136　二の丸第17地点Ⅱ期の遺構と
周辺の調査区の関係……234
図137　二の丸第17地点調査区周辺の絵図(1)……235
図138　二の丸第17地点調査区周辺の絵図(2)……237

図139 二の丸第17地点調査区周辺の絵図(3) ……238
図140 二の丸第２・５・17地点と絵図との対比 ‥239
図141 二の丸第17地点出土陶磁器集成図(1) ……247
図142 二の丸第17地点出土陶磁器集成図(2) ……248
図143 二の丸出土陶磁器・土器種類別組成 ……249
図144 二の丸出土磁器の器種組成 ……249
図145 二の丸出土陶器の器種組成 ……250
図146 二の丸出土陶器の産地別組成 ……250
図147 土師質土器皿法量分布と
底部糸切り技法比率 ‥‥251

表 目 次

表１ 2000年度調査概要表 ……4
表２ 川内地区基準点測量成果表 ……21
表３ 二の丸第17地点時期別遺構一覧表 ……24
表４ 二の丸第17地点遺構名称対照表(1) ……25
表５ 二の丸第17地点遺構名称対照表(2) ……26
表６ 二の丸第17地点遺構名称対照表(3) ……27
表７ 二の丸第17地点出土磁器集計表(1) ……192
表８ 二の丸第17地点出土磁器集計表(2) ……193
表９ 二の丸第17地点出土磁器集計表(3) ……194
表10 二の丸第17地点出土陶器集計表(1) ……195
表11 二の丸第17地点出土陶器集計表(2) ……196
表12 二の丸第17地点出土陶器集計表(3) ……197
表13 二の丸第17地点出土土器・
土製品集計表(1) ……198
表14 二の丸第17地点出土土器・
土製品集計表(2) ……199
表15 二の丸第17地点出土土器・
土製品集計表(3) ……200
表16 二の丸第17地点出土瓦集計表(1) ……201
表17 二の丸第17地点出土瓦集計表(2) ……202
表18 二の丸第17地点出土瓦集計表(3) ……203
表19 二の丸第17地点出土瓦集計表(4) ……204
表20 二の丸第17地点出土瓦集計表(5) ……205
表21 二の丸第17地点出土瓦集計表(6) ……206
表22 二の丸第17地点出土
漆塗製品・木製品集計表(1) ……207
表23 二の丸第17地点出土
漆塗製品・木製品集計表(2) ……208
表24 二の丸第17地点出土
漆塗製品・木製品集計表(3) ……209
表25 二の丸第17地点出土金属製品集計表 ……210
表26 二の丸第17地点出土その他の遺物集計表 ‥211
表27 二の丸第17地点出土磁器観察表(1) ……212
表28 二の丸第17地点出土磁器観察表(2) ……213
表29 二の丸第17地点出土磁器観察表(3) ……214
表30 二の丸第17地点出土陶器観察表(1) ……215
表31 二の丸第17地点出土陶器観察表(2) ……216
表32 二の丸第17地点出土陶器観察表(3) ……217
表33 二の丸第17地点出土陶器観察表(4) ……218
表34 二の丸第17地点出土土師質土器皿観察表 ‥219
表35 二の丸第17地点出土
その他の土師質土器観察表 ‥‥220
表36 二の丸第17地点出土瓦質土器観察表 ……220
表37 二の丸第17地点出土軟質施釉陶器観察表 ‥220
表38 二の丸第17地点出土
土人形・土製品観察表 ‥‥220
表39 二の丸第17地点出土軒丸瓦類観察表 ……221
表40 二の丸第17地点出土軒平瓦類観察表 ……221
表41 二の丸第17地点出土軒桟瓦観察表 …… 222
表42 二の丸第17地点出土丸瓦観察表 ……222
表43 二の丸第17地点出土平瓦観察表 ……222
表44 二の丸第17地点出土板状瓦観察表 ……222
表45 二の丸第17地点出土板斯瓦観察表 ……223
表46 二の丸第17地点出土平瓦１類観察表 ……223
表47 二の丸第17地点出土平瓦２類観察表 ……223
表48 二の丸第17地点出土鳥伏間瓦察表 ……223
表49 二の丸第17地点出土桟瓦観察表 ……223
表50 二の丸第17地点出土面戸瓦観察表 ……224
表51 二の丸第17地点出土輪違い瓦察表 ……224
表52 二の丸第17地点出土棟瓦観察表 ……224
表53 二の丸第17地点出土Ｔ字瓦観察表 ……224
表54 二の丸第17地点出土その他の瓦観察表 ‥‥224

表55　二の丸第17地点出土漆椀・漆皿観察表 ····225
表56　二の丸第17地点出土
その他の漆塗製品観察表 ····225
表57　二の丸第17地点出土円板状木製品観察表 ··225
表58　二の丸第17地点出土下駄観察表 ·····226
表59　二の丸第17地点出土曲物観察表 ·····226
表60　二の丸第17地点出土楔状察表 ·····226
表61　二の丸第17地点出土箸状木製品観察表 ····226
表62　二の丸第17地点出土櫛観察表 ·····227
表63　二の丸第17地点出土桶観察表 ·····227
表64　二の丸第17地点出土
その他の木製品観察表 ····227
表65　二の丸第17地点出土古銭観察表(1) ·····228
表66　二の丸第17地点出土古銭観察表(2) ·····229
表67　二の丸第17地点出土煙管雁首観察表 ·····230
表68　二の丸第17地点出土煙管吸口観察表 ·····230
表69　二の丸第17地点出土
その他の金属製品観察表 ····230
表70　二の丸第17地点出土ガラス製品観察表 ····230
表71　二の丸第17地点出土石器・石製品観察表 ··230

図　版　目　次

図版1　二の丸第17地点全景(1) ·····257
図版2　二の丸第17地点全景(2) ·····258
図版3　二の丸第17地点全景(3) ·····259
図版4　二の丸第17地点全景(4) ·····260
図版5　二の丸第17地点全景(5) ·····261
図版6　二の丸第17地点全景(6) ·····262
図版7　二の丸第17地点全景(7) ·····263
図版8　二の丸第17地点外周壁セクション ·····264
図版9　二の丸第17地点Ⅰ期の遺構 ·····265
図版10　二の丸第17地点Ⅱ期の遺構(1) ·····266
図版11　二の丸第17地点Ⅱ期の遺構(2) ·····267
図版12　二の丸第17地点Ⅱ期の遺構(3) ·····268
図版13　二の丸第17地点Ⅱ期の遺構(4) ·····269
図版14　二の丸第17地点Ⅱ期の遺構(5) ·····270
図版15　二の丸第17地点Ⅱ期の遺構(6) ·····271
図版16　二の丸第17地点Ⅱ期の遺構(7) ·····272
図版17　二の丸第17地点Ⅲａ期の遺構(1) ·····273
図版18　二の丸第17地点Ⅲａ期の遺構(2) ·····274
図版19　二の丸第17地点Ⅲｂ１期の遺構(1) ·····275
図版20　二の丸第17地点Ⅲｂ１期の遺構(2) ·····276
図版21　二の丸第17地点Ⅲｂ１期の遺構(3) ·····277
図版22　二の丸第17地点Ⅲｂ１期の遺構(4) ·····278
図版23　二の丸第17地点Ⅲｂ１期の遺構(5) ·····279
図版24　二の丸第17地点Ⅲｂ２期の遺構(1) ·····280
図版25　二の丸第17地点Ⅲｂ２期の遺構(2) ·····281
図版26　二の丸第17地点Ⅲｂ２期の遺構(3) ·····282
図版27　二の丸第17地点Ⅲｂ２期の遺構(4) ·····283
図版28　二の丸第17地点Ⅲｂ２期の遺構(5) ·····284
図版29　二の丸第17地点Ⅲｂ２期の遺構(6) ·····285
図版30　二の丸第17地点Ⅲｂ２期の遺構(7) ·····286
図版31　二の丸第17地点Ⅲｂ３期の遺構(1) ·····287
図版32　二の丸第17地点Ⅲｂ３期の遺構(2) ·····288
図版33　二の丸第17地点Ⅲｂ３期の遺構(3) ·····289
図版34　二の丸第17地点Ⅲｂ３期の遺構(4) ·····290
図版35　二の丸第17地点Ⅲｂ３期の遺構(5) ·····291
図版36　二の丸第17地点Ⅲｂ３期の遺構(6) ·····292
図版37　二の丸第17地点Ⅲｂ４期の遺構(1) ·····293
図版38　二の丸第17地点Ⅲｂ４期の遺構(2) ·····294
図版39　二の丸第17地点Ⅲｂ４期の遺構(3) ・
Ⅲｂ期（細分不明）の遺構 ····295
図版40　二の丸第17地点Ⅳａ期の遺構(1) ·····296
図版41　二の丸第17地点Ⅳａ期の遺構(2) ·····297
図版42　二の丸第17地点Ⅳａ期の遺構(3) ·····298
図版43　二の丸第17地点Ⅳａ期の遺構(4) ·····299
図版44　二の丸第17地点Ⅳａ期の遺構(5) ·····300
図版45　二の丸第17地点Ⅳａ期の遺構(6) ·····301
図版46　二の丸第17地点Ⅳａ期の遺構(7) ·····302
図版47　二の丸第17地点Ⅳｂ期の遺構(1) ·····303
図版48　二の丸第17地点Ⅳｂ期の遺構(2) ·····304
図版49　二の丸第17地点Ⅳｂ期の遺構(3) ·····305
図版50　二の丸第17地点Ⅳｂ期の遺構(4) ·····306
図版51　二の丸第17地点Ⅳｂ期の遺構(5) ·····307

図版52　二の丸第17地点Ⅳb期の遺構(6)……308
図版53　二の丸第17地点Ⅳb期の遺構(7)……309
図版54　二の丸第17地点Ⅳb期の遺構(8)……310
図版55　二の丸第17地点Ⅳc期の遺構(1)……311
図版56　二の丸第17地点Ⅳc期の遺構(2)……312
図版57　二の丸第17地点Ⅳc期の遺構(3)……313
図版58　二の丸第17地点Ⅳc期の遺構(4)……314
図版59　二の丸第17地点出土磁器(1)……315
図版60　二の丸第17地点出土磁器(2)……316
図版61　二の丸第17地点出土磁器(3)……317
図版62　二の丸第17地点出土磁器(4)……318
図版63　二の丸第17地点出土磁器(5)……319
図版64　二の丸第17地点出土磁器(6)……320
図版65　二の丸第17地点出土磁器(7)……321
図版66　二の丸第17地点出土磁器(8)……322
図版67　二の丸第17地点出土陶器(1)……323
図版68　二の丸第17地点出土陶器(2)……324
図版69　二の丸第17地点出土陶器(3)……325
図版70　二の丸第17地点出土陶器(4)……326
図版71　二の丸第17地点出土陶器(5)……327
図版72　二の丸第17地点出土陶器(6)……328
図版73　二の丸第17地点出土陶器(7)……329
図版74　二の丸第17地点出土陶器(8)……330
図版75　二の丸第17地点出土陶器(9)……331
図版76　二の丸第17地点出土陶器(10)……332
図版77　二の丸第17地点出土陶器(11)……333
図版78　二の丸第17地点出土陶器(12)……334
図版79　二の丸第17地点出土陶器(13)……335
図版80　二の丸第17地点出土陶器(14)……336
図版81　二の丸第17地点出土陶器(15)・
軟質施釉陶器……337
図版82　二の丸第17地点出土土器(1)……338
図版83　二の丸第17地点出土土器(2)……339
図版84　二の丸第17地点出土土器・
土製品・人形(3)……340
図版85　二の丸第17地点出土軒丸瓦類(1)……341
図版86　二の丸第17地点出土軒丸瓦類(2)・
軒平瓦類(1)・鳥伏間……342
図版87　二の丸第17地点出土軒平瓦類(2)・
軒桟瓦……343
図版88　二の丸第17地点出土丸瓦(1)……344
図版89　二の丸第17地点出土丸瓦(2)・
平瓦(1)……345
図版90　二の丸第17地点出土平瓦(2)……346
図版91　二の丸第17地点出土平瓦(3)・
板屑瓦(1)……347
図版92　二の丸第17地点出土板屑瓦(2)・
板状瓦(1)……348
図版93　二の丸第17地点出土板状瓦(2)……349
図版94　二の丸第17地点出土宇宇瓦・
輪違い・面戸瓦・棟瓦……350
図版95　二の丸第17地点出土鬼瓦……351
図版96　二の丸第17地点出土その他の瓦……352
図版97　二の丸第17地点出土刻印瓦……353
図版98　二の丸第17地点出土漆椀(1)・漆皿……354
図版99　二の丸第17地点出土漆椀(2)・
その他の漆塗製品・円板状木製品(1)……355
図版100　二の丸第17地点出土円板状木製品(2)・
箸状木製品……356
図版101　二の丸第17地点出土桶・曲物(1)……357
図版102　二の丸第17地点出土曲物(2)・楔……358
図版103　二の丸第17地点出土擂・下駄・栓……359
図版104　二の丸第17地点出土
その他の木製品(1)……360
図版105　二の丸第17地点出土
その他の木製品(2)……361
図版106　二の丸第17地点出土
その他の木製品(3)……362
図版107　二の丸第17地点出土古銭(1)……363
図版108　二の丸第17地点出土古銭(2)……364
図版109　二の丸第17地点出土古銭(3)……365
図版110　二の丸第17地点出土古銭(4)……366
図版111　二の丸第17地点出土古銭(5)・煙管……367
図版112　二の丸第17地点出土その他の金属製品……368
図版113　二の丸第17地点出土
石器・石製品・ガラス製品……369

第Ⅰ章　2000年度（平成12年度）事業の概要

1．はじめに

東北大学には、仙台市内の各キャンパスに加えて、多くの研究施設がある。これらの各地区構内には、多くの埋蔵文化財が存在している（図1）。特に川内地区は、ほぼ全域が近世の仙台城跡二の丸地区と二の丸北方武家屋敷地区にあたっている（図2）。東北大学構内での施設整備等に伴う埋蔵文化財調査については、1983年度に東北大学埋蔵文化財調査委員会が組織されて以降、その実務機関である埋蔵文化財調査室が、調査の任にあたってきた。1994年度には、埋蔵文化財調査委員会を改組し、学内共同利用施設としての埋蔵文化財調査研究センターが設置され、調査委員会の事業を引き継いでいる。

2000年度においても、川内地区で大規模な調査が実施され、新たな資料を提供することとなった。本年報は、これらの調査成果、および同年度のセンターの研究教育活動など、各種事業についてまとめたものである。

2．運営委員会・専門委員会

東北大学埋蔵文化財調査研究センターでは、センターの運営に関する重要事項を審議する運営委員会と、運営委員会の下に埋蔵文化財調査に関する専門的事項を審議する専門委員会が設置されており、両委員会の審議をもとに運営が進められている。通常は、運営委員会は年度当初に一回開催し、そこで年間の事業予定・予算等を審議し、調査に関わる具体的な事項は、専門委員会をその都度開催して審議することとしている。

2000年度（平成12年度）は、運営委員会は1回、専門委員会は3回開催した。それぞれの開催月日・議事内容は以下の通りである。

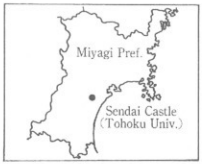
埋蔵文化財調査研究センター運営委員会

4月12日　審議事項　（1）平成12年度埋蔵文化財調査計画について
（2）平成12年度センター運営費について
（3）平成12年度整理作業計画について
（4）東北大学埋蔵文化財調査研究センター長について
（5）その他

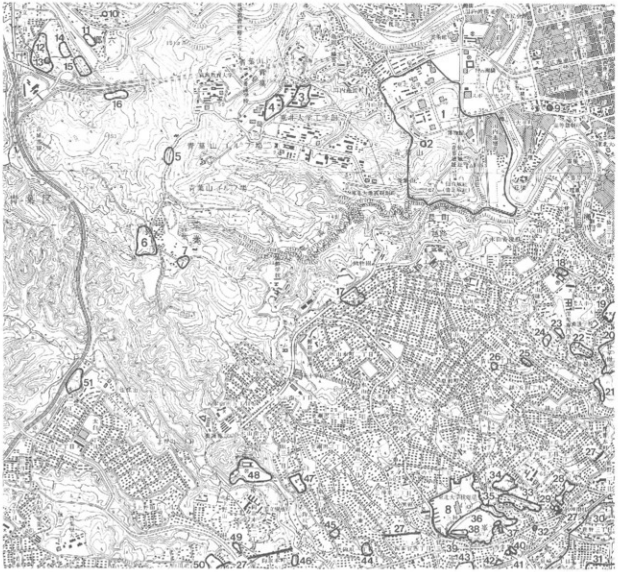
報告事項　（1）平成11年度埋蔵文化財調査結果について
（2）平成11年度センター運営経費決算について
（3）平成11年度整理作業について
（4）調査研究員の流用定員について
（5）その他

表1　2000年度調査概要表
Tab. 1　Excavations on the campus in the fiscal year 2000

調査の種類	調査地点（略号）	原因	調査期間	面積	時期
本調査	仙台城跡二の丸第17地点（NM17）	文科系4学部総合研究棟新営	3/1～12/21	957㎡	近世
立会調査	川内北地区プール南側（2000-1）	プール給水管改修	4/21	－	－
	植物園本館南東隅（2000-2）	屋外汚水管改修	5/29～6/2	－	－
	宮沢団地東側（2000-3）	法面改修	8/29	－	－
	工学研究科グランド南側（2000-4）	未来情報社会研究館新営	2/7	－	－



1：Ruin of Sendai Castle
2：Kawauchi steles
3：Aobayama Site Loc. B
4：Aobayama Site Loc. E
5：Aobayama Site Loc. C
6：Aobayama Site Loc. A
7：Aobayama Site Loc. D
8：Ashinokuchi Site



1：仙台城跡　2：川内古碑群　3：青葉山遺跡B地点　4：青葉山遺跡E地点　5：青葉山遺跡C地点　6：青葉山遺跡A地点
7：青葉山遺跡D地点　8：芦ノ口遺跡　9：片平仙台大神宮の板碑　10：郷六大日如来の碑　11：鷲岡城跡　12郷六城跡
13：郷六端武碑　14：沼田遺跡　15：郷六御殿跡　16：郷六遺跡　17：松ヶ岡遺跡　18：向山高裏遺跡　19：萩ヶ丘遺跡
20：茂ヶ崎城跡　21：二ツ沢横穴墓群　22：萩ヶ岡B遺跡　23：八木山緑町遺跡　24：二ツ沢遺跡　25：青山二丁目遺跡
26：青山二丁目B遺跡　27：杉土手（旧除土手）　28：砂押屋敷遺跡　29：砂押古墳　30：富沢遺跡　31：泉崎浦遺跡
32：金洗沢古墳　33：上手内窯跡　34：上手内遺跡　35：土手内横穴墓群　36：三神峯遺跡　37：金山窯跡　38：三神峯古墳群
39：富沢窯跡　40：裏町東遺跡　41：裏町古墳　42：原東遺跡　43：原遺跡　44：八幡遺跡　45：後田遺跡　46：町遺跡
47：神瀬山遺跡　48：御堂平遺跡　49：上野山遺跡　50：北前遺跡　51：佐保山東遺跡

図1　東北大学と周辺の遺跡
Fig. 1　Archaeological sites and Tohoku University

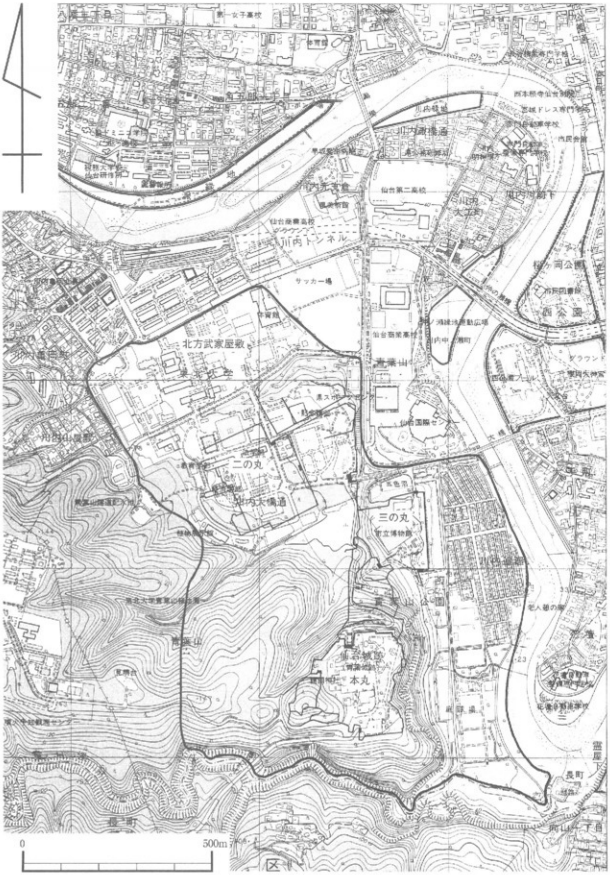


図2　仙台城と二の丸の位置
Fig. 2　Distribution of Sendai Castle

埋蔵文化財調査研究センター運営委員会専門委員会

4月22日	審議事項	（1）平成12年度埋蔵文化財調査計画について
		（2）平成12年度整理作業計画について
		（3）その他
	報告事項	（1）平成11年度埋蔵文化財調査結果について
		（2）平成11年度整理作業について
		（3）その他
8月1日	審議事項	（1）総合研究棟新営に伴う埋蔵文化財調査について
		（2）工学部共通駐車場整備工事への対処方策について
		（3）その他
9月22日	審議事項	（1）総合研究棟新営に伴う埋蔵文化財調査について
		（2）その他

当年度は、仙台城跡二の丸第17地点の調査を実施していたため、調査の進捗状況に合わせて、専門委員会を開催した。その際には、専門委員会開催に先立って、委員による調査現場の視察を行った。また本年5月に、当センターの調査研究員が、青葉山遺跡E地点第3次調査地点（1996年度調査実施）の東側が、駐車場造成のため削平されていることを発見した。直ちに経緯などを調査したところ、部局発注工事のため、施設部との連絡調整がうまくいかず、施設部や当センターに連絡がないまま工事が実施されていたことが判明した。善後策について仙台市教育委員会とも協議し、工事による破壊の範囲・程度を確認する調査を実施すること、その際、駐車場として利用を継続していくと破壊が進みかねない部分が存在する場合には、その区域については記録保存のための調査を実施することとした。ただし、今年度は調査を行う時間的余裕が持てないことから、翌年度以降に実施することとした。この問題については、8月1日開催の専門委員会において審議した。あわせて、同様の事態が今後おこらないように、施設部長と埋蔵文化財調査研究センター長の連名で、「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事の実施について」との文書を学内各部局等へ通知し、注意を喚起した。

3．埋蔵文化財調査の概要

2000年度は、川内地区・青葉山地区・富沢地区において、本調査1件、立会調査4件の、合計5件の調査を実施した。（表1）。

(1) 川内地区の調査

川内地区では、本調査1件と立会調査2件を実施した（図3）。

本調査を実施したのは、文系4学部総合研究棟新営に伴う仙台城跡二の丸第17地点の調査である。これについては、1998年度に実施した試掘調査結果を合わせて、本年報の第Ⅱ章において報告する。

立会調査は1件が川内北地区、1件が川内南地区であった。

川内北地区で立会調査を実施したのは、プール給水管改修に伴う調査である。掘削される範囲が狭いため、立会調査としたものである。調査の結果、工事による掘削は、プール造成時に盛土された範囲内に収まることが明らかとなった。遺物も出土していない。

川内南地区で立会調査を実施したのは、植物園本館南東側の屋外汚水管改修に伴う調査である。掘削される範囲が狭いため、立会調査とした。調査の結果、部分的には、表土のすぐ下で地山が露出したが、既に削平されていると考えられ、遺構・遺物は発見されなかった。それ以外の部分は、工事による掘削は、近代以降の盛土の範囲内に収まった。遺物も出土していない。

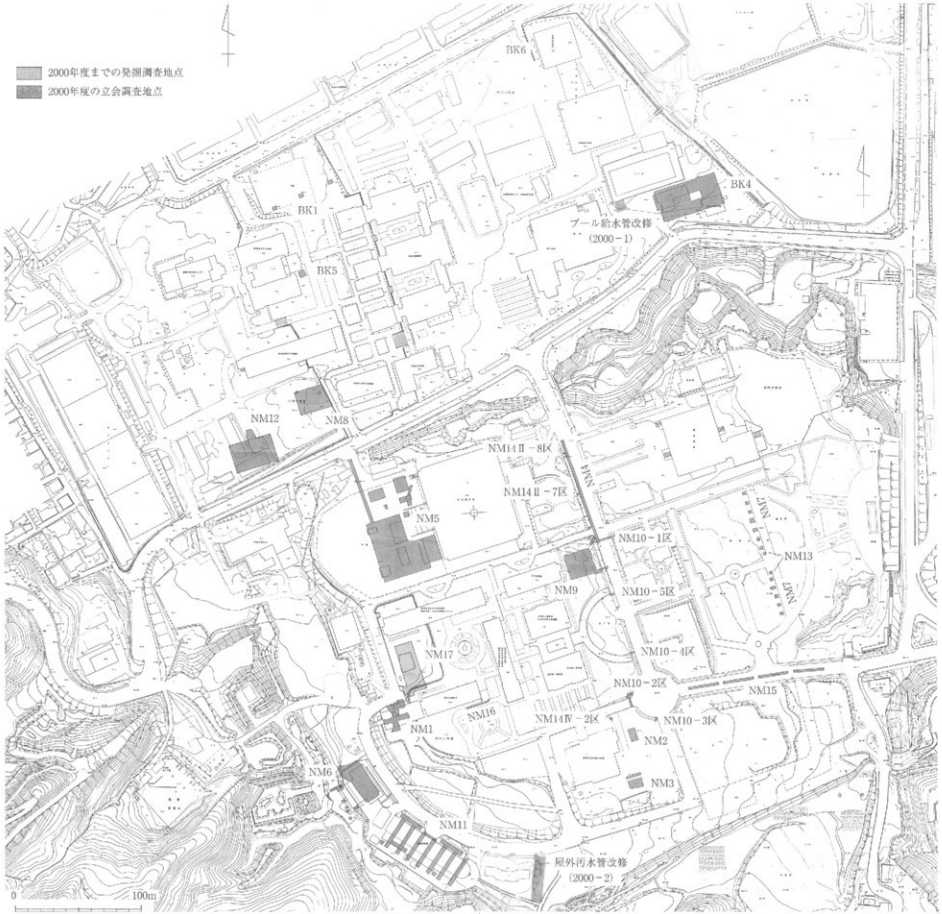


図3　仙台城跡二の丸・武家屋敷地区調査地点

Fig. 3　Location of excavations until 1995 at *Ninomaru* (NM i.e. Secondary Citadel) and *samurai* residence (BK)

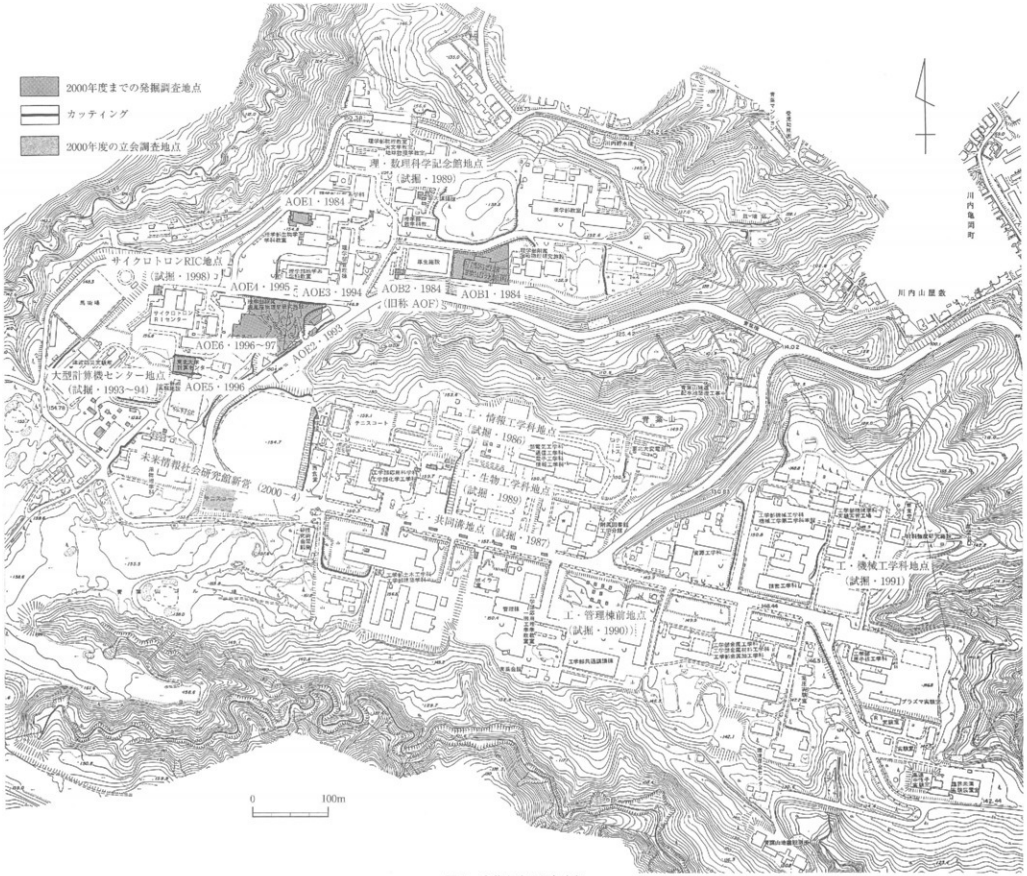


図4　青葉山地区調査地点
Fig. 4　Location of excavations at Aobayama campas

(2) 青葉山地区の調査

青葉山地区では、立会調査１件を実施した（図４）。工学研究科グランド南側の、未来情報社会研究館新営に伴う調査である。周知の遺跡の範囲からは離れるが、火山灰層が残存している可能性が高いため、立会調査を行った。工事範囲の南西隅から北東方向に、黒色土の落ち込みがあり、沢状の地形であったと考えられる。その周囲では、表土下すぐに愛島軽石層が確認されたため、沢によって削られているものと判断した。逆の北東隅付近では、現地表下２ｍ以上の厚さで、新しい盛土が存在し、その下のローム層の堆積も、あまり良好ではなかった。遺構・遺物は発見されなかった。

(3) 富沢地区の調査

富沢地区では、立会調査１件を実施した（図５）。富沢地区には、理学研究科附属原子核理学研究施設や職員宿舎などが置かれている。研究施設の北東側は山林となっており、金流沢沿いの低地に接する崖までが東北大学の用地となっている。この崖のすぐ下まで民家が建ち並んでいるが、近年の豪雨の度に崩壊が進み、危険なため法面改修を行うこととなった。

三神峯丘陵の北側にあたる、金流沢沿いの崖面には、土手内横穴墓群Ａ地点が存在する。1949年に工事中に発見され、鉄刀１点・須恵器２点・人骨４体分が出土している（伊東信雄1950）。今回工事が行われた場所は、遺跡地図に登載された土手内横穴墓群Ａ地点の範囲からははずれるが（仙台市教育委員会1995）、1985年頃には、

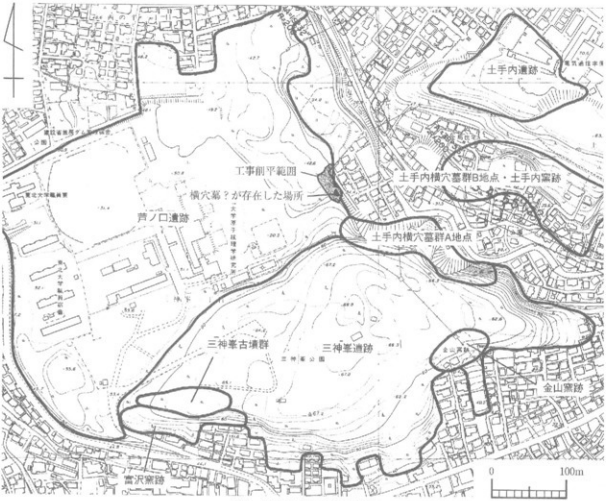


図５　富沢地区と周辺の遺跡
Fig. 5　Archaeological sites of and Tomizawa campus of Tohoku University

横穴墓らしきものが1基残存していた（図6）。ただし遺存状態は悪く、崖の崩壊によって玄門まで崩落しており、玄室の一部と思われる部分が、かろうじて残存していた。内部も崩落が進み、詳細については、判明し難い状況であった。今回の工事が実施される前に、現状確認のための踏査を行ったが、かつて存在していたこの横穴墓らしきものも、崖面の崩壊の進行によって、すでに残存していなかった。他の横穴墓が存在する可能性も、現状の地形からは少ないと判断した。また、崖の上面も、芦ノ口遺跡の範囲内となっているため踏査したが、遺物などは採集されなかったので、立会調査で対処することとした。崖面の掘削工事の進行に合わせて立会調査を行ったが、遺構・遺物は発見されなかった。

図6　横穴墓の残存状況（1985年撮影）
Fig.6　Remaining situation of tunnel tomb (Taken a picture in 1985)

4．遺物整理作業

東北大学埋蔵文化財調査研究センターでは、調査成果の報告は、年度ごとにまとめて『東北大学埋蔵文化財調査年報』において行ってきた。これは、センターの前身である東北大学埋蔵文化財調査委員会から続いているものである。そのため調査年報の号数は、調査委員会の時期の号数を継承している。

調査委員会発足以降、当初は整理作業のための時間や経費が充分確保できない中で、調査報告書の刊行は遅れが重なっていた。このような報告書作成の遅れを解消し、調査実施の翌年度に整理作業、翌々年度に取りまとめて報告書を刊行するという体制を確立するために、1997年度以降は、一年で2冊の調査年報を刊行することを目標としてきた。この方針のもと、1999年度に調査年報13と14を刊行する予定であったが、3月から仙台城跡二の丸第17地点の調査を開始することとなり、調査年報14の刊行まで作業を進めることが難しくなった。そのため、調査年報14の刊行は、2000年度に繰り延べすることとしていた。この措置を受けて、2000年度は、年報14・15・16の3冊を刊行することとした。これによって、調査の翌々年度に報告書刊行という体制に、予定通り2000年度末をもって移行することができた。

2000年度に刊行した『東北大学埋蔵文化財調査年報』14・15・16に掲載した調査報告は、以下のとおりである。

年報14　仙台城二の丸北方武家屋敷跡第6地点
　　青葉山遺跡E地点第5次調査
　　芦ノ口遺跡第4次調査
年報15　仙台城跡二の丸第16地点
　　青葉山遺跡E地点第6次調査
年報16　仙台城跡二の丸第17地点試掘調査概要

整理作業は、これらを中心に実施することとなった。年報14に掲載した3地点の整理作業は、前年度までにかなり作業を進めていた。ところが、2000年11月に、旧石器ねつ造事件が明るみに出た。年報14に掲載する予定となっていた青葉山遺跡E地点第5次調査では、ねつ造を行った人物が調査協力者として関与していたことから、内容を再検討せざるを得なくなった。各地で検証作業が開始されてはいたが、その検討基準などが議論の途上であった中で、年度内に報告書を刊行しなければならないという時間的制約もあり、対応に苦慮した。その時点では、ねつ造事件の全体像がまだ明らかとなっていない状況であったため、有しているデータを最大限提示し検討のた

めの素材を提供することを基本方針として、報告書を作成することとした。しかし、報告書作成時点では、ねつ造の有無を明らかにはできなかった。その後の各地の検証発掘調査や、石器の付着物の検討などが進み、それらの検討結果を参考にしつつ、さらに検討を進めた結果、当該資料について歴史資料としては使用できない状態にあることを確認する結果となっている（東北大学埋蔵文化財調査研究センター2003）。かかる結果にいたったこと、および誤った内容の報告書を提示したことについて、この場で、あらためて謝罪する次第である。

年報15に掲載した2地点の整理作業は、洗浄・注記・接合など、基礎的な作業は前年度までに行っていたため、当年度は残る作業を実施した。年報16に掲載したのは、試掘調査概要であるため、遺物整理は本調査での出土遺物を合わせて整理する必要があったため、基礎的な作業まで行った。

5．保存処理事業

東北大学埋蔵文化財調査研究センターでは、仙台城跡二の丸出土遺物を中心に、木製品・漆塗製品・金属製品など、保存処理を必要とする遺物を多数保管している。この内、木製品と銅製品については、当センターで保存処理を進めてきている。木製品については、1997年度以降、糖アルコール（ラクチトール）を利用した処理を行っている（年報16）。2000年度は、仙台城跡二の丸第9地点（1990年度調査）の出土木製品を中心に、保存処理を進めた。

一方、鉄製品については、特に釘類の出土数量が膨大なため、充分なクリーニングも実施できず、未処理のまま保管する状態が続いていた。鉄製品の保存処理では、脱塩工程が重要であるが、従来から良く使われてきたリチウム法では、1サイクルの処理に数ヶ月以上の期間が必要となる。この方法では、溶媒にアルコール類を使用する。大量の鉄製品を、揮発性の高い溶液に長期間含浸して脱塩処理を行うのは、安全管理上からも問題が多い。そのため、大量の鉄製品の脱塩処理を、効率良く実施する方法について検討を続けてきた。その結果、オートクレーブを改良した脱塩装置（平山製作所製・DSM-242Ⅱ-K）を導入することとし、年度末に購入した。資料を入れる容器部分の大きさは、径240mm、奥行き350mmである。当センターが保管している鉄製品は、釘などの小形のものが大多数を占めるので、この大きさのものでほとんどが対処できると判断した。

当センターでの保存処理作業は、1992年度に含浸槽を設置して以来、専用に使用できる場所がなかったため、やむなくガレージの空きスペースを利用して行ってきた。厳冬期には気温が零下に下がる環境のため、冬期間の作業は困難で、作業効率の点からも問題を残していた。そのためセンターと施設部で対策を検討してきたが、保存処理作業のためのプレハブ（平屋建・79.1㎡）を設置できることとなり、年度末に工事が行われた。この保存処理作業室は、翌2001年度より使用を開始した。作業室の詳細については、翌年度の年報において紹介したい。

6．資料保管状況

東北大学埋蔵文化財調査研究センターでは、ほとんどの遺物は容量30.3リットルのコンテナ（ポリプロピレン製・サンボックス＃32）に収納している。このコンテナに入らない大型のものについては、さらに大きなコンテナや、適宜木箱を作成して収納している。全体の遺物総量を把握するために、容器の大小にかかわらず、箱の数で数量を管理している。ただし、保存処理を行う必要のあるものは、別に保管しているため、これには入っていない。当センターの前身である東北大学埋蔵文化財調査委員会が発足した1983年度からの、遺物総量の推移を箱数で比較したのが、図7である。

2000年度末時点で、当センターで保管している遺物総量は2,560箱となった。前年度からは667箱の増加である。これらは全て、本年度に実施した仙台城跡二の丸第17地点の本調査において出土した遺物である。前述のように、2000年度に年報14・15・16を刊行した。この内、年報16に掲載したのは、1998年度に実施した仙台城跡二の丸第17地点の試掘調査概要である。この試掘調査で出土した遺物は、本年度に実施した本調査での出土遺物と合わせ

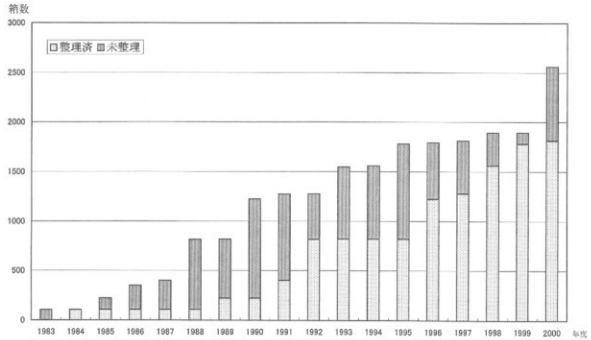


図７　収蔵遺物量の推移
Fig.7　Transition of amount of archaeological remains

て整理作業を行う必要がある。したがって、年報15に掲載した、1997年度調査分まで整理作業が終了し、報告書を刊行したこととなる。箱数では、1,809箱が整理・報告済みで、未整理は751箱となる。全体の箱数の内、整理・報告済みのものの比率は70.7%となる。

７．研究活動

(1) 受託研究・共同研究等

当センターでは、東北大学大学院工学研究科の量子エネルギー工学専攻量子ビーム工学講座からの提案を受け、1999年度から同講座と共同して、ＰＩＸＥ（Particle Induced X-ray emission　粒子線励起Ｘ線分析）による、考古資料の材質分析を行ってきた。

今年度、同講座の石井慶造教授が日本側実行委員会の代表となって「色の考古学的研究とそれに関わる科学的手法に関する日仏コロキウム」（主催：同実行委員会・日仏文化協会）が、10月24～27日にかけて、東北大学で開催されることとなった。共同研究を行ってきた関係で、当センターからも研究発表を行うこととなった。発表者・演題などは次の通りである。

関根達人「仙台城二の丸跡出土漆器の彩色」2000年10月27日　於：東北大学青葉山記念会館

(2) 学会発表等

センターの業務にかかわる、学会での研究発表等としては、上記した「日仏コロキウム」での発表以外に、次の発表を行った。

・平成12年度宮城県遺跡調査成果発表会　2000年12月16日　於：大和町まほろばホール

「仙台城二の丸跡第17地点」　発表者：藤沢敦

また、宮城県考古学会からの依頼を受けて、同会の会誌『宮城考古学』第３号（2001年５月発行）の「2000年度宮城県内主要発掘紹介」に、「仙台城二の丸跡第17地点」として、同地点の調査概要を寄稿した。

(3) 資料調査

センター業務に関わる資料調査等としては、以下の2件で、それぞれ担当する調査研究員が出張した。

2001年1月27～28日　江戸遺跡研究会第14回大会「食器に見る江戸の食生活」　於：江戸東京博物館
関根達人・京野恵子

2001年2月1～2日　秋田県埋蔵文化財センター　京野恵子

『東北大学埋蔵文化財調査年報14』では、芦ノ口遺跡第4次調査で検出された縄文時代の粘土採掘抗を報告した。秋田県埋蔵文化財センターへの出張は、それに関わる資料調査が目的である。

(4) 科学研究費採択状況

2000年度は、当センター調査研究員が、科学研究費等の交付を受けたものはなかった。

8．教育普及活動

(1) 非常勤講師

2000年度は、当センターの調査研究員が、非常勤講師を担当したのはなかった。

(2) 保管資料の貸出

当センター保管の資料の貸出依頼等としては、次のとおりであった。

・貸出先：東洋陶磁学会第28回大会（会場：東北歴史博物館）
貸出資料：仙台城跡二の丸出土陶磁器
貸出期間：2000年10月28～29日

(3) 外部からの派遣依頼等

当センターの業務に関わって、あるいは調査研究員の専門領域に関わる事項で、外部から派遣等の依頼があったのは、次のとおりであった。

担当者：藤沢敦

2000年6月26・27日　北海道埋蔵文化財センター　西島松5遺跡調査指導
於・北海道恵庭市

2000年12月3日　仙台市富沢遺跡保存館（地底の森ミュージアム）
ボランティア講座講師「仙台市一塚古墳の鏡と卑弥呼の鏡」

担当者：関根達人

2000年6月23～25日　青森県環境生活部県史編さん室　青森県史編さんに関わる資料調査
於：青森県八戸市博物館・青森県南部町教育委員会

2000年12月21～23日　青森県環境生活部県史編さん室　青森県史編さんに関わる資料調査
於：東京都港区立郷土資料館

2001年1月23日　福島県棚倉町教育委員会
棚倉町公民館『ふるさと学級』講師　「棚倉城跡から出土した近世陶磁器について」

2001年1月29～30日　青森県環境生活部県史編さん室　青森県史編さんに関わる資料調査
於：青森県立郷土館・青森県埋蔵文化財調査センター

2001年1月31日　青森県埋蔵文化財調査センター　熊無(8)遺跡から出土した近世陶磁器の鑑定

2001年2月19日　青森県環境生活部県史編さん室　青森県史編さんに関わる資料調査

於：青森県七戸町教育委員会

2001年３月５～７日　青森県環境生活部県史編さん室　青森県史編さんに関わる資料調査

於：青森県弘前市教育委員会

(4) 広報活動

仙台城跡二の丸第17地点の調査成果の概要が明らかとなった９月30日に、現地説明会を開催した。仙台市教育委員会による仙台城本丸跡の調査が広く注目を集めていたこともあり、約200名の参加で盛況であった（図８）。なお、一般公開に先立って、報道機関向けの発表を行っている。

図８　二の丸第17地点現地説明会開催状況

Fig.8　Situation of local briefing at NM17 (NM17 i.e. Location 17 of *Ninomaru*)

第Ⅱ章　仙台城跡二の丸第17地点（ＮＭ17）の調査

１．仙台城跡二の丸地区の立地と歴史

東北大学の附属図書館や文系四学部などが置かれている現在の川内南地区は仙台城二の丸にあたる場所である。仙台城は仙台市西部に張り出す青葉山丘陵の東縁辺とその裾に広がる段丘上に位置し、本丸、二の丸、三の丸から構成されている。本丸は広瀬川と竜の口渓谷に開まれた海抜115～140mの青葉山の高位段丘面に立地しており、本丸北西側に二の丸が、北東に三の丸が配置されている。そのなかで、二の丸跡は海抜61～78mの東方の広瀬川に向かって緩やかに傾斜する上町段丘上に位置する。仙台城の東には仙台平野が広がり、平野のほぼ中央を流れる広瀬川の流域には、古代の郡山官衙遺跡、陸奥国分寺跡、国分尼寺跡などがある。周辺には岩切城や新田遺跡のような中世城館跡も存在し、古代から中世、近世にかけて交通の要衝であった。

仙台城は慶長５年（1600年）に伊達政宗によって本丸の築造が開始され、慶長15年（1610年）には大広間が竣工する。本丸には大広間を中心に御書院、長櫓、巽櫓などの建物群が設けられた。築城当時は現在の川内南地区には、政宗の四男宗泰の屋敷が置かれていたと伝えられている。元和６年（1620年）には、徳川家康の六男である松平忠輝の仮易によって、忠輝のもとに嫁いでいた政宗の長女五郎八姫が仙台に戻ってくることとなったため、五郎八姫のために伊達宗康の屋敷の北隣に「西屋敷」が造営されている。

豊臣氏が滅亡した元和元年（1615年）以降大規模な戦争の可能性が無くなるため、仙台城の山城的な立地条件はその本来の意味を失うことになり、寛永15年（1638年）に二代藩主伊達忠宗は幕府に本丸の櫓の平坦地に「屋敷構作事」を願い出て、伊達宗泰の屋敷跡に二の丸の造営を開始する。寛永15年中に焼火之間、虎之間、上台所などが、翌16年には御座間、御寝所、書院、小広間、などが上棟し６月に忠宗は本丸から移っている。この段階では二の丸の北側には西屋敷が隣接しており、五郎八姫が死去する寛文元年（1661年）まで存続する。五郎八姫死去後、西屋敷は「大鱗院様元御屋敷」と呼ばれ、蔵や作業所、下級藩士の居所などが置かれた実務的な空間へと変化する。

本丸は政宗一代の間、仙台城の中枢として使用されたが、寛永17年（1640年）の元日の儀式は二の丸で行われ、以後本丸で行われる儀式は仏事などの限られたものとなり、本丸から藩の政治や儀式の機能が二の丸に移され、二代藩主以降の歴代藩主の居所ともなり二の丸が仙台城の中心となる。元禄年間には四代藩主綱村によってもとの西屋敷の部分を取り込んで拡大する大規模な改造が行われ、旧西屋敷の範囲に中奥が拡大し、二の丸の様相は大きく変化することになった。この改造以降、小規模な修築はあるものの、二の丸の基本的な構造は幕末まで変化することなく維持される。

仙台城は1616年（元和２年）本丸の石垣や櫓が倒壊した地震を始めとして、1646年（正保３年）の地震、1668年（寛文８年）の地震など、築城以来数度の地震や火災にみまわれているが、二の丸に関係する被災では文化元年（1804年）の火災が最も大きなものであった。文化元年の６月24日の午後２時ごろ御座之間に落雷があり、二の丸の建物群は全焼した。このような被災の度に二の丸は再建され、幕末まで仙台城の中枢として機能し続けるが、明治維新に伴う明治新政府の樹立と幕藩体制の崩壊によって仙台城は大きな転機を迎えることとなる。

版籍奉還が行われた明治２年（1869年）には勤政庁が置かれ、明治４年（1871年）の廃藩置県後には仙台城の管轄が明治政府・兵部省へと移り東北鎮台が置かれた。本丸の建造物は明治の早い段階には取り壊されてしまう。また二の丸の建造物は明治15年（1882年）の火災によってそのほとんどが焼失してしまう。その後、二の丸跡には陸軍第二師団が置かれ、敗戦までその状況が続くこととなる。唯一残っていた大手門も1945年の仙台空襲の戦火によって焼失し、仙台城創建時の建造物はすべて失われてしまった。戦後は、アメリカ軍の駐留地となり、昭和32年（1957年）にアメリカ軍から返還された後、東北大学が移転し現在に至っている。

2．調査経緯

(1) 1999年度までの調査

仙台城跡の二の丸地区の発掘調査は、仙台市教育委員会によって小規模な調査が実施されたことがあるが、組織的・継続的に行われるのは、東北大学に埋蔵文化財調査委員会が設置された1983年度以降のことである。以来、委員会およびそれを改組して引き継いだ当センターによる二の丸地区の調査は、1999年度までに16地点を数える。いずれも、東北大学の施設整備に伴う、記録保存のための調査である。その際、二の丸遺構群の破壊を可能な限り抑えるため、二の丸中枢部における施設整備を極力避ける方針をとってきた。そのため、二の丸の中でも周辺部の調査が多くなる結果となっている。

仙台城跡二の丸地区の調査では、大規模な調査としては1990年度に実施した第９地点、まとまった遺物が出土した調査は1991年度に実施した第10地点で、一旦の区切りとなった。そのため、第10地点の調査成果をとりまとめた年報９において、それまでの二の丸地区での調査成果をまとめて検討を加えた。これによって、現況での二の丸建物の位置関係を、ほぼ推定することができるようになっている。

これ以降に実施した第11～16地点の調査は、第12地点を除くと、いずれもごく小規模な調査である（年報10・11・12・13・15）。第12地点の調査は、二の丸北側を画する堀の北岸付近の調査である（年報11）。幕末の絵図に見られる、堀を横切る堰などが検出されている。出土遺物は、近代以降のものがほとんどを占めており、江戸時代のものは極めて少なかった。

今回の第17地点の調査は、仙台城跡二の丸地区での大規模調査としては、1993年度に実施した第12地点の調査以来、二の丸の建物等の施設が存在する区域の調査としては、1990年度の第９地点の調査以来のものとなる。

(2) 調査地点の位置

今回の調査は、文系総合研究棟新営に伴う調査である。調査地点は、文・教育学部棟と経済学部棟にはさまれた場所で、空地となっていた区域である（図９、図版１）。これまでの調査結果を絵図と対比させた、現況での二の丸建物群の位置推定（年報９）では、妻妾の生活域である「中奥」の西端を区画する塀が存在した付近にあたると考えられる。

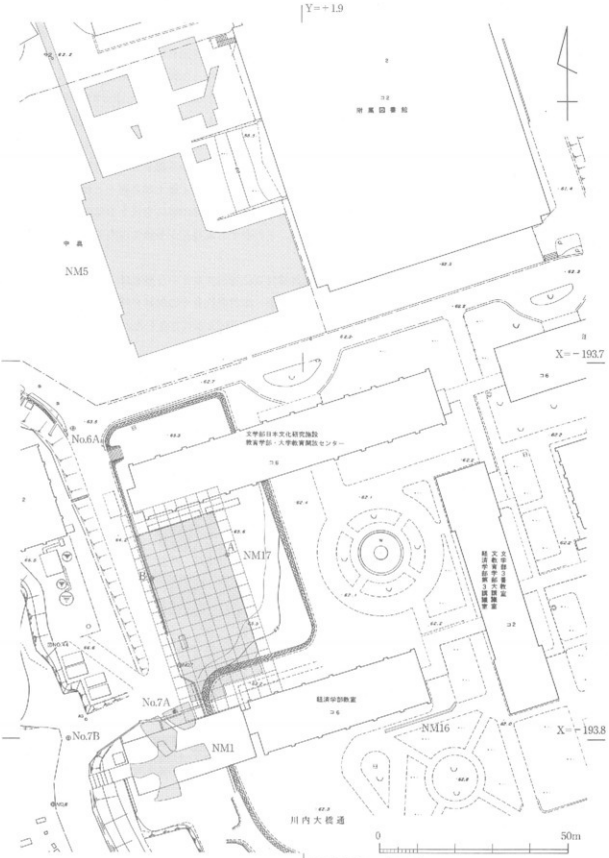
今回の調査区の南西に隣接する場所は、1983年度に調査を実施した第１地点の調査区にあたる。第１地点では、大規模な切り土による段差が検出されており、二の丸建物群が展開する平坦面が、ここで終わることが明らかとなっている（年報１）。また第１地点の更に南西側の第６地点と第11地点では、二の丸最西端の丘陵裾に排水のため設けられた池状遺構や溝が検出されている。その更に西奥には、二の丸最西端を区切る塀の基礎と考えられている石組遺構が検出されている（年報３・13）。

(3) 調査の方法と経過

①1998年度試掘調査

1998年度になって、文系４学部総合研究棟建設の計画が、近い将来に実現する可能性の高い事業として問題となってきた。建設予定箇所は、既存建物などでの破壊は及んでいないと推定される場所であり、ここでの建設の可否、建設する場合の事前調査の方法・期間・経費などが問題となった。それまでも二の丸地区での施設整備にあたっては、二の丸の主要建物群を破壊するような場所は、基本的に避けるよう調整に努めてきた。今回の建設予定地は、中奥西端を区画する塀が存在した付近にあたると考えられる場所で、中奥を構成する建物群を大規模に破壊することは避けられると想定された。この場所以外に、遺跡への影響がより少なくできる場所は、川内南地区では確保できないこともあって、当初の予定地で試掘調査を行い、遺跡の状況を把握することとした。

試掘調査は、1998年６月１日から８月７日までの、約２ヶ月間実施した。調査区は、建物予定範囲のほぼ中央



図十座標値は日本測地系

図9　二の丸第17地点調査区の位置
Fig.9　Location of NM17

に設定した。ここには、東西方向に大学が設置した共同溝が延びており、それによる撹乱を利用して、下層の状態を把握することとした。調査面積は、建設予定面積の3割弱に相当する288㎡である。これまでの川内地区での調査経験から、少し場所がずれると様相が大きく異なる場合が多いことが知られている。そのため、試掘調査は、可能な限り広い面積で実施する方針としているが、現地での制約から、3割程度の面積に留まっている。

調査にあたっては、明治時代の第二師団以降の盛土である1層を重機で除去した。2層は明治15年（1882年）の火災に伴う整地層であると考えられるため手掘りで除去し、3層上面から遺構の精査を実施した。3層上面の遺構を掘り上げて記録を作成した後、一部の遺構を残して3層を除去し、4層上面の精査に移った。4層上面の遺構は、複数時期の切り合い関係が認められたため、最も新しい段階の遺構のみ掘り上げ、それ以外は遺構確認に留めた。共同溝による撹乱の断面で確認されたものを含めて、3層上面・4層上部上面・4層下部上面・6層（地山）上面の4面で遺構が確認された（図版1）。3層上面では、中奥西端の塀に相当する可能性のある柱列などが検出された。また、出土遺物の中では、瓦が最も多く、その中でも板塀瓦が多数を占めるとの見通しが得られた（年報16）。

以上のような試掘調査結果から、今回の調査区が中奥西端付近に相当するという想定は、ほぼ間違いないものと判断した。この調査結果を踏まえ、当センターの運営委員会・専門委員会での検討を経て、当初予定地での建設はやむを得ないと判断し、本調査に備えて具体的な調査計画の策定に入ることとした。

②2000年度本調査

1999年度の年度途中の補正予算で、文系4学部総合研究棟の新営が認められたことにより、工期との関係で早急に調査に着手する必要が出てきた。そのため11月より、支障物の調査や詳細な計画立案などの作業を開始した。並行して進められた施設部との協議の結果、2000年度事業として調査を実施するものの、一部は前年度に前倒しで行うこととし、3月1日から作業員を投入した作業を始めることとした。当初の年間計画を大きく変更することとなるため、1999年12月3日に開催したセンター運営委員会と同専門委員会での審議・了承を得た上で、準備作業に入ることとなった。

2月24日より重機による表土の除去を開始したが、様々な要因から、重機による表土除去は、4回にわたることとなった（図10）。調査着手後に建物の設計が確定すると、建物建設範囲が当初の予定より東側に約1m広がることとなり、調査範囲を広げる必要に迫られた。この東側に広がる部分は、4月下旬に重機で表土を除去した。大学で使用している共同溝については、冬期間の暖房終了後に、迂回路を設営するまで撤去できないため、当初は共同溝を残して掘削を行った。迂回路工事が完了した後の5月に、共同溝を撤去するとともにその部分の掘削を行った。

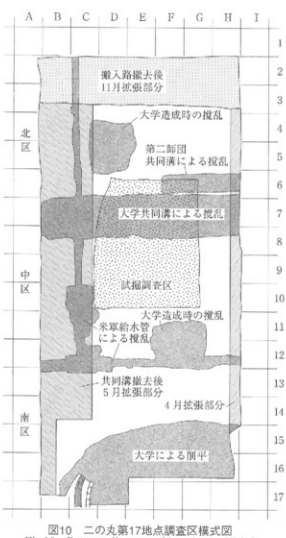


図10　二の丸第17地点調査区模式図
Fig.10　Pattern diagram of location at NM17

調査区周辺には、排土の仮置き場や調査事務所のプレハブを設置できるような空き地は、調査区東側にしか確保できなかった。仮置き場の面積も限られており、そこが満杯になると、更に離れた置き場へダンプで移動しなければならず、作業用通路を確保する必要があった。そこで、北側約５ｍについては大型ダンプが進入できるよう、当面は作業用通路として残して掘削を行った。北側の通路部分については、調査区の東側を使用しなくても済む目処がたった後の11月上旬に、重機を用いて拡張を行った。

重機による表土除去と一部併行して、３月１日から作業員を投入し、攪乱内の埋土の除去・清掃から作業を開始した。川内地区の調査では、大規模な攪乱が多く存在するのが通常である。これらの攪乱の中には、かなり深いものも多いが、深さの大小にかかわらず、最初の段階で全て掘り上げることを基本方針としている。これは、井戸などの深い遺構が、攪乱の底面で検出される可能性もあることと、攪乱内の埋土に由来する新しい遺物の混入を防ぐことが目的である。また、整地層をはさむ複雑な遺構の様相を把握するため、調査の最初の段階で攪乱を完全に掘り上げ、断面を充分に観察できるようにするためでもある。

今回の調査区では、７～８列を東西に横切る形で、大学の共同溝による大規模な攪乱がある。12列を東西に横切り、Ｃ列で北に延びているのが、米軍の給水本管による攪乱である。調査区南端は、大学造成時の削平で、江戸時代の地層は残存していなかった。これらの攪乱によって、調査区は大きく３区域に分かれる。しかも、それぞれの区域で基本層序や遺構の状況に違いが見られるため、調査の進行にあたっては、７列以北を北区、８列から12列を中区、13列以南を南区と分けて作業を進めた。

大学の共同溝のすぐ北側のＦ～Ｈ－６区には、第二師団時代の共同溝がある。これは、側壁に秋保石（凝灰岩）を積み、蓋には稲井石（粘板岩）が用いられていた。

Ｃ～Ｅ－４～６区とＥ～Ｇ－11～12区のほぼ方形の攪乱は、大学造成時に重機で穴を掘り、廃材を捨てたものであった。これらの大規模な攪乱以外にも、大小の攪乱が存在する。攪乱内の埋土の除去にあたっては、重機も利用したが、周囲を破壊しかねない場合には、手掘りによって掘り上げているものも多い。攪乱の中には、掘り方の内側いっぱいまでコンクリートが充填されている場合もあり、重機で撤去すると、周囲の地層を破壊してしまう。そのため、コンクリートの破砕のため、電動ハンマーを多用した。米軍時代の給水本管については、鋳鉄製で手作業での撤去が困難であったため、専門業者に委託して撤去した（図11）。また、石組溝などの石材や、大型の木樋の取り上げなどでは、人力による作業が困難な場合もあり、必要に応じて、クレーン車を手配して作業を行った。

攪乱の掘り上げ清掃が終了後、順次精査に移った。２層は明治15年（1882年）の二の丸建物群が焼失した火災に伴う整地層と考えられることから、２層以下の層序は、４層下部の一部を除き、手掘りで掘削している。３層上面の遺構の精査は、試掘調査範囲外の南区で、大規模な礎石建物跡が検出されたことなどから、予想以上の時間を要し、終了したのは９月５日であった。

４層上部上面の遺構は、中区が極めて複雑で遺構の数も多かった反面、南区では遺構は少なく、場所による差が大きかった。そのため、地区によって調査に要する時間に大きな差ができることとなった。調査期間との関係もあり、調査範囲の全域で進行状況を合わせて調査を進めることは困難となった。そこで南区の調査を先行させて進めることで、あらかじめ下層の状況を把握することとした。

その結果、南区では10月４日には、４層上部上面の遺構について、おおかたの調査は終了した。さらに４層下部上面についても、11月15日に終了した。引き続き、６層（地山）上面の調査も12月５日には終了した。

中区は、複雑な遺構に難渋し、数段階に分けて中区全体の写真を撮影しながら調査を進めた。11月29日に４層上部上面の調査が終了した。４層下部上面については、遺構密度は少なかったため、12月５日に終了した。先行していた南区の調査によって、４層下部には遺物はほぼ含まれていないことが明らかとなっていたので、中区の４層下部については重機で除去した。６層（地山）上面の調査は12月13日に終了している。

1．共同溝撤去作業（5月9日）

2．米軍給水管の撤去作業（7月21日）

3．写真測量による遺構実測（12月7日）

4．雪に埋もれる調査現場（12月12日）

図11　二の丸第17地点作業状況
Fig.11　Situation of excavation at NM17

北区については、4層上部に相当する地層が存在しなかったため、4層上部上面と4層下部上面の遺構を、同一面で調査することとなった。さらに、北区のほぼ過半以上には4層が分布せず、6層が露出していた。4層が分布する範囲でも、4層上面の遺構の掘り込みのため、4層が残存している範囲はかなり限定されたものであった。また、先行して調査を進めていた中区・南区の調査において、6層（地山）上面の遺構はほとんど存在しないことが明らかとなっていた。以上の点から北区では、6層上面の様相は部分的に確認することとし、全面的に4層を除去することは行わなかった。北区の調査は12月20日に終了し、これにより全体の調査を終了した。

③記録方法

調査にあたっては、建物建設予定区域が、既設建物と方向を合わせて計画されていたことから、既設建物に合わせて、3mグリッドを作成した。このグリッドは、1998年度の試掘調査の際に作成したものを、2000年度の本調査においても踏襲して利用した。試掘調査の際に設定した基準点の国土座標値は、以下のとおりで、基準点の位置は図9に示した。平面直角座標系は、X系である。グリッドは、北で17°38′44″西偏している。

NM17－A	日本測地系	X＝－193,747.748	世界測地系	X＝－193,439.013
		Y＝＋　1,878.991		Y＝＋　1,579.094
NM17－B	日本測地系	X＝－193,754.113	世界測地系	X＝－193,445.378
		Y＝＋　1,858.980		Y＝＋　1,559.084

なお、2002年4月1日に施行された改正測量法によって、測量基準が旧来の日本測地系から世界測地系へ変更されている。平面直角座標系の各原点の経緯度数値は変更されていないものの、経緯度の測定基準が変わったた

め、国土座標原点の位置も400～500m程度移動している。測量法改正後は世界測地系を使用するのが本来であるが、本年報にも掲載した、現在使用している縮尺500分の1地形図などは、旧来の日本測地系によるものである。そこで当面の間、基準点の国土座標値は、日本測地系と世界測地系の座標値を、両方とも掲載することとした。掲載図版中の座標値についても、日本測地系か、世界測地系のものか、それぞれに明示することとしている。なお、日本測地系から世界測地系への国土座標値の換算は、国土地理院が無償配布している座標変換プログラム"ＴＫＹ２ＪＧＤ"と座標変換パラメーターを使用した。

川内地区での調査においては、調査成果を国土座標上に位置づけることを基本とし、1990年度と1991年度の２ヶ年にわたって、測量用の基準点を設置している。今回の文系４学部総合研究棟の新築工事において、基準点№７が滅失することとなったため、相互に見通せる位置に、№６Ａ・７Ａ・７Ｂの３点を、専門業者に外注して設置し直した。新たな基準点を含む測量成果について、日本測地系と世界測地系の両方の値を、表２に示しておいた。新たに設置した基準点の位置は、図９の中に示している。

遺構の実測は、平面図・断面図ともに縮尺1/20を基本とした。ほとんどの実測は、手作業で作成している。川内地区の調査では、整地層と遺構埋土の区分が極めて難しく、切り合い関係がある場合には、新しい遺構の掘り方の壁面で、古い遺構がはじめて確認できることも多い。そのため、遺構埋土を一段掘り下げて、切り合い関係を明示するような調査方法は、ほとんど不可能である。新しい遺構を完全に掘り上げ、記録を作成した後、古い遺構を掘るという手順をとらねばならない。時間的な関係上、新しい遺構を掘り上げたら、直ちに古い段階の遺構を掘らねばならない場合が多く、一つの遺構面全体の平面図を一気に作成することが難しい。結果的に、遺構の掘り上げに併行して、常に平面図を作成しながら作業を進めることとなり、写真測量など遺構実測を委託することが極めて難しい。しかし今回の調査では、試掘調査の結果から、石を用いた遺構が多数検出されることが予想されたため、その部分に限り、写真測量を導入することとした。礎石の根石が多数検出された１号建物跡、石組溝である46号溝・32号溝・69号溝、70号溝、２号石敷遺構の平面図について、（株）パスコに委託して写真測量を行った。

表２　川内地区基準点測量成果表
Tab. 2　List of bench mark measurement at Kawauchi Campus

基準点	日本測地系		世界測地系		標高
	Ｘ座標	Ｙ座標	Ｘ座標	Ｙ座標	
No. 1	－193820.846	1978.763	－193512.112	1678.863	61.871
No. 2	－193766.070	2145.738	－193457.338	1845.835	58.907
No. 3	－193610.064	2160.848	－193301.332	1860.946	56.588
No. 4	－193650.729	2034.689	－193341.996	1734.790	59.249
No. 5	－193666.933	1987.399	－193358.200	1687.500	61.495
No. 6 A	－193717.635	1838.986	－193408.900	1539.091	63.447
No. 7 A	－193792.144	1865.910	－193483.409	1566.013	66.085
No. 7 B	－193799.257	1837.713	－193490.521	1537.817	69.370
No. 8	－193817.860	1833.963	－193509.124	1534.067	69.759
No. 9	－193857.471	1867.810	－193548.735	1567.913	70.123
No.10	－193879.068	1994.749	－193570.334	1694.848	64.450
No.11	－193595.326	1836.592	－193286.592	1538.698	60.702
No.12	－193639.654	1707.075	－193330.919	1407.183	66.892
No.13	－193504.543	1638.941	－193195.808	1339.053	66.561
No.14	－193403.276	1677.377	－193094.543	1377.488	64.932
No.15	－193418.655	1738.247	－193109.922	1438.357	64.514
No.16	－193358.079	1802.582	－193049.346	1502.691	60.656
No.17	－193342.445	1882.509	－193033.714	1582.616	57.778
No.18	－193309.821	1966.962	－193001.089	1667.067	57.152
No.19	－193400.132	2039.003	－193091.420	1739.105	56.784
No.20	－193435.320	2096.652	－193126.588	1796.753	54.318

近世の遺跡は、その場所が近代以降に様々に利用されている場合が多く、必然的に近代以降の攪乱が多数存在することとなる。また頻繁な建て替えなどにより、多数の変遷段階が認識されることがほとんどである。このような場合、古い段階では、新しい段階の遺構による破壊を受け、保存状況が良くない場合が多い。攪乱や後世の遺構による破壊を遺構実測図で表現する場合、通常は線の太さを最も細くして表現する方法がとられている。しかし、遺構の数が多く複雑に切り合う場合、線の太さの違いだけでは、必ずしも判り易い表現方法とは言えない場合もある。そこで今回の報告にあたっては、攪乱や後世の遺構による破壊部分を、破線で表現する方法を試みた。これは、新潟県新発田市の新発田城跡の調査報告書などで試みられている方法である（鶴巻ほか1997）。

調査状況の写真撮影にあたっては、調査区全域の変遷段階を合わせて、それぞれの段階での全景写真を撮影することが望ましいことは言うまでもない。今回の調査では、調査区全体の変遷段階が合うように、当初は作業を進めた。しかし前述のように、北区・中区・南区のそれぞれで、遺構密度に甚だしい違いがあったため、各区の作業進行状況を合わせていくことは次第に困難となった。そのため、4層上面検出遺構の精査途中から、段階を合わせて全景写真を撮影することは断念せざるを得なかった。以降は、北区・中区・南区のそれぞれで、全景写真を撮影した。記録写真は、35mmのカラーリバーサルとモノクロを基本として使用し、全景写真などでは、6×7のカラーリバーサルとモノクロ写真を撮影している。

④遺構の名称について

近世遺跡の調査においては、多種多様な遺構が検出される。その際、遺構の詳しい用途まで判明する場合もある一方で、遺構の形状からしか名称を付けられないものも存在する。そのため、異なる基準での名称が混在する場合がある。本来は、同一基準での命名が望ましいが、作業を進める上での判り易さという点も無視できない。今回は、建物・柱列・杭列・塀・溝・木樋・土坑・ピット・井戸・便槽遺構・石敷遺構・瓦囲遺構・瓦敷遺構という名称を使用した。ピット以外の、各時期ごとの遺構の一覧を、表3に掲げておく。

柱穴などのピットについては、建物や柱列を構成することが現場で判明している場合でも、ピット番号として、一連の通し番号を現地で付けた。川内地区での調査の場合、遺構が複雑に重なり合うと、現場での検討では、組み合う全ての柱穴を確認できない場合が多い。今回の調査においても、調査後の図面整理の過程で、建物跡や柱列を確認している場合が多数を占める。現地で組み合うことが判明したものについて柱番号を付すと、その後に同じ建物跡などを構成することが判明したピットの番号と、柱番号が前後する場合が生じる。整理後に柱番号を付け直すと、現地での呼称との間で混乱をきたしかねない。そのため、現地で付ける遺構名称は、通し番号のピット番号に統一し、建物跡や柱列を構成するピットについては、図面整理後に柱番号を新たに付ける形で、名称を変更している。表4～6に、現地で付した遺構名称と、本報告にあたっての遺構名称の対照表を示している。遺物に付された注記は、全て現地での遺構名称となっている。ただし3号建物だけは、現地で柱番号を付しており、その柱番号を踏襲している。

土坑については、ピットとの区分を、どこにするかという点が問題となる。基本的には規模の大きなものを土坑としているが、図面整理の結果、柱列を構成する柱穴となったものもある。また、ピットとして名称を付けたが、ゴミ穴などと考えられるに至ったため、土坑とした方が良いと考えられるものについても、名称を変更した。溝については、素掘りのものも、石組溝も、合わせて通し番号を付けた。また、木樋が埋められたものも、現地では溝として名称を付けたが、これについては木樋に名称を変更した。

⑤遺物の取り上げについて

近世以降の遺跡の調査においては、それ以前の時代の遺跡と比較すると、遺物の出土量が極めて多くなるのが通常である。その際、破片では特徴が判別し難い瓦などについて、全てを取り上げるか否かが問題となる。

当センターの調査においては、江戸時代に遡る可能性がある遺物については、全て採集することを基本方針としている。今回の調査では、明治15年（1882年）の火災に伴う整地層と考えられる2層より下位の層序から出土した遺物については、基本的に全ての遺物を採集している。それより上位の整地層や現在の表土は、まとめて1層として、明らかに近現代のもの以外は、遺物を回収した。ただし、1層と攪乱から出土した遺物の内、瓦については、一定の基準を設けて現地で選別を行った。瓦は、江戸時代のものと、明治以降のものを識別することが、破片の場合ほとんど不可能なものも多い。そこで、長さと幅の判明するもの、軒瓦、刻印や線刻のあるもの、その他特殊なものについては採集するという基準を設けた。刻印や線刻の有無などについては、土壌が付着したままでは判別が難しいので、高圧洗浄機で土壌をおおよそ落とした上で、上記の基準に当てはまる資料のみを収集している。

⑥整理作業

本格的な整理作業は、翌2001年度から開始した。ただし、水洗と注記については、調査中に一部実施している。注記については、瓦や上師質土器などは、自動注記機械を利用して行った。

近世遺跡の調査では、様々な材質の遺物が出土する。木浸木製品のように、材質に応じて特有の取り扱いを必要とするものも多いことから、遺物の種類ごとに整理作業を進めている。遺物の各種類ごとの細かな整理作業の方法、それぞれの分類基準ついては、第Ⅱ章5．の各項目の中で記述する。

図面ないし写真を、本報告書に掲載した遺物については、種類ごとに以下の頭文字を決め、その下に通し番号の登録番号を付けている。実測図・写真図版・観察表の番号は、いずれもこの登録番号に統一している。遺物を管理する台帳も、全てこの登録番号をもとに作成しており、保管にあたっても、この登録番号を基礎に管理するようにしている。

磁器：ＣＪ　陶器：ＣＴ　軟質施釉陶器：ＣＮ
土師質土器：ＣＨ　瓦質土器：ＣＧ　土製品：ＣＯ
瓦：Ｔ
古銭：ＭＣ　古銭以外の金属製品：ＭＯ
石製品：Ｓ
木製品：Ｗ（漆塗製品を含む）
ガラス製品：Ｇ

整理作業は、調査の翌々年度に報告書を刊行することを基本方針として、2001年度と2002年度の２ヶ年で進める計画で開始した。しかし、報告書に掲載することが必要な資料が、当初見込みより多数になったことと、2002年度予算の関係から当年度での報告書刊行の目処が立たなかったこともあり、一部の整理作業は2003年度に継続して行うこととした。予算の関係上、2003年度においても、報告書刊行費の目処が立たなかったため、結果的には2004年度に刊行することとなった。

表3　二の丸第17地点時期別遺構一覧表
Tab. 3　List of all structural remains divided in period

確定名称	現地名称	備考
I期		
1号井戸	1号井戸	
II期		
42号溝	42号溝	
46号溝	46号溝(5分溝)	5号溝は46号溝と一連・同一
47号溝	47号溝	
48号溝	48号溝	
49号溝	49号溝	
50号溝	50号溝	
6号棚	6号棚	
7号棚	7号棚	
25号柱列	なし	個別ピット番号
11号建物	なし	個別ピット番号
12号建物	なし	個別ピット番号
2号石敷	D-E-10-11区石敷	
便槽遺構	便槽遺構	
24号土坑	24号土坑	
II a期		
34号溝	34号溝	南区平行する溝群
35号溝	35号溝	南区平行する溝群
36号溝	36号溝	南区平行する溝群
37号溝	37号溝	南区平行する溝群
38号溝	38号溝	南区平行する溝群
39号溝	39号溝	南区平行する溝群
40号溝	40号溝	南区平行する溝群
41号溝	41号溝	南区平行する溝群
45号溝	45号溝	
51号溝	51号溝	瓦伏暗渠
54号溝	54号溝	瓦伏暗渠
55号溝	55号溝	中区平行する溝群
56号溝	56号溝	中区平行する溝群
57号溝	57号溝	中区平行する溝群
58号溝	58号溝	中区平行する溝群
59号溝	59号溝	中区平行する溝群
60号溝	60号溝	中区平行する溝群
61号溝	61号溝	中区平行する溝群
62号溝	62号溝	中区平行する溝群
63号溝	63号溝	中区平行する溝群
64号溝	64号溝	中区平行する溝群
66号溝	66号溝	瓦伏暗渠
67号溝	67号溝	中区平行する溝群
II b1期		
52号溝	52号溝	
65号溝	65号溝	
69号溝	69号溝	
70号溝	70号溝	
3号石敷	H-4-5区石敷	
21号柱列	なし	個別ピット番号
22号柱列	なし	個別ピット番号
23号柱列	なし	個別ピット番号
24号柱列	なし	個別ピット番号
3号井戸	3号井戸	
2号土坑	2号土坑	
33号土坑	P I t 286	
II b2期		
9号溝	9号溝(4号溝)	4号溝は9号溝と一連・同一
32号溝	32号溝	
3号木樋	28号溝	
4号木樋	53号溝	
20号柱列	なし	個別ピット番号
9号建物	なし	個別ピット番号
10号建物	なし	個別ピット番号
瓦敷遺構	瓦敷遺構	
2号井戸	2号井戸	
7号土坑	7号土坑	
26号土坑	26号土坑	II b 1の可能性有り
27号土坑	27号土坑	
II b3期		
16号柱列	なし	個別ピット番号
17号柱列	なし	個別ピット番号
18号柱列	なし	個別ピット番号
19号柱列	なし	個別ピット番号
43号溝	43号溝(26号溝)	26号溝は43号溝と一連・同一
44号溝	44号溝	
4号建物	4号建物	
5号建物	5号建物	
15号土坑	15号土坑	
19号土坑	19号土坑	
22号土坑	22号土坑	
23号土坑	23号土坑	
29号土坑	29号土坑	
30号土坑	30号土坑	

確定名称	現地名称	備考
II b4期		
2号溝	2号溝	
3号溝	3号溝	
6号溝	6号溝	
27号溝	27号溝	
4号土坑	4号土坑	
14号土坑	14号土坑	
20号土坑	20号土坑	
II b期総分不明		
16号土坑	16号土坑	
21号土坑	21号土坑	
IV a期		
1号建物	1号建物	
2号建物	2号建物	
3号建物	3号建物	
8号建物	なし	個別ピット番号
14号溝	14号溝	
17号溝	17号溝	
19号溝	19号溝	2号建物附属溝
20号溝	20号溝	2号建物附属溝
21号溝	21号溝	2号建物附属溝
22号溝	22号溝	2号建物附属溝
23号溝	23号溝	2号建物附属溝
24号溝	24号溝	2号建物附属溝
29号溝	29号溝	
30号溝	30号溝	
31号溝	31号溝	
瓦敷遺構	瓦敷遺構	
IV b期		
1号溝	1号溝	
2号溝	2号溝	
3号溝	3号溝	
4号溝	4号溝	
5号溝	5号溝	
6号柱列	なし	個別ピット番号
7号柱列	なし	個別ピット番号
8号柱列	なし	個別ピット番号
9号柱列	なし	個別ピット番号
10号柱列	なし	個別ピット番号
11号柱列	なし	個別ピット番号
12号柱列	なし	個別ピット番号
13号柱列	なし	個別ピット番号
14号柱列	なし	個別ピット番号
15号柱列	なし	個別ピット番号
7号建物	なし	個別ピット番号
1号土坑	1号土坑	
6号土坑	6号土坑	
8号土坑	8号土坑	
11号土坑	11号土坑	
18号土坑	18号土坑	
32号土坑	P I t 348	
IV b期		
1号溝	1号溝	
12号溝	12号溝	
13号溝	13号溝	
15号溝	15号溝	
16号溝	16号溝	
1号木樋	18号溝	
2号木樋	25号溝	
1号暗渠	1号暗渠	
6号建物	なし	個別ピット番号
1号柱列	なし	個別ピット番号
2号柱列	なし	個別ピット番号
3号柱列	なし	個別ピット番号
4号柱列	なし	個別ピット番号
5号柱列	なし	個別ピット番号
1号杭列	なし	個別杭番号
2号杭列	なし	個別ピット番号
3号杭列	なし	個別ピット番号
1号石敷	なし	
5号土坑	5号土坑	
9号土坑	9号土坑	
10号土坑	10号土坑	
12号土坑	12号土坑	
13号土坑	13号土坑	
28号土坑	28号土坑	
31号土坑	P I t 343	
瓦溜	瓦溜	

表4　二の丸第17地点遺構名称対照表（1）
Tab. 4　List of the structural remains name which are collated (1)

Pit番号	確認名称	備考	時期	Pit番号	確認名称	備考	時期	Pit番号	確認名称	備考	時期
1	ピット1		Ⅳb	91	ピット91		Ⅳb	181	14号柱列　柱3		Ⅳb
2	ピット2		Ⅳb	92	10号柱列　柱2		Ⅳb	182	ピット182		Ⅳb
3	欠番	1号溝の一部	—	93	10号柱列　柱1		Ⅳb	183	欠番	不明	—
4	3号建物　柱15		Ⅳa	94	9号柱列　柱3		Ⅳb	184	15号建物　柱1		Ⅳb
5	欠番	1号溝の一部	—	95	9号柱列　柱1		Ⅳb	185	14号柱列　柱4		Ⅳb
6	ピット6		Ⅲb3	96	ピット96		Ⅳb	186	ピット186		Ⅳb
7	欠番	1号溝の一部	—	97	欠番	不明	—	187	ピット187		Ⅳb
8	ピット8		Ⅳb	98	ピット98		Ⅳb	188	7号建物　柱11		Ⅳb
9	ピット9		Ⅲb1～3	99	8号柱列　柱2		Ⅳb	189	7号建物　柱9		Ⅳb
10	ピット10		Ⅲb1～2	100	8号柱列　柱1		Ⅳb	190	ピット190		Ⅳb
11	欠番	6号塀跡	—	101	8号建物		Ⅳa	191	7号建物　柱10		Ⅳb
12	欠番	7号塀跡	—	102	ピット102		Ⅳc	192	欠番	不明	—
13	ピット13		Ⅳc	103	5号柱列　柱3		Ⅳc	193	7号建物　柱12		Ⅳb
14	欠番	不明	—	104	ピット104		Ⅳb	194	ピット194		Ⅳb
15	2号建物　柱51		Ⅳa	105	13号柱列　柱3		Ⅳb	195	欠番	不明	—
16	9号柱列　柱4		Ⅳb	106	13号柱列　柱4		Ⅳb	196	9号建物　柱2		Ⅳa
17	ピット17		Ⅳb	107	6号建物　柱5		Ⅳc	197	ピット197		Ⅳb
18	10号柱列　柱3		Ⅳb	108	ピット108		Ⅳb	198	ピット198		Ⅳb
19	10号柱列　柱4		Ⅳb	109	ピット109		Ⅳc	199	ピット199		Ⅲb1～3
20	ピット20		Ⅳc	110	ピット110		Ⅳb	200	9号柱列　柱3		Ⅳb
21	2号建物　柱48		Ⅳa	111	ピット111		Ⅳc	201	ピット201		Ⅳb
22	2号建物　柱60		Ⅳa	112	ピット112		Ⅳb	202	ピット202		Ⅳa
23	ピット23		Ⅳc	113	2号疏列　柱1		Ⅳc	203	1号建物　柱12		Ⅳa
24	ピット24		Ⅳc	114	2号疏列　柱2		Ⅳc	204	1号建物　柱13		Ⅳa
25	2号建物　柱59		Ⅳa	115	2号疏列　柱3		Ⅳc	205	1号建物　柱11		Ⅳa
26	8号柱列　柱4		Ⅳb	116	2号疏列　柱4		Ⅳc	206	1号建物　柱1		Ⅳa
27	8号柱列　柱5		Ⅳb	117	2号疏列　柱5		Ⅳc	207	1号建物　柱2		Ⅳa
28	8号柱列　柱6		Ⅳb	118	2号疏列　柱6		Ⅳc	208	1号建物　柱3		Ⅳa
29	3号柱列　柱7		Ⅳb	119	3号疏列　柱7		Ⅳc	209	1号建物　柱4		Ⅳa
30	ピット30		Ⅳb	120	3号疏列　柱6		Ⅳc	210	1号建物　柱5		Ⅳa
31	8号柱列　柱8		Ⅳb	121	3号疏列　柱5		Ⅳc	211	2号建物　柱1		Ⅳa
32	ピット32		Ⅳb	122	3号疏列　柱4		Ⅳc	212	1号建物　柱6		Ⅳa
33	ピット33		Ⅳb	123	3号疏列　柱3		Ⅳc	213	1号建物　柱7		Ⅳa
34	ピット34		Ⅳb	124	3号疏列　柱2		Ⅳc	214	1号建物　柱8		Ⅳa
35	ピット35		Ⅳb	125	3号疏列　柱1		Ⅳc	215	ピット215		Ⅳc
36	2号建物　柱83		Ⅳa	126	欠番	不明	—	216	2号建物　柱14		Ⅳa
37	ピット37		Ⅳb	127	8号建物　柱6		Ⅳa	217	2号建物　柱23		Ⅳa
38	欠番	不明	—	128	欠番	Pit127と一度	—	218	2号建物　柱24		Ⅳa
39	ピット39		Ⅳc	129	7号柱列　柱1		Ⅳb	219	2号建物　柱6		Ⅳa
40	ピット40		Ⅳb	130	欠番	不明	—	220	ピット220		Ⅳb
41	9号柱列　柱2		Ⅳb	131	8号建物		Ⅳa	221	ピット221		Ⅳb
42	ピット42		Ⅳc	132	7号建物　柱3		Ⅳb	222	ピット222		Ⅲb1
43	ピット43		Ⅳc	133	ピット133		Ⅳb	223	ピット223		Ⅲb1
44	ピット44		Ⅳc	134	8号建物　柱4		Ⅳa	224	23号柱列　柱3		Ⅲb1
45	ピット45		Ⅳc	135	7号建物　柱5		Ⅳb	225	21号柱列　柱11		Ⅲb1
46	2号建物　柱36		Ⅳa	136	ピット136		Ⅳb	226	ピット226		Ⅲb4
47	ピット47		Ⅳc	137	ピット137		Ⅳb	227	2号建物　柱25		Ⅳa
48	ピット48		Ⅳc	138	8号建物　柱3		Ⅳa	228	2号建物　柱16		Ⅳa
49	2号建物　柱28		Ⅳa	139	ピット139		Ⅳb	229	2号建物　柱26		Ⅳa
50	2号建物　柱29		Ⅳa	140	ピット140		Ⅳb	230	2号建物　柱15		Ⅳa
51	2号建物　柱30		Ⅳa	141	ピット141		Ⅳb	231	2号建物　柱17		Ⅳa
52	2号建物　柱31		Ⅳa	142	7号建物　柱1		Ⅳb	232	2号建物　柱3		Ⅳa
53	2号建物　柱12		Ⅳa	143	7号建物　柱2		Ⅳb	233	ピット233		Ⅲb1～3
54	2号建物　柱21		Ⅳa	144	7号建物　柱2		Ⅳb	234	17号柱列　柱8		Ⅲb3
55	2号建物　柱53		Ⅳa	145	14号柱列　柱2		Ⅳb	235	ピット235		Ⅲb1～3
56	2号建物　柱54		Ⅳa	146	欠番	不明	—	236	ピット236		Ⅲb3
57	2号建物　柱55		Ⅳa	147	ピット147		Ⅳb	237	18号柱列　柱8		Ⅲb3
58	2号建物　柱37		Ⅳa	148	15号柱列　柱3		Ⅳb	238	17号柱列　柱7		Ⅲb3
59	2号建物　柱47		Ⅳa	149	16号柱列　柱1	もとPit149	Ⅲb3	239	2号建物　柱19		Ⅳa
60	2号建物　柱46		Ⅳa	150	ピット150		Ⅳa	240	2号建物　柱18		Ⅳa
61	2号建物　柱45		Ⅳa	151	ピット151		Ⅳb	241	2号建物　柱27		Ⅳa
62	2号建物　柱39		Ⅳa	152	ピット152		Ⅳb	242	欠番	不明	—
63	2号建物　柱38		Ⅳa	153	7号柱列　柱3		Ⅳb	243	欠番	不明	—
64	2号建物　柱44		Ⅳa	154	ピット154		Ⅳb	244	2号建物　柱65		Ⅳa
65	2号建物　柱37		Ⅳa	155	ピット155		Ⅳb	245	2号建物　柱64		Ⅳa
66	2号建物　柱34		Ⅳa	156	ピット156		Ⅳb	246	19号柱列　柱10		Ⅲb3
67	2号建物　柱42		Ⅳa	157	ピット157		Ⅲb3	247	19号柱列　柱11		Ⅲb3
68	2号建物　柱41		Ⅳa	158	ピット158		Ⅳb	248	ピット248		Ⅲb2～3
69	2号建物　柱32		Ⅳa	159	ピット159		Ⅳb	249	18号柱列　柱10		Ⅲb3
70	2号建物　柱43		Ⅳa	160	17号柱列　柱2		Ⅲb3	250	21号柱列　柱9		Ⅲb1
71	2号建物　柱56		Ⅳa	161	17号柱列　柱3		Ⅲb3	251	1号建物　柱9		Ⅳa
72	2号建物　柱39		Ⅳa	162	16号柱列　柱4		Ⅲb3	252	1号建物　柱10		Ⅳa
73	2号建物　柱52		Ⅳa	163	13号柱列　柱9		Ⅳb	253	欠番	不明	—
74	2号建物　柱33		Ⅳa	164	13号柱列　柱5		Ⅳb	254	2号建物　柱13		Ⅳa
75	2号建物　柱49		Ⅳa	165	ピット165		Ⅳb	255	ピット255		Ⅳa
76	2号建物　柱22		Ⅳa	166	13号柱列　柱6		Ⅳb	256	ピット256		Ⅳa
77	2号建物　柱20		Ⅳa	167	13号柱列　柱2		Ⅳb	257	ピット257		Ⅲb1
78	ピット78		Ⅳc	168	ピット168		Ⅳb	258	欠番	不明	—
79	ピット79		Ⅳc	169	13号柱列　柱1		Ⅳb	259	19号柱列　柱2		Ⅲb3
80	2号建物　柱61		Ⅳa	170	ピット170		Ⅳb	260	17号柱列　柱5		Ⅲb3
81	2号建物　柱58		Ⅳa	171	15号柱列　柱2		Ⅳb	261	16号柱列　柱6		Ⅲb3
82	2号建物　柱29		Ⅳa	172	14号柱列　柱5		Ⅳb	262	17号柱列　柱6		Ⅲb3
83	2号建物　柱5		Ⅳa	173	ピット173		Ⅳb	263	16号柱列　柱7		Ⅲb3
84	欠番	番号重複	—	174	ピット174		Ⅳb	264	ピット264		Ⅲb3
85	9号建物　柱6		Ⅲb2	175	14号柱列　柱1		Ⅳb	265	ピット265		Ⅲb1～3
86	欠番	不明	—	176	ピット176		Ⅳb	266	ピット266		Ⅲb1～3
87	9号建物　柱5		Ⅲb2	177	9号建物　柱4		Ⅳc	267	ピット267		Ⅲb1～3
88	9号建物　柱4		Ⅲb2	178	18号柱列　柱4		Ⅲb3	268	ピット268		Ⅲb1～3
89	ピット89		Ⅳb	179	ピット179		Ⅳb	269	ピット269		Ⅲb1～3
90	ピット90		Ⅳc	180	ピット180		Ⅳb	270	24号柱列　柱5		Ⅲb1

表 5　二の丸第17地点遺構名称対照表 (2)
Tab. 5　List of the structural remains name which are collated (2)

Pit番号	確定名称	備考	時期	Pit番号	確定名称	備考	時期	Pit番号	確定名称	備考	時期
271	24号柱列　柱1		Ⅲb1	361	2号柱列　柱3		Ⅳc	451	5号建物　柱5		Ⅱb3
272	24号柱列　柱3		Ⅲb1	362	ピット362		Ⅲb1～3	452	ピット452		Ⅱb3
273	24号柱列　柱6		Ⅲb1	363	ピット363		Ⅲb1～3	453	ピット453		Ⅱb3
274	24号柱列　柱7		Ⅲb1	364	3号柱列　柱2		Ⅳc	454	20号柱列　柱1		Ⅱb2
275	欠番	不明	—	365	ピット365		Ⅳb	455	ピット455		Ⅲb1～3
276	19号建物　柱4		Ⅲb2	366	ピット366		Ⅳa	456	ピット456		Ⅱb2
277	19号建物　柱5		Ⅲb2	367	11号柱列　柱1		Ⅲb3	457	21号柱列　柱15		Ⅱb1
278	19号建物　柱3		Ⅲb2	368	ピット368		Ⅳb	458	ピット458		Ⅱb1
279	19号建物　柱2		Ⅲb2	369	ピット369		Ⅲb2～3	459	21号柱列　柱14		Ⅱb1
280	19号建物　柱1		Ⅲb2	370	欠番	不明	—	460	21号柱列　柱8		Ⅱb1
281	ピット281		Ⅲb1～3	371	8号建物　柱9		Ⅳa	461	21号柱列　柱7		Ⅱb1
282	ピット282		Ⅲb1～3	372	ピット372	不明	—	462	21号柱列　柱5		Ⅱb1
283	18号柱列　柱8		Ⅲb3	373	2号柱列　柱1		Ⅳc	463	欠番	不明	—
284	ピット284		Ⅲb3	374	ピット374		Ⅳb	464	欠番	不明	—
285	欠番	不明	—	375	ピット375		Ⅲb2～3	465	12号建物　柱2		Ⅱ
286	23号柱列　柱5		Ⅲb1	376	ピット376		Ⅲb2～3	466	12号建物　柱1		Ⅱ
287	9号建物　柱7		Ⅲb2	377	18号柱列　柱5		Ⅲb3	467	21号柱列　柱4		Ⅱb1
288	23号柱列　柱4		Ⅲb1	378	ピット378		Ⅳb	468	21号柱列　柱6		Ⅱb1
289	ピット289		Ⅲb2	379	3号柱列　柱1		Ⅳc	469	ピット469		Ⅲb1～3
290	19号柱列　柱1		Ⅲb3	380	ピット380		Ⅳc	470	21号柱列　柱3		Ⅱb1
291	21号柱列　柱19		Ⅲb1	381	ピット381		Ⅲb3	471	欠番	不明	—
292	ピット292		Ⅲb1～3	382	欠番	不明	—	472	ピット472		Ⅱb1
293	9号建物　柱1		Ⅲb2	383	ピット383		Ⅲb2～3	473	ピット473		Ⅲb1～3
294	9号建物　柱2		Ⅲb2	384	ピット384		Ⅳb	474	11号建物　柱4		Ⅱ
295	9号建物　柱3		Ⅲb2	385	ピット385		Ⅳb	475	12号建物　柱3		Ⅱ
296	24柱列　柱1		Ⅲb1	386	5号柱列　柱2		Ⅳc	476	12号建物　柱4		Ⅱ
297	ピット297		Ⅲb1～3	387	17号柱列　柱4		Ⅲb3	477	ピット477		Ⅲb1～2
298	ピット298		Ⅲb1	388	16号柱列　柱3		Ⅲb3	478	ピット478		Ⅲb1～3
299	欠番	不明	—	389	16号柱列　柱2		Ⅲb3	479	ピット479		Ⅲb1～2
300	ピット300		Ⅳb	390	欠番	不明	—	480	ピット480		Ⅱb1
301	ピット301		Ⅳb	391	ピット391		Ⅲb3	481	ピット481		Ⅲb1～3
302	ピット302		Ⅲb3	392	18号柱列　柱1		Ⅲb3	482	ピット482		Ⅲb3
303	ピット303		Ⅳa	393	ピット393		Ⅲb3	483	ピット483		Ⅰ
304	8号建物　柱1		Ⅳa	394	ピット394		Ⅲb1	484	ピット484		Ⅲb1～2
305	欠番	不明	—	395	33号土坑		Ⅲb1	485	ピット485		Ⅱb1
306	ピット306		Ⅳb	396	ピット396		Ⅲb3	486	ピット486		Ⅱb1
307	ピット307		Ⅳb	397	ピット397		Ⅲb1～3	487	23号柱列　柱2		Ⅱb1
308	ピット308		Ⅲb3	398	ピット398		Ⅲb1～3	488	23号柱列　柱1		Ⅱb1
309	欠番	不明	—	399	ピット399		Ⅳb	489	ピット489		Ⅱb1
310	欠番	不明	—	400	19号柱列　柱9		Ⅲb3	490	ピット490		Ⅱb1
311	欠番	不明	—	401	22号柱列　柱1		Ⅲb1	491	21号柱列　柱13		Ⅱb1
312	11号柱列　柱1		Ⅳb	402	19号柱列　柱6		Ⅲb3	492	21号柱列　柱12		Ⅱb1
313	11号柱列　柱2		Ⅳb	403	19号柱列　柱5		Ⅲb3	493	ピット493		Ⅱb1
314	11号柱列　柱3		Ⅳb	404	ピット404		Ⅲb1～3	494	21号柱列　柱2		Ⅱb1
315	11号柱列　柱4		Ⅳb	405	19号柱列　柱4		Ⅲb3	495	ピット495		Ⅱ
316	6号建物　柱3		Ⅳc	406	19号柱列　柱7		Ⅲb3	496	ピット496		Ⅲb1～2
317	6号建物　柱2		Ⅳc	407	ピット407		Ⅲb2～3	497	ピット497		Ⅱb1
318	ピット318		Ⅳb	408	ピット408		Ⅲb2～3	498	ピット498		Ⅲb1～2
319	6号建物　柱1		Ⅳc	409	19号柱列　柱8		Ⅲb3	499	ピット499		Ⅲb1
320	1号柱列　柱1		Ⅳc	410	ピット410		Ⅱ	500	ピット500		Ⅲb1～2
321	1号柱列　柱2		Ⅳc	411	ピット411		Ⅱ	501	ピット501		Ⅲb1～3
322	1号柱列　柱3		Ⅳc	412	ピット412		Ⅱ	502	ピット502		Ⅲb1～3
323	ピット323		Ⅲb1～3	413	ピット413		Ⅱ	503	ピット503		Ⅱ
324	ピット324		Ⅳb	414	欠番	重複	—	504	11号建物　柱1		Ⅱ
325	ピット325		Ⅳb	415	ピット415		Ⅲb3	505	11号建物　柱2		Ⅱ
326	ピット326		Ⅳc	416	ピット416		Ⅲb2	506	ピット506		Ⅱ
327	4号柱列　柱2		Ⅳc	417	ピット417		Ⅲb2	507	11号建物　柱3		Ⅱ
328	ピット328		Ⅳb	418	ピット418		Ⅲb1～3	508	21号柱列　柱1		Ⅲb1
329	12号柱列　柱1		Ⅳb	419	ピット419		Ⅲb1～3	509	25号柱列　柱4		Ⅱ
330	ピット330		Ⅳb	420	ピット420		Ⅲb3	510	ピット510		Ⅲb1
331	ピット331		Ⅲb1～3	421	18号柱列　柱9		Ⅲb3	511	ピット511		Ⅱ
332	6号柱列　柱1		Ⅳb	422	18号柱列　柱13		Ⅲb3	512	ピット512		Ⅲb1
333	6号柱列　柱2		Ⅳb	423	20号柱列　柱3		Ⅲb2	513	ピット513	外周壁や確認	Ⅱ？
334	ピット334		Ⅲb1～3	424	ピット424		Ⅲb1～3	514	ピット514	外周壁や確認	Ⅱ
335	6号柱列　柱3		Ⅳb	425	5号建物　柱4		Ⅲb3	515	ピット515		Ⅱ
336	ピット336		Ⅳb	426	21号柱列	柱10と18	Ⅲb1	516	ピット516		Ⅱ
337	ピット337		Ⅳb	427	欠番	不明	—	517	ピット517		Ⅱ
338	ピット338		Ⅳb	428	ピット428		Ⅲb3	518	25号柱列　柱7		Ⅱ
339	ピット339		Ⅲb1～3	429	欠番	不明	—	519	25号柱列　柱6		Ⅱ
340	4号柱列　柱1		Ⅳc	430	18号柱列　柱14		Ⅲb3	520	25号柱列　柱5		Ⅱ
341	ピット341		Ⅲb2～3	431	21号柱列　柱16		Ⅲb1	521	19号柱列　柱3		Ⅲb3
342	6号建物　柱7		Ⅳc	432	ピット432		Ⅲb3	522	ピット522		Ⅱ
343	31号土坑		Ⅳc	433	5号建物　柱1		Ⅲb3	523	ピット523		Ⅲb3
344	5号建物　柱8		Ⅳc	434	5号建物　柱3		Ⅲb3	524	ピット524		Ⅱ
345	ピット345		Ⅳb	435	5号建物　柱2		Ⅲb3	525	ピット525		Ⅲb1～3
346	ピット346		Ⅳb	436	ピット436		Ⅲb1～2	526	12号柱列　柱2		Ⅳb
347	5号柱列　柱1		Ⅳc	437	ピット437		Ⅲb1～2	527	3号柱列　柱3		Ⅳc
348	32号土坑		Ⅳb	438	20号柱列　柱2		Ⅲb2	528	ピット528		Ⅲb1～3
349	ピット349		Ⅳb	439	欠番	不明	—	529	4号柱列　柱3		Ⅳc
350	ピット350		Ⅳc	440	19号柱列　柱12		Ⅲb3	530	ピット530		Ⅲb1
351	17号柱列　柱3		Ⅳb	441	19号柱列　柱13		Ⅲb3	531	ピット531		Ⅲb1～3
352	ピット352		Ⅲb3	442	ピット442		Ⅲb2	番号無	ピット532		Ⅳb
353	ピット353		Ⅲb3	443	ピット443		Ⅲb2	番号無	ピット533		Ⅲb1～3
354	ピット354		Ⅳb	444	ピット444		Ⅱ	番号無	ピット534		Ⅱ
355	ピット355		Ⅳb	445	22号柱列　柱3		Ⅲb1	重複	ピット535	Pit138重複	Ⅳc
356	ピット356		Ⅳb	446	ピット446		Ⅲb1～3	重複	ピット536	もとPit149a	Ⅳb
357	2号柱列　柱2		Ⅳc	447	18号柱列　柱7		Ⅲb3	番号無	ピット537		Ⅲb1～3
358	ピット358		Ⅳb	448	ピット448		Ⅲb2	番号無	ピット538		Ⅲb1～3
359	ピット359		Ⅳb	449	ピット449		Ⅲb2	欠番？	ピット539		Ⅳa
360	ピット360		Ⅲb1～3	450	4号建物		Ⅲb3	番号無	ピット540		Ⅳa

表6　二の丸第17地点遺構名称対照表（3）
Tab. 6　List of the structural remains name which are collated (3)

現場名称	確定名称	備考	時期
1号溝	1号溝		Ⅳc
2号溝	2号溝		Ⅲb4
3号溝	3号溝		Ⅲb4
4号溝	9号溝	9号溝と一連・同一	Ⅲb2
5号溝	46号溝	46号溝と一連・同一	Ⅱ
6号溝	6号溝		Ⅲb4
7号溝	欠番	3号建物石列脇窪み	—
8号溝	欠番		—
9号溝	9号溝		Ⅲb2
10号溝	5号建物		—
11号溝	欠番		—
12号溝	12号溝		Ⅳc
13号溝	13号溝		Ⅳc
14号溝	14号溝		Ⅳa
15号溝	15号溝		Ⅳc
16号溝	16号溝		Ⅳc
17号溝	17号溝		Ⅳa
18号溝	1号木樋		Ⅳc
19号溝	19号溝	2号建物雨落溝	Ⅳa
20号溝	20号溝	2号建物雨落溝	Ⅳa
21号溝	21号溝	2号建物雨落溝	Ⅳa
22号溝	22号溝	2号建物雨落溝	Ⅳa
23号溝	23号溝	2号建物雨落溝	Ⅳa
24号溝	24号溝	2号建物雨落溝	Ⅳa
25号溝	2号木樋		Ⅳc
26号溝	43号溝	43号溝と一連・同一	Ⅲb3
27号溝	27号溝		Ⅲb4
28号溝	3号木樋		Ⅲb2
29号溝	29号溝		Ⅳa
30号溝	30号溝		Ⅳa
31号溝	31号溝		Ⅳa
32号溝	32号溝		Ⅲb2
33号溝	欠番	不明	—
34号溝	34号溝	南区平行する溝群	Ⅲa
35号溝	35号溝	南区平行する溝群	Ⅲa
36号溝	36号溝	南区平行する溝群	Ⅲa
37号溝	37号溝	南区平行する溝群	Ⅲa
38号溝	38号溝	南区平行する溝群	Ⅲa
39号溝	39号溝	南区平行する溝群	Ⅲa
40号溝	40号溝	南区平行する溝群	Ⅲa
41号溝	41号溝	南区平行する溝群	Ⅲa
42号溝	42号溝		Ⅱ
43号溝	43号溝		Ⅲb3
44号溝	44号溝		Ⅲb
45号溝	45号溝		Ⅲa
46号溝	46号溝		Ⅱ
47号溝	47号溝		Ⅱ
48号溝	48号溝		Ⅱ
49号溝	49号溝		Ⅱ
50号溝	50号溝		Ⅱ
51号溝	51号溝	瓦伏暗渠	Ⅲa
52号溝	52号溝		Ⅲb1
53号溝	4号木樋		Ⅲb2
54号溝	54号溝	瓦伏暗渠	Ⅲa
55号溝	55号溝	中区平行する溝群	Ⅲa
56号溝	56号溝	中区平行する溝群	Ⅲa
57号溝	57号溝	中区平行する溝群	Ⅲa
58号溝	58号溝	中区平行する溝群	Ⅲa
59号溝	59号溝	中区平行する溝群	Ⅲa
60号溝	60号溝	中区平行する溝群	Ⅲa
61号溝	61号溝	中区平行する溝群	Ⅲa
62号溝	62号溝	中区平行する溝群	Ⅲa
63号溝	63号溝	中区平行する溝群	Ⅲa
64号溝	64号溝	中区平行する溝群	Ⅲa
65号溝	65号溝		Ⅲb1
66号溝	66号溝	瓦伏暗渠	Ⅲa
67号溝	67号溝	中区平行する溝群	Ⅲa
68号溝	欠番	不明	—
69号溝	69号溝		Ⅲb1
70号溝	70号溝		Ⅲb1

現場名称	確定名称	備考	時期
1号土坑	1号土坑		Ⅳb
2号土坑	2号土坑		Ⅲb1
3号土坑	欠番		—
4号土坑	4号土坑		Ⅲb4
5号土坑	5号土坑		Ⅳc
6号土坑	6号土坑		Ⅳb
7号土坑	7号土坑		Ⅲb
8号土坑	8号土坑		Ⅳb
9号土坑	9号土坑		Ⅳc
10号土坑	10号土坑		Ⅳc
11号土坑	11号土坑		Ⅳb
12号土坑	12号土坑		Ⅳc
13号土坑	13号土坑		Ⅳc
14号土坑	14号土坑		Ⅲb4
15号土坑	15号土坑		Ⅲb3
16号土坑	16号土坑		Ⅲb1～4
17号土坑	18号柱列　柱6		—
18号土坑	18号土坑		Ⅳb
19号土坑	19号土坑		Ⅲb3
20号土坑	20号土坑		Ⅲb3
21号土坑	21号土坑		Ⅲb1～4
22号土坑	22号土坑		Ⅲb4
23号土坑	23号土坑		Ⅲb4
24号土坑	24号土坑		Ⅱ
25号土坑	25号柱列　柱2		—
26号土坑	26号土坑		Ⅲb2
27号土坑	27号土坑		Ⅲb2
28号土坑	28号土坑		Ⅳc
29号土坑	29号土坑		Ⅲb3
30号土坑	30号土坑		Ⅲb3

3．基本層序と時期区分

(1) 基本層序（図12～14、図版８）

基本層序は、１層から６層に分層した。

調査地点のもともとの地形は、北側と西側の標高が高く、南東側に向かって緩やかに下っていくものであったと考えられる。一旦は切り土を行い段差を造成しているが、その後段差を埋める形でほぼ平坦に整地している。それ以降は、ほぼ平坦な状態を維持しつつ、複数回の整地が行われている。

１層

２層より上位の整地層や現在の表土層をまとめて１層とした。厚さは、調査区のほぼ全域で約2.5mに達する。明治以降の第二師団・米軍・大学によって行われた整地層からなるが、その大部分は、大学造成時の盛土であると考えられる。

２層

暗オリーブ褐色の砂質シルトを基調とするが、炭化物が多い部分では、黒褐色を呈する。明治15年（1882年）の火災後の整理に伴う整地層と考えられ、多量の炭化物を含む部分もある。層厚は５～15cm程度で、調査区北端付近では途切れる部分もあるが、ほぼ全面に分布している。

３層

細分でき、黄褐色から黒褐色まで、場所による変異が大きい。４層上部と類似している場所もあり、誤認して除去してしまったところもある。調査区のほぼ全域に分布しているが、北区北半の３列以北には分布していない。この範囲では、３層以下の層序は存在せず、２層を除去すると地山の６層が露出する。層厚は、厚い所で20cm程度である。南区の西よりの区域などでは、３層はごく薄くしか分布していない。

この３層に覆われる４層上部上面から掘り込まれた遺構の中で、最も新しい段階の２号溝埋土には、炭が多量に含まれるとともに、18世紀末から19世紀初頭頃の陶磁器がまとまって出土している。また、調査区西端よりのＢ－10～12区の３層中からも、18世紀末から19世紀初頭頃の陶磁器がまとまって出土している（図版７－１）。文献記録では、文化元年（1804年）に、落雷のため二の丸がほぼ全焼していることが知られている。これらの点から３層は、文化元年の火災後の、再建工事に伴う整地層と考えられる。

４層上部

基本的な様相が類似するため、４層として当初一括したが、４層中に遺構の掘り込み面が存在することが判明したため、上部と下部に区分した。いくつかの薄い層に細分できる。色調は黄褐色を基調とするが、暗褐色や暗灰黄色などの部分が、互層状になっている部分もある。土質も、砂質シルトに、シルト・砂が互層状に入る。層厚は、おおむね10～20cm程度で、南区から中区にかけて分布しており、北区には延びていない。調査区西端付近では、ごく薄くなっていく。Ⅲｂ期の遺構は、この４層上部上面からの掘り込みと認識した。しかし中区では、多数の遺構が複雑に重なりあっており、少しづつ掘り下げつつ、遺構を確認した。そのため一部は、４層上部の途中から掘り込まれている可能性が残る。しかし、Ⅲｂ期との細分時期と４層上部の細分層との関係は、明瞭にはとらえることができていないため、４層上部上面掘り込みとして一括しておく。

４層下部

ごく少量、暗褐色から黒褐色の土が含まれる以外は、地山起源のブロックからなる整地層である。地山ブロックの色調などから細分されるが、一連の整地層と考えられる。Ⅰ期に地山を削って造られたと考えられる、段差の内側を埋めるような形で分布する。最も厚いところで、約70cmに達する。

５層

黒褐色の粘土質シルトで、Ｅ・Ｆ－６～８区にかけてのみ分布する。層厚は最大でも10cm程度と薄い。地山の６層上面に、部分的に形成された表土層と考えられる。

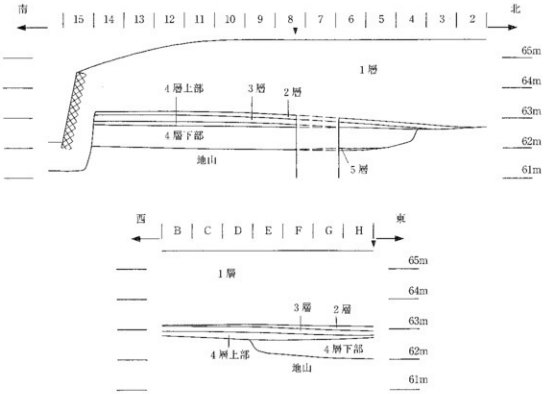


図12　二の丸第17地点基本層序模式図
Fig.12　Schematic Profiles of NM17

6層

地山層である。粘土と砂などが互層に堆積しており、部分的に砂礫層がはさまる、水性堆積層である。黄褐色シルト・オリーブ灰色粘土質シルト・灰色粘土・明褐色砂礫などからなるが、土色は変異が大きい。

以上の基本層序以外に、C～F－8～10区に、整地A層・A′層が認められた。いずれも、Ⅲb3期の4号建物に伴う整地層と考えられる。

(2) 遺構の変遷段階の設定

①変遷段階の大別

遺構の掘り込み面から、まず次の4段階に大きく区分した。

Ⅰ期　地山上面

Ⅱ期　4層下部上面

Ⅲ期　4層上部上面

Ⅳ期　3層上面

この4段階の内、Ⅲ期とⅣ期については、遺構の密度も高く、数段階の変遷がとらえられる。遺構の展開状況が大きく変化することを基準として、Ⅲ期はⅢa期・Ⅲb期に、Ⅳ期はⅣa期・Ⅳb期・Ⅳc期に区分した。その上でⅢb期については、遺構の切り合い関係や展開状況から、さらに細分している。

Ⅰ期の遺構は極めて少なく、確実なものは井戸1基だけであり、細分は行っていない。Ⅱ期は、遺構の切り合い関係から、複数段階の変遷がとらえられている。しかし、南区から中区にかけて、南北方向に塀・柱列・溝などの区画施設が延びるのがⅡ期の遺構の展開状況で、その点では変化がない。このように基本的な土地利用とい

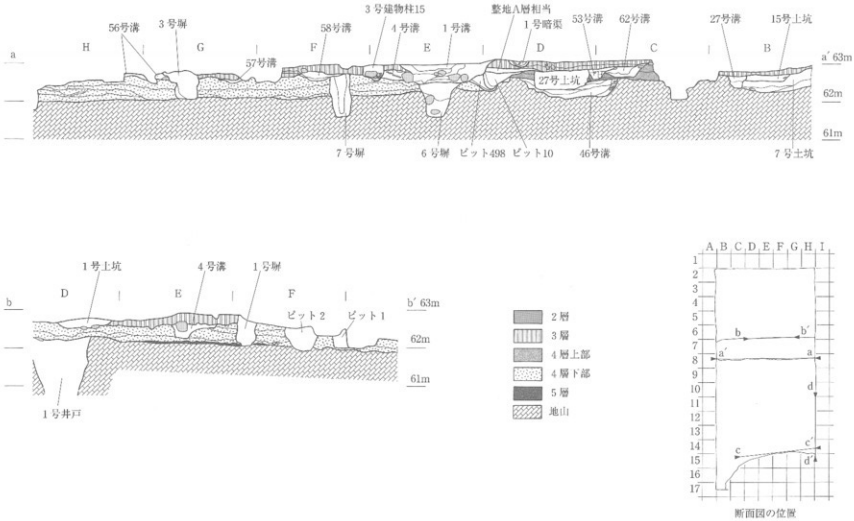


図13　二の丸第17地点外周壁断面図（1）
Fig.13　Cross sections of excavation at NM17(1)

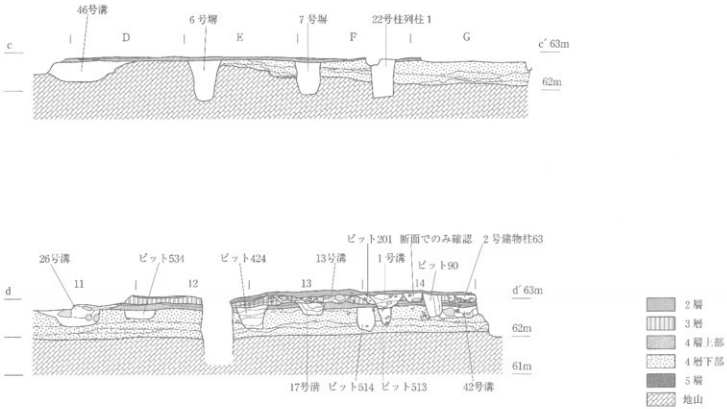


図14　二の丸第17地点外周壁断面図（2）
Fig.14　Cross sections of excavation at NM17(2)

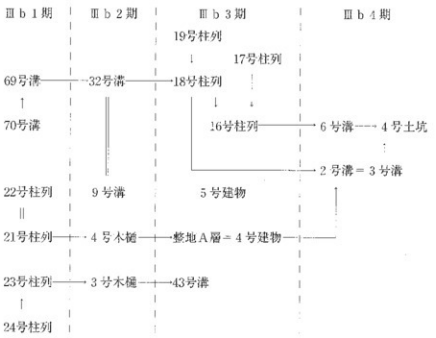
う点では共通していると考えられるため、これ以上の細分は行なわなかった。そのため以下では、Ⅲ期とⅣ期を細分した基準について記述する。個々の遺構をどの時期に帰属させたかの詳細については、第Ⅱ章4．のそれぞれの遺構の記述の中で説明する。

②Ⅲａ期とⅢｂ期の区分

Ⅲ期とした4層上部上面の遺構は、中区を中心に多数の遺構が重なり合っている。それらの中で最も古い段階には、平行する溝状の遺構が中区と南区に並んでいる。平行する溝は、中区は南北方向、南区では東西方向で、溝の幅や断面形状が異なるという違いはあるものの、いずれも黒色から黒褐色の比較的均質な埴土である。このような埴土は、他の段階の遺構埴土にはほとんど見られない。また、このような並行する溝が展開するのは、他の時期には見られない、極めて特徴的なものである。このように遺構の展開状況が前後の時期とは大きく異なることから、独自の一つの段階と判断し、Ⅲ期の他の遺構から分離して、Ⅲａ期として区分した。これ以降のものは、Ⅲｂ期としてまとめた上で、さらに細分するという方法を取った。

③Ⅲｂ期の細分

Ⅲｂ期は、遺構の切り合い関係や展開状況から、Ⅲｂ１～４期に区分した。Ⅲｂ期の細分にあたって基準とした、主な切り合い関係を整理して示すと、以下のようになる。



Ⅲｂ期の細分にあたっては、中区から北区にかけて延びる32号溝と、それに接続する9号溝を主要な基準としたが、切り合い関係だけで、細分段階を確定することは不可能であった。同じ段階に存在して矛盾がないかどうかも、主要な判断基準とした。32号溝・9号溝と併存して矛盾の無い遺構群を抽出してⅢｂ２期とし、それより古いと考えた方が良い遺構群をⅢｂ１期、新しいと考えた方が良いものをⅢｂ３期とした。さらに、Ⅲｂ期でも最も新しい段階には、Ⅲｂ３期の遺構を大きく壊して造られている2号溝が存在する。この2号溝と併存して矛盾のない遺構群を抽出したが、Ⅲｂ１～３期の遺構の展開状況とは大きく異なっている。柱列などの区画施設な

どが見られず、簡素な石組溝などが展開するだけで、この区域がⅢｂ１～３期と同様に使われていたと考えるのは困難である。むしろ、文化元年の火災直後の片づけの際に、一時的に排水などのために造られた遺構群と考えるのが妥当であろう。そのため、この段階をⅢｂ４期として区分した。

このような形でⅢｂ期を細分したが、異なる遺構が同時に存在したか否かについては、判断の難しい場合もある。今回の調査で検出した柱列のほとんどは、塀であったと考えられる。塀のような区画施設と溝については、塀が溝をまたぐ場合があったことが想定される。その際、石組溝の掘り方を塀の柱穴が一部切っているような場合には、両者が同時存在することは可能である。また、溝をまたぐ部分だけ、柱間間隔がずれる場合も想定しておかなければならず、溝と柱列との同時存在の可否を判断することは、容易ではない。Ⅲｂ期では、16・17・18号柱列と32号溝が交差する。16・17号柱列については、交差する部分の柱間間隔がずれていた場合には、32号溝をまたぐことも不可能ではない。しかし18号柱列と32号溝の関係では、18号柱列の柱６が、溝の石組を完全に破壊しており、この場合は同時存在は不可能である。そのため、32号溝と18号柱列は別な時期とし、18号柱列と同様に展開する16・17・19号柱列も、同じⅢｂ３期に含めた。しかし、18号柱列より古い19号柱列、あるいは18号柱列との前後関係が判明しない17号柱列については、一つ前のⅢｂ２期に遡る可能性も残されている。

このように、細部においては確実でない部分も残されている。また、各細分時期の中でも、さらに新旧の関係が含まれており、これらの遺構が、厳密に同時存在かどうかを確定することは難しい。また、帰属させた時期以外に動く可能性が残されている遺構も多く存在する。それらについては、個々の記載の中で指摘する。このような問題は残されているが、Ⅲｂ期の中での変化の動向としては、大過ないものと考えられる。

④Ⅳ期の細分

Ⅳ期とした３層上面掘り込みの遺構の中で、切り合い関係から最も古い段階には、中区から南区の大部分に規模の大きな礎石建物が展開し、北区の東半分にも礎石建物が存在する。このような建物が造られるのは、他の時期には見られない。続く時期には、塀が屈曲して展開し、北区の東半部を除くと礎石建物は造られず、遺構の配置状況は一変する。そのため、この段階をⅣａ期として区分した。３層が文化元年の火災に伴う整地層と考えられることから、Ⅳａ期は火災直後の時期と推定される。文化元年の火災では、二の丸がほぼ全焼したことが記録に残っており、二の丸建物群全体の再建が直ちになされたとは考え難い。全ての建物が再建されるまで、一定の期間を要したと考えるのが自然である。Ⅳａ期の建物群は、この復興の過程で、一時的に造られたものと考えるのが妥当であろう。

Ⅳａ期に続く時期には、溝の中に柱を立てた塀が、屈曲しながら南北に延びていく。中区と南区では、塀の西側にはほとんど遺構が存在しないことから、中奥西端を区画する塀と考えられる。この塀以外の遺構は、北区東半部に礎石建物が存在する以外は、塀と連接するなど一連の区画施設と考えられる柱列や、塀の改修に関わる可能性のある柱列がほとんどを占めている。このような遺構の配置状況は、Ⅳａ期とは全く異なっており、Ⅳｂ期として区分した。

Ⅳ期の遺構の中で、切り合い関係から新しいと判断できる遺構には、グリッドラインに近い方向で造られたものが多数存在する。これまでの川内南地区の調査事例から、二の丸期の遺構は、北で約25度西偏する方向で造られていることが判明している。今回の調査においても、Ⅱ期からⅣｂ期までの遺構は、一部異なるものも存在するが、基本的にこの方向に基づいて造られている。グリッドの方向は、北で約17.5度西偏していることから、二の丸期の遺構は、グリッドから７度程度さらに西に傾く。しかし、Ⅳ期の最も新しい段階で、異なる方向の遺構が出現する。遺構の方向が異なることは、この区域の使われ方が大きく変化していったことを示している。また、遺構の配置状況も前段階から大きく変化する。そのため、この段階をⅣｃ期として区分した。明治時代に入り、二の丸地区の使われ方が大きく変化したことを反映するものと考えて良いだろう。なお、出土遺物などから、明

治初頭以後に下ることが明らかな遺構も、Ⅳc期に含めている。

(3) 各期の推定時期

今回の調査では、上述したように、大別4段階、細別10期に遺構の変遷段階を区分した。次に、それぞれの段階が、どのような時期に相当すると考えられるかについて、概略を述べておきたい。順序は逆になるが、より推定が確実な新しい段階から遡らせる形で記述する。

①文化元年の火災とⅣ期の推定時期

先述のように、基本層序の3層が、文化元年（1804年）の火災後の再建工事に伴う整地層と考えられることから、Ⅲ期が文化元年以前、Ⅳ期が文化元年以降の可能性が高いものと考えた。このⅣ期の中でもⅣa期は、復興時に一時的に造られた遺構群と考えられる。文化元年の火災では、二の丸建物群はほぼ全焼している。『伊達治家記録』には、文化6年（1809年）4月に、「仙台城二丸落成」という記載があることから、再建まで5年近く要したものと思われる。Ⅳa期の建物群が使用された時期が、この5年間の全てに渡るのか、あるいはもっと短期間なのかは、再建工事の進み方に左右されるものと考えられるが、厳密に比定することは難しい。そのため、Ⅳa期は、文化元年から文化6年頃の時期と考えておきたい。

なお、Ⅲb4期の遺構も、Ⅲb1～3期とは様相が異なっている。それまでの柱列などの区画施設などが見られず、簡素な石組溝などが展開するだけとなっている。この区域が、Ⅲb1～3期と同様に使われていたと考えるのは困難である。むしろ、文化元年の火災直後の片づけの際に、一時的に排水などのために造られた遺構群と考えるのが妥当であろう。その後、3層の整地が行われ、大規模な再建工事が開始され、その工事の間の暫定的な施設として、Ⅳa期の建物群が造られたと理解しておきたい。

一方Ⅳc期は、基準方位がずれることなどから、明治に入って二の丸の使われ方が変わって以降のものと考えられる。明治維新後、明治2年（1869年）の版籍奉還、4年（1871年）の廃藩置県など、めまぐるしく制度改変が続く。そのため、Ⅳc期の開始が、厳密にどの時期かを確定することは難しいが、ほぼ明治初年頃と考えておきたい。したがってⅣb期は、文化6年（1809年）頃から、明治初年（1868年）頃、Ⅳc期は明治初年頃から明治15年（1882年）の火災までと考えられる。

②Ⅲa期の遺構と元禄年間の二の丸大改造

Ⅰ・Ⅱ・Ⅲa期については、出土遺物が僅少で、遺物の年代観から確実な年代を推定することは難しい。Ⅲ期以前の年代を考えるにあたって重要なのは、Ⅲa期である。Ⅲa期には、並行する溝状の遺構が並び、建物や塀などは見られず、他の時期と全く様相が異なる。これらの溝から出土した遺物で詳細な年代を明らかにできるものは少ないが、陶磁器は18世紀初頭頃のものが主体を占めると考えられる。遺物の量がごく少数なため、出土遺物から確定的な年代を絞り込むことは困難であるが、18世紀初頭以上に遡らせることは難しい。

Ⅲa期の遺構は、4層上部の整地が行われた直後に造られている。このような遺物の年代観から、整地を伴う工事が行われた可能性があるものとして、元禄年間の二の丸大改造があげられる。『伊達治家記録』には、貞享4年（1667年）に御座間の普請などの記事が見え、翌元禄元年（1668年）以降、元禄年間の前半を中心に、表向きの建物に一連の工事が行われている（佐藤巧1967・1979）。中奥については、元禄3・4年にも記事が見えるが、元禄13年（1700年）に奥方普請の記事があり、同年9月に「奥方造営落成」との記載がある。このように元禄年間の二の丸大改造は、相当長期間に渡って、順次工事が進められたと考えられ、中奥の工事はそのなかでも最後に進められたものと思われる。

この元禄年間の大改造を示すものとしては、第5地点の調査において、大規模な整地層が確認されている（年

報6・7)。しかも第5地点では、元禄年間の整地層の上面に、畑の畝状の遺構が広がっていることが確認されている。植えられたものが、作物なのか、薬草や樹木などかは判明しないが、元禄年間の改造の途中に、このような土地利用が一時的になされていたことが判る。今回の調査のⅢa期の溝の埋土は、黒色の均質なもので、自然に形成されたものとは考え難く、このような土を運び込んで入れたものと思われる。その性格については明らかにし難いが、埋土の状況から、耕作などに伴う施設の可能性も考えられる。第5地点の調査成果を踏まえれば、4層上部の整地は元禄年間の二の丸大改造に伴うもので、Ⅲa期の平行する溝は、その改造途中に、一時的に造られたものと考えるのが、現段階では最も穏当であろう。したがって、Ⅲa期は元禄年間(17世紀末)、Ⅲb期は改造が終了した元禄13年(1700年)頃以降と考えておきたい。

③伝伊達宗泰の屋敷と二の丸造成

Ⅰ期とⅡ期では、遺構の配置状況が大きく変わっている。また、Ⅰ期に存在した段差は、4層下部の整地で埋められ、平坦地へ改変されている。4層下部の整地は、江戸時代の整地層の中では最も大規模なものである。このような工事が行われる契機としては、寛永15年(1638年)の二の丸造営があげられるだろう。

二の丸が造営される以前には、伊達政宗の四男である伊達宗泰の屋敷が置かれていたとの記録がある。ただ、これは伝聞に近い記録で、詳細は判明しないし、絵図も残されていない。そのため、はたして伊達宗泰の屋敷であったのか、その場合でも二の丸造営以前の全期間が宗泰の屋敷であるのかなどの問題が残っている。しかしながら、第9地点の調査において二の丸造営以前の遺構群が検出されており(年報8・9)、江戸時代初頭から、何らかの施設が造られていたことは確実である。このような二の丸造営以前の遺構群を、とりあえず伝伊達宗泰の屋敷と呼んでおくこととしたい。

第9地点の調査では、二の丸造営時に伴うと考えられる大規模な整地層を挟んで、遺構の展開状況が大きく変化していた。今回の調査においても、Ⅰ期とⅡ期における遺構の状況が大きく異なっており、Ⅰ期が伝伊達宗泰の屋敷で、Ⅱ期が寛永13年以降の二の丸期と考えると、整合的に理解できる。

④各期の推定時期

今回の調査では、古い段階に伴う遺物、中でも陶磁器類が極めて少なく、出土遺物の年代観で各期の年代を推定することが難しかった。そのため、各期の遺構の展開状況や整地層との関係などを基に、最も整合的に理解できる時期推定を行った。一応、全期間を通じて整合的な時期推定ができたものと考える。以上の検討結果を整理すると、以下のようになる。

Ⅰ期　慶長5年(1600年)頃から寛永15年(1638年)

Ⅱ期　寛永15年(1638年)から元禄年間(17世紀末)

Ⅲa期　元禄年間(17世紀末)

Ⅲb期　元禄13年(1700年)頃から文化元年(1804年)

Ⅳa期　文化元年(1804年)から文化6年(1809年)頃

Ⅳb期　文化6年(1809年)頃から明治初頭(1868年)頃

Ⅳc期　明治初頭(1868年)頃から明治15年(1882年)

4．検出遺構

前述した各期ごとに、検出遺構を以下に報告していく。その際、複雑に重なりあう個々の遺構を抽出して、別々に図面を提示すると、膨大な紙幅が必要となる。そのため、おおむね北区から中区・南区へとの順序で、区域ごとにまとめて、平面図を提示する。断面図は、直前の平面図と対応する形で掲載している。

各時期の状況が把握しやすいように、前節の時期区分の説明と重複する部分も多いが、全体的な遺構の配置状況を各時期の最初に記述する。その後に、個々の遺構について記載する。遺構の記載順序は、平面図を地区ごとに提示していく関係上、北区から中区・南区という順序で行うこととする。各地区の中では、全体の構成が理解し易くなることを企図して、塀・柱列・溝などの区画施設を最初に記載し、その後に建物や土坑などの遺構を記載することとした。ただし、地区をまたいで展開する塀・柱列や溝も存在しており、そのような場合には、各期の特質に合わせて適宜変更している部分がある。

今回の調査では、ほとんどの遺構は、整地層に掘り込んで造られている。そのため、遺構確認が極めて難しい部分も多く、必ずしも全ての遺構を認識できているか不確実な場合もある。柱列や建物などで、当然柱穴が想定されるにもかかわらず検出されていない場合には、本来存在しないのか、検出できていないのか、両者の可能性がある。個々の記載においては逐一記載しないが、常に両方の可能性があることを了解されたい。

掘立柱の建物・柱列・塀では、柱根が残存している場合には、柱の形状は判明し易い。しかし、角柱か丸柱か、あるいは角を面取りした角柱なのかを、柱痕跡の平面形状だけで判断することは難しい場合がほとんどである。特に柱形状を記載していないものは、判別できなかった場合である。柱の大きさについては、丸柱では径、角柱では一辺の長さとなるが、判別できていない場合は、太さとして記載する。

遺構の方向は、真北からの方向を、0.5度きざみで記載する。その際、比較がし易いように、東西方向に延びる遺構である場合にも、直交する方向に直し、北からの傾きとして示した。

遺物の出土状況の詳細は、次節の集計表を参照していただくこととして、ここで詳細に述べることはしない。まとまって出土している場合や、時期決定に関係するような遺物、その他特徴的なことを中心に記載する。

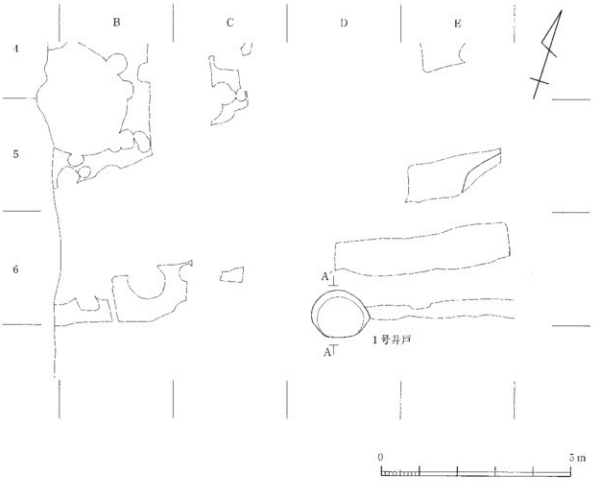
(1) Ⅰ期の遺構（図15・16、図版９）

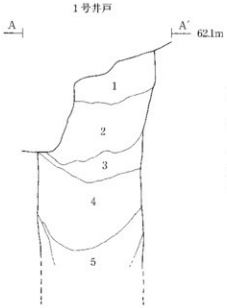
確実に当期まで遡る遺構は、井戸が１基（１号井戸）と、整地に伴うと考えられる段差だけである。中区から南区にかけては調査区の中程のＤ列からＥ列で南北方向に、北区ではＨ－４区から南西方向に、段差が検出されている。この段差をはさんで、南側もしくは東側が15～20cm低くなっている。上層遺構による破壊が広範囲に渡るため、不確実な部分も多いが、図15に示したような形でつながるものと推定される。他の部分は、ごく緩やかに傾斜するだけであるのに対して、この段差の部分のみ急傾斜で落ち込むことから、人為的な削平によって形成されたものと考えられる。また、Ｆ－13・14区において、溝状の落ち込みとピットが検出されているが（ピット483、図版９－６）、人為的なものであるとの確証は得られていない。

【１号井戸】（図16、図版９）

Ｄ－６・７区で検出された、ほぼ円形の素掘りの井戸である。攪乱にはさまれて、かろうじて残っていた部分の断面観察から、４層下部より下から掘り込んでいることを確認した。壁面の地山が堅固であったことから、今回の調査で検出された井戸の内では唯一完掘したが、危険なため埋土の断面図は上部以外作成していない。上部はやや広がり、掘り込み面がほぼ残されている東西の径は1.5mである。深さ１m程度からは、東西・南北とも径1.1m程度のほぼ円形となっている。掘り込み面から底面までの深さは7.15mである。底面には、特別な施設は造られていない。出土遺物は、陶器・瓦・木製品などが少量出土しているだけである。陶器は美濃伊賀の水差の口縁部破片で、江戸時代初頭に遡るものである（図78－１）。

図15　二の丸第17地点Ⅰ期遺構配置図
Fig.15　Distribution of features belonging to Edo Period (Phase Ib) at NM17





1　2.5Y4/2灰黒色　砂質シルト　粘性弱・しまり強　明黄褐色粘土質シルトを全体の30%程度含んでおり黒褐色粘土質シルトを部分的に少量含む　φ5cm程度の礫とφ2cm程度の灰色粒状・炭化物を全体に少量含む
2　5Y4/1灰色　粘土質シルト　粘性やや強・しまりやや強　緑灰色粘土質シルトを全体に含み黄褐色砂質シルトをわずかに含む　全体にφ1～5cm程度の礫を含む　白色岩片・黒色炭化物を少量含む
3　5Y4/1灰色　砂質シルト　粘性強・しまり弱　緑灰色粘土質シルトを全体の30%程度含む　全体に炭化物・φ1～5cm程度の礫を含む
4　5Y4/1灰色　砂質シルト　粘性強・しまり弱　緑灰色粘土質シルトが縞状に互層堆積している　φ1～5cm程度の礫を全体に含む　炭化物を微量含む
5　10GS/1緑灰色　粘土質シルト　粘性強・しまり弱　緑灰色粘土質シルトと灰色砂質シルト・暗オリーブ灰色砂質シルトが細かく互層堆積する

図16　二の丸第17地点Ⅰ期の遺構
Fig.16　Features belonging to Edo period (phase Ⅰ) at NM17

(2) Ⅱ期の遺構（図17～23、図版10～16）

中区・南区の東半部には、溝に柱を立てた塀（6・7号塀）や掘立柱列（25号柱列）が南北に延びる。これらの塀・柱列の東側には、一部切り合い関係を持ちつつ、礎石建物と掘立柱建物が、それぞれ1棟確認される（11・12号建物）。これらの建物の南側にあたる、調査区南端付近には、東西方向の溝が延びる（42号溝）。西半部には、南北方向と東西方向の石組溝があり、L字形につながるものと考えられる（46・47号溝）。これ以外にも、素掘りの溝が切り合い関係を持ちつつ展開する（48・49・50号溝）。他には、石敷遺構や、土坑状のピットや小規模なピットが少数存在する。B・C－11区で検出したピット495（図版12－7）とピット511は、やや規模の大きな土坑状のピットで、52号溝との切り合い関係から当期に含めたが、Ⅲb1期に下る可能性も残る。

中区・南区の遺構は、切り合い関係を有するものが多く、これらの遺構が全て同時に存在したわけではない。新旧の何段階かにわたって変遷していったものと考えられる。しかし、直接の切り合い関係があるもの以外については、出土遺物が全般に僅少なことも あって、変遷段階を設定することはできなかった。

一方北区では、46号溝が一部かかる他、確実に当期に帰属するものは、便槽遺構が存在するだけである。

【便槽遺構】（図18、図版16）

調査区北端のC－2・3区で検出した。ほぼ重なる位置に、溝状の攪乱が延びており、攪乱された際にはずされた側板が、内部に放置されたような形で残されていた。これらの部分を攪乱として除去した後、板材で箱状に組んだ造構であることが判明した。そのため、最下層の堆積土から精査をした形となっている。推定通り便槽であるならば、便所の建物が上に建っていたと考えられるが、この遺構に伴う柱穴などは確認できなかった。

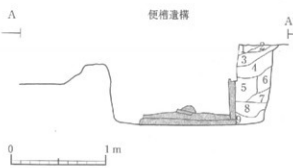
北側が調査区外に延びるため、長辺の大きさは不明である。上幅の東西170～200cm、深さ90cmの掘り方の中に、板材で組まれた便槽を設置している。掘り方の壁は垂直に近く掘られている。便槽の長辺で測ると、方向はN－22°－Wである。板で組まれた便槽の東西の大きさは、外寸で102cm、内寸で91cmである。底板は長軸に直交する方向に、厚さ5cm前後の板を並べている。底板の幅は12.7～32.8cmと変異があるが、多くは24～28cmである。側板は、底板の上に乗る形で据えられ、底側から釘で側板に打ち付けられている。側板は、本来上下2段の板で構成されていたと考えられるが、元の位置を保っていたのは、南側小口下段と、東側下段のみである。東側の側板は、南北で2材を組み合わせている。長辺の側板と小口板は、ほぞを切って組み合わせた上で、釘で止めている。長辺の側板同士をつなぐ部分も同様である。小口板は、長さ94.7cm、高さ43cm、厚さ5cmを測る。長辺の側板は、長さ182cm前後、高さ44cm前後、厚さ5cm前後である。

長辺の大きさを推定する場合、長辺の側板が2枚なのか、3枚で構成されるかによって変わる。攪乱時にはずされていた側板を観察すると、長さはいずれも182cm前後であるが、両端のほぞの切り方にいくつかの形がある。このことから、2枚と考えるより、3枚で構成されていた可能性が高い。組み合わさる部分の切り欠かれている長さは約9cmなので、全体の長さは528cmと復元できる。このように3枚と推定すると、長辺がかなり長くなってしまうという問題がある。一方、2枚で構成されると考えると、長辺の長さは355cmと復元できる。下段の高さは、長辺・小口とも44cm前後である。上段も同じであれば88cmとなるが、40cm前後の板材もあるため、これが組み合うとするならば84cmとなる。いずれの場合でも、側板の上辺は、掘り込み面とほぼ同じ高さになる。

便槽の内部には、短軸方向に角材を置いた上に、径14～20cm程の丸太をほぼ半分にしたものが、長軸方向に沿ってほぼ中央に置かれている。金隠し板が2点出土しており（図124）、この便槽に伴って使われたものと思われる。便槽内部の堆積層は、チョコレート色のペースト状のもので、排泄物に由来するものと考えられる。詳細な同定は行っていないが、ウリ科と思われる種子が、大量に含まれていた。

この堆積土中から、完形の磁器の鉢と紅皿が出土している（図71－4・図77－161）。図71－5の磁器皿も、同じ堆積土中から出土しており、攪乱の際に投げ込まれた板材の下でつぶれていたが、完形に復元できた。もとは完形のまま埋もれていたものと考えられる。排泄物の堆積の上に落とした場合には、割れなかったのであろう。

図17　二の丸第17地点Ⅱ期遺構配置図
Fig.17　Distribution of features belonging to Edo Period (Phase Ⅱ) at NM17



1 5Y4/2灰オリーブ色　シルト　粘性強・しまり強　φ5cm前後の白色岩片を比較的多く含む　炭化物を少量含む
2 5Y6/6オリーブ色　砂質シルト　粘性中・しまり強　φ1～3mmの白色風化岩粒・φ1～5mmの炭化物をやや多く含む
3 7.5GY5/1緑灰色　粘土質シルト　粘性強・しまり強　炭化物を非常に多く含む
4 10Y4/2オリーブ灰色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　オリーブ色砂質シルト1～5cmオリーブ色粘土・φ1cm程度の凝灰岩粒をまばらに含む
5 10YR6/8明色　粘土　粘性強・しまり中　砂利が混じる　オリーブ灰色粘土をブロック状に含む　φ3mm程度の凝灰岩粒をわずかに含む
6 5Y5/3灰オリーブ色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　小礫を多く含む　緑灰色粘土をブロック状に含む
7 10GY5/1緑灰色　粘土　粘性強・しまり強　凝灰岩粒・植物遺存体をわずかに含む
8 5GY5/1オリーブ灰色　粘土　粘性強・しまり中　φ1cm程度の礫・砂利と暗オリーブ灰色粘土をブロック状に含む
9 7.5GY6/1暗緑灰色　粘土　粘性強・しまり強　φ1cm程度の凝灰岩粒・小礫を斑状に含む

図18　二の丸第17地点Ⅱ期の遺構（1）
Fig.18　Features belonging to Edo period (phase Ⅱ) at NM17(1)

また、紐に通した古銭が、2群に分かれて出土した。A群は9点、B群は39点である（図129～131）。ほぼ完形の櫛も出土している（図119－164）。

【6号塀】（図19・21、図版13・14）

E－8区からF－15区にかけて延びる、溝を掘った中に柱を立てた塀と考えられるものである。南北とも攪乱によって破壊されており、本来はさらに続くものである。ただし、北区では6号塀の延長と考えられる遺構は検出されておらず、7列か8列の途中で終わるか、折れ曲がるものと考えられる。方向は、N－25°－Wである。2号石敷、ピット410・411・412に切られている。

柱を据えるための掘り方となる溝は、上幅90～115cm、下幅35～55cm、深さ95cm前後で、溝の壁は垂直に近く掘られている。柱根が、柱5と柱6で遺存していた。いずれも丸材で、径21～23cmである。柱の基底に置いたと考えられる礎板石を含めると、10ヶ所で柱の位置を推定できた。また、調査区南端の大学造成時に削塀された部分に1ヶ所、かろうじて礎板石が残存していた。これらの柱の位置関係を検討すると、柱間寸法は4尺6寸と復元できる。柱は径20cm程度の丸材で、柱5は底面が平坦に加工されず尖った状態となっていた。

【7号塀】（図19・20、図版13・14）

F－8区からG－15区にかけて延びる、溝を掘った中に柱を立てた塀と考えられるものである。方向はN－25°－Wで、6号塀の東側に平行して造られており、6号塀との間隔は8尺4寸である。6号塀と同様に、南北とも攪乱によって破壊されており、本来はさらに続くが、北区では検出されていない。7列か8列の途中で終わるか、折れ曲がるものと考えられる。12号建物・ピット517に切られている。

掘り方となる溝は、上幅55～90cm、下幅30～45cm、深さ100～120cmで、溝の壁は垂直に近い。礎板石と柱痕跡が各1ヶ所で確認できた。柱間寸法を6号塀と同じ4尺6寸と仮定すると、この両者の位置関係とうまく整合するため、4尺6寸と推定した。

【25号柱列】（図19・20、図版14）

F－8区からG－15区にかけて検出した、南北方向に延びる掘立柱列である。途中攪乱で壊されている部分があるが、7間分の長さを検出している。柱間寸法は9尺2寸で、西に平行する6・7号塀の、ちょうど2倍となっている。方向はN－25°－Wで、6・7号塀と平行する。6号塀との間隔は12尺、7号塀との間隔は3尺6寸である。6・7号塀と同様に、南北ともさらに続くものと考えられるが、北区では検出されていない。

北側の柱5～7については、4層下部上面を精査した段階では検出することができず、地山上面まで下げてから検出することができた。そのため図に記載した掘り方の形状は、本来の形状より小さくなっている。柱穴形状は、柱列の方向に直交する東西方向に長い隅丸長方形を呈する。遺存状況の比較的良い柱2では、掘り方上面での規模は170cm×100cmである。柱穴の深さはいずれも90～100cmと深い。柱痕跡を確認できたものはない。柱穴の底面は、素掘りのままとなっている。

【11号建物】（図19・20、図版14）

G・H－11区で、東西2間、南北1間分を検出した。さらに西と南に延びる可能性もあるが、攪乱のため確認できない。柱1が、25号柱列の柱4を切っており、当建物が新しい。柱間寸法は6尺3寸と思われる。方向はN－25°－Wである。柱穴の形状は変異が大きいが、隅丸長方形に近い形が多い。深さは40～60cmで、小礫が堆積土中に多量に含まれており、礎石の根固め石の可能性もあるが、柱穴が深いため、掘立柱建物の可能性が高い。

【12号建物】（図19・20、図版14）

F～H－13・14区で、東西1間、南北1間分を検出した。調査時には7号塀が新しいものとして掘り進めたが、柱1と柱2の礎板石が、7号塀の掘り方の中に大きく突出する形になることから、この12号建物が7号塀を切る、新しいものと考えた。位置的に25号柱列と重なるが、柱穴が接する程度で、確実な切り合い関係はとらえられて

いない。方向はN－25°－Wで、柱間寸法は南北が6尺3寸を1間とした1間分、東西はその1間半の寸法である。柱穴の平面形は、台形に近い形を呈する。ただし、東側の柱3と柱4は、4層下部上面を精査した段階では検出することができず、地山上面まで下げてから検出できた。そのため図に記載した掘り方の形状は、本来より小さくなっている。深さは60cm前後で、全ての柱穴に、扁平な川原石を用いた礎板石が存在する。柱根は残っていなかったが、柱3では、底面の石の上面に、一辺15cm程の角柱の痕跡が残っていた。

【2号石敷遺構】（図19・21、図版15）

D・E－10・11区で検出された。7号塀と46号溝を切っている。これらと、ほぼ平行する方向で造られている。南北290cm、東西220cm、深さ50cmの掘り方の底面に、20cm前後の扁平な川原石を並べている。側壁は、底面の石よりやや大振りな石を使っており、石の比較的平坦な面を、内側にそろえるようにしている。側壁は残りの良い部分でも2段しか残されていない。石組の内法は、南北200cm、東西120cmである。底面の石の一部と、側壁の上部の石は取り去られている部分がある。堆積土の状況から、石を取り去ったあと、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

【24号土坑】（図20、図版12）

D・E－13区で検出した。46号溝より新しい。同じ平面図に記載すると、46号溝の詳細が判らなくなるため、図20に別に掲載した。そのため、図17の遺構配置図には入っていない。攪乱や上層遺構で破壊されており、全体形状ははっきりとしないが、不整形な形状を呈するものと思われる。底面も凹凸があり、深さは最も深いところで30cm程である。

【42号溝】（図19、図版15）

G・H－14・15区で検出した、東西方向の溝である。東側は調査区外へ続くほか、大学造成時の削堆によって、かなり破壊されており3.4m分を検出しただけである。西側への延び方や、西側に展開する25号柱列や6・7号塀との新旧関係などは不明である。調査した範囲では、石組は残されていなかったが、調査区東壁の断面（図14）では、北側の側石と思われるものが残されており、石組溝であったと考えられる。方向は、石組が取り去られているため確実ではないが、掘り方のラインでは、N－26.5°－Wとなる。掘り方の深さは30cm程である。

石組を取り去った後、人為的に埋める際に瓦を廃棄したものと思われ、埋上には多量の瓦が含まれている。瓦以外の遺物は、ごくわずかである。

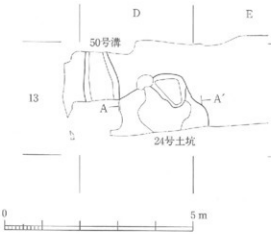
【46号溝】（図18・19・21、図版10・11）

C・D－6区からD・E－15にかけて南北に延びる石組溝で、途中攪乱で破壊されているが、28.6m以上続く。方向はN－25°－Wで、東側に存在する6・7号塀、25号柱列と平行している。検出した範囲の北端での底面レベルは**62.05m**、南端の底面レベルは62.20mで、南から北に流れていた可能性が高い。

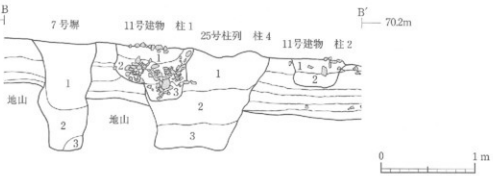
北端はⅢｂ2期の32号溝に壊されている。北区では4層上部の整地層が分布しないため、Ⅲｂ1期とした69号溝あるいは70号溝と接続し、これらがⅡ期に遡る可能性も残るため、その点を検討しておく必要がある。ところが32号溝と攪乱のため、46号溝と69・70号溝との直接的な関係は不明である。しかし、Ⅲｂ2期の32号溝が、69号溝とほぼ同じ場所で造り替えられていること、69号溝の底面レベルが46号溝よりかなり深いことから、46号溝が69号溝に接続する可能性は低いであろう。一方70号溝は、底面レベルが46号溝に近いため、両者が接続する可能性が残る。ただ、70号溝もほぼ同じところで69号溝に造り替えられている。この点からは、70号溝から69号溝、さらに32号溝へと一連の造り替えとも考えられる。以上の点から、70号溝がⅡ期に遡り、46号溝と接続する可能性は残るものの、確実ではないため、70号溝は69号溝と同じⅢｂ1期に下るものとしておく。

46号溝の南端は攪乱で破壊されているが、溝の規模が類似することから、47号溝につながる可能性がある。ただし、47号溝の方が底面レベルが若干低く、この点で問題が残る。また両者が接続する場合、折れ曲がって47号溝に至るのか、46号溝がさらに南に延び、47号溝とT字形に接続するのかは、破壊のため不明である。

図19　二の丸第17地点Ⅱ類の遺構（2）
Fig.19　Features belonging to Edo period (phase Ⅱ) at NM17(2)



1　5Y5/2灰オリーブ色　粘土質シルト　粘性中・しまりや　灰オリーブ色粘土質シルトと明黄褐色粘土質シルトによって構成される　黒色シルトをわずかに含む
2　7.5Y5/1灰色　砂質シルト　粘性弱・しまり強　φ1cm未満の礫・粗砂を多く含む
3　5Y6/4オリーブ黄色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強　オリーブ黄色粘土質シルトと灰色粘土質シルトによって構成される
4　5Y5/2灰オリーブ色　粘土質シルト　粘性やや強・しまりやや強　φ3cm程度の礫・瓦を含む

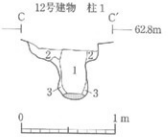


7号塀
1　7.5YR5/3にぶい褐色　シルト　粘性中・しまり中　にぶい黄橙色土シルトをブロック状に含む　φ1～2mmの白色小礫を多く含む
2　10YR5/1褐灰色　シルト　粘性強・しまり弱　3の腐植色粘土を多く含む　φ5～10mmの円礫を含む
3　10YR5/1褐灰色　粘土　粘性強・しまり中　礫や瓦の上層の流入はない

11号建物　柱1
1　2.5Y4/3オリーブ褐色　砂　粘性なし・しまりきわめて弱　黄褐色粘土ブロックをわずかに含む　上部に円礫が根石状に詰まる
2　2.5Y4/4オリーブ褐色　砂　粘性なし・しまりきわめて弱　円礫がぎっしりと詰まる
3　2.5Y4/4オリーブ褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり弱　暗褐色土・にぶい黄色土をまばらに含む　円礫を多く含む

25号柱列　柱4
1　10YR6/6明黄褐色　シルト　粘性中・しまりや　にぶい黄橙色粘土をブロック状に含む　円礫をまばらに含む　黄橙色の砂をわずかに含む
2　2.5Y6/4にぶい黄色　シルト　粘性中・しまりや　黄灰色砂質シルトを多く含む　灰オリーブ色粘土ブロックをまばらに含む
3　10YR7/8黄橙色　砂質シルト　粘性弱・しまりや　灰黄褐色粘土ブロックを多く含む　灰オリーブ色粘土ブロックをまばらに含む

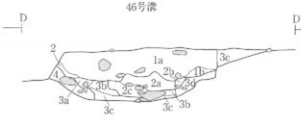
11号建物　柱2
1　10YR5/6黄褐色　砂質シルト粘性弱・しまり弱　にぶい黄橙色の粘土をブロック状に含む　上部に円礫が根石状に詰まる
2　2.5Y6/4にぶい黄色　シルト　粘性弱・しまり弱　黄灰色砂質シルトのブロックを含む　円礫を含む



12号建物　柱1
1　5GY5/1オリーブ灰色　シルト　粘性弱・しまり弱　φ3cm以下の円礫を比較的多く含む
2　2.5GY5/1オリーブ灰色　シルト　粘性弱・しまりや　1.5うやや硬っぽい
3　10G5/1緑灰色　粘土　粘性弱・しまりや　φ5mm以下の円礫、角礫を少量含む

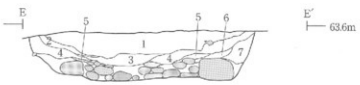
図20　二の丸第17地点Ⅱ期の遺構（3）
Fig.20　Features belonging to Edo period (phase Ⅱ) at NM17(3)

46号溝



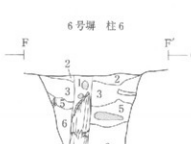
1a　2.5Y7/2灰黄色　シルト質粘土　粘性やや強・しまり強　暗赤褐色の鉄分を多く含む　φ10cmを越す礫から小岩片まで多様な石材の礫を多く含む
1b　2.5Y6/1黄灰色　砂質シルト　粘性中・しまり中　黄褐色の鉄分をまばらに含む
2a　2.5Y6/4にぶい黄色　砂質シルト　粘性中・しまり強　灰色のシルトブロックをごくまばらに含む　φ10cm程から小さいものまで多様の岩片や礫を含む
2b　2.5Y5/1黄灰色　砂質シルト　粘性やや強・しまり中　黄褐色の鉄分をまばらに含む
2c　2.5Y5/6黄褐色　シルト　粘性中・しまり強　かなり固くしまる　炭化物片・石色岩片をごく希に含む
3a　10Y3/6-2/6黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり中　明黄褐色の鉄分をまばらに含む
3b　5Y5/1灰色　砂質シルト　粘性やや弱・しまり弱　2cに類似したシルトブロックを多量に含む
3c　5Y4/1灰色　シルト質砂　粘性中・しまり強　φ5cm程の小礫を者に含む　混片巻の流入物が少ない
3d　2.5Y6/1黄灰色　シルト　粘性弱・しまり強　φ2~5mmの緑色や白色の岩片をまばらに含む
3e　2.5Y7/2淡黄色　砂質シルト　粘性やや弱・しまり強　φ5mm程度の白色岩片をまばらに含む
4　10Y3/7/2にぶい黄橙色　シルト質砂　粘性弱・しまり弱　φ2cm以下の白色岩片を多く含む

2号石敷



1　10YR5/2灰黄褐色　シルト　粘性なし・しまり中　にぶい黄橙色粘土のブロック・にぎりこぶし大以下の礫を比較的多く含む　上部に多く炉がある　φ1cm以下の白色岩片を多く含む
2　基本的には2と同じ　上部に10YR4/1褐灰色シルトがある　1に比べ全体的にやや硬い
3　N3/0暗灰色　粘土　粘性中・しまり中　4に似た土がブロック状にある
4　10YR5/3にぶい黄褐色　1に比べやや黄色味が強い　その他は1に同じ
5　3と同じ
6　5BG5/1青灰色　シルト　粘性ごく弱・しまり中
7　10YR5/3にぶい黄褐色　粘土

6号堀　柱6



1　5Y5/1灰色　シルト　粘性中・しまり強　オリーブ灰色粘土質シルトをブロック状に含む
2　5Y6/2暗オリーブ色　砂質シルト　粘性弱・しまり強　淡黄色粘土質シルト・明灰黄色シルト・オリーブ色粘土質シルトをまばらに含む　φ1cm程度の礫を全体に小量含む　白色岩片を全体的に含む　炭化物をわずかに含む
3　5Y5/4オリーブ色　砂質シルト　粘性やや強・しまりやや強　緑灰色粘土質シルトをブロック状に全体的にまばらに含む　全体に粗砂を含む　白色岩片を少量含む
4　5Y6/3オリーブ黄色　粘土質シルト　粘性強・しまりやや強　粗砂を多く含む　オリーブ黄色粘土質シルトを主体として暗オリーブ灰色粘土質シルトをブロック状に含む
5　5G6/1緑灰色　粘土質シルト　粘性強・しまり強　灰色シルトをわずかに含む　φ2cm程度の礫をわずかに含む
6　10GY6/1緑灰色　砂質シルト　粘性弱・しまり弱　φ5cm未満の礫を含む　層全体に粗砂を多く含む

図21　二の丸第17地点Ⅱ期の遺構（4）
Fig.21　Features belonging to Edo period (phase Ⅱ) at NM17(4)

掘り方の上幅は215～265cm、深さは60cm前後で、断面形状は船底状を呈する。側石はほとんど取り去られており、裏込めの礫だけが残っている部分が、大部分を占める。中区から南の東側は、裏込め石もほとんど残っていない部分が多い。両側の側石が残されているのはC・D－6区とD－11・12区だけで、側石の内法幅は50cm程である。D－11・12区の西側の側石が2段残っている以外は、1段のみ残っているにすぎない。側石は自然石を使用しており、加工はされていない。石積みは、平坦な面を内側にそろえる傾向が見られるが、長辺の向きなどには、明確な規則性は認め難い。埋土の状況から、石が抜き取られた後、人為的に埋められたものと考えられる。

瓦・木製品が比較的多く出土している以外は、陶磁器・土器類が若干出土しているだけである。陶磁器類である程度特徴が判るものとしては、磁器の碗と瓶類の2点だけである（図71－1・2）。木製品では、箸状木製品が比較的多い（図120－57～59）。

【47号溝】（図22・23、図版10・11）

B・C－16区で検出した石組溝で、5.3m分を検出した。西側は調査区外へ延び、東側は攪乱により破壊されている。49号溝・ピット444を切っている。底面レベルは62.0m前後で、検出した範囲が短く、明確なレベル差が認められなかった。方向は、N－25°－Wである。掘り方は上幅170～180cm、深さ90cm程で、壁はほぼ垂直に掘られている。南北両側とも、側石は2～3段残されているが、上部は取り去れたものと考えられる。石組の内側の幅は45～50cmで、側石は、自然石を用い加工はなされない。ほぼ垂直に積み上げている。長辺を溝と平行にしているものが多いが、全てにこのような規則性が見られる訳ではない。背後には、ほぼ掘り方一杯まで、裏込石が入れられている。埋土の状況から、上部の石組を取り去った後、人為的に埋められたものと考えられる。

遺物はごくわずかしか出土していない。ある程度特徴が判明するものは、磁器小瓶（図71－3）だけである。

【48号溝】（図22・23、図版10・12）

B－15区からD－15区にかけて検出した素掘りの溝である。西側は調査区外へ延び、東側は後世の遺構によって切られており、8m分を検出した。49・50号溝にも切られており、これらの溝の中では最も古い。わずかに蛇行しているが、方向はおおむねN－24°－Wである。上幅30～40cm、下幅10～20cm、深さは25～30cmで、底面レベルは東側が低い。

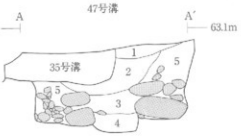
【49号溝】（図22・23、図版10・12）

調査区西端のB－12区からB－17区にかけて延びる。検出した範囲の長さは15.2mで、南は調査区外へ延びる。B－11のピット524としたものも、この49号溝の一部の可能性がある。方向は、N－24°－Wである。47号溝に切られ、48号溝を切っている。上幅85～110cm、下幅45～65cmで、断面形状は深い逆台形を呈する。深さは、北側が15～20cm、南側が60cm程であるのに対し、B－14～16区の部分が深く100cm前後である。溝とすれば、南北どちらにも水が抜けて行かず、堰の塞り方である可能性も残るが、柱痕跡などは検出できていない。

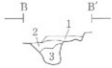
【50号溝】（図22・23、図版10・12）

D－13区からD－15区にかけて、46号溝の東側で検出された素掘りの溝である。ゆるやかに蛇行している。48号溝を切っている。上幅は55～105cmと一定せず、深さも5～10cm程と浅い。底面レベルは、南端が若干低いため、北から南に流れていたものと考えられる。人為的に造られた遺構であるか、疑問が残る。

図22　二の丸第17地点Ⅱ期の遺構（5）
Fig.22　Features belonging to Edo period (phase Ⅱ) at NM17(5)

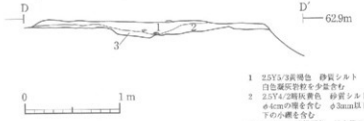


1　10GY5/1緑灰色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　φ1mm以下の白色凝灰岩粒・φ5cm程度の塊を若干含む
2　5G4/1暗緑灰色　シルト　粘性弱・しまり弱　φ1mm程度の凝灰岩・炭化物を若干含む
3　10G5/1緑灰色　粘土質シルト　粘性中・しまり弱　φ1mm程度の白色凝灰岩粒・炭化物を若干含む　φ5～6cmの大小塊を多く含む
4　10G2/1緑黒色　シルト質砂　粘性きわめて弱・しまり強　緑灰色シルトが層状に混じる　φ5cm程度の塊・φ1mm程度の白色凝灰岩粒を少量含む
5　2.5Y4/1黄灰色　粘土　粘性きわめて強・しまり中　大小の赤褐色の礫を含む



1　5Y6/2灰オリーブ色　シルト　粘性中・しまり強　φ2～4cm程度の礫をわずかに含む　白色汚土を全体に多く含む　炭化物を微量含む
2　5Y7/3淡黄色　粘土質シルト　粘性中・しまり強　炭化物をほんの微量含む
3　10Y6/2オリーブ灰色　粘土質シルト　粘性強・しまり強　部分的に粘砂が見える

1　5Y5/4オリーブ色　粘質シルト　粘性中・しまり中　暗オリーブ灰色粘土・オリーブ色粘土・褐鉄色粘土をブロック状に含む　φ5mm程度の小塊をわずかに含む
2　2.5GY5/1オリーブ灰色　粘土　粘性強・しまり強　石下の砂と塊を含む
3　5Y5/4オリーブ色　粘土　粘性強・しまり強　粘分を多く含む　断面面に褐色が強い　暗緑灰色粘土塊を含む
4　2.5GY5/1オリーブ灰色　粘土　粘性強・しまり強　2に比べ褐色の粒が少なく均質な状態　他層ほどよりも褐色度が低い
5　2.5GY6/1オリーブ灰色　砂混じり粘土　粘性強・しまり弱　水分が多く粒子が細いためしまりが悪い　φ5cm程度の礫をわずかに含む



1　2.5Y5/3黄褐色　砂質シルト　粘性中・しまり強　黄褐色砂質シルトをまだらに含む　白色凝灰岩粒を少量含む
2　2.5Y4/2暗灰黄色　砂質シルト　粘性中・しまり中　灰褐色砂質シルトを少量含む　φ4cmの塊を含む　φ3mm以下の白色凝灰岩粒を含む　炭化物を少量含む　φ1cm以下の小礫を含む
3　7.5GY5/1緑灰色　粘土質シルト　粘性強・しまり弱　黄褐色砂質シルト・白色凝灰岩粒・炭化物を少量含む

図23　二の丸第17地点Ⅱ期の遺構（6）
Fig.23　Features belonging to Edo period (phase Ⅱ) at NM17(6)

(3) Ⅲ a 期の遺構（図24～28、図版17・18）

中区から南区に、平行する溝が並んで造られる。南区では、東西方向に、幅の広い溝が平行して並んでおり、埋土はいずれも均質な黒色土である。中区では、南北方向に延び、黒色の類似した埋土からなる、小規模な溝が平行して走っている。丸瓦を伏せた暗渠状の溝が、これらの溝の間に平行して延びている。北区では、中区から延びる丸瓦を伏せた溝の一部がかかる以外は、確実に当期に帰属させられる遺構は存在しない。

【55号～64・67号溝】（図25・26、図版17）

中区の８列から９列、一部10列にかけて、南北方向の溝が並んでいる。Ⅲ b 期に多数の遺構が造られる区域であり、これらの後世の遺構に破壊され、遺存状況は極めて悪い。埋土の一部が、痕跡的に確認された程度の溝もある（55号・59号溝）。方向を厳密に計測することは難しいが、おおむね南区の溝群と直交するＮ－24～25°－Ｗ程度である。幅は、50cmから100cmと、変異が大きい。58号溝だけは、中央が深く、その両側に狭く浅い溝が伴い、全体の幅は140cm程度である。遺存状況にも左右されるが、深さも15～30cmと変異が大きい。埋土は、いずれにおいても、黒色か黒色に近い、比較的均質なものである。

遺物は概して少なく、陶磁器類は細片が多い。ある程度特徴が判るものは、磁器小瓶（図71－13）だけである。

【51・54・66号溝】（図25・26、図版17）

中区の南北方向に平行する溝の間で、溝の中に丸瓦を伏せて暗渠としたものが、３条検出された。３条の溝の間隔は一定ではない。51号溝と66号溝は、延長と考えられる同様の溝が、北区に一部かかっている。この北区の部分を含めると、66号溝は10.7m以上延びていることとなる。いずれの溝も、両端は攪乱や後世の遺構によって破壊されている。方向は、51号溝と54号溝ではＮ－26°－Ｗ。66号溝はＮ－24°－Ｗであるが、北側ではさらに西に振れる。上幅20～40cmで、深さ15～20cm程度の掘り方に、丸瓦の玉縁を南側にして、伏せて並べている。

【34～41号溝】（図27・28、図版18）

13列以南で、東西方向の類似した溝が平行して検出された。Ｂ・Ｃ列に並ぶ34～38号溝と、Ｄ～Ｇ列に並ぶ39～41号溝の２グループに分けられる。両グループの間は、幅120～130cmの空閑地となっており、溝はつながらない。全体の平均的な方向は、Ｎ－24°－Ｗである。いずれの溝も、上幅120～135cm、下幅105～110cm、深さ20～40cmで、断面形状は逆台形を呈する。底面には、一部に小規模な凹凸が認められるが、明確なピットのような施設は無い。長さが判明する39号溝と40号溝では、10.3mである。埋土は、底面付近に地山あるいは４層下部起源の土が薄く入るものがある以外は、いずれも極めて均質な黒色土で埋められている。

Ｂ・Ｃ列に並ぶ34～38号溝は、西側が調査区外へ続いているが、第１地点の調査において、これらの溝群の延長と考えられる遺構が検出されている。図57の１号建物のところで示しているが、１号建物の続きと考えられる溝１に切られるピット１とされたものが、埋土の状況が類似し、位置関係から34号溝の延長と考えられる。

遺物は概して少ない。陶磁器類も小片が多い。図71－12は、41号溝出土の中国産の磁器皿で、戦国期まで遡るものである。図78－５は、唐津産の陶器向付で、江戸時代初頭まで遡るものである。他には、磁器の図71－６～12、陶器の図78－６、瓦質土器の図93－ＣＧ２が、かろうじて特徴が判明するものである。これらはいずれも、17世紀後葉から18世紀前半にかけての時期のものと思われる。これらから当期の遺構は、どんなに遡っても1700年頃を遡らせ得ない。

【45号溝】（図27、図版18）

Ｂ－15区からＤ－15区にかけて検出した素掘りの溝で、西側は調査区外へ延びる。東側は上層遺構で破壊されているが、さらに東側には延びていないため、ほぼこの付近で終わるものと推定される。6.7m分を検出しており、方向はＮ－27°－Ｗである。37号溝と40号溝の南岸に沿う位置にあり、両溝に切られている。上幅30～45cm、下幅15～35cm、深さは東側はごく浅く、西端で15cm程度である。

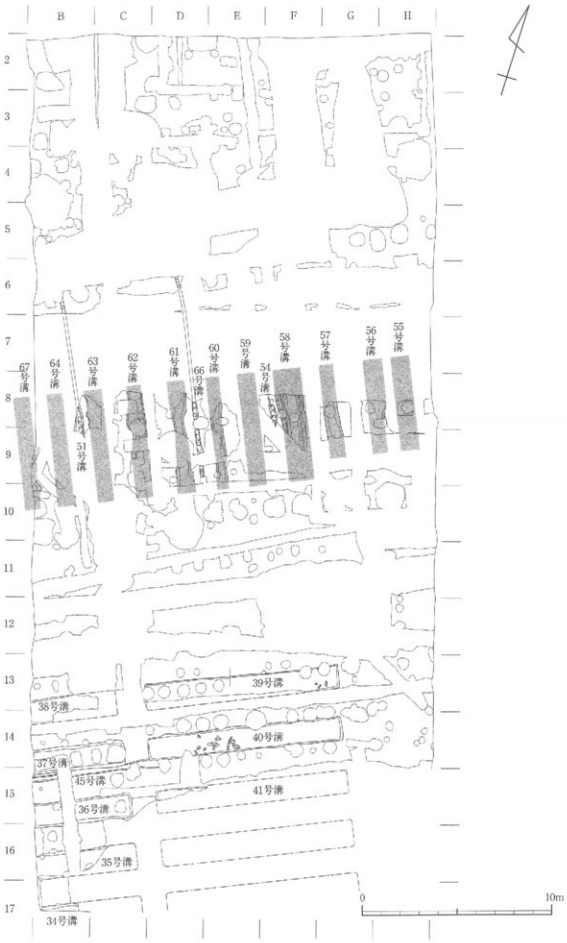


図24　二の丸第17地点Ⅲａ期遺構配置図
Fig.24　Distribution of features belonging to Edo Period (Phase Ⅲa) at NM17

図25　二の丸第17地点Ⅲａ期の遺構（１）
Fig.25　Features belonging to Edo period (phase Ⅲa) at NM17(1)

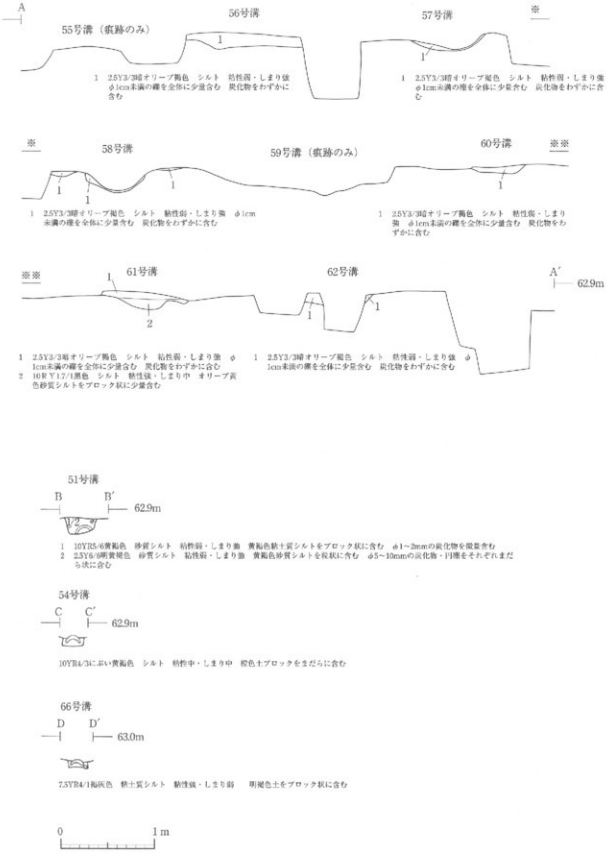


図26　この丸第17地点Ⅲａ期の遺構（2）
Fig.26　Features belonging to Edo period (phase Ⅲa) at NM17(2)

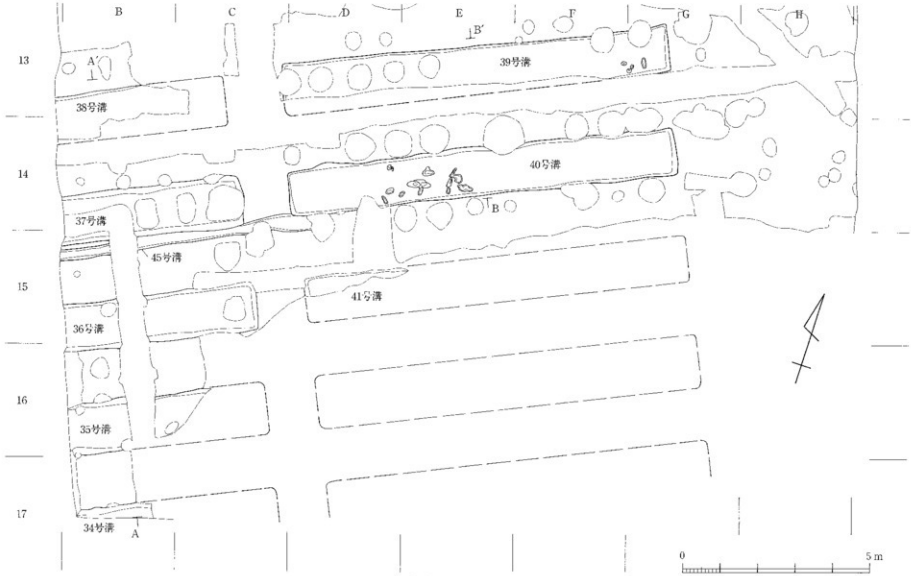
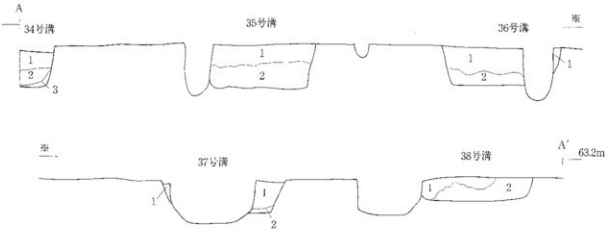


図27　二の丸第17地点Ⅲa期の遺構（3）
Fig.27　Features belonging to Edo period (phase Ⅲa) at NM17(3)



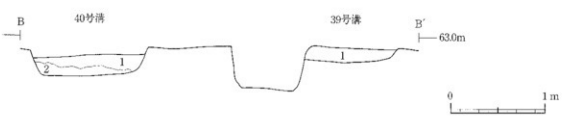
34号溝
1　2.5Y2/1黒色　砂質シルト　粘性中・しまり強　赤褐色の鉄分を全体に多量含む
2　10BG5/1青灰色　粘土質シルト　粘性強・しまり強　オリーブ灰色粘土質シルトをマーブル状に含む　全体に粗砂・φ2cm未満の礫を含む
3　2.5GY2/1黒色　砂質シルト　粘性中・しまり強

35号溝
1　38号溝の1にほぼ同じ
2　7.5Y2/1黒色　砂質シルト　粘性強・しまり弱　φ1cm程度の礫・炭化物を微量含む

36号溝
1　5Y2/1黒色　砂質シルト　粘性高・しまり強　φ5cm未満の礫をわずかに含む　炭化物を全体に微量含む
2　5G5/1緑灰色　シルト質粘土　粘性強・しまり弱　層下部にφ5cmほどの小礫を含む　部分的に黄褐色の酸化した鉄分を含む

37号溝
1　5Y2/1黒色　砂質シルト　粘性やや強・しまり強　φ3cm程度の礫をわずかに含む　炭化物を微量含む
2　5G5/1緑灰色　シルト質粘土　粘性強・しまりやや弱　φ5～10mmの白色凝灰質粒をごく まばらに含む　黄褐色の酸化した鉄分をまばらに含む

38号溝
1　5Y3/2オリーブ黒色　砂質シルト　粘性弱・しまり強　赤褐色の鉄分と思われるものを全体にほぼ均質に含む　炭化物を微量含む
2　5Y2/1黒色　砂質シルト　粘性中・しまり強　鉄分を全体に少量含む　φ2cm程度の礫と炭化物を微量含む



40号溝
1　2.5Y2/1黒色　砂質シルト　粘性中・しまり強　φ5cm以下の小礫をわずかに含む　炭化物を少量含む
2　7.5Y2/1黒色　砂質シルト　粘性強・しまり弱　φ1cm程度の礫をわずかに含む

39号溝
1　5Y2/1黒色　砂質シルト　粘性やや強・しまり強　φ3～5cm程度の礫をまばらに含む　炭化物をわずかに含む

図28　二の丸第17地点Ⅲａ期の遺構（4）
Fig.28　Features belonging to Edo period (phase Ⅲa) at NM17(4)

(4) Ⅲｂ１期の遺構（図29～36、図版19～22）

北区では、鍵の手状に屈折しつつ東西に延びる大規模な石組溝（69号溝）がある。69号溝の南北方向へ流れる部分の東側には、69号溝より古い石組溝（70号溝）が存在する。70号溝の南東側には、３号石敷が存在し、関連する遺構である可能性がある。また３号井戸が、本期より存在した可能性がある。これら以外に北区では、２号土坑と33号土坑が存在する程度である。

中区の中程には、21号柱列が東西に調査区を横切る。この21号柱列の南側には、東よりの部分に22号柱列が、西よりの部分には23号・24号柱列が南北に延びている。21号柱列の北側には、小規模な溝や若干のピットが存在したものと思われるが、これ以外の遺構は少なく、建物などは確認できていない。

【69号溝】（図30・31、図版20・21）

Ｂ－５・６区からＨ－２区まで、途中２回屈折しながらのびる大規模な石組溝である。両側とも、調査区外に延びる。西端のＢ－５・６区の部分は、後世の遺構による破壊が大きいことと、調査時間の関係から未掘のままである。70号溝を切るとともに、次のⅢｂ２期の32号溝に切られる。Ｆ列の南北に延びる部分を中央部、それより西の東西に延びる部分を西部、調査区北端の東西に延びる部分を東部というように、説明の便宜のために呼ぶこととする。底面は素掘りのままで、石敷は施されない。Ｆ－３区に平坦な石が１個底面に存在したが、敷かれたものではない。底面の標高は、中央部と西部の境のコーナー付近が61.68ｍ前後で、最も高い。ここから西側・北側の両方とも低くなっていく。そのため、どちらの方向へ流れていたかを判断することは難しい。底面が水流によって削られ、本来の傾斜が残されていないのであろうか。方向は各部によって異なり、西部はＮ－31°－Ｗ、中央部はＮ－25°－Ｗ、東部は中央部と直交するＮ－25°－Ｗ程度と思われる。

掘り方の幅は220～250cm、深さは90～100cm前後で、壁は垂直に近くなっている。側石は、やや円摩が進んだ自然石を使用しており、加工は施されていない。石の大きさは、東部がやや小振りな傾向がある。側石は、長軸を溝に直交する方向に置くものが多いが、逆のものもあり一定ではない。石の平坦な面を内側にそろえる傾向があり、ほぼ垂直に積み上げている。屈曲するコーナーの部分では、算木状に積み上げている場合もある。掘り方のほぼ一杯まで、裏込め石が入れられる。石組の内法の幅は、60～80cmである。

中央部から西部へ屈曲したコーナーから１ｍ程の南側の側石から、外側へ向けて石列が延びている。さらに、ベルトの付近にも同様の石列が延びる可能性がある。掘り方も、この付近は広くなっている。溝に附属する何らかの施設が取り付いていたものと思われる。しかしこの部分は、ベルトを残しながら調査を進めたため、充分な検討ができなかったこともあり、性格を明らかにすることはできなかった。

瓦や木製品がやや多く出土している以外は、遺物は少ない。17世紀代に遡る磁器も出土している（図71－15）。漆椀も出土している（図117－２）。

【70号溝】（図30・32、図版19）

Ｇ－２区から南に延び、Ｇ－４区で西に折れる大規模な石組溝で、北側・西側ともに69号溝に切られている。南北部分の方向は、Ｎ－22.5°－Ｗで、東西部分も、ほぼこれに直交する。コーナー近くの底面の石敷と、北端近くの石敷の上面の標高を比較すると、北側が10cm程低くなっている。西から流れてきたものが、向きを変え北へ向かうものと考えられる。なおⅡ期の46号溝の項目で述べたが、この70号溝と46号溝が接続し、Ⅱ期に遡る可能性が残る。その場合、この70号溝と一連のものと思われる３号石敷も、同様にⅡ期に遡る可能性が残る。

掘り方は、場所による違いが大きい。北端では150cm程の幅であるが、東西方向の部分は、南側の掘り方がきわめて大きく、幅3.4ｍ程になる。深さは60cm程度である。側石は多くが取り去られており、遺存状況は良くない。ごく少数角礫が使われている以外は、円摩の進んだ自然石を使用しており、加工は施されていない。平坦な面を内側にそろえるようにして積んでいる。石組の内法幅は45～50cmである。取り去られた部分もあるが、底面にも扁平な石を敷いている。南側の掘り方が広い部分以外は、掘り方一杯まで裏込め石が入れられる。

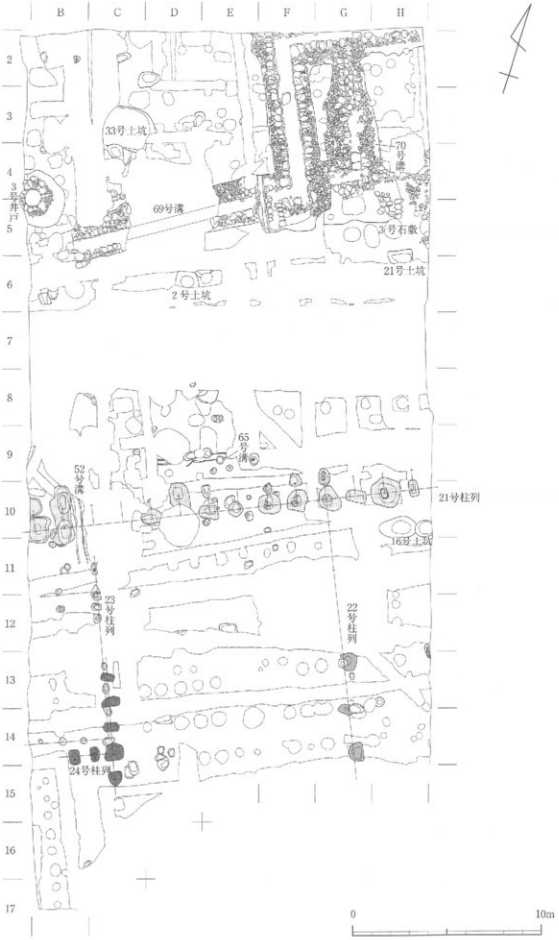
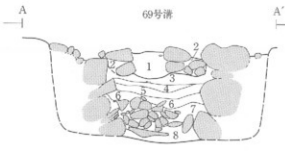


図29　二の丸第17地点Ⅲｂ１期遺構配置図
Fig.29　Distribution of features belonging to Edo Period (Phase Ⅲb1) at NM17

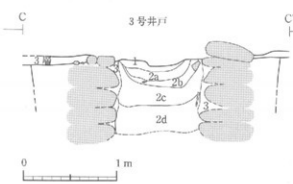
図30　二の丸第17地点Ⅲｂ１期の遺構（1）
Fig.30 Features belonging to Edo period (phase Ⅲb1) at NM17(1)



1　32号溝埋土
2　32号溝埋土

69号溝埋土
3　5YR3/2オリーブ黒色　粘土　粘性強・しまり弱　を主体とし若干の瓦・小円礫を含む
4　2.5GYR4/1暗オリーブ灰色　粘土質シルト　粘性強・しまり弱　若干の瓦・白色粘土粒を含む　黄褐色粒をレンズ状に含む
5　7.5Y3/2オリーブ黒色　砂　粘性なし・しまり弱　黒色粒と白色粒の細砂を含む　礫来整理くでは黄褐色砂をブロック状に含む
6　10Y3/2オリーブ黒色　粘土　粘性強・しまり中　φ1cm程度の円礫を多く含む　若干の植物遺存体が認められる
7　7.5Y4/1灰色　粘土　粘性強・しまり強　φ10～20cm程度の比較的大きな礫を多量に含む
8　5BL7/1青灰色　粘土　粘性強・しまり弱　φ10～20cm程度の礫・一辺40cmの板状の石を含む　植物遺存体が認められる

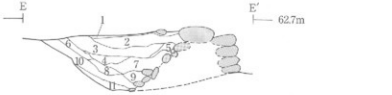
1　5YR3/1黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　黄褐色シルトを斑状に含む　φ2～8cmの礫を多く含む
2　7.5YR3/3暗褐色　シルト　粘性強・しまり弱　黄褐色砂質シルト・φ5～20mmの風化凝灰岩片をまばらに含む
3　2.5Y5/1黄灰色　シルト　粘性強・しまり強　浅黄色粘土のブロックをまばらに含む　オリーブ褐色砂質シルトを斑目状に含む　風化凝灰岩片をごくまばらに含む
4　5YR3/2暗赤褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり強　灰オリーブ色粘土のブロックを多く含む
5　5Y6/3オリーブ黄色　粘土　粘性強・しまり中　混入物なし
6　7.5Y3/1暗灰色　シルト　粘性中・しまりや　オリーブ黄色粘土のブロックを多く含む　緑色凝灰岩片をまばらに含む
7　10YR5/8明黄褐色　砂　粘性弱・しまり弱　灰色シルトをまばらに含む
8　7.5Y4/1灰色　シルト　粘性中・しまり弱　オリーブ黄色粘土のブロック・φ5～10mmの炭化物片をごくまばらに含む



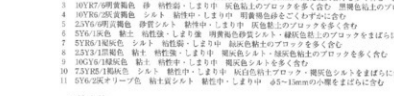
1　5Y4/1暗オリーブ色　シルト　粘性中・しまりやや強　φ3～4cm程度の礫を多く含む
2a　7.5Y3/1オリーブ黒色　砂質シルト　粘性中・しまり強　オリーブ黒色砂質シルトと灰オリーブ色砂質シルトによって構成される　黄褐色の強分と思われるものを全体に含む
2b　10Y3/1オリーブ黒色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　細砂を全体に含む　炭化物を多く含む　φ3cm程度の礫・瓦を含む
2c　10YR6/8明黄褐色　細砂　粘性なし・しまりや　灰色粘土質シルトと互層を成す
2d　7.5Y6/3淡オリーブ色　砂質シルト　粘性やや強・しまりやや強　細砂を少量含む　灰色粘土質シルトと褐灰黄色花崗シルトが斑状って形成する　φ3～6cm程度の礫・白色粒片を全体に多く含む
3　2.5Y5/2暗灰黄色　砂質シルト　粘性中・しまり中

図31　二の丸第17地点Ⅲｂ１期の遺構（2）
Fig.31　Features belonging to Edo period (phase Ⅲb1) at NM17(2)

1　2.5Y4/3オリーブ褐色　シルト質砂　粘性弱・しまり中　にぶい黄色砂質シルトを φ5～10cmのブロック状に含む
2　7.5Y3/1灰色　シルト質砂　粘性弱・しまり強　φ5～10cmの白色凝灰岩粒を少量含む
3　7.5Y3/2黒オリーブ色　シルト質砂　粘性中・しまり中
4　5Y6/3オリーブ黄色　砂質シルト　粘性中・しまり中　鉄分を多く含む
5　7.5Y3/2黒オリーブ色　シルト質砂　粘性中・しまり中



1　5Y6/2灰褐色　シルト　粘性中・しまり中　明黄褐色シルト・灰色シルトのブロックを多く含む
2　5Y6/1灰色　粘土　粘性強・しまり中　明黄褐色砂・φ5～20mmの風化凝灰岩片を多く含む　緑灰色粘土ブロックを若干含む
3　10YR7/6明黄褐色　砂　粘性弱・しまり中　灰色粘土のブロックを多く含む　黒褐色粘土のブロックを若干含む　φ5～20mmの礫片をまばらに含む
4　10YR6/2灰黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　明黄褐色砂をごくわずかに含む
5　2.5Y6/6明黄褐色　砂質シルト　粘性中・しまり中　灰色粘土のブロックを多く含む
6　5Y6/1灰色　粘土　粘性強・しまり強　明黄褐色砂質シルト・緑灰色粘土のブロックをまばらに含む
7　5YR6/1褐灰色　シルト　粘性弱・しまり中　赤灰色粘土のブロックを多く含む
8　2.5Y3/1黒褐色　粘土　粘性強・しまり中　褐灰色シルト・緑灰色粘土のブロックを多く含む
9　10GY6/1緑灰色　粘土　粘性中・しまり中　褐灰色シルトを多く含む
10　7.5YR5/1褐灰色　シルト　粘性中・しまり中　灰白色粘土ブロック・褐灰色シルトをまばらに含む　φ5～20mmの風化凝灰岩片をごくまばらに含む
11　5Y6/2灰オリーブ色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　φ5～15cmの小礫をまばらに含む



1　10GY4/1暗緑灰色　細砂　粘性なし・しまり弱　細かな炭化物粒子・φ2cm以下の円礫を少量含む
2　10GY5/1緑灰色　砂質シルト　粘性弱・しまり中　φ5mm以下の小礫を多く含む
3　10GY4/1暗緑灰色　炭化物が少量混ざれる以外は2層に同じ
4　10YR3/1黒褐色　シルト　粘性弱・しまり中　炭化物を多く含む　瓦を含む　下部はとても硬い

1a　5GY2/1緑黒色　シルト　粘性弱・しまり中　炭化物を多量に含む　木材を含む
1b　5G4/1暗緑灰色　シルト　粘性弱・しまり中　炭化物を多量に含む　白色凝灰岩片を若干含む
2a　2.5GY5/1オリーブ灰色　シルト　粘性中・しまり強　緑灰色粘土質シルトがまざら状に入る　白色凝灰岩粒をやや多く含む　炭化物を小量含む　φ30cm程の礫を含む
2b　5GY4/1暗オリーブ灰色　粘土質シルト　粘性中・しまりの　白色凝灰岩粒・炭化物を小量含む
2c　10GY4/1緑灰色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　暗緑灰色砂質シルトを20cm程度のブロック状に含む　白色凝灰岩粒・炭化物・φ30cm程度の礫を含む
3a　10GY4/1緑灰色　砂質シルト　粘性弱・しまり強　暗緑灰色粘土質シルトをブロック状に含む
3b　2.5Y5/3黒褐色　砂　粘性なし・しまり強　木材を含む
3c　2.5Y2/1黒色　シルト　粘性弱・しまり弱　赤灰色粘土質シルトをラミナ状に含む　瓦・木材片・炭化物・φ3cm程度の礫を小量含む

図32　二の丸第17地点Ⅲｂ１期の遺構（3）
Fig.32　Features belonging to Edo period (phase Ⅲb1) at NM17(3)

出土遺物は全体に少ない。17世紀代に遡る磁器が含まれている（図71－14）。

【３号石敷】（図30、図版19）

70号溝が屈曲する部分の外側コーナーは、石組の上部が途切れたようになり、東側に石組とほぼ同じ大きさの石が、若干存在する。その南東側には、30～40cm程の大きさの、扁平な川原石が敷かれたようにまとまっていたため、３号石敷とした。さらに東側に、より小さな円礫がまとまって分布しており、一連の遺構の可能性がある。石敷に伴う明確な掘り方は認められなかった。70号溝と同時に存在し、関連する施設の可能性が考えられる。

【２号土坑】（図30・32）

Ｄ－６区で検出された。北隣がⅢｂ２期の32号溝に切られることから、当期に含めた。南側も攪乱によって破壊され、全体の形状は判然としない。東西の幅125cm、深さ40cmである。

【33号土坑】（図30・32、図版22）

Ｃ・Ｄ－３・４区で検出した、規模の大きな土坑である。西側が攪乱で大きく破壊されている他、後世の遺構などで壊されている部分も多い。西側の攪乱で破壊されたところに、Ⅲｂ３期の17号柱列の柱２がある。直接的な前後関係は不明だが、この柱穴の埋土には、33号土坑の埋土に由来すると考えられる炭が大量に含まれていた。このことから、Ⅲｂ３期の17号柱列より古いことは確実と思われる。また、少量ながら陶磁器類が出土しており（図75－86～88）、全般に18世紀代でも前半のものと思われる。これらのことから、Ⅲｂ期の中でも古い段階のものと考え、当期に含めた。平面形状は、攪乱などによる破壊が多く、判然としないが、東西に長い隅丸長方形を呈すると思われる。ピット394に切られているが、その東側に、張り出した部分が南に延びている。残存している部分での東西の幅は280cmである。深さは50cm程で、断面形状は逆台形を呈する。埋土は大きく３層に分けられた。３層は水性堆積層と思われるが、１・２層は人為的に埋められている。１層には、炭化物が大量に含まれていた。瓦と木製品が、やや多く出土している。木製品には、箸状木製品や木羽が多い。

【３号井戸】（図30・31、図版21）

Ａ・Ｂ－４・５区で検出された石組の井戸である。調査区西壁に接するため、深く下げるには危険が伴うと判断し、内部を１ｍ程掘り下げるに留めた。掘り方も、30cm程掘り下げただけであり、出土遺物から構築時期を検討することが不可能である。内部が埋まった後に陥没したと思われ、最上層には木ネジなど近代以降の遺物が含まれていた。69号溝の方向が、この３号井戸の付近だけ二の丸の基準方向からずれており、同時併存が可能となっていることから、当期以降存在した可能性があると考えたが、確証は無い。構築されたのは４層上部上面で、基本層３層が掘り方埋土の上に乗る。しかし、３層が薄いため、３層上面でも、最上段の石は地表に出ていたものが多かったと推定される。そのため、３層上面のⅣ期においても、存続することは可能であったと考えられる。廃絶後の陥没とは言え、埋土最上層に近代の遺物が含まれていることも、Ⅳ期まで存続していた可能性を示す。確実ではないものの、Ⅳ期まで存続した可能性を考え、Ⅳ期の遺構図にも位置だけを示している。

掘り方は直径約３ｍで、裏込め石はほとんど入れられていない。やや扁平な石を、長辺を放射状に置く形で積み上げており、石組の内側の径は85cm前後である。陶磁器・土器類・瓦・木製品などが、やや多く出土しているが、前述のように近代の遺物も含まれており、図示した遺物は瓦だけである。

【21号柱列】（図33・34、図版22）

10列で調査区を東西に横切る掘立柱列で、両側とも調査区外に延びる。途中、攪乱や後世の遺構で破壊されている部分もあるが、13間分を検出したこととなる（柱１～11）。柱間寸法は５尺１寸で、方向はＮ－24°－Ｗである。柱列の北側にも平行して柱が並んでおり、控え柱と思われる（柱12～19）。北側の柱列は、検出できていない場所もあるが、本来は存在した可能性もある。柱穴の規模が、概して南側が大きいことから、南側が主な柱筋で、北側が控え柱と推定した。両者の間隔は、３尺５寸程度である。北側が控え柱とすると、この柱列で区画される範囲は、北が内側と考えて良いであろう。柱穴形状は、柱ごとの変異が大きいが、隅丸方形が多い。平均

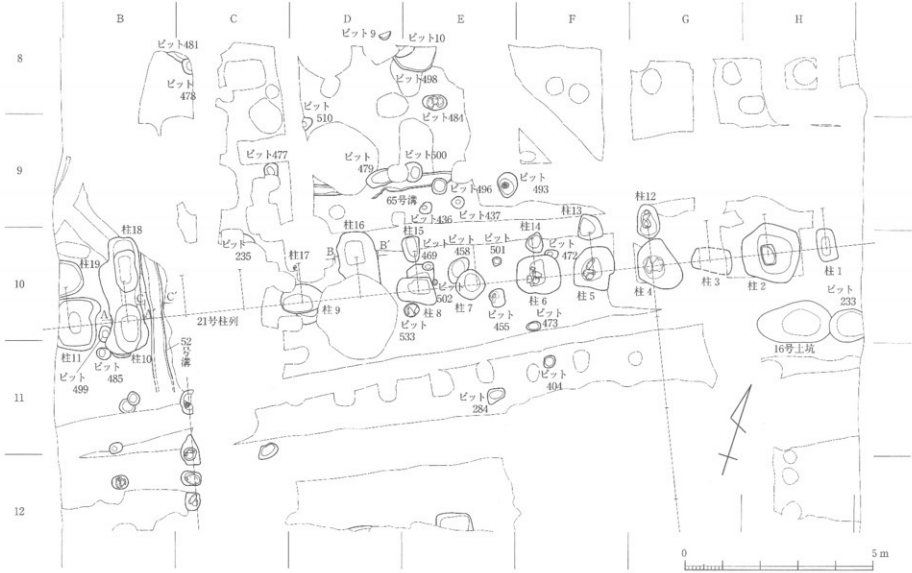
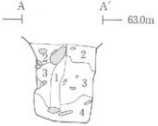


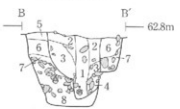
図33　二の丸第17地点Ⅲｂ１期の遺構（4）
Fig.33　Features belonging to Edo period (phase Ⅲb1) at NM17(4)

21号柱列　柱10



1　5G3/1暗緑灰色　シルト　粘性中・しまり弱　黄褐色砂質シルトを少量まばらに含む　白色凝灰岩塊・小礫を少量含む
2　10GY3/1暗緑灰　粘土質シルト　粘性中・しまり強　暗緑灰色粘土質シルトと黄褐色砂質シルトによって斑成される　緑黒色シルトをブロック状に含む　黄褐色砂質シルト・白色凝灰岩塊・円礫・炭・炭化物を小量含む
3　10G4/1暗緑灰色　砂質シルト　粘性中・しまり弱　にぶい黄褐色粘土質シルトを主に上半部にまだらに多く含む　黄褐色砂質シルトを少量含む　緑黒色シルトをブロック状に少量含む　円礫をとより多く含む　小礫・白色凝灰岩塊を少量含む
4　5Z5/1緑灰色　砂質シルト　粘性弱・しまり弱　緑黒色シルト・円礫・炭化物をわずかに含む　白色凝灰岩粒を少量含む

21号柱列　柱16



1　2.5Y6/2灰黄色　砂質シルト　粘性中・しまり中　を主体として極下半に暗緑灰色砂質シルトを含む　全体に明赤褐色の鉄分を多く含む　φ5cm前後の礫を含む
2　2.5Y6/4にぶい黄色　粘土質シルト　粘性強・しまり強　を主体として黄灰色シルト・オリーブ灰色粘土質シルト・黒色シルトがまばらに混じり合う　φ5cm未満の礫を小量含む　炭粒を含む
3　10GY4/1暗緑灰色　砂質シルト　粘性強・しまり中　を主体として褐灰黄色砂質シルトを多く含む　緑灰色粘土をブロック状に部分的に含む　全体に炭化物を含む　φ3cm程度の礫を小量含む
4　10GY4/1暗緑灰色　シルト　粘性強・しまり中　φ10cm未満の礫を多く含む
5　5Y6/2オリーブ黄色　粘土質シルト　粘性中・しまり強　と灰オリーブ色砂質シルトによって構成されており炭化物をまばらに含む
6　2.5Y4/2暗灰黄色　砂質シルト　粘性中・しまりやや強　にぶい黄色粘土質シルトをブロック状に含む　黒褐色粘土質シルト・黒色シルト・オリーブ黄色砂をまばらに含む
7　10GY5/1灰色　粘土質シルト　粘性中・しまり強　を主体として灰オリーブ色砂質シルトを部分的に含む　φ5cm程度の礫をわずかに含む
8　5G5/1緑灰色　粘土質シルト　粘性強・しまり強　粗砂を含む　黒色シルトをまばらに含む　φ2cm～二三し大の礫を多く含む

52号溝

5G4/1暗緑灰色　シルト　粘性弱・しまり強　緑灰色粘土質シルト・灰オリーブ色シルトをブロック状に含む　明黄褐色砂質シルトをまだらに含む　緑黒色シルトを少量含む　白色凝灰岩粒と小礫を含む

図34　二の丸第17地点Ⅲｂ１期の遺構（5）
Fig.34　Features belonging to Edo period (phase Ⅲb1) at NM17(5)

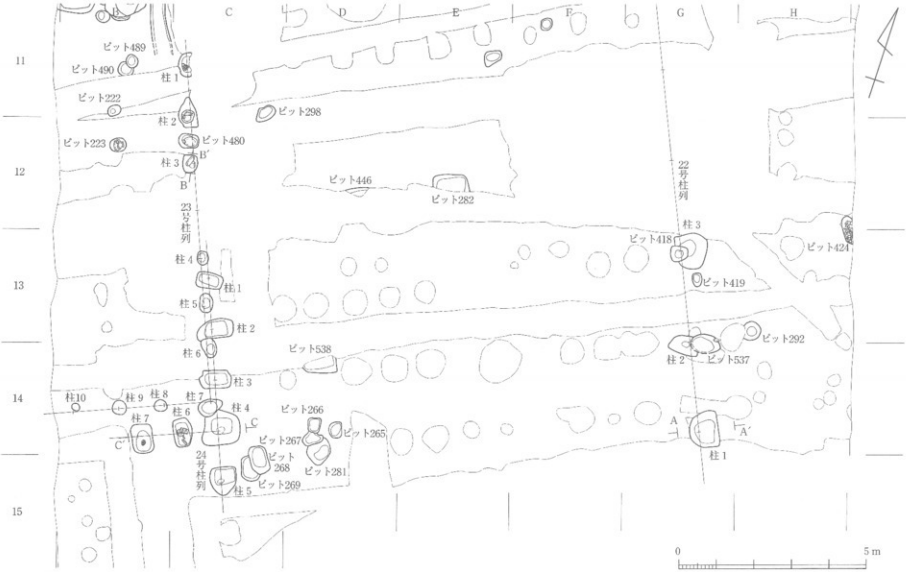
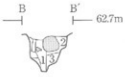


図35　二の丸第17地点Ⅲｂ１期の遺構（6）
Fig.35　Features belonging to Edo period (phase Ⅲb1) at NM17(6)

22号柱列　柱1

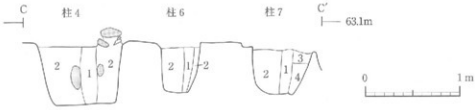
1　2.5Y6/4にぶい黄色　粘土質シルト　粘性やや強・しまりやや強　を主体として浅黄色粘土質シルトを部分的にわずかに含む　φ3cm程度の礫をわずかに含む
2　2.5Y5/2暗灰黄色　砂質シルト　粘性やや強・しまりやや強　φ1cm程度の礫をわずかに含む
3　5Y6/4オリーブ黄色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　灰オリーブ色砂質シルトが混ざった状態で構成されており φ1cm未満の礫・砂粒を含む
4　2.5Y5/2暗灰黄色　砂質シルト　粘性やや強・しまり中　φ1cm未満～3cm程度の礫・砂粒を多く含む
5　φ5～8cm程度の礫によって構成されそれらの間ににぶい黄色粘土質シルトが入り込む
6　10GY5/1緑灰色　粘土質シルト　粘性強・しまりやや中　砂粒を多く含む
7　φ5cm前後の礫は所にたきの方向によって構成されている
8　10GY4/1暗緑灰色　砂　粘性強・しまり弱

23号柱列　柱3



1　10YR10/2灰黄褐色　シルト　粘性弱・しまり弱
2　10YR5/2灰黄褐色　シルト　粘性弱・しまり弱　瓦、にぎりこぶし大の礫・白色岩片を多く含む
3　10YR6/2灰黄褐色　シルト　粘性こく弱・しまり弱　緑灰色砂質シルトをまだらに含む

24号柱列



柱4
1　2.5Y4/2暗灰黄色　砂質シルト　粘性やや強・しまり強　φ2cm程度の礫をわずかに含む　全体に明褐色の鉄分を含む
2　5Y7/4浅黄色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強　黒褐色シルトを部分的に含む　φ1cm未満の礫をわずかに含む

柱6
1　2.5Y4/2暗灰黄色　砂質シルト　粘性やや強・しまり強　φ2cm程度の礫をわずかに含む　全体に羽鳥色の鉄分を含む
2　5Y7/4浅黄色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強　黒褐色シルトを部分的に含む　φ1cm未満の礫をわずかに含む

柱7
1　2.5Y4/2暗灰黄色　砂質シルト　粘性やや強・しまり強　φ2cm程度の礫をわずかに含む　全体に明褐色の鉄分を含む
2　5Y7/4浅黄色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強　黒褐色シルトを部分的に含む　φ1cm未満の礫を少量含む
3　2.5Y4/2暗灰黄色　粘土質シルト　粘性強・しまりややや　砂粒・明褐色の鉄分を含む
4　5Y4/2灰オリーブ色　砂質シルト　粘性強・しまり弱　緑灰色粘土質シルトをわずかに含む　全体にφ1cm未満の礫を少量含む

図36　二の丸第17地点Ⅲｂ１期の遺構（7）
Fig.36　Features belonging to Edo period (phase Ⅲb1) at NM17(7)

的な大きさは、一辺100cmほどである。深さは80～90cm程で、柱17としたものは、4号木樋の枡の掘り方の底面に、かろうじて柱根の一部が残存していたことから柱が存在したと考えたものである。これ以外には、柱根が残っていたものは無かった。柱痕跡は、柱10や柱16で確認されており、太さは10～15cmである。礎板石を伴うものもあるが、一部に留まり、認められない柱穴も多い。埋土中に大小の礫を多く含むものもあり、中には柱を横から押さえるように、礫が入れられているものもある。

瓦と木製品が比較的多く出土しており、漆椀も出土している（図117－12・13）

【22号柱列】（図35・36、図版23）

G－13・14区で検出された南北方向の掘立柱列である。南北とも攪乱のため、先の延び方は不明で、2間分だけの検出である。この22号柱列の柱筋を北に延長すると、21号柱列の柱4のところで直角に交差する。この点から、両者が一連の構造である可能性が高いため、当期に含めた。ただ、21号柱列に近い場所で推定される位置では、該当する柱穴は検出できていない。柱間寸法は8尺程度である。方向は、21号柱列と同じN－24°－Wと復元した。柱穴形状は不整な方形を呈する。一辺の長さは50～100cmと変異が大きい。深さは100cm前後と深い。柱痕跡が確認できたものはなかった。

【23号柱列】（図35・36、図版23）

C－11区から南に延び、C－14区で西に折れる掘立柱列である。次の24号柱列と切り合う柱穴があり、こちらが新しい。柱1が3号木樋に切られることから当期に含めた。南北部分は7間分、東西部分は3間分を検出した。柱間寸法は、南北部分は4尺2寸、東西部分は4尺である。方向は、N－22°－Wと、若干振れが小さい。柱穴形状は円形から隅丸長方形で、平均的な大きさは50cm程度である。深さは50～60cmである。礎板石が認められるものはない。柱3で認められる川原石は、柱を横から押さえるように入れられたものである。柱根は、柱1で残存していた。径10cm程の丸材であるが、底面付近を不整な6角形に削っている。

【24号柱列】（図35・36、図版23）

C－13区から C－15区にかけて延び、途中14列で東に分岐する部分が付く掘立柱列である。23号柱列に切られることから、当期に含めた。また柱1が、次のⅢb2期とした9号建物の柱7に切られている。南北に延びる部分は、4間分を検出した。柱4から西に2間分、直角に分岐して延びている。柱間寸法は4尺5寸、西に延びる部分では2尺5寸程度である。方向は、23号柱列と同じN－22°－Wである。分岐する所の柱4は、他より規模が大きく隅丸方形に近い。他は、長辺80cm前後、短辺50cm前後の、柱筋に直交する方向が長い、隅丸長方形を呈する。深さは、55～65cmである。柱根は残存していなかったが、柱4～7では柱痕跡が明瞭に確認できた。柱の太さは10～15cm程度である。柱6の底面には、礎板として板が敷かれていた。

【52号溝】（図33・34、図版22）

B－10・11区で検出された南北方向の素掘りの溝である。21号柱列の柱の間を通り抜けるように延びており、同時存在の可能性が高いと判断して、当期に含めた。北側はⅢb3期の19号土坑に切られる。南側は、Ⅱ期のピット511との切り合い関係を当初は誤認して調査したが、その後ピット511より新しいピット495を、52号溝が切っていることが判明した。そのため南側がどのように延びていたのか、判らなくなっている。検出できた長さは3.3mで、方向はN－24°－Wである。上幅30～45cm、下幅20～30cm、深さは20cm前後である。埋土は人為的に埋められたものと思われ、水が流れた痕跡は確認できなかった。

【65号溝】（図33、図版22）

21号柱列の北側のD・E－9区に東西に延びる、上幅25～35cm、下幅15～25cm、深さ10cm程度の小規模な素掘りの溝である。東西とも後世の遺構によって破壊され、3.6m分を検出した。方向はN－23°－Wである。

(5) Ⅲｂ２期の遺構（図37～43、図版24～30）

北区では、先行するⅢｂ１期の69号溝とほぼ同じ場所に32号溝が造られる。中区でＬ字状に屈折した９号溝が、この32号溝に接続している。９号溝の南西側には、同じくＬ字形に屈折する４号木樋がある。さらに南側には、もう１条、３号木樋が東西に延びている。９号溝と４号木樋の間には、20号柱列が南北に延びる。これらの遺構以外には、当期に含まれる可能性の高い土坑がある以外には、中区では建物などは確認できていない。南区では、西よりのところに９号・10号建物が存在した可能性を考えた。

【32号溝】（図38・39、図版24・25・26）

Ｂ－６区からＨ－２区まで、鍵の手状に２回屈折して、調査区を東西に横切る石組溝である。Ｆ列の南北に延びる部分を中央部、それより西の東西に延びる部分を西部、調査区北端の東西に延びる部分を東部というように、説明の便宜のために呼ぶこととする。中央部と東部は、Ⅲｂ１期の69号溝と同じ場所に造られている。底面は素掘りのままで、石敷は施されない。底面の標高は62.2～62.3ｍで、場所により高低があり、どちらかの方向が低いという明確な傾向が認められない。そのため、どちらの方向へ流れていたかを判断することは難しい。方向は各部によって異なり、西部はＮ－24°－Ｗ、中央部はＮ－28°－Ｗ、東部はＮ－24.5°－Ｗ程度と思われる。

中央部と東部は、69号溝の上に造られており、69号溝の両側石の中に造られる部分もあれば、どちらかの側石をはずして造られている場合もある。石同士が接している場合、個々の石材がどちらの溝に伴うものであるかを区別することは至難である。そのため、32号溝の掘り方を厳密に区分して示すことは不可能であった。そこで、結果的には69号溝の石材も含むが、32号溝が確認された段階で認識できた石の状況を図化した。西部では、69号溝と位置が若干ずれるため、掘り方を明らかにできた。掘り方の幅は120～170cm、深さは35～45cm前後である。側石は、やや円摩が進んだ自然石を使用しており、加工は施されていない。ほとんどの場所では２段積まれているが、Ｂ－６区では３段のところもある。長軸を溝に直交する方向に置くものが多いが、逆のものも若干存在する。裏込め石は、中央部と東部では、69号溝との関係であまり良く判らない。69号溝の裏込め石を、敷いたようにしている部分もある。西部では、小礫が若干入るが、裏側全体に充填されるようなものではない。石組の内法の幅は、30～35cm程度である。砂やシルトなどがラミナ状に堆積した水性堆積によって溝がほとんどが埋まった後、人為的に埋め戻されている。Ｂ－６区では、溝に直交して、平瓦をはめ込むように立ててあった。

出土遺物については、便宜的に、接続する９号溝も合わせて記載する。陶磁器・土師質土器・瓦・木製品が多く出土している。陶磁器が、比較的まとまって出土している。これらは、文化元年前後の一括遺物より、全体に古い要素が多く、18世紀後葉頃のものと思われる（図71・72－23～37、図78～80－14～24）。また、32号溝からは、繊細な文様が描かれた漆塗りの椀も出土している（図119－27）。

【９号溝】（図38～40、図版26）

Ｈ－９区から西に延び、Ｅ－９区でほぼ直角に北に折れ、Ｅ－６区で32号溝に接続する石組溝である。攪乱や後世の遺構によって壊されたり、側石が取り去られている部分も多い。底面の標高は62.4～62.5ｍ前後で、32号溝より浅い。接続部では、32号溝の２段に積まれた側石の、下段の石の上に９号溝の側石が乗る。そのため、９号溝から32号溝へ水が流れ込んでいたものと考えられる。方向は、東西部分がＮ－23.5°－Ｗ、南北部分がＮ－23°－Ｗである。掘り方は、幅100～230cmと場所による違いが大きい。、深さは30cm程度である。側石は基本的に１段で、32号溝で使われている石材より、稜線が残るものが多いが、特に加工は施されていない。長軸を溝の方向に合わせて置いているものがほとんどで、平坦な面を内側に合わせている。掘り方埋土の上面に、小礫や瓦が敷かれるように分布していた。これらの中には、９号溝の側石を取り去った後に置かれているものもあり、次のⅢｂ３期の、５号建物の根石の可能性がある。そのため、これらの小礫については、当期の図面からは省いたが、全てがⅢｂ３期のものであるか確証は無い。これらの石を除くと、側石の裏側に石はほとんど見られない。埋土のほとんどは、砂やシルトなどがラミナ状に堆積した水性堆積である。

【３号木樋】（図40・42、図版28）

Ｂ－11区からＨ－10区に延びる木樋である。西側は調査区外へ延びる。東側は攪乱で壊されているが、本来は更に延びていたものと考えられる。Ⅲｂ３期の43号溝・19号柱列に切られ、Ⅲｂ１期の23号柱列を切っている。木樋内部の溝底面レベルは、検出した範囲の西端より東端が15cmほど低くなっており、水は西から東へ流れたものと推定される。方向は、Ｎ－29.5°－Ｗである。上幅50～90cm、下幅25～55cm、深さ25～40cmの溝を掘り方とし、木樋を埋設している。木樋は、幅15～17cmの角材に、幅７～８cmの溝を掘っている。溝の深さは、良好に遺存している部分が少なく不明である。木樋の底面側が、丸太の形状を一部残しているものもある。両端が遺存して長さが判明するものは少ないが、3.2m、4.8mのものが確認できる。蓋板は一部が残されていた程度で、詳細は判明しない。要所で、石を木樋の下に入れ、高さを調節している。１辺６cm程度の角杭が、木樋の脇に打ち込まれている所もあり、左右の位置を固定するためであろう。木樋同士の接続部は、溝の付近のみ片側を突出させ、組み合う側を掘り込み、ほぞ状にして合わせる。木製品がやや多く出土している以外は、出土遺物は少ない。

【４号木樋】（図40・41、図版27）

Ｃ・Ｄ－８区から南にのび、Ｄ－10区の枡から東に延びＨ－９区に至る木樋である。北側と東側は攪乱で破壊されているが、本来は更に延びるものであろう。Ⅲｂ３期の18・19号柱列に切られており、Ⅲｂ１期の21号柱列を切っている。木樋内部の溝底面レベルは、南北部分では遺存状況が良くないこともあり、あまり差がみられない。東西部分では、西端より東端の方が５cm程低くなっており、水は西から東へ流れていたと推定される。方向は、南北部分がＮ－24°－Ｗ、東西部分はＮ－21°－Ｗである。上幅50～70cm、下幅25～55cm、深さ25～40cmの溝を掘り方とし、木樋を埋設している。木樋は、幅15～17cmの角材に、幅５～８cmの溝を掘っている。溝の深さは、良好に遺存している部分が少なく不明である。東西部分のＥ・Ｆ列のところの木樋は、他と異なり径25cmの丸太の一面を削って利用している。木樋の底面側が、丸太の形状を一部残しているものもある。両端が遺存して長さが判明するものはないが、長いものでは４m以上になる。蓋板は一部が残されていた程度で、詳細は判明しない。要所で、板材・角材や石を木樋の下に入れ、高さを調節している。１辺６cm程度の角杭が、木樋の脇に打ち込まれている所もあり、左右の位置を固定するためのものであろう。木樋同士の接続部は、溝の付近のみ片側を突出させ、組み合う側を掘り込み、ほぞ状にして合わせている。

南北方向と東西方向の木樋が接続する部分には、木製の枡が設置されている。南北140cm、東西130cm、深さ70cmの、ほぼ方形の掘り方を掘り、底面から25cm程の高さまで礫を充填した上に、枡を設置している。枡は一辺60cm前後の方形で、底面は３枚の板を東西方向に並べている。側板は、上部が腐食しているが、20cm以上の高さがある。木樋と枡の接続部は、遺存状況が悪く、詳細は判明しない。この枡の部分を中心に、瓦や木製品が多く出土しているが、他は少ない。

【20号柱列】（図40、図版28）

Ｄ－８・９区で検出された南北方向の掘立柱列で、２間分のみの検出である。柱３より南側では、ピット422あるいはピット449が当柱列に相当する可能性も残るが、細かな位置関係や深さなどが合わないことから、別個のピットとした。柱間寸法は５尺２寸と考えられ、方向はＮ－22.5°－Ｗである。柱穴の形状と大きさは、柱穴ごとの違いが大きい。深さは45～60cmである。柱１で柱根が残存していた。楕円形に近い丸材で、長径10cmである。柱１では礎板石も認められる。

【２号井戸】（図40・41、図版29）

Ｄ－10・11区で検出された井戸で、大型の桶を井戸枠としている。Ⅲｂ１期の21号柱列を切っている。３号木樋の方向が、他の二の丸期遺構群の方向とずれ、２号井戸と同時併存が可能な形となっていることから、当期以降存在した可能性が高いと考えたが、確証は無い。Ⅲｂ４期の２号溝埋土出土遺物と、２号井戸の最上部埋土出

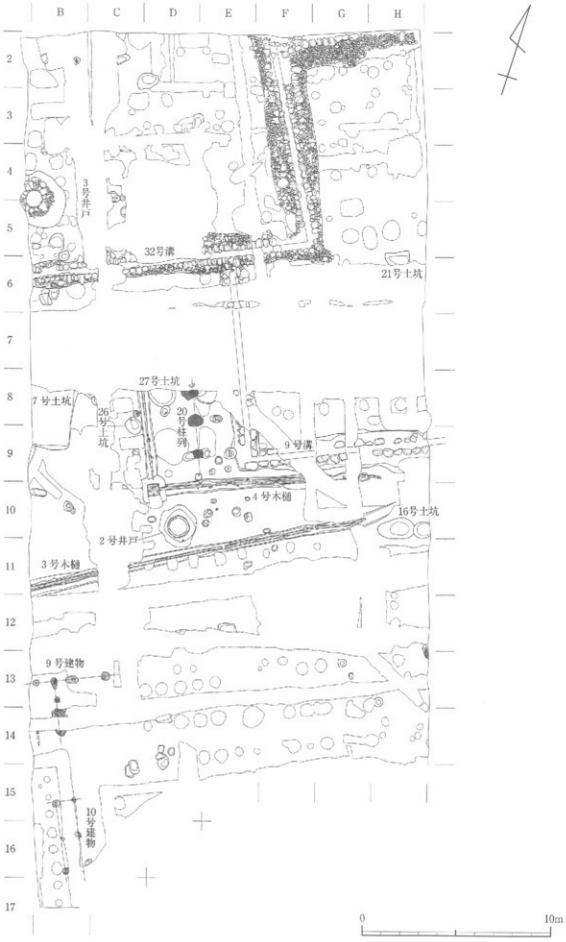


図37　二の丸第17地点Ⅲｂ２期遺構配置図
Fig.37　Distribution of features belonging to Edo Period (Phase Ⅲb2) at NM17

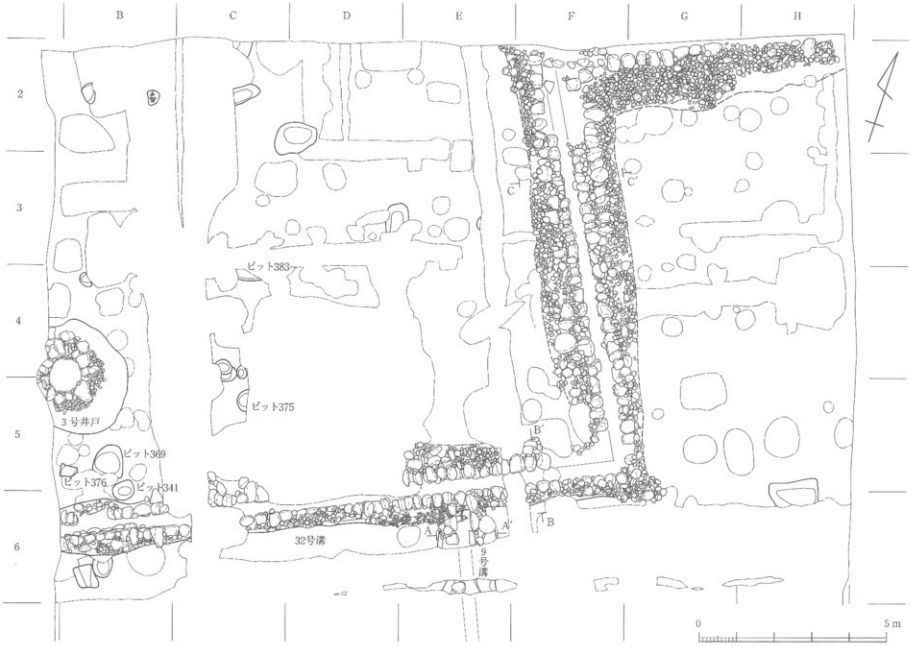
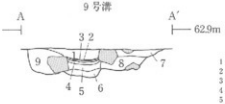
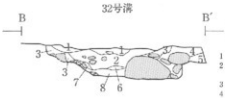


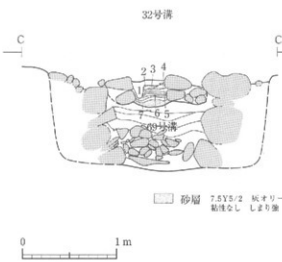
図38　二の丸第17地点Ⅲｂ２期の遺構（1）
Fig.38　Features belonging to Edo period (phase Ⅲb2) at NM17(1)



1 10YR3/4黒褐色　砂質シルト　粘性中・しまり強　φ0.5~5cmの礫を少量含む
2 2.5Y4/1黄灰色　粘土質シルト　粘性強・しまり弱　微量の礫・炭化物を含む
3 10YR2/3黒色　粘土質シルト　粘性強・しまり弱　微量の礫・炭化物を含む
4 10YR3/3黒褐色　砂質シルト　粘性中・しまりや　微量の礫・炭化物を含む
5 7.5YR3/1黒褐色　砂質シルト　粘性弱・しまりや　2~3cm大の礫を多量に含む
6 10YR4/3褐灰色　砂　なし　粘性強　2~5cm大の礫を多量に含む
7 10YR3/2黒褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり強　層色シルトが混じる　2~7cm大の礫を少量含む　微量の炭化物を含む
8 7.5YR3/2黒褐色　砂質シルト　粘性強・しまり強　2~5cm大の礫と微量の炭化物を含む
9 10YR4/1褐灰色　砂質シルト　粘性弱・しまり強　2~3cm大の礫と微量の炭化物を含む



1 2.5Y5/4黄褐色　シルト質砂　粘性なし・しまり強　φ1~10mmの凝化凝灰岩礫をやや多く含む
2 2.5Y3/2黒褐色　シルト質砂　粘性弱・しまり強　暗灰黄色シルト質砂をまだらに含む　黄褐色シルト質砂をφ3~10mmの粒状に含む　白色凝灰岩粒・炭化物を少量含む
3 5Y2/1黒色　シルト質砂　粘性なし・しまり強　φ1~5mmの白色凝灰岩粒を全体に多く含む
4 5Y2/1黒色　シルト質砂　粘性なし・しまり強　オリーブ黄色砂をまだらに含む　φ1~10mmの凝灰岩粒を多量に含む
5 5Y5/6オリーブ色　シルト質砂　粘性中・しまり強　φ1~10mmの風化凝灰岩礫をやや多く含む
6 5Y2/2オリーブ黒色　砂質シルト　粘性弱・しまり中　オリーブ黄色砂質シルトをφ1~3mmの粒状に少量含む
7 5Y4/2灰オリーブ色　シルト　粘性弱・しまり中
8 5Y5/4オリーブ色　シルト質砂　粘性なし・しまり強　φ1~20mmの礫を多量に含む



1 7.5Y5/2灰オリーブ色　シルト質砂　粘性弱・しまり弱　オリーブ色砂質シルトをφ2~3mmの粒状に少量含む
2 7.5Y4/3灰オリーブ色　シルト　粘性なし・しまり強
3 7.5Y6/3オリーブ黄色　シルト質砂　粘性なし・しまり強
4 7.5Y4/3灰オリーブ色　砂質シルト　粘性弱・しまり強
5 7.5Y3/2オリーブ黒色　シルト質砂　粘性なし・しまり強
6 7.5Y3/1オリーブ黒色　砂質シルト　粘性弱・しまり弱
7　6と同様の砂質シルト

図39　二の丸第17地点Ⅲｂ２期の遺構（2）
Fig.39　Features belonging to Edo period (phase Ⅲb2) at NM17(2)

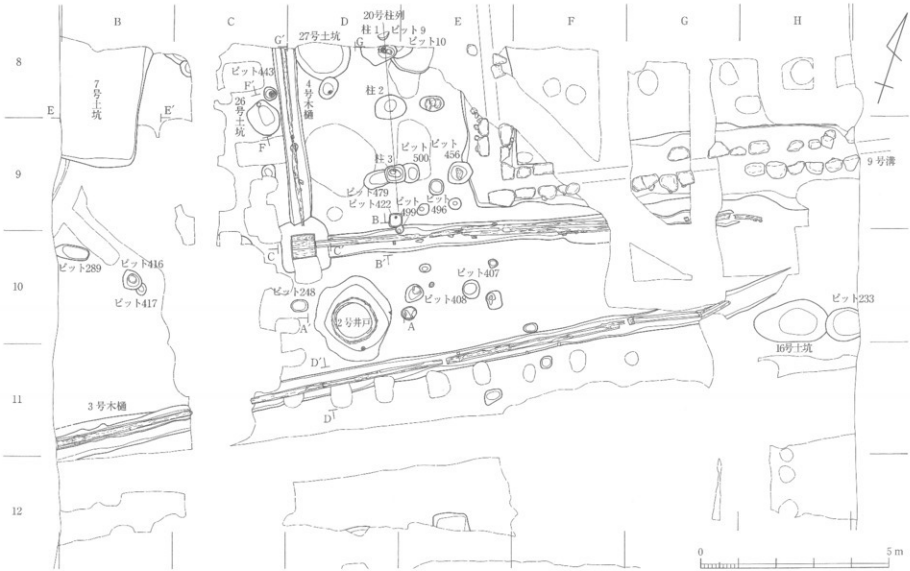
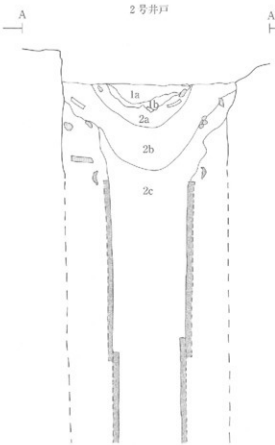
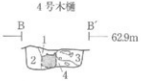


図40　二の丸第17地点Ⅲｂ２期の遺構（3）
Fig.40　Features belonging to Edo period (phase Ⅲb2) at NM17(3)



1a　10YR3/1黒褐色　シルト　粘性なし・しまり弱　炭化物および4層に由来する白色の粒子を元素軟質多く含む
1b　10YR5/1褐灰色　シルト　粘性ごく弱・しまり弱　比較的均質
2a　10Y4/1灰色　シルト　粘性弱・しまり弱　瓦・木片・炭化物・焼ちこぶし大以下の礫を含む
2b　10Y4/1灰色　砂質シルト　粘性弱・しまり弱　橙色砂質シルトを上部に多く含む　一部帯状に淡黄色砂を含む　全体にϕ5cm付近の礫・瓦・炭化物・白色粒子を小量含む
2c　7.5Y3/1オリーブ黒色　砂質シルト　粘性強・しまり弱　暗オリーブ灰色シルト質砂を層中下方に全体に多く含む　層全体にϕ5cm程度の瓦・こぶし大の大型の礫を含む　炭化物を全体に微量含む

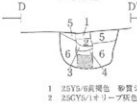


1　2.5Y4/2暗灰黄色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　黄褐色粘土質シルトを紋状に含む　ϕ5～10cmの丸礫を含む
2　5GS/1緑灰色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　黄褐色粘土質シルトをブロック状に含む
3　2.5Y4/3オリーブ褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり強　黄褐色粘土質シルトをブロック状に含む　ϕ2～3mmの白色微灰岩粒を多量に含む　ϕ5～10cmの丸礫をごく少量含む
4　5GY4/1緑オリーブ灰色　粘土質シルト　粘性中・しまりや　オリーブ黒色粘土質シルトをブロック状に含む　黄褐色粘土質シルトを粒状に含む

1　10YR6/6明黄褐色　砂質シルト　粘性はとんどなし・しまり中　砂質シルトと粘土質シルトの互層　炭化物をごくわずかに含む　瓦・木質を多く含む
2　5Y2/1オリーブ黒色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　明黄褐色・黒色・暗緑灰色土ブロックをまだらに多く含む　炭化物をわずかに含む
3　7.5Y4/1灰色　粘土　粘性強・しまり弱　オリーブ灰色・明黄褐色土粒・黒色土ブロックを主だらに含む

0　1 m

図41　二の丸第17地点Ⅲｂ２期の遺構（4）
Fig.41　Features belonging to Edo period (phase Ⅲb2) at NM17(4)



1　2.5Y5/6黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり中　φ5mm程度の小礫を含む
2　2.5GY5/1オリーブ灰色　粘土　粘性強・しまり強　黄褐色砂質シルトをブロック状に含む　ブロックは1とのほぼ互層状に多い
3　2.5Y5/4黄褐色　シルト質砂　粘性弱・しまり中　赤褐色シルト粒を赤味に多く含む
4　10YR4/6褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり中　1に似ているが色調がやや暗く粘性もやや強い　3よりも炭が小さい
5　5Y5/3灰オリーブ色　粘土　粘性強・しまり強　2層程度色砂質シルトを若干含む
6　5Y4/1灰色　粘土　粘性強・しまり強　5と比べシルトを含まずしまりが強い

1　5Y6/3オリーブ黄色　砂質シルト　粘性弱・しまり強　明黄褐色砂質シルトが混じる　φ3cm程度の礫を少量含む
2　10YR2/1黒色　シルト　粘性弱・しまり強　明オリーブ灰色粘土質シルトをブロック状に含む　灰色砂質シルトをまばらに含む　礫・白色岩片・炭化物を含む
3　5Y6/4オリーブ黄色　砂　粘性なし・しまり強　灰オリーブ色粘土質シルトを全体に小さなブロック状に含む　φ3cm程度の礫を比較的多く含む
4　7.5Y3/1灰色　シルト　粘性中・しまり強　オリーブ黄色砂を全体にまばらに含む　φ2cm未満の礫を比較的多く含む
5　10GY6/1緑灰色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強　オリーブ黒色粘土質シルトが混じる　砂をまばらに含む
6　10GS/1緑灰色　砂質シルト　粘性中・しまり強　オリーブ黒色粘土質シルトを部分的に含む　φ3cm未満の瓦・本器の破物・丸を含む
7　7.5Y6/3オリーブ黄色　砂　粘性なし・しまり強　オリーブ黒色シルトを部分的に含む　灰オリーブ色粘土質シルトをホブロック状に含む
8　5Y5/4オリーブ色　粘土質シルト　粘性中・しまり強　黒色シルトが混じる　明黄褐色砂質シルトをわずかに含む
9　2.5Y4/6オリーブ褐色　砂　粘性なし　礫を含む
10　5Y5/3灰オリーブ色　砂　粘性なし・しまり強　黒色シルトを薄く層状に含む　部分的に明黄褐色砂を含む
11　2.5Y3/1黒褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり強　黒色粘土質シルトを帯上手に多く含む　瓦を含む
12　5Y5/4オリーブ色　砂　粘性なし・しまり強　緑灰灰色粘土質シルトをブロック状に含む　黒色シルトを薄く層状に含む　φ1~3cm程の礫を含む
13　10GY5/1緑灰色　粘土質シルト　粘性中・しまり強　黒色土をまばらに含む
14　10GY5/1緑灰色　粘土質シルト　粘性強・しまり強　φ3cm程度の礫・炭化物をわずかに含む
15　5GS/1緑灰色　砂質シルト　粘性やや強　黒色シルトをわずかに含む
16　10YR2/1黒色　シルト　粘性中・しまり強　オリーブ灰色粘土質シルトを少量含む
17　7.5GY5/1緑灰色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強　黒色シルトをまばらに含む
18　10GY5/1緑灰色　粘土質シルト　粘性弱・しまり強

10G4/1暗緑色　粘土質シルト　粘性中・しまり弱　明赤褐色粘土質シルトを板状に含む

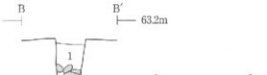
1　10YR3/1黒褐色　シルト　粘性なし・しまり強　黄褐色砂質シルトブロックを若干含む　φ1~5cmの礫をごくわずかに含む
2　2.5Y5/3黄褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　黒色粘土質シルトをブロック状に含む　φ5mm程度の礫をごくわずかに含む

図42　二の丸第17地点Ⅲｂ２期の遺構（5）
Fig.42　Features belonging to Edo period (phase Ⅲb2) at NM17(5)

9号建物　柱2

1　2.5Y3/2黒褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり強　浅黄色粘土質シルトをブロック状にわずかに含む　φ1−20cm程度の礫を多量に含む　黒色炭化物を微量含む
2　2.5Y3/1黒褐色　シルト　粘性やや中・しまり強　浅黄色粘土質シルトのブロック・炭化物を微量含む
3　5Y6/3オリーブ黄色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強　黒褐色シルトを少量含む　白色粒片を微量含む　明褐色の鉄分を全体に含む
4　7.5Y6/2灰オリーブ色　粘土質シルト　粘性強・しまり強　白色粒片を微量含む　明褐色の鉄分を全体に多量に含む
5　2.5Y3/1黒褐色　シルト　粘性やや中・しまりやや強　2と土質は同じだがC層が薄である　下に敷かれたか

10号建物　柱3



1　5Y2/1黒色　シルト　粘性やや強・しまりやや強　を主体として明灰黄色シルトを部分的に含む　褐黄色の鉄分をまばらに含む　柱下部にφ10cm程度の穴が底面に入る

図43　二の丸第17地点Ⅲｂ２期の遺構（6）
Fig.43　Features belonging to Edo period (phase Ⅲb2) at NM17(6)

土遺物の間に、多くの接合関係が認められることから、最終的に埋められるのはⅢｂ４期と考えられる。掘り方は、掘り込み面に近い部分はやや広がって径200cm程度であるが、それ以下は径160cm前後である。この掘り方の中に、径約90cm、高さ約180cmの桶を入れて井戸枠としている。桶の側板の劣化が激しい部分があり、崩壊の危険性があったため、内部は上から２段目の桶の途中の深さ4.6mまで掘り下げるに留めた。上段の桶と同様の大きさの桶が２段目以下にも使われていたと想定すると、掘り込み面から底面までの深さは、２段の場合4.9m前後、３段の場合は6.6m前後になると推定できる。

瓦・木製品が大量に出土しており、陶磁器・土師質土器も多い。これらの遺物のほとんどは、廃絶時のもので、18世紀末～19世紀初頭のものと考えられる。陶磁器類は、他のⅢｂ４期の溝帯や、基本層３層から出土したものと基本的に共通する（図73－52・53、図81－55～59、図91－30・31）。

【７号土坑】（図40・42、図版30）

Ｂ－８・９区で検出された、大規模な土坑である。この７号土坑の付近には、Ⅲｂ期に多数の土坑などが造られるが、それらの遺構の中では、最も古いものである。北側が攪乱で壊され、西側は調査区外へ延び、本来の大きさは不明であるが、南北3.3m以上、東西2.5m以上となる。方形もしくは長方形を呈するものと思われる。深さは65cm程で、壁はほぼ垂直に掘られている。地山の堅固な部分を底面とし、ほぼ平坦にしている。

陶磁器・土師質土器・瓦・金属製品などが多数出土しているが、瓦以外のほとんどは、確認面での出土である。陶磁器類は、18世紀末頃に下るものが多く（図73－39・40、図78～80－26～39）、これらは、直接７号土坑に伴うものでない可能性が高い。金属製品では、古銭が多く出土している（図129・図版108－37～51）。

【26号土坑】（図40・42、図版29）

Ｃ－８・９区で検出した土坑で、Ⅲｂ３期の４号建物に伴う整地Ａ層に覆われると考えられることから、当期に遡らせた。やや不整な長円形で、長軸で90cm、深さ40cmである。

【27号土坑】（図40・42、図版29）

Ｄ－８区で検出されたが、北半が攪乱で破壊されている。４号木樋に切られる可能性があることから当期に含めたが、両者の切り合いはごくわずかであるため、逆の可能性も残る。出土遺物に18世紀末以降に下る可能性の高いものが含まれているため（図79－25）、次のⅢｂ３期に下る可能性もある。その場合、27号土坑を切るピット418と、Ⅲｂ３期の４号建物の関係が整合せず問題が残る。ほぼ円形と思われ、東西の幅は145cm、深さは50cmで、壁はほぼ垂直に掘られている。埋土は２層に分けたが、１層が黒褐色の均質な土で、２層との境がほぼ垂直である。あるいは有機質の桶状のものが埋められていたのかもしれない。

【９号建物】（図43、図版30）

Ｂ・Ｃ－13・14区で検出された礎石建物である。柱４から柱７まで東西に柱筋が延び、途中攪乱で抜けるが４間分を検出した。柱５からは南に柱筋が延びており、こちらは３間分を検出した。柱間寸法は１間を６尺３寸とした、半間間隔となっている。方向はＮ－24°－Ｗである。柱穴形状は、柱穴ごとの違いが大きい。大きさは30～70cmで、深さは残りの良いもので25cm程度である。柱１～３・５では、根固め石が残っていた。

【10号建物】（図43、図版30）

Ｂ－15・16区で検出された掘立柱建物で、東西１間、南北２間のみの検出である。更に延びるものと思われるが、攪乱などで明らかにできなかった。６尺３すを１間とした、東西は半間、南北は１間間隔となっている。方向はＮ－25.5°－Ｗ。掘り方はほぼ円形で、径30～40cm、深さ60cm程である。柱痕跡は確認できていない。底面近くに礫が入る場合があるが、位置や大きさから礎板石とは考え難く、柱を横から押さえるものであろう。

【瓦敷遺構】（図43、図版30）

Ｂ－14区で検出された。北側が新しい遺構で壊されている。80cmの長さで、東側の端をそろえ、平瓦の破片を並べる。時期決定の積極的な根拠はないが、この区域に建物が展開する当期が、比較的可能性が高いと考えた。

(6) Ⅲｂ３期の遺構（図44～49、図版31～36）

中区から北区にかけて、調査区西よりの部分に南北方向の柱列が延びる。柱列は４時期の変遷が確認できている（16～19号柱列）。このうちの一部は、北で西側へ、南で東側へ曲がる。柱列の南側には、調査区を東西に横切る石組溝が延びる（43号溝）。この柱列と石組溝に区画された北東側の中区には、礎石建物が存在する（４・５号建物）。柱列をはさんで反対の西側には、土坑が多数造られる（15・19・22・23号土坑）。これらの土坑は、Ⅲｂ２期とした７号土坑、Ⅲｂ４期とした14・20号土坑と27号溝とも切り合い関係を有する。前後関係は判明するが、個々の遺構が厳密にどの細分時期に帰属するかについては、出土遺物では時期決定が難しいものも多く、確実ではない。一応、今回報告した３段階に区分することができるため、それぞれの細分時期に割り振ったが、帰属時期がずれる可能性は残っている。一方南区では、確実に当期に帰属させられる目立った遺構はない。

【16号柱列】（図45・46・47、図版33）

Ｃ－９区から北に延び、Ｂ－４区で直角に東に折れる掘立柱列である。途中、攪乱による破壊も多いが、南北部分では11間分、東西部分では２間分を検出した。柱７と柱８が、17号柱列を切っている。また柱６が、18号柱列を切るピット264を切っており、これらの柱列の中では最も新しい。柱間寸法は、南北部分が５尺、東西部分は４尺５寸程度である。方向はＮ－24°－Ｗ。柱穴形状は、円形から方形に近い形まで、柱穴ごとの違いが大きい。平均的な大きさは70cm程度で、深さは60cm前後である。柱根が柱１で残存していた。丸材で、断面形は楕円に近く、長径で18.3cmである。柱２でのみ、底面に川原石が置かれていた。

【17号柱列】（図45・46・47、図版33）

Ｃ－10区間から北に延び、Ｂ－３区で東に折れる掘立柱列である。途中、攪乱による破壊も多いが、南北部分では12間分、東西部分では１間分を検出した。柱６と柱７が、16号柱列に切られる。18・19号柱列との前後関係は不明である。柱間寸法は、南北部分は５尺２寸で、東西部分は５尺２寸を１間とした1.5間分と思われる。方向はＮ－23°－Ｗである。柱穴の形状は、方形に近いものが多いが、円形のものもある。平均的な大きさは60cm程度で、深さ70cm前後である。柱根が残っていたものは無いが、柱５で柱痕跡が確認されており、太さは10cm程である。礎板石などは認められない。瓦と木製品が多く出土しているが、他の遺物は少ない。

【18号柱列】（図45・46・47、図版32）

Ｃ－10区から北に延び、Ｃ－３区で直角に東に折れる掘立柱列である。途中、攪乱による破壊も多いが、南北部分では11間分を、東西部分では１間分を検出した。南北部分では、１本おきに東側に控え柱の柱穴（柱11～14）が伴う。柱６が、Ⅲｂ２期の32号溝の石組を壊している。柱９と柱10が、19号柱列と切り合うが、切り合い関係が両者で逆に認識していた。どちらかが誤認であると思われるため、調査時の写真などを検討し、18号柱列が新しい可能性が高いと判断した。柱10より２間分南には、ピット415が存在し、当柱列の一部の可能性がある。しかし、控え柱が付く柱に相当するにもかかわらず見られないことから、含めなかった。南北部分・東西部分ともに柱間寸法は６尺で、控え柱との間隔は３尺５寸程度と見られる。方向はＮ－23°－Ｗである。柱穴形状は方形を基本とし、平均的な一辺の幅は70～80cm程度で、深さは70～120cmである。控え柱が別の柱穴となるもの（柱10と柱14）と、一つの掘り方になっているもの（柱３と11、柱５と12、柱８と13）がある。柱根が柱８で残存していた。丸材で、径は15cmである。礎板石などは認められない。瓦と木製品が多く出土しており、漆椀の蓋も出土している（図117－11）。

【19号柱列】（図47・48、図版31）

Ｇ－11区から東に延び、Ｃ・Ｄ－11区で直角に北に折れ、Ｃ－９区に至る掘立柱列である。東西部分で７間分、南北部分で５間分を検出した。柱11・12・14が、18号柱列に切られ、Ⅲｂ２期の３号木樋を切っている。柱間寸法は、柱８～11の３間分だけは３尺５寸、他は４尺２寸である。方向はＮ－24°－Ｗである。

柱穴形状は、隅丸長方形が多いが、円形に近いものもある。平均的な大きさは70cm×50cm程度、深さ50cm程

度である。柱5から柱13で、柱根が残存していた。いずれも丸材で、径は10.5～14.5cmであるが、12cm前後が多い。掘り方に川原石が入っているものが多いが、いずれも柱を横から押さえるためのものである。柱14としたものは、柱13に隣接し、角材が柱筋に平行して埋められている。18号柱列の柱穴で壊されている部分が多くはっきりとしないが、柱12と柱13をつなぐ形で造られた、附属する施設の可能性を考えて、当柱列に含めた。

【29号土坑】（図44、図版32）

Ｂ－２区で検出したが、調査区北西隅は湧水などの影響で、遺構確認が難しかった部分である。そのため、複数の遺構をまとめて掘ってしまっている可能性がある。本体は北端の深い部分と考えられる。165cm×60cmの、東西方向に長い、長方形に近い形を呈し、深さは110cmである。次の30号土坑と同じく、控え柱をともなう柱穴である可能性が考えられるが、組み合う柱穴は見出せなかった。瓦と木製品が、多量に出土している。木製品では、箸状木製品や木羽が多い。

【30号土坑】（図45、図版32）

Ｂ－３区で検出したもので、東西200cm、南北80cmの長方形を呈す。18号柱列に見られるような、２つの柱穴が並んだ形をしている。控え柱を伴い、柱列を構成するものと考えられるが、組み合う柱穴は確認できなかった。瓦と木製品が、やや多く出土している。

【43号溝】（図47・49、図版31）

Ｂ－12区からＨ－11区にかけて、調査区を東西に横切る石組溝である。東西両側とも調査区外へ延びる。Ⅲｂ２期の３号木樋を切っている。底面レベルは西端より東端が15cm程低く、西から東へ流れていたと考えられる。方向はＮ－24°－Ｗである。掘り方は、上幅100～190cm、下幅55～105cm、深さ20～25cm程度である。側石は、取り去られている部分も多いが、残っているところは１段並べるだけである。やや円摩が進んだ自然石が多いが、角礫も少量混じる。長軸を溝に直交する方向に置くものが多いが、逆のものも若干存在し、その場合は平坦な面を内側にそろえている。裏込め石は、ほとんど認められない。側石の内法幅は、20cm程度である。

【４号建物】（図47・49、図版33・34）

Ｃ～Ｆ－８・９区で検出した礎石建物と思われるもので、さらに東に広がる可能性も残る。地覆石状の石列が、各所に存在する。先行する遺構の上にＡ・Ａ′層の整地を行い、その上に根固め石や石列を構築している。Ⅲｂ４期の２・３号溝に壊され、南側の遺存状況は悪い。石列４や石列６が、Ⅲｂ２期の９号溝の側石の上に乗る形で造られており、この点から９号溝より新しいと判断した。Ｄ－８・９区に、南北に延び、北端で東に折れる石列１がある。このコーナーを基準にして、１間６尺３寸としたメッシュを図47に入れたが、他の石列の位置と、良く対応することから、１間６尺３寸を基準として造られていると考えられる。方向はＮ－23.5°－Ｗである。石列は、やや扁平な角礫が多いが、川原石も使われている。

石列１に平行して、３列の石列が南北方向に並ぶ。石列１から東へ半間の所には石列２が、１間の所には石列３がある。石列２と石列３の間には、小礫が分布する。東に２間の所には、石列４が一部残っている。一方、東西方向の石列も存在する。石列１の北辺から南に１間半の所には石列７とした根固め状の小礫が並び、その東側には関連する礎石の可能が高いピット450がある。南に２間の所には石列８が、２間半の所には石列９がある。地覆石状の石列の残りは悪いが、根固め石状の小礫が分布する。石列８は、さらに東側まで続く。石列９は、Ｇ列以東まで続く可能性もある。石列６としたものは、地覆石状の石列の状況は、石列１などと類似するが、間隔がずれる。石列１のさらに西側に、東西方向の石列５があり、石列６との間隔がちょうど１間分となる。そのため、石列５・６が一連のもので、他の石列とは異なる建物になる可能性もある。

当建物に伴う整地Ａ・Ａ′層から、瓦が多量出土している。陶磁器・土器類も比較的多い。陶磁器には、様々な時期のものが含まれるが（図71－16・17、図78－７～９）、その中には18世紀末以降のものも含まれる。次の５号建物出土の陶磁器も同様で、このことから当期の遺構を、18世紀代でもさほど古く遡らせることは難しい。

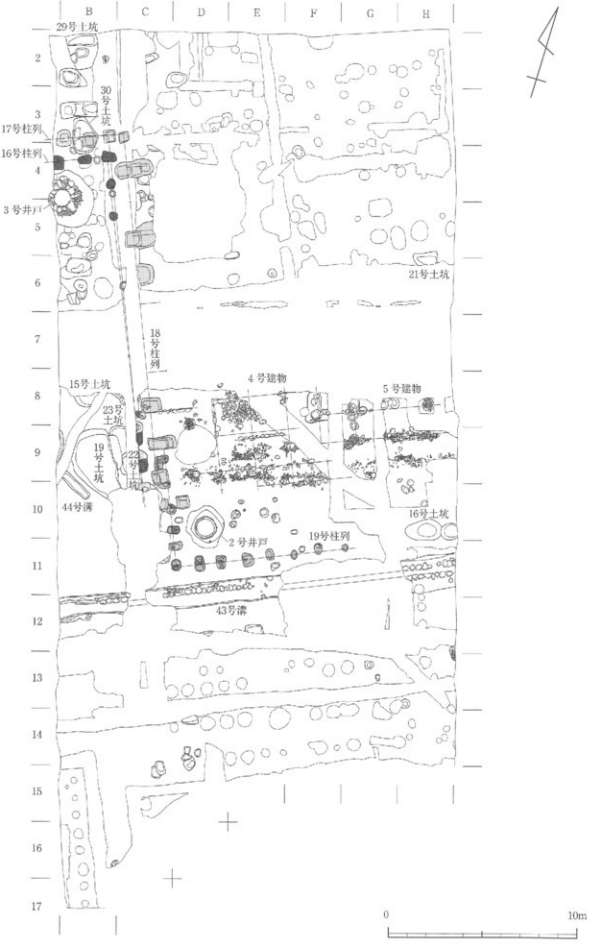


図44　二の丸第17地点Ⅲｂ３期遺構配置図
Fig.44　Distribution of features belonging to Edo Period (Phase Ⅲb3) at NM17

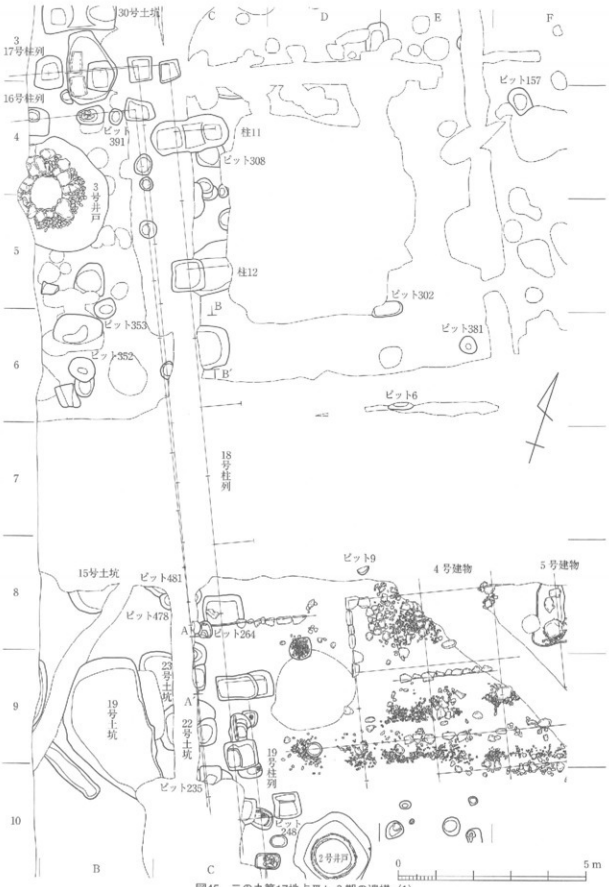
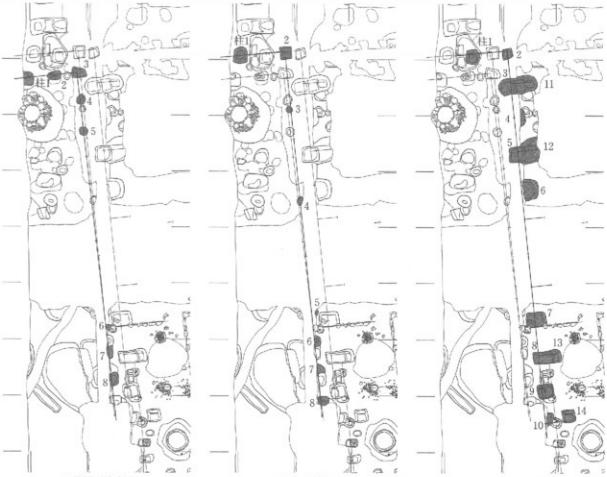


図45　二の丸第17地点Ⅲｂ３期の遺構（1）
Fig.45　Features belonging to Edo period (phase Ⅲb3) at NM17(1)



16号柱列模式図　　17号柱列模式図　　18号柱列模式図

17号柱列柱6　16号柱列柱7

16号柱列　柱7
1　10YR4/1黒灰色　シルト　粘性なし・しまり弱　にぶい黄橙色シルトがまだらに混じる　白色の小礫・炭化物を比較的多く含む
2　1に比べにぶい黄橙色の量が多いためやや白っぽい
3　2に瓦山由来の凝灰岩粒土ブロックが混じる

17号柱列　柱6
1　7.5YR3/1黒褐色　シルト　粘性なし・しまり弱　掘りこぶし大以下の円礫・炭化物を含む
2　7.5YR4/1褐灰色　シルト　粘性ごく弱・しまり弱　褐灰色粘土質シルトがまだらに混じる
3　10YR3/1黒褐色　シルト　粘性弱・しまり弱　炭化物を比較的多く含む
4　2に同じ
5　10GL/1暗緑灰色　粘性中・しまり中　を基本とし炭化したシルトがすき間に入る

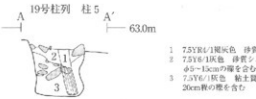
18号柱列柱6

1　2.5Y5/6黄褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり強　オリーブ黒色砂質シルトを部分的に含む　黒色炭化物を少量含む　礫砂を含む
2　7.5GY5/1緑灰色　粘土質シルト　粘性強・しまりやや強　黒褐色粘土質シルトを部分的に含む
3　2.5Y5/4黒褐色　埋土　粘性なし・しまりやや中　緑灰色粘土質シルトを部分的に含む　黒色炭化物を微量含む

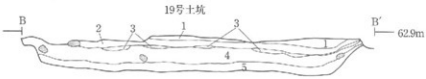
図46　二の丸第17地点Ⅲｂ３期の遺構（2）
Fig.46　Features belonging to Edo period (phase Ⅲb3) at NM17(2)

図47　二の丸第17地点Ⅲｂ３期の遺構（3）
Fig.47　Features belonging to Edo period (phase Ⅲb3) at NM17(3)

19号柱列模式図



1　7.5YR6/1褐灰色　砂質シルト　軟性中・しまり中　明褐色の鉄分を少量含む　混入物はみられない
2　7.5YR4/1灰色　砂質シルト　軟性中・しまりやや強　明褐色の鉄分をまばらに含む　黒土土粒状混に φ5～15cmの礫を含む
3　7.5YR6/1灰色　粘土質シルト　灰色粘土質シルトのブロック（φ5cm程）をまばらに含む　φ10～20cm程の礫を含む

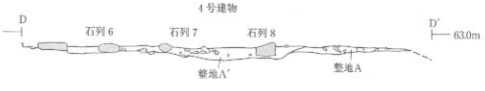


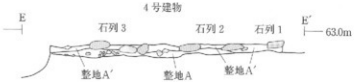
1　2.5Y3/2黒褐色　シルト　軟性弱・しまり強　細砂を少量含む　φ1cm炭焼の礫をわずかに含む
2　2.5Y7/6明黄褐色　粘土質シルト　軟性中・しまり強　オリーブ灰色粘土質シルトを多く含む　白色岩片を多く含む
3　7.5Y5/2灰オリーブ色　シルト　軟性中・しまり強
4　5GY5/1オリーブ灰色　粘土質シルト　粘性やや強　黒色シルトと明黄褐色粘土質シルトがまだらに混じる
5　2.5Y2/1黒色　シルト　粘性やや強・しまり弱　黒色シルトと有機質によって構成される　遺物を多量に含む

22号土坑
1　10YR5/4にぶい黄褐色　シルト　粘性なし・しまり弱　2との間に厚く砂が入る
2　10YR2/1黒色　シルト　粘性中・しまりなし　下部を中心に青黒色シルトがブロック状に入る
3　1・2がまだらに混じる

23号土坑
1　22号土坑の2と基本的に同じ　青黒色シルトが入らない　同層を比較的多く含む

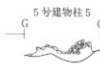
図48　二の丸第17地点Ⅲｂ３期の遺構（4）
Fig.48　Features belonging to Edo period (phase Ⅲb3) at NM17(4)





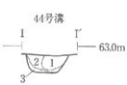
整地A　5Y4/4暗オリーブ色　粉質シルト　粘性弱・しまり中　φ1cm程度の炭化物片を若干含む　φ5cm程度の白色小礫をまばらに含む　多量の瓦を含む
整地A′　5G3/1緑灰色　砂質シルト　粘性弱・しまり強　明黄褐色粉質シルトをまばらに少量含む　φ3cm以下の炭化物を少量含む　φ3mm以下の白色凝灰岩粒を多く含む　φ4～5cm程度の煙・φ1cm程度の小礫を少量含む

10YR2/2黒褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり強　φ2～10cmの円礫が根石として詰まっている　φ5mm程の炭化物をわずかに含む



7.5YR3/1黒褐色　粘土質シルト　粘性中・しまりか　炭化物をわずかに含む　明黄褐色ブロックをごくわずかに含む

1　2.5Y6/6明黄褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり強　黄褐色土を部分的にごくわずかに含む　全体に細砂を含む
2　2.5Y5/2黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまりやや強　細砂を多く含む
3　2.5Y5/4黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強



1　10YR4/1褐灰色　シルト　粘性ごく弱・しまり中　緑灰色粘土質シルトがまだらに混じる　φ1cm以下の白色凝灰岩片および炭化物を比較的多く含む
2　7.5YR4/1褐色　シルト　粘性ごく弱・しまりや
3　10YR5/4にぶい黄褐色　粉質シルト　褐灰色シルトがわずかに混じる（煙の崩落土）

図49　二の丸第17地点Ⅲｂ３期の遺構（5）
Fig.49　Features belonging to Edo period (phase Ⅲb3) at NM17(5)

【５号建物】（図47・49、図版34・35）

Ｆ～Ｈ－８・９区で検出した礎石建物で、方向はＮ－23°－Ｗである。柱１・２・３は、柱間寸法６尺３寸で並ぶが、柱２と柱３の間は、想定される位置にうまく対応する柱が見あたらない。柱１と柱２をつなぐ形で、溝状の掘り方の中に地覆石が並べられている。柱１と柱２の北側には、同様の溝が延びることから、本来はこちらにも地覆石が並んでいたと推定される。柱２の南５尺の所には柱５があり、東西に根固め石状の小礫が延びている。柱間寸法が異なることから、庇などの施設の可能性が考えられよう。柱５の東側にはピット452・453も確認されているが、主な柱筋の東西の位置とうまく対応しない。柱２と柱５のちょうど半分の位置には、柱４がある。柱４以外の柱穴は、径50～60cm、深さ20cm前後の、ほぼ円形の柱穴に、小礫を充填して根固め石としている。

柱５から東西方向に延びる小礫は、Ⅲｂ２期の９号溝の北側側石の裏側に分布している。そのため、これらの小礫が、９号溝の裏込め石の可能性もある。あるいはそれを利用して、庇を出し、９号溝が５号建物の雨落ち溝となっている可能性も考えた。しかし、柱５が９号溝の側石を抜き取った後に、根固め状に小礫を充填していることから、９号溝よりは新しい建物と判断した。

土師質土器や瓦がやや多く出土いている以外は、遺物はあまり多くない。陶磁器には、様々な時期のものが含まれる（図71－18～21、図77－130・162、図78－11）。その中には18世紀末以降のものも含まれる。

【15号土坑】（図47、図版36）

Ｂ－８区で検出した。Ⅲｂ２期の７号土坑を切っており、Ⅲｂ４期の27号溝に切られている。北側が攪乱に大きく破壊されている。円形に近い形状と思われるが、破壊された部分が多く確実ではない。東西の残存部分の幅は140cmで、深さは15cmである。

【19号土坑】（図47・48、図版35）

Ｂ・Ｃ－９・10区で検出した。Ⅲｂ２期の７号土坑を切っており、Ⅲｂ４期の14・20号土坑、ピット226、27号溝に切られている。長方形に近い不整形で、長軸の長さ380cm以上、短軸は220cmである。深さは40cmである。埋土最下層には、遺物が多量に含まれており、ゴミ穴の可能性が考えられる。

出土遺物は比較的多いが、瓦はさほど多くない。木製品が最も多数を占める。磁器には特徴が良く判るものがなく図示していないが、陶器（図80・81－40～44）は、文化元年前後の一括遺物と、大きな差は見られない。この点から、19号土坑がⅢｂ４期に下る可能性は残っている。土師質土器の皿（図91－16～22）が、ややまとまって出土しており、箸状木製品も大量に出土している。木製品では、漆椀（図117－７・９）や漆塗しゃもじ（図118－24・25）、曲物（図121－63～65）など、様々な種類のものが出土している。また、煙管が比較的まとまって出土している（図132－13～15・17・18）。

【22号土坑】（図47・48、図版36）

Ｃ－９区で検出したが、東側が攪乱で大きく破壊されており、全体の形状などは不明である。23号土坑を切っており、Ⅲｂ４期の14号土坑に切られている。南北の残存幅120cm、深さ20cmである。

【23号土坑】（図47・48、図版36）

Ｂ・Ｃ－９区で検出したが、東側が攪乱で大きく破壊され、更に22号土坑、Ⅲｂ４期の14号土坑に切られ、全体の形状などは不明である。南北の残存幅155cm、深さ10cmである。

【44号溝】（図47・49、図版36）

Ｂ－９・10区で検出された素掘りの溝で、北側はⅢｂ４期の27号溝に切られ、南端は途切れて終わる。19号土坑の脇で、避けているかのように配置されていることから、同時に存在した可能性が高いと考え、当期に含めた。方向は、Ｎ－64°－Ｗである。上幅45cm前後、下幅25～35cm、深さ20cmで、断面形状は逆台形を呈する。

(7) Ⅲｂ４期の遺構（図50・51、図版37～39）

切り合い関係から、Ⅲｂ期の中で最も新しい段階の遺構を拾いあげたもので、確実に当期に帰属する遺構が確認されているのは中区だけである。小規模な石組溝や土坑が存在するだけである。当期に帰属する２号溝の埋土からは、多量の炭化物とともに、18世紀末から19世紀初頭の陶磁器類がまとまって出土した。このことから、文化元年の火災により、二の丸建物群が全焼した後、３層の整地を行う以前の片づけの際に、臨時的に構築された遺構群である可能性が高い。

【２号溝】（図51、図版37）

Ｃ－10区からＧ－10区にかけて検出した東西方向の石組溝である。緩やかに鍵の手状に屈曲する。Ｄ－10区で３号溝が接続する。Ⅲｂ３期の４号建物や18号・19号柱列を切っている。底面のレベルは、微妙な凹凸があるが、東側より西側が低く、東から西に流れていたものと推定される。ゆるやかに屈曲していくため、方向を厳密に計測できないが、Ｅ・Ｆ－10区の比較的直線的な部分では、Ｎ－18°－Ｗ程度である。掘り方は、あまり明瞭には確認できていない。断面観察をした部分では、幅150cm程、深さ10cm程の、浅くて幅広い掘り方である。側石は、１段のみ並べ、ほとんどは川原石であるが、一部扁平な角礫も使われている。長軸を溝と直交差する方向に並べるものが多いが、必ずしも全てではない。側石の内法の幅は30～50cmで、深さは10cm程度である。Ｆ・Ｇ－10区では、南北両側とも、抜き取り溝を掘って石が抜き去られている。埋土には炭化物が多く含まれ、遺物もまとまって出土している。陶磁器・土師質土器・瓦・金属製品が多く出土している。陶磁器は、18世紀末から19世紀初頭の一括資料として評価できるものである（図73・74－54～58・61～67、図77－163、図81～83－60～74・76～86）。陶器では、甕や擂鉢が、比較的多く出土している。土師質土器では、皿（図91－32～34）が多く出土している他、焼塩壺が出土している（図93－60・61・67）。焼塩壺は畿内系のもので、在地系のものは含まれない。

【３号溝】（図51、図版38）

Ｄ－９・10区で検出した南北方向の石組溝で、南側は２号溝に接続する。北側は４号土坑に壊されている。Ⅲｂ３期の４号建物を切っている。検出した長さが1.5m程と短いため、方向を厳密に計測するのは難しいが、ほぼＮ－21°－Ｗである。掘り方は明確にはとらえられておらず、ごく浅いものと思われる。側石は川原石を使い、１段のみ並べる。側石の内法幅は30cm前後である。埋土には炭化物が多量に含まれている。

【６号溝】（図51、図版38）

Ｃ－８区から南東方向に延び、Ｃ－９区で東に屈曲しＥ－９区に至る石組溝である。４号土坑に切られて、一部が壊されている。東西に延びる部分の方向は、Ｎ－20°－Ｗである。掘り方は、石の部分を掘り下げる程度と思われる。川原石を一段並べて側石とし、ほとんどは長軸を溝に直交させる。石組の内法幅は、40cm程度である。量は多くないが、陶磁器・土師質土器・瓦などが出土している。陶磁器は、２号溝など、当期の他の遺構出土遺物と基本的に共通する（図74－68～70、図82－87～90）。

【27号溝】（図51、図版39）

Ｂ－８・９区で検出した南西から北東方向に延びる、素掘りの溝である。北側は攪乱で壊され、南側は調査区外に延びる。Ⅲｂ３期の15号・19号土坑、44号溝などを切る。わずかに曲がるが、方向はおおむねＮ－11°－Ｅ。断面形状は逆台形で、上幅40～60cm、下幅15～30cm、深さ30cm程度である。底面の標高は、南端より北端が約15cm低く、南から北へ流れたものと推定される。量は多くないが、陶磁器・土師質土器・瓦などが出土している。陶磁器は、当期の他の遺構出土遺物と基本的に共通する（図74－71・72、図82－92、図84－93・94）。

【４号土坑】（図51、図版38）

Ｄ－９区で検出した、南北230cm、東西210cmの、ほぼ円形を呈する土坑である。３号溝・６号溝を切っており、当期の遺構の中では最も新しい。断面形状は擂鉢状で、深さは40cmを測る。埋土の最下層から自然木が出土しており、水をためるような機能を想定することも可能と思われる。

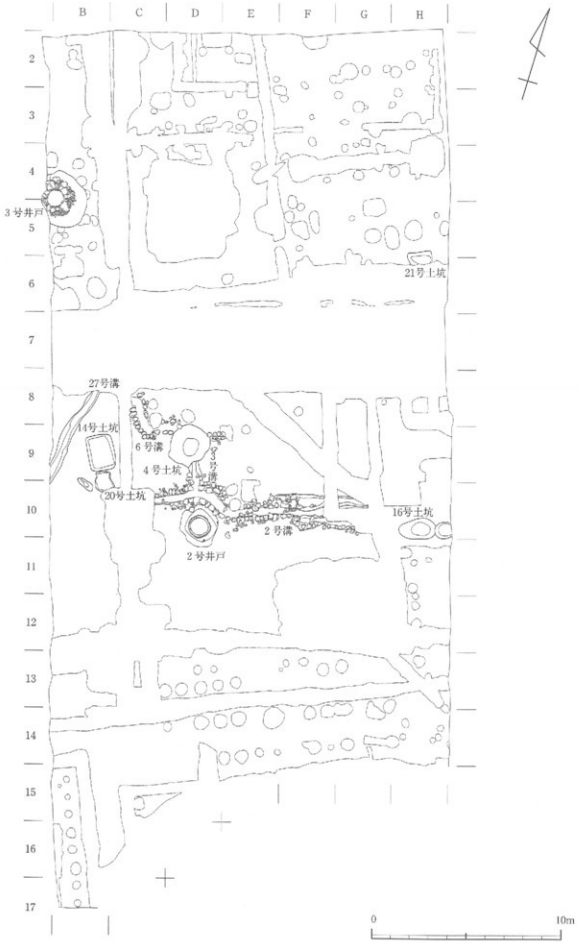
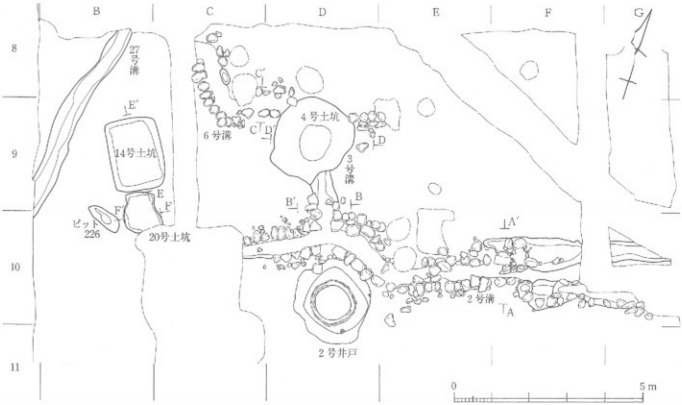


図50　二の丸第17地点Ⅲｂ４期遺構配置図
Fig.50　Distribution of features belonging to Edo Period (Phase Ⅲb4) at NM17



1 7.5YR3/1黒褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 灰黄褐色粘質シルトブロック・炭化物を少量含む 焼土粒を多量に含む
2 10GY6/1緑灰色 粘土質シルト 粘性中・しまり中 暗褐色砂質シルトブロックを含む 炭化物・φ1~2cmの曜・木材を含む
3 10YR黒褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強

1 10YR5/1灰色 シルト 粘性中・しまり強 炭化物を微量含む
2 1と同じだが炭化物を多量に含む

1 7.5Y4/1灰色 シルト 粘性中・しまり中 φ1cm未満の小曜を含む 炭化物を少量含む 酸化して黄褐色に変色した部分が多い

1 7.5GY5/1緑灰色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 φ1~3cm程の礫・炭化物を微量含む
2 7.5GY4/1暗緑灰色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 オリーブ灰色粘土質シルトブロック・炭化物を少量含む 瓦を少量含む
3 10YR2/1黒色 砂質シルト 粘性中・しまり弱 1がまだらに混じる φ3cm程の曜を含む
4 5Y3/1オリーブ黒色 砂質シルト 粘性中・しまり中 暗緑灰色砂質シルトのブロックを少量含む 瓦を含む
5 10Y4/1灰色 砂質シルト 粘性中・しまり弱 φ2~5mmの曜を少量含む 焼土粒を含む
6 7.5Y5/1灰色 砂質シルト 粘性中・しまり中
7 10Y4/1灰色 砂質シルト 粘性中・しまり強 微量の炭化物を含む

1a 10YR4/1褐灰色 シルト 粘性なし・しまり中 炭化物を少量含む φ5mm以下の礫を多数含む
1b 10YR6/1褐灰色 砂質シルト 粘性なし・しまり弱 炭化物を少量含む
1c 10YR5/2灰黄褐色 シルト 粘性なし・しまり中 褐灰色シルトがまだらに混じる 大型の炭化材・瓦・凝灰岩・土器・礫など比較人の礫を多量に含む
2 7.5YR3/2黒褐色 シルト 粘性弱・しまり中 木製品を多く含む 炭化物・曜は1c層に比べ少ない

1 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト 粘性なし・しまり弱 2に由来する黒褐色シルトブロックをまだらに含む
2 10YR3/1黒褐色 シルト 粘性なし・しまり弱 φ1cm以下の炭化物粒を少量含む
3 10YR4/1褐灰色 シルト 粘性弱・しまり弱

図51 二の丸第17地点Ⅲｂ４期の遺構
Fig.51 Features belonging to Edo period (phase Ⅲb4) at NM17

【14号土坑】(図51、図版39)

B・C－9区で検出した、190cm×140cmの、ほぼ隅丸長方形の平面形を呈する土坑である。Ⅲb3期とした19号・22号・23号土坑を切っている。深さは30cm程度で、埋土には1a～1c・2層に区分した。2層は、有機物を大量に含む黒褐色土である。1c層には、大型の炭化材や陶磁器・瓦などがまとまって捨てられている。このような状況から、ゴミ穴の可能性が考えられる。

陶磁器・土師質土器・瓦・木製品が多数出土している。陶磁器は、18世紀末から19世紀初頭の一括資料として評価できるものである（図73－41～50、図80・81－45～54）。土師質土器では、皿が多量に出土している（図91－23～29）。焼塩壺は幾内系のものである（図93－59）。木製品では、箸状木製品がやや多いほか、漆椀（図117－6）なども出土している。金属製品には、簪（図133－23・24）などがある。

【20号土坑】(図51、図版39)

B・C－9・10区で検出した、105cm×95cmの、方形に近い不整な形状を呈する土坑である。Ⅲb3期とした19号土坑を切っている。深さは約20cm。

【16号土坑】(図50、図版39)

この16号土坑と次の21号土坑は、Ⅲb期の中での細別時期が不明のものである。このⅢb4期の項で、合わせて記載するが、当期に含まれるとは限らない。平面図には、Ⅲb1期からⅢb4期の全てに記載してある。

H－10区で検出した。200cm×110cmの、ほぼ楕円形を呈する。ピット233に切られる。深さは30cm程度。

【21号土坑】(図50、図版39)

H－5・6区で検出。不整な方形を呈するが、南側は攪乱で壊されている。東西幅130cm、深さ25cmである。

(8) Ⅳa期の遺構（図52～58、図版40～46）

北区・中区・南区のほぼ全域に礎石建物が展開する。。中区・南区には、1～3号建物が隣接して造られている。北区南東よりには、8号建物が造られる。このように礎石建物が調査区全体に展開するのは、当期以外にはなく、極めて特異である。文化元年の火災に伴う3層の整地直後の時期であり、もともとは建物群が存在しない区域を利用した、正式な復興までの期間に一時的に置かれた建物群である可能性が高い。なお1～3号建物は、N－23.5°－Wの方向で柱筋をそろえている。相互の関係については図58にまとめておいた。これらに伴う19～24・30号溝も含め、全て同じ方向で造られているため、これらの遺構の方向は、個々の中では記載しない。

【8号建物】(図53、図版45)

F～H－4～6区で検出された礎石建物である。図53では、6尺3寸を一間とした半間等間隔のメッシュを加えたが、柱の位置がこれに合致するため、6尺3寸を一間ととした柱間間隔を基準としていると考えられる。方向はN－24°－Wである。柱1～3・5・7・9は、1間間隔で並ぶ。柱4・6・8は、これらとは半間ずれた位置にあたる。掘り方が明瞭に確認できたものは、径40～60cm、深さ30～40cmの円形を呈し、小礫を充填して根固めとする。柱6と柱8の間は、礫や小礫が敷かれたように分布しており、本建物に関連するものと思われる。この礫敷がⅣb期の7号建物に切られること、柱9がⅣb期の1号塀に近すぎることから、Ⅳa期とした。しかし柱7から、大保年間の年号を墨書した陶器が出土しており（図87－149）、Ⅳb期に下る可能性もある。

【31号溝】(図53、図版46)

C－5・6区で検出した、北西から南東方向へ延びる石組溝である。攪乱により確実でないが、向きを変えて延びていく可能性もある。比較的直線的な東側の側石で測った方向は、N－44.5°－Wである。上幅75～100cm、下幅65～90cm、ごく浅い掘り方に、川原石を1段並べて側石とする。側石の内法幅は40cm程度と思われる。

【1号建物】(図57、図版40)

調査区南西隅のB－14～17区で検出した礎石建物である。南側と西側は調査区外へ続く。北辺と東辺は、上幅

図52　二の丸第17地点Ⅳ a 期遺構配置図
Fig.52　Distribution of features belonging to Edo Period (Phase Ⅳa) at NM17

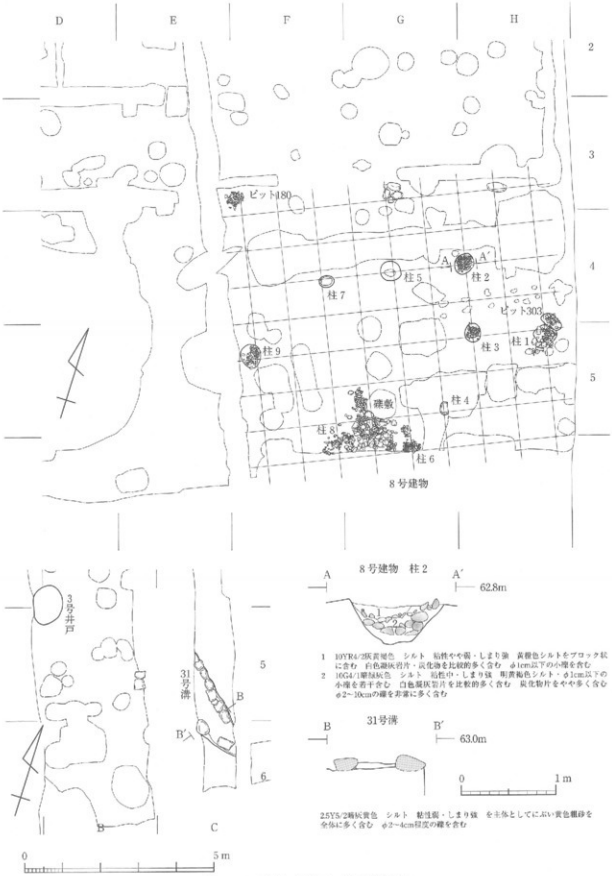


図53　二の丸第17地点Ⅳa期の遺構（1）
Fig.53　Features belonging to Edo period (phase Ⅳa) at NM17(1)

95～120cm、下幅55～75cm、深さ50cm前後の溝を掘り、内部に5～15cm程度の川原石を主体とした礫を詰め込む。この上に礎石が置かれたと考えられるが、抜き取られたものと思われ残されていない。溝に囲まれた内部には、径30～65cm、深さ10～15cmのほぼ円形の掘り方に、5～10cm程度の川原石を入れて根固めとした柱穴が並んでいる。礎石は取り去られて残っていない。これらは、1間を6尺3寸とした場合の、半間等間で並んでおり、柱間寸法は6尺3寸を基準とするものと考えられる。外周の基礎構造と大きく異なることから、床束と考えられる。

東辺の東側にも、柱穴が確認されている。東辺から、1.5間の半分の距離に南北に並ぶ。柱11は北辺から1間半、柱12は2間の柱筋に合う。しかし柱13は、若干南にずれており、ここは間隔が異なっていたのかもしれない。3基とも径55cm前後、深さ15cm程で、根固め石は認められない。1号建物に付属する施設と思われる。

1号建物の北辺から東側には石列が延び、2号建物最西辺の位置で南に折れる。1号建物と2号建物をつなぐ、塀のような施設の基礎部分の可能性が考えられるが、保存状態が良くないこともあり、確定はできなかった。

この1号建物の北辺・東辺と同様の遺構が、第1地点の調査において発見されている。第1地点の調査区は、今回の調査区の南西隅にほぼ隣接する。第1地点で溝1とされた遺構については、断面形状や小礫を多量に含む埋土の状況が、1号建物の北・東辺と類似する。第1地点の調査が行われた時点では、調査成果を国土座標上に位置づけることが行われていなかったので、縮尺500分の1地形図上で、既存建物の位置関係から合成したものが、図57である。これによると1号建物は、東西2間半、南北7間以上の大きさの建物と推定できる。

北辺と東辺の溝状部分から瓦が多量出土しているが、他の遺物はごく少ない。

【2号建物】(図55・56、図版41・42・43)

C列から日列の、12列以南に展開する礎石建物である。17号溝に切られており、柱58と59で、29号溝と14号溝を切っている。東辺は屈曲をくり返しており、いくつかの建物が複雑に連接するものであったと考えられる。最も北側の柱筋は、柱3で南に折れ、半間南の柱5から柱6をへて、さらに東に延びるものと思われる。この柱筋と、柱36・37の間隔は、2間半となる。ピット255・256としたものは、この2間半のちょうど半分の位置に並んでおり、2号建物に伴う礎石である可能性が考えられる。そのため、図58の模式図のような形を想定した。

礎石には、規模の大小や根固めの状況から、2つの様相が認められた。大規模なものは、掘り方の径70cm前後、深さ40cm程で、川原石を充填して根固めとし、30～55cmの大振りな厚みもある礎石を据える。建物全体の重量を支える、主要な柱と考えられる。小規模なものは、掘り方の平均的な径20cm前後、深さは浅く10cm以下で、根固め石を伴わず、20～30cm程の扁平な川原石を直接置いて礎石とする。これは、主要な柱の間に置かれた柱や、床束を支えた礎石と考えられる。建物の中での配置状況は、図58の模式図で、丸印の大小として表した。礎石同士をつなぐ地覆石が、外周を中心に認められる。地覆石も、小規模な礎石同様、浅い掘り方に直接置かれる。

2号建物には、石敷が伴う。柱18と柱19の間から北側に、小礫が敷き詰められており、2間×半間の範囲が石敷になっていたと考えられる。石敷は、外側の柱筋よりもさらに外まで延び、19号溝の側石までおよんでいる。

柱の間隔は、6尺3寸を一間とした半間等間隔である。ただ、東側の柱38・柱48・柱59より東側は、東西方向では4尺2寸となっている。柱61と63の間も4尺2寸となっている。柱59と60の間には、地覆石が一部残っている。4尺2寸は、6尺3寸の2間分を3等分した数値で、塀になる遺構に多い柱間寸法である。そのため、この2号建物から外側に延びる部分も、この建物に附属する塀のような施設となる可能性が考えられる。

【19号～23号溝】(図55・56、図版41・42)

2号建物の西側をめぐる石組溝で、2号建物の形状に沿って屈曲しており、雨落溝と考えられる。遺物の取り上げのため、各辺ごとに異なる番号を付けたが、同一の溝である。底面レベルは、次の24号溝も含めて、場所によって高低があり、明確に傾斜していく方向は見い出せなかった。上幅50～90cm、深さ10cm前後の掘り方に、川原石を1段並べて側石とするが、抜き取られている部分も多い。長辺を溝の方向に合わせる場合と、直交するものの両方がある。扁平な川原石を、立てて据える部分もある。側石の内法幅は、25～40cmである。

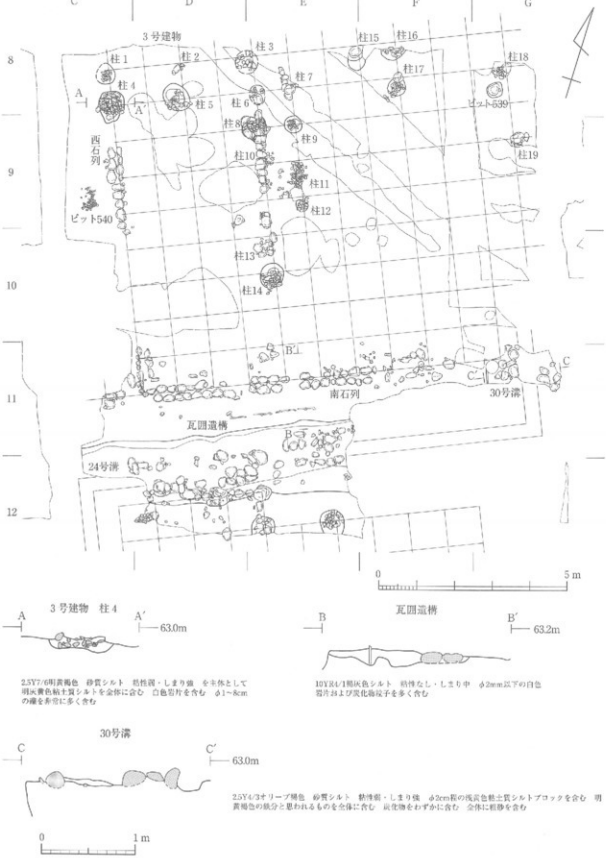
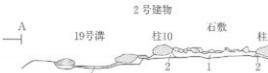


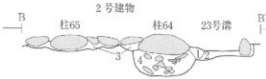
図54　二の丸第17地点Ⅳ a 期の遺構（2）
Fig.54　Features belonging to Edo period (phase Ⅳa) at NM17(2)

図55　二の丸第17地点Ⅳ a 期の遺構（3）
Fig.55　Features belonging to Edo period (phase Ⅳa) at NM17(3)

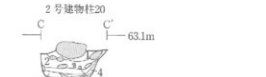


1　25Y4/2暗灰黄色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　φ1cm程の炭化物を多く含む　明黄褐色土小ブロックを多く含む　石敷掘方
2　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　黒褐色土ブロックを多く含む　少2～8mm大の炭化物を含む　掘方

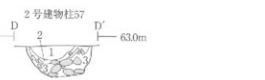
1　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　φ1cm程の炭化物を多く含む　明黄褐色土小ブロックをわずかに含む　礎石抜取



1　7.5YR3/3暗褐色　シルト　粘性弱・しまり弱　黄褐色土・黒褐色土ブロックを多く含む　φ5mm程の炭化物をわずかに含む　23号溝石敷抜き取り埋土
2　10YR2/2黒褐色　砂質シルト　粘性きわめて弱・しまり中　明黄褐色土ブロックを多く含む　φ1～2mmの炭化物を多く含む　23号溝埋方
3　10YR5/3にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　黒褐色・淡黄橙色土ブロックを多く含む　25号建物礎石掘方
4　10YR2/1黒色　シルト　粘性中・しまり弱　浅黄色土ブロックを多く含む　柱64礎石根石掘方



1　25Y6/4にぶい黄色　シルト　粘性きわめて弱・しまり弱　黒褐色土・明黄褐色土ブロックをわずかに含む　φ1cm程の小礫をごくわずかに含む
2　7.5YR3/3黒褐色　シルト　粘性きわめて弱・しまり中　明黄褐色土ブロック・炭化物をわずかに含む　こぶし大の円礫を多く含む
3　25Y6/6明黄褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　黄褐色土ブロックをわずかに含む
4　3と基本的に同じ　ただし円礫は含まない
5　10YR4/6褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　明黄褐色土小ブロックをわずかに含む



1　7.5YR4/3灰褐色　シルト　粘性中・しまり中　φ2mm程の炭化物をごくわずかに含む　赤色土粒（鉄分）を多く含む
2　25Y6/4にぶい黄色　シルト　粘性きわめて弱・しまり弱　黒褐色・明黄褐色土ブロックをわずかに含む　人頭大の円礫を多く含む
3　10YR5/4にぶい黄褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　黄褐色土ブロック・人頭大の円礫を多く含む

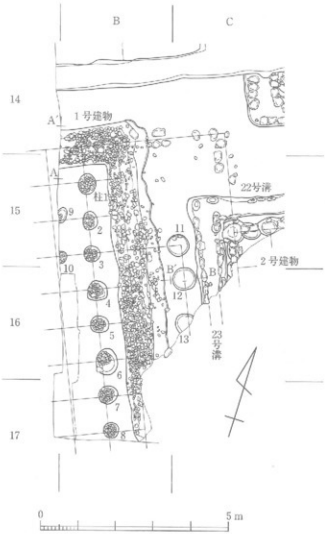
10YR7/6　明黄褐色　砂質シルト　粘性中・しまり中　梅灰色土ブロックを含む

1　25Y5/3黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　黒褐色土・淡黄粘色土・黄粘色土ブロックを不均質に含む
2　10Y3/4暗黄緑色　シルト　粘性弱・しまり中　黒褐色・梅灰色土ブロックを多く含む　明黄褐色土ブロックをわずかに含む
3　2.5Y4/1黄灰色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　黒褐色・梅灰色土ブロックを多く含む　明黄褐色土ブロックをごくわずかに含む

1　10YR7/2にぶい黄褐色　シルト　粘性きわめて弱・しまり強　黄橙色土をブロック状に含む
2　10YR7/4にぶい黄橙色　シルト　粘性きわめて弱・しまり弱　黒褐色土ブロック・黄橙色土ブロックを不均質に含む

1　10YR5/6にぶい黄褐色　細砂　粘性なし・しまりきわめて弱　にぶい黄橙色粘土ブロックをわずかに含む
2　10YR6/3にぶい黄褐色　シルト　粘性きわめて弱・しまり中　炭化物・明黄褐色土ブロックをわずかに含む

図56　二の丸第17地点Ⅳ a 期の遺構（4）
Fig.56　Features belonging to Edo period (phase Ⅳa) at NM17(4)



1　N3/0暗灰色　シルト質粘土　粘性中・しまり弱　黒色シルトをブロック状に含む　φ5～15cmの円礫をわずかに含む
2　N2/0黒色　砂質シルト　粘性中・しまり中　黒色シルトをまだらに含む　φ2～15cmの円礫を多く含む

10YR4/2灰黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　に赤い黄褐色土ブロックを非常に多く含む　黒褐色土ブロック・φ1～2mmの炭化物をわずかに含む　黄褐色土ブロック・φ1～5cm大の円礫をごくわずかに含む

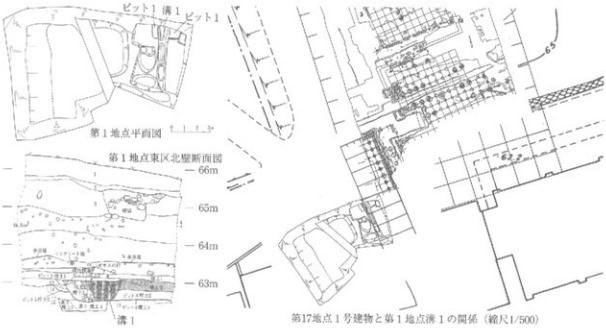


図57　二の丸第17地点Ⅳa期の遺構（5）
Fig.57　Features belonging to Edo period (phase Ⅳa) at NM17(5)

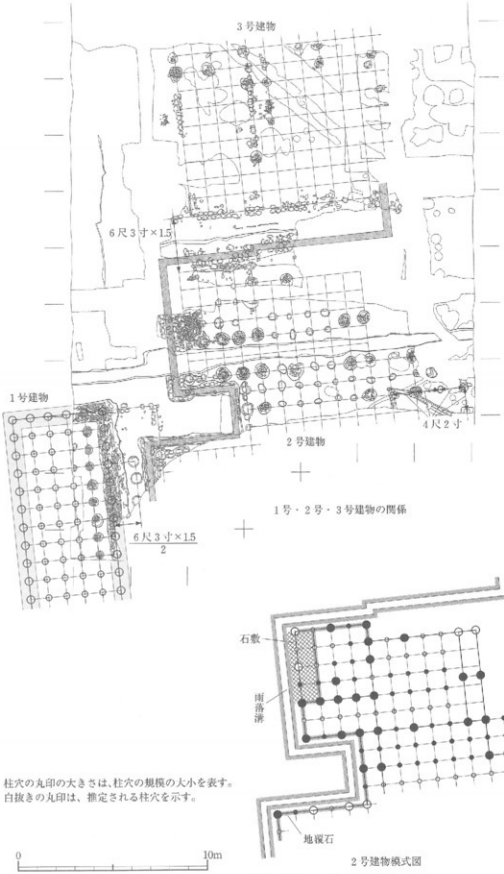


図58　二の丸第17地点Ⅳa期の遺構（6）
Fig.58　Features belonging to Edo period (phase Ⅳa) at NM17(6)

【24号溝】（図55、図版43）

2号建物と3号建物の間に、東西に延びる石組溝である。位置関係から、19号溝・30号溝に続くものと考えられる。側石は動かされているものが多いが、西側と東側では、位置関係がずれるため、小さく鍵の手状に屈曲するものと考えられる。上幅170～190cm、下幅105～130cm、深さ20cm程度の掘り方に、川原石を用いて側石とする。敷石は、一部2段積まれているところがあるが、ほとんどは1段である。敷石の内法幅は、30cm程度と思われる。瓦が多数出土している。土師質土器がやや多い以外、他の遺物はわずかである。

【3号建物】（図54、図版43・44）

C～G－8～11区に広がる礎石建物である。3号建物は、3層上面の精査の段階では確認できなかった。南辺と西辺の石列は、4層上部上面で確認した。調査の進展により、この内部に展開する柱穴が3層上面から掘り込んでいることが判明した。調査後の検討によって、南辺・西辺の石列も、一連の建物を構成することが判明した。図54では、6尺3寸を一間とした、半間等間隔のメッシュを加えておいたが、石列や柱穴がこれに合致するため、6尺3寸を一間とした柱間間隔を基準としているものと考えられる。なお3号建物は、2号建物と南北の柱筋を合わせて造られている。また3号建物の南辺は、2号建物北端の柱筋から、1間半の位置にあたる。

南と西の石列は、扁平な川原石を、地覆石状に並べている。南石列は、西石列につながる位置で、北に分岐している。ただ、この場所より西側にも、南石列は続いていく。柱10から南側にも、地覆石が並ぶ。遺物の項で7号溝としているものは、この地覆石列の脇の浅い窪みのことである。これらの石列以外に、径30～70cm、深さ15cm前後の、円形の掘り方に根固め石を入れた礎石が検出されている。

【30号溝】（図54、図版45）

G－11区で検出した石組溝である。攪乱によって破壊され、ごく一部を確認したのみである。24号溝が東側のH列では検出されないことから、24号溝が北に直角に折れ、30号溝となる可能性が高い。ただ、より北側への延び方については判らない。遺存状況が悪く、掘り方の状況などは判然としない。川原石を用いて側石とするが、動かされている可能性が高く、正確な内法幅などは判らない。

【瓦囲遺構】（図54、図版44）

D・E－11区の、3号建物と24号溝の間で検出された。板塀瓦を立て並べて構築する。東西の長さは220cmで、西端は北へ若干折れる。掘り方の範囲は明確にできなかったが、3号建物の南石列と同時に構築されている。3号建物に付随する施設と考えられるが、性格は不明である。

【17号溝】（図55・56、図版46）

B－14区からH－13区に延びる東西方向の素掘りの溝である。2号建物を切り、次のⅣb期の4号塀に切られることから、この区域の土地利用が大きく変わる際に一時的に造られた可能性を考え、当期に含めた。わずかに蛇行しているが、ほぼ直線的に延びる。おおよその方向は、N－23.5°－Wである。底面レベルは、西端より東端が25cm程低くなる。C列で、北側に幅が広くなっており150cm程あるが、それ以外の部分では70～100cm程度である。深さは50cm前後で、壁はほぼ垂直に掘られている。瓦が多く出土しているが、他の遺物は少ない。

【14号溝】（図55・56、図版46）

G・H－14区で検出された、丸瓦の凹面を上にして並べた溝である。2号建物の柱58・59に切られる。東半部の比較的直線的に延びる部分の方向は、N－41.5°－Eである。幅15～30cm、深さ10cmの掘り方の中に、丸瓦の凹面を上にし、玉縁を東に向けて並べている。

【29号溝】（図55・56、図版46）

G－14区で検出された、丸瓦を伏せて並べた暗渠である。2号建物の柱58に切られる。方向はN－26°－W。幅25cm、深さ15cmの掘り方の中に、丸瓦を伏せて並べている。

(9) Ⅳb期の遺構（図59～62、図版47～54）

調査区の中程から東よりの部分に、溝の中に柱を立てた塀が、屈曲しながら南北に展開する。北区では、この南北方向の塀をはさんで、東側では建物跡や柱列、土坑が検出されており、西側でも多数の柱列が存在する。一方中区・南区では、この塀の西側には、ほとんど遺構は確認できず、東側にのみ柱列が存在する。Ⅳ期の単独に存在するピットについては、Ⅳa期に遡るか、Ⅳc期に下ることが確実なもの以外は、Ⅳb期に含めている。

【1号塀】（図60・61、図版47）

1～5号塀は、いずれも溝を掘った中に柱を立てた、連続する一連の塀であるが、途切れるところで別の番号を付した。方向は、4号塀の南側が斜めに折れる部分以外は、N－23.5°－Wと一致すると考えて間違いない。柱間寸法は、全て4尺と考えられる。1～4号塀では、瓦や木製品が多数出土しているが、他の遺物は少ない。

1号塀は、E・F－4～6区で検出した。Ⅳc期の16号溝に切られる。掘り方は、幅50～70cm、深さ40～60cmで、壁は垂直に近く掘られている。柱3と柱4の間が浅くなっているが、この部分にはⅢb2期の32号溝の側石が存在し、これに遮られたものであろう。柱1・4・5で柱根が残存していた。柱1は径17cmの丸材で、塀を構築した当初から据えられたものと考えられ、柱根が掘り方底面に接する。柱4・5の柱根は、掘り方を掘り直して据えられており、柱底面は掘り方の底まで達しない。補修のために、付け加えられた柱と思われる。径は柱4が16cm、柱5が11.5cmである。補修用の浅い柱には、木の板や瓦を用いた礎板が伴う。

【2号塀】（図60・61、図版47）

E－2～4区で検出した。6号柱列に切られ、Ⅳc期の1号柱列・16号溝にも切られる。掘り方は、幅50～65cm、深さは一部浅い部分もあるが50～60cmで、壁は垂直に近く掘られている。柱3・4・6で柱根が残っていた。いずれも、掘り方底面に接するものである。礎板石などは認められない。柱4が角材で柱3・6は丸材であった。太さは13～16cmである。

【3号塀】（図62、図版48・50）

G－8区からG－10区にかけて検出された。北側は攪乱で破壊されている。南側の4号塀と途切れる部分には、Ⅲb2期の3号木樋が存在し、この木樋に遮られて溝状の掘り込みを途切れさせざるを得なかったものと推測される。南端のピット32は、柱6の位置に重なるため、改修した際の柱穴の可能性が考えられる。掘り方は、幅55～75cm、深さは70cmで、柱の位置だけさらに10～20cm深くなっている。壁は垂直に近く掘られている。柱1～5で柱根が残存していた。いずれにおいても、掘り方底面に接する構築当初の柱以外に、掘り方底面より浅い、掘り直して据えられた柱が1本ないし2本認められた。後者は補修のためであろう。いずれにおいても、礎板石などは認められない。柱4の当初から据えられたものが太さ13cmの角材である以外は、丸材である。柱の太さは、当初から据えられたものが径15cm前後、補修用のものは、径12～15cmである。

【4号塀】（図62、図版48～50）

G－10区からH－13区で検出した。南北両端とも途切れる。10号柱列および、Ⅳc期の1号溝・13号溝に切られる。Ⅳa期の17号溝を切っている。南側のH－13区の部分では、北西から南東方向へ、斜めに屈折する。この部分の方向は、N－58°－Wである。掘り方は、幅55～80cm、深さは約60cmで、柱の位置だけさらに10～20cm深くなっている。壁は垂直に近く掘られている。柱2・3で柱根が残存していた。いずれも掘り方底面に接するもので、丸材である。柱の径は、柱2が15cm、柱3が12cmである。柱7で、礎板石が認められる。

【5号塀】（図60、図版49）

G・H－6区の、攪乱を免れた部分で検出した。東西方向に延びる溝状の遺構で、北側の一部が残存するだけで、幅は不明である。垂直に近い角度で掘られており、深さは95cm前後である。柱根・柱痕跡あるいは礎板石は見つかっていないが、断面形状が他の塀と類似することから一連の塀の一部と考えた。

【6号柱列】（図60・61、図版50）

E－2・3区で検出された。2間分のみの検出である。2号塀を切っているが、柱穴の位置が、2号塀の柱のすぐ北東側に接する。方向はN－23.5°－W、柱間寸法4尺で、いずれも2号塀と共通する。幅30～40cm、深さ10cm前後の掘り方に、川原石を置き礎石としている。柱が埋められないため、柱列として、単独で自立することは難しいと考えられる。位置関係も含めて考えると、2号塀を補修するための柱列の可能性が高い。

【7号柱列】（図60・61、図版50）

F－4・5区で検出された南北方向の掘立柱列で、1号塀の東側にほぼ平行し、両者の間隔は3尺5寸程度である。方向はN－23.5°－W、柱間寸法4尺で、いずれも1号塀と共通する。柱の位置も、1号塀の柱の位置と合致する。柱2では、柱根が1号塀の方向に大きく傾いて残っていた。径13.6cmの丸材である。柱筋の方向を重視して、柱3を7号柱列を構成するものとしたが、ピット378でも柱根が1号塀の方向に傾いて残っており、こちらが当柱列の一部となる可能性も残る。また柱1の南側に存在するピット152は、柱間寸法が合わないため含めていないが、当柱列の一部となる可能性がある。1号塀との位置関係や柱根の状況から、1号塀の控え柱、あるいは補修の際に加えられた控え杵の可能性が考えられる。柱2からは、比較的多くの遺物が出土している。

【8号柱列】（図62、図版50）

G・H－8～12区で検出した南北方向の掘立柱列で、3号塀の東側にほぼ平行し、方向はN－22.5°－W、柱間寸法は4尺である。柱の位置も、1号塀の柱の位置に合致する。なおピット220は、柱間間隔が合わないため別にしたが、柱筋が合致することから、この部分だけ柱間間隔がずれていた可能性もある。形状は柱穴ごとの違いが大きいが隅丸方形を基調とすると思われる。平均的な大きさは40～60cm、深さは30cm前後である。柱1～4・6・7に柱根が遺存しており、柱2では2本の柱根が残っていた。いずれも丸材で、径は11～16cmである。

【9号柱列】（図62、図版50・51）

H－11・12区で検出した南北方向の掘立柱列で、4間分を検出した。7号柱列のすぐ東側に並ぶ。柱間寸法が、1間6尺3寸とした場合の半間等間で並んでいることから、掘立柱建物の一辺である可能性も高いが、組み合う柱穴が確認できなかったので柱列とした。方向はN－23°－Wである。掘り方はほぼ円形で、径50～60cm、深さ40～45cmである。柱1～3に柱根が残っていた。いずれも径14cm前後の丸材である。

【10号柱列】（図62、図版51）

H－13区で検出した北西から南東方向へ延びる掘立柱列。4号柱列とほぼ同じ位置に造られており、4号塀より新しい。Ⅳc期の1号溝・13号溝に切られる。柱穴の位置が、4号塀の柱の位置とほぼ重なっており、4号塀を改修した柱列の可能性がある。方向はN－63.5°－W。柱4に柱根が遺存していた。14cm×15cmの角材である。

【11号柱列】（図60・61、図版51）

G・H－2区で検出した東西方向の掘立柱列で、3間分を検出した。柱間寸法は4尺で、方向はN－24.5°－W。柱穴形状はほぼ円形で、径35～45cm、深さ30cmである。柱1～4の全てに、柱根が遺存していた。柱根は、径11～16cmの丸材である。全ての柱穴に礫が認められるが、柱を横から押さえる形で入れられたものである。

【12号柱列】（図60、図版51）

F～H－3区で検出した東西方向の掘立柱列である。柱2と柱3の間に存在したはずの柱が検出できていないが、3間分を検出した。柱間寸法は5尺で、方向はN－26.5°－Wである。この柱2から柱3の間は、先行する石組溝である69号・32号溝が存在する。柱2と柱3は、これらの溝の側石や裏込め石の間に造られており、掘り方がこれらの石に制約され、柱よりわずかに大きい程度である。このような状況のため、間の柱がとられなかった可能性がある。また、西端の柱3のところで北に直角に折れ、ほぼ5尺のところにピット337が存在し、一連の柱列を形成する可能性がある。柱1は径30cm、深さ25cm程の、ほぼ円形である。柱2・3で柱根が残っていた。いずれも径15cm前後の丸材である。

【13号柱列】（図60・61、図版52）

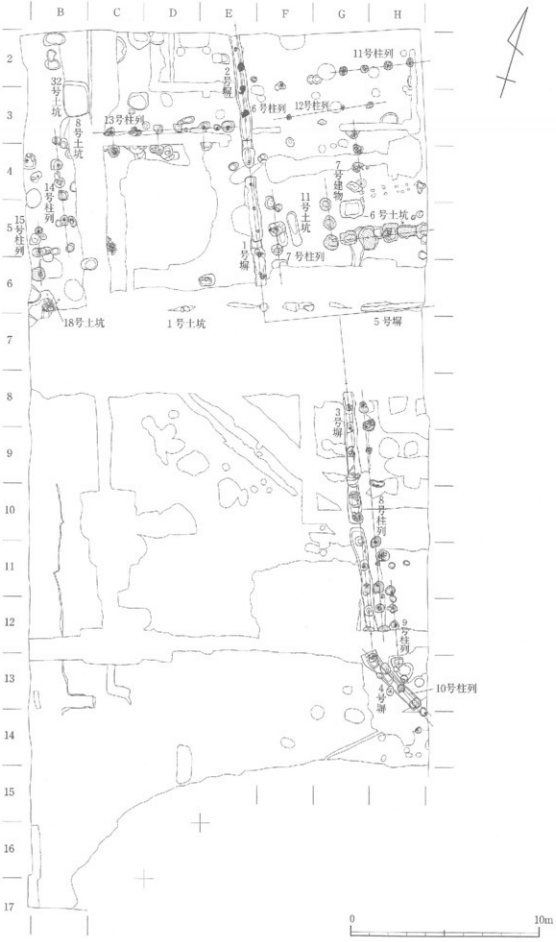


図59　二の丸第17地点Ⅳb期遺構配置図
Fig.59　Distribution of features belonging to Edo Period (Phase Ⅳb) at NM17

図60　二の丸第17地点Ⅳb期の遺構（1）
Fig.60　Features belonging to Edo period (phase Ⅳb) at NM17(1)

図61　二の丸第17地点Ⅳb期の遺構（2）
Fig.61　Features belonging to Edo period (phase Ⅳb) at NM17(2)

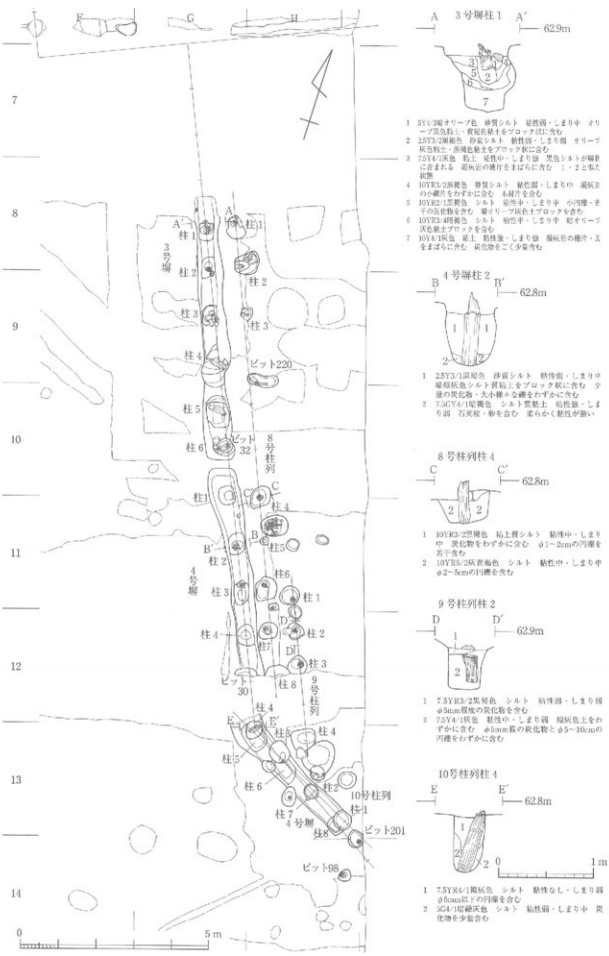


図62 二の丸第17地点Ⅳb期の遺構 (3)
Fig.62 Features belonging to Edo period (phase Ⅳb) at NM17(3)

C～E－3・4区で検出した東西方向の掘立柱列で、5間分を検出した。主要な柱筋（柱1～6）の柱間寸法は4尺で、1本おきに南側に控え柱（柱7～9）が付く。控え柱との間隔は3尺5寸程度。方向はN－20.5°－Wと二の丸期の方向とは異なるが、東端が2号塀のところで途切れることから、両者が同時に存在した可能性が高いと考えて当期に含めた。この13号柱列の付近には、同様の柱穴が多数重なりあっている。攪乱が多いこともあり、組み合わせを復元できていないが、同じ場所で頻繁に造り替えられていた可能性がある。柱穴形状は個々の違いが大きい。平均的な大きさは50～60cm、深さは40cm前後である。柱1・2・5・6・9において、柱根が残存していた。柱5では、2本の柱根が残っていたほか、細い杭状の材もあった。柱9では、2本の柱根が残っており、その内1本は不整六角形に削られている。これ以外は、太さ12～16cmの丸材であるが、1面ないし2面、面取りされているものもある。柱4～6・9では、川原石や瓦を置いて、礎板としている。

【14号柱列】（図60・61、図版52）

B－3～5区で4間分を検出した南北方向の掘立柱列。柱間寸法は4尺8寸で、方向はN－24°－W。柱1が8号土坑を切る。柱穴形状は隅丸方形が多く、平均的な大きさは50cm前後、深さは40～55cmである。柱1・2・4で柱根が残っていた。柱1は不整八角形、柱2・3は5面程面取りされる。太さは14cm程である。

【15号柱列】（図60・61、図版52）

B－5・6区で検出した南北方向の掘立柱列で、2間分のみの検出である。柱間寸法は4尺で、方向はN－20.5°－Wである。Ⅳc期の瓦溜に切られる。掘り方形状は柱穴ごとの違いが大きい。大きさも35～70cmと違いが大きい。深さは40cm前後である。柱1～3の全てで、柱根が残存していた。柱1・2は径14.5cm程の丸材であったが、柱3は不整八角形に面取りされており、長辺で15.5cmの太さである。

【7号建物】（図60・61、図版53）

G・H－3～5区で検出された礎石建物である。Ⅳa期の8号建物を切り、Ⅳc期の16号溝に切られる。検出したのは南辺と西辺、それより北側に延びる部分である。1間を6尺3寸とした半間等間で柱穴が並ぶ。方向はN－24.5°－Wである。礎石は全て取り去られている。南辺と西辺は、やや不整な隅丸方形の掘り方が並ぶ。平均的な大きさは、幅80～100cm、深さ15～25cmで、柱3には根固め石が残っていた。西辺から1間、南辺から1間半の位置に柱9があり、これを含めて4基の柱穴が北に延びる。掘り方形状は不整形で、幅40～60cm、深さ15cm程度で、根固め石が充填される。遺物は比較的多く、下駄（図123－96・97）など木製品も出土している。

【1号土坑】（図60、図版54）

D－6区の攪乱を免れた部分で検出された。残存状況は極めて悪い。東西150cm以上、深さ25cm以上である。

【6号土坑】（図60・61、図版53）

G－5区で検出した。東西125cm、南北100cmのほぼ長方形を呈し、深さは65cm。断面形状は深い逆台形を呈する。木製品を中心に、比較的多くの遺物が出土しており、ゴミ穴の可能性がある。

【8号土坑】（図60・61、図版54）

B－3・4区で検出した。東側が攪乱で破壊され、32号土坑に切られる。南北165cm以上、深さ30cmである。

【11号土坑】（図60・61、図版54）

F－5区の6号柱列のすぐ東側で検出した。南北180cm、東西50cmの細長い溝状で、深さは40cmである。

【18号土坑】（図60・61、図版54）

北区南西隅のB－6・7区で検出した。西側が調査区外へ延び、攪乱や新しい遺構による破壊もあり、形状は判然としない。東西150cm以上、南北190cm以上である。溝状に深くなる部分があり、深さは45cmである。

【32号土坑】（図60・61、図版54）

B・C－2・3区で検出した。上部が攪乱によって大部分削平されているが、南北190cm、東西135cmの、隅丸長方形を呈する。深さは45cmで、壁は垂直に近く掘られている。

(10) Ⅳc期の遺構（図63～67、図版55～58）

北区では、礎石建物・柱列・土坑などが散在する。中区・南区では、東半部に石組溝が南北に延び、小規模な溝・土坑などが存在するが、西側には遺構はほとんど分布しない。また中区から南区では、埋土に2層が入り込んでいる遺構も多く、これらは2層の落ち込みとした。

【6号建物】（図64、図版57）

D・E－2・3区で検出した礎石建物で、東西2間、南北3間以上の南北棟である。東辺は1間ごとに礎石が確認できるが、西辺は柱6と柱7の間が途切れる。この途切れるところにピット350が存在し、当建物に伴う可能性もあるが、確実でない。柱間寸法は6尺で、方向はN－22°－W。掘り方は、ほぼ方形から長方形で、一辺50～70cm、深さ25cm前後である。根固め石は見られず、角礫や割られた川原石を据えて礎石としている。

【1号柱列】（図64、図版57）

D・E－2区で検出した東西方向の柱列である。礎石建物になる可能性も残る。柱間寸法5尺で、方向N－20°－Wである。径45cm前後の円形の掘り方の中に根固め石が見られるが、一部がモルタル状のもので固められていた。2層が分布せず、掘り込み面が判明しないため当期に含めたが、明治中期以降に下る可能性が高い。

【2号柱列】（図64、図版57）

E・F－2・3区で2間分を検出した東西方向の柱列。柱間寸法は4尺、方向はN－18.5°－W。柱穴はほぼ長方形で、長辺70～80cm、短辺40～55cm、深さ40～50cm。柱2で柱根が残っており、径12cmの丸材である。

【3号柱列】（図65、図版57）

F～H－3区で検出した東西方向の柱列で、2間分を検出した。柱間寸法は10尺、方向はN－19.5°－W。柱穴形状はほぼ円形で、径40～45cm、深さ20cm前後である。柱痕跡は確認できていない。

【4号柱列】（図65、図版57）

H－2・3区で検出した南北方向の柱列で、2間分のみの検出である。柱間寸法は6尺で、方向はN－20°－W。柱穴形状はやや方形に近い円形で、径30cm前後、深さは30cm程である。柱痕跡は確認できていない。

【5号柱列】（図65、図版57）

G－2～4区で検出した南北方向の柱列で、2間分を検出した。柱間寸法6尺3寸で、方向はN－28°－W。本柱列の南端近くに存在する1号・2号杭列の方向が、5号柱列と直交する方向に近いことから、関連する可能性もあると考え当期に含めた。しかし、柱2に礎石が伴い、二の丸期の建物に通有の柱間間隔を有することから、より遡る時期の可能性も残る。柱穴形状は個々の違いが大きい。規模は50～100cmで、深さは15cm前後。

【1号・2号杭列】（図65）

G・H－4区で、ほぼ平行して延びる杭列である。方向は、1号杭列がN－27°－W、2号杭列がN－28.5°－Wである。杭そのものは腐食し、小規模なピットとして確認したものも多い。杭が残存しているものは、いずれも一辺5cm程度の角杭である。両者とも、杭の間隔は60cm程度であるが、個々の差が大きい。

【3号杭列】（図65）

G－5区で検出した南北方向に並ぶ杭列で、方向はN－18.5°－Wである。60～70cmの間隔で、一辺5～8cm程度の角杭が打ち込まれている。

【1号木樋】（図64、図版56）

B－6・7区で検出した、東西に延びる木樋である。東側は攪乱で破壊され、西側は調査区外へ延びる。方向はN－17.5°－Wである。深さ15cm程度の溝を掘り方とする。木製の樋は、径22.5cmの丸太の一面を削り、その面に幅7cm、深さ6.5cm程度の溝を掘っている。検出した範囲に接続部分はない。蓋板は残っていなかった。

【2号木樋】（図64、図版56）

C－6区で検出した、南北に延びる木樋である。南北両側とも攪乱で破壊され、検出した範囲に接続部分はな

い。方向は、N－16°－Eである。残存部分の北端から北に3.2m程の所に、木製の枡状施設の一部が残っていた。攪乱と判断し記録せずに除去してしまったが、2号木樋とほぼ同じ方向に鋼板が据えられていた。2号木樋が接続していた枡と考えて良いだろう。また2号木樋と、1号木樋と直交する方向に延びている。おそらく、図に示したような位置に枡が存在し、両者が接続していたと考えられる。掘り方は、幅40cm、深さ20cmである。木製の樋は、幅19cm、高さ17cmの角材に、幅9cm、深さ5.5cmの溝を掘っている。

【16号溝】（図65、図版57）

E～II－4区で検出した素掘りの溝で、5号土坑と16号土坑をつなぐ形で延び、16号土坑の西側まで続く。わずかに曲がるが、方向はおおむねN－23°－W。上幅50～110cm、下幅25～90cm、深さ15～20cmである。

【5号土坑】（図65、図版57）

H－3・4区で検出した、南北210cm、東西185cmの、やや不整な方形を呈する土坑である。西辺のほぼ中央に16号溝が接続する。両者の切り合い関係は認められなかったため、同時に機能した可能性が高い。深さは50cmで、埋土には、礫・木材や瓦が大量に含まれていた。陶磁器・土器類・金属製品も比較的多く出土している。

【10号土坑】（図65、図版57・58）

F－4区で検出した南北140cm、東西120cm、深さ25cmの、不整な方形を呈する土坑である。東辺に16号溝が接続し、同時に機能したと考えられる。

【12号土坑】（図64、図版58）

B－6区で検出したもので、建物の礎石である可能性も高いが、組み合う礎石が見あたらないため、便宜的に土坑とした。幕末以降と考えられる大堀相馬産の山水文土瓶の破片が出土していることから、Ⅳc期の遺構と判断した。長径120cm、短径90cmの長円形を呈し、深さは50cmである。川原石が充填され、上部に径30cm程の扁平な川原石が置かれている。瓦が多数出土しているが、他の遺物は少ない。

【28号土坑】（図65、図版57）

F－2区の調査区北端で検出した、方形の木製枡を埋設した土坑である。掘り方は円形に近いと思われるが、過半以上が調査区外にあるため確実ではない。掘り方の東西の幅は135cm、深さは120cmである。木製の枡は、南辺の長さ92.9cmである。底板は、南北方向に板を敷く。側板は、高さ28.4cm、厚さ5cmで、両端には鋼板同士をつなげるほぞが切ってあり、さらに釘で打ち付けている。底板との接合は、南辺では10ヶ所、底面側から和釘を打って固定している。枡の方向が他のⅣc期の遺構と共通し、幕末以降と考えられる大堀相馬産の飛鉋文の鍋が出土していることから、当期に含めた。

【31号土坑】（図64、図版57）

D・E－2区の調査区北端で検出した。平面形状は、隅丸方形もしくは隅丸長方形と思われるが、調査区外に続くため確実ではない。南辺の方向がⅣc期の遺構と共通すること、細片のため確実ではないが、幕末に下る可能性のある飛鉋文の陶器破片が出土していることから、Ⅳc期に含めた。東西の幅は160cm、壁はほぼ垂直で、深さ110cm程である。埋土には、柱などの建築材と思われる木材や礫が、大量に含まれていた。建築材には、焼けているものも多い。木材以外は、瓦がやや多い以外、遺物は少ない。明治以降にドるという推定が正しければ、出土遺物の様相から見て、明治15年の火災に伴う後片付けの際に造られたゴミ穴と考えることができる。

【1号石敷】（図65、図版58）

H－4・5区で検出したが、東側は調査区外へ延びる。南北150cm、東西190cmの範囲に、川原石を敷き詰めている。さらに西側にも角礫が存在し、本来はさらに西に延びていた可能性もある。南辺は、やや細長い川原石を、石敷きの上に乗せて、縁としている。石敷きの上には、細かな砂が堆積していた。

【瓦溜】（図64、図版58）

B－6区で検出した。埋土に大量の瓦が含まれており、瓦溜とした。掘り込み面は2層上面であるが、明治15

年の火災直後の可能性があるため、当期に含めて報告する。方形に近い不整な形状を呈する。東西の幅130cm、深さ35cmである。2層上面からの掘り込みであるため、前節に示した基準を満たす瓦だけを採集しており、全体の出土量は不明である。ただし、調査途中で大型の鬼瓦（図115・116）が含まれることが明らかとなったため、通常では基準からはずれる破片についても検討し、鬼瓦の一部と考えられるものを探索して採集した。

【1号溝】（図66・67、図版55）

中区から南にかけて検出された石組溝である。E－8区からG－10区にかけて南東に延び、G－10区からは南に向きを変え、H－14区でほぼ直角に曲がって東へ延びる。G－10区で15号溝と合流すると思われるが、接続部が攪乱で破壊されているため、確実ではない。G－10区から南へ延びる部分は、15号溝とほぼ方向が同じであるが、溝の底面のレベルが15号溝とは異なる。E－8区から南東に延びる部分に近いため、これら全体が一連の溝と考え1号溝とした。底面レベルは、南東端より北端が30cmほど低い。方向は北半の部分が^{g}N－66°－W、南半部分は方向N－24°－Wである。掘り方は幅100～150cm、深さ40～50cmである。側石は、角礫や川原石を使っており、川原石には割られたものもある。10列以北では両側とも残っている部分がほとんどであるが、上部は抜き取られている。11列以南はほとんど取り去られており、片側しか残っていない部分も多い。残っている部分でも1段だけである。埋土1・3層には炭化物が多量に含まれ、埋土2層は炭化物の層である。明治15年の火災直後に、上部の石が抜き取られ、火災の廃棄物を捨てたものであろう。各種の遺物が、大量に出土している。

【15号溝】（図66・67、図版55）

G－8区からG－10区に南北に延びる石組溝で、遺存状況はあまり良くない。攪乱のため確実でないが、南側で1号溝に接続する可能性がある。方向はN－21°－Wで、1号溝の南側とは若干異なる方向である。掘り方形状はあまり明確にはできなかったが、幅100cm前後の掘り方を掘った上で、両側の石を据えたものと思われる。東西両側とも側石がほぼ残っているが、動いてしまい位置を保っていないものも多いが、内法幅は30～40cmと思われる。角礫や川原石が使われ、1段だけ並べている。瓦が大量に出土しているが、他の遺物は少数である。

【12号溝】（図66・67、図版56）

G・H－14区で検出した、北東から南西方向に延びる、幅12～18cm、深さ5cm程の小規模な素掘りの溝である。南側は攪乱で壊され、北側の延びは1号溝の掘り方によって不明である。1号溝と同時に存在したかどうかについては確認できなかった。南側はやや向きが変わるが、それ以外の部分の方向は、N－47°－Eである。

【13号溝】（図66・67、図版55）

H－13区で検出した、北東から南西方向に延びる石組溝で、方向はN－35°－E。北東側は調査区外へ延び、南西側は1号溝の掘り方に切られる。Ⅳb期の4号堀・10号柱列を切る。掘り方は不明確で、石の付近だけ浅く掘り込んだものであろう。側石は一部抜き取られているが、内法幅は30cm程度。瓦がやや多く出土している。

【1号暗渠】（図66、図版55・56）

D－8区からF－10区にかけて、北西から南東方向に延びる、瓦質の土管（図版84－CG13）を埋設した暗渠である。1号溝と平行しており、方向はN－66°－Wである。幅30～70cm、深さ10cmの掘り方に設置している。3層上面で検出したが、地表面に土管が露出することとなり不自然である。2層の整地直前に設置され2層が覆う形になるのか、あるいは2層上面から掘り込まれていたものと推定される。

【9号土坑】（図66・67、図版58）

G－13・14区で検出した。Ⅳa期の2号建物の柱穴を切っている。この周辺には、Ⅳb期の遺構が分布しないため、当期に含めた。楕円形に近い平面形状で、長軸105cm、短軸75cm、深さ45cmである。

【13号土坑】（図66・67、図版58）

H－14区で検出した。1号溝・ピット78に切られているが、幕末以降と考えられる大堀相馬産の山水文土瓶の破片が出土していることから、Ⅳc期の遺構と判断した。東西の幅90cm、深さ20cmである。

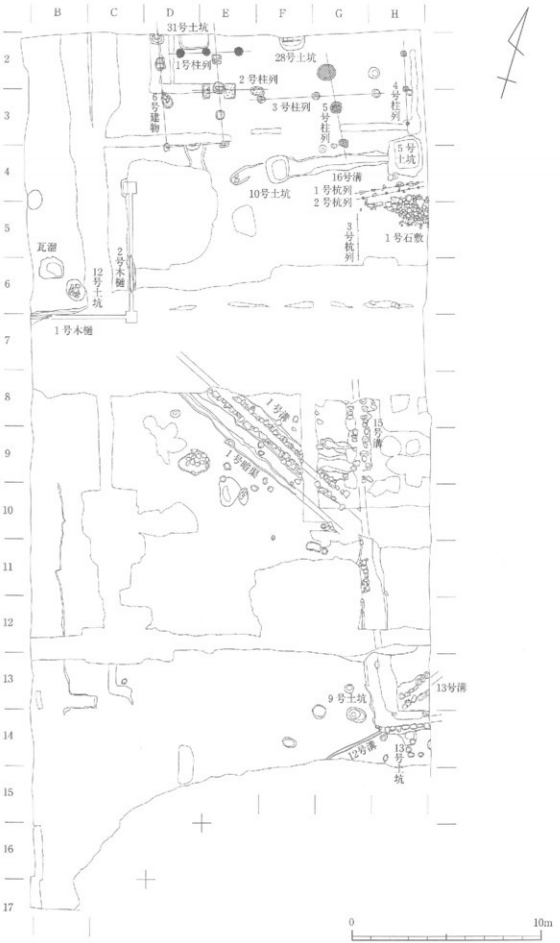


図63　二の丸第17地点Ⅳc期遺構配置図
Fig.63　Distribution of features belonging to Edo Period (Phase Ⅳc) at NM17

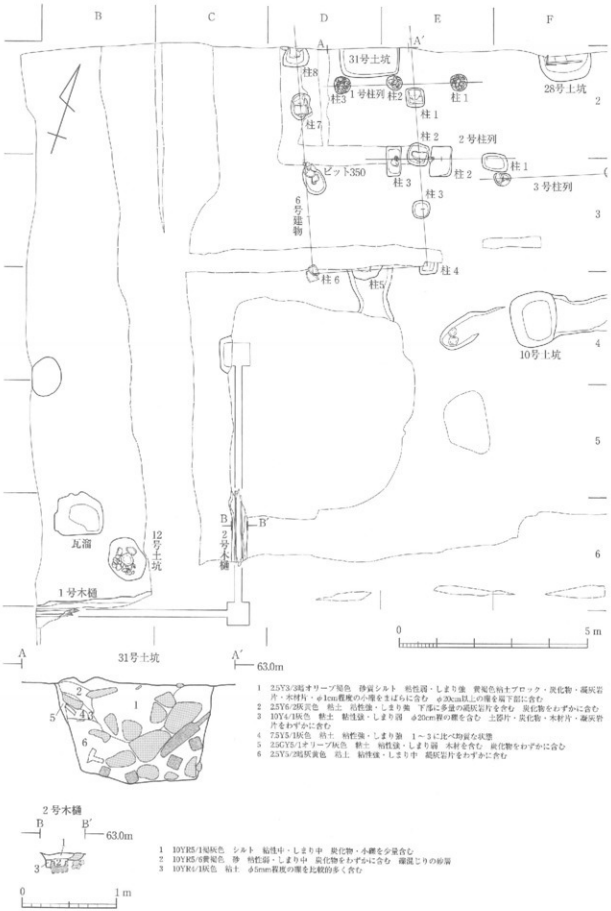
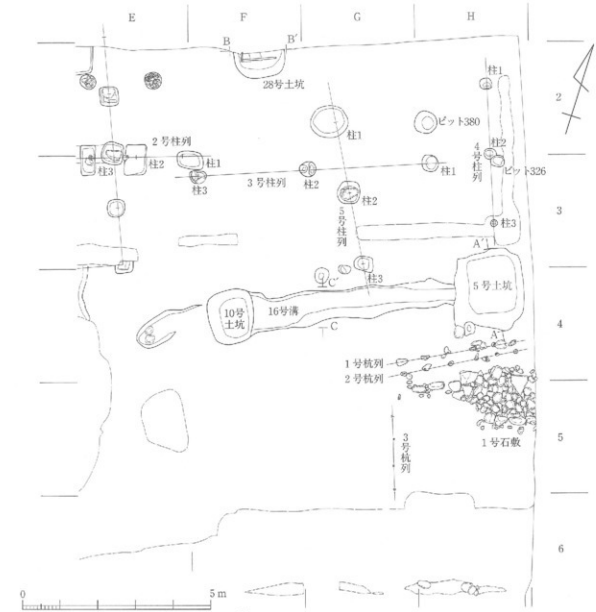


図64　二の丸第17地点Ⅳc期の遺構（1）
Fig.64　Features belonging to Edo period (phase Ⅳc) at NM17(1)



1　2.5Y3/3暗オリーブ褐色　シルト混粗砂　粘性弱・しまり強　暗オリーブ灰色砂質シルト・オリーブ黒色粘土質シルトを含む　オリーブ黄色粘土質シルトをφ2cm程度のブロック状に含む　φ5～20cm程度の礫を多く含む　炭・瓦などの遺物を含む
2　1よりやや全体に暗い　土塁には黄褐色粘土ブロックが多い

1　7.5YR2/1黒色　シルト　粘性中・しまり強　黒褐色シルトをごく少ばらに含む　炭化物微・瓦・陶器・φ5cm程度の礫をまばらに含む　φ10～30cmの礫を埋土底面付近に含む
2　10YR4/1褐灰色　シルト　粘性中・しまりやや　灰色粘土ブロックを含む　炭化物片・φ3～10cmの礫をまばらに含む　φ10～30cmの礫を埋土底面付近に含む

1　2.5Y4/2暗灰黄色　シルト　粘性弱・しまり強　炭化物を全体に含む　にぶい黄褐色土をわずかに含む
2　2.5Y4/2暗灰黄色　砂質シルト　粘性弱・しまり強　φ5cm程度の礫を少量含む
3　2.5Y5/3黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり強　黄褐色土を全体に含む

図65　二の丸第17地点Ⅳc期の遺構（2）
Fig.65　Features belonging to Edo period (phase Ⅳc) at NM17(2)

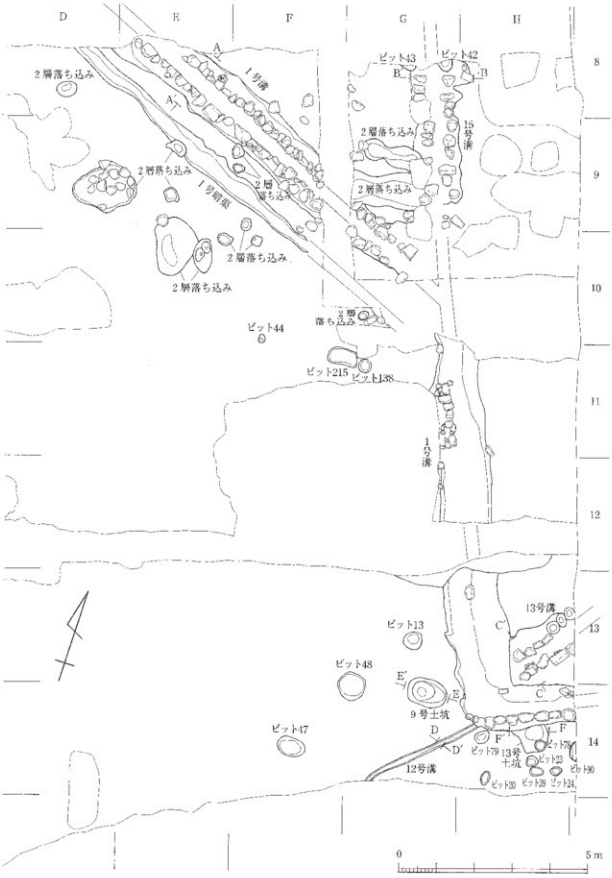
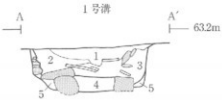


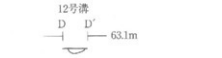
図66　二の丸第17地点Ⅳc期の遺構（3）
Fig.66　Features belonging to Edo period (phase Ⅳc) at NM17(3)



1　2.5Y3/1黒褐色　砂質シルト　粘性なし・しまり強　φ1～5cm大の礫と炭化物を まだらに含む
2　炭化物層　黄褐色土の小ブロックが若干含まれる
3　2.5Y3/1黒褐色　砂質シルト　粘性なし・しまり強　炭化物・瓦が多量に含まれ　黄褐色土小ブロックが混じる
4　2.5Y3/2黒褐色　砂　粘性なし・しまりなし　炭化物がまだらに含まれる　瓦の小片が含まれる
5　5GY4/1暗オリーブ灰色　シルト　粘性なし・しまり中　φ1cm以下の炭化物を多量に含む　海りこぶし大の円礫を多く含む

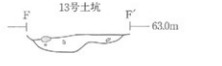
1　10YR3/1黒褐色　シルト　粘性強・しまり中　炭化物を非常に多く含む　φ1～3cm程の黄褐色土ブロックをわずかに含む
2　10YR5/4にぶい黄褐色　砂　粘性なし・しまり弱

1　5YR4/1褐灰色　砂質シルト　粘性なし・しまり弱　炭化物を含む
2　7.5YR4/2灰褐色　砂　粘性なし・しまり弱　φ3cm以下の円礫を多く含む



2.5GY4/1暗オリーブ灰色　シルト　粘性なし・しまり中　炭化物を少量含む

1　10YR7/6明黄褐色　シルト　粘性中・しまり強　炭化物をわずかに含む　暗灰色土小ブロックを多く含む
2　5GY6/1オリーブ灰色　粘土質シルト　粘性強・しまり弱　灰褐色土小ブロック多く含む
3　N1.5/黒色　粘土質シルト　粘性強・しまり弱　オリーブ灰色土小ブロックをわずかに含む
4　5GY5/1オリーブ灰色　粘土質シルト　粘性強・しまり弱　暗灰色土をブロック状に含む



10YR4/2暗黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　赤褐色シルト・灰色粘土がブロック状に混じる　粘土は下端に集中し φ3cm程度の礫・炭化物を若干含む

図67　二の丸第17地点Ⅳc期の遺構（4）
Fig.67　Features belonging to Edo period (phase Ⅳc) at NM17(4)

5．出土遺物

(1) 陶磁器（図71～89、巻頭図版6・7、図版59～81、表7～12・27～33）

陶磁器の集計にあたっては、可能な限り、接合と同一個体の認定を行なった上で、破片数を集計している。しかし、同一個体の識別が困難な小片や、破片になりやすい大型品や薄手の資料については、実際の個体数よりも多く集計されている可能性がある。集計表で、土瓶や種類不明の資料について、点数が多くなっているのはこの要因も含まれている。

本調査地点では、16世紀から19世紀中葉までの各時期の陶磁器が出土している。破片資料が比較的多く、全体の器形や文様がわかるものはあまり多くない。主体は18世紀後葉、18世紀末葉から19世紀初頭の資料で、それ以外の時期はわずかである。この18世紀末葉から19世紀初頭の資料は、B・C－10～12区3層から一括して出土しており、これらの遺物は3層一括資料として扱っている。また、主に2層や1号溝などから出土している明治初頭頃の資料は、これまでも同様のものを多数報告しており、基本的な様相は変わらないことから、写真のみの掲載とした。器種・生産地・製作年代・文様・釉薬などの特徴については、基本的にこれまでの『年報』に準拠して記載している。以下に、時期ごとにその概要を述べていく。

【16世紀】

16世紀代にあたる資料は、41号溝から出土した磁器が1点のみである（図71－12）。口縁部が端反になる皿で、中国景德鎮系の製品と考えられる。類例が青森県浪岡城（浪岡町教育委員会1986）から出土している。破断面には漆継ぎの痕が観察できる。

【17世紀前葉】

今回の調査地点では、この時期の資料は37号溝、１号井戸からごくわずかにみられる程度で、非常に少ない。当該期に属する遺構は1号井戸のみで、時期的にまとまりを有する資料はみられない。より古い時代のものが、遺構の埋土に紛れ込んで出土する程度である。

今回の調査では、この時期の肥前産磁器は出土しなかった。陶器では37号溝と1号井戸から1点ずつ出土しているだけで、時期的にまとまりを有する一括資料はない。37号溝からは唐津の向付（図78－５）が出土している。いわゆる絵唐津で、細片1点のみの出土である。1号井戸からは美濃伊賀の水差（図78－１）が出土している。水差の口縁部付近の破片で、蓋がかみ合う部分にあたる。口縁部にわずかではあるが、鉄釉流し掛けがみられる。仙台城跡三の丸において類例が確認できる（仙台市教育委員会1985）。

【17世紀中葉から18世紀前葉】

この時期の資料は、便槽遺構から磁器が一括して出土している他は、各遺構から１、２点出土する程度で、全体の量は多くない。46号溝、47号溝、便槽遺構などⅡ期の遺構から出土するほか、Ⅲ期にあたる遺構からもわずかに出土している。

磁器では、27号土坑から17世紀代とみられる中国産の皿が１点出土している（図72－38）。素焼きをせず、高台脇まで釉がかけられている。また、高台を鉋で削った痕跡があり、高台には砂粒が残っている。肥前産磁器では、小・中の皿類、碗類、瓶類、酒坏、鉢、猪口等がみられる。碗では、中型の丸碗（図71－１・９・11・14・20、図72－30、図73－45・51、図76－111）、小型端反碗（図77－122）、小型丸碗（図76－100）などがみられる。図76－100は、18世紀に多くみられるいわゆる「くらわんか手」の碗である。コンニャク印判によって桐文が描かれている。コンニャク印判を用いての施文には他に、図72－30、図73－51のようにコンニャク印判と手描きを併用して文様を描いたものも確認できる。この時期の碗類では、図71－20の碗のように、17世紀後半に多くみられる網目文が下半部に描かれるものがみられる。高台内には「大明年製」の銘がある。図71－１にも類似した網目文が描かれている。

皿では、見込みに五弁花文が描かれるものがあり、図74－69のように手描きで描かれている場合と、コンニャ

ク印判が用いられている場合がある。図75－88の五弁花文は、コンニャク印判と手書きとが併用される。

便槽遺構からは、17世紀後半の皿（図71－5）、鉢（図71－4）、紅皿（図77－161）が出土しており、いずれも非常に状態よく残っている。図71－5の皿は、鍋島系で、菊花文が精巧な円形に描かれており、文様も緻密である。装文様には、17世紀後葉頃に特徴的な2本線による梅花唐草文が描かれている。鉢（図71－4）は、無文で、型打ちにより輪花形に作られている。同じく便槽遺構から出土した紅皿（図77－161）も同じ年代頃のものと考えられる。

陶器の出土はごくわずかで、唐津産の大鉢（図78－16、図79－17）、肥前産の呉器手碗（図78－14、図88－165）、瀬戸・美濃産の中型丸碗（図86－133）、鬢水入（図79－23）などがみられる程度である。大堀相馬、小野相馬産の製品は確認できなかった。唐津産の大鉢は、いずれも三島手で、象嵌により花唐草文などの細かな文様が施されているが、印花は用いられていない。呉器手碗は上方に向けて緩やかに延びる器形をしており、やや高い撥形の高台を持っている。図86－133は尾呂茶碗である。内外面には鉄釉が掛けられているが、高台部分は無釉である。また、17世紀代と考えられる陶器として、4層上部から美濃産の皿（図78－4）が、9・32号溝から唐津産の擂鉢（図80－20）が出土している。図80－20の擂鉢は、ロクロ成形され、高台を持たない器形をしている。擂目は6条が一単位の櫛描きで、一単位ごとの間隔は比較的広く、引きっぱなしで擂目の上端をなでそろえることはしていない。

【18世紀中葉】

この時期の一括資料はみられない。18世紀後葉以降の遺構から混ざって出土する程度である。

磁器では、中型丸碗（図73－44）や小型端反碗（図72－29）などがみられ、前時期と同様にコンニャク印判による施文などが確認できる。陶器では、18世紀中葉から19世紀初頭の時期として、京・信楽産の色絵灰釉丸碗（図81－60・63・64）がみられる。

【18世紀後葉】

この時期は、18世紀末から19世紀初頭に次いで、多数の陶磁器が出土している。18世紀後葉の資料は、主に9・32号溝から出土している。また、2号溝、14号土坑、3層一括は、主体となる時期は18世紀末葉から19世紀初頭の時期であるが、18世紀後葉の資料も含まれている。この他にも、時期を18世紀後葉に限定するのが難しく、18世紀後葉から19世紀初頭までと、ある程度の幅をもたせて年代を推定している資料も多い。それらは次の18世紀末葉から19世紀初頭の資料と一緒に記述している。

磁器では、中型丸碗（図72－24・25・31・32、図73－46・52、図76－98）や小・中皿（図73－50、図74－64・66、図77－126）に加え、髪油壺（図71－21）、蓋物（図72－37、図76－112）、猪口（図73－58）などがみられる。中型丸碗では、18世紀中葉以降に作られるようになった外面青磁釉の丸碗（図72－32）なども出土している。内面には菊花文が描かれている。また、蓋付碗（図73－46）は18世紀後葉以降増加していく器種で、口縁部には四方襷文などの内面装飾がみられる。腰が張り、高台の低い丸碗（図76－98）も、この時期に流行する器形の碗である。皿では中型の皿が多く、比較的深めで、区画や窓絵に松竹の文様や草花文などが描かれるもの（図73－50、図74－64・66）がみられる。図73－50、図74－66では、見込みにコンニャク印判による五弁花文がみとめられる。

陶器では、大堀相馬産がほとんどを占めており、わずかに小野相馬や京・信楽、瀬戸・美濃、唐津などが出土している。大堀相馬産では、灰釉丸碗（図81－49、図85－112～115、117）や灰釉小碗（図79－28、図80－45・46、図81－61・62）が主体を占め、碗類ではその他に、蓋物、（図80－35、図80－36）のような筒型碗の胴部数カ所にくぼみを加えた器形などがみられる。灰釉は、透明度のあるものが多いが、半失透、あるいは薄白色を呈する灰釉もみられるようになる。小野相馬では、片口鉢（図85－131）、火入（図78－24）、鬢水入（図85－128）が出土している。片口鉢、鬢水入は、小野相馬に特徴的な青灰白色の半失透釉であるが、図78－24の火入は透明度のない灰白色の釉調である。その他、京・信楽では色絵丸碗（図79－27、図85－109・110、）、合子（図85－

126）がみられ、唐津では白泥波文の大鉢（図86－138）が出土している。

【18世紀末葉から19世紀初頭】

この時期の資料が、本調査地点から出土した陶磁器の大半を占めており、3層一括、2号溝、19号土坑、14号土坑からはこの時期のまとまった資料が出土している。

磁器は、すべて肥前産である。これまで多かった中型丸碗・小中皿類に加えて、筒型碗（図77－124）や小碗（図75－94、図77－129）、鉢（図76－103）、紅猪口（図73－54、図77－117）蓋物の蓋（図77－113・116）・瓶類（図71－17、図75－90）などがみられる。中型丸碗では、高台が小さく、比較的薄手のもの（図73－57、図75－93、図76－・99・101・114、）が多く出土している。これらの文様には、主に松竹梅や草花文、亀甲文、靖唐草文のほか、氷裂に菊花文などが描かれる。氷裂文はその他に、小中皿（図76－106）や紅猪口（図73－54）などにも描かれており、この時期によく用いられた文様である。皿では、蛇ノ目凹型高台のものがみられるようになる（図76－105）。図74－63の小中皿の見込みには、これまで多かった五弁花文ではなく、環状の松竹梅楼閣文が描かれるようになる。図77－117の紅猪口は、色絵で羽子板文が描かれており、『九州陶磁文化館1994』に類例が掲載されている。また、図77－130は小碗としているが、高台が高く、仏飯器の可能性も考えられる。その他、3層一括、2号溝、14号土坑からは、「くらわんか手」の碗・皿類も出土している（図73－42・56・62、図74－65、図76－109）。

陶器では、大堀相馬産が圧倒的に多い。産地が判明したこの時期の資料のなかで、半数以上を占めている。中でも碗類の割合が多く、最も多い灰釉丸碗のほか、腰折碗（図81－56、図82－69）、筒型碗（図82－67、図85－118）、小碗など多様な器形がみられる。これらの中碗には、灰釉のほか、鉄釉流し掛けや鉄釉掛け分けなどの施釉がなされている。釉調は、18世紀末葉になると、18世紀後葉に比べ、釉薬の透明度が落ち、濁りがみられるものや糠白色を呈する灰釉が増えてくる。大堀相馬産の碗類以外では、仏飯器（図85－124）、鉄絵土瓶（図82－74）、小中皿（図81－51、図82－72、図86－139、図87－153）などが出土している。碗と同様に、139、153の皿では、糠白色の灰釉のものが確認できる。

大堀相馬産以外では、小野相馬産、京・信楽産、唐津産、瀬戸・美濃産などが確認できるが、非常に少ない。小野相馬産では、小野相馬に特有の青灰色の灰釉をもつ灰吹（図84－96）が出土している。京・信楽産では、中型丸碗（図80－41・47、図89－171）、小碗（図81－60）といった色絵碗類に加え、土瓶の蓋（図86－140）、灰吹（図81－52、図84－94）、合子（図85－126）が出土している。瀬戸・美濃産では、灰釉丸碗（図85－116）、灰釉小碗（図79－25、図84－102）のほか、甕（図83－80）、蓋物の蓋（図89－182）、火入（図85－130、図86－146）などがみられる。甕の内部には、鉄錆のような付着物が残存している。図89－182の蓋は、瀬戸市奈兵衛西窯で、同じものが採集されており、図85－130の火入は、類例が瀬戸市市左衛門窯跡、仲洞窯跡からの採集資料に確認できる（瀬戸市史1998）。唐津産では、大鉢（図87－147）が確認できる。また、擂鉢では、小破片ではあるが堺産のものも出土している（図78－13）。

また、東北産とした陶器（図78－9、図80－19・38、図81－44・59、図83－81・82・84、図82－85・90、図84－86、図85－129、図86－137、図89－174）は、胎土や釉調、作られている器種が日用品であることなどから、東北の窯で生産されているのではないかと推測したものである。それらの中でも、胎土や釉薬には差異が認められるため、いくつかの窯の製品が含まれていると考えられる。鉄釉を掛けているものがほとんどである。器種としては擂鉢や甕のほか、鬢水入、灰吹などがみられる。甕類は、2号溝からまとまって出土している。内部に鉄錆のような付着物が残存しているもの（図83－82）もみられ、鉄漿壺として使われていた可能性も考えられる。図80－19の擂鉢は、口縁部に丸の刻印が確認できる。丸の刻印は、瓦でも確認されており、製作された窯のつながりを推測できるのではないかと考える。

【19世紀前葉】

この時期の資料はあまり多くなく、2号建物とその雨落ち溝や、17号溝などから若干出土している他、新しい時期の遺構に混ざって出土する程度である。磁器では、瀬戸産が含まれるようになるのは19世紀中葉以降であり、この時期は依然として肥前産が主体である。肥前産では、中碗（図73－39、図76－114、図77－115・128）、蓋物の蓋（図77－119）、瓶類（図版66－156・157）などがある。碗類では、この時期にみられるようになる広東碗や蓋付碗はほとんど含まれていない。陶器では、碗類の他に、土瓶、灰吹、擂鉢などが確認されるが、出土量は少ない。大堀相馬製品（図88－155）のほか、瀬戸・美濃産（図88－168）、東北産と考えられる擂鉢（図87－141、156）、水盤（図87－157）などがある。

【19世紀中葉から19世紀後葉】

7号建物、1号溝、5号土坑、6号土坑、2層などから幕末から明治初頭にかけての資料が多数出土している。この時期の資料に関しては、これまでの調査でも多数の資料を提示してきているため、今回は完形に近いもので代表的なものを主に写真で示している。

磁器では、碗・皿類の出土量が急増する。瀬戸の「新製染付」製品が肥前製品を上回るようになり、これまで多かった肥前産の碗類は極端に少なくなる。また、瀬戸製品によく似た器形、文様をした平清水産の端反碗もみられる。瀬戸製品では、小型、中型の端反碗や皿類などが非常に多くなり、半杉碗（図版65－140）や、台子（図版65－144、図版66－155）などの種類もみられる。瀬戸産の碗・皿類では、文様・器形ともに規格化された製品が多い。文様は、手描きに加え、摺絵（図版66－154）や、型打による製品（図版66－151～153）などが増加する。皿では、蛇ノ目凹型高台のものが大半を占めるようになる。今回出土した中では、皿の高台部分に、「青木」のような文字が書かれているものがみられた（図版**65－147～149**）。その他、肥前製品では、蓋物（図版65－142・143）、小中皿（図版66－154）、火入（図77－127）、小瓶（図版66－157）、紅猪口（図73－41、図77－158）、仏飯器（図版**61－59・60**、図版**62－77**）などがある。特に59・60の仏飯器は、同じ文様が描かれており、一対で使われていたと考えられる。

陶器は、大堀相馬製品が圧倒的に多く、その他、東北産と考えられる製品の割合が増えるようになる。これまである程度の比率を占めていた瀬戸・美濃産や京・信楽産、肥前産などは、この時期にはほとんどみられなくなる。器種では灰釉丸碗に加え、土瓶、行平鍋など、さまざまな種類の製品が出土するようになる。また、18世紀まではあまりみられなかった秉燭、短檠、灯明皿といった灯火具類、瓶類などの器種も加わる。土瓶は、菊花文や、山水文などのパターン化された鉄絵文様が描かれている場合が多く、灰釉の釉調も類似したものがみられる。土瓶の蓋には、身と組みになる文様が描かれている。また、蓋には亀や犬をかたどったつまみが付けられる場合もある。土瓶の底部には墨書のあるもの（図版79－214）などがみられる。その他、土瓶では図版78－205のような、いわゆる勿来手と呼ばれる鮫肌釉のものも出土している。東北産の中には、仙台城下で作られていた堤焼も含まれていると考えられるが、明確に区分はできないため東北産としてまとめている。擂鉢（図87－141・150・156、図版80－223・225、図版79－224、図版81－226）、甕（図版79－222）、餌猪口（図89－172）、土鍋（図版79－219・220）、湯通し（図版79－221）、水盤（図88－157）、花生け（図版79－217）など、日用品を中心にさまざまな種類がみられる。

【その他】

その他、時期が不明確なもののうち、特筆すべき資料について述べていく。

磁器では、紅皿が多数出土している。外面は、いずれも貝殻状に型押しされている。横長のもの（図72－26・33）と、半円形のもの（図73－47～49・61）とがある。半円形のものは、指が入る程度の非常に小型のもの（図73－47・48）と、それよりやや大きいもの（図73－49、61）とがある。非常に小型の47、48だけは高台内までしっかりと釉が掛けられているが、その他の釉は概して雑である。図72－28の皿は、菱形の器形をしており、沢潟

文が描かれている。図77－131は、婦人立像の着物の袖先部分であると考えられる。色絵で着物の絵柄が描かれている。柿右衛門様式の人形の袖部分に近いが、小片のため明確ではない。図88－161は陶製の額縁のようなものではないかと推測する。口唇部や内面には色絵の文様があり、底面には釉が掛かっていない。図82－91の灰吹は、相馬駒焼の製品である。灰白色の胎土で、外面には鉄絵の一部が確認できる。相馬駒焼は、文化年間（1804～18年）に相馬藩御用用代窯で開始されたとされていることから、この資料もそれ以降のものと考えられるが、詳細な年代は不明である。図89－179は、中国産の茶入れである。肩部には目跡があり、逆さで焼成されていることが推測される。

(2) 軟質施釉陶器（図93、図版81、表13～15）

軟質施釉陶器は、焙烙317点、土鍋５点、鉢１点、ミニチュア2点が出土している（接合、同一個体の識別後の破片数）。大部分が2層からの出土で、幕末から明治以降のものである。軟質施釉陶器の大半を占めるのは焙烙である。フライパン形を呈し、中空の柄が付くものがほとんどである。図93－CN1の焙烙は、柄の部分が短く、柄の中程に小孔が貫通している。本などを菜し込んで使用したものと考えられる。図93－CN2は器種が不明なためミニチュアとした。ロクロ整形されており、底部は回転糸切りによって切りはなされている。

(3) 土師質・瓦質土器（図90～94、巻頭図版10、図版82～84、表13～15・34～36）

土師質土器は、各期の遺構・層から出土しているが、特にB・C－10～12区3層、１号溝、２号溝、９号溝、32号溝、５号建物、７号土坑、14号土坑、19号土坑、２号井戸などから多く出土している。皿7519点、耳皿22点、焼塩壺61点、焼塩壺の蓋６点、火鉢５点、鉢３点、不明634点が出土した（接合、同一個体識別後の破片数）。これまでの二の丸地区の調査と同様に、土師質土器の中でも皿が圧倒的多数を占めている。

皿については、口縁もしくは底部外周の６分の１以上が残存し、なおかつ器高が判明するもの、すなわち口縁端部から底部までが残っており、口径、底径の復元および器高の計測ができるものを抽出し、諸属性の観察を行った。抽出した資料は119点である。また、これらのうち器形や調整方法などが特徴的なもの、墨書が認められるものなどについて、57点を図化して掲載している。119点のうち、年代が限定できる遺構から出土した資料となると、さらに数が限られてくる。また、それらのほとんどが18世紀後葉から19世紀初頭の遺構に限られるため、今回は時期的な変遷を検討することができなかった。

皿の製作技法は、内外面ともにロクロナデがなされており、底部は無調整で回転糸切痕が確認できるもの（A類）と、ロクロナデの後、外面や底部にミガキが施されるもの（B類）の大きく２つに大別できる。抽出した119点の皿のうち、底部が観察できたものは89点である。そのうちA類は77点、B類は12点で、８割強のものがロクロナデのものであった。B類のみが集中して出土するような遺構はみられなかった。

また、皿の底部には回転糸切り痕が観察され、２つの種類が確認できる。そのうち、糸切り痕の中心がどちらか一方に片寄るものを技法ａとし、糸切り痕の中心が底面のほぼ中央に位置するものを技法ｂとした。またａ，ｂの技法にはそれぞれ右回転のものと左回転のものが存在する。

法量を比較すると、大きくは口径10cm以下の小型のもの、10～15cmの中型のもの、15 cm以上の大型のものも３つに分けられる。口径15cm以上の大型のものは非常に少なく、最も多いのは10～15cmの中型のものである。これは、これまでの調査で出土した土師質土器皿の傾向と同じである（年報９）。

また、皿の口縁部には、タール状の付着物が観察されるものが存在する。付着の仕方で最も多いのは、厚みをもって口縁部に付着し、口縁部全周にわたるものである（図90－１・６・７・12、図91－16・17・18、図92－40・49）。その他、口縁部の数ヵ所に点々と付着している場合（図90－５、図91－21・24・32、図92－37）などが観察される。器面をミガキ調整したB類では、付着が確認されたのは１点のみで、他はすべてA類であった。これら

は、付着の状態から灯明皿として使用された可能性が考えられる。口縁部全周に付着するものは、繰り返し使用されたことでそのように形成されたものであると推測される。

その他の付着物では、器面の比較的広い部分に薄くスス状の付着物が観察されるもの（図92－54・56）や、墨のような液体が入れられていた痕跡が確認できるもの（図91－27）、軟状の付着物が確認できるもの（図90－9・10・11）などがみられる。その他、底部や器面内に墨書が認められるものが7点出土しているが、いずれも破片資料のため、解読できるものはなかった。特殊なものでは、図90－14のように、底部に釘が打ち付けられ、もう一ヶ所に穿孔がある皿が出土している。何かに固定して使用されたものと考えられる。

皿以外のものでは、耳皿1点、焼塩壺8点を図化した。耳皿（図93－62）は、ロクロ成形し、回転糸切りの後両幅面を曲げて作られている。

焼塩壺は大きく2つに分類できる。1つは、ロクロによりコップ状に成形され、厚手で、体部外面の下半には格子タタキを有するものである。底部は回転糸切り痕が観察できる。このタイプは地元産であると考えられる。もう1つは、ロクロ成形され、比較的薄手で、口縁部に段が付く印籠形のものである。刻印の有無は不明であるが、その形態から畿内産のものと考えられる。図93－61は、ロクロ成形され、口縁部に段が付く後者の器形をしているが、器厚がやや厚く、大きさも他のものより大きい。体部がふくらみを持った器形をしており、やや異なった特徴を有している。

焼塩壺の蓋は，2点を図化した。ロクロ成形されており，図93－63は回転糸切り痕が確認できる。器形は、頂部がやや凹んでおり、図93－66は鍔面がやや内傾している。

瓦質土器は、火鉢47点、蚊遣り28点、蚊遣りの蓋4点、十能10点、五徳3点、さな12点、鉢類4点、擂鉢2点、火入1点、蓋？8点、炭櫃49点、不明259点が出土した（接合、同一個体の識別後の破片数）。特に集中して出土するような遺構はみられない。

火鉢は、体部が直線的に立ち上がり、外面には花文が型押されているもの（図93－3）、口縁部がT字状に肥厚し、脚を有するもの（図94－8）、肥厚した口縁部の直下に連続した押圧が貼り付けられるもの（図94－6）などがみられる。また、図94－10には、獅子を型押した脚が付けられている。図93－2は擂鉢で、体部は直線的に開く器形をしている。内面には数条の擂目が確認できる。図93－4の鉢は、体部にくびれがあり、脚はなく、器高は比較的浅い器形をしている。外面に火を受けた痕跡が確認できる。図94－9は蚊遣りの蓋で、円窓が4ヶ所あり、内面や円窓付近にはタール状の付着物が多量に認められる。 図94－12は、器種は不明であるが、型押した獅子である。中空で、口の両脇に穿孔が確認できる。

また、1号暗渠から瓦質の土管が8点出土しており、そのうち1点を写真で示した（図版84－13）。口縁部付近には花型の刻印が、体部には線刻による刻印が確認できるものも存在する。

(4) 土人形・土製品（図94、図版84、表13～15）

土人形・土製品は、11点出土しており、4点を図化した。

土人形（図94－CO4）は、頭部が欠損しているが胯姿をしている。型作りで，前面の襟や袴の細部の表現は線刻で表現されている。また，底部には盲孔がある。人間を表わしたもの以外に、猿、猪などが出土している。猿（図94－CO1）は、手づくねで、胴体に頭、手足などを貼り付けて製作されている。猪（図94－CO3）は、左右を型合せして製作しており、左半身のみが残存している。図94－CO2は土鈴である。非常に薄作りで、つまみ部分を成形した際に生じた絞り目が内面に観察できる。その他、図化していないが，5号土坑と撹乱土からは土製の碁石が各1点ずつ出土している。

(5) 瓦

今回報告する瓦類は、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦（1類・2類）、桟瓦、軒桟瓦、板塀瓦、板状瓦、T字瓦、棟瓦、面戸瓦、輪違い、鳥伏間、鬼瓦の計14種類である。瓦の分類基準は年報6・7・8・9で示しており、今回報告する資料の分類基準も基本的にこれに準じているが、一部で新たに設定した種類がある。

平瓦類は確実に平瓦と判断できるものを平瓦として集計し、反りがあり平瓦、桟瓦、軒桟瓦の一部である可能性があるものを平瓦1類、反りがなく板塀瓦の一部である可能性があるものを平瓦2類とした。また今回の報告では、これまで桟のない板塀瓦（彎曲をもたず平坦なもの）としてきたものを、板状瓦として分類している。丸瓦類の分類は、瓦当面がなく軒丸瓦でないことが確実なものについては丸瓦とし、玉縁部分のみが残存したものや、瓦当部分の有無が確認できない等、軒丸瓦の可能性のあるものは丸瓦類として分類を行った。軒丸瓦、軒平瓦、桟瓦、軒桟瓦、板塀瓦、T字瓦、棟瓦、面戸瓦、輪違い、鳥伏間、鬼瓦の分類基準は従来の通りである。

その他に特殊な形状の瓦で用途や名称が明確でないものや、鬼瓦の一部と思われるが断定できないものについては、その他の瓦として分類している。また小片で分類自体が不可能な資料は不明瓦として分類・集計を行った(図68)。

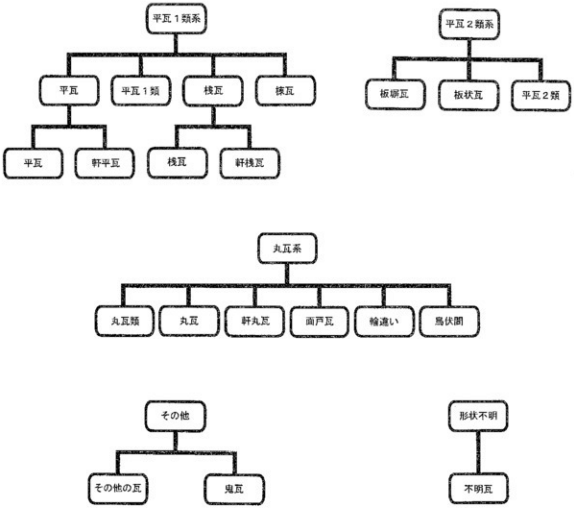


図68　瓦分類概念図
Fig.68　Conceptual diagram of classification of roof tile

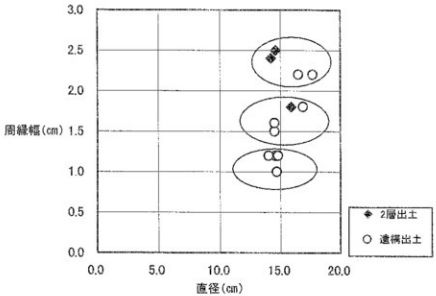


図69　瓦当直径と周縁幅の関係
Fig.69　Correlation of the diameter and the rim width of caves-tile end piece

基本層では2層から8932点、3層から3567点、4層から1060点が出土しており、新しい段階になるにつれて出土量が増加する傾向がみられる。4層出土の瓦の大半は4層上部からの出土である。遺構では2号井戸、1号・9号・17号・42号・46号溝、4号木樋、7号土坑、3号掘跡、1号建物、ピット448からまとまった量が出土している。瓦の種類からみた出土傾向は、2層、3層、4層では平瓦1類と不明瓦で全体の大半を占める。遺構出土の瓦においても同様の傾向がみられるが、1号建物では丸瓦類の比率が高い。

【軒丸瓦】(図95～97、114、図版85、86、97、表39)

軒丸瓦は260点出土している。そのうち瓦当文様がはっきりと識別できる22点を図示した。5、7、8、10～17、20は三引両文である。13～16は2号井戸から出土している。周縁幅が広く表面に刻印をもつ20は2層上面から出土したものである。1、6、9、21は九曜文である。1は69号溝、6は14号土坑、9は32号溝、21は2層上面から出土している。22は三巴文である。巴は左巻きである。2、4、18、19は連珠三巴文である。巴はすべて左巻きである。2は36号溝、4は整地A層から、18はピット330、14は2層上面から出土している。20には角判が押されている。

瓦当の直径が測定可能なものは14点あった。直径は14～15cm前後のものが大半で大きな差はみられないが、周縁幅は2.2cm前後、1.6cm前後、1.2cmと3つのグループに分かれるといえる。2層出土の資料は3点中2点が2.2cm以上であるのに対して、遺構出土の資料では11点中2点である（図69）。したがって、周縁幅の違いは時期差を示すと考えられ、時期が新しくなるにしたがって周縁幅が大きくなるという傾向が指摘できる。

【軒平瓦】(図97、98、図版86、87、表40)

軒平瓦は207点出土している。全体の文様構成が明らかな25点を掲載した。2層出土のものが7点、整地A層出土のものが1点、遺構出土のものが17点である。瓦当の文様構成で最も多くみられるのは、雪持笹と唐草2類を組み合わせたもの（23、35、36、38、42）である。桔梗と唐草文を組み合わせたもの（30、31、33、34）は4

点みられる。中心に菊を配したもの（25、26、37）、三枚笹と唐草１a類を組み合わせたもの（39、43）は３点、三引両と唐草文を組み合わせたもの（46、47）、梅と唐草３a類を組み合わせたもの（27、29）、江戸式（40、45）がそれぞれ２点である。また中心部が欠落して唐草文のみが判別できるものが２点（24、32）、中心飾りの文様が特殊なものが１点（41）、仙台城三の丸分類のB－４類（仙台市教育委員会1985）が１点出土している（28）。41の中心飾りの文様は家紋の一種と考えられるが、仙台城二の丸跡の調査でこれまで出土した軒平瓦のなかには類例がみられない。

【丸瓦】（図100～104、114、図版88、89、97、表42）

丸瓦と特定できたものは735点である。そのうち完形のもの10点を掲載した。55は69号溝、56・57は5号溝、58・59は66号溝、60・61は51号溝、62～64は54号溝から出土している。長さは26cm台のものと28cm台のものという２つのサイズが存在すると思われる。幅は長さが26cm台のものは15cm台でまとまるが、28cm台のものは14.8～16.3cmとばらつきがあり、必ずしも幅が長さに比例して大きくなるというわけではない。

【平瓦類】（図105、106、114、図版89～91、97、表43、46、47）

平瓦類はそのほとんどが長さや幅の計測ができない小片であるが、平瓦と特定できる６点を掲載した。ほぼ完形状態のものは5点ある（66～70）。平瓦１類、２類は刻印のあるものだけを掲載した。刻印のあるものは１類が25点（111～131、133、134、136、137）、２類が２点（138、139）である。

【桟瓦】（図114、図版97、表49）

桟瓦と特定できたものは71点である。そのなかから刻印のあるものについて図示した（132、135）。２層出土の132には※状の刻印が刻まれている。１層撹乱出土の135には「宮九」の文字が刻印されている。

【軒桟瓦】（図99、図版87、表41）

軒桟瓦と特定できたものは26点ある。その中から小巴や瓦当垂れ部分の文様が明らかな７点を図示した。そのうち小巴部分の文様が確認できるものは５点、瓦当垂れ部分の文様が確認できるものは４点である。小巴部分の文様はすべて左巻きの三巴文である。垂れ部分の文様は三枚笹と唐草１a類が組み合わせになるものが２点（49、51）、中心飾りが欠落し唐草2類のみが確認できるものが1点（48）、文様が無いものが1点である（54）。

【板屏瓦】（図106、107、図版91、92、表45）

板屏瓦と特定できたものは247点出土しているが、そのうち残りの良い４点を掲載した。桟の断面形状はすべて平形で方形のものはない。72・73・74は釘穴が確認された。

【板状瓦】（図107～109、図版92、93、表44）

反りがなく両端に溝をもつ長方形、あるいは方形の瓦を『年報９』では桟のない板屏瓦として分類したが、桟がないことから用途を板屏瓦に特定することは問題があると考えたため、今回の報告では新たに別の種類の瓦、「板状瓦」として分類した。板状瓦としたものは全部で7点である。ここでは全体の形状が確認できる6点を図示した。6点中5点は長方形であるが、1点はほぼ正方形を呈する（78）。80は溝がなく長辺側に釘穴が２つ認められる。75・76・77は短辺に３つの釘穴が認められる。従来桟のない板屏瓦と分類していたものである。78は反りがなく板状で平面形がほぼ正方形のいわゆる「海鼠瓦」である。

【T字瓦】（図111、112、114、図版94、97、表53）

全部で212点出土しているが、ここでは完形の資料３点を図示した（88～90）。３点すべて、中央の突起部分の２箇所に釘穴がみられる。２層上面瓦溜めから出土した141には刻印がある（141）。

【棟瓦】（図110、114、図版94、97、表52）

86点出土しているが、ほとんどは桟部分のみが残存したものであり、長さと幅が計測可能な資料１点を図示した（87）。87は１層撹乱から出土している。長さが30.5cm、幅が44cmで尻に溝がある。３号井戸出土の140には×印の刻印がある（140）。

【面戸瓦】(図110、図版94、表50)

89点出土している。そのうちの残りの良い5点を掲載した（81～85）。81は整地A層、82は43号溝掘り方埋土、83は2号井戸、84は4号塚跡、85は2層から出土している。

【輪違い】(図110、図版94、表51)

全部で36点出土している。1号建物から出土した完形のもの1点を図示した（86）。

【鳥伏間】(図97、図版86、表48)

整地A層で1点出土している（3）。出土したのは鳥休の瓦当部分で、瓦当の直径、内径は計測不可能である。瓦当の周縁幅は2.3cm、瓦当文様は左巻きの連珠三巴文である。これまでの二の丸跡の調査では、九曜文、三引両文の瓦当をもつものが出土している。

【鬼瓦】(図115、116、図版95、表54)

2点出土している（91、92）。91・92ともに棟巴の背の形に合わせたえぐりがある若葉型の蹄鬼である。どちらも裏面に部分的に漆が付着しており、本来は表面全面に漆が塗られていたと考えられる。裏面はなく中央部に瓦を結びつけるための龍頭が付いている。91・92いずれも2層上面から出土している。

【その他の瓦】(図112、113、図版96、表54)

鬼瓦、隅瓦と思われる瓦などが出土している。また輪違いに類似した形態だが全体がねじれているものがある（102）。この瓦の用途は不明である。小片で分類不可能な瓦のなかで刻印をもつものは142～145の4点ある。

(6) 木製品・漆塗製品

作業の便宜上、木製品・漆塗製品や竹製品などを一括して扱っている。柱と杭は、角材と丸材に分類し、多角形のものや残存状態が悪く形状が不明確なものをその他に分類して集計した。加工木は、板材・角材・丸材・小材に分類した。板材と角材は、横断面の短辺と長辺の比率が、おおむね1：2より大きいものを板材、それより小さいものを角材とした。建築部材としたものは、ほぞ穴などがあり、建物などの部材と考えられるものを分類した。柱・杭については、ゴミ穴などに廃棄された状態で遺物として出土する場合と、柱穴に残存したまま遺構の一部として出土する場合とがある。本来はそれらを別にして扱うべきであるが、今回の集計表では区別していない。便槽遺構については、便槽の木体を構成していた板材などは建築部材の欄に、便槽の埋土から出土したものは加工木の欄に示している。柱・杭は、集計のみで、図示したものはない。建築部材、木羽については、各1点ずつ図化して掲載したが、それ以外は集計のみである。木羽については、乾燥後の重量を計測している。

【漆塗製品】(図117・118、図版98・99、表22～24・55)

漆塗椀18点、蓋6点、皿2点を図化した。6号上坑と19号上坑から漆塗椀が3点ずつ出土している程度で、特にまとまって出土するような遺構はみられない。文様のあるものについては可能な限りを資料化し、図化できないものは写真を掲載している。

漆塗椀は、内面朱色、外面黒色のものが多く、内外面朱色、あるいは黒色のものは少ないようである。図117－2は、黒地に朱で梅枝文が描かれる。図117－7は、銀で「三つ柏」と思われる家紋が配される。また、図117－11は朱で「松皮菱」と考えられる家紋が配され、蓋のつまみ部分の内部には楓のような文様が描かれている。この他に、高台内やつまみ内部の文様としては、他に「一」や梅花などが見られる。図117－12は残存状態がよくないが、竹の文様が確認できる。皿は2点出土している。図118－18は、直径は11cmで、内外面ともに朱漆が塗られており、内面には朱と緑で竹文が描かれている。図117－19は、内面が朱漆、外面は黒漆が塗られており、金と黒で文様が描かれている。

その他の漆塗製品としては、箸、しゃもじ、小型容器、刷毛や、用途は明確でないが漆が塗られている木製品などが出土している。19号上坑から漆塗箸など4点が出土している。箸では、全面に朱漆が塗られているもの

(図120－20)、全面に黒漆が塗られているもの（図120－21）、下地が黒漆で、上端に朱漆を塗るもの（図120－22）などがみられる。しゃもじは3点出土しているが、すべて朱漆が塗られている。図118－30は、用途は不明であるが、黒地に朱で文様が描かれている。

【櫛】（図119、図版103、表22～24・62）

櫛は5点出土しており、すべてを図化した。32号溝から2点、便槽遺構、1号石敷、19号土坑からそれぞれ1点ずつ出土している。観察表の法量は、aが横の幅、bが縦の長さ、cが縦の長さの内、歯の部分を除いた長さである。（　）内は残存値である。漆塗りのもの（図119－27）が1点出土しており、その他は白木である。形状は、角状と楕円に近いものの両方がみられる。27は、黒地に金で竹、梅と雀が描かれている。雀は金で輪郭を描き、内部を他の色で表現しているが、劣化が激しく色は鮮明には残っていない。

【下駄】（図123、図版103、表22～24・58）

8点出土しており、そのうち4点を図化した。7号建物、29号土坑から2点、5号土坑、8号土坑、14号土坑、攪乱から1点ずつ出土している。出土した下駄は、一木から台と歯を切り出した連歯下駄、別材で作った台と歯を組み合わせた差歯下駄、歯をもたない無歯下駄に大別した。漆などが塗られたものはなく、すべて白木である。

図123－94は、台の表に歯のほぞが露出する露卯差歯下駄の差歯部分である。歯の底部には小石の付着が観察される。図123－95は無歯中折下駄で、二つの台を革などでつなぎ、中で折れるような形態の下駄である。95はその片側部分で、台には革を打ちつけた木釘が数ヵ所観察できるほか、台の上面には小さな釘孔も確認できる。図123－96・97はいずれも丸型連歯下駄で、前に一つと後ろの両側に緒孔が開けられている。後ろの緒孔は、歯の後ろ側に開けられている。また、歯の底部には小石が付着している。

【曲物】（図121、図版101・102、表22～24・59）

側板が残存しており、明らかに曲物と判別できるもののみを集計した。そのため、円板状木製品には曲物の天板もしくは底板が含まれていると考えられるが断定はできなかったため、曲物には分類していない。曲物としたものは11点出土している。特に19号土坑からは5点が出土している。薄板を筒状に湾曲させ、それを樺皮製のとじ紐で綴じて成形しているものがほとんどである。漆塗りのものも出土しており　図121－62は天板の外面と側板の内面に、図121－65は外面に黒漆が塗られている。図121－63は、完形品で器高が比較的小さいことから、蓋の可能性が考えられる。図121－66は、上半が欠損しているため内容は不明であるが、側板に「内」「助」などの墨書が確認される。また、図121－64・67は、側板に1.5cm程度の四角い孔が空いており、この孔に柄状のものを差し込んで柄杓として使用した可能性も考えられる。

【桶類】（図123、図版101、表22～24・63）

桶類の側板は、完形品でない限り個体数を把握することは困難である。そのため、今回の集計では個体数ではなく、接合するものであっても板1枚ずつの数を集計した。天板と底板については、判断の困難なものも存在するため、天板もしくは底板として区別せずに集計している。側板については、焼印が認められるものや、取手部分など特殊なものについて図化している。天板もしくは底板については、焼印のあるもの、孔を有するなどの特徴があるものを掲載した。19号土坑からは側板18点とやや多く出土している。

図123－83の天板には、径3.2cmほどの栓の孔が存在する。84は中心部分に小孔がみられる。図123－89は桶の側板の取手部分の部材であると考えられる。図123－85は天板に、図123－87・88は側板に焼印が認められる。87は「長」、88は「□森」である。これらの焼印は、二の丸第9調査地点出土の桶でも同様のものが確認できる。また、87に見られるように、側板にはたがで固定されていた圧痕が観察される場合もある。

【円板状木製品】（図119、図版99・100、表22～23・57）

厚さが0.4～0.6cm程度と薄く、平面形が円形を呈する木製品を円板状木製品とした。中央にごく小さな孔を持つものが多い。小孔は貫通するものと、片面に傷状に残る程度のものとがみられる。全体で26点出土している。

19号土坑、33号土坑からやや多く出土する。直径は3.0cmから16.8cmと幅がある。円板状木製品としたものの中には、比較的大きいものでは、曲物の底板や天板などの可能性が考えられるものがある。小さいものには、提灯の上下両端の板などが含まれると考えられる。また、図119－71・75には樹皮の摘みが残存している。

【箸状木製品】（図120、図版100、表22～23・61）

直径が5～6mm程度の棒状で、断面が略円形に加工されているものを箸状木製品とした。1号溝、14号土坑、19号土坑からそれぞれ1点ずつ漆塗の箸が出土しているほかは、すべてが白木で作られている。形状は、両端の太さにほとんど変化がないものと、一端が細くなるものとの両方が存在するが、大多数は太さがほとんど変わらないものである。箸状木製品は、破損しているものも多く、箸の形状にほとんど差がみられないことから、破損したものから個体数を把握することは難しい。そのため集計は、両端とも完形のもの、一方の端が残っている破片、両端とも欠損している破片のそれぞれを1点として集計し、すべてを合計した。箸状木製品の総数は1072点確認された。箸が多く出土した遺構は、8号土坑、14号土坑、19号土坑、29号土坑、32号土坑、33号土坑、46号溝などである。中でも、19号土坑、29号土坑、32号土坑からは完形の箸がまとまって出土している。

両端もしくは一端が残っている資料については、法量や先端形状などの観察を行なっている。先端形状は、特に加工を加えず切断面を残すもの（A類）、先細に作り出すが切断面を残すもの（B類）、先端を尖らせ切断面を残さないもの（C類）、ヘラ状に作り出すもの（D類）の4類型に分類することができた。完形品では、両端の形状の組み合わせは、5通りあることが確認できた。最も多いのは、両端とも特に加工を加えず切断面を残すもの（AA類）で、204点と圧倒的に多くなっている。そのほかの組み合わせとしては、AB類1点、AC類8点、BC類1点、BB類5点などであり、ごく少数に限られる。遺構別にみても、特定の遺構で特定の形状の箸がまとまって出土するということはなく、AA類が大多数を占めている。

最も多かったAA類の長さについてみてみると、約21cm前後（約7寸）と約24cm前後（約8寸）の二つの寸法に集約する。遺構別では、Ⅲb3期の19号土坑では約21cm前後にまとまるのに対し、同じⅢb3期でも29号土坑では約24cm前後に集中している。また、Ⅳb期と考えられる32号土坑では、約21cm前後の長さに限られる。以前、「年報9」において、17世紀末葉には8寸の箸が用いられ、18世紀後葉には7寸に短くなっていると考察した。今回の出土資料では、18世紀後葉頃にあたるⅢb3期の遺構では7寸と8寸の2つの寸法があり、19世紀初頭頃にあたる、Ⅳb期では7寸であることが確認された。このことから、18世紀後葉頃には7寸と8寸の両方の長さの箸が存在し、この時期以降から7寸の箸が用いられるようになった可能性も考えられる。

【その他の木製品】（図122・124～127、図版104～106、表22～24・64）

その他の木製品としては、楔、栓、扇子、へら、すり棒など用途の分かるもののほか、箱状の製品や墨書のある板など、用途の明確でないものも含まれている。これらの木製品が比較的多く出土するのは、9・32号溝、19号土坑、29号土坑などである。また、楔は2号井戸、1号塀跡などからもややまとまって出土している。木羽や加工木は、1号溝、2号井戸、9・32号溝、19号土坑、29号土坑、33号土坑などから比較的多く出土している。

図124－126・127は、便槽遺構出土の金隠板である。2点出土し、本体に打ちつけるための釘が残存している。

図122は楔で、長さ6.7～16.8cmと多様である。楔は、木槌・金槌や鍬、建具など様々なものの固定に使用されていたと考えられ、固定するものの違いによって多様な大きさがみられると推測される。

図125－101は、扇子の要部分である。図125－102、103は木製の柄である。102は側面に穿孔があり、取付け部分のために一部がくり抜かれている。103は内部が溝状にくり抜かれており、一端には柄に取付けられていたものの一部が残存している。図125－104はすり棒で、一端は使用によって丸みをおびて磨り減っているのが観察される。図125－105～109はへら状の木製品である。形状には105～108のように持ち手部分が棒状を呈するものと、109のように板状の先端部分がへら状を呈するものとがみられる。前者でも細身のもの、丸みをおびたものなど、へら部分の形状は多様である。

図125－110は小型の皿のような器形をした容器である。図125－111は、木製の蓋と考えられる。非常に薄く、残存状態もよくないが、容器と組み合わせるための段が作られている。図125－112・113は折敷である。112は円形にくり抜かれた折敷の脚部であると推測する。113には木釘や釘穴が残存している。図126－119は、鉈などを収納する鞘状の木製品の一部と考えられる。内部がくり抜かれており、もう一枚同様の形状かあるいは板状のものと組み合っていたものと考えられる。図126－121は、箱状製品の一部で、側部には他の部材と組み合わせるための段状の加工がなされており、釘も残存している。図126－123・124は、用途は不明であるが、角棒状の一部に釘穴があり、一端が細くなる形状をしている。図127－125は断面が三角形を呈し、片面には欠羽状の線刻のある板である。用途は不明である。図127－147は、建築部材で、部材同士を組み合わせるためのほぞが加工されており、片面には2条の溝が掘られている。図127－156は、文字は残存していないものの、器形から荷札木簡である可能性が考えられる。上端には穿孔がみられる。図126－149・150・152は、墨書のある板である。いずれも非常に薄い板に書かれている。150、152については短冊と考えられる文字がみとめられる。

(7) 金属製品（図128～133、図版107～112、表65～69）

金属製品は漆管の雁首、吸口、笄、飾り金具、釘、蝶番金具、鉄鍋、古銭などが出土している。釘は和釘と洋釘それぞれが出土しているが洋釘のうち3層、整地A層、19号溝から出土しているものは混入したものであると考えられる。2号井戸、2号溝、14号土坑、便槽遺構からまとまった量が出土している。2号井戸からは和釘3点、鉄鍋1点、針金1点、把手1点などが出土している。2号溝からは和釘2点、雁首2点、吸口2点、古寛永1点、文銭1点、新寛永4点が、14号土坑から簪2点、古寛永2点、便槽遺構から古寛永28点、文銭18点、新寛永4点、水楽銭1点が出土している。

図132－1～20は煙管の雁首と吸口である。雁首15、吸口2・18には雛字が残っている。また吸口2と雁首16には線刻が施されている。2は蛙と思われる。16の意匠はよくわからない。雁首の形状、火皿の形状、接合方法、アワセメ、吸口の形状の分類は『年報6』の基準に基づいている（図70）。雁首の形状はⅠC類が1点、ⅡB類が7点、ⅡC類が3点、ⅠAとⅠBの区別の付かないもの1点である。吸口の形状は8点すべてⅡB類である。雁首の火皿の形状は1b類が8点、2b類が3点、不明が1点である。また火皿の接合方法は水平に接合する2類が8点、斜めに接合する3類が3点、不明のもの1点である（表67・68）。図133－21～24は簪、25は水差の把手である。26～28は銅製の釘である。29～33は金具類である。29は板状金具、30と33は飾り金具、31は円形金具、32は水注である（表69）。

古銭は105点出土している（図128～131、表65・66、図版107～111）。基本層では2層から9点、3a層から1点、3層から11点が出土している。遺構では1号溝から1点、2号溝から6点、9号溝から1点、68号溝から1点、7号土坑礎石面から15点、14号土坑から2点、便槽遺構から52点が出土している。便槽遺構出土の52点のうちA群の9点、B群の39点はそれぞれ一連の繋がった状態で出土している。出土した古銭のほとんどが寛永通宝であるが、3層から紹熙元宝が1点（26）、表面が摩耗していてすべての文字は読めないが、「■元通■」（宋元通宝か？）が9号溝から1点（35）出土している。また便槽遺構からは永楽通宝（56）が1点出土している。寛永通宝の種類は古寛永が41点、文銭が20点、新寛永が37点である。

(8) 石器・石製品（図133・134、図版113、表71）

出土した石器・石製品のうち9点を図示した（図133・134－S1～9）。1は1号井戸埋土上部出土の頁岩製の剥片である。2は微小剥離痕のある頁岩製の剥片である。4層下部から出土している。3、4、5はメノウ製の火打石である。3は6号土坑から、4は1層撹乱から、5は2層から出土している。6は1層撹乱出土の凝灰質粘板岩製の砥である。この石材は紫雲石と呼ばれ現在でも砥として使用されている。長さ17.9cm、幅は6.66cm、

陸側の左辺部分が摩滅してくぼんでいる。7は石製品の一部と思われるが、何の製品かは不明である。砂岩製である。1号溝石組抜き取り埋土から出土している。8は14号土坑から出土した軽石製の石製品である。片面の中央部が大きくくぼんでいる。9は粘板岩製の温石である。1層攪乱から出土している。

(9) ガラス製品（図134、図版113、表70）

出土したガラス製品のうち7点を掲載した（図134－G1～G6、図版113－G7）。1～6は簪、7は棒状の製品である。1、2は1層攪乱から出土している。基本層では5と7が3層から出土している。遺構からは3と4が1号溝から、6が5号土坑から出土している。

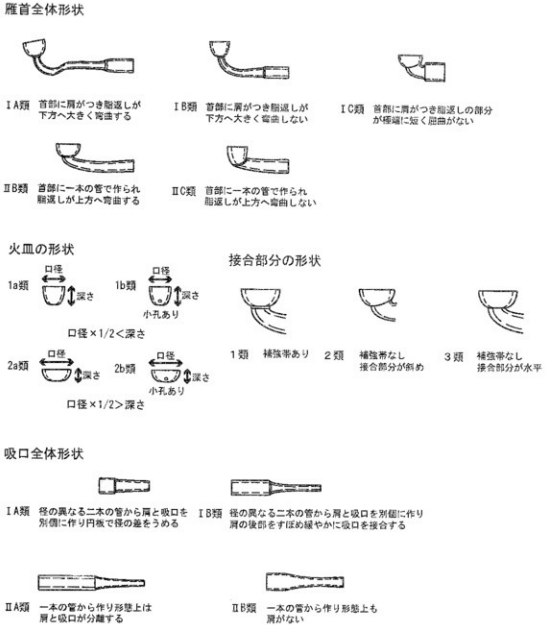


図70 煙管分類模式図
Fig.70 Variations of classification of pipe

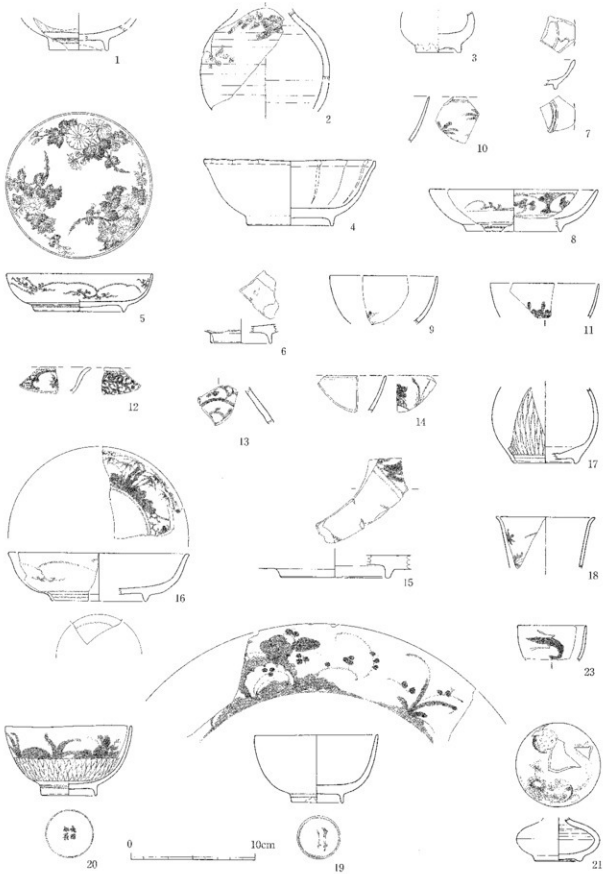


図71　二の丸第17地点出土磁器（1）
Fig.71　Porcelains from NM17（1）

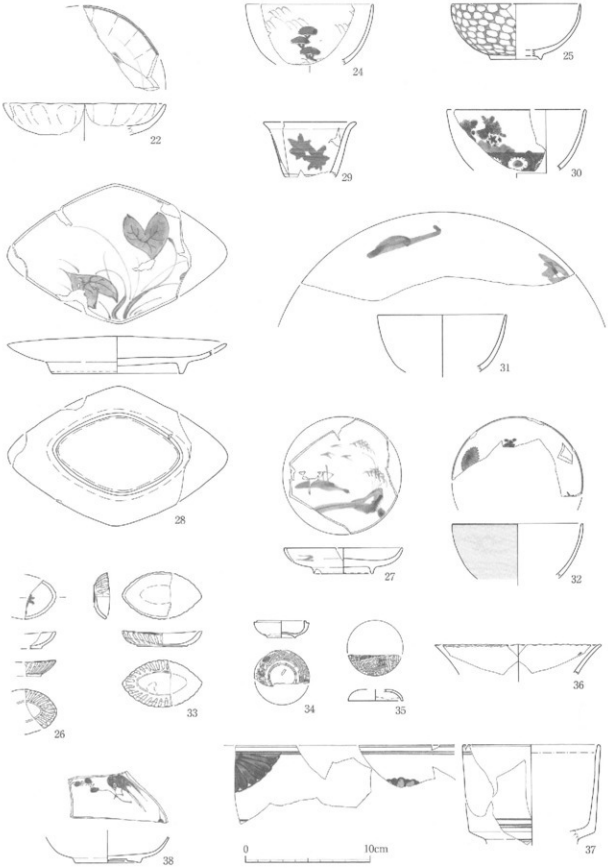


図72　ニの丸第17地点出土磁器（2）
Fig.72　Porcelains from NM17（2）

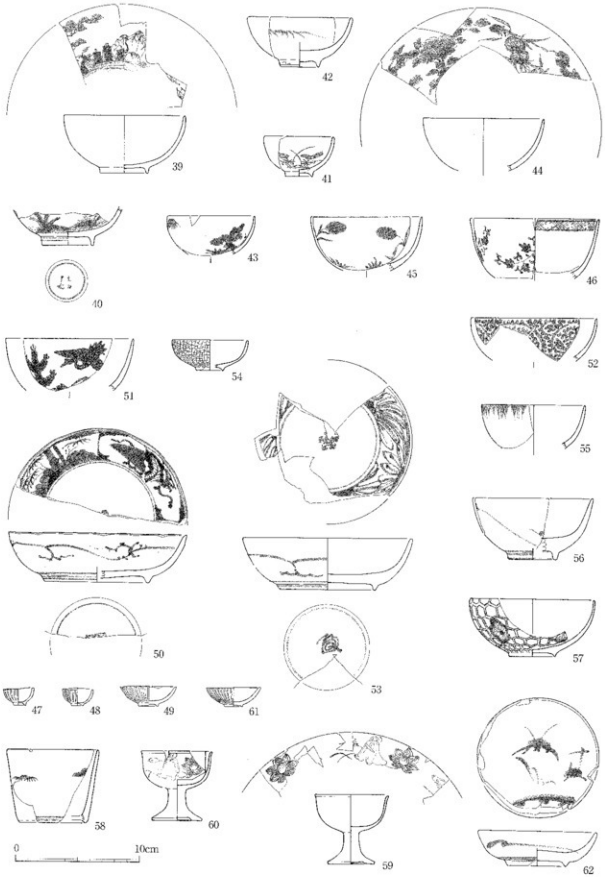


図73　二の丸第17地点出土磁器（3）
Fig.73　Porcelains from NM17（3）

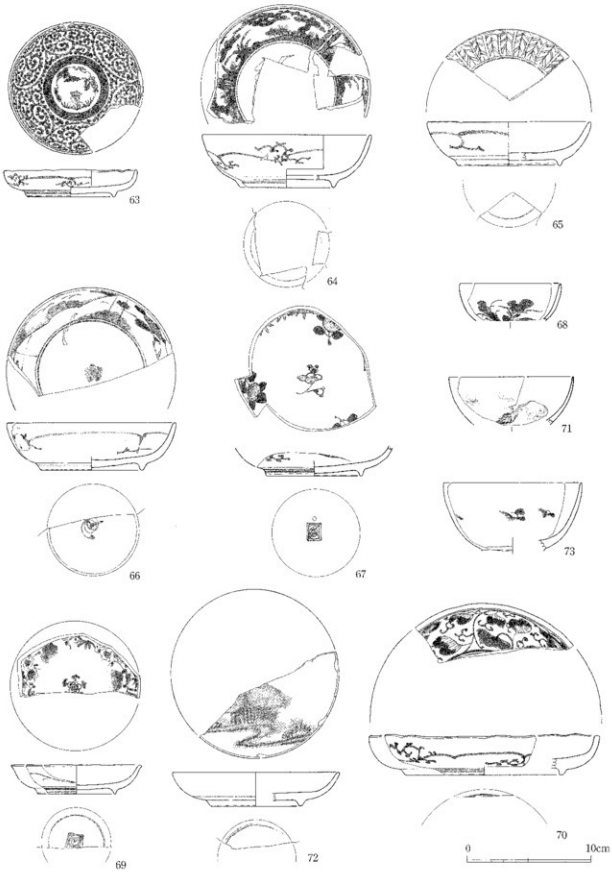


図74　二の丸第17地点出土磁器（4）
Fig.74　Porcelains from NM17（4）

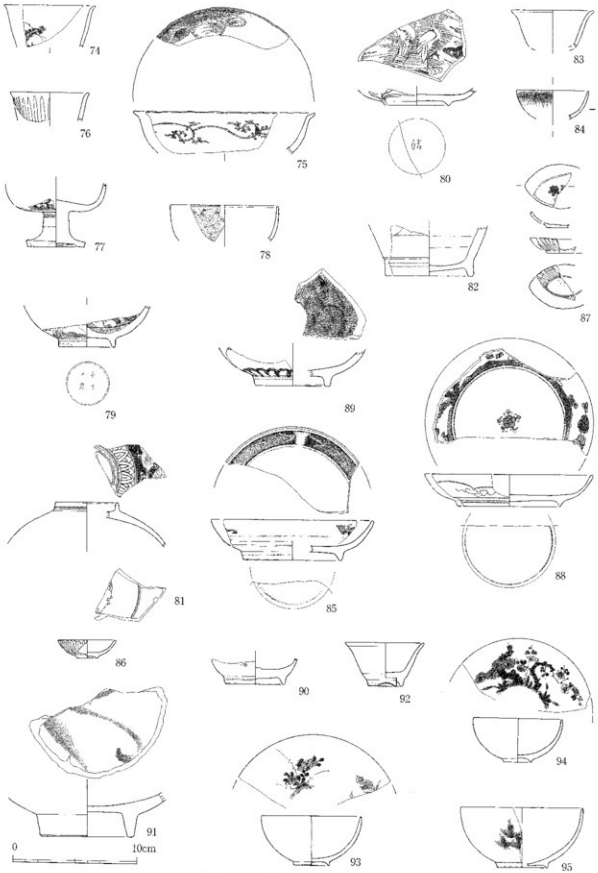


図75　二の丸第17地点出土磁器（5）
Fig.75　Porcelains from NM17（5）

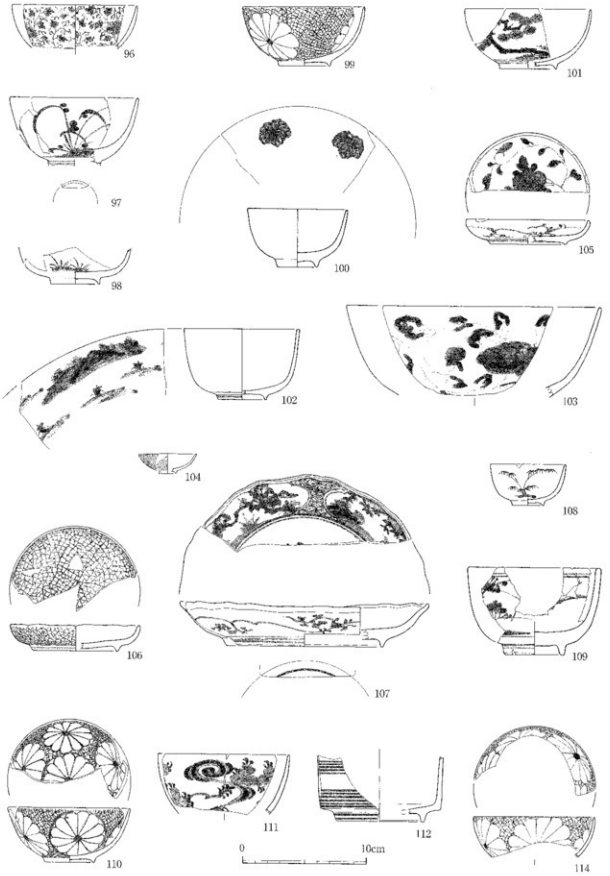


図76　二の丸第17地点出土磁器（6）
Fig.76　Porcelains from NM17（6）

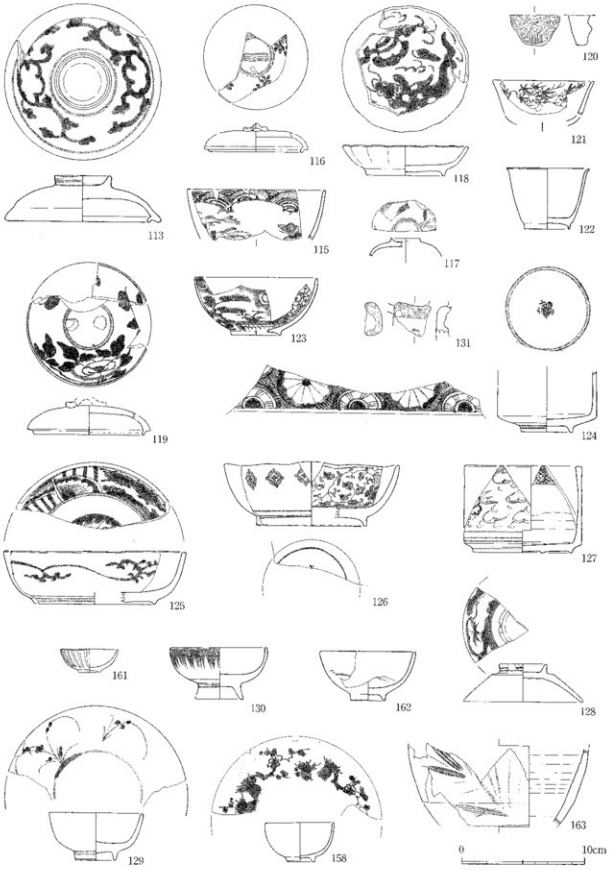


図77　二の丸第17地点出土磁器（7）
Fig.77　Porcelains from NM17（7）

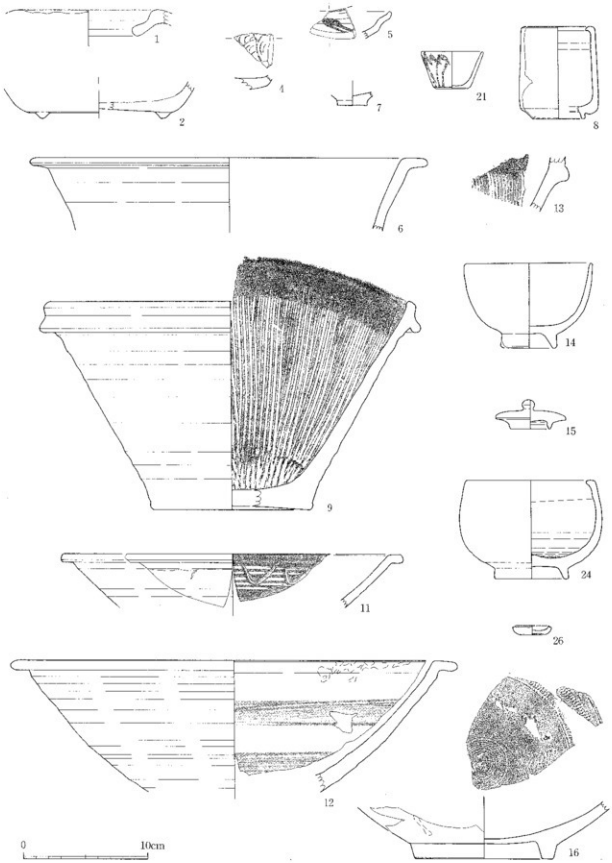


図78　二の丸第17地点出土陶器（1）
Fig.78　Glazed ceramics from NM17（1）

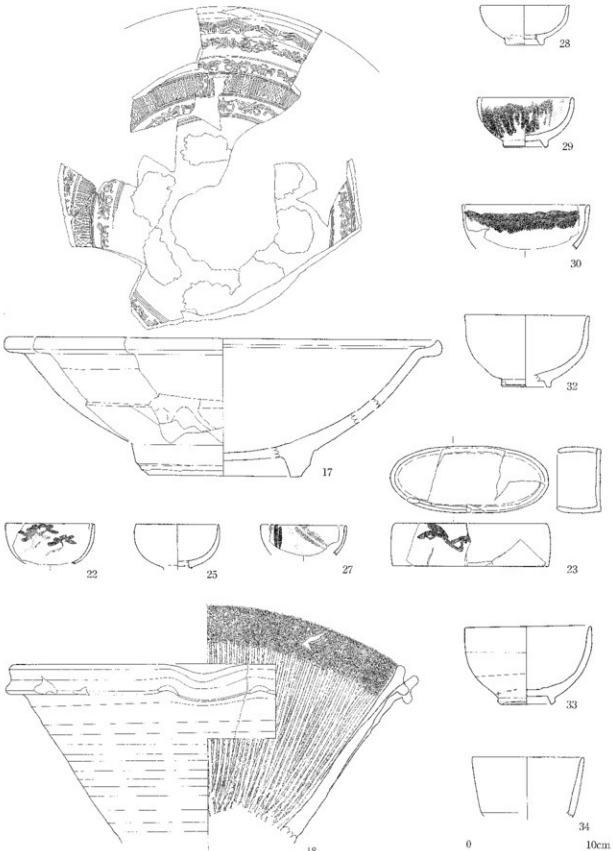


図79　二の丸第17地点出土陶器（2）
Fig.79　Glazed ceramics from NM17（2）

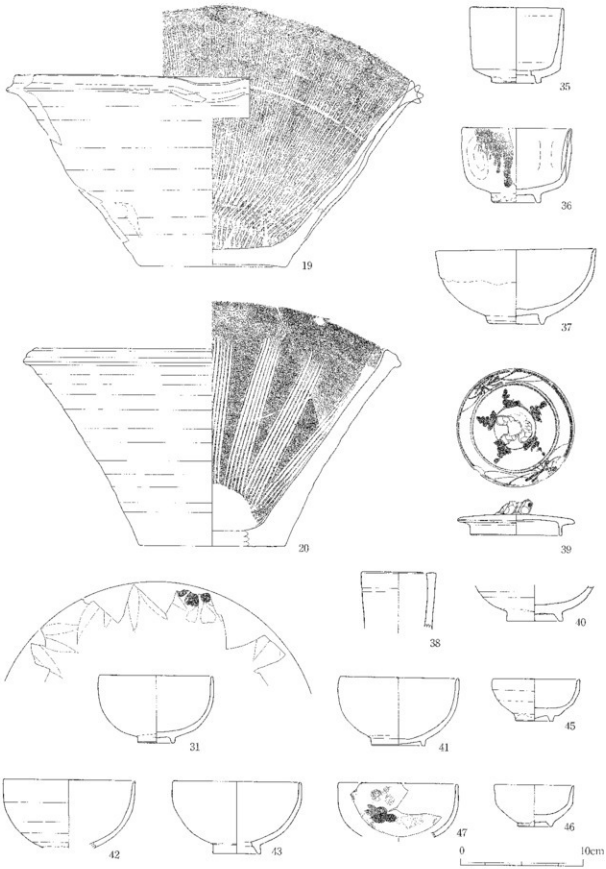


図80　二の丸第17地点出土陶器（3）
Fig.80　Glazed ceramics from NM17 (3)

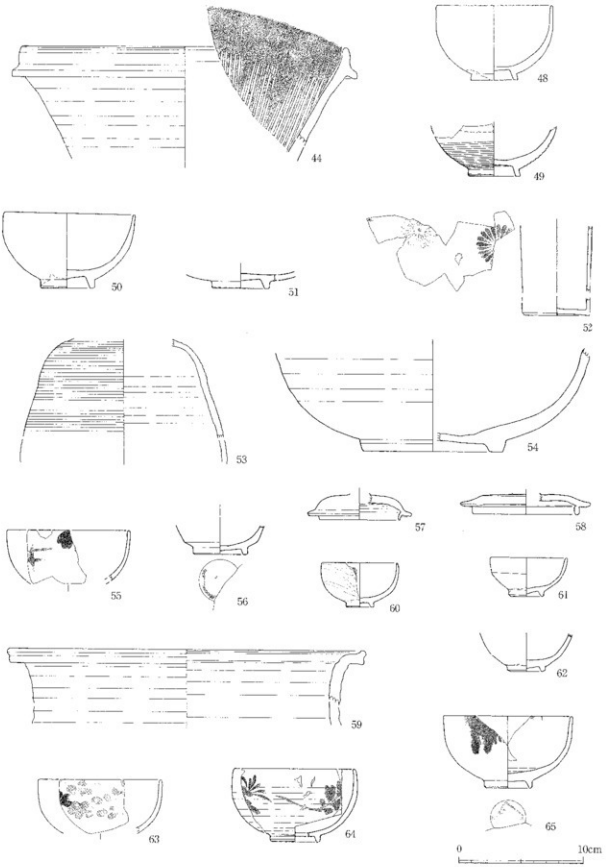


図81　二の丸第17地点出土陶器（4）
Fig.81　Glazed ceramics from NM17（4）

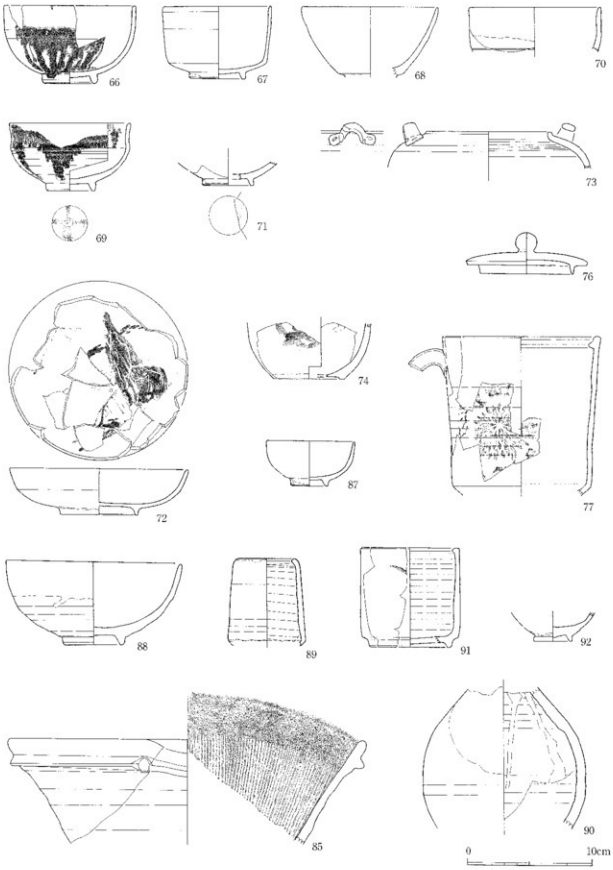


図82　二の丸第17地点出土陶器（5）
Fig.82　Glazed ceramics from NM17（5）

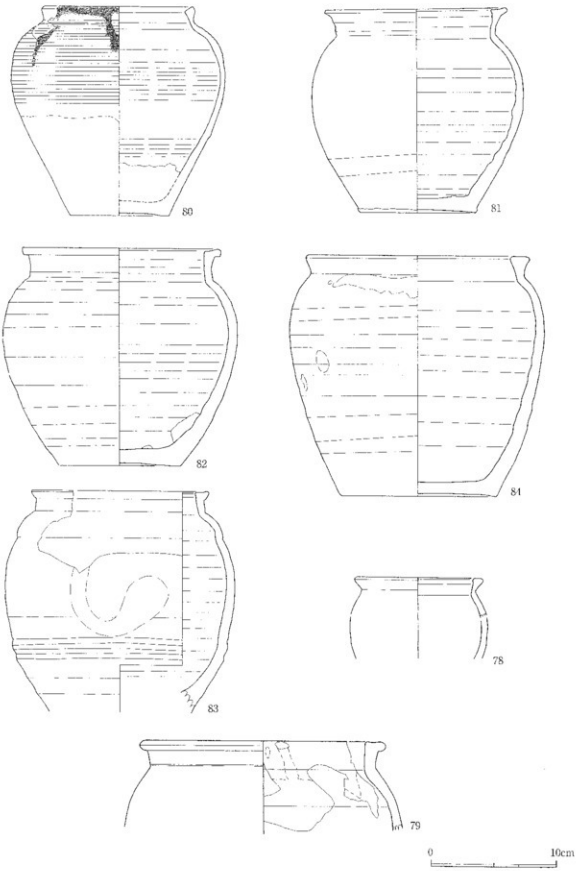


図83　二の丸第17地点出土陶器（6）
Fig.83　Glazed ceramics from NM17（6）

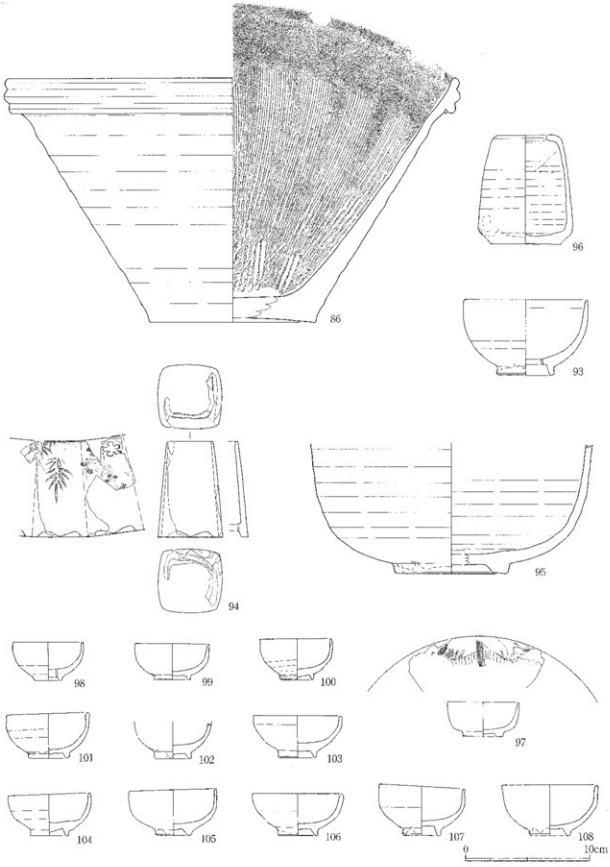


図84　二の丸第17池点出土陶器（7）
Fig.84　Glazed ceramics from NM17（7）

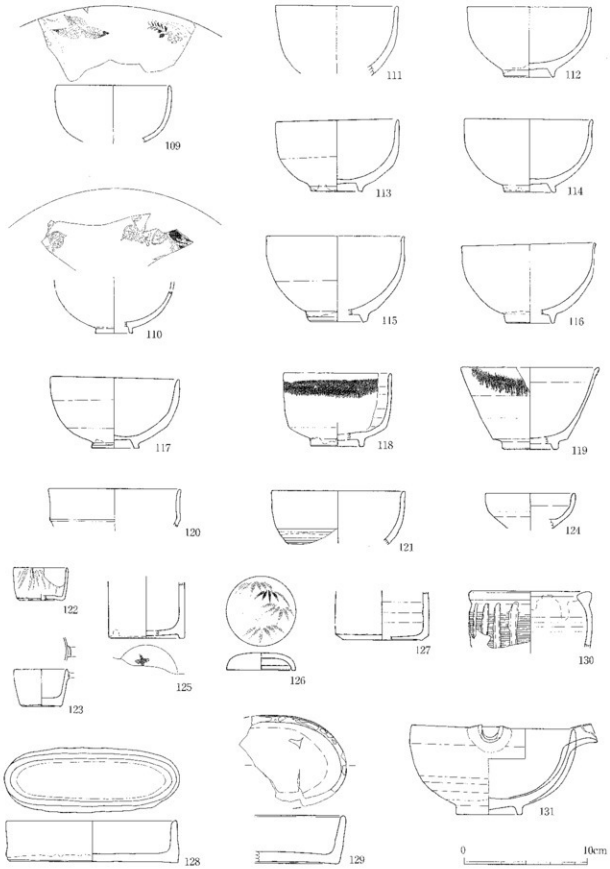


図85　二の丸第17地点出土陶器（8）
Fig.85　Glazed ceramics from NM17（8）

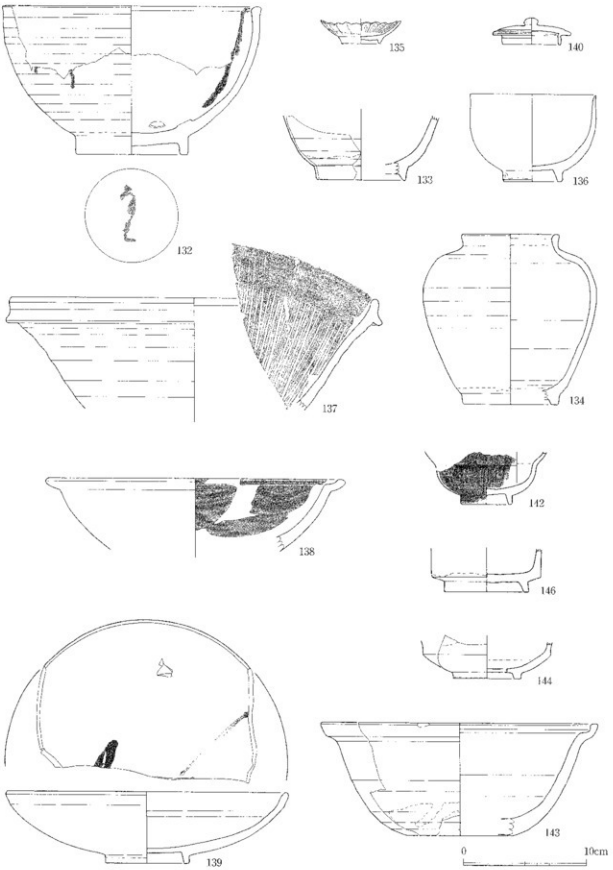


図86　二の丸第17地点出土陶器（9）
Fig.86　Glazed ceramics from NM17（9）

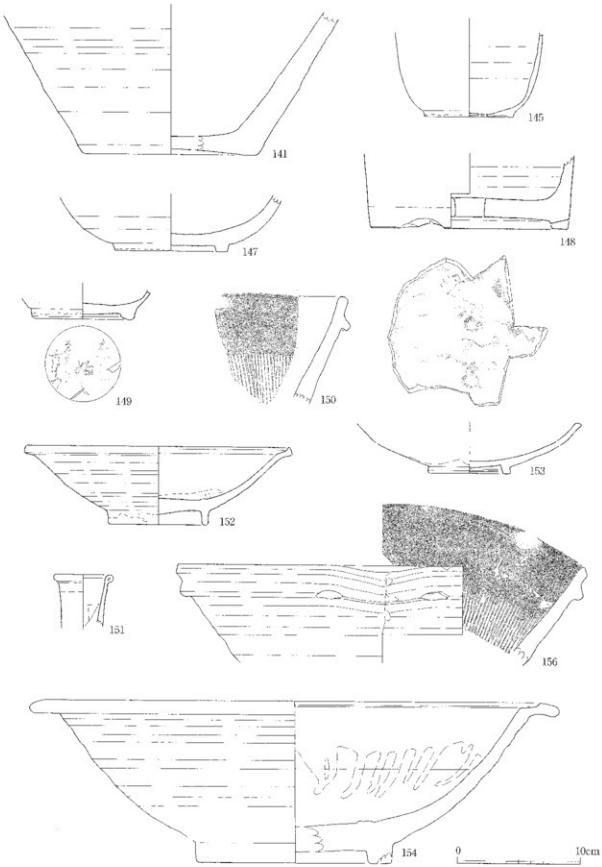


図87　二の丸第17地点出土陶器（10）
Fig.87　Glazed ceramics from NM17（10）

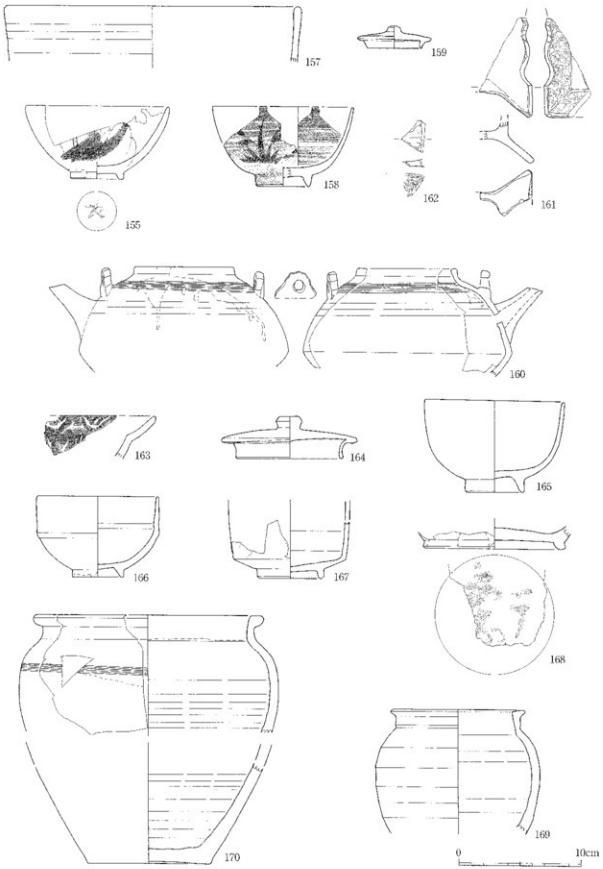


図88　二の丸第17地点出土陶器（11）
Fig.88　Glazed ceramics from NM17（11）

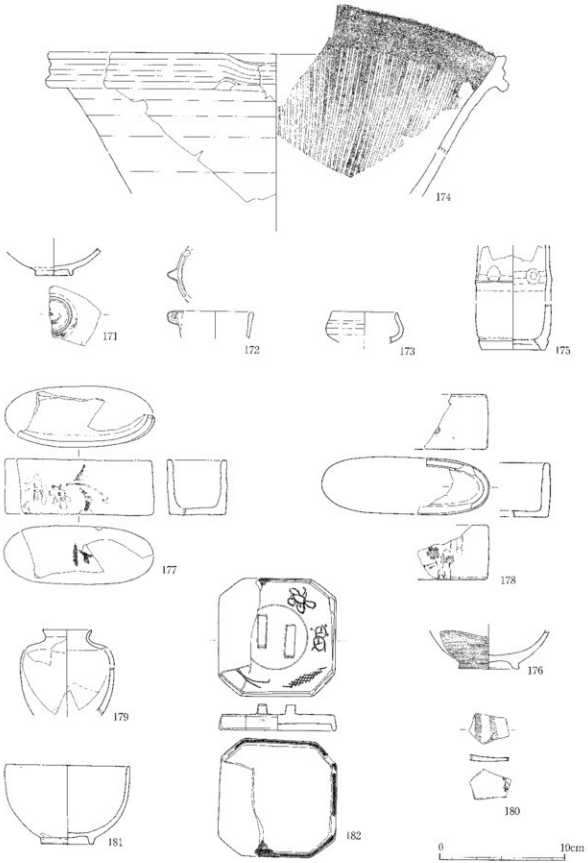


図89　二の丸第17地点出土陶器（12）
Fig.89　Glazed ceramics from NM17（12）

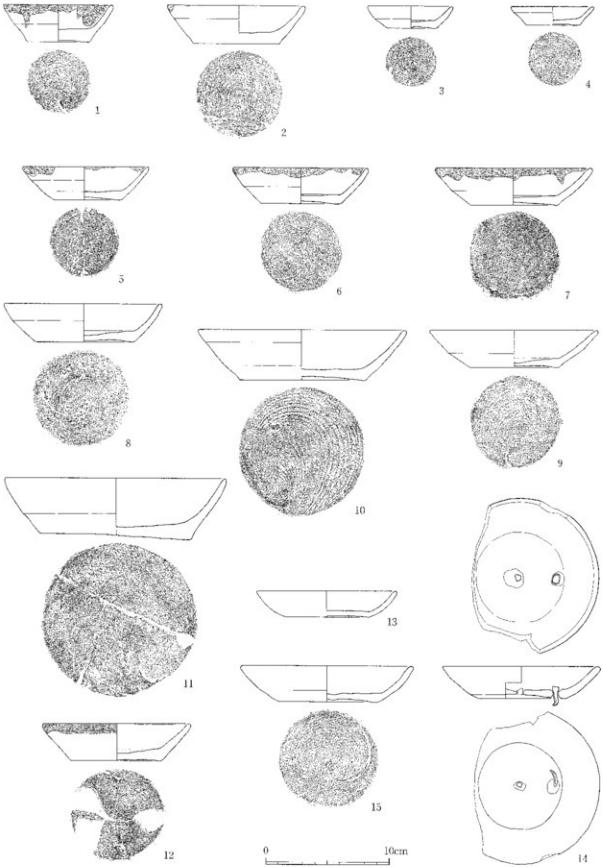


図90　二の丸第17地点出土土器（1）
Fig.90　Unglazed ceramics from NM17（1）

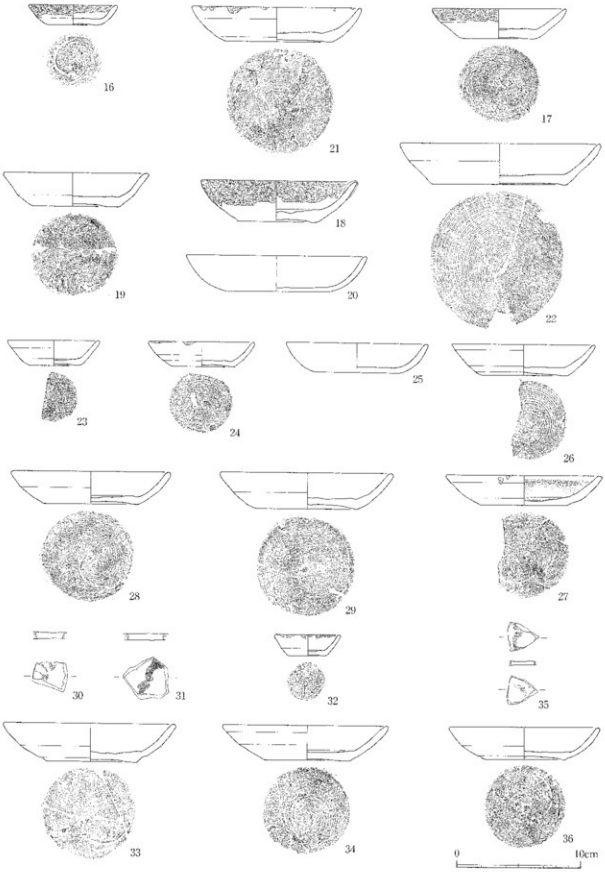


図91　二の丸第17地点出土土器（2）
Fig.91　Unglazed ceramics from NM17（2）

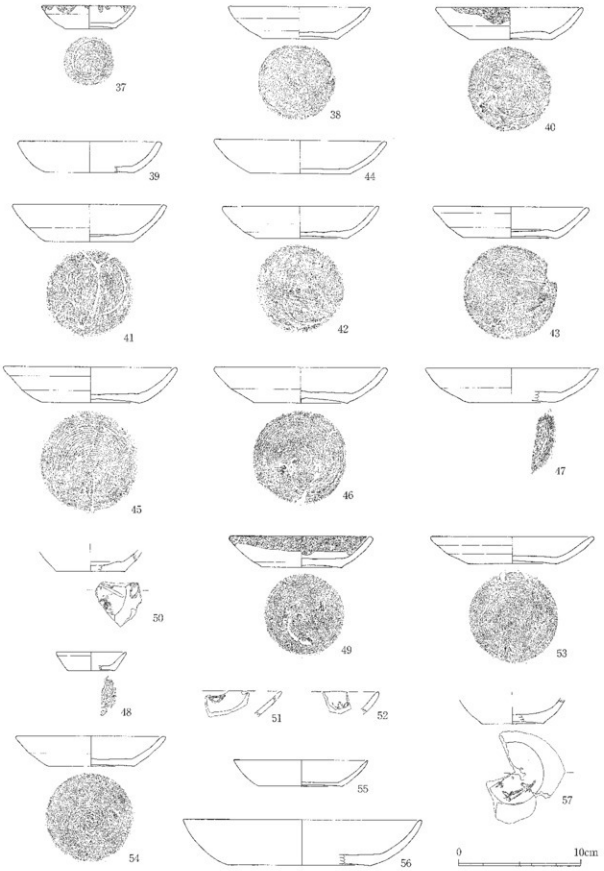


図92　二の丸第17地点出土土器（3）
Fig.92　Unglazed ceramics from NM17（3）

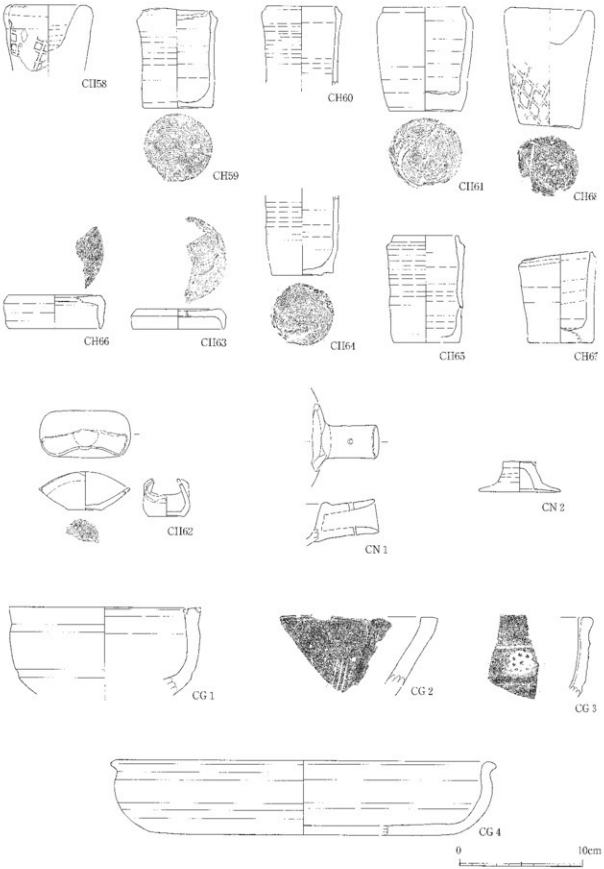


図93　二の丸第17地点出土土器（4）
Fig.93　Unglazed ceramics from NM17（4）

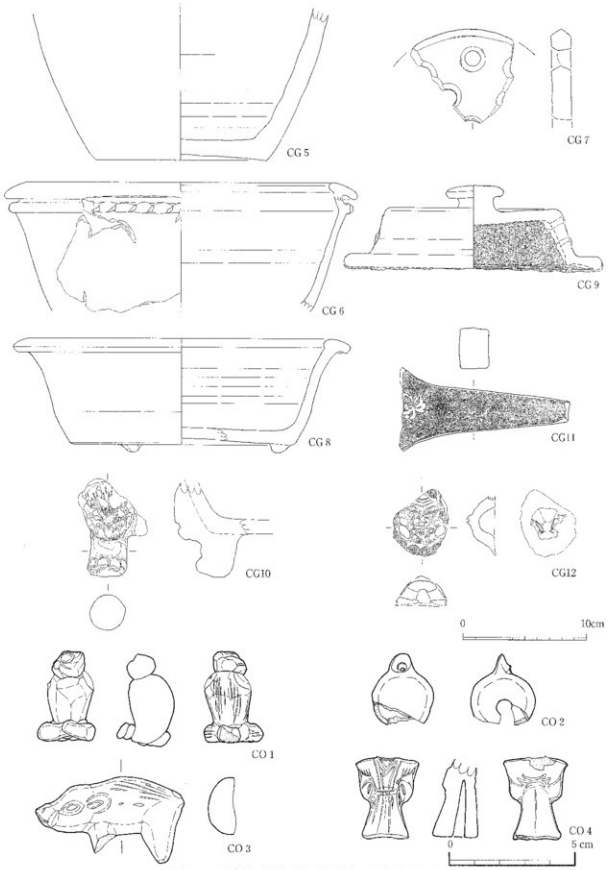


図94　二の丸第17地点出土土器（5）・土製品・人形
Fig.94　Unglazed ceramics, clay objects and figures from NM17

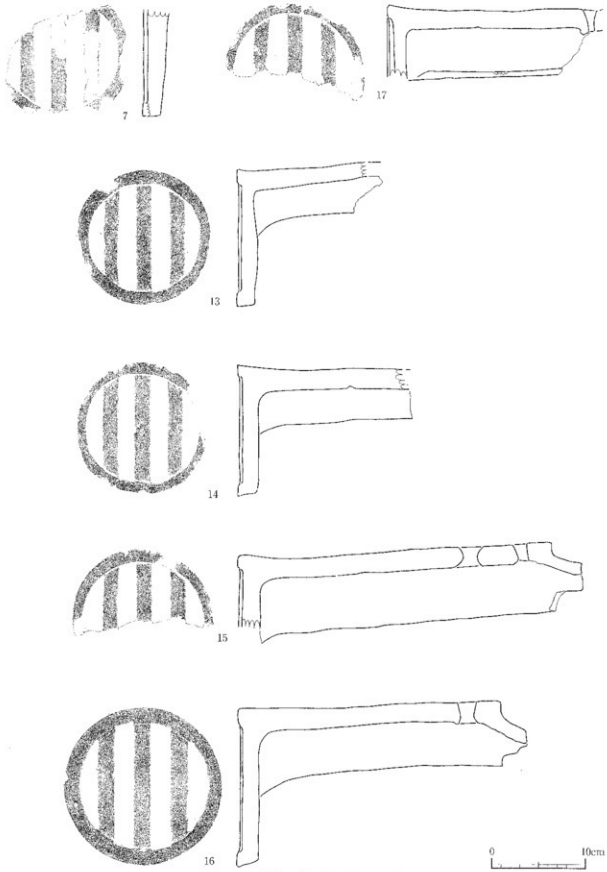


図95　二の丸第17地点出土軒丸瓦類（1）
Fig.95　Round eaves tiles from NM17（1）

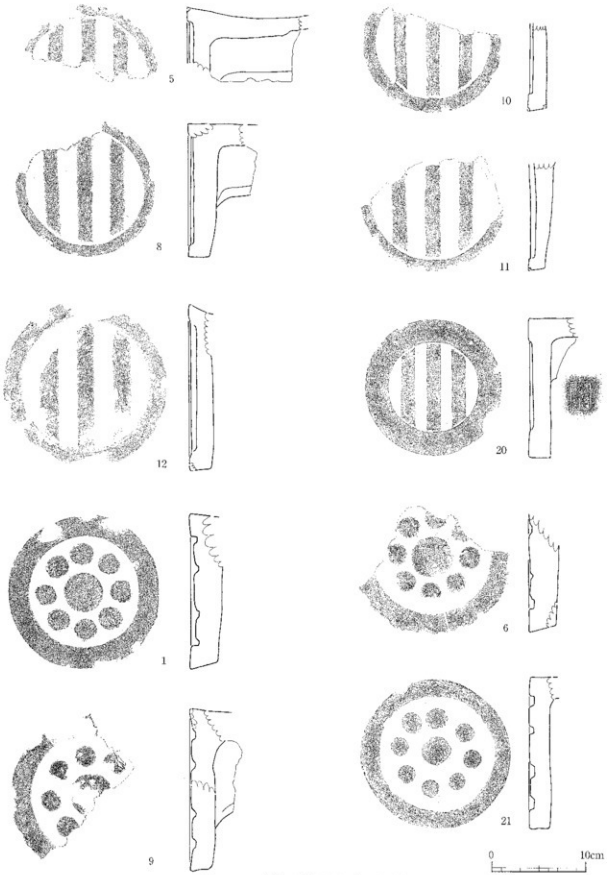


図96　二の丸第17地点出土軒丸瓦類（2）
Fig.96　Round eaves tiles from NM17（2）

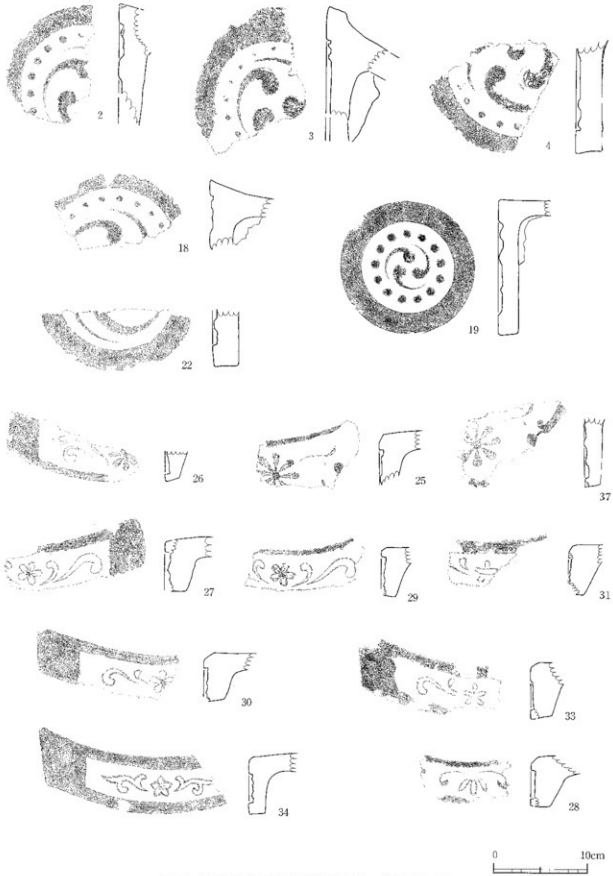


図97　二の丸第17地点出土軒丸瓦類（3）・軒平瓦類（1）
Fig.97　Round caves tiles and flat caves tiles from NM17

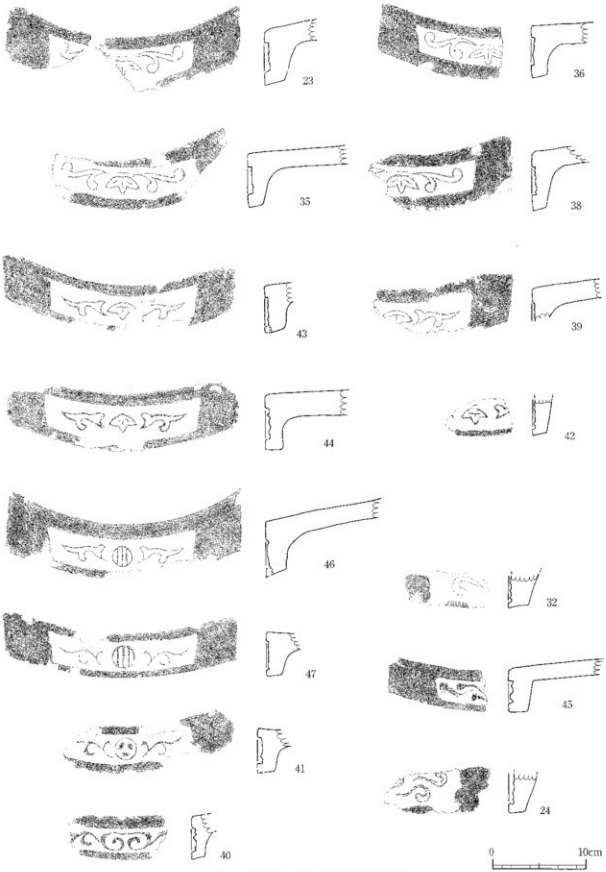
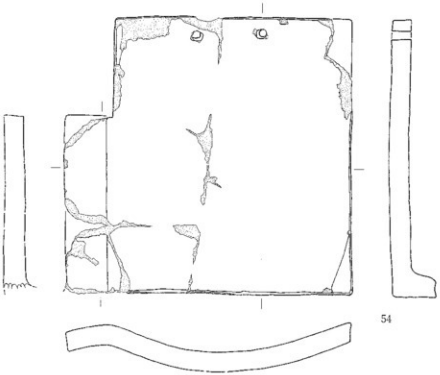


図98　二の丸第17地点出土軒平瓦類（2）
Fig.98　Flat eaves tiles from NM17（2）



0 10cm

図99　二の丸第17地点出土軒桟瓦
Fig.99　Eaves-pan tiles from NM17

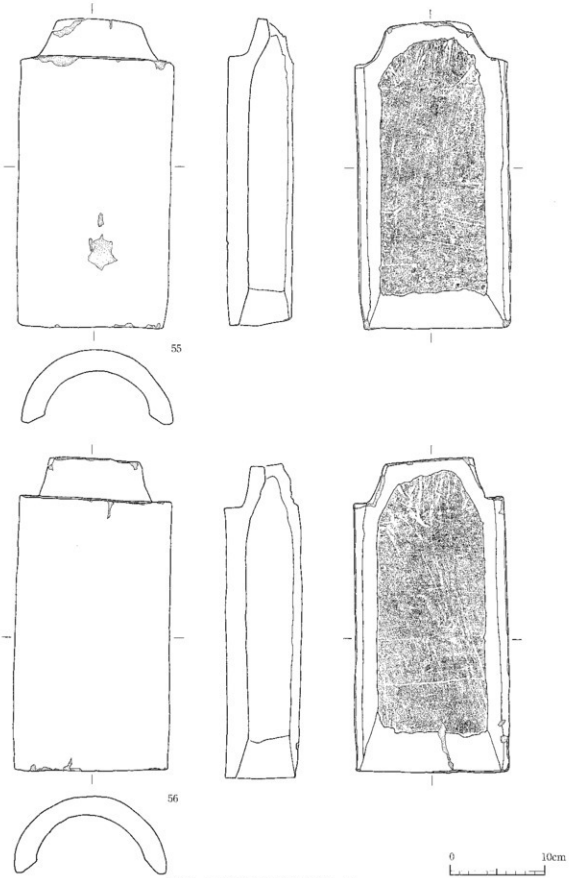


図100　二の丸第17地点出土丸瓦（1）
Fig.100　Round roof tiles from NM17（1）

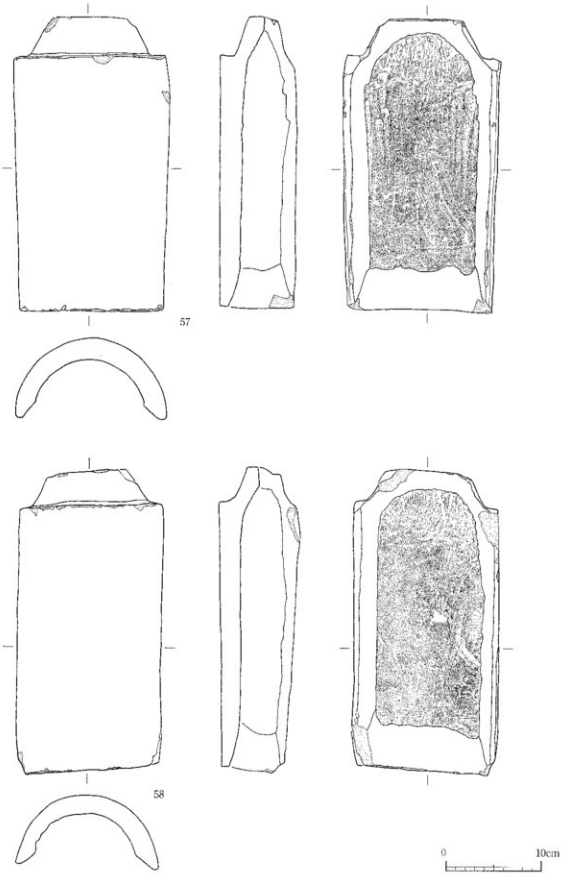


図101　二の丸第17地点出土丸瓦（2）
Fig.101　Round roof tiles from NM17（2）

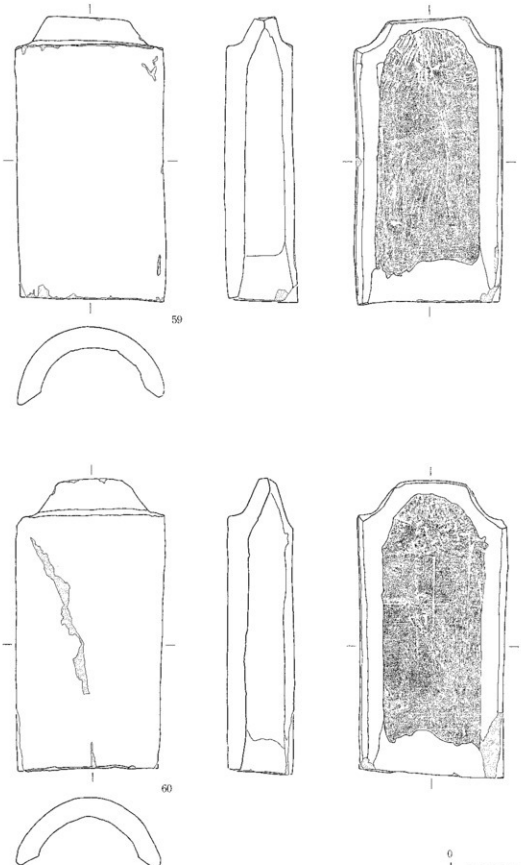
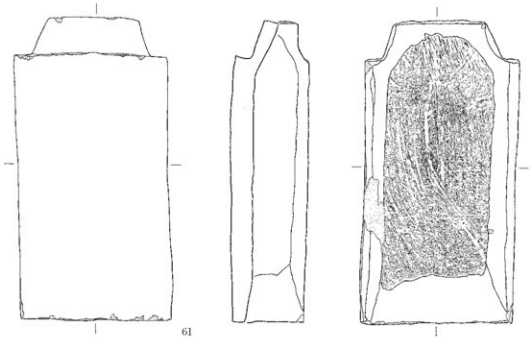


図102　二の丸第17地点出土丸瓦（3）
Fig.102　Round roof tiles from NM17（3）



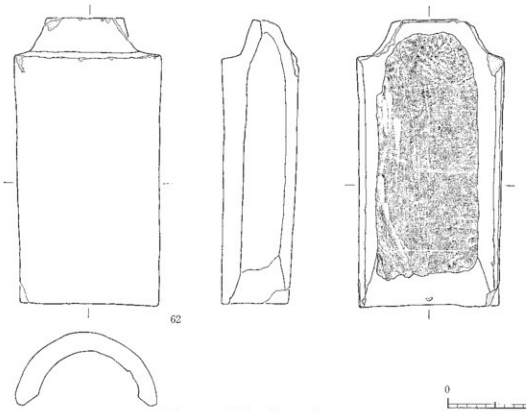


図103　二の丸第17地点出土丸瓦（4）
Fig.103　Round roof tiles from NM17（4）

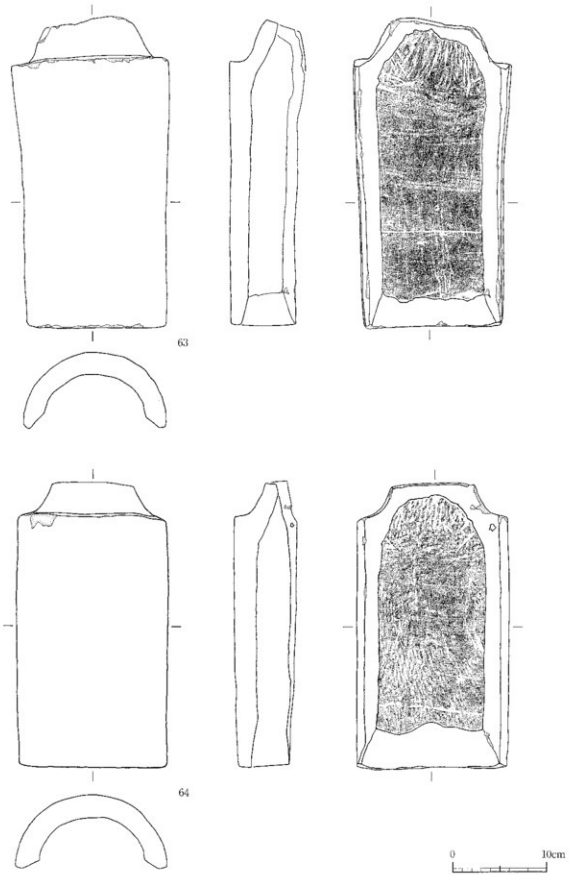


図104　二の丸第17地点出土丸瓦（5）
Fig.104　Round roof tiles from NM17（5）

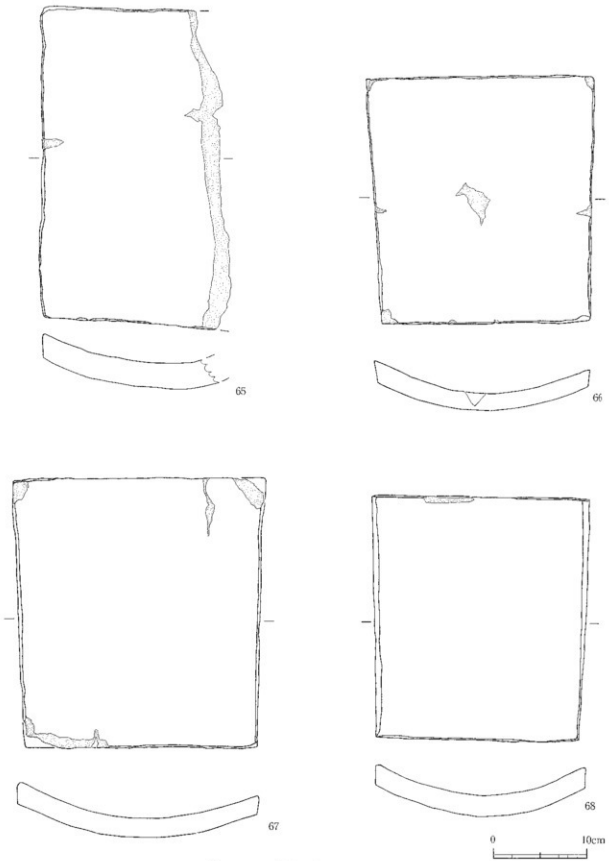


図105　二の丸第17地点出土平瓦（1）
Fig.105　Flat roof tiles from NM17（1）

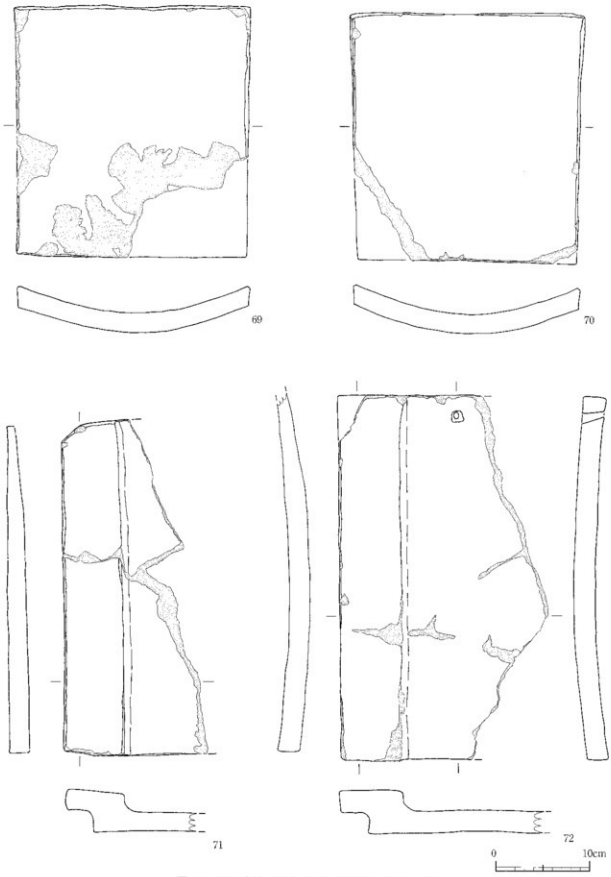


図106　二の丸第17地点出土平瓦（2）・板塀瓦（1）
Fig.106　Flat roof tiles and pan tiles used for fence from NM17

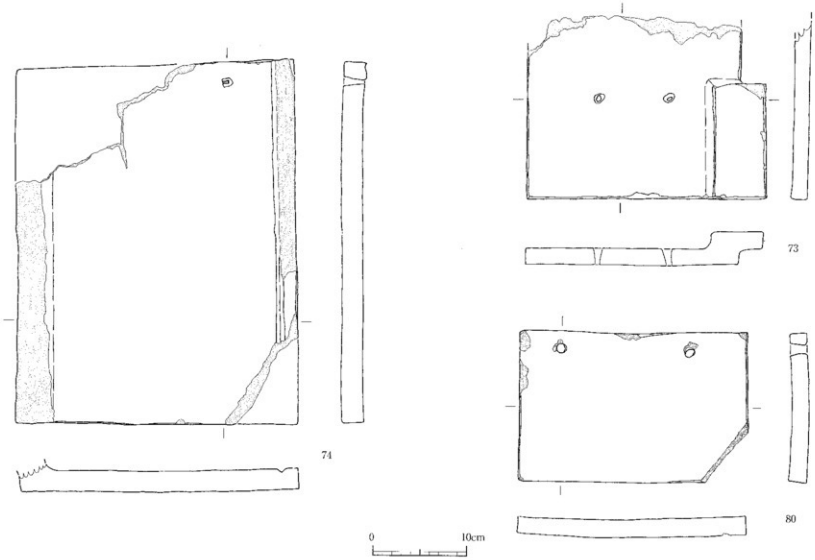


図107　二の丸第17地点出土板塀瓦（2）・板状瓦（1）
Fig.107　Pan tiles used for fence and various roof tiles from NM17

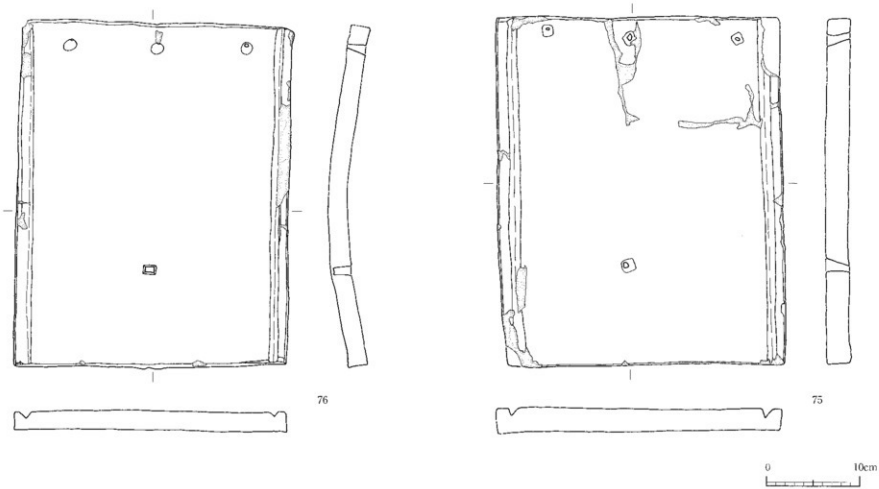


図108　二の丸第17地点出土板状瓦（2）
Fig.108　Various roof tiles from NM17（2）

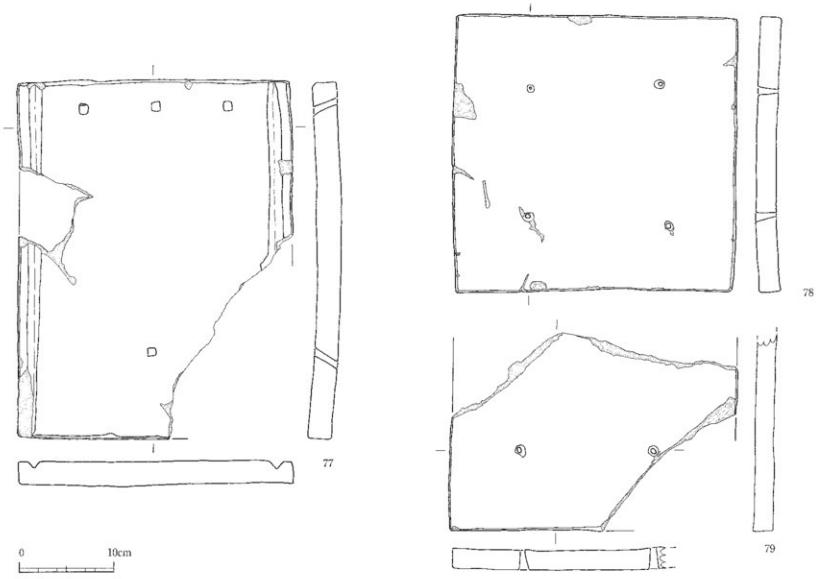


図109　二の丸第17地点出土板状瓦（3）
Fig.109　Various roof tiles from NM17（3）

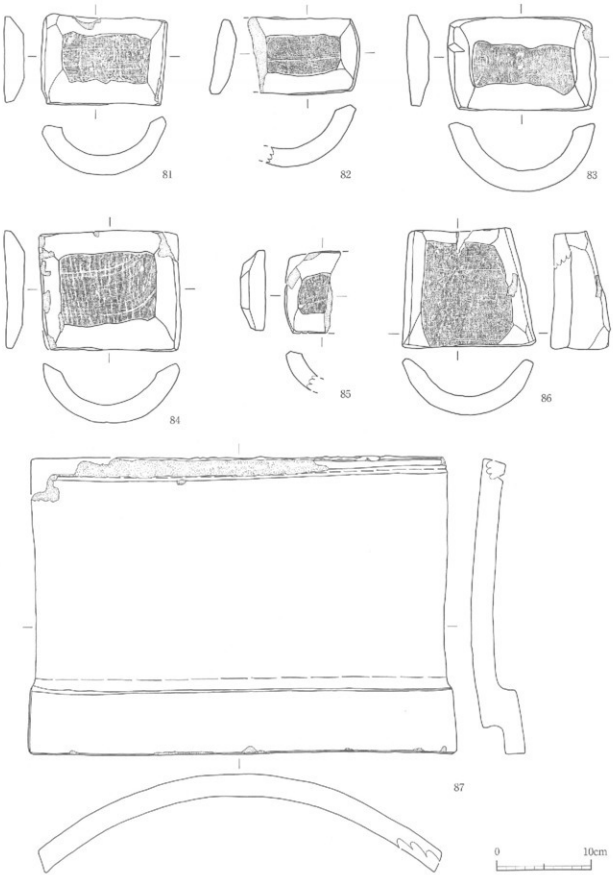


図110　二の丸第17地点出土面戸瓦・輪違い・棟瓦
Fig.110　Ridge decoration tiles, filler tiles and ridge cover tiles from NM17

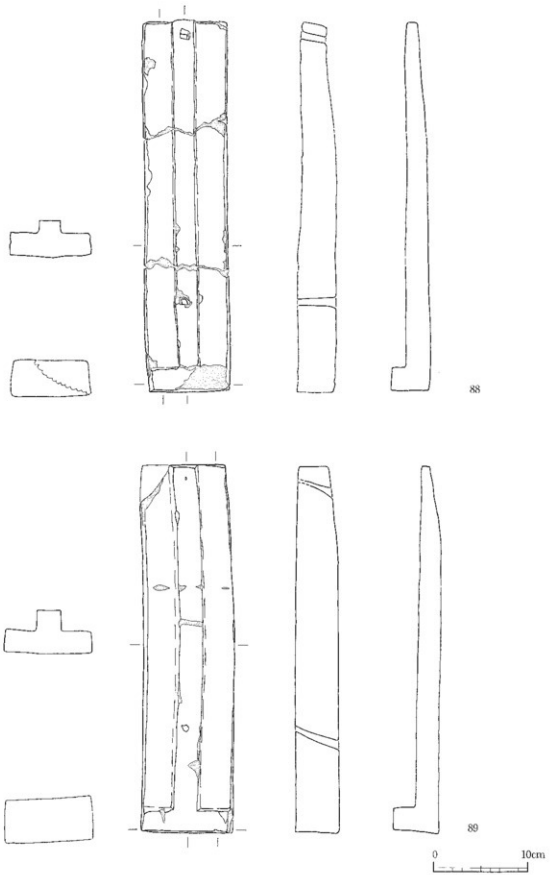


図111　二の丸第17地点出土T字瓦（1）
Fig.111　Tiles which figures of sections are "T" from NM17（1）

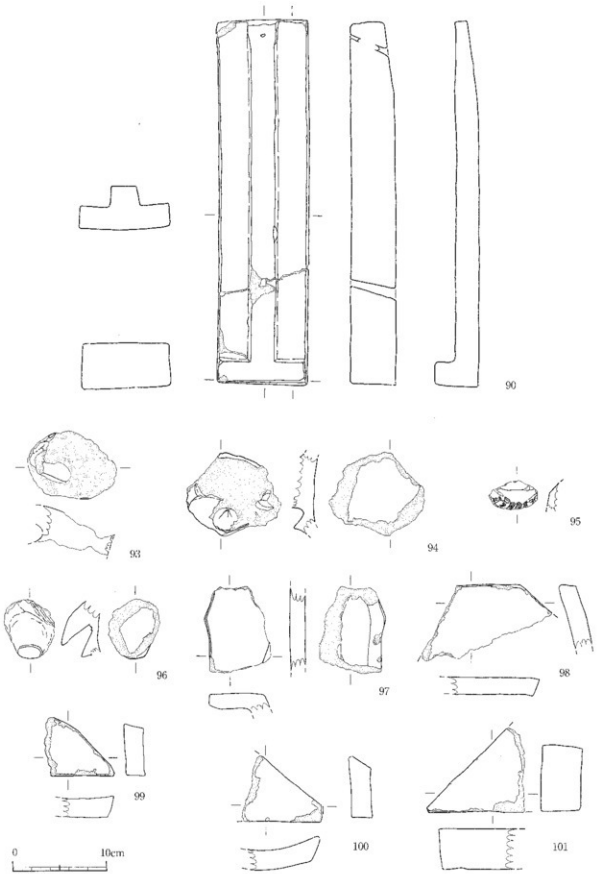


図112　二の丸第17地点出土T字瓦（2）・その他の瓦（1）
Fig.112　Various roof tiles from NM17

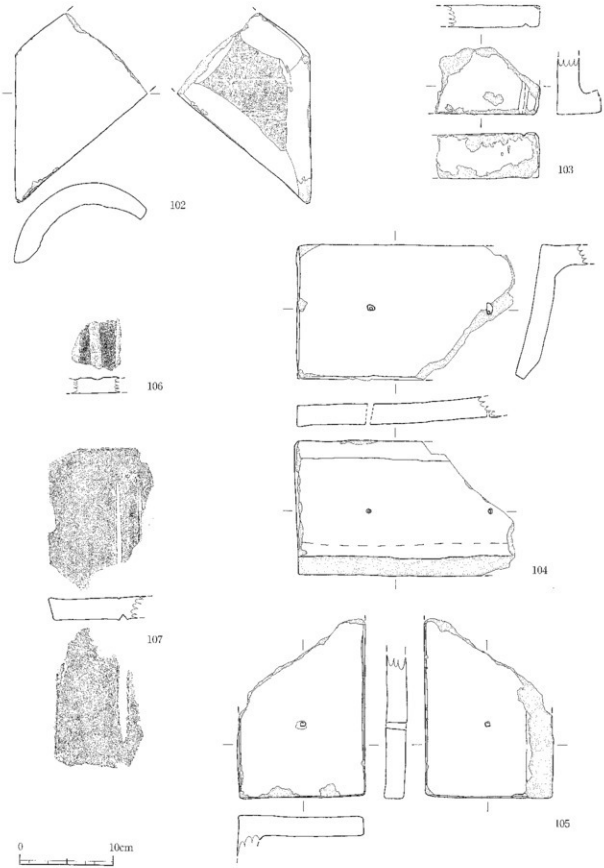


図113　二の丸第17地点出土その他の瓦（2）
Fig.113　Various roof tiles from NM17（2）

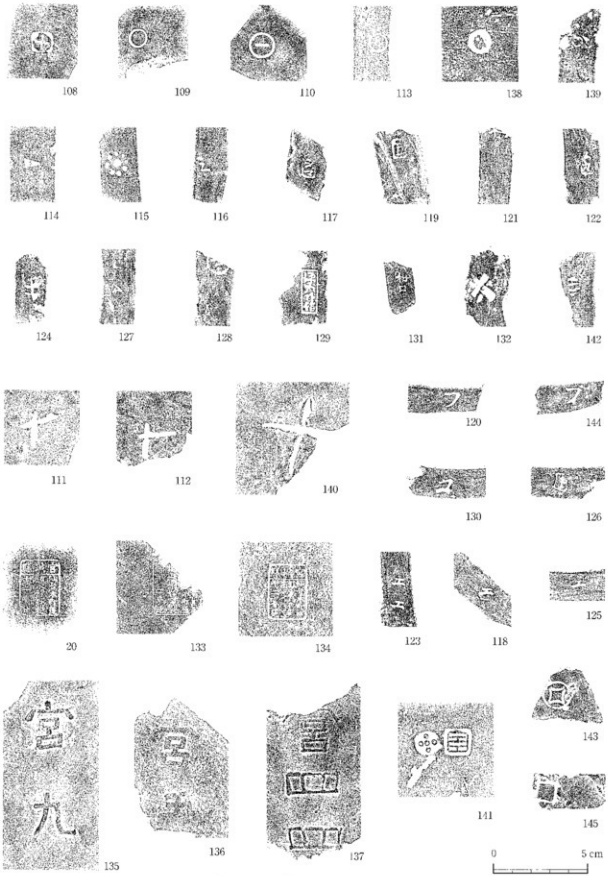


図114　二の丸第17地点出土刻印瓦
Fig.114　Roof tiles with seal impression NM17

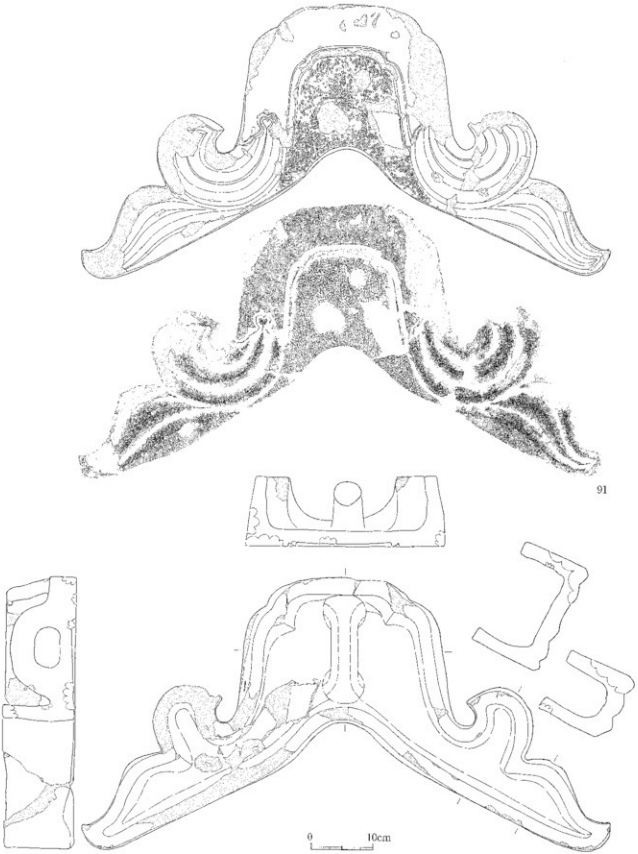


図115　二の丸第17地点出土鬼瓦（1）
Fig.115　Terminal ridge-end tile from NM17（1）

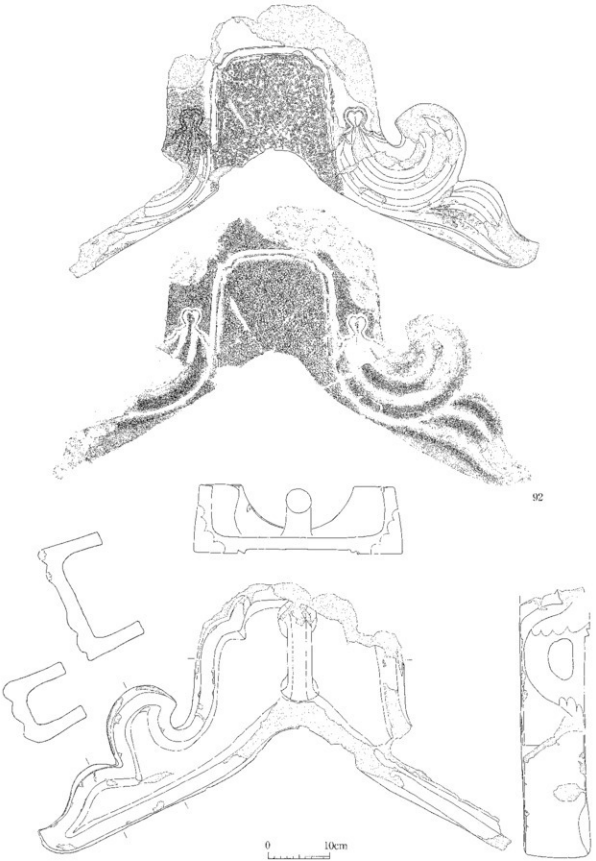


図116　二の丸第17地点出土鬼瓦（2）
Fig.116　Terminal ridge-end tile from NM17（2）

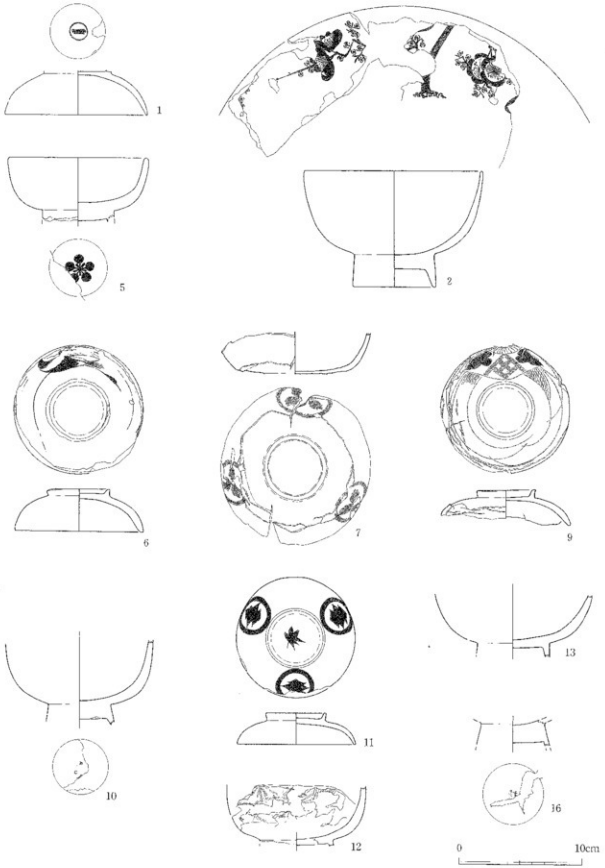


図117　二の丸第17地点出土漆椀（1）
Fig.117　Bowls with lacquer from NM17（1）

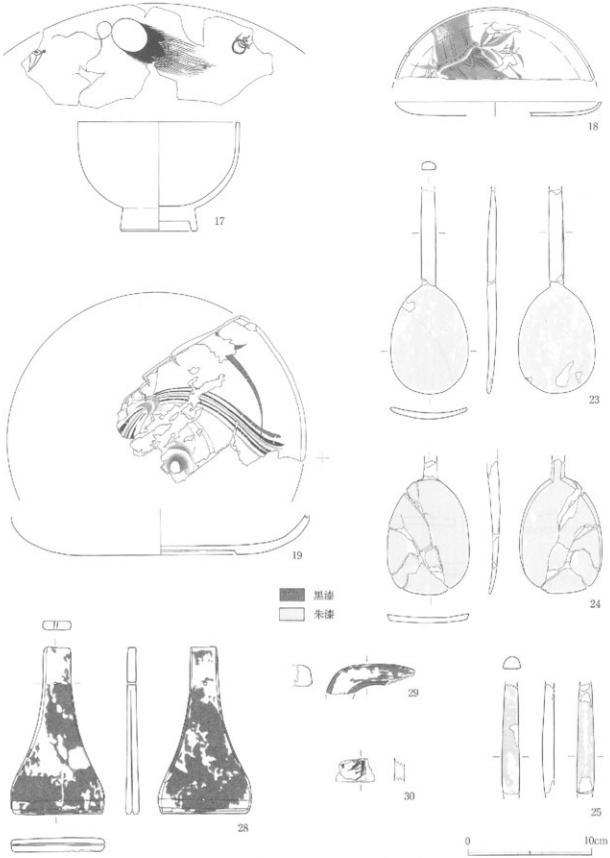


図118　二の丸第17地点出土漆椀（2）・その他の漆塗製品
Fig.118　Bowls, dishes and various wooden implements with lacquer from NM17

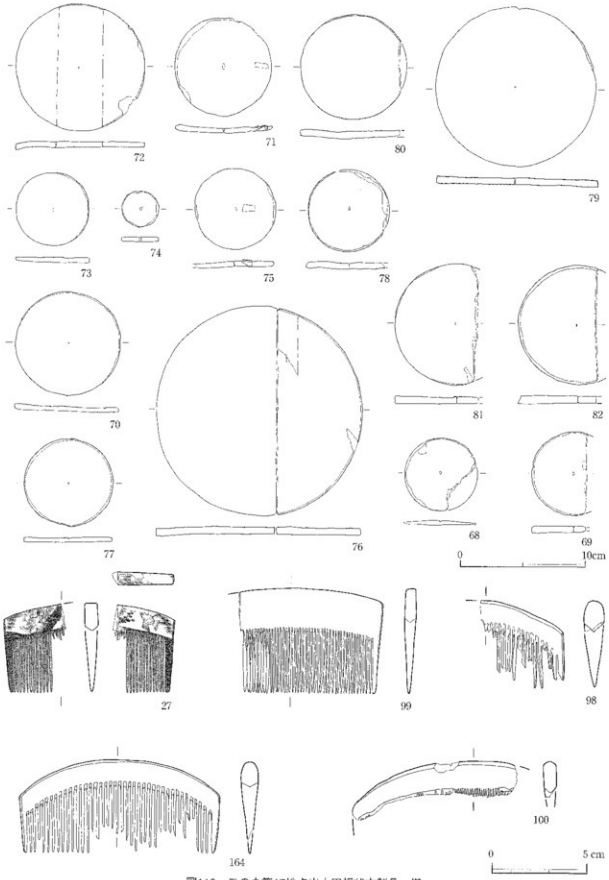


図119　二の丸第17地点出土円板状木製品・櫛
Fig.119　Wooden implements shaped round plate and combs from NM17

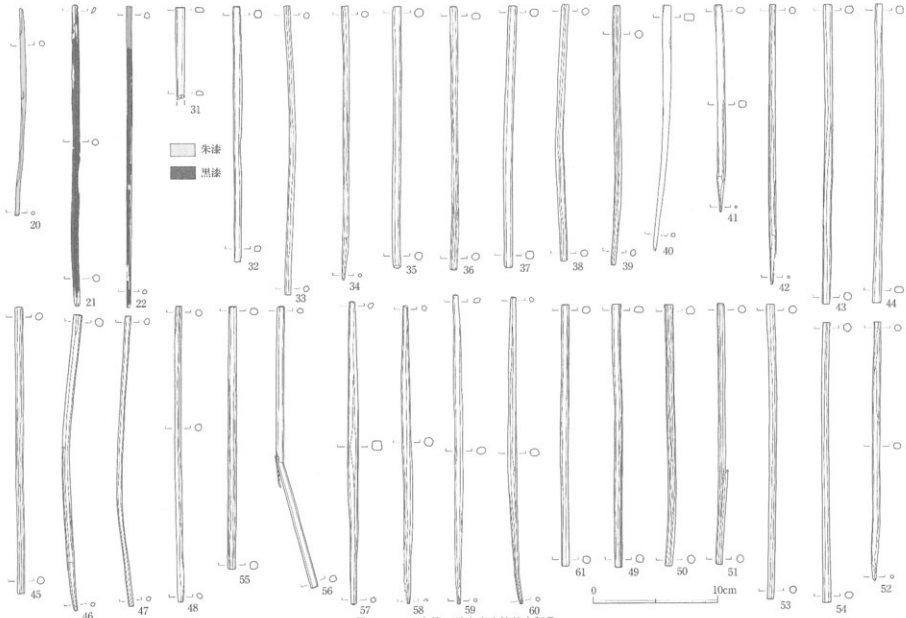


図120　二の丸第17地点出土箸状木製品
Fig.120　Wooden chopsticks from NM17

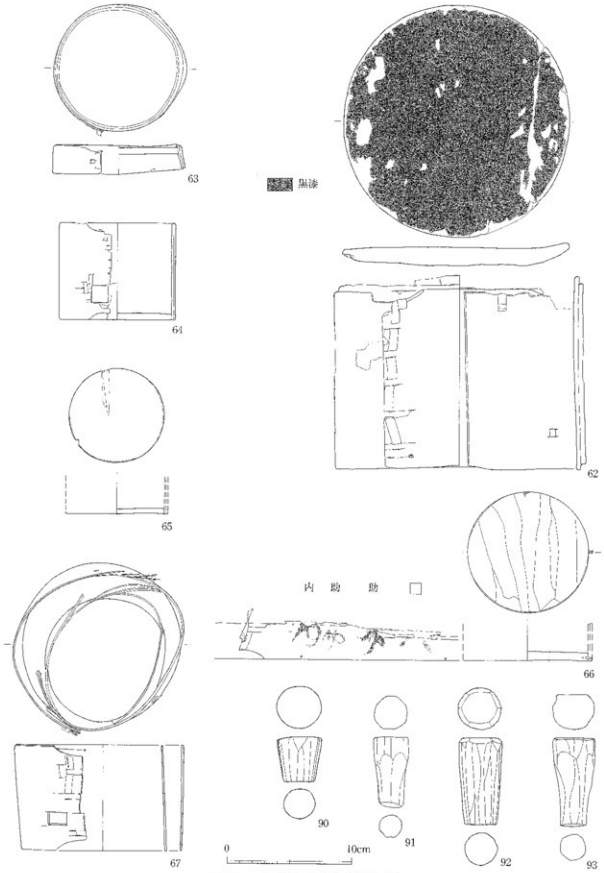


図121 二の丸第17地点出土曲物・栓
Fig.121 Round vessels by bending and securing a thin sheet of cypress wood and wooden plugs from NM17

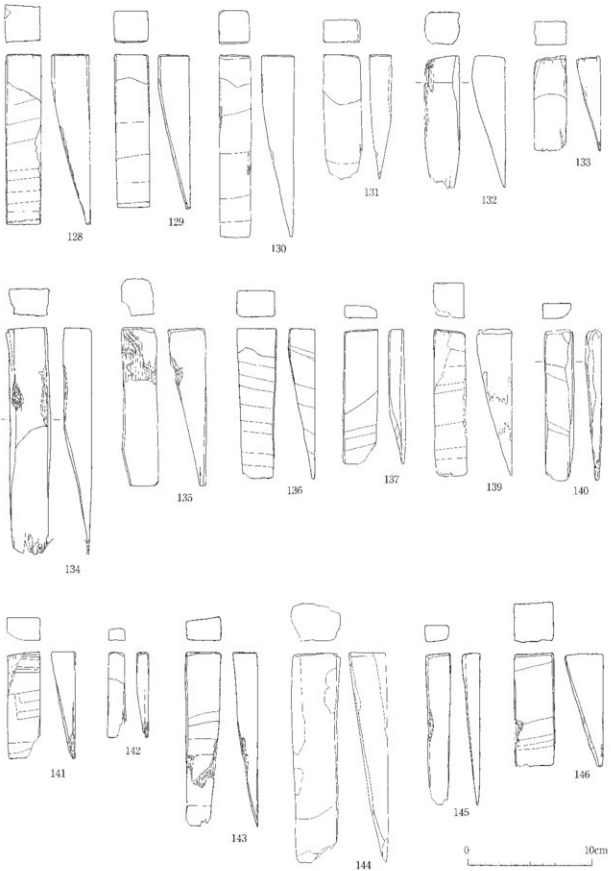


図122　二の丸第17地点出土楔
Fig.122　Wooden implements shaped wedge from NM17

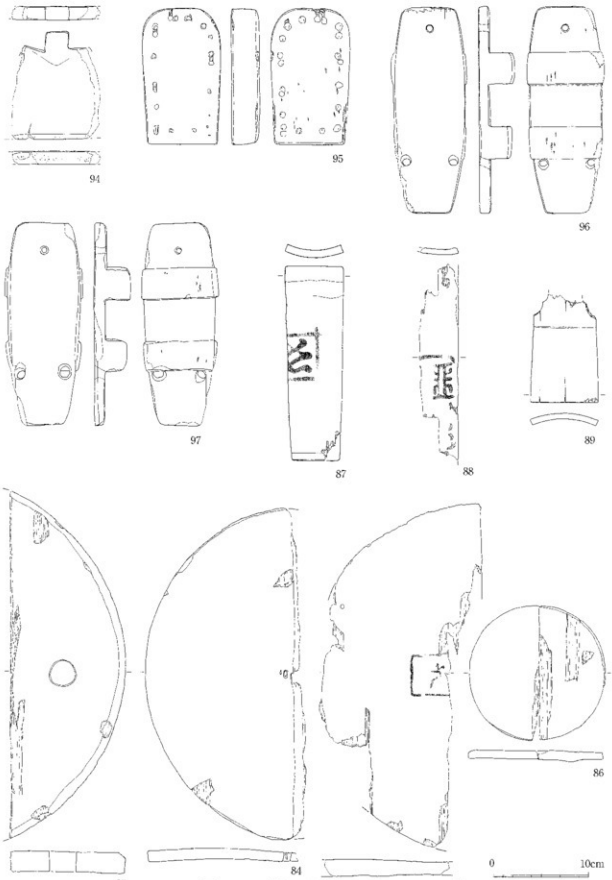


図123　二の丸第17地点出土下駄・桶類
Fig.123　Clogs and troughs from NM17

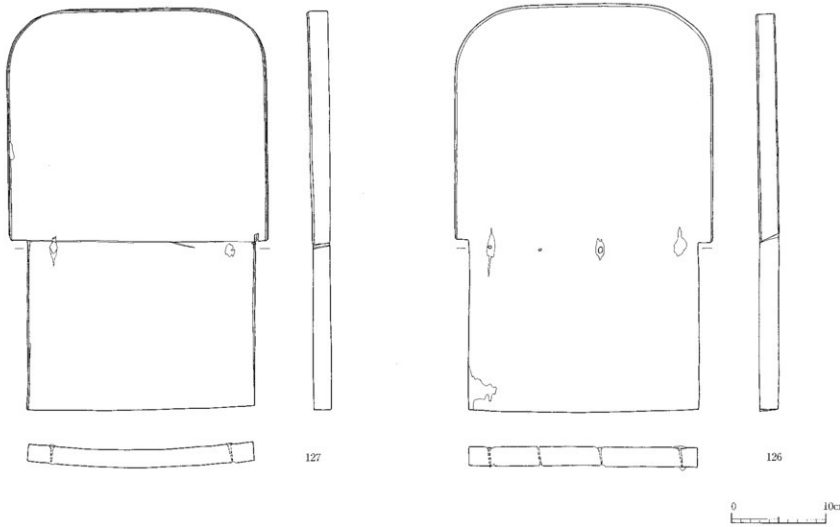


図124　二の丸第17地点出土その他の木製品（1）
Fig.124　Various wooden implements from NM17（1）

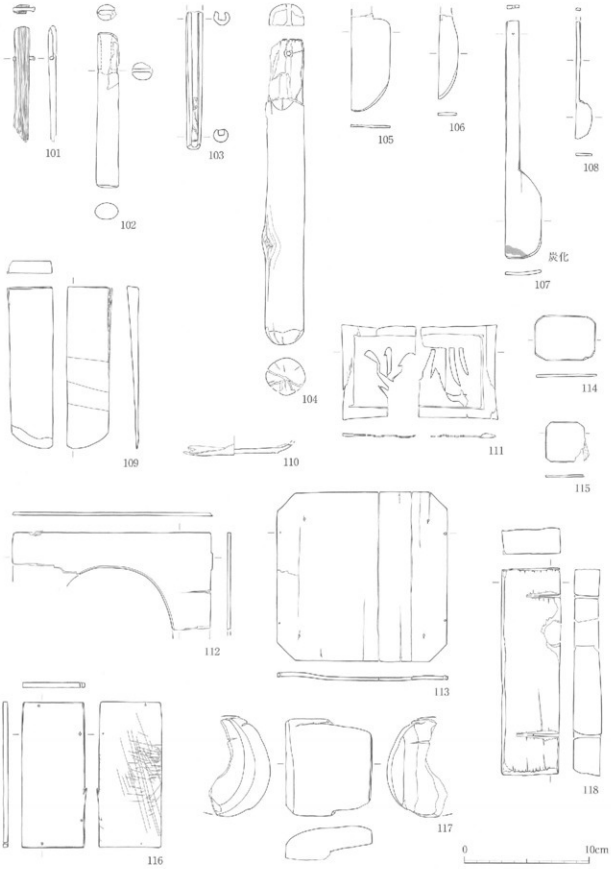


図125　二の丸第17地点出土その他の木製品（2）
Fig.125　Various wooden implements from NM17（2）

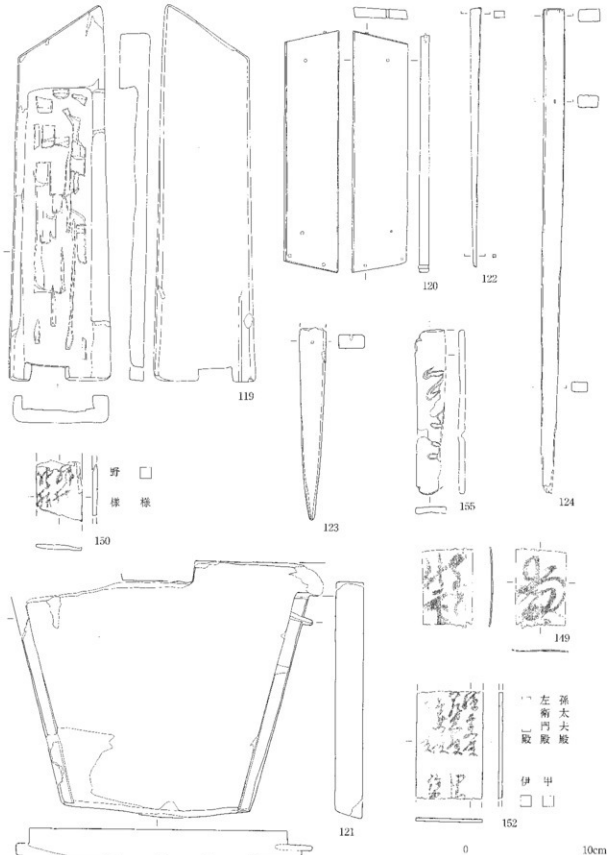


図126　二の丸第17地点出土その他の木製品（3）
Fig.126　Various wooden implements from NM17 (3)

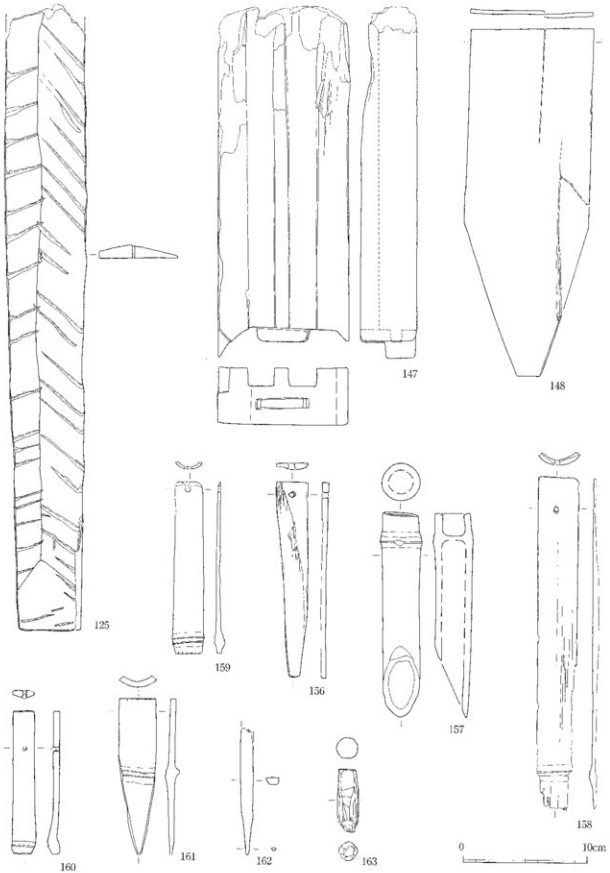


図127　二の丸第17地点出土その他の木製品（4）
Fig.127　Various wooden implements from NM17 (4)

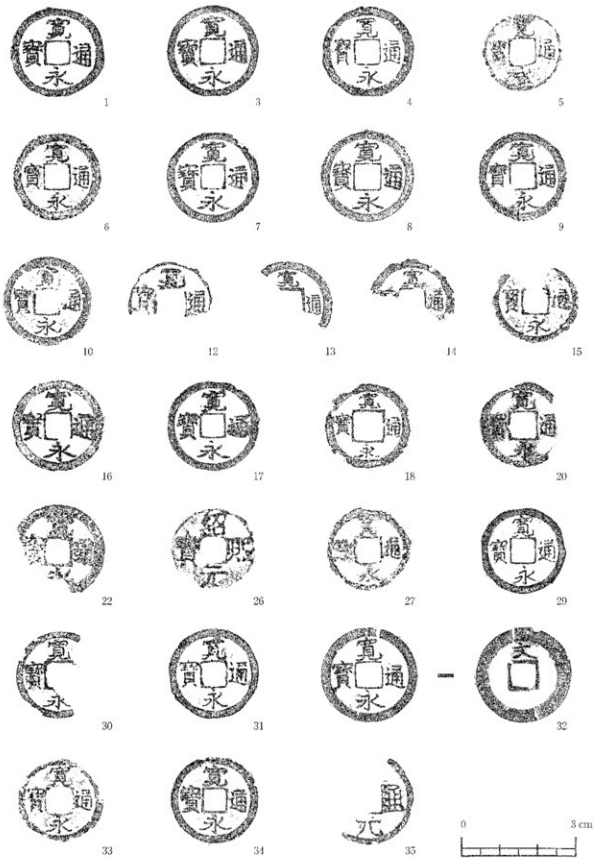


図128　二の丸第17地点出土古銭（1）
Fig.128　Coins from NM17（1）

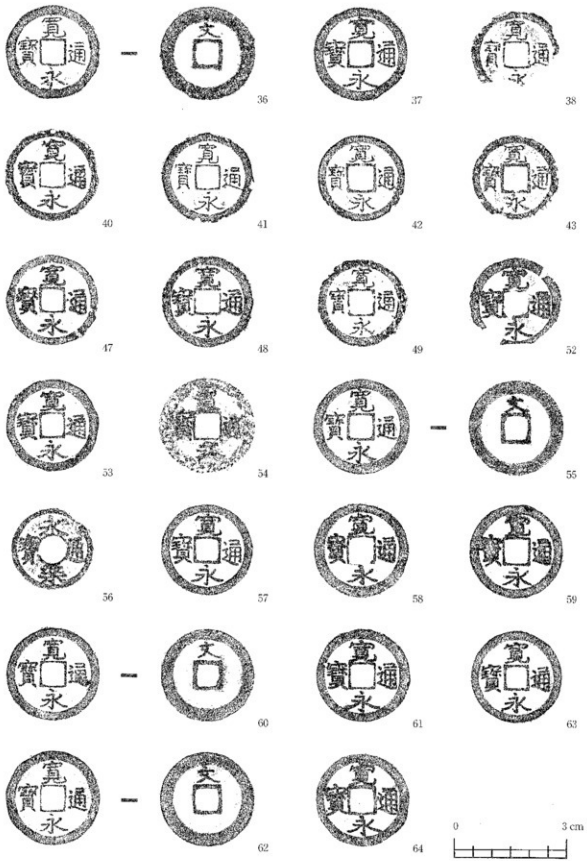


図129　二の丸第17地点出土古銭（2）
Fig.129　Coins from NM17（2）

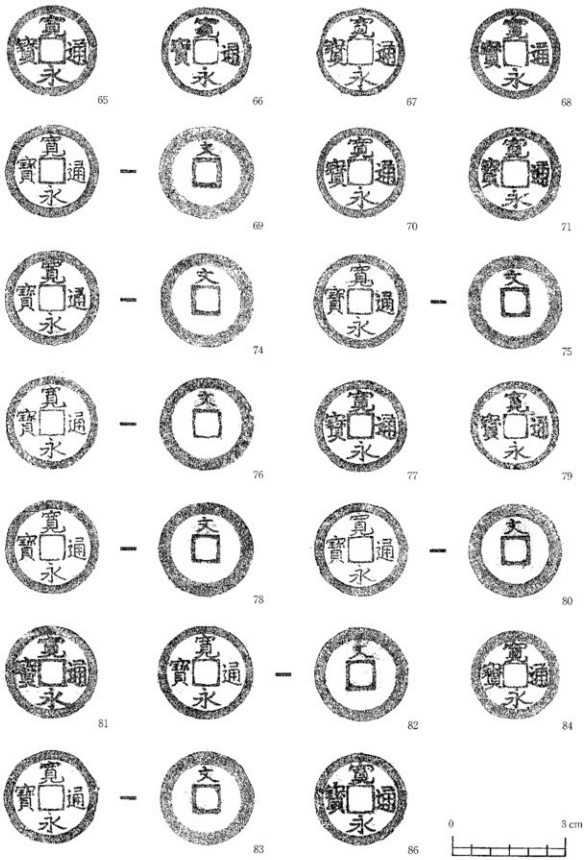


図130　二の丸第17地点出土古銭（3）
Fig.130　Coins from NM17（3）

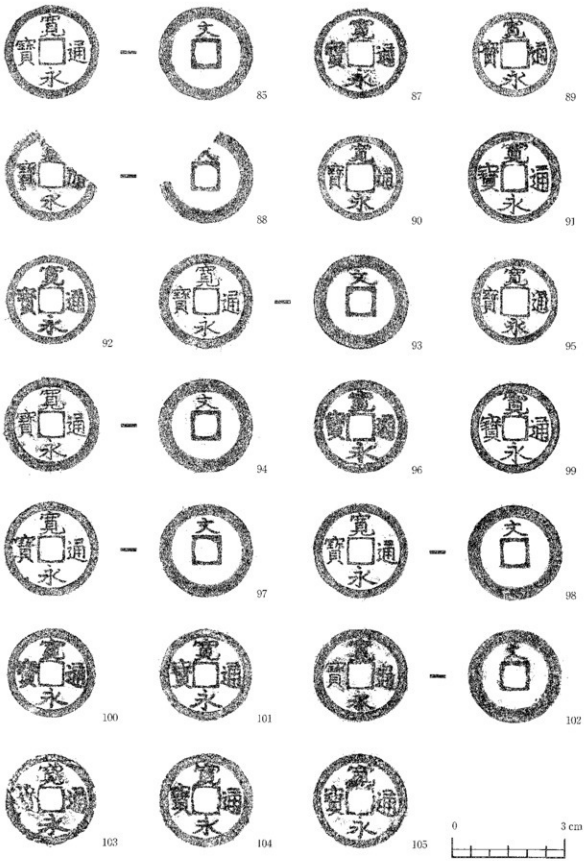


図131　二の丸第17地点出土古銭（4）
Fig.131　Coins from NM17（4）

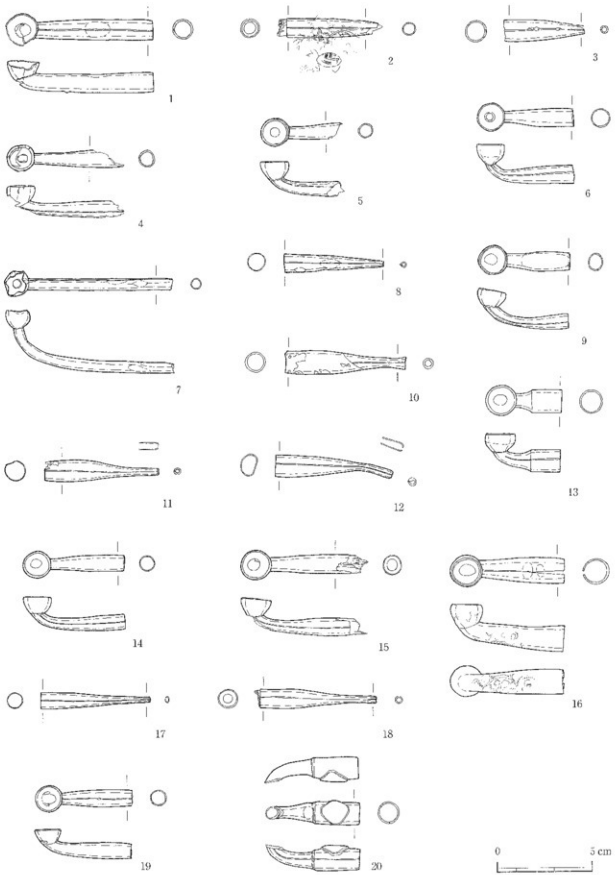


図132　二の丸第17地点出土煙管
Fig.132　Pipes from NM17

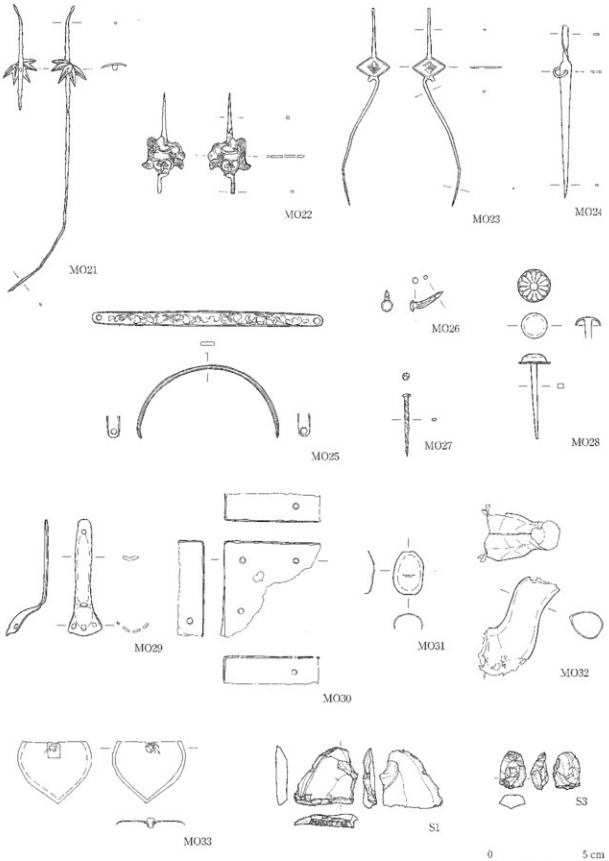


図133　二の丸第17地点出土その他の金属製品・石器・石製品
Fig.133　Various metal implements and stone tools from NM17

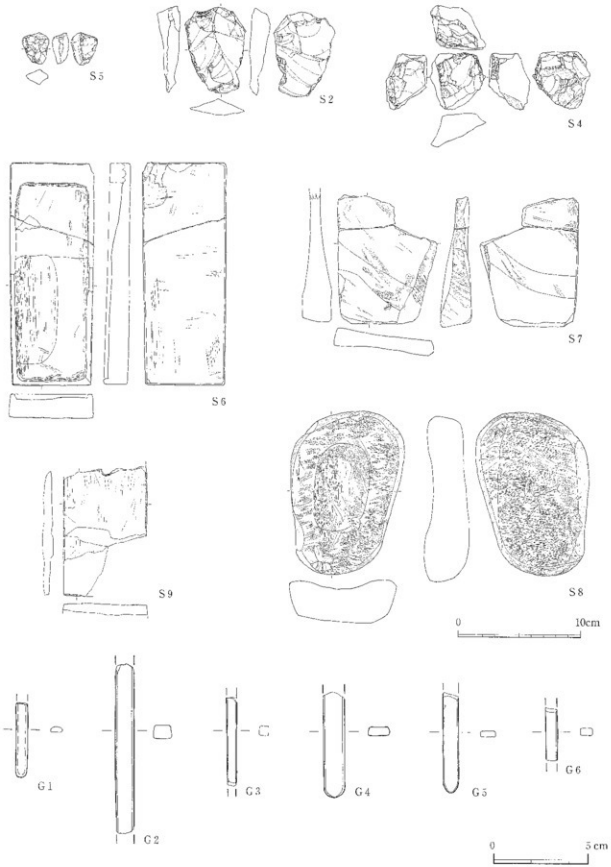


図134　二の丸第17地点出土石器・石製品・ガラス製品
Fig.134　Stone tools, stone-made objects and glass implements from NM17

表7　二の丸第17地点出土磁器集計表（1）
Tab. 7　Distribution of porcelains at NM17(1)

区・層・遺構	大碗	中碗					小碗				碗不明	皿			猪碗鉢皿不明	鉢	袋物			蓋物	その他	不明	合計
		丸形	端反	その他	蓋	不明	丸形	端反	その他	不明		極小	小中	大			瓶類	その他	不明				
2層	4	93	167	筒23 広東65 平杉11	21	33	32	83	広東8 筒4	17	154	44	486	156	117	44	27	7	9	蓋17 身6	小坏15 紅皿7 酒坏1 合子14 猪口3 仏飯器1 水滴2 段重1 土瓶2 人形1	47	1722
3層	1	28	4		3	3	4	4		1	11	1	12		1	1				身1	小坏4 紅皿3 酒杯3		85
4層				筒5			2		筒1			1	2				1		1		紅皿1		14
整地A		7	2			3	1	2			3		1				1			蓋1	水滴2		23
不明		3	2	筒1	2		1	2		1	9		14		5		1		2	蓋2身2	小坏1	5	53
1層・撹乱	12	373	223	広東3 筒26	40	83	87	113		49	276	19	651	15	173	11	56	2	31	蓋52 身20	小坏28 紅皿9 酒坏23 合子12 猪口16 仏飯器4 灰吹2 火入10 水滴6 急須1 段重5 香筒1 土瓶2	163	2387
1号井戸																							0
I期ピット																							0
I期小計																							0
11号建物																							0
12号建物																							0
6号堀																							0
7号堀																							0
25号柱列																							0
24号土坑		1					1				1												3
42号溝													1	1									2
46号溝		1				1											1						3
47号溝																	1						1
48号溝																							0
49号溝																							0
50号溝																							0
2号石敷																							0
便槽遺構						1							1								紅皿1		3
II期ピット																							0
II期小計		2				2	1				1		2	1			2				1		12
34号溝																							0
35号溝		2									1		5		1								9
36号溝													1						2			1	4
37号溝		2											1		2								5
38号溝		1				1					1											1	4
39号溝		5				1					1				1						小坏1 猪口1		10
40号溝															1								1
41号溝		1											1										2
45号溝																							0
51号溝																							0
54号溝																							0
55号溝																							0
56号溝																							0
57号溝																							0
58号溝																							0
59号溝													1										1
60号溝																	1						1
61号溝																							0
62号溝																							0
63号溝																							0
64号溝																							0
66号溝																							0
67号溝																							0
IIIa期ピット																							0
IIIa期小計		11				2					3		9		5		1		2		2	2	37
21号柱列								1					1								小坏1		3
22号柱列																							0
23号柱列																							0
24号柱列		1									1												2
2号土坑		1								1	1				1								4
33号土坑		2						1					1								紅皿2		6
52号溝													1				1						2
65号溝		1																					1
69号溝							1						1									1	3
70号溝		1						1															2
3号石敷	1	4				1		1			2		2	1	2					身1	段重1		16
3号井戸		3	7	平杉1		1	1	5			7		13		3	1	1			蓋1身1	小坏1 猪口1		47
IIIb1期ピット																							0
IIIb1期小計	1	13	7	1		2	2	9		1	11		19	1	6	1	2			3	6	1	86

表8　二の丸第17地点出土級器集計表（2）
Tab. 8　Distribution of porcelains at NM17(2)

区・層・遺構	大椀	中椀 丸形	中椀 湯反	中椀 その他	中椀 蓋	中椀 不明	小椀 丸形	小椀 湯反	小椀 その他	小椀 小明	椀不明	皿 保小	皿 小中	皿 大	識別不明	鉢	袋物 瓶類	袋物 その他	袋物 不明	香物	その他	小明	合計
9号建物																							0
10号建物																							0
20号柱列																							0
7号土坑		12			2	1	1	1			3		2	2						身1	合子1 小坏1		27
26号土坑																							0
27号土坑													1										1
3号本舗													1										1
4号本舗		6	1			1		1						2			1						12
9-32号溝	1	13	1					4			6		1	7		2	1	4		身1	紅皿2 小坏2 合子2		47
2号井戸		10				1	6	1			2			5							紅皿1 合子1		27
瓦敷道構																							0
Ⅲ16間ピット		2					1						1			2							6
Ⅲ16期小計	1	43	2		2	3	8	7			11	1	17	2	4	3	5			2	10		121
4号建物								1					1										2
5号建物		4					6	1		1			1	1			1			身1	小坏2 油壺1		19
16号柱列								1			1												2
17号柱列		1				1																	3
18号柱列		4						1			1		1										7
19号柱列							1																1
15号土坑		2					1																3
19号土坑		4		筒1			4	1			2		2		1						小坏1		16
22号土坑																							0
23号土坑																							0
29号土坑						1															紅皿1		2
30号土坑																	1						1
43号溝				筒1																			1
44号溝		1																					1
Ⅲ16間ピット		2								1			3				1				仏飯器2 小坏1		10
Ⅲ16期小計		18		2		2	12	5		2	4		8	1	1		3			1	8		67
4号土坑																							0
14号土坑		7	1			1	3				3	2	4		2					蓋1身1	紅皿4 小坏1		30
20号土坑																							0
2号溝	1	4	2				1	1			3	3	15		2					身1	紅皿1 鍋口1 小坏1 仏飯器2		38
3号溝																							0
6号溝		1					3				2		4		1		1				鍋口1		13
27号溝		6				1	2						1		1						小坏1 紅皿1		13
Ⅲ16間ピット																							0
Ⅲ16期小計	1	18	3			2	9	1			8	5	24		6		1			3	13		94
16号土坑																							0
21号土坑																							0
Ⅲ18間ピット		3					1						1		1		1				小坏1		8
Ⅲ18期小計		3					1						1		1		1					1	8
1号建物											1		1		1								3
2号建物							2				1	1			1				1		小坏1		8
3号建物																				蓋1身1			2
8号建物																							0
14号溝																						2	2
17号溝		6									1												7
19号溝													1										1
20号溝																							0
21号溝																							0
22号溝		1																					1
23号溝																							0
24号溝							2				2	1	4								紅皿1		10
29号溝																							0
30号溝											1		1										2
31号溝			1										1										2
瓦敷道構																							0
Ⅳ2期ピット																							0
Ⅳ2期小計		7	1				4			1	6	1	9		2				1	2	2	2	38

表９　二の丸第17地点出土磁器集計表（3）
Tab. 9　Distribution of porcelains at NM17(3)

区・層・遺構	大碗	中碗 丸形	中碗 端反	中碗 その他	中碗 蓋	中碗 不明	小碗 丸形	小碗 端反	小碗 その他	小碗 不明	碗不明	皿 極小	皿 小中	皿 大	碗鉢皿別不明	鉢	袋物 瓶類	袋物 その他	袋物 不明	蓋物	その他	不明	合計
7号建物		3													1								4
1号塀		1				2							1				1			身1			6
2号塀		1			1		1					1							1		猪口2		7
3号塀		2						2			2												6
4号塀		3			1	1							1										6
5号塀																							0
6号柱列																							0
7号柱列		2	1				1	2		1		1	2				1			蓋2		1	14
8号柱列							1	1			1		1							身1			5
9号柱列								1												蓋1			2
10号柱列		1				1				1	1									身1			5
11号柱列		1									2												3
12号柱列																							0
13号柱列													1								紅皿1		2
14号柱列													1										1
15号柱列																							0
1号土坑																							0
6号土坑		3		筒2	1	1	2				1									蓋1	小坏1 合子1 火入1		14
8号土坑		1	1														1					1	4
11号土坑		2			1		2						1							蓋1身1			8
18号土坑		2				1							1										4
32号土坑		1															1						2
Ⅳb期ピット	1	9	2	1			2	1			3		2				1			1	3	1	27
Ⅳb期小計	1	32	4	3	4	6	9	7		2	10	2	11		1		5		1	10	9	3	120
6号建物																							0
1号柱列																							0
2号柱列		1									1	1	1										4
3号柱列								1															1
4号柱列						1																	1
5号柱列							1				1												2
1号杭列																							0
2号杭列											1												1
3号杭列																						1	1
5号土坑		12	4	筒1	2	1	1	6		3	11	1	5		2		2			蓋3身2	小坏1 紅皿1	3	61
9号土坑																							0
10号土坑		1	1					1			2		2										7
12号土坑		2				1																	3
13号土坑													1										1
28号土坑			2				1						2										5
31号土坑					1		2								1								4
1号木樋																							0
2号木樋																							0
1号溝	3	20	34	筒7 平杉5 広東1	4	9	4	24		7	36	4	86		22		4		6	蓋5身1	小坏3 合子5 土瓶1 酒杯2 灰吹1 水滴1 香炉1	5	301
12号溝																							0
13号溝		1						2			3				1		1				香炉1		9
15号溝		5	2	筒1				1			6		3										18
16号溝	1		2					1			1		2							身1			8
1号石敷			1																				1
1号暗渠			2								2								1				5
瓦溜																							0
Ⅳc期ピット																							0
Ⅳc期小計	4	41	48	15	7	11	9	36		10	62	5	101		26		7		7		17	9	415
合　計	25	692	463	155	79	152	182	269	13	84	569	79	1367	176	348	60	113	9	54	122	239	232	5496

表10　二の丸第17地点出土陶器集計表（1）
Tab. 10　Distribution of glazed ceramics at NM17 (1)

区・層・遺構	大碗	中碗					小碗	碗不明	大皿	小中皿	極小皿	小中鉢	擂鉢	鉢類	識別碗鉢不皿明	壺甕類			土瓶		火入	灰吹	袋物不明	土鍋	行平	灯火具	その他	不明	合計
		丸形	端反	腰折	その他	不明										壺瓶	甕	不明	身	蓋									
2層	3	77	7	11	7	93	46	133	1	27		22	56	大鉢17 槙木6 片口2	82	14	大1 中6	22	359	38	15	7	43	75	身1 蓋37	油徳利1 受皿1 短檠1 灯明皿2	水注3水滴1蓋物2 鬢水入4豆甕3 湯通1ミニチュア1 仏飯器4	13	1245
3層		73		6	4	34	39	33	1	2	3	1	8	片口2 大鉢1 その他1	15	1	小1	1	4		4	4	1	5			仏飯器2小坏2 餌猪口1合子蓋1 花生2向付1	10	263
4層		3				5		4		1		1		大鉢1	2							1						2	20
整地A		3			2	1	2	2		2			4	片口1	1		中1	1				1			蓋2	秉燭1	小坏1	1	26
不明		7			1	8	4	11		1		2	3	槙木7	9			2	9		1	1	2			秉燭2	豆甕1	1	72
1層・攪乱	2	141	1	9	24	113	80	157	4	55	2	37	96	大鉢22 槙木6 片口6	148	16		34	435	69	17	18	61	91	身25 蓋39	秉燭22 その他1	鬢水入1水注3 豆甕3ミニチュア2 水指2合子1水滴1 湯通1三宝1小坏3 仏飯器10	184	1943
1号井戸																											水指1		1
I期ピット																													0
I期小計																											1		1
11号建物																													0
12号建物																													0
6号塀																													0
7号灰																													0
25号柱列																													0
24号土坑																													0
42号溝									1																				1
46号溝																1													1
47号溝																													0
48号溝																													0
49号溝																													0
50号溝																													0
2号石敷																													0
便槽遺構														大鉢1															1
II期ピット																													0
II期小計									1					1		1													3
34号溝																													0
35号溝													3					1				1		1				1	7
36号溝																		1											1
37号溝		1								2		1			1			1						1					7
38号溝		1																											1
39号溝										1			1		1	1						1						1	6
40号溝										1		1	3	槙木1															6
41号溝																													0
45号溝																													0
51号溝																													0
54号溝																													0
55号溝																													0
56号溝																													0
57号溝																													0
58号溝																													0
59号溝																													0
60号溝																													0
61号溝																													0
62号溝																													0
63号溝																													0
64号溝																													0
66号溝																													0
67号溝																													0
IIIa期ピット																													0
IIIa期小計		2								4		2	7	1	2	1		3				2		2				2	28
21号柱列		1							1																				2
22号柱列																													0
23号柱列		1						1																					2
24号柱列						2							1																3
2号土坑							1																1						2
33号土坑																													0
52号溝																													0
65号溝																													0
69号溝						1							1								1								3
70号溝													1																1
3号石敷						7									1	1			4				5	1				7	26
3号井戸		1				2									4				15			1						1	24
IIIb1期ピット								1																				1	2
IIIb1期小計		3				12	1	2	1				3		5	1			19		1	1	6	1				9	65

表11　二の丸第17地点出土陶器集計表（2）
Tab. 11　Distribution of glazed ceramics at NM17 (2)

区・層・遺構	大碗	中碗 丸形	中碗 端反	中碗 腰折	中碗 その他	中碗 不明	小碗	碗不明	大皿	小中皿	極小皿	小中鉢	擂鉢	鉢類	碗皿鉢不明	壺甕類 壺瓶	壺甕類 甕	壺甕類 不明	土瓶 身	土瓶 蓋	火入	灰吹	袋物不明	土鍋	行平	灯火具	その他	不明	合計
9号建物													1																1
10号建物																													0
20号柱列																													0
7号土坑	2	19		2	3	15	11	19						片口2 大鉢1	5			1		1	1	1					合子1仏飯器1	3	88
26号土坑																													0
27号土坑																													0
3号木樋													1													秉燭1			2
4号木樋												1	2	大鉢2	2														7
9・32号溝		7		1		4	1	2		2		3	7	大鉢3	1			1		2	1	2				灯明皿1	仏飯器1餌水入1	6	46
2号井戸		19		4	2	6	5	10		4			2	大鉢1	6		中1		3	3	2	1	2	2			豆薬1	5	78
瓦敷遺構																													0
Ⅲb2期ピット																													0
Ⅲb2期小計	2	45		7	5	25	17	31		6		4	13	9	14		1	2	3	6	4	4	2	2		2	5	13	222
4号建物		1			1																							1	3
5号建物		1				1	1	1				2	2	大鉢1	1														10
16号柱列		2										1			1														4
17号柱列																													0
18号柱列						2		3																					5
19号柱列							1	2							1									1					5
15号土坑						1							1	片口1															3
19号土坑		8				3		3	1				1	大鉢1	1				1									1	20
22号土坑																													0
23号土坑																													0
29号土坑		1				1																					餌水入2		4
30号土坑																												1	1
43号溝																													0
44号溝																													0
Ⅲb3期ピット		2				2	1	1				1	1									1							9
Ⅲb3期小計		15			1	10	3	10	1			4	5	3	4				1			1		1			2	3	64
4号土坑									2						1														3
14号土坑		34		2	2	16	12	12		4		2	1	大鉢1	7	3	中1					3	2	2			水注1	2	107
20号土坑																													0
2号溝		24	1	10	1	11	5	17		4		1	4	片口2	1	2	中8 小1		2	5		1	5				仏飯器1水注1	4	111
3号溝		1																											1
6号溝	1	1					3			1						1	中1					1	2						11
27号溝		9			2		4								2			1				3						1	22
Ⅲb4期ピット														大鉢1															1
Ⅲb4期小計	1	69	1	12	5	27	24	29	2	9		3	5	4	11	6	11	1	2	5		8	9	2			3	7	256
16号土坑																													0
21号土坑																													0
Ⅲb不明のピット		2						2	1						1													1	7
Ⅲb不明小計		2						2	1						1													1	7
1号建物						2						1			1			1					2						7
2号建物									1	1				大鉢1															3
3号建物							1															1							2
8号建物															1	1			3										5
14号溝																													0
17号溝				1											3														4
19号溝																			1										1
20号溝																													0
21号溝																													0
22号溝																													0
23号溝																													0
24号溝													2		1				1	1	1	2						1	9
29号溝																													0
30号溝																													0
31号溝				2					1					大鉢1															4
瓦溜遺構																													0
Ⅳa期ピット																		1				1							2
Ⅳa期小計				3		2	1		2	1		1	2	2	6	1		2	5	1	1	4	2					1	37

表12　二の丸第17地点出土陶器集計表（3）
Tab. 12　Distribution of glazed ceramics at NM17 (3)

区・期・遺構	大碗	中碗					小碗	碗不明	大皿	小中皿	極小皿	小中鉢	擂鉢	鉢類	器種別不明碗鉢皿	壺甕類			土瓶		火入	灰吹	袋物不明	土鍋	行平	灯火具	その他	不明	合計
		丸形	端反	腰折	その他	不明										壺瓶	甕	不明	身	蓋									
7号建物		1			1							1			1	1						1							6
1号堀		2		1		1	1						3	大鉢1	1														10
2号堀		3			1	1				1				植木1	1												鍋1	1	10
3号堀										1					1	1			1		1		1				仏飯器1	1	8
4号堀		3				1	1	2						大鉢1				1	2		1			1			筒型碗1		14
5号堀																													0
6号柱列																													0
7号柱列							1	1		2		1	2	2	2	2		2	4	1		1	3					3	27
8号柱列		1				1		1				1	1						3					3				1	12
9号柱列								1						植木1					4										6
10号柱列															1	1			1	1								1	5
11号柱列															1				1										2
12号柱列																													0
13号柱列		1								1																			2
14号柱列		2																											2
15号柱列																						1						2	3
1号土坑															1												鎖？1		2
6号土坑		6		1	1	3	1	8	1						3				4				2	1			餌猪口1	3	35
8号土坑						2		2					4	大鉢1															9
11号土坑						1																						2	3
18号土坑		1							1					大鉢1															3
32号土坑		1													1													2	4
Ⅳb期ピット		9		1		3	1	3					3	4	2	1		1	5	2	1		2	3			1	3	45
Ⅳb期小計		30		3	3	13	5	18	2	5		3	13	12	15	6		4	25	4	3	3	8	8			6	19	208
6号建物																		1											1
1号柱列																													0
2号柱列																													0
3号柱列																													0
4号柱列		1						1													1								3
5号柱列																													0
1号杭列																													0
2号杭列		1		1		1			1	1		1		大鉢1				1										1	9
3号杭列																			1				2						3
5号土坑		8			5	6	2	9		4		2		8			中1 小2	3	19	3	2	1		2	身1	乗燭2	鍋取手1	13	94
9号土坑																													0
10号土坑						1		1					3		1	1		1	1	1			1				豆甕1		12
12号土坑																			1										1
13号土坑															2														2
28号土坑		1	1	2	1	2				1									1			1		1	身2			2	15
31号土坑		1													1													1	3
1号木樋																		1											1
2号木樋																													0
1号溝		10	1	1	1	12	7	12	2	8		4	8	大鉢1	10	1	中2	5	121	12	3		14	18	蓋7 身3	乗燭1	ミニチュア不明1	29	294
12号溝																													0
13号溝							1								1				2						蓋2			1	7
15号溝		1								1			3		1				3										9
16号溝		1			1		1			1							中1												5
1号石敷								1					2													乗燭2	髪水入1		6
1号暗渠		1						1							1				2	1				1				1	8
瓦溜		2				2		1					2						4		1						花生1	1	14
Ⅳc期ピット						1	1			1								1						2	1		1	3	11
Ⅳc期小計		27	2	4	8	25	12	26	3	17		7	18	10	17	2	6	13	155	17	7	2	17	24	16	5	6	52	498
合計	8	497	11	55	54	368	234	458	19	130	5	87	233	112	331	49	27	85	1017	140	53	57	151	211	120	38	79	319	4958

表13　二の丸第17地点出土土器・土製品集計表（1）
Tab. 13　Distribution of unglazed ceramics and clay objects at NM17 (1)

区・層・遺構	土師質土器					瓦質土器					軟質施釉		炻器	土製品	合計
	皿	耳皿	塩壺	その他	不明	鉢類	その他	蚊遣	炭櫃	不明	焙烙	その他			
2層	1862	4	20	火鉢1 塩壺蓋3	174	火鉢14	蓋？3 さな3 十能4 五徳1	身8 蓋1	12	95	110			不明2 猿？1	2318
3層	551	3	9	鉢1 塩壺蓋2	74	鉢1擂鉢1 火鉢3	蓋？1		2	12	5			猪1	666
4層	86	2			11	火鉢2									101
整地A	129				5										134
不明	81					火鉢1 鉢1	蓋？1			13	7				104
1層・撹乱	1783	5	11	火鉢1 鉢1 塩壺蓋1	133	鉢3 火鉢9	蓋？3 さな4 十能4 五徳2	身11 蓋1	10	69	117	土鍋2 鉢1	不明1	碁石1 不明1	2174
1号井戸															0
I期ピット															0
I期小計															0
11号建物															0
12号建物															0
6号塀															0
7号塀	2	1													3
25号柱列	1														1
24号土坑															0
42号溝	3				4	火鉢1									8
46号溝	31						火入1								32
47号溝															0
48号溝															0
49号溝															0
50号溝															0
2号石敷	3														3
便槽遺構	4														4
II期ピット															0
II期小計	44	1			4	1	1								51
34号溝															0
35号溝	10														10
36号溝	1														1
37号溝	8														8
38号溝	2														2
39号溝	10														10
40号溝	21					擂鉢1									22
41号溝															0
45号溝															0
51号溝															0
54号溝															0
55号溝															0
56号溝	2														2
57号溝	1														1
58号溝	1														1
59号溝															0
60号溝	10				1										11
61号溝															0
62号溝	2														2
63号溝															0
64号溝															0
66号溝				火鉢1	4										5
67号溝															0
IIIa期ピット															0
IIIa期小計	68			1	5	1									75
21号柱列	12				1										13
22号柱列															0
23号柱列	1														1
24号柱列	3				1					1					5
2号土坑	5													不明1	6
33号土坑	19														19
52号溝															0
65号溝															0
69号溝	7				1										8
70号溝	1														1
3号石敷															0
3号井戸	33				2						2				37
IIIb1期ピット	53				1										54
IIIb1期小計	134				6					1	2			1	144

表14　二の丸第17地点出土土器・土製品集計表（2）
Tab. 14　Distribution of unglazed ceramics and clay objects at NM17 (2)

区・層・遺構	土師質土器					瓦質土器					軟質施釉		炻器	土製品	合計
	皿	耳皿	塩壺	その他	不明	鉢類	その他	鉸遺	炭櫃	不明	焙烙	その他			
9号建物															0
10号建物															0
20号柱列	3														3
7号土坑	88				12		さな1			1				猿1	103
26号土坑															0
27号土坑	5														5
3号木樋	7														7
4号木樋	22							身1							23
9・32号溝	228				14	火鉢1				1					244
2号井戸	113				13	火鉢1		身1		6					134
瓦敷遺構															0
Ⅲb2期ピット	2				2					1					5
Ⅲb2期小計	468				41	2	1	2		9				1	524
4号建物	39				3										42
5号建物	96		3		7										106
16号柱列	9														9
17号柱列	7														7
18号柱列	12														12
19号柱列	44	2			3										49
15号土坑	7									1					8
19号土坑	56				8					2		ミニチュア1		鈴1	68
22号土坑	5														5
23号土坑															0
29号土坑	41		1			1									43
30号土坑	7														7
43号溝	4				1										5
44号溝	1				1										2
Ⅲb3期ピット	23										1				24
Ⅲb3期小計	351	2	4		23	1				3	1	1		1	387
4号土坑															0
14号土坑	405	1	3	火鉢1	5	火鉢2				4					421
20号土坑	1														1
2号溝	410	1	8		56	火鉢1				3	2				481
3号溝	10														10
6号溝	41									1					42
27号溝	28	2	1												31
Ⅲb4期ピット	2														2
Ⅲb4期小計	897	4	12		61	3				8	2				987
16号土坑	7														7
21号土坑	4														4
Ⅲb不明ピット	37		1		2					1	1				42
Ⅲb不明小計	48		1		2					1	1				53
1号建物	6					火鉢1				1					8
2号建物	1									1					2
3号建物	18				3					2					23
8号建物	1				1					1					3
14号溝															0
17号溝	17									1					18
19号溝	3														3
20号溝	12														12
21号溝	4														4
22号溝	7														7
23号溝	2														2
24号溝	65					火鉢1	さな1			2	1				70
29号溝															0
30号溝	51				4										55
31号溝	17														17
瓦囲遺構	1														1
Ⅳa期ピット	1														1
Ⅳa期小計	206				8	2	1			8	1				226

表15　二の丸第17地点出土土器・土製品集計表（3）
Tab. 15　Distribution of unglazed ceramics and clay objects at NM17 (3)

区・層・遺構	土師質土器					瓦質土器					軟質施釉		炻器	土製品	合計
	皿	耳皿	塩壺	その他	不明	鉢類	その他	蚊遣	炭櫃	不明	焙烙	その他			
7号建物	16				1										17
1号堀	11				1						1				13
2号堀	34				2	火鉢1			1						38
3号堀	10										2				12
4号堀	20				1										21
5号堀															0
6号柱列	1									1					2
7号柱列	20				1	火鉢2		蓋1		1	4				29
8号柱列	16				1			蓋1							18
9号柱列	2							身1			5				8
10号柱列	1										1				2
11号柱列	1										1				2
12号柱列															0
13号柱列	17										1				18
14号柱列	2					火鉢1									3
15号柱列	8														8
1号土坑															0
6号土坑	43					火鉢1				1	1				46
8号土坑	32				3					1					36
11号土坑	17					火鉢1						土鍋1			19
18号土坑	22														22
32号土坑	13			火鉢1	7					1					22
Ⅳb期ピット	106		1		8					5	2			人形1	123
Ⅳb期小計	392		1	1	25	6		3	1	10	18	1		1	459
6号建物	7				2										9
1号柱列															0
2号柱列	7														7
3号柱列	3							身1			1				5
4号柱列										1					1
5号柱列															0
1号杭列															0
2号杭列					1										1
3号杭列															0
5号土坑	56					火鉢1	十能1	身2	1	2	10				73
9号土坑						火鉢1									1
10号土坑	3														3
12号土坑	18				3										21
13号土坑	1														1
28号土坑	1														1
31号土坑	1								1	1	1				4
1号木樋	7									1					8
2号木樋															0
1号溝	175		3	鉢1	22		さな3	身2	22	17	25		瓶類1		271
12号溝															0
13号溝	2														2
15号溝	18							身1		1	6				26
16号溝	19									1	7				27
1号石敷	29				5					1	1				36
1号暗渠	4				1		土管8				1				14
瓦溜	2														2
Ⅳc期ピット	55				3		十能1			1	1				61
Ⅳc期小計	408		3	1	37	2	13	6	24	26	53		1		574
合計	7508	21	61	13	609	53	42	32	49	255	317	5	2	10	8977

表16　二の丸帆17地点出土瓦集計表（1）
Tab. 16　Distribution of roof tiles at NM17(1)

（　）内は重量kg

	平瓦1類	平瓦2類	平　瓦	丸　瓦	丸瓦類	桟　瓦	板瓦	板状瓦	軒平瓦
2層	371(91.808)	331(72.056)	7(10.129)	93(15.370)	539(56.088)	44(9.518)	73(17.938)		47(4.918)
3層	1557(352.732)	183(25.821)	19(15.589)	71(10.260)	326(35.181)		17(4.104)		18(1.669)
4層	384(54.322)	68(11.901)	4(5.350)	23(4.156)	113(18.817)		13(11.156)		6(1.144)
整地A	801(143.656)	29(7.060)	3(5.973)	51(12.220)	267(41.346)		3(0.247)		5(0.841)
不明	171(23.206)	17(1.625)		12(6.075)	23(4.013)		3(0.370)		
1層・撹乱	301(34.545)	67(6.502)	3(4.550)	7(2.326)	58(7.834)	1(1.143)	9(2.093)		35(4.870)
1号井戸	5(1.037)		1(2.660)		1(0.176)				
I期ピット									
I期小計	5(1.037)		1(2.660)		1(0.176)				
11号建物	2(0.240)	1(0.142)			1(0.069)				
12号建物									
6号溝	28(8.300)			2(0.430)	2(0.221)				
7号溝	5(0.527)	1(0.090)			1(0.170)				
25号柱列									
24号土坑	6(0.706)	4(0.388)		2(0.570)	1(0.910)				
42号溝	386(92.880)	80(8.735)		7(2.600)	35(5.200)				2(0.500)
46号溝	215(41.744)	104(13.335)		4(0.140)	51(11.200)		1(0.424)		6(0.957)
47号溝	1(0.131)				1(0.050)				
48号溝									
49号溝	3(0.572)	4(0.602)			3(0.468)				
50号溝					1(0.087)				
2号石敷	5(0.820)								
民間遺構	3(0.362)			1(0.055)					
II期ピット	2(1.520)			3(0.120)					
II期小計	663(147.808)	194(23.312)		19(3.915)	96(18.375)		1(0.424)		8(1.347)
34号溝									
35号溝	2(0.460)				1(0.050)				
36号溝		2(0.436)							
37号溝	1(0.054)				1(0.026)				
38号溝	1(0.096)	1(0.124)			2(0.074)				
39号溝	2(0.140)								
40号溝	4(0.442)	3(0.288)			1(0.035)				
41号溝									
45号溝	1(0.089)	1(0.054)							
51号溝				7(16.450)					
54号溝	2(0.750)	1(0.774)		4(8.070)					
55号溝									
56号溝	8(0.888)			1(0.131)			1(0.109)		
57号溝									
58号溝									
59号溝					1(0.183)				
60号溝	10(1.130)			1(0.115)	2(0.261)				
61号溝	8(0.721)	6(0.570)		9(1.925)	20(6.474)				
62号溝	3(1.003)			2(0.259)	3(0.280)				
63号溝									
64号溝									
66号溝	2(0.217)	1(0.051)		11(18.285)	5(0.559)				
67号溝									
IIa期ピット									
IIa期小計	46(5.936)	15(2.297)		35(48.255)	35(7.941)		1(0.109)		
21号柱列	87(12.040)	15(3.433)		8(1.316)	24(3.599)				1(0.100)
22号柱列	18(2.700)	1(0.050)			7(0.992)				
23号柱列	7(2.058)			1(0.055)	5(0.864)				
24号柱列	13(3.910)	3(0.525)	1(0.780)		2(1.040)				1(1.830)
2号土坑	13(1.171)			1(0.345)	2(0.121)				
33号土坑	42(9.001)	8(1.188)	1(2.165)	8(5.210)	10(2.759)				
52号溝	2(0.226)			1(0.242)					
65号溝	2(0.264)				3(1.074)				
69号溝	94(20.141)	9(2.454)	1(1.962)	9(8.843)	40(9.599)				
70号溝	16(2.220)	1(0.086)			4(0.485)				
3号石敷	15(1.951)	3(0.345)							
3号井戸	77(10.120)	13(1.232)		10(2.705)	29(3.200)				
IIIb1期ピット	19(2.215)	2(0.442)		1(0.374)	3(0.226)				
IIIb1期小計	405(68.350)	38(9.759)	3(4.907)	38(19.120)	129(26.369)				2(1.930)

表17　二の丸第17地点出土瓦集計表（2）
Tab. 17　Distribution of roof tiles at NM17(2)

（　）内は重量kg

	軒丸瓦	軒桟瓦	面戸瓦	鬼瓦い	T字瓦	熨斗瓦	棟　瓦	その他の瓦	不明瓦	合　計
2層	26(2.177)	10(2.314)	7(0.800)	8(1.033)	19(4.917)	1(0.490)	29(7.869)	171(2.333)	3761(86.593)	8932(786.319)
3層	15(2.317)		9(1.678)	1(0.016)	33(13.214)	1(0.183)	1(0.319)	3(0.319)	1311(35.418)	3567(880.143)
4層	7(1.417)	1(0.235)	4(0.876)	2(0.180)	17(7.291)		1(0.060)	1(0.045)	414(10.488)	1060(127.338)
整地A	14(4.038)		14(2.592)	7(9.226)	24(9.226)			1(0.036)	469(15.590)	1688(252.071)
小用	2(0.155)		2(0.400)	1(0.118)	3(1.315)			2(0.418)	83(1.999)	319(39.724)
1層・撹乱	70(14.638)	8(2.519)			11(4.221)	5(0.780)	8(10.034)	4(1.588)	283(3.212)	870(103.977)
1号井戸									1(0.050)	8(3.953)
I期ピット										0
I期小計									1(0.050)	8(3.953)
11号建物									3(0.038)	7(0.489)
12号建物									1(0.018)	1(0.018)
6号溝			1(0.047)						25(0.461)	39(9.465)
7号溝									1(0.044)	8(0.831)
25号柱列										0
24号土坑									14(0.442)	27(3.016)
42号溝									308(6.151)	818(116.176)
46号溝			1(0.191)	1(0.714)					111(2.112)	494(70.817)
47号溝									4(0.125)	6(0.306)
48号溝										0
49号溝									2(0.067)	12(1.709)
50号溝										1(0.087)
2号石敷									3(0.130)	8(0.950)
便槽遺構									8(0.051)	14(0.468)
II期ピット									2(0.035)	12(1.676)
II期小計			2(0.238)	1(0.714)					482(9.674)	1466(206.007)
34号溝										0
35号溝									1(0.055)	4(0.511)
36号溝	1(0.312)									3(0.748)
37号溝									2(0.076)	4(0.150)
38号溝										4(0.294)
39号溝									6(0.022)	8(0.162)
40号溝									5(0.030)	13(0.803)
41号溝										0
45号溝										2(0.143)
51号溝										7(16.450)
54号溝									1(0.005)	8(9.599)
55号溝										0
56号溝									6(0.120)	16(1.268)
57号溝										0
58号溝										0
59号溝										1(0.183)
60号溝										13(1.906)
61号溝									23(0.298)	66(12.988)
62号溝									4(0.070)	13(1.612)
63号溝										0
64号溝										0
66号溝										19(19.103)
67号溝										0
III a期ピット										0
III a期小計	1(0.312)								48(0.676)	181(65.526)
21号柱列	1(0.425)				6(3.460)			1(0.044)	19(0.514)	162(26.931)
22号柱列									5(0.062)	31(3.804)
23号柱列										13(2.977)
24号柱列									11(0.224)	31(8.343)
2号土坑				1(0.113)					6(0.125)	23(1.875)
33号土坑	3(0.805)								11(0.275)	83(21.433)
52号溝									1(0.051)	4(0.519)
65号溝									2(0.017)	7(1.355)
69号溝	4(1.865)		3(0.426)						42(2.244)	202(48.237)
70号溝									16(0.699)	37(2.660)
3号石敷									40(0.411)	59(2.707)
3号井戸	3(0.483)				4(0.734)		4(2.259)		44(0.735)	186(21.439)
III b1期ピット					4(2.450)				8(0.253)	37(5.960)
III b1期小計	11(3.578)		3(0.426)	1(0.113)	14(6.644)		4(2.259)	1(0.044)	205(4.970)	875(148.460)

表18　二の丸第17地点出土瓦集計表（3）
Tab. 18　Distribution of roof tiles at NM17(3)

（　）内は重量kg

	平瓦1類	平瓦2類	平瓦	丸瓦	丸瓦類	桟瓦	板状瓦	棒状瓦	軒平瓦
9号建物	2(0.504)								
10号建物	3(0.517)	3(0.994)		2(1.860)	4(1.120)		1(0.527)		
20号柱列	107(21.210)	10(2.359)		12(6.689)	35(9.635)		1(1.760)		
2号土坑	108(15.356)	14(1.053)		14(3.827)	40(5.976)		2(0.433)		1(0.075)
26号土坑	12(4.730)	2(0.238)		3(0.758)	7(1.250)				
27号土坑	21(4.340)	9(0.958)		2(0.247)	12(1.329)				2(0.210)
3号水槽	9(1.526)			4(0.873)	11(0.858)				1(0.076)
4号水槽	149(28.454)	17(1.439)		11(5.435)	58(11.688)		1(0.030)	1(4.400)	3(0.745)
9・32号溝	285(54.381)	66(11.978)	4(1.568)	17(3.707)	65(6.900)		1(0.192)	2(8.010)	4(0.735)
2号井戸	477(101.114)	336(52.568)	12(15.096)	26(7.527)	67(12.610)	1(0.507)	17(9.138)	1(1.420)	10(3.621)
瓦敷遺構	3(0.580)	2(0.327)			1(0.075)		7(8.760)		
Ⅲb2期ピット	207(34.256)	21(1.934)		19(2.993)	38(9.350)				3(0.271)
Ⅲb2期小計	1383(266.998)	480(74.268)	16(16.664)	110(33.918)	378(60.796)	1(0.507)	30(20.810)	4(13.830)	24(4.733)
4号建物	109(16.970)	15(1.401)		13(1.911)	34(3.791)				3(0.889)
5号建物	66(12.957)	12(2.441)		1(0.879)	11(4.399)		2(0.587)		2(0.502)
16号柱列	13(3.617)	6(1.772)		5(1.569)	9(1.861)				
17号柱列	65(11.297)	6(1.430)		7(2.026)	18(2.898)				
18号柱列	143(26.367)	24(4.767)		12(2.085)	63(8.541)		1(0.597)		
19号柱列	23(2.353)	3(0.306)		2(0.974)	13(1.431)				
15号土坑	1(0.251)				4(0.237)				
19号土坑	14(2.968)	5(1.889)		1(0.974)	6(1.374)				2(0.725)
22号土坑	3(0.213)	2(0.121)							
23号土坑					3(0.274)				
29号土坑	164(34.070)	6(0.786)		13(2.374)	54(12.570)		1(0.845)		4(1.414)
30号土坑	42(7.209)	6(0.910)		4(1.319)	17(3.120)				2(0.127)
43号溝	40(3.315)	7(0.588)		2(0.374)	6(1.470)				
44号溝	3(0.273)				1(0.020)				
Ⅲb3期ピット	146(28.364)	18(4.064)		9(1.679)	48(7.961)		1(0.186)		4(0.511)
Ⅲb3期小計	834(150.415)	107(20.470)		69(14.361)	289(50.047)		5(2.215)		17(4.176)
4号土坑									
14号土坑	41(11.329)	36(5.436)	1(1.263)	6(1.198)	14(1.657)			1(3.310)	1(0.118)
20号土坑	1(0.181)	3(0.680)			2(0.196)				
2号溝	167(26.890)	34(4.519)		8(1.356)	23(4.968)		4(4.230)		1(0.495)
3号溝	13(2.154)	4(0.272)			7(0.950)				
6号溝	17(2.524)	7(0.594)			3(0.236)		1(0.035)		
27号溝	16(2.341)	9(0.649)		2(0.126)	7(1.011)		2(0.235)		
Ⅲb4期ピット		1(0.095)			1(0.024)				
Ⅲb4期小計	257(45.419)	94(12.241)	1(1.263)	16(2.680)	59(9.042)		7(4.490)	1(3.310)	2(0.613)
16号土坑									
21号土坑	2(0.893)								
Ⅲb不明期ピット	206(30.254)	33(2.997)		15(2.766)	63(8.796)				2(0.524)
Ⅲb不明期小計	208(31.152)	33(2.997)		15(2.766)	63(8.796)				2(0.524)
1号建物	247(35.760)	36(4.813)		23(4.566)	104(13.907)		3(0.721)		3(0.551)
2号建物	16(1.825)	6(0.485)		5(0.525)	6(0.226)				
3号建物	96(13.698)	23(1.695)		11(2.210)	19(2.206)				
8号建物									
14号溝	2(0.200)	8(13.002)			14(2.337)				
17号溝	142(24.464)	67(6.207)		3(1.805)	40(5.734)		1(0.401)		1(0.036)
19号溝	11(1.109)	3(0.625)		1(1.245)	5(0.728)				
20号溝	11(2.001)								
21号溝	5(0.206)								
22号溝	30(2.189)	5(0.277)		1(0.165)	3(0.145)				
23号溝	52(7.607)	3(0.159)			3(0.407)		1(0.089)		1(0.045)
24号溝	104(19.754)	32(19.886)		1(0.030)	12(0.958)		7(4.504)		
29号溝				2(2.960)	3(0.670)				
30号溝	5(0.616)	4(0.324)							
31号溝	17(2.350)	2(0.169)		1(0.136)	8(0.688)				
瓦敷遺構	8(2.930)								
Ⅳa期ピット	3(0.388)	1(0.053)			1(0.094)				
Ⅳa期小計	751(115.457)	190(47.717)		47(13.611)	220(28.103)		12(5.713)		5(0.632)

表19　二の丸第17地点出土瓦集計表 (4)
Tab. 19　Distribution of roof tiles at NM17(4)

（　）内は重量kg

	軒丸瓦	軒桟瓦	面戸瓦	鴟尾	T字瓦	熨斗瓦	棟　瓦	その他の瓦	不明瓦	合　計
9 号建物									1(0.035)	3(0.539)
10号建物										13(5.018)
20号柱列	2(0.520)			2(0.235)	3(1.921)				29(0.494)	221(45.023)
7 号土坑	1(0.218)			1(0.079)	1(0.046)				132(3.368)	314(39.410)
26号土坑	1(0.035)								13(0.721)	40(7.780)
27号土坑			1(0.253)						13(0.661)	62(7.977)
3 号水槽	2(0.176)								15(0.337)	42(3.848)
4 号木樋	4(1.710)		2(0.432)	1(0.194)	5(4.280)				74(1.367)	326(69.174)
9・32号溝	2(0.262)		2(0.591)		10(4.052)			1(0.236)	35(4.656)	81(97.268)
2 号井戸	17(11.346)		9(2.099)		5(1.674)		1(0.111)	5(0.561)	399(7.728)	1383(226.120)
瓦敷遺構									14(1.231)	27(1.173)
Ⅲb2期ピット	4(0.650)			1(0.129)	1(0.449)				80(2.546)	394(52.604)
Ⅲb2期小計	33(14.915)		14(3.375)	5(0.637)	25(12.421)		1(0.111)	6(0.797)	1128(23.144)	3638(547.954)
4 号建物	3(0.740)			2(0.375)			1(0.078)	1(0.190)	41(0.994)	222(27.339)
5 号建物					8(6.385)				74(1.201)	176(29.351)
16号柱列	4(0.170)				3(2.109)				20(0.280)	62(1.578)
17号柱列	2(1.696)				3(0.869)				22(0.639)	123(39.855)
18号柱列	1(0.035)		2(0.331)		1(0.460)			4(0.437)	106(2.584)	357(46.204)
19号柱列	1(0.135)				2(1.196)				19(0.510)	63(6.005)
15号土坑									4(0.156)	9(0.654)
19号土坑					1(1.125)				40(0.320)	69(8.168)
22号土坑									11(0.207)	16(9.541)
23号土坑									13(0.116)	18(0.190)
29号土坑	3(0.439)		3(0.475)	1(0.277)					16(0.342)	263(53.593)
30号土坑	1(0.034)		1(0.205)		1(0.181)				11(0.470)	83(13.756)
43号溝			2(0.432)						15(0.531)	72(5.711)
44号溝									3(0.025)	7(0.318)
Ⅲb3期ピット	3(0.343)		2(0.180)	1(0.272)	6(4.148)		2(0.300)		52(0.993)	279(49.011)
Ⅲb3期小計	18(3.392)		10(1.624)	4(0.924)	23(16.473)		3(0.378)	5(0.627)	437(9.372)	1823(271.663)
4 号土坑										0
14号土坑	6(1.623)				3(1.372)				61(1.558)	170(28.864)
20号土坑									9(0.167)	15(1.224)
2 号溝	1(0.441)				4(1.011)			1(0.089)	47(1.857)	292(45.849)
3 号溝									6(0.065)	32(3.441)
6 号溝					2(0.326)				18(0.140)	45(3.853)
27号溝			1(0.125)						34(0.549)	71(5.035)
Ⅲb4期ピット										2(0.119)
Ⅲb4期小計	7(2.067)		1(0.125)		9(2.709)			1(0.089)	172(4.336)	627(88.387)
16号土坑									17(0.048)	17(0.048)
21号土坑									1(0.004)	3(0.902)
Ⅲb不明層ピット	1(0.040)		1(0.136)						13(2.140)	456(47.553)
Ⅲb不明層小計	1(0.040)		1(0.136)						153(2.192)	476(48.603)
1 号建物	8(1.969)		5(0.887)	3(0.825)	1(0.660)				125(3.374)	537(67.492)
2 号建物					1(0.483)				13(0.204)	47(3.750)
3 号建物					5(1.918)				56(0.824)	210(22.554)
8 号建物									1(0.002)	1(0.002)
14号溝									9(0.042)	33(15.581)
17号溝	1(0.041)								78(1.687)	330(40.375)
19号溝									9(0.176)	29(3.883)
20号溝									3(0.131)	14(2.132)
21号溝									2(0.009)	7(0.215)
22号溝									29(0.425)	68(3.141)
23号溝									39(0.680)	99(8.987)
24号溝					1(0.560)		1(0.066)	2(1.996)	80(1.212)	240(48.966)
29号溝									5(0.060)	12(3.690)
30号溝									14(0.235)	23(1.175)
31号溝					2(0.437)				14(0.360)	44(4.340)
瓦敷遺構										8(2.890)
Ⅳa期ピット			1(0.349)							8(1.097)
Ⅳa期小計	9(2.010)		6(1.227)	3(0.825)	10(3.490)		1(0.066)	2(1.996)	474(9.421)	1730(230.270)

表20　二の丸第17地点出土瓦集計表（5）
Tab. 20　Distribution of roof tiles at NM17(5)

（　）内は重量kg

	平瓦1類	平瓦2類	平瓦	丸瓦	丸瓦類	桟瓦	板碧瓦	板状瓦	軒平瓦
7号建物	10(2.198)	3(0.849)			1(0.063)				
1号棚	64(12.330)	7(0.890)		2(0.342)	13(2.190)		1(0.123)		
2号棚	25(6.394)	19(6.449)		2(0.302)	7(1.082)		7(0.229)		2(0.531)
3号棚	256(35.612)	41(5.261)		8(1.696)	40(4.237)	1(0.486)	8(2.781)		2(0.953)
4号棚	48(7.971)	13(1.952)		1(0.180)	13(1.509)		1(0.454)		
5号棚	1(0.284)	1(0.094)							
6号柱列	2(0.756)	4(0.359)					2(0.161)		
7号柱列	23(2.788)	4(0.404)		2(0.220)	6(0.506)		2(0.276)		
8号柱列	23(3.224)	9(1.279)		1(0.075)	4(0.385)				
9号柱列	3(0.322)	1(0.070)		1(0.028)			1(0.305)		
10号柱列	14(3.549)	6(0.301)			6(1.352)		1(0.764)		
11号柱列	6(0.839)					1(0.813)			
12号柱列									
13号柱列	20(1.865)	7(0.570)		11(6.161)	23(5.442)		2(0.870)		
14号柱列	11(2.341)	4(0.582)			2(0.150)				
15号柱列	12(1.634)	29(3.265)			14(1.477)				1(0.111)
1号土坑	2(0.145)	1(0.169)			2(0.126)				
6号土坑	9(1.301)	2(0.346)		1(0.066)	1(0.372)				1(0.215)
8号土坑	17(4.422)	6(0.634)		3(0.641)	9(2.915)				
31号土坑	4(0.456)	3(0.117)		1(0.048)	1(0.015)				
18号土坑	6(1.340)	7(0.609)			3(0.363)				
32号土坑	7(0.493)				2(0.249)				
IVb期ピット	224(47.348)	44(8.934)	4(4.470)	16(3.890)	66(11.738)		8(8.578)		1(0.881)
IVb期小計	787(138.003)	211(32.822)	4(4.470)	49(13.649)	210(34.318)	2(1.299)	33(20.538)		7(2.671)
6号建物	3(0.486)	1(0.231)							
1号柱列	3(0.576)	1(0.195)							
2号柱列	9(1.268)	4(0.543)		4(0.526)	4(0.206)				
3号柱列					1(0.010)				
4号柱列	1(0.222)				1(0.042)				
5号柱列	3(0.221)			1(0.823)					
1号杭列									
2号杭列		1(0.266)							
3号杭列				1(0.145)					
5号土坑	71(15.267)	15(2.627)		3(0.761)	44(24.040)	1(0.371)	7(1.288)		2(0.179)
9号土坑				1(0.088)					
10号土坑	10(1.822)	4(2.570)					1(0.374)		
12号土坑	99(18.915)	66(8.778)		9(1.459)	31(4.254)	1(0.152)	1(0.115)		5(0.392)
13号土坑	3(0.226)	2(0.266)		1(0.051)	1(0.084)				
26号土坑	10(1.290)	10(1.416)			4(1.077)				
31号土坑	26(3.780)	10(2.239)		2(0.104)	5(0.941)				
1号木樋	4(0.504)				4(0.609)		1(0.156)		
2号木樋	12(1.753)				3(0.582)		1(0.089)		
1号溝	720(125.737)	179(20.741)		26(4.220)	99(14.303)	10(3.653)	14(3.407)		8(0.946)
12号溝	2(0.160)			1(0.005)					1(0.026)
13号溝	55(14.679)	21(3.870)			13(1.535)	2(1.200)	1(0.200)		1(0.263)
15号溝	115(16.931)	22(2.637)		3(0.182)	26(2.972)		2(0.854)		
16号溝	4(0.491)	3(0.144)			2(0.266)		1(0.163)		
1号石敷	11(0.885)				2(0.095)				
1号暗渠									
瓦溜	383(74.857)	404(70.877)		11(2.130)	83(16.054)	8(5.600)	4(0.662)	1(1.230)	9(4.872)
IVc期ピット	118(20.555)	5(0.668)		6(1.090)	38(8.465)		3(0.585)		1(0.089)
IVc期小計	1664(300.625)	748(118.068)		69(12.584)	262(75.538)	22(10.976)	36(8.191)	1(1.230)	27(6.767)
合　計	13935(2751.649)	3022(446.929)	61(72.585)	727(215.409)	3170(483.080)	70(23.145)	243(98.450)	6(18.390)	205(37.025)

表21　二の丸第17地点出土瓦集計表（6）
Tab. 21　Distribution of roof tiles at NM17(6)

（　）内は重量kg

	軒丸瓦	軒桟瓦	面戸瓦	輪違い	T字瓦	熨斗瓦	棟　瓦	その他の瓦	不明瓦	合　計
7 分建物								1(0.022)	1(0.003)	16(3.135)
1 号塀		1(0.318)							63(1.297)	151(17.147)
2 号塀	2(0.247)								21(0.488)	85(21.932)
3 号塀	1(1.650)		2(0.405)	1(0.182)					109(2.066)	469(54.709)
4 号塀			1(0.675)		2(0.750)			1(0.056)	23(0.475)	103(14.018)
5 号塀									3(0.035)	3(0.413)
6 号柱列										8(1.276)
7 号柱列									44(0.726)	81(4.920)
8 号柱列									20(0.423)	57(5.388)
9 号柱列									10(0.246)	16(1.171)
10号柱列									13(0.323)	40(5.282)
11号柱列	1(0.645)								9(0.565)	17(2.862)
12号柱列										0
13号柱列			1(0.251)						26(0.456)	87(15.613)
14号柱列					1(0.378)				7(0.281)	25(3.732)
15号柱列					1(0.336)				46(0.954)	103(7.777)
1 号土坑									17(0.249)	22(0.689)
6 号土坑	1(0.451)								11(0.259)	26(3.210)
8 号土坑					2(0.606)				18(0.287)	55(10.088)
11号土坑								1(0.030)	29(0.451)	39(1.114)
18号土坑								1(0.014)	9(0.144)	26(2.461)
32号土坑									5(0.121)	14(0.854)
IVb期ピット	5(2.482)		2(0.332)		1(0.465)			1(0.387)	143(3.866)	515(93.361)
IVb期小計	10(4.875)	1(0.318)	6(1.663)	1(0.182)	7(2.535)			3(0.559)	627(13.719)	1969(272.154)
6 分建物									6(0.330)	12(1.047)
1 号柱列										4(0.771)
2 号柱列									9(0.211)	30(2.754)
3 号柱列									1(0.025)	2(0.035)
4 号柱列										2(0.264)
5 号柱列									3(0.050)	7(1.094)
1 号杭列										0
2 号杭列									1(0.021)	2(0.287)
3 号杭列									2(0.094)	3(0.239)
5 号土坑							4(1.742)		72(2.261)	219(48.636)
9 号土坑										1(0.088)
10号土坑									19(0.455)	34(3.421)
12号土坑			1(0.186)		1(0.052)			1(0.064)	69(1.843)	284(35.208)
13号土坑									9(0.184)	16(0.811)
28号土坑								1(0.082)	5(0.252)	30(4.117)
31号土坑			1(0.233)		1(0.030)		1(0.074)		14(0.510)	61(7.914)
1 号木樋									7(0.137)	16(1.406)
2 号木樋									1(0.015)	17(2.439)
1 号溝	3(0.922)	1(0.540)		1(0.125)	5(1.031)		31(22.604)	5(0.242)	567(13.284)	1668(211.725)
12号溝										4(0.191)
13号溝									37(1.096)	130(22.843)
15号溝	2(0.112)		1(0.318)						82(1.623)	253(25.629)
16号溝									25(0.185)	35(1.249)
1 号石敷									5(0.060)	18(1.040)
1 号鋪装										0
瓦溜	30(13.016)	5(5.358)	6(1.313)		5(2.024)		1(1.430)	4(0.528)	213(3.988)	1167(204.959)
IVc期ピット			1(0.128)						51(0.776)	223(32.356)
IVc期小計	35(14.050)	6(5.898)	10(2.178)	1(0.125)	12(3.137)		37(25.850)	11(0.886)	1198(27.403)	4239(613.523)
合　計	259(70.221)	26(11.284)	89(17.335)	35(14.117)	209(87.363)	7(1.455)	85(46.933)	61(9.687)	11246(260.835)	33450(4688.192)

表22　二の丸第17地点出土漆塗製品・木製品集計表（1）
Tab. 22　Distribution of wooden implements at NM17(1)

区・遺構・層位	木製品 箸	木製品 栓	木製品 桶・樽 大底	木製品 桶・樽 側	木製品 曲物	木製品 円板	木製品 その他	木製品 不明	漆塗製品 漆椀	漆塗製品 その他	漆塗製品 不明	加工木 板材	加工木 角材	加工木 丸材	加工木 小材	柱 丸	柱 その他	杭 丸	杭 その他	建築部材	木羽（g）	竹製品	合計
2層	2	1	1	1		1	容器1 すりこぎ1		1		6	21	3		82						36.3	19	140
3層											9	1	1		58			2	1				72
4層				8		1									23			1					33
整地層A											1				23								24
2層落ち込み		1	1		1						1	1	4		15						2.0		24
3層落ち込み												2			5								7
不明	5	1							1	皿1		15		1	74				1		50.7	9	108
1層・撹乱	4	1					下駄1		3		1	20	8		75			1			5.0	2	116
1号井戸					1				1		1	1			17						10.0	11	32
Ⅰ期ピット																							0
Ⅰ期小計					1				1		1	1			17						10.0	11	32
11号建物																							0
12号建物															3							11	14
6号堀	1												2		30			1			5.0	13	47
7号堀												4			7							1	12
25号柱列																							0
24号土坑																							0
42号溝																							0
46号溝	89						折敷1 楔1				1	26			137						142.7	筒状1 不明110	366
47号溝	3																					3	6
48号溝																							0
49号溝												1											1
50号溝																							0
2号石敷																						7	7
便槽遺構							金隠し板2				22	8	1		29					1		21	84
Ⅱ期ピット												6	1	1	10					1	0.6		19
Ⅱ期小計	93						4				23	45	4	1	216			1		2	148.3	167	556
34号溝																							0
35号溝																							0
36号溝																							0
37号溝																							0
38号溝															1								1
39号溝																							0
40号溝																							0
41号溝																							0
45号溝																		1	1				2
51号溝																							0
54号溝																							0
55号溝																							0
56号溝												1	1									1	3
57号溝																							0
58号溝																							0
59号溝																							0
60号溝												1											1
61号溝												1											1
62号溝																							0
63号溝																							0
64号溝																							0
66号溝																							0
67号溝																							0
Ⅲa期ピット																							0
Ⅲa期小計												3	1		1			1	1			1	8
21号柱列							楔1		2			1	8	1	167				2		13.0		182
22号柱列															1								1
23号柱列															17	2							19
24号柱列								1				2		2	25								30
2号土坑												5			12								17
33号土坑	50		1		2	4	楔1		1		3	33	2	1	40				2		441.5	51	191
52号溝												3			2								5
65号溝																							0
69号溝	3								1			41	3		143						47.7	21	212
70号溝	3												1		9						0.8		13
3号井戸												3			73								76
3号石敷							櫛1								5								6
Ⅲb1期ピット	12	1					1					7	2		41						4.4	2	66
Ⅲb1期小計	68	1	1		2	4	4	1	4		3	95	16	4	535	2			4		507.4	74	818

表23　二の丸第17地点出土漆塗製品・木製品集計表（2）
Tab. 23　Distribution of wooden implements at NM17(2)

区・遺構・層位	木製品								漆塗製品			加工木				柱		杭		建築部材	木羽（g）	竹製品	合計
	箸	栓	桶・樽 大底	桶・樽 側	曲物	円板	その他	不明	漆椀	その他	不明	板材	角材	丸材	小材	丸	その他	丸	その他				
9号建物																							0
10号建物																							0
20号柱列															11	1							12
7号土坑	1						墨書板1					3			26						13.1		31
26号土坑	1												1		7								9
27号土坑												1									0.8		1
3号木樋												7			141				7				155
4号木樋	1											3	4		97						0.9		105
9・32号溝	18	4	1	3		2	楔2 板状1 箱状1 刻みある板1 櫛1			櫛1		73	6	1	244						94.0	57	416
2号井戸	22		2	1		2	楔8	2		箸1		96	47		626			1	1		303.7	札状4 不明505	1318
瓦敷遺構																							0
Ⅲb2期ピット	1												1		3						1.3		5
Ⅲb2期小計	44	4	3	4		4	15	2		2		183	59	1	1155	1		1	8		413.8	566	2052
4号建物															2								2
5号建物	1														18							1	20
16号柱列	2					1						18	3	2	43	2					19.4	2	73
17号柱列	20		1									4	2		104							29	160
18号柱列	3			1			1	1	1			7	3	5	82	1			6		9.5	9	120
19号柱列									1					1	22	9							33
15号土坑	1											1	3		11						22.7		16
19号土坑	266		1	18	5	7	荷札（?）1 へら1折敷1 墨書板2 方形薄板2 櫛1扇1柄1 串状1楔1	1	3	箸2 杓子1 柄1	1	40	12		205						225.8	2	577
22号土坑															1								1
23号土坑																							0
29号土坑	252	2	3		墨書1	2	へら状製品1 墨書板2 柄1 下駄2 箱状（?）1 楔4					82	3		297						649.0		653
30号土坑	9			1		1	容器蓋（?）1				1	4	4		26			4			4.3		51
43号溝	2																	1			2.9	1	4
44号溝																							0
Ⅲb3期ピット	14								1			5	1	2	78						18.5	13	114
Ⅲb3期小計	570	2	5	20	6	11	25	2	6	4	2	161	31	10	889	12		5	6		952.1	57	1824
4号土坑																							0
14号土坑	48			3			下駄1		1	箸1	2	10			91						115	1	158
20号土坑	1											1											2
2号溝											3	5			24								32
3号溝																							0
6号溝									蓋1		1												2
27号溝	3												1		8							3	15
Ⅲb4期ピット																			1				1
Ⅲb4期小計	52			3			1		2	1	6	16	1		123				1		11.5	4	210
16号土坑																							0
21号土坑																							0
Ⅲb不明期ピット	10					1						4	2		122						3.3	26	165
Ⅲb不明期小計	10					1						4	2		122						3.3	26	165
1号建物													1										1
2号建物																			1				1
3号建物															1								1
8号建物																							0
14号溝																							0
17号溝															2				1				3
19号溝																							0
20号溝																							0
21号溝															1								1
22号溝																							0
23号溝																							0
24号溝																							0
29号溝																							0
30号溝															2								2
31号溝																							0
瓦囲遺構																							0
Ⅳa期ピット																							0
Ⅳa期小計													1		6				2				9

表24　二の丸第17地点出土漆塗製品・木製品集計表（3）
Tab. 24　Distribution of wooden implements at NM17(3)

区・遺構・層位	木製品								漆塗製品			加工木				柱		杭		建築部材	木羽（g）	竹製品	合計
	箸	栓	桶・樽 天底	桶・樽 側	曲物	円板	その他	不明	漆椀	その他	不明	板材	角材	丸材	小材	丸	その他	丸	その他				
7号建物	3					1	下駄2			2	1	10			36						11.2	13	68
1号塀							楔7					18	6	2	123	2					2.0	14	172
2号塀							楔2					1	2	1	14	3	角1						24
3号塀	4											6	1		38	6	多2					1	58
4号塀												1	17		25	2						7	52
5号塀												10											10
6号柱列																							0
7号柱列						1						1			35	1						3	41
8号柱列												1		1	6	6							14
9号柱列				1								1			9	2							13
10号柱列												1	1	1	30		角1					4	38
11号柱列																							0
12号柱列																2							2
13号柱列							楔1					5			9	4	多1		1		0.4	2	23
14号柱列	1										1	3			5	1	多2						13
15号柱列												1			15	1	多2	1			2.3		20
1号土坑					1							3			74	1							79
6号土坑	10			5		3			3	小型容器2		24			134				1		21.9	1	183
8号土坑	57						下駄1 栓(?)1					11	2		56						11.2		128
11号土坑	1									皿1		9			17						2.2		28
18号土坑	13	1					へら状製品1		1			1			50						22.7		67
32号土坑	51				1		へら1 墨書板1楔1					7	1	1	37						125.0	28	129
Ⅳb期ピット	87						5	1			1	33	10		194	17	多1		2		33.6	17	368
Ⅳb期小計	227	1		6	2	5	23	1	4	5	3	147	40	6	907	48	10	1	4		232.5	90	1530
6号建物													1		36		角1						38
1号柱列																							0
2号柱列												1	3		33	1		1	1				40
3号柱列															4								4
4号柱列									1			3	5		31								40
5号柱列															3								3
1号杭列																							0
2号杭列																							0
3号杭列																							0
5号土坑		1	4	2			下駄1					6	4	1	112								131
9号土坑																							0
10号土坑												1			2						2.7		3
12号土坑										1			2		9						2.9		12
13号土坑																							0
28号土坑													1		1						8.6		2
31号土坑												49	8	4	85					9	19.7		155
1号木樋											1	1			14								16
2号木樋															4						0.1	3	7
1号溝	3									箸1		16	3		84			1			207.3	33	141
12号溝																							0
13号溝																							0
15号溝															2								2
16号溝												1											1
1号石敷																							0
1号暗渠																							0
瓦溜																							0
Ⅳc期ピット												3		1	5								9
Ⅳc期小計	3	1	4	2			1		1	2	1	81	27	6	425	1	1	2	1	9	241.3	36	604
合　計	1078	13	15	44	12	27	76	6	23	15	57	796	198	29	4751	64	11	15	29	11	2614.2	1062	8332

表25　二の丸第17地点出土金属製品集計表
Tab. 25　Distribution of metal implements at NM17

区・遺構・層位	古銭 寛永通寳 古	文	新	不明	古銭 その他	煙管 雁首	吸口	不明	その他の銅系製品 簪	薬莢	不明	その他		鉄製品 釘 和	洋	その他		不明	合計
2層			7		渡来2	3	1			6	1	くさび1 針金1 釘1 壺状1 環状1 板状1 棒状2		115	142	蝶番金具3 帯状金具22 すがい6 吊り金具2 針金7 ネジ5 鉄鍋1 把手1 蹄鉄1 丸棒状1		36	270
2層落ち込み						1	1		1	3		コハゼ1 環状1 板状1 方形金具1		7	7	錠前1 針金1 帯状金具3 注ぎ口1		5	35
3層			7	2	渡来3		2		3	1		板状1		20	1	鉄鍋2 把手？1		6	49
4層												板状1		1					2
整地層A															1				1
不明		1												5		円盤状1 角棒状1		1	9
1層・攪乱	2		4																6
46号溝														1					1
便槽遺構	28	18	4	1	永楽1														52
Ⅱ期小計	28	18	4	1	1									1					53
35号溝						1						円形金具1							2
40号溝												筒状1							1
Ⅲa期小計						1							2						3
69号溝							1												1
Ⅲb1期小計							1												1
7号土坑			10	1	渡来4		1	1	1		1	環状1 釘1 板状金具1		1					23
9号溝				1		1	1					箸状1		2					6
32号溝						1								2					3
2号井戸												釘1 家具の金具1 針金1 把手1		3					7
Ⅲb2期小計			10	2	4	2	2	1	1		1		8	8					39
4号建物						1						雁首1							2
19号柱列						1												1	2
19号土坑						3	2					水注1		1					7
29号土坑												釘1							1
Ⅲb3期ピット														1					1
Ⅲb3期小計						5	2						3	2				1	13
Ⅲb不明期ピット														1					1
14号土坑					渡来2	1	1		5					1				2	12
2号溝		1	4		渡来1	2	2							2		鉄鍋3 かすがい2		13	30
3号溝														1					1
6号溝						3		1			1	飾金具1		3					9
27号溝						1			1										2
3号井戸										1		棒状1		1					3
Ⅲb4期小計		1	4		3	7	3	1	6	1	1		2	8			5	15	57
1号建物												帯状1							1
2号建物														2					2
3号建物														1					1
19号溝															1				1
24号溝											1					棒状2 板状1		1	5
Ⅳa期小計											1		1	3	1		3	1	10
2号堀												匙？1							1
7号柱列														1		鉄鍋1			2
13号柱列														2					2
15号柱列																環状1			1
6号土坑											1			1					2
8号土坑												板状1							1
11号土坑												飾り金具1		1		鉄鍋1			3
32号土坑							1							1				1	3
Ⅳb期ピット						1								3			1	3	8
Ⅳb期小計						1	1				1		3	9			4	4	23
5号土坑						1	3	1				棒状2		3					10
28号土坑						1													1
1号溝			1				2			4	1	帯状1		31	7	蝶番1 蹄鉄1 吊金具1		2	52
15号溝										1				1				3	5
16号溝																さな1 小刀？1 鉄鍋1			3
1号暗渠														1				1	2
Ⅳc期ピット													2	1	6			1	10
Ⅳc期小計			1			2	5	1		5	1		5	37	13		6	7	83
合計	30	20	37	5	13	22	18	3	11	16	6		38	217	165		78	76	755

表26　二の丸第17地点出土その他の遺物集計表
Tab. 26　Distribution of various implements at NM17

区・遺構・層位	ガラス製品				石器・石製品										
	瓶（ビール）	板（酒瓶）	その他		硯	紡錘	石器	不明粘板岩	その他		坩堝	成形品	ボタン	合計
2層	25 (3)	50 (31)	不明20容器1		2			13	石板1			紙1不明1	3	117
2層落ち込み	4	5												9
3層		1	棒1算1		1		フレーク1	6						11
4層							2次加工有フレーク1							1
整地層A					1									1
不明									火打石1					1
1層・撹乱										不明1				1
1号井戸							2次加工有フレーク1							1
1期小計								1						1
2号柱列							フレーク1							1
3号井戸	3	1												4
瓦b1期小計	3	1						1						5
7号土坑			不明1											1
2分井戸					1				4	温石1				6
瓦b2期小計				1	1				4	1				7
14号土坑	1									線石1				1
2号溝							フレーク1							1
瓦b4期小計								1		1				2
3分溝									硯1					1
6号土坑					1				火打石1					2
Ⅳb期小計					1					2				3
5号土坑	1		碁1											2
1号溝	7 (2)	5 (11)	容2不明12			1			石板2	瓦塔1	靴1		4	35
Ⅳc期ピット									1					1
Ⅳc期小計	8	5		13		1			1	2	1	1	4	38
合計	40	62		39	6	1		6	24	8	2	3	7	197

表27　二の丸第17地点出土磁器観察表（1）
Tab. 27　Notes on porcelains at NM17(1)

登録番号	出土場所	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	文様等	胎土	生産地	製作年代	備　考	図	図版
CJ001	46号溝　埋土3層	中型丸碗	—	—	—	網目文	普通	肥前	17c後半～18c前		71	59
CJ002	46号溝　埋土3層	瓶類	—	—	—	草花文	普通	肥前	17c後～18c前	高台内無釉	71	59
CJ003	47号溝　埋土3層	小瓶	—	—	—	無文　生掛け	密	肥前	17c中		71	59
CJ004	便槽遺構　埋土	鉢	11.8	7.0	3.1	口紅	密	肥前	17c後	型打	71	59
CJ005	便槽遺構　埋土	小中皿	14.2	6.9	5.4	菊花文	密	肥前	17c後		71	59
CJ006	35号溝　埋土	小中皿	—	—	—	色絵（青、緑）	やや粗	肥前	17c後		71	59
CJ007	36号溝　埋土	小中皿	—	—	—	型打	普通	肥前	17c後～18c前		71	59
CJ008	37号溝　埋土	小中皿	—	—	—	花唐草文	普通	肥前	18c初	くらわんか手	71	59
CJ009	38号溝　埋土	中型丸碗	—	—	—	草花文	普通	肥前	18c前半		71	59
CJ010	40号溝　埋土	中型丸碗	—	—	—	草花文	普通	肥前	18c前半		71	59
CJ011	40号溝　埋土	中型丸碗	—	—	—	草花文？	密	肥前	17c末～18c前	貫入顕著	71	59
CJ012	41号溝　埋土	小中皿	—	—	—	青花アラベスク文	普通	中国	16c		71	59
CJ013	60号溝　埋土2層	小瓶	—	—	—	ダミ唐草文	普通	肥前	17c後		71	59
CJ014	70号溝　埋土	中型丸碗	—	—	—	草花文	普通	肥前	17c後		71	59
CJ015	69号溝　埋土	大皿	—	—	—	草文？	やや粗	肥前	17c後		71	59
CJ016	整地A	小中皿	—	—	—	竹文	普通	肥前	18c前		71	59
CJ017	整地A	瓶類	—	—	—	網目文	普通	肥前	18c後～19c中		71	59
CJ018	5号建物　東西基礎根石列	猪口	—	—	—	草花文？	普通	肥前	17中～18c？		71	59
CJ019	5号建物　基礎根石列	中型丸碗	10.0	4.2	5.5	雪輪に草花文	普通	肥前	18c	くらわんか手　高台内銘あり	71	59
CJ020	5号建物　基礎根石列	中型丸碗	—	—	—	網目文と草花文	普通	肥前	17c末～18c初	高台内「大明年製」銘	71	59
CJ021	5号建物　石敷掘方	髪油壺	—	3.8	—	色絵（赤、緑）橘と菊花文　四方襷文	密	肥前	18c後	最大径6.8	71	59
CJ022	3号木樋	小中皿	—	—	—	口紅　生掛け	普通	肥前	17c中		72	59
CJ023	9号溝　埋土1層	小坏	5.6	—	—	海老文	普通	肥前	不明		71	59
CJ024	9号溝　埋土2層	中型丸碗	—	—	—	三蓋松文	密	肥前	18c後		72	59
CJ025	9号溝　南側石組掘方	中型丸碗	10.3	4.0	4.5	石垣積文？	普通	肥前	18c後～19c中	貫入あり	72	59
CJ026	9号溝　掘方埋土	紅皿	—	—	—	見込五弁花（コンニャク判）	密	肥前	不明		72	59
CJ027	9号溝　掘方埋土	極小皿	—	—	—	海浜風景文	密	肥前	18c		72	60
CJ028	9号溝　埋土1層	小中皿	—	—	3.0	沢潟文	密	肥前	不明	長軸17.6cm　短軸11.2cm	72	60
CJ029	32号溝　埋土	小型端反碗	7.4	—	—	楓文（コンニャク判）	普通	肥前	18ｃ前～中		72	60
CJ030	32号溝　下部埋土	中型丸碗	11.2	—		口紅　菊花文と稲束文（コンニャク判）	普通	肥前	17c後～18ｃ初	貫入あり	72	60
CJ031	32号溝　下部埋土	中型丸碗	10.4	—	—	山水文？	やや粗	肥前	18c中～後		72	60
CJ032	32号溝　下部埋土	中型丸碗		—	—	外面青磁釉　内面に菊花文	密	肥前	18c後		72	60
CJ033	32号溝　下部埋土	紅皿	—	—	—		普通	肥前	不明		72	60
CJ034	32号溝　下部埋土	合子（身）	—	—	—	型打卍繋文	普通	肥前	不明		72	60
CJ035	32号溝　下部埋土	合子（蓋）	—	—	—	型打卍繋文	普通	肥前	不明		72	60
CJ036	32号溝　下部埋土	不明	—	—	—		やや粗	肥前	不明		72	60
CJ037	32号溝　下部埋土	蓋物（身）	11.0	—	—	割菊花文	普通	肥前	18c		72	60
CJ038	27号土坑　埋土	小中皿	—	2.1	—	鳥と梅枝文　蛇ノ目凹形高台	密	中国	17c		72	60
CJ039	7号土坑　確認面	中型丸碗	—	—	—	松竹帆船文	普通	肥前	19c前		73	60
CJ040	7号土坑　埋土2層	中型丸碗	—	—	—	草花文？	密	肥前	不明	高台内「大明年製」銘	73	60
CJ041	14号土坑　検出面	紅猪口		—	—	草花文	普通	肥前	18c後～19c中		73	60
CJ042	14号土坑　埋土1層	小碗丸形	—	—	—	笹文	やや粗	肥前	18c	くらわんか手	73	60
CJ043	14号土坑　埋土2層	小碗丸形	—	—	—	松竹梅文	普通	肥前	18c前	貫入顕著	73	60
CJ044	14号土坑　埋土2層	中型丸碗	—	—	—	牡丹に草花文	普通	肥前	18c中		73	60
CJ045	14号土坑　埋土2層	中型丸碗	—	—	—	草花文	密	肥前	18c前半	貫入あり	73	60
CJ046	14号土坑　埋土2層	中型丸碗	—	—	—	唐草文　縁内四方襷文	普通	肥前	18c後		73	60
CJ047	14号土坑　埋土2層	紅皿	—	—	—	白磁型打	密	肥前	不明		73	60
CJ048	14号土坑　検出面	紅皿	2.5	1.0	2.4	白磁型打	普通	肥前	不明		73	60
CJ049	14号土坑　埋土1層	紅皿	—	—	—	白磁型打	密	肥前	不明		73	60
CJ050	14号土坑　検出面	小中皿	14.3	8.4	4.0	八宝文と竹松文　見込五弁花（コンニャク判）	普通	肥前	18c中～後	高台内角渦「福」銘	73	60
CJ051	15号土坑	中型丸碗	—	—	—	鶴と若松文	普通	肥前	17c末～18c前		73	60
CJ052	2号井戸　埋土2層	中型丸碗	—	—	—	蛸唐草文	密	肥前	18c中～19c初		73	60
CJ053	2号井戸　埋土2層	小中皿	13.6	7.8	4.2	割菊花文　見込五弁花（コンニャク判）	普通	肥前	18c	高台内渦「福」銘	73	61
CJ054	2号溝　南側抜取溝	紅猪口	6.1	2.2	2.5	氷裂文	粗	肥前	18c末～19c初	貫入あり	73	60
CJ055	2号溝　埋土3層	小碗丸形	—	—		雨降り文	普通	肥前	18c	貫入あり	73	60
CJ056	2号溝　埋土1層	中型丸碗	—		—	梅枝文	普通	肥前	18c	くらわんか手	73	60
CJ057	2号溝　埋土3層	中型丸碗	10.2	3.7	4.6	色絵（赤・青）亀甲に桐文？	密	肥前	18c後～19c初		73	60
CJ058	2号溝　埋土1層	猪口	7.4	5.4	5.9	松竹梅文	普通	肥前	17c末～18c後		73	61
CJ059	2層	仏飯器	5.9	3.7	5.6	色絵（赤）蓮花文　蛇ノ目凹形高台	密	肥前	19c中		73	61
CJ060	2層	仏飯器	6.0	4.0	5.6	色絵（赤）蓮花文　蛇ノ目凹形高台	密	肥前	19c中		73	61
CJ061	2号溝　埋土1層	紅皿	4.4	1.4	1.5	白磁型打	普通	肥前	不明		73	60
CJ062	2号溝　埋土1層	極小皿	9.7	4.8	2.8	雪持笹文	粗	肥前	18c		73	61
CJ063	2号溝　埋土3層	小中皿	10.8	7.1	2.2	蛸唐草文　見込松竹梅楼閣文	普通	肥前	18c末～19c初		74	61

表28　二の丸第17地点出土磁器観察表（2）
Tab. 28　Notes on porcelains at NM17(2)

登録番号	出土場所	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	文様等	胎土	生産地	製作年代	備考	図	図版
CJ064	2号溝　埋土1層	小中皿	13.7	7.5	4.3	松竹文	やや粗	肥前	17c末～18c後		74	61
CJ065	2号溝　南側抜取溝	小中皿	13.3	8.3	3.6	矢羽根文　口紅　見込五弁花(コンニャク判)	粗	肥前	18c		74	61
CJ066	2号溝　掘方	小中皿	13.6	8.0	3.8	窓絵小花文　見込五弁花（コンニャク判）	やや粗	肥前	18c後	高台内渦「福」銘	74	61
CJ067	2号溝　埋土3層	小中皿	—	—	—	草花文	やや粗	肥前	17c末～18c後	高台内角渦「福」銘	74	61
CJ068	6号溝　石組堀方	小碗丸形	—	—	—	菊花文	普通	肥前	18c	貫入あり	74	61
CJ069	6号溝　石組堀方	小中皿			—	雪輪に竹梅文　見込手描五弁花	密	肥前	18c前半	高台内角渦「福」銘	74	62
CJ070	6号溝　石組堀方	小中皿	—	—	—	花唐草文	普通	肥前	18c後～19c前	貫入あり	74	61
CJ071	27号溝　埋土2層	中型丸碗	—			色絵（赤・金）　菊文	普通	肥前	19c中以降		74	62
CJ072	27号溝　埋土2層	小中皿	13.6	7.6	2.8	山水文	粗	肥前	17c中		74	62
CJ073	17号柱列　柱2	中型丸碗	—	—		文様あり不明	普通	瀬戸	19c前半		74	62
CJ074	16号柱列　柱4	小型端反碗	—	—	—	草花文	やや密	肥前	18c		75	62
CJ075	ピット215　埋土1層	小中皿	—	—	—	雪輪に露草文	普通	肥前	18c		75	62
CJ076	21号柱列　柱11	小坏	—	—	—		密	肥前	不明		75	62
CJ077	ピット308　埋土	仏飯器	—	—	—	文様あり不明	普通	肥前	18c後～19c中		75	62
CJ078	ピット325　埋土	蓋物（身）		—	—	色絵（赤・青）　唐草文	密	肥前	18c		75	62
CJ079	ピット338　埋土	大碗	—	—	—	文様あり不明	普通	肥前	18c	くらわんか手　高台内[illegible]	75	62
CJ080	ピット338　埋土	小中皿	—			鶯文	普通	不明	不明	貫入あり　高台内「[illegible]」銘	75	62
CJ081	31号土坑　埋土	大碗（蓋）	—	—	—	色絵（赤・緑）[illegible]　見込内松竹梅型文？	普通	肥前	19c前～中		75	62
CJ082	32号土坑　埋土	瓶類	—			文様あり不明	普通	肥前	18c		75	62
CJ083	18号柱列　柱1	小型端反碗	—	—	—		普通	肥前	18c		75	62
CJ084	ピット393　埋土	小坏	—	—	—	雨降り文	密	肥前	18c後～19c中		75	62
CJ085	ピット393　埋土	小中皿	12.9	7.9	—	染付墨弾線描文	普通	肥前	17c末～18c後		75	62
CJ086	33号土坑　埋土	紅皿	—	—	—	白磁型打	密	肥前	18c?		75	62
CJ087	33号土坑　埋土	紅皿			—	見込花文	密	肥前	不明		75	62
CJ088	33号土坑　埋土	小中皿	13.6	8.3	2.6	草花文　見込五弁花（コンニャク判と手描）	普通	肥前	18c前		75	62
CJ089	ピット448　埋土	中型丸碗	—		—	外面蓮弁　内面花詰文	普通	肥前	18c後～19c初		75	62
CJ090	ピット452　埋土	小瓶	—	—	—	色絵（赤・緑）	普通	肥前	18c後～19c中		75	62
CJ091	ピット456　埋土	鉢？	—	7.6		文様あり不明	やや粗	肥前？	不明		75	62
CJ092	B11　3層	酒坏	6.3	2.6	3.5		普通	肥前	17c後～18c初		75	63
CJ093	B11　3層	小碗丸形	8.1	—	4.0	草花文	密	肥前	18c末～19c初		75	63
CJ094	B11　3層	小碗丸形	7.3	2.2	3.5	松竹梅文	密	肥前	18c末		75	63
CJ095	B10　3層	中型丸碗	—	—	—	若松文	密	肥前	18c前半		75	63
CJ096	B11　3層	中型丸碗		—	—	内外花唐草文	密	肥前	19c前		76	63
CJ097	F·G5·6　3層	中型丸碗	—	—	—	草花文	やや粗	肥前	18c	くらわんか手	76	63
CJ098	B11　3層	中型丸碗			—	草花文	密	肥前	18c後		76	63
CJ099	B11　3層	中型丸碗	9.9	4.1	4.8	氷裂に菊花文	普通	肥前	19c初		76	63
CJ100	B11　3層	小型丸碗	8.0	3.2	4.7	桐文（コンニャク判）	普通	肥前	18c前半	くらわんか手	76	63
CJ101	B11　3層	中型丸碗	—	—	—	渦に松枝文	密	肥前	18c後～19c初		76	63
CJ102	B11　3層	中型丸碗	9.3	3.9	5.7	海浜風景文	普通	肥前	18c		76	63
CJ103	B11　3層	鉢	20.5	—	—	花唐草文	普通	肥前	18c後～19c初		76	63
CJ104	B11　3層	紅皿	—			外面無釉	普通	肥前	18c後～19c中		76	63
CJ105	B11·12　3層	極小皿	10.0	6.1	2.0	牡丹文　蛇ノ目凹型高台	粗	肥前	18c中～19c後	貫入あり	76	63
CJ106	B10　3層	小中皿	—	—		内外面氷裂文	普通	肥前	18c中～19c前		76	63
CJ107	B11　3層	小中皿	—	12.6	3.6	区画内山水文　七宝繋文	やや粗	肥前	18c		76	63
CJ108	C11　3層	小坏	—	—	—	竹文	普通	肥前	17c末～18c後		76	63
CJ109	B5　3層	中型丸碗		—	—	梅花文	粗	肥前	18c	くらわんか手	76	63
CJ110	B4　3層	中型丸碗	9.9	4.0	3.9	内外氷裂に菊花文	普通	肥前	18c後		76	63
CJ111	F9　3a層	中型丸碗			—	流水に橘文	やや粗	肥前	18c前		76	63
CJ112	H9　3層	蓋物（身）	—	—	—	横縞文	やや粗	肥前	17c末～18c後		76	63
CJ113	E6　3層	壺（蓋）	12.6		3.7	花唐草文	普通	肥前	18c後半～19c初		77	63
CJ114	24号溝　埋土1層	中型丸碗	—	—	—	内外氷裂に菊花文	普通	肥前	18c後～19c中		76	63
CJ115	17号溝　埋土2層	中型丸碗			—	海浜風景文と花草文　青海波文	やや粗	肥前	18c後～19c中		77	63
CJ116	1号堀　埋土	蓋物（蓋）	—	—	—	草文	密	肥前	18c後～19c中		77	63
CJ117	4号堀　埋土	紅猪口		—	—	色絵（赤）　羽子板文	普通	肥前	18c後～19c中		77	64
CJ118	7号柱列　柱2	極小皿	10.2	5.2	2.4	雲龍文	普通	肥前	18c後～19c中		77	64
CJ119	7号柱列　柱2	蓋物（蓋）	10.0	-		牡丹文	普通	肥前	19c前半	焼き継ぎあり	77	64
CJ120	13号溝　埋土1層	香炉	—	—	—	型打獅子型	やや密	瀬戸	19c中		77	63
CJ121	ピット40　埋土	小型端反碗	—			樹木文	普通	瀬戸	19c中		77	63
CJ122	ピット109　埋土	小型端反碗	—	—	—		やや粗	肥前	17c後半		77	64
CJ123	7号建物　柱3	中型丸碗	—	—		三蓋松文	普通	肥前	18c中～19c初	貫入あり	77	64
CJ124	ピット328　埋土	中型筒形碗	—	4.2	—	[illegible]	やや粗	肥前	18c後～19c初		77	64
CJ125	ピット328　埋土	小中皿	14.7	9.6	4.3	区画菊花文　蛇ノ目凹型高台	やや粗	肥前	18c後～19c中	貫入あり	77	64

表29　二の丸第17地点出土磁器観察表（3）
Tab. 29　Notes on porcelains at NM17(3)

登録番号	出土場所	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	文様等	胎土	生産地	製作年代	備考	図	図版
CJ126	2号柱列　柱1	小中皿	14.2	8.9	5.1	牡丹唐草文	普通	肥前	17c末～18c後	高台内銘あり	77	64
CJ127	6号土坑　埋土	火入	—	—	—	雲に龍文　蛇ノ目凹型高台	普通	肥前	18c後～19c中		77	64
CJ128	11号土坑　埋土	中碗（蓋）	—	—	—	松文	普通	肥前	19c前～中		77	64
CJ129	11号土坑　埋土	小碗丸形	—	—	—	草花文	普通	肥前	18c後～19c中	くらわんか手	77	64
CJ130	5号建物　検出面	小碗丸形	—	—	—	雨降り文	普通	肥前	18c末～19c中		77	64
CJ131	G9　2層	人形	—	—	—	色絵（赤・緑）桜花文？	普通	肥前	不明	津右衛門様式人形着物袖部分	77	64
CJ132	D12・C13　2層	小型端反碗	8.6	3.0	4.0	稲束文？　見込千鳥文　口紅	普通	瀬戸	19c中		—	64
CJ133	1号溝　下部（砂）	中型端反碗	11.2	—	—	鶴文　口縁渦文	普通	瀬戸	19c中		—	64
CJ134	1号溝　埋土	中型端反碗	—	—	—	山形に武田菱　見込千鳥文	普通	平清水	19c中	目4ヶ所	—	64
CJ135	1号溝　上部埋土	中型端反碗	11.4	2.3	5.6	笹に宝文？	普通	平清水	19c中		—	64
CJ136	1号溝　上部埋土	中型端反碗	10.6	—	—	縦縞に楓文	普通	瀬戸	19c中		—	64
CJ137	1号溝　上部埋土	中型端反碗	10.7	3.8	5.0	笹に雪文　見込千鳥文	普通	瀬戸	19c中		—	64
CJ138	1号溝　上部埋土	中型端反碗	10.6	3.7	6.0	萱草文　見込寿文	普通	瀬戸	19c中		—	64
CJ139	B13　2層落ち込み	中型端反碗	10.8	3.8	5.4	花弁よろけ縞文　見込寿文	やや密	瀬戸	19c中		—	65
CJ140	1号溝　埋土	中型平杉碗	11.5	3.8	5.4	草花文　縁内輪描文　見込寿文	密	肥前？	19c中～後		—	65
CJ141	1号溝　上部埋土	中型平杉碗	11.2	3.7	4.6	よろけ縞文	密	瀬戸	19c中		—	65
CJ142	1号溝　石組抜取	蓋物（身）	8.9	—	—	区画内草花文	やや粗	肥前	19c前～中		—	65
CJ143	1号溝　上部埋土	蓋物（蓋）	10.4		2.4	扇に草花文	やや粗	肥前	19c前～中		—	65
CJ144	1号溝　上部埋土	合子（身）	4.2	4.6	1.3	文様あり不明	密	瀬戸	19c中	墨書あり	—	65
CJ145	H13・14　2層	小型端反碗	8.3	3.4	4.1	渦文	普通	瀬戸	19c中		—	65
CJ146	D11　2層	中型端反碗	10.8	4.0	5.2	草花文　見込「大化年□」銘	普通	瀬戸	19c中		—	65
CJ147	C14　2層	小中皿	13.8	6.0	3.4	唐草文　見込荒磯文　蛇ノ目凹型高台	普通	瀬戸	19c中	高台内「青木」	—	65
CJ148	B14　2層	小中皿	14.0	6.2	3.5	唐草文　見込荒磯文　蛇ノ目凹型高台	普通	瀬戸	19c中	高台内「[illegible]」	—	65
CJ149	E10　2層	小中皿	14.2	5.7	3.4	唐草文　見込荒磯文　蛇ノ目凹型高台	普通	瀬戸	19c中	高台内「青木」	—	65
CJ150	E10　2層	小中皿	—	5.6	—	唐草文　見込荒磯文　蛇ノ目凹型高台	普通	瀬戸	19c中	高台内「青木」	—	65
CJ151	D10　2層	小中皿	14.4	6.6	3.6	型打菊花文　蛇ノ目凹型高台	普通	肥前	19c中		—	66
CJ152	D8・9　2層	小中皿	14.1	6.3	3.8	型打桜開文　口紅　蛇ノ目凹型高台	普通	瀬戸	19c中	貫入あり	—	66
CJ153	撹乱	小中皿	14.2	6.0	3.4	型打扇子形文　口紅　蛇ノ目凹型高台	普通	瀬戸	19c中		—	66
CJ154	D11　2層	小中皿	—	8.7	4.1	みじん唐草桜散らし文 見込松竹梅丸文　蛇ノ目凹型高台	普通	肥前	19c前～中		—	66
CJ155	D12　2層	合子（身）	5.5	5.9	1.7		普通	瀬戸	19c中	墨書「松□」	—	66
CJ156	F14・G13　2層	燗徳利	—	4.1	—	草花文	普通	肥前	19c前～中		—	66
CJ157	G5　2層	小瓶	—	6.7	—	蛸唐草文	密	肥前	19c前～中			66
CJ158	E9　2層	紅猪口	5.5	2.3	3.2	宝に梅花文と稲束文	やや密	肥前	18c後～19c中		77	66
CJ159	H5　2層	鉢	—	7.5	7.2	花唐草文　見込文様あり	やや粗	肥前	18c後～19c中		—	66
CJ160	F4・5　2層	小中皿	18.5	11.4	3.2	草配散らし文	やや粗	瀬戸	19c中		—	66
CJ161	便槽遺構　埋土	紅皿	4.6	1.8	1.9		普通	瀬戸？	18c	貫入あり	77	66
CJ162	5号建物　礎石掘方	小碗	7.7	2.8	4.0	文様あり不明	密	肥前	18c	貫入あり	77	66
CJ163	2号溝　埋土	土瓶	—	—	—	鉄絵（黒色）染付釘彫笹文	やや粗	肥前	18c末～19c前	貫入あり	77	66

表30　二の丸第17地点出土陶器観察表（1）
Tab. 30　Notes on glazed ceramics at NM17(1)

登録番号	出土場所	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	文様等	釉薬	胎土	生産地	製作年代	備考	図	図版
CT001	1号井戸　下部埋土	水指	10.8	—	—	鉄釉流し掛け（茶褐色）	灰釉？	粗	美濃	17c初		78	67
CT002	69号溝　埋土	火入？	—	11.8	—		鉛釉	粗	不明	18c？		78	67
CT003	欠番												
CT004	D・E11　4層上部	小中皿	—	—	—	鉄絵（黒色）青海波文	灰釉（淡黄灰白色）	やや密	美濃	17c	貫入あり　織部	78	67
CT005	37号溝　埋土	向付	—			鉄絵（黒色）	灰釉（灰色）	普通	唐津	16c末～17c初	皮鯨	78	67
CT006	40号溝　埋土	大鉢	32.0	—	—		鉄釉（黒色）	粗	東北産？	18c？		78	67
CT007	EF9　整地A	小坏	—	2.4	—		交趾釉	粗	不明	不明		78	67
CT008	H9　整地A	灰吹	5.8	4.2	7.5		灰釉（淡緑灰色）	密	大堀相馬	18c？	貫入顕著	78	67
CT009	F9　整地A	擂鉢	30.0	13.1	11.8		鉄釉（暗赤褐色）	粗	東北産？	18c末～19c初		78	67
CT010	欠番												
CT011	5号建物　東側基礎根石列	大鉢	27.6	—	—	櫛描文	鉄釉（暗褐色）	やや粗	唐津	18c		78	67
CT012	4号木樋	大鉢	35.9			白泥刷毛目文	灰釉（暗緑色）	やや粗	唐津	18c	貫入あり	78	67
CT013	4号木樋	擂鉢	—	—	—		無釉？	やや粗	堺	18c後～19c初		78	67
CT014	9号溝　埋土2層	中型丸碗	10.3	4.6	6.9		灰釉（黄灰褐色）	密	肥前	17c末～18c前	貫入顕著　呉器手	78	67
CT015	9号溝　埋土2層	土瓶（蓋）	3.2		2.4		鉄釉（暗褐色）	普通	大堀相馬	18c後		78	67
CT016	9号溝　埋土1層	大鉢	—	11.2	—	白化粧土　刷毛　唐草文・櫛描波文	灰釉（暗茶灰色）	やや粗	唐津	17c後～18c前	内面目跡あり	78	67
CT017	9号溝　掘方	大鉢	35.1	14.0	11.1	白化粧土　象嵌　雲文・菊文・花唐草文・櫛描波文・波状紋文	灰釉（暗茶灰色）	密	唐津	17c後～18c前	内面目跡7ヵ所	79	68
CT018	9号溝　埋土	擂鉢	—	—	—		鉄釉（暗赤褐色）	やや粗	東北産？	18c後半～19c初		79	69
CT019	9号溝　埋土2層	擂鉢	—	—	—		鉄釉（茶褐色）	普通	東北産？	18c後半～19c初	口縁内面に円形刻印	80	70
CT020	9号溝　掘方	擂鉢	30.4	11.8	15.8		鉄釉（黒褐色）	普通	唐津	17c		80	68
CT021	32号溝　上部埋土	小坏	5.0	2.4	3.0	鉄絵（暗茶褐色）竹文	灰釉（暗緑灰色）	密	大堀相馬？	18c後半？	貫入あり	78	67
CT022	32号溝　中部埋土	小碗	7.1	—	—	色絵（緑・青）松文	灰釉（暗緑灰白色）	やや密	京・信楽	18c後～19c初	貫入顕著	79	67
CT023	32号溝　上部埋土	蓋水入	—	—	3.5	鉄絵（黒褐色）	灰釉（暗緑灰色）	密	瀬戸・美濃	17c後～18c前	貫入顕著	79	68
CT024	32号溝　埋土	火入	10.3	6.0	7.9		灰釉（灰白色）	粗	小野相馬	18c後	失透釉	78	68
CT025	27号土坑　埋土	小碗	6.6	—	—		灰釉（淡緑灰色）	普通	瀬戸・美濃	18c後～19c初	貫入顕著	79	68
CT026	7号土坑　確認面	合子	—	—	0.7		灰釉（灰白色）	密	京・信楽	18c	貫入顕著	78	68
CT027	7号土坑　確認面	小碗	6.9	—	—	色絵（赤・緑・白）竹文	灰釉（淡緑灰色）	密	京・信楽	18c	貫入あり	79	68
CT028	7号土坑　確認面	小碗	7.1	2.8	3.3		灰釉（淡緑灰色）	やや粗	大堀相馬	18c後	貫入顕著	79	68
CT029	7号土坑　確認面	小碗	7.8	3.6	4.0	鉄釉流し掛け（黄褐色）	灰釉（淡青灰白色）	普通	大堀相馬	18c末～19c前	灰釉貫入	79	68
CT030	7号土坑　確認面	中型丸碗	10.2	—	—	鉄釉流し掛け（茶褐色）	灰釉（淡青灰白色）	やや密	大堀相馬	18c末～19c前	灰釉貫入　半失透釉	79	68
CT031	7号土坑　確認面	中型丸碗	9.2	3.0	5.4	色絵（赤・不明）花文	灰釉（淡緑灰白色）	やや密	京・信楽	18c後	貫入あり	80	68
CT032	7号土坑　確認面	中型丸碗	10.1	4.0	5.8		灰釉（淡青灰白色）	普通	大堀相馬	18c末～19c前	貫入顕著	79	68
CT033	7号土坑　確認面	中型丸碗	10.2	4.6	6.2		灰釉（淡黄褐色）	普通	大堀相馬	18c末～19c前	貫入顕著	79	68
CT034	7号土坑　確認面	中型筒形碗	9.0				鉄釉（茶褐色）	普通	大堀相馬	18c後～19c		79	68
CT035	7号土坑　確認面	蓋物	7.6	4.0	6.1		灰釉（淡緑灰色）	普通	大堀相馬	18c後	貫入顕著	80	68
CT036	7号土坑　確認面	中型腰折碗	8.9	4.0	6.0	鉄釉流し掛け（黄褐色）	灰釉（淡黄灰色）	やや密	大堀相馬	18c後	貫入顕著	80	68
CT037	7号土坑　確認面	大碗	12.8	4.4	6.2	上部灰釉（淡緑灰色）	腰部鉄釉（茶褐色）	やや密	大堀相馬	18c末～19c前	灰釉貫入　掛け分け	80	68
CT038	7号土坑　確認面	灰吹	6.0	—	—		鉄釉（暗茶褐色）	粗	東北産？	18c末～19c前		80	68
CT039	7号土坑　確認面	土瓶（蓋）	7.5	—	—	呉須絵草文　青花様　描みで絵ある	透明釉	やや粗	東北産？	19c		80	69
CT040	19号土坑　埋土5層	中型丸碗	—	4.6	—		灰釉（淡青灰白色）	普通	大堀相馬	18c末～19c初	半失透釉	80	69
CT041	19号土坑　埋土5層	中型丸碗	9.5	4.2	5.5		灰釉（淡青灰白色）	普通	京・信楽	18c	貫入顕著	80	69
CT042	19号土坑　埋土5層	中型丸碗	10.6	—	—		灰釉（淡緑灰白色）	普通	大堀相馬	18c末～19c初	貫入顕著	80	69
CT043	19号土坑　埋土5層	中型丸碗	10.3	3.9	5.8		灰釉（淡緑灰色）	普通	大堀相馬？	18c	貫入顕著	80	69
CT044	19号土坑　埋土5層	擂鉢	26.4	—	—		鉄釉（茶褐色）	普通	東北産？	18c後～19c		81	69
CT045	14号土坑　検出面	小碗	7.0	3.0	3.4		灰釉（淡緑灰色）	普通	大堀相馬	18c後	貫入顕著	80	69
CT046	14号土坑　底面	小碗	6.3	2.6	3.4		灰釉（淡緑灰色）	普通	大堀相馬	18c後	貫入顕著	80	69
CT047	14号土坑　埋土1層	中型丸碗	9.4	—	—	色絵（赤・緑）梅花文	灰釉（淡灰白色）	密	京・信楽	18c	貫入顕著	80	69
CT048	14号土坑　検出面	中型丸碗	9.2	3.8	6.0		灰釉（淡緑灰色）	やや密	大堀相馬	18c後～19c初	貫入顕著	81	69
CT049	14号土坑　埋土2層	中型丸碗	—	4.2	—	刻線文　上部灰釉（淡青灰白色）	腰部鉄釉（茶褐色）	普通	大堀相馬	18c後	灰釉貫入　掛け分け	81	69
CT050	14号土坑　埋土1層	中型丸碗	10.3	4.1	6.1		灰釉（淡緑灰色）	密	大堀相馬	18c末～19c初	貫入顕著	81	69
CT051	14号土坑　埋土2層	小中皿	—	4.6	—		灰釉（淡緑灰色）	密	大堀相馬	18c後～19c初	貫入顕著	81	69
CT052	14号土坑　検出面	灰吹		5.5		色絵（赤・緑）菊花文	灰釉（淡黄灰色）	普通	京・信楽	18c	貫入顕著	81	69
CT053	14号土坑　埋土1層	瓶	—	—	—	刻線文	鉄釉（暗茶褐色）	やや粗	大堀相馬	19c		81	69
CT054	14号土坑　埋土2層	大鉢	—	11.4			灰釉（暗緑灰色）	やや粗	唐津	18c後半～19初	目跡あり	81	70
CT055	2号井戸　埋土2層	中型丸碗	9.9	—	—	色絵（赤・緑）笹梅と草文	灰釉（淡黄灰白色）	普通	京・信楽	18c	貫入あり	81	69
CT056	2号井戸　埋土2層	中型腰折碗	—	4.4			灰釉（淡青灰白色）	密	大堀相馬？	18c末～19c前	貫入あり　砂目あり　半失透釉	81	70
CT057	2号井戸　埋土2層	土瓶（蓋）	6.5	—	—		灰釉（淡緑灰色）	普通	大堀相馬	18c	貫入顕著	81	70
CT058	2号井戸　埋土2層	土瓶（蓋）	8.6	10.6	1.7		鉄釉（黒褐色）	粗	小野相馬？	18c末～19c初	横田窯？	81	70
CT059	2号井戸　埋土2層	瓷	29.0	—	—		鉄釉（茶褐色）	やや粗	東北産？	18c末～19c初		81	70

表31　二の丸第17地点出土陶器観察表（2）
Tab. 31　Notes on glazed ceramics at NM17(2)

登録番号	出土場所	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	文様等	釉薬	胎土	生産地	製作年代	備考	図	図版
CT060	2号溝　埋土2層	小碗	6.2	2.2	3.6	色絵（赤）	灰釉（淡紫灰色）	密	京・信楽	18c中～19c初	貫入あり	81	70
CT061	2号溝　埋土	小碗	6.0	2.4	3.2		灰釉（緑灰色）	普通	大堀相馬	18後	貫入顕著	81	70
CT062	2号溝　南側石組抜取痕	小碗	—	2.4	—		灰釉（淡緑灰色）	普通	大堀相馬	18c後	貫入顕著	81	70
CT063	2号溝　埋土1層	中型丸碗	10.0	—	—	色絵（赤・緑・青）梅枝文	灰釉（淡緑灰白色）	普通	京・信楽	18c中～19c初	貫入あり	81	70
CT064	2号溝　北側石組抜取痕	中型丸碗	9.6	4.0	5.9	色絵（赤・緑）菊文	灰釉（淡黄灰白色）	普通	京・信楽	18c中～19c初	貫入あり	81	70
CT065	2号溝　埋土2層	中型丸碗	10.4	3.8	5.8	鉄釉流し掛け（淡黄褐色）	灰釉（淡青灰白色）	普通	大堀相馬	18c後～19c初	灰釉貫入　墨書？	81	70
CT066	2号溝　埋土2層	中型丸碗	10.6	4.3	6.3	鉄釉流し掛け（淡黄褐色）	灰釉（淡青灰白色）	普通	大堀相馬	18c末～19c初	灰釉貫入	82	70
CT067	2号溝　埋土1層	中型筒型碗	8.6	4.3	5.9		灰釉（淡青灰白色）	普通	大堀相馬	18c末～19c初	貫入あり	82	71
CT068	2号溝　埋土2層	中型腰折碗	11.0	-	—		鉄釉（茶褐色）	やや密	大堀相馬	18c後～19c前？		82	71
CT069	2号溝　埋土3層	中型腰折碗	9.7	3.9	5.5	鉄釉流し掛け（暗茶褐色）	灰釉（淡青灰色）	普通	大堀相馬	18c後～19c初	貫入あり　墨書	82	70
CT070	2号溝　埋土2層	中碗	10.5		—	竜線文上部灰釉（淡黄灰色）	腰部鉄釉（茶褐色）	やや密	大堀相馬	18c中～19c初	灰釉貫入　掛け分け	82	71
CT071	2号溝　南側石組抜取痕	不明	-	4.0	--		鉄釉（茶褐色）	普通	大堀相馬	18c後～19c初		82	71
CT072	2号溝　埋土2層	小中皿	14.4	6.2	3.7	鉄絵（暗茶褐色） [illegible]山水文	灰釉（淡緑灰色）	やや密	大堀相馬	18c末～19c前	貫入あり	82	71
CT073	2号溝　埋土1層	袋物不明	10.1	—	—		灰釉（淡緑灰白色）	普通	京・信楽？	18c末～19c中	貫入あり	82	71
CT074	2号溝　南側石組抜取痕	土瓶	—	5.7	—	鉄絵（暗茶褐色）	灰釉（淡緑灰白色）	粗	大堀相馬	18c末～19c前	灰釉貫入	82	71
CT075	欠番												
CT076	2号溝　埋土1層	土瓶（蓋）	7.5		3.3		灰釉（淡黄灰色）	密	京・信楽？	18c後～19c初	貫入あり	82	71
CT077	2号溝　埋土1層	水注	—	—	-	鉄絵（暗褐色）[illegible]文	灰釉（淡黄灰色）	普通	瀬戸・美濃	18c		82	71
CT078	2号溝　南側石組抜取痕	小甕	10.3		—		灰釉（暗緑褐色）	やや粗	東北産？	18c後～19c初		83	71
CT079	2号溝　北側石組抜取痕	甕	19.8	—		内面鉄釉（茶褐色）	鉄釉（暗茶褐色）	粗	不明	18c末～19c前		83	71
CT080	2号溝　埋土1層	甕	12.3	8.0	16.8	刻線文　上部灰釉（淡黄灰白色）	灰釉（暗茶褐色）	やや粗	瀬戸・美濃	18c後～19c初	灰釉貫入　内面鉄錆付着	83	71
CT081	2号溝　埋土1層	甕	14.7	9.4	16.5		鉄釉（暗赤褐色）	やや粗	東北産？	18c後～19c初		83	71
CT082	2号溝　埋土1層	甕	15.9	9.8	17.5	灰釉流し掛け（暗緑灰色）	鉄釉（茶褐色）	やや粗	東北産？	18c後～19c初	内面鉄錆付着	83	72
CT083	2号溝　埋土2層	甕	14.2	—	-	刻線文	灰釉（茶褐色）	粗	不明	18c後～19c初		83	72
CT084	2号溝　埋土2層	甕	17.9	12.5	—	灰釉流し掛け（黒色）	鉄釉（茶褐色）	粗	東北産？	18c後～19c初		83	72
CT085	2号溝　埋土1層	擂鉢	28.8	—	—		鉄釉（茶褐色）	粗	東北産？	18c後～19c初		82	72
CT086	2号溝　埋土1層	擂鉢	36.6	13.3	19.6		鉄釉（茶褐色）	普通	東北産？	18c後～19c初		84	72
CT087	6号溝　埋土1層	小碗	7.0	2.7	3.6		灰釉（暗緑色）	密	大堀相馬	18c後	貫入顕著	82	71
CT088	6号溝　埋土2層	大碗	14.2	5.0	6.8	上部灰釉（淡緑灰色）	腰部鉄釉（暗茶褐色）	普通	大堀相馬	不明	灰釉貫入　掛け分け	82	72
CT089	6号溝　石組堀方	灰吹	5.0		—		灰釉（淡緑灰白色）	粗	瀬戸・美濃	不明	貫入あり	82	71
CT090	6号溝　石組堀方	瓶	--	—	-	灰釉流し掛け（暗緑色）	鉄釉（茶褐色）	やや粗	東北産？	18c後～19c初	掛け分け	82	73
CT091	7号溝　埋土	灰吹	8.0	6.7	8.0	鉄絵（茶褐色）	灰釉（灰白色）	やや粗	相馬駒	不明		82	71
CT092	27号溝　埋土1層	小碗	—	3.0			灰釉（淡青灰白色）	普通	大堀相馬	18c末～19c初	貫入顕著	82	71
CT093	27号溝　埋土2層	中型丸碗	10.0	4.7	6.1		灰釉（淡緑灰色）	普通	大堀相馬	18c末～19c初	貫入顕著	84	72
CT094	27号溝　埋土2層	灰吹	3.7	5.2	7.7	色絵（赤・緑・青）松竹梅文	灰釉（灰白色）	密	京・信楽	18c～19c前	貫入顕著	84	72
CT095	16号柱列　柱3	小中鉢	—	9.1	—		鉄釉（暗茶褐色）	粗	不明	18c後～19c		84	73
CT096	ピット393　埋土	灰吹	5.5	5.6	8.8		灰釉（暗青灰色）	やや粗	小野相馬	18c後～19c初	貫入顕著　半失透釉	84	72
CT097	B11　3層	小碗	5.8	3.2	2.8	色絵（赤・緑）草花文	灰釉（灰白色）	普通	不明	19c初	貫入あり	84	72
CT098	B10　3層	小碗	5.6	2.6	3.1		灰釉（淡黄灰色）	やや密	大堀相馬	18c後	貫入顕著	84	72
CT099	B12　3層	小碗	5.8	3.0	3.0		灰釉（淡緑灰色）	普通	大堀相馬	18c後	貫入顕著	84	73
CT100	B12　3層	小碗	5.8	2.8	3.4		灰釉（黄褐色）	やや密	大堀相馬	18c末～19c初	貫入顕著　半失透釉	84	73
CT101	B10　3層	小碗	6.7	5.3	3.7		灰釉（淡青灰白色）	普通	大堀相馬？	18c末～19c初	貫入顕著	84	73
CT102	B11　3層	小碗	—	2.8	—		灰釉（淡緑灰白色）	やや粗	瀬戸・美濃	18c後～19c前	貫入顕著	84	73
CT103	B11　3層	小碗	7.0	2.8	3.5		灰釉（淡緑灰色）	普通	大堀相馬	18c後	貫入顕著	84	73
CT104	B11　3層	小碗	6.7	3.1	3.5		灰釉（黄灰白色）	密	大堀相馬	18c後～19c初	貫入顕著	84	73
CT105	B12　3層	小碗	6.9	2.5	4.8		灰釉（淡青灰白色）	密	大堀相馬	18c末～19c初	貫入顕著	84	73
CT106	B11　3層	小碗	7.2	3.2	3.4		灰釉（緑灰色）	密	大堀相馬	18c後	貫入顕著	84	73
CT107	B11　3層	小碗	7.0	3.1	4.2		灰釉（緑灰色）	普通	大堀相馬	18c末～19初	貫入顕著	84	73
CT108	B11　3層	小碗	7.9	3.2	4.1		灰釉（淡青灰白色）	普通	大堀相馬	18c末～19c初	半失透釉	84	73
CT109	B10　3層	中型丸碗	9.0		—	色絵（赤緑青金黒）沢瀉文	灰釉（淡緑灰色）	密	京・信楽	18c後	貫入顕著	85	73
CT110	B12　3層	中型丸碗	—	3.0		色絵（赤・緑？）	灰釉（淡黄灰白色）	普通	京・信楽	18c後	貫入顕著	85	73
CT111	B11　3層	中型丸碗	10.0	—	—		灰釉（淡青灰白色）	普通	大堀相馬？	18c末～19c初	貫入あり　半失透釉	85	73
CT112	B11　3層	中型丸碗	9.8	3.9	5.7		灰釉（緑灰色）	普通	大堀相馬	18c後	貫入顕著	85	73
CT113	B11　3層	中型丸碗	10.1	4.2	5.9		灰釉（淡緑褐色）	密	大堀相馬	18c後	貫入顕著	85	73
CT114	B11　3層	中型丸碗	10.2	4.1	5.9		灰釉（淡黄灰白色）	普通	大堀相馬	18c後	貫入顕著	85	73
CT115	B10　3層	中型丸碗	11.8	4.7	6.9		灰釉（淡緑灰白色）	普通	大堀相馬	18c後	貫入顕著	85	73
CT116	B12　3層	中型丸碗	11.0	4.0	6.6		灰釉（淡黄緑灰色）	普通	瀬戸・美濃	18c末～19c初	貫入顕著	85	73
CT117	B10　3層	中型丸碗	10.4	3.8	5.6		灰釉（淡緑灰色）	やや密	大堀相馬	18c後	貫入顕著	85	73
CT118	B11　3層	中型筒型碗	8.8	4.4	5.9	鉄釉流し掛け（茶褐色）	灰釉（淡青灰白色）	普通	大堀相馬	18c末～19c初	灰釉貫入	85	73
CT119	B10　3層	中型腰折碗	11.2	4.6	6.6	鉄釉流し掛け（黄褐色）	灰釉（淡青灰白色）	密	大堀相馬	18c末～19c初	灰釉貫入　半失透釉	85	73
CT120	B11　3層	中碗	10.7	—	--		灰釉（淡緑灰色）	普通	大堀相馬	18c後	貫入顕著	85	73

表32　二の丸第17地点出土陶器観察表（3）
Tab. 32　Notes on glazed ceramics at NM17 (3)

登録番号	出土場所	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	文様等	釉薬	胎土	生産地	製作年代	備考	図	図版
CT121	B10　3層	中碗	10.8	—	—	刷毛文 二部灰釉（淡緑灰色）	胴部鉄釉（茶褐色）	やや密	大堀相馬	18c末～19c初	灰釉貫入　掛け分け	85	73
CT122	B11　3層	餅猪口	4.5	3.4	2.7	色絵（赤）	灰釉（淡黄灰色）	密	不明	18c末～19c初	貫入顕著	85	73
CT123	B10　3層	餅猪口	4.4	3.5	3.0		灰釉（淡緑灰白色）	普通	大堀相馬	19c	貫入顕著	85	73
CT124	B11　3層	仏飯器	7.2	—	—		灰釉（淡黄灰白色）	普通	大堀相馬	18c末～19c初	貫入あり	85	73
CT125	B11　3層	花生け？	—	6.1	—		灰釉（淡緑灰白色）	普通	瀬戸・美濃	18c～19c	貫入顕著　墨書	85	73
CT126	B12　3層	合子（蓋）	5.6	—	1.4	色絵（赤・緑・青）花文	灰釉（淡黄灰白色）	密	京・信楽	18c	貫入顕著	85	73
CT127	B12　3層	蓋物？	—	7.5			灰釉（淡紫灰色）	普通	京・信楽	18c	貫入顕著	85	73
CT128	B12　3層	鬢水入	13.6	13.7	3.5		灰釉（青灰白色）	やや粗	小野相馬	18c後	貫入あり　半失透釉	85	73
CT129	B12　3層	鬢水入		—	3.9		鉄釉（暗褐色）	やや粗	東北産？	18c後～19c初		85	73
CT130	B11　3層	火入	10.0	—	—		灰釉（緑褐色）	やや粗	瀬戸・美濃	18c中～18c後	貫入顕著	85	74
CT131	B11　3層	片口鉢	13.2	5.4	7.2		灰釉（暗青緑褐色）	やや粗	小野相馬	18c後	貫入顕著 内面[illegible]3ヵ所	85	74
CT132	B10　3層	片口鉢	20.8	9.1	12.0		灰釉（青灰白色）	粗	小野相馬	18c	貫入顕著　墨書[illegible] [illegible]3ヵ所	86	74
CT133	F9　3層	中型丸碗	—	7.3		刻線文	鉄釉（暗茶褐色）	粗	瀬戸・美濃	17c後～18c前	尾呂	86	74
CT134	E10　3層	壺	7.9	7.7	13.7		灰釉（黄褐色）	やや粗	瀬戸・美濃	18c	有耳壺？貫入あり	86	74
CT135	C9　3層	極小皿	6.6	3.2	1.9	型打菊皿	灰釉（灰白色）	普通	瀬戸・美濃	不明	貫入顕著	86	74
CT136	C9　3層	中型丸碗	10.2	2.9	7.1		灰釉（緑灰色）	密	大堀相馬	18c後	貫入顕著	86	74
CT137	H9　3層	擂鉢	30.0	—	—		鉄釉（茶褐色）	普通	東北産？	18c後～19c初		86	74
CT138	2号建物　石敷堀方	大鉢	24.2	—	5.8	白泥波文　白化粧土	灰釉（暗緑色）	やや粗	唐津	18c後半？		86	74
CT139	2号建物　柱59	小中皿	22.4	6.8	5.8	鉄絵（暗青黒色）	灰釉（灰白色）	密	大堀相馬	18c末～19c初	灰釉貫入　失透釉	86	75
CT140	24号溝　埋土1層	土瓶（蓋）	4.7	—	2.1		灰釉（淡黄灰白色）	普通	京・信楽	18c後～19c初	貫入あり	86	74
CT141	1号堀　埋土	擂鉢	—	13.8	—		鉄釉（茶褐色）	やや粗	東北産？	19c前		87	75
CT142	2号堀　埋土	中碗	—	4.2	—	鉄釉流し掛け（黒褐色）	灰釉（淡青灰白色）	普通	大堀相馬	19c	灰釉貫入	86	74
CT143	2号堀　埋土	鍋	22.5		—		鉄釉（暗赤褐色）	粗	不明	19c		86	75
CT144	3号堀 埋土	袋物不明	—	5.5	—	上部灰釉（淡青灰白色）	胴部鉄釉（黒褐色）		大堀相馬	19c	灰釉貫入　掛け分け 半失透釉	86	74
CT145	3号堀	瓶	—	—	—		灰釉（淡灰色）	普通	大堀相馬	19c	失透釉	87	74
CT146	4号堀　埋土	火入	—	6.8	—	鉄絵あり	灰釉（灰白色）	粗	瀬戸・美濃	18c後～19c	貫入あり	86	74
CT147	4号堀　埋土	大鉢	—	9.0	—		灰釉（暗緑灰色）	粗	唐津	18c末～19c前		87	74
CT148	9号柱列　柱4	植木鉢	—	16	—		灰釉（緑灰色）	やや粗	堤	19c中	墨書あり	87	75
CT149	8号建物	瓶	—	8.2	—	飛鉋　刻線文	鉄釉（黄褐色）	密	大堀相馬	19c中	墨書「大[illegible]」[illegible]	87	75
CT150	ピット112　埋土	擂鉢	—	—			鉄釉（茶褐色）	粗	東北産？	19c		87	75
CT151	7号柱列　柱1	瓶	4.8	—	—		鉄釉（黒色）	密	大堀相馬	19c		87	75
CT152	7号建物　柱3	小中鉢	21.5	8.0	6.3		灰釉（灰白色）	やや粗	瀬戸・美濃	18c	貫入顕著 [illegible]	87	75
CT153	7号柱列　柱2	小中皿	18.3	6.7	4.2		灰釉（淡青灰白色）	普通	大堀相馬	18末～19c前	失透釉	87	75
CT154	7号柱列　柱2	大鉢	42.7	15.7	12.9	灰釉掛け流し（灰白色）	灰釉（緑灰色）	普通	唐津	18c後～19c初	見込目跡7ヵ所	87	76
CT155	ピット151　埋土	中碗	11.6	4.3	5.9	鉄絵（暗緑色）	灰釉（淡灰色）	普通	大堀相馬	19c前	墨書「大」？	88	75
CT156	ピット151　埋土	擂鉢	33.0	—	—		鉄釉（暗茶褐色）	やや粗	東北産？	19c前		87	76
CT157	ピット307　埋土	水盤	24	—	—		鉄釉（暗茶褐色）	粗	東北産？	19c前		88	75
CT158	ピット325　埋土	中型丸碗	11.4	4.2	—	白泥刷毛目　鉄絵（黒色）草文	青磁釉（暗黄灰色）	普通	肥前	19c	貫入顕著	88	75
CT159	ピット328　埋土	土瓶（蓋）	4.3	—	1.8		灰釉（淡緑灰色）	普通	大堀相馬	19c	貫入顕著	88	75
CT160	ピット328　埋土	土瓶	8.0	—	—	刻線文	鉄釉（暗黄褐色）	やや密	不明	19c	茶漉し孔3　受熱	88	76
CT161	1号土坑　埋土1層	陶額？	—	—		色絵（赤・不明）唐草文	灰釉（淡灰白色）	普通	京・信楽	18c	貫入あり	88	76
CT162	13号土坑　埋土1層	碗鉢皿不明	—	—	—	鉄絵（緑灰色）	灰釉（淡緑灰色）	普通	肥前？	不明	底部に刻印　貫入あり	88	75
CT163	18号土坑　埋土	大鉢	—	—	—	白泥打刷毛目葉文	灰釉（灰褐色）	普通	唐津	18c		88	75
CT164	1号溝　下部	土瓶（蓋）	8.7	—	3.4		鉄釉（黒色）	密	不明	19c中以降		88	76
CT165	15号溝　堀方	中型丸碗	11.2	4.5	7.5		灰釉（黄灰色）	やや密	肥前	17c後～18c前	貫入顕著	88	76
CT166	5号土坑　埋土	中型腰折碗	9.7	4.2	6.5	刻線文	灰釉（淡黄灰白色）	密	大堀相馬	18c	貫入顕著	88	76
CT167	5号土坑　埋土	火入？	—	5.4	—		灰釉（淡青灰白色）	普通	大堀相馬	19c前	貫入顕著　半失透釉	88	76
CT168	5号土坑　埋土	小中鉢	—	—	—		鉄釉（茶褐色）	粗	瀬戸・美濃？	19c前	墨書あり	88	77
CT169	5号土坑　埋土	小甕	10.8	—	—		鉄釉（黒褐色）	普通	不明	不明		88	76
CT170	5号土坑　埋土	焜	18.6	9.8	—	刻線文　上部鉄釉流し掛け（青緑灰色）	鉄釉（暗赤褐色）	やや粗	東北産？	19c初～中		88	77
CT171	6号土坑　埋土	中型丸碗	—	3.0	—		灰釉（淡黄灰白色）	普通	京・信楽	18c後～19c	貫入あり 墨書「[illegible]（カ）」	89	77
CT172	6号土坑　埋土	餅猪口	6.2	—	—		鉄釉（暗茶褐色）	やや粗	東北産？	19c		89	77
CT173	10号土坑　埋土	乗燭	5.4	—	—		鉄釉（暗黄褐色）	普通	大堀相馬	19c		89	77
CT174	8号土坑　埋土	擂鉢	36.9	—	—		鉄釉（茶褐色）	普通	東北産？	18c後～19c前		89	77
CT175	28号土坑　埋土	灰吹	—	5.0			灰釉（淡緑灰色）	密	大堀相馬	18c	貫入顕著	89	77
CT176	29号土坑　埋土	中型丸碗	—	4.9	3.2	白泥波文　白化粧土	灰釉（暗緑褐色）	やや密	肥前	18c	灰釉貫入	89	77
CT177	29号土坑　埋土	鬢水入	—		4.5	鉄絵（暗緑褐色）草花文	灰釉（淡緑灰白色）	普通	瀬戸・美濃	18c	墨書「上（カ）」 灰釉貫入	89	77
CT178	1号石敷　堀方	鬢水入		—	4.4	鉄絵（暗緑褐色）草花文	灰釉（淡灰白色）	やや粗	瀬戸・美濃	17c後	貫入あり	89	77
CT179	7号建物　柱2	茶入れ	3.9	—	—		鉄釉（黒褐色）	普通	中国	不明	目跡あり	89	77
CT180	13号柱列　柱9	小中皿		—		鉄絵（緑灰色）	灰釉（淡緑灰色）	密	不明	不明	墨書「キ（カ）[illegible]」	89	77

表33　二の丸第17地点出土陶器観察表（4）
Tab. 33　Notes on glazed ceramics at NM17(4)

登録番号	出土場所	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	文様等	釉薬	胎土	生産地	製作年代	備考	図	図版
CT181	E10　2層落ち込み	中型丸碗	9.8	4.0	6.4		灰釉（緑灰色）	普通	大堀相馬	19c	貫入あり　半失透釉	89	77
CT182	G13·H12　2層	蓋物（蓋）	—	—	2.1	青釉鉄絵（茶褐色）花書文	灰釉（灰白色）	普通	瀬戸·美濃	18c末～19c	貫入あり　長径9.4cm	89	77
CT183	C14　2層	小中皿	—	—	—	鉄絵（茶褐色）青釉流し掛け	灰釉（灰白色）	やや密	美濃	19c前半	織部	—	77
CT184	G13　2層	蓋物（身）	—	—	—	青釉流し掛け	灰釉（淡青灰色）	やや密	美濃	19c	織部	—	77
CT185	撹乱	小碗	—	2.4	—		灰釉（淡緑灰白色）	普通	不明	18c末～19c前半	墨書「たま力」貫入あり	—	77
CT186	D10　2層	端反	9.0	3.3	5.3		灰釉（青灰色）	普通	大堀相馬	19c前～中	墨書　貫入あり　半失透釉	—	77
CT187	G4　2層	小中皿	—	3.9	—	鉄絵（黒褐色）	灰釉（淡青灰色）	普通	大堀相馬	19c	墨書　半失透釉	—	77
CT188	E8　2層	火入		5.3	—		灰釉（淡緑灰色）	普通	大堀相馬	19c前～中	墨書「ニ（か）」貫入あり	—	77
CT189	撹乱	髪水入			3.1	鉄絵（茶褐色）竹文	灰釉（淡黄灰色）	やや密	瀬戸·美濃	18c？	貫入あり	—	78
CT190	G5　2層	瓶類	—	—	—	刻線宝珠龍文？	黄褐釉	密	淡路？	19c前～中	貫入あり	—	78
CT191	欠番											—	
CT192	H12·13　2層	短頸	5.9	—	7.7		鉄釉（茶褐色）	やや粗	堤	19c		—	78
CT193	D13　2層	乗燭	—	3.1	2.0		鉄釉（茶褐色）	やや粗	不明	19c		—	78
CT194	G5　2層	灯明皿	9.9	4.0	2.2		鉄釉（暗黄褐色）	普通	大堀相馬	19c	炭化物付着　貫入あり	—	78
CT195	撹乱	灯火具	—	3.6	—		鉄釉（暗黄褐色）	やや密	大堀相馬	19c	炭化物付着	—	78
CT196	G5　2層落ち込み	灯明受皿	5.9	4.2	5.4		鉄釉（暗黄褐色）	普通	大堀相馬	19c		—	78
CT197	D9　2層	土瓶（蓋）	4.4	—	1.6		灰釉（淡黄灰色）	普通	京·信楽	不明	貫入あり	—	78
CT198	撹乱	土瓶（蓋）	5.8	—	2.2		灰釉（淡青灰白色）	普通	大堀相馬	19c前～中	貫入顕著　半失透釉	—	78
CT199	1号溝　上部	土瓶（蓋）	6.6	—	1.3	青釉鉄絵巴文　白化粧	透明釉	やや密	大堀相馬	19c中	貫入あり	—	78
CT200	撹乱	土瓶（蓋）	7.2	—	1.4	青釉鉄絵巴文	灰釉（淡緑灰色）	普通	大堀相馬	19c	貫入あり	—	78
CT201	撹乱	土瓶（蓋）	7.0	—	2.0	つまみ型打亀	灰釉（淡黄灰色）	普通	大堀相馬	19c中	貫入あり	—	78
CT202	撹乱	土瓶（蓋）	—	—	2.2	つまみ手捻犬　白化粧	透明釉	普通	大堀相馬	19c中	貫入あり	—	78
CT203	E9　2層	土瓶（蓋）	8.2	—	2.2	青釉鉄絵巴文　白化粧	透明釉	普通	大堀相馬	19c中	貫入あり	—	78
CT204	E11　2層	土瓶（蓋）	9.6	—	2.6	青釉鉄絵菊花文	灰釉（淡黄灰色）	やや密	大堀相馬	19c中	貫入あり	—	78
CT205	G5　2層	土瓶（蓋）	5.0	—	2.6		鮫肌釉（茶褐色）	密	大堀相馬	19c後	勿来手	—	78
CT206	撹乱	土瓶（蓋）	—	—	—	白泥鉄絵巴文　白化粧	透明釉	普通	大堀相馬	19c中	墨書あり	—	78
CT207	1号溝　上部	土瓶	7.5	7.3	8.1	青釉鉄絵山水文　白化粧	透明釉	普通	大堀相馬	19c中	貫入あり　墨書「仙」	—	78
CT208	E10·11　2層	土瓶	7.4	—	—	青釉鉄絵山水文　白化粧	灰釉（淡黄灰白色）	普通	大堀相馬	19c中	貫入あり	—	78
CT209	1号溝　上部	土瓶	9.0	8.7	11.7	青釉鉄絵山水文　白化粧	灰釉（灰白色）	やや密	大堀相馬	19c中	貫入あり	—	78
CT210	D11·12　2層	土瓶	—	—	—	鉄絵　白化粧	透明釉	普通	大堀相馬	19c中	貫入あり　墨書「青」	—	78
CT211	D11　2層	土瓶	7.0	7.4	11.0	鉄絵桐文と菊花文　白化粧	灰釉（灰白色）	普通	大堀相馬	19c中		—	79
CT212	C15·G12　2層	土瓶	—	—	—		灰釉（緑灰色）	普通	大堀相馬	19c中	茶漉し孔2	—	78
CT213	E11　2層落ち込み	土瓶	7.3	6.1	11.5		灰釉（淡緑灰色）	普通	大堀相馬	19c後	安心窯三服　茶漉孔7　墨書「京」　貫入あり	—	79
CT214	2層	土瓶	6.8	7.3	10.9		灰釉（淡緑褐色）	普通	大堀相馬	19c後	安心窯十服　貫入あり　墨書あり	—	79
CT215	撹乱	土瓶	—	8.8	—		灰釉（淡緑灰白色）	普通	大堀相馬	19c前～中	貫入あり	—	78
CT216	1号溝　下部	銚子	—	—	—		灰釉（淡黄灰白色）	やや密	瀬戸·美濃？	19c中以降		—	78
CT217	F10　2層落ち込み[illegible]	花生	6.2	—	—		鉄釉（黒褐色）	粗	堤？	19c中		—	79
CT218	G13　2層	行平（蓋）	15.8	4.5	3.4	飛鉋　外面鉄釉（茶褐色）	灰釉（灰白色）	密	大堀相馬	19c前～中		—	79
CT219	E10·11　2層	土鍋	10.8	6.4	5.1		鉄釉（茶褐色）	普通	東北産？	19c前～中		—	79
CT220	E8　2層	土鍋	17.4	8.2	9.2		鉄釉（暗褐色）	粗	東北産？	19c前～中		—	79
CT221	H·G5　2層	湯通し	16.8	8.8	—		鉄釉（暗褐色）	粗	東北産？	19c前～中		—	81
CT222	1号溝　石組抜取埋土	甕	14.8	—	—		灰釉（暗緑褐色）	粗	東北産？	19c前～中		—	79
CT223	1号溝　下部	擂鉢	—	—	—		鉄釉（暗茶褐色）	粗	東北産？	19c前～中		—	80
CT224	G5　2層落ち込み	擂鉢	38.6	—	—		鉄釉（暗赤褐色）	粗	東北産？	19c前～中		—	79
CT225	G5　2層	擂鉢	43.8	—	—		鉄釉（暗茶褐色）	粗	東北産？	19c前～中		—	80
CT226	H5　2層	擂鉢	33.0	—	—		鉄釉（茶褐色）	粗	東北産？	19c前～中		—	81

表34　二の丸第17地点出土土師質土器皿観察表
Tab. 34　Notes on unglazed ceramic plates at NM17

登録 No.	遺構	口径 cm	底径 cm	器高 cm	調整 内面	体部外面	底部外面	回転方向	炭化物付着物部位	備考	図	図版
CH001	46号溝 埋土1-2層	8.8	5.0	3.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整a	左	口縁～体部内外		90	82
CH002	46号溝 埋土2層	11.2	7.0	3.1	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整a	右	口縁		90	82
CH003	49号土坑 埋土	6.9	4.0	1.8	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整b	右			90	82
CH004	49号溝 埋土	6.7	4.3	1.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整b	右			90	82
CH005	32号溝 下部埋土	10.3	5.4	3.1	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整a	右	口縁		90	82
CH006	32号溝 下部埋土	11.0	6.4	2.9	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整a	左	口縁		90	82
CH007	32号溝 下部埋土	12.8	7.1	3.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整a	左	口縁		90	82
CH008	32号溝 下部埋土	12.8	7.7	3.1	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整b	右			90	82
CH009	32号溝 下部埋土	13.7	7.2	3.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整a	左		内面薄く付着物。何かは不明	90	82
CH010	32号溝 下部埋土	16.8	10.2	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整a	右		内面全体薄くモヤ状付着物	90	82
CH011	32号溝 下部埋土	17.8	12.2	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整a	左		内面付着物　外面薄くススト付着	90	82
CH012	5号建物 礎石抜方	12.0	7.1	3.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整b	左	口縁		90	82
CH013	7号土坑 確認面	11.4	6.7	2.1	ロクロナデ	ミガキ	ミガキ	不明			90	82
CH014	7号土坑 確認面	12.8	7.0	2.6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整b	左		剥あり	90	82
CH015	7号土坑 確認面	14.1	7.6	2.9	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整b	左			90	82
CH016	19号土坑 埋土3層	7.1	4.3	1.6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整b	右	口縁～底部内面		91	82
CH017	19号土坑 埋土3層	10.8	6.1	2.3	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整b	右	口縁・体部内面		91	82
CH018	19号土坑 埋土3層	12.5	6.4	3.3	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	不明	体部内外		91	82
CH019	19号土坑 埋土3層	11.2	6.8	2.7	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整a	左		底部内面付着物 底部外面受熱痕	91	82
CH020	19号土坑 埋土3層	14.6	8.0	2.9	ロクロナデ	ロクロナデ・下半ミガキ・ケズリ	ミガキ・ケズリ	不明			91	82
CH021	19号土坑 埋土3層	13.6	8.5	2.8	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整a	右	口縁		91	82
CH022	19号土坑 埋土3層	16.2	10.8	3.2	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整b	左	体部外面		91	82
CH025	14号土坑 埋土1層	7.4	3.9	2.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整b	不明		内面底部薄く黒い痕あり	91	82
CH024	14号土坑 検出面	8.6	5.0	2.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整b	左	口縁		91	82
CH025	14号土坑 埋土1層	11.4	6.3	2.3	ロクロナデ	ミガキ	ミガキ	不明			91	82
CH026	14号土坑 埋土1層	11.6	6.7	2.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整b	右			91	82
CH027	14号土坑 埋土1層	12.6	6.8	2.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整a	左		内面に黒い液状の痕	91	82
CH028	14号土坑 埋土1層	12.9	7.5	2.6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整b	左			91	82
CH029	14号土坑 埋土1層	14.0	8.0	3.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整b	左			91	82
CH030	2号井戸 埋土層	—	—	—	ロクロナデ	—	ミガキ	不明		底部墨書	91	83
CH031	2号井戸 埋土	—	—	—	ロクロナデ	—	回転糸切無調整b	右		底部内外面墨書	91	83
CH032	2号溝 掘方	5.4	3.1	1.7	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整a	左	口縁・体部内面		91	83
CH033	2号溝 埋土3層	13.9	7.3	3.1	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整b	左	体部外面		91	82
CH034	2号溝 北側抜取溝	13.3	6.9	2.9	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整b	右			91	82
CH035	6号溝 埋土	—	—	—	ロクロナデ	—	不明	右		底部内外面墨書	91	83
CH036	6号溝 埋土2層	12.4	6.3	2.6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整b	左			91	82
CH037	B11　3層	7.5	4.0	1.9	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整a	右	口縁～体部内外		92	82
CH038	B12　3層	11.4	6.1	2.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整b	右			92	83
CH039	B11　3層	11.6	7.0	2.5	ロクロナデ・下半ミガキ	ミガキ・ケズリ	ミガキ	不明			92	83
CH040	B12　3層	12.0	6.6	2.6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整a	右	口縁部外面		92	83
CH041	B11　3層	12.4	6.9	3.0	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	不明			92	83
CH042	B11　3層	12.7	7.5	2.6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整b	左			92	83
CH043	B10　3層	12.8	7.5	2.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整a	右	体部内外		92	83
CH044	B10・11　3層	14.0	8.1	2.7	ロクロナデ	ミガキ・ケズリ	ミガキ	不明			92	83
CH045	B11　3層	14.0	7.7	2.9	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整a	左			92	83
CH046	B11　3層	14.0	7.6	2.9	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整b	左			92	83
CH047	B11　3層	14.0	6.9	2.7	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	不明		口縁部ケズリ	92	83
CH048	18号土坑 埋土	5.7	3.8	1.5	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	不明			92	83
CH049	19号土坑 埋土	11.6	6.6	2.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整b	左	口縁～底部内面		92	83
CH050	1号建物基礎北辺埋土	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	不明		体部・底部外面墨書	92	83
CH051	1号溝 埋土	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	不明		体部内面墨書「マ（カ）」	92	83
CH052	4号溝 埋土	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	不明		体部内面墨書	92	83
CH053	ピット37 埋土	13.2	7.3	2.2	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整a	右			92	83
CH054	7号建物 柱3	12.2	6.9	2.3	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整b	左		内外面薄くススト状の付着	92	83
CH055	ピット338 埋土	11.0	6.8	2.1	ロクロナデ	ミガキ	ミガキ	不明			92	83
CH056	32号土坑 埋土	19.2	12.0	3.7	ロクロナデ	下半ミガキ・ケズリ	ミガキ	不明		内外面薄くススト状の付着	92	83
CH057	カクラン	—	5.0	—	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整a	不明		底部墨書「ヤヤヤ」	92	83

表35　二の丸第17地点出土その他の土師質土器観察表
Tab. 35　Notes on unglazed ceramics (except plates) at NM17

登録番号	出土場所	器種	口径 cm	底径 cm	器高 cm	備考	図	図版
CH058	29号土坑　埋土	焙烙壺	7.2	—	—	外面に格子目タタキ	93	83
CH059	14号土坑　埋土2層	焙烙壺	5.5	5.3	8.0	内外面ロクロナデ　底部外面回転糸切痕a	93	83
CH060	F10 2号溝　北側抜取溝	焙烙壺	5.6	—	—	内外面ロクロナデ	93	83
CH061	E10 2号溝　埋土1層	焙烙壺	6.7	5.8	8.4	内外面ロクロナデ　底部外面回転糸切痕b	93	83
CH062	B9 2号溝　埋土2層	耳皿	—	2.9	3.1	内外面ロクロナデ　底部外面回転糸切痕b	93	83
CH063	B11 3層	焙烙壺（蓋）	7.3	6.7	1.6	内外面ロクロナデ　底部外面回転糸切痕	93	83
CH064	B11 3層	焙烙壺	—	5.0	—	内外面ロクロナデ	93	83
CH065	B11 3層	焙烙壺	8.2	5.2	8.6	内外面ロクロナデ	93	83
CH066	B9 2層	焙烙壺（蓋）	7.5	7.4	2.7	内外面ロクロナデ	93	83
CH067	F10 2号溝　南側抜取溝	焙烙壺	5.3	5.2	7.3	内外面ロクロナデ	93	83
CH068	ピット349　埋土	焙烙壺	6.8	5.0	9.5	外面体部下半に格子目タタキ	93	83

表36　二の丸第17地点出土瓦質土器観察表
Tab. 36　Notes on fumed ceramics at NM17

登録番号	出土場所	器種	口径 cm	底径 cm	器高 cm	備考	図	図版
CG001	46号溝　埋土3層	火入	15.5	—	—	内面・体部外面ロクロナデ　口縁部ミガキ	93	84
CG002	40号溝　埋土	擂鉢	—	—	—	内面・口縁部ミガキ　外面ロクロナデ	93	81
CG003	42号溝　埋土	火鉢	—	—	—	曲面風化　内面剥落　体部外面に型押しの花型文様	93	84
CG004	29号土坑　埋土	鉢	31.1	24.4	6.0	内面・体部外面ロクロナデ　体部外面 底部内面に炭化物が薄く付着	93	84
CG005	14号土坑　埋土1層	火鉢	—	13.6	—	内面ロクロナデ　体部外面ミガキ・ケズリ　底部外面ナデ	94	84
CG006	B11・12　3層	火鉢	28.4	—	—	内面ロクロナデ　口縁部・体部外面ミガキ・ケズリ	94	84
CG007	24号土坑　埋土1層	さな	径 15.2	厚 1.6	—	外面ナデ	94	84
CG008	7号柱列　柱1	火鉢	27.2	18.2	9.15	内面・体部外面ロクロナデ　底部外面回転糸切痕調整 口縁部ミガキ　三足？	94	81
CG009	8号柱列　柱8	釜（転用）	最大径 20.8	ツまみ径 4.6	6.7	内面不明　外面ロクロナデ　内面に炭化物多量に付着	94	84
CG010	焼成	火鉢	—	—	—	獅子面脚部　内面ロクロナデ	94	84
CG011	焼成	十能	—	—	—	取手に型押しの花型文様　外面ミガキ	94	84
CG012	不明	不明	—	—	—	獅子面　中空　口の周縁に穿孔あり	94	84
CG013	1号排水路8	十能	31.2	23.0	99.8	刷印あり	—	84

表37　二の丸第17地点出土軟質施釉陶器観察表
Tab. 37　Notes on lead glazed soft ceramics at NM17

登録番号	出土場所	器種	口径 cm	底径 cm	器高 cm	備考	図	図版
CN001	ピット165　埋土	鉢か	—	—	—	鉢か　取手の為残存　内面・外面ロクロナデ	93	81
CN002	19号土坑　埋土4	ミニチュア（不明）	6.6	2.7	2.4	鉢か　内面・体部外面ロクロナデ　底部外面回転糸切痕調整a（左）	93	81

表38　二の丸第17地点出土土製品・土人形観察表
Tab. 38　Notes on clay objects and figures at NM17

登録番号	出土場所	器種	口径 cm	底径 cm	器高 cm	備考	図	図版
CO001	27号土坑　錯乱層	人形（猿）	3.6	(2.3)	(2.5)	両手欠損　中実　手づくね	94	84
CO002	19号土坑　埋土3層	鈴	—	2.5	2.6	下部欠損　中空　手づくね　内部に小玉があったと考えられる	94	84
CO003	3層	人形（猪）	3.4	5.9	—	左半分のみ残存（裏面調整）　左前脚部欠損　中実　型作り	94	81
CO004	ピット328　埋土	人形	(3.3)	2.5	1.8	頭部欠損　中実　手づくね　底部に穿孔	94	84

表39　二の丸第17地点出土軒丸瓦観察表
Tab. 39　Notes on round eaves tiles at NM17

登録番号	出土場所	瓦当文様	瓦当直径 (cm)	瓦当内径 (cm)	周縁幅 (cm)	釘穴	備考	図	図版
T001	E5　69号溝　埋土	九曜	16.5	11.9	2.2	—		96	85
T002	B15　36号溝　埋土2層	連珠三巴（左巻き）	—	—	2.1	—		97	86
T004	E・F9　整地層A	連珠三巴（左巻き）	—	—	2.2	—		97	86
T005	E・F9　整地層A	三引両	—	—	1.2	—		96	85
T006	B9　14号土坑　埋土1・2層	九曜		—	2.4			96	85
T007	21号柱列　柱5	三引両	14.6	12.2	1.2	—		95	85
T008	E・F9　4号木樋　掘方埋土	三引両	14.8	12.4	1.2	—		96	85
T009	F2・3　32号溝　掘方埋土	九曜	—	—	2.2			96	86
T010	B9　14号土坑　検出面	三引両	14.5	11.8	1.5	—		96	85
T011	F10　2号溝　北側抜取溝埋土	三引両	14.8	12.4	1.2	—		96	85
T012	E10　2号溝　埋土1層	三引両	17.7	13.4	2.2	—		96	85
T013	D10　2号井戸　埋土2層	三引両	14.5	11.6	1.6	—		95	85
T014	D10　2号井戸　埋土2層	三引両	14.0	11.6	1.2			95	85
T015	D10　2号井戸　埋土2層	三引両	14.8	12.4	1.2	2		95	85
T016	D10　2号井戸　埋土2層	三引両	16.9	13.3	1.8	1		95	85
T017	ピット345　埋土	三引両	14.7	12.5	1.0			95	85
T018	ピット330　埋土	連珠三巴（左巻き）	—	—	1.6	—		97	86
T019	C13・14　2層上面瓦溜め	連珠三巴（左巻き）	14.2	9.6	2.4	—		97	86
T020	C13・14　2層上面瓦溜め	三引両	14.6	9.5	2.5	—	刻印あり	96 114	85 97
T021	C13・14　2層上面瓦溜め	九曜	15.9	12.3	1.8			96	85
T022	1層・撹乱	三巴（左巻き）	—	—	2.4	—		97	86

表40　二の丸第17地点出土軒平瓦類観察表
Tab. 40　Notes on flat eaves tiles at NM17

登録番号	出土場所	瓦当文様	瓦当形状	瓦当垂長 (cm)	顎幅 (cm)	備考	図	図版
T023	69号溝　埋土	細葉雪持笹＋唐草2類	太剣	5.5	24.5		98	86
T024	D・E12　46号溝　埋土2層	不明＋唐草6類	—	—	—		98	87
T025	D・E12　46号溝　埋土2層	菊＋不明	—	—	—		97	87
T026	42号溝　埋土	菊＋唐草6類？	—	—	—		97	87
T027	29号土坑　埋土	梅＋唐草3a類	太剣	5.5	—		97	87
T028	C・D8・9　整地層A	三の丸B-4類	太剣	5.4	—		97	87
T029	E・F9　4号木樋　掘方埋土	梅＋唐草3a類	太剣	5.1	—		97	87
T030	F3　32号溝　上部埋土	剣形桔梗2類＋唐草3b類	中剣	4.6	—		97	87
T031	ピット341　埋土	細桔梗1類＋唐草3b類	太剣	5.4	—		97	87
T032	ピット381　埋土	不明＋唐草3a/3b類			—		98	87
T033	4号建物　石列5	細桔梗1/2類＋唐草3b類	太剣	5.7	—		97	87
T034	D10　2号井戸　埋土2層	陰桔梗1類＋唐草1a類	太剣	6.2	—		97	87
T035	D10　2号井戸　埋土2層	太葉雪持笹＋唐草2類	太剣	5.4	—		98	86
T036	19号土坑　埋土4層	細葉雪持笹＋唐草2類	太剣	5.6	—		98	86
T037	B14　1号建物　基礎北辺	菊＋不明	剣高	—	—		97	87
T038	E2　2号塀	太葉雪持笹＋唐草2類	太剣	6.2	—		98	86
T039	11号柱列　柱3	三枚笹2a類＋唐草1a類	太剣	5.7	—		98	86
T040	H14　1号溝　埋土	江戸式	中剣	4.7	—		98	87
T041	E10　2層	[illegible]＋唐草5類	中剣	4.6	—		98	87
T042	G13　2層	雪持三枚笹＋唐草1a類	—	—	—		98	86
T043	C13・14　2層上面瓦溜め	三枚笹2a類＋唐草1a類	中剣	5.0	25.1		98	86
T044	C13・14　2層上面瓦溜め	三枚笹1b類＋唐草1a類	太剣	5.9	—		98	86
T045	C13・14　2層上面瓦溜め	江戸式	—	—	—		98	87
T046	C13・14　2層上面瓦溜め	三引両＋唐草1a類	太剣	5.7	25.2		98	86
T047	C13・14　2層上面瓦溜め	三引両＋唐草5類	中剣	4.5	24.8		98	86

表41　二の丸第17地点出土軒桟瓦観察表
Tab. 41　Notes on eaves-pan tiles at NM17

登録番号	出土場所	全長 (cm)	全幅 (cm)	きき幅 (cm)	きき足 (cm)	尻切込長 (cm)	頭切込長 (cm)	瓦当小巴部分文様	小巴径 (cm)	瓦当垂れ部分文様	瓦当垂れ形状	釘穴	図	図版
T048	1号堀　埋土		—	—	—	—	—	三巴（左巻き）		不明-唐草2類	太剣	—	99	87
T049	G 8　3号堀　埋土	—	—		—	—	—	—	—	三枚笹+唐草1a類	中剣	—	99	86
T050	B15　2層	—	—	—	—		—	三巴（左巻き）	7.7	—	—	—	99	87
T051	調査区南西隅　2層上面掘込み	—	—		—	—		三巴（左巻き）	9.0	三枚笹2a類+唐草1a類	中剣	—	99	87
T052	師団期共同溝撹乱	—	—	—	—		—	三巴（右巻き）	8.3	—	—		99	87
T053	1層・撹乱	—	—	—	—	—	—	三巴（左巻き）	9.3	—	—	—	99	87
T054	E10　2層落ち瓦溜め	29.0	30.3	25.5	17.8	11.2	—	—	—	なし	中剣	2	99	87

表42　二の丸第17地点出土丸瓦観察表
Tab. 42　Notes on round roof tiles at NM17

登録番号	出土場所	胴長 (cm)	頭幅 (cm)	尻幅 (cm)	玉縁幅 (cm)	高さ (cm)	厚さ (cm)	備考	図	図版
T055	F5　69号溝　埋土	28.4	15.7	16.2	4.1	7.8	2.2		100	88
T056	66号溝　瓦北No.2	28.5	16.3	14.2	4.1	8.0	1.7		100	88
T057	66号溝　瓦北No.3	26.7	15.3	16.5	3.8	8.1	2.1		101	88
T058	66号溝　埋土瓦No.2	28.1	15.4	15.2	3.4	7.4	2.0		101	88
T059	66号溝　埋土瓦No.4	26.8	15.5	15.6	2.9	8.2	2.1		102	88
T060	51号溝　瓦No.2	26.7	15.2	15.7	3.6	7.1	2.0		102	88
T061	51号溝　瓦No.4	28.2	16.1	16.3	3.8	7.8	2.1		103	89
T062	54号溝　埋土	26.0	14.6	15.6	4.0	7.5	2.1		103	89
T063	54号溝　埋土	28.3	14.8	16.5	4.2	8.1	1.8		104	89
T064	54号溝　埋土	26.3	15.5	15.9	3.3	7.2	2.1		104	89
T108	D9　整地層A	—		—	—	—	2.5	刻印あり	114	97
T109	ピット443　埋土	—	—		5.4	—		刻印あり（○）	114	97
T110	1層・撹乱	—	—	—	5.1	—	—	刻印あり	114	97

表43　二の丸第17地点出土平瓦観察表
Tab. 43　Notes on flat roof tiles at NM17

登録番号	出土場所	長 (cm)	頭幅 (cm)	尻幅 (cm)	谷深（頭）(cm)	谷深（尻）(cm)	厚さ (cm)	備考	図	図版
T065	1号井戸　下部埋土	33.5	—	—	4.0	3.0	2.6		105	91
T066	F5　69号溝　埋土	26.0	22.0	24.0	3.9	3.3	1.7		105	90
T067	D8・9　整地A'層	28.6	25.1	26.3	2.8	3.7	1.9		105	89
T068	33号土坑　埋土	25.4	21.6	23.2	3.1	3.2	2.0		105	90
T069	D10　2号井戸　埋土2層	26.3	—	25.0	—	3.1	2.0		106	90
T070	D10　2号井戸　埋土2層	25.8	—	24.9		3.1	2.0		106	90

表44　二の丸第17地点出土板状瓦観察表
Tab. 44　Notes on tiles shaped board at NM17

登録番号	出土場所	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	溝	釘穴数	備考	図	図版
T075	4号木樋　桝内部埋土	36.8	30.3	2.6	両方	4		108	92
T076	E9　9号溝　埋土　F9　9号溝　埋土	35.8	28.5	2.0	両方	4	全体的に反る	108	93
T077	17号柱列　柱8	38.2	29.1	2.5	両方	4		109	93
T078	B9　14号土坑　埋土	—	—	2.1	なし	4	29.6×29.0cm　ほぼ正方形、海鼠瓦？	109	92
T079	D10　2号井戸　埋土2層	—	30.4	2.0	なし	2		109	93
T080	C13・14　2層上面瓦溜め	24.1	16.0	1.9	なし	2	普通の板状瓦を半分にしたような形態	107	92

表45 二の丸第17地点出土板塀瓦観察表
Tab. 45 Notes on pan tiles used for fence tiles at NM17

登録番号	出土場所	全長 (cm)	全幅 (cm)	きき幅 (cm)	接合方法	桟断面形	桟幅 (cm)	釘穴数	備考	図	図版
T071	24号柱列　柱4	35.6	—	—	斜め	方形	6.2	—		106	91
T072	E10　2号溝　埋土	38.8	—	—	平行	方形	6.5	1		106	92
T073	D・E11　4層上面瓦囲い	—	25.2	22.4	平行	方形	5.5	2		107	91
T074	ピット201　埋土1層	38.3		29.7	平行	—		2	溝あり	107	91

表46 二の丸第17地点出土平瓦1類観察表
Tab. 46 Notes on type 1 of flat tiles at NM17

登録番号	出土場所	長 (cm)	頭幅 (cm)	尻幅 (cm)	谷深 (頭) (cm)	谷深 (尻) (cm)	厚さ (cm)	備考	図	図版
T111	F13　4層上部	—	—	—	—	—	1.8	刻印「×」	114	97
T112	42号溝　埋土	—	—	—	—		1.6	刻印「×」	114	97
T113	46号溝　埋土3層	—	—	—		—	2.3	刻印「○」	114	97
T114	C・D6　46号溝　埋土3層		—		—	—	2.4	刻印「△」	114	97
T115	E8　整地層A	—	—	—	—	—	2.0	刻印九曜文	114	97
T116	F9　1号溝　上部埋土	—	—	—	—	—	1.8	「く」の字状の刻印	114	97
T117	1号溝　上部埋土	—	—		—		2.1	刻印「シマ」	114	97
T118	1号溝　石組抜取埋土	—		—		—	1.7	刻印「エ」	114	97
T119	E10　2層落ち瓦溜め		—	—	—	—	2.1	スタンプ状の刻印	114	97
T120	D11　2層	—	—	—	—	—	1.8	刻印「フ」	114	97
T121	E10　2層	—	—	—	—	—	1.8	刻印あり（文字？）	114	97
T122	F10　2層	—	—		—		1.8	刻印「ムカ」	114	97
T123	G11　2層	—		—		—	1.7	刻印「エエ」	114	97
T124	G11　2層		—	—	—	—	1.6	刻印あり（サあるいは卄）	114	97
T125	G11　2層	—	—	—	—	—	1.6	刻印「エ」	114	97
T126	G9　2層	—	—	—	—	—	2.0	刻印「ト」	114	97
T127	G8　2層	—	—		—		1.8	刻印「ン」	114	97
T128	C13・14　2層上面瓦溜め	—		—	—	—	2.2	刻印あり（○か？）	114	97
T129	1層・攪乱	—	—	—	—	—	2.4	刻印「源？？作」	114	97
T130	1層・攪乱	—	—	—	—	—	1.7	「コ」の字状の刻印	114	97
T131	1層・攪乱	—	—	—	—	—	—	刻印「和田」	114	97
T133	C13・14　2層上面瓦溜め	—	—		—		1.9	刻印角判	114	97
T134	C13・14　2層上面瓦溜め	—		—	—	—	2.0	刻印角判	114	97
T136	1層・攪乱	—	—	—	—	—	1.5	刻印「宮五」	114	97
T137	1層・攪乱	—	—	—	—	—	1.6	刻印「宮四四」	114	97

表47 二の丸第17地点出土平瓦2類観察表
Tab. 47 Notes on type 2 of flat tiles at NM17

登録番号	出土場所	幅 (cm)	長 (cm)	溝	厚さ (cm)	備考	図	図版
T138	18号柱列　柱6		—	—	3.1	刻印「○」	114	97
T139	G4　3層	—		—	1.9	刻印「○」	114	97

表48 二の丸第17地点出土鳥伏間観察表
Tab. 48 Notes on round eaves tiles of corner at NM17

登録番号	出土場所	瓦当文様	瓦当直径 (cm)	瓦当内径 (cm)	周縁幅 (cm)	図	図版
T003	D9　整地層A	連珠三巴（左巻き）	—	—	2.3	97	86

表49 二の丸第17地点出土桟瓦観察表
Tab. Notes on pan tiles at NM17

登録番号	出土場所	全長 (cm)	全幅 (cm)	きき幅 (cm)	きき尻 (cm)	尻切込長 (cm)	尻切込幅 (cm)	釘穴	備考	図	図版
T132	E10　2層	—	—	—	7.9	4.5		1	刻印あり	114	97
T135	1層・攪乱	—	—	—	—	—	—		刻印あり、宮九	114	97

表50　二の丸第17地点出土面戸瓦観察表
Tab. 50　Notes on filler tiles at NM17

登録番号	出土場所	長(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	厚さ(cm)	備考	図	図版
T081	D9　整地層入	9.0	13.1	5.9	2.0	—	110	94
T082	C・D11・12　4号溝　覆土下	7.8	—	—	1.8	—	110	94
T083	D10　2号井戸　掘上層	9.5	15.0	7.3	2.2	—	110	94
T084	G10　4号溝　埋土	12.5	14.6	6.2	1.8	—	110	94
T085	H14　2層	8.6	—	—	1.7	赤瓦	110	94

表51　二の丸第17地点出土輪違い観察表
Tab. 51　Notes on ridge decoration tiles at NM17

登録番号	出土場所	長(cm)	上幅(cm)	下幅(cm)	高さ(cm)	厚さ(cm)	図	図版
T086	H15　1号建物　基礎東辺	12.1	10.9	14.2	6.2	1.9	110	94

表52　二の丸第17地点出土棟瓦観察表
Tab. 52　Notes on ridge cover tiles at NM17

登録番号	出土場所	長(cm)	幅(cm)	狭幅(cm)	きき幅(cm)	きき起(cm)	桟形状	溝	備考	図	図版
T087	1層・撹乱	30.5	44.0	6.5	44.0	28.3	平	1		110	94
T140	3号井戸　埋土1・2層	—	—	8.7	—	—	平		刻印×	114	97

表53　二の丸第17地点出土T字瓦観察表
Tab. 53　Notes on tiles which figures of sections are "T" at NM17

登録番号	出土場所	全長(cm)	全幅(cm)	突起部幅(cm)	高さ(1)(cm)	高さ(2)(cm)	断面形	釘穴	備考	図	図版
T088	21号柱列　柱5	39.3	8.6	2.3	3.5	2.0	平	2		111	94
T089	5号建物　東西基礎根石列	39.2	9.5	2.7	4.7	2.2	平	2		111	94
T090	1号木橋　側西部掘上	38.4	9.3	2.5	4.7	2.7	平	2		112	94
T141	C13・14　2層上面丸瓦溜め	—	9.7	2.5	4.9	2.4	平	1	刻印あり	114	97

表54　二の丸第17地点出土その他の瓦観察表
Tab. 54　Notes on various roof tiles at NM17

登録番号	出土場所	種類	備考	図	図版
T091	C13・14　2層上面瓦溜	鬼瓦		113	95
T092	C13・14　2層上面丸瓦溜	鬼瓦		116	95
T093	32号溝　中部埋上	鬼瓦の一部か？		112	96
T094	25号井戸　掘土2層	鬼瓦の一部か？		112	96
T095	29号溝　北側掘取溝埋土	鬼瓦の一部か？		112	96
T096	27号土坑	鬼瓦の一部か？		112	96
T097	H9　3層	不明		112	96
T098	4号建物　石列5	その他	変形の平瓦？	112	96
T099	2号溝　最埋土	その他	隅瓦の一部？	112	96
T100	D・E10　4層上面	その他	変形の平瓦？	112	96
T101	不明	その他	隅瓦の一部？	112	96
T102	46号溝　掘土2層	その他	輪違いに類似した形態	113	96
T103	F2・3　32号溝　最方埋上	その他	棧瓦の棟先の一部か？	113	96
T104	E17　24号溝　埋上	その他	袖棟瓦の可能性あり、釘穴？	113	96
T105	D11　24号溝　埋土	その他	袖棟瓦の可能性あり、釘穴？	113	96
T106	12号土坑　埋上	その他	3条の筋あり、棧瓦の一種か？	113	96
T107	D11　2層	その他	腰斗瓦？	113	96
T142	G4　3層	不明	刻印あり	114	97
T143	不明	不明	刻印あり	114	97
T144	3号井戸　埋土2層	不明	刻印？	114	97
T145	E10　2層	不明	刻印？	114	97

表55　二の丸第17地点出土漆椀・漆皿観察表
Tab. 55　Notes on wooden implements with lacquer at NM17

登録番号	出土場所	種類	種類	口径 cm	底径 摘み径 cm	器高 cm	高台高 摘み高 cm	文様等	高台（摘み）内銘	図	図版
W001	1号井戸　下部埋土	漆椀	蓋	11.5	5.4	−	−	地：内外面黒	高台内銘（朱）「一」	117	98
W002	69号溝　埋土	漆椀	身	14.5	6.7	9.3	1.4	地：内面朱　外面黒　外面梅文（朱）		117	98
W003	6号土坑　埋土	漆椀	身	−	−	−	−	地：内面朱　外面黒　外面花文（朱）		−	98
W004	6号土坑　埋土	漆椀	身	−	−	−	−	地：内面朱　外面黒　外面文様（朱）		−	98
W005	6号土坑　埋土	漆椀	身	11.4	5.8	−	−	地：内外面黒	高台内梅文（朱）	117	98
W006	14号土坑　埋土2層	漆椀	蓋	10.4	5.1	3.4	0.3	地：内面朱　外面黒　外面文様（朱）		117	98
W007	19号土坑　埋土5層	漆椀	身	−	5.0	−	−	地：内面朱　外面黒　外面家紋（銀）3ヵ所		117	98
W008	19号土坑　埋土5層	漆椀	身	−	4.9	−	−	地：内面朱　外面黒　外面家紋（朱）3ヵ所		−	98
W009	19号土坑　埋土5層底面	漆椀	蓋	10.3	4.7	2.9	0.5	地：内面朱　外面黒　外面文様（銀）		117	98
W010	19号柱列　柱9	漆椀	身	−	5.0	−	−	地：内面朱　外面黒　高台内銘（朱）		117	98
W011	18号柱列　柱9	漆椀	蓋	9.5	4.8	2.5	0.3	地：内面朱　外面黒　外面家紋（朱）3ヵ所	高台内佩文（朱）	117	98
W012	21号柱列　柱15	漆椀	身	−	5.9	−	−	地：内面朱　外面黒		117	98
W013	21号柱列　柱15	漆椀	身	−	5.7	−	−	地：内面朱　外面黒		117	98
W014	不明	漆椀	蓋	−	−	−	−	地：内面朱　外面黒　外面家紋？（朱）		−	99
W015	B5　南北鉄管撹乱	漆椀	身	−	−	−	−	地：内面朱　外面黒　外面家紋（朱）		−	99
W016	1層・撹乱	漆椀	身	−	5.8	−	−	地：内面朱　外面黒		117	99
W017	1層・撹乱	漆椀	身	13.0	6.2	8.8	0.8	地：内面朱　外面黒　外面文様（朱）		118	99
W018	11号土坑　埋土	漆皿	−	11.0	−	1.2	−	地：内外面朱　内面竹文（朱・緑）		118	98
W019	不明	漆皿	−	−	12.2	−	−	地：内面朱　外面黒　内面文様（黒・金）		118	99

表56　二の丸第17地点出土その他の漆塗製品観察表
Tab. 56　Notes on various wooden implements with lacquer at NM17

登録番号	出土場所	種類	文様等	図	図版
W020	14号土坑　埋土2層	漆箸	全面朱	120	100
W021	19号土坑　埋土5層	漆箸	長さ24.3cm　全面黒	120	100
W022	E8　1号溝　下部埋土	漆箸	長さ24.3cm　下端黒　上端朱	120	100
W023	7号建物　柱3	漆塗しゃもじ	厚さ0.7cm　全面朱	118	99
W024	19号土坑　埋土5層	漆塗しゃもじ	全面朱	118	99
W025	19号土坑　埋土5層	漆塗しゃもじ	全面朱	118	99
W026	6号土坑　埋土	漆塗小型容器	地：内外面黒　外面文様（朱）	—	99
W027	E5　32号溝　下部埋土	漆塗櫛	a 3.2cm　b 4.6cm　c 2.2cm　地：黒　蒔絵竹梅・雀文（金）	119	103
W028	7号建物　柱1	漆塗刷毛	長さ13.4cm　最大幅7.4cm　厚さ1cm　全面黒	118	99
W029	G5　2層	漆塗不明	全面黒	118	99
W030	1号井戸　下部埋土	漆塗不明	地：内外面黒　文様（朱）	118	99

表57　二の丸第17地点出土円板状木製品観察表
Tab. 57　Notes on wooden implements shaped round plate at NM17

登録番号	出土場所	直径 cm	厚 cm	備考	図	図版
W068	2号井戸　埋土2層	5.6	0.4	中央に小孔	119	99
W069	2号井戸　埋土2層	6.7	0.5	中央に小孔	119	99
W070	6号土坑　埋土	8.4	0.4	中央に盲孔	119	99
W071	19号土坑　埋土5層	7.9	0.4	中央に小孔	119	99
W072	19号土坑　埋土5層	10.3	0.4	中央に盲孔	119	100
W073	19号土坑　埋土5層	5.8	0.4	中央に盲孔	119	100
W074	19号土坑　埋土5層	3.0	0.4	中央に小孔	119	99
W075	19号土坑　埋土5層	16.5	0.4	中央に小孔　樹皮摘み？	119	99
W076	29号土坑　埋土	16.8	0.5	小孔あり	119	100
W077	30号土坑　埋土	7.1	0.4	中央に盲孔	119	99
W078	7号建物　柱3	6.4	0.5	中央に小孔	119	99
W079	7号柱列　柱2	12.8	0.5	中央に小孔	119	100
W080	ピット360　埋土	8.5	0.6		119	99
W081	33号土坑　埋土	9.7	0.5	中央に小孔	119	99
W082	33号土坑　埋土	9.6	0.6	中央に小孔	119	99

表58　二の丸第17地点出土下駄観察表
Tab. 58　Notes on wooden clogs at NM17

登録番号	出土場所	種類	長 cm	幅 cm	高 cm	備考	図	図版
W094	29号土坑　埋土	下駄	—	-	11.4	露卯差歯　底に小石付着	123	103
W095	29号土坑　埋土	下駄	14.2	8.4	3.0	無歯中切 下面の周囲に丸い木釘 上面に穿孔 (畳表を打付けた痕)	123	103
W096	7号建物　柱3	下駄	21.8	8.1	3.4	丸型連歯　底に小石付着	123	103
W097	7号建物　柱5	下駄	21.6	8.2	3.9	丸型連歯　底に小石付着	123	103

表59　二の丸第17地点出土曲物観察表
Tab. 59　Notes on round vessels shaped by bending and securing a thin sheet of cuoress wood at NM17

登録番号	出土場所	直径 cm	器高 cm	備考	図	図版
W062	1号井戸　埋土4層	21.0	15.6	天板、内面に黒漆	121	101
W063	19号土坑　埋土5層	10.6	2.4	完形（蓋）　とじ紐（樹皮）残存	121	101
W064	19号土坑　埋土5層	9.3	7.8	ひしゃく？　とじ紐（樹皮）残存	121	101
W065	19号土坑　埋土5層	7.6	—	外面に黒漆	121	101
W066	29号土坑　埋土	10.4	—	とじ紐（樹皮）残存　墨書「内助助□」	121	101
W067	32号土坑　埋土	-	8.5	ひしゃく？　とじ紐（樹皮）残存	121	102

表60　二の丸第17地点出土楔観察表
Tab. 60　Notes on wooden implements shaped wedge at NM17

登録番号	出土場所	長 cm	幅 cm	厚 cm	図	図版
W128	1号塀　埋土	13.6	2.8	3.0	122	102
W129	1号塀　埋土	12.3	2.8	2.5	122	102
W130	1号塀　埋土	14.5	2.4	2.6	122	102
W131	1号塀　埋土	10.0	3.0	1.8	122	102
W132	1号塀　埋土	10.5	2.8	2.5	122	102
W133	1号塀　埋土	7.6	2.6	1.8	122	102
W134	G9　3号塀　埋土	18.2	3.2	2.1	122	102
W135	2号井戸　埋土2層	12.6	2.8	2.9	122	102
W136	2号井戸　埋土2層	12.0	3.1	2.1	122	102
W137	2号井戸　埋土2層	10.9	2.6	1.0	122	102
W138	2号井戸　埋土2層	—	—	—	—	102
W139	29号土坑　埋土	11.8	2.4	2.8	122	102
W140	29号土坑　埋土	12.1	2.2	1.2	122	102
W141	29号土坑　埋土	8.5	2.5	1.8	122	102
W142	7号柱列　柱1	6.7	1.3	0.9	122	102
W143	21号柱列　柱11	13.9	2.8	1.8	122	102
W144	ピット345　埋土	16.8	3.9	2.9	122	102
W145	17号柱列　柱1	12.1	2.0	1.3	122	102
W146	ピット394　埋土	9.0	3.1	3.0	122	102

表61　二の丸第17地点出土箸状木製品観察表
Tab. 61　Notes on wooden chopsticks at NM17

登録番号	出土場所	先端形状	全長 mm	最大径 mm	整形	備考	図	図版
W031	6号土坑　埋土	D	74.0	7.5	普	断面長方形	120	100
W032	6号土坑　埋土	AA	206.0	6.6	普		120	100
W033	8号土坑　埋土	AA	233.0	5.5	普		120	100
W034	18号土坑　埋土	AC	221.0	5.8	良		120	100
W035	19号土坑　埋5層	AA	210.0	7.0	普		120	100
W036	19号土坑　埋5層	AA	213.0	6.7	普		120	100
W037	19号土坑　埋5層	AA	210.0	7.3	普		120	100
W038	19号土坑　埋5層	AA	207.0	6.4	普		120	100
W039	19号土坑　埋5層	AB	209.0	6.3	普	被熱	120	100
W040	19号土坑　埋5層	AC	199.0	7.5	普	断面長方形	120	100
W041	19号土坑　埋5層	AC	167.0	7.2	普		120	100
W042	29号土坑　埋土	AC	225.0	6.0	普	被熱	120	100
W043	29号土坑　埋土	AA	241.0	6.5	普		120	100
W044	29号土坑　埋土	AA	240.0	6.7	普		120	100
W045	29号土坑　埋土	AA	231.0	6.3	普		120	100
W046	29号土坑　埋土	AC	240.0	6.4	普		120	100
W047	29号土坑　埋土	AA	234.0	5.0	普		120	100
W048	29号土坑　埋土	AA	240.0	5.5	良		120	100
W049	32号土坑　埋土	AA	212.0	7.1	普		120	100
W050	32号土坑　埋土	AA	210.0	6.6	普		120	100
W051	32号土坑　埋土	AA	210.0	5.7	良		120	100
W052	ピット391　埋土	AC	208.0	6.2	普		120	100
W053	33号土坑　埋土	AA	238.0	6.1	普		120	100
W054	33号土坑　埋土	AA	225.0	5.7	普		120	100
W055	F4　32号溝　下部埋土	AA	211.0	6.7	普		120	100
W056	F5　32号溝　中部埋土	AA	230.0	5.7	普		120	100
W057	C・D8　46号溝　埋土3層	BB	244.0	9.0	普	断面四角形	120	100
W058	C・D8　46号溝　埋土3層	BB	239.0	7.1	普		120	100
W059	C・D11　46号溝　埋土3層	BB	249.0	6.8	普		120	100
W060	F4　69号溝　埋土	BB	248.0	7.5	普		120	100
W061	E9・10　6号塀　埋土	AA	210.0	6.4	普		120	100

表62　二の丸第17地点出土櫛観察表
Tab. 62　Notes on wooden combs at NM17

登録番号	出土場所	法量　cm	図	図版
W027	32号溝　下部埋土	a 3.2cm　b 4.6cm　c 2.2cm 地：黒　蒔絵竹梅・雀文（金）	119	103
W098	19号土坑　埋土5層	a（4.1）　b 4.1　c 1.0	119	103
W099	32号溝　下部埋土	a 7.5　b 5.6　c 2.0	119	103
W100	1号石敷　埋土	a 8.6　b 1.9　c 1.4	119	103
W164	便槽遺構　埋土	a 10.5　b 4.9　c 1.1	119	103

表63　二の丸第17地点出土桶観察表
Tab. 63　Notes on troughs NM17

登録番号	出土場所	種類	特徴等	備考	図	図版
W083	5号土坑　埋土	桶天板	径39.2cm　厚2.1cm		123	101
W084	29号土坑　埋土	桶天板	径35.0cm　厚1.1cm		123	101
W085	2号井戸　埋土3層	桶天板	径18.2cm　厚1.7cm	焼印あり	123	101
W086	17号柱列　柱1	桶天板	径14.4cm　厚0.8cm		123	101
W087	G5　2層落ち込み	桶側板		焼印あり	123	101
W088	G5　2層落ち込み	桶側板		焼印あり	123	101
W089	6号土坑　埋土	桶側板		孔あり	123	101

表64　二の丸第17地点出土その他の木製品観察表
Tab. 64　Notes on various wooden implements at NM17

登録番号	出土場所	種類	法量 cm	備考	図	図版
W090	5号土坑　埋土	栓	長3.6　幅3.6　厚3.3		121	103
W091	18号土坑　埋土	栓	長5.6　幅2.6　厚2.6		121	103
W092	19号土坑　埋土5層	栓	長6.9　幅3.4　厚3.3		121	103
W093	19号土坑　埋土5層	栓	長7.1　幅3.4　厚2.8		121	103
W101	19号土坑　埋土5層	扇子	残存長9.3　幅1.2　厚0.6	要は木製	125	104
W102	19号土坑　埋土5層	柄	長12.4　幅1.8	穿孔あり	125	104
W103	29号土坑　埋土	柄	長11.0　幅1.3	中空	125	104
W104	G5　2層	すり棒	長24.7　幅3.1	上部に穿孔あり	125	104
W105	E5　32号溝　下部埋土	へら	幅3.1　厚0.2		125	104
W106	19号土坑　埋土5層	へら	幅1.5　厚0.2		125	104
W107	32号土坑　埋土	へら	長19.1　幅2.9　厚0.2	上部に穿孔あり	125	104
W108	18号土坑　埋土	へら状製品	幅1.3　厚0.2		125	104
W109	29号土坑　埋土	へら状製品	長13.0　幅3.6　厚1.0		125	104
W110	ピット151　埋土	容器	底径7.0		125	104
W111	30号土坑　埋土	容器・蓋	長7.5　幅12.4　厚0.3		125	105
W112	D・E14　46号溝　埋土3層	折敷	横16.0　厚0.3		125	105
W113	19号土坑　埋土5層	折敷	13.6cm四方　厚0.2		125	105
W114	19号土坑　埋土5層	方形薄板	横4.8　縦3.5　厚0.2		125	104
W115	19号土坑　埋土5層	方形薄板	3.1cm四方　厚0.2		125	104
W116	G5　32号溝　上部埋土	板状製品	長11.6　幅5.0　厚0.4	周囲に穿孔4ヵ所	125	105
W117	18号柱列　柱14	不明			125	105
W118	24号柱列　柱6	不明	長16.6　幅4.8　厚2.0	溝2ヵ所	125	105
W119	18号柱列　柱14	箱状製品	長30.4　幅8.1　厚2.6	くり抜き	126	106
W120	F5　32号溝　中部埋土	箱状（？）	長19.5　幅4.4　厚0.8	木釘5ヵ所　穿孔1ヵ所	126	105
W121	29号土坑　埋土	箱状？	縦19.0　横23.9　厚2.2	釘あり	126	105
W122	19号土坑　埋土5層	（串状）不明	長さ20.9	断面長方形	126	105
W123	ピット198　埋土	不明	長15.4　幅2.1　厚1.0	上部に木釘1ヵ所	126	105
W124	19号土坑　埋土5層	不明	幅1.7　厚1.0		126	105
W125	2号井戸　埋土2c層	不明	最長50.3　最大幅6.3	穿孔あり2ヵ所　矢羽状の線刻	127	105
W126	便槽遺構　埋土	金かくし板	長43.2　幅27.4　厚2.0	釘4ヵ所	124	104
W127	便槽遺構　埋土	金かくし板	長42.3　幅24.3　厚1.9	釘2ヵ所	124	104
W147	1号塀　埋土	建築部材	幅10.5　厚4.5		127	106
W148	29号土坑　埋土	木羽	長27.9　幅9.9　厚0.3		127	106
W149	7号土坑　埋土2層	墨書ある板	—		126	106
W150	19号土坑　埋土5層	墨書ある板	幅3.6　厚0.4	墨書「□様野様」	126	106
W152	29号土坑　埋土	墨書ある板	幅5.3　厚0.3	墨書「孫太夫殿 左衛門殿 左衛門殿　「　」殿 甲」伊」」	126	106
W154	32号土坑　埋土	墨書ある板			—	—
W155	F4　32号溝　下部埋土	刻みある板	長3.1　厚0.5		126	106
W156	19号土坑　埋土5層	荷札（？）	長15.7　幅2.6　厚0.5		127	106
W157	D・E13　46号溝　埋土3層	筒状竹製品	長16.5　直径3.0		127	106
W158	6号土坑　埋土	孔開き竹製品	幅3.3　厚0.4	穿孔1ヵ所	127	106
W159	19号土坑　埋土5層	孔開き竹製品	長13.8　幅2.5　厚0.2	穿孔1ヵ所	127	106
W160	2号井戸　埋土2層	釘付竹製品	長11.4　幅1.8　厚0.5	木釘1ヵ所	127	106
W161	2号井戸　埋土2層	札状竹製品	長12.5　幅3.0　厚0.5		127	106
W162	2号井戸　埋土2層	札状竹製品	幅1.0　厚0.5		127	106
W163	8号土坑　埋土	栓（？）	直径1.7		127	106

表65　二の丸第17地点出土古銭観察表 (1)
Tab. 65　Notes on coins at NM17 (1)

登録番号	出土場所	銭名	外形 (mm)	厚形 (mm)	重量 (g)	備考	図	図版
MC001	1層・撹乱	寛永通寶（古寛永）	24	6	2.1	完形	128	107
MC002	1層・撹乱	寛永通寶（新寛永）	23	6	1.2	一部欠損　錆化顕著	—	107
MC003	1層・撹乱	寛永通寶（古寛永）	24	6	3.1	完形	128	107
MC004	1層・撹乱	寛永通寶（新寛永）	24	6	2.6	完形	128	107
MC005	1層・撹乱	寛永通寶（新寛永）	21	7	0.7	ごく一部欠損　錆化顕著	128	107
MC006	1層・撹乱	寛永通寶（新寛永）	23	6	2.0	ごく一部欠損	128	107
MC007	E10　2層	寛永通寶（古寛永）	25	6	2.5	ごく一部欠損	128	107
MC008	G14　2層	寛永通寶（古寛永）	24	6	2.0	一部欠損	128	107
MC009	H10　2層	寛永通寶（新寛永）	23	6	1.9	ごく一部欠損　「虎の尾寛」	128	107
MC010	B8　2層	寛永通寶（新寛永）	24	6	1.9	ごく一部欠損　「ハネ永」	128	107
MC011	H11　2層	寛永通寶（新寛永）	23	6	1.4	一部欠損　錆化顕著	—	107
MC012	D10　2層	寛永通寶（新寛永）	22	7	0.9	1/3欠損　錆化顕著	128	107
MC013	B12　2層	寛永通寶（新寛永）	23	—	0.9	1/2欠損	128	107
MC014	B12　2層	寛永通寶（新寛永）	22	—	0.7	1/3欠損　錆化顕著	128	107
MC015	B11　2層	寛永通寶（新寛永）	23	6	1.3	1/4欠損　錆化顕著　「ハネ永」	128	107
MC016	B10　3層	寛永通寶（古寛永）	24	6	2.4	一部欠損	128	107
MC017	B11　3層	寛永通寶（古寛永）	24	5	2.5	完形	128	107
MC018	B11　3層	寛永通寶（新寛永）	23	7	1.3	一部欠損	128	107
MC019	B11　3層	寛永通寶（新寛永）	22	7	1.4	一部欠損　錆化顕著	—	107
MC020	B11　3層	寛永通寶（新寛永）	23	7	1.4	一部欠損	128	107
MC021	B11　3層	寛永通寶（新寛永）	23	6	1.6	一部欠損　錆化顕著	—	107
MC022	B11　3層	寛永通寶（新寛永）	25	6	1.7	1/3欠損　錆化顕著	128	107
MC023	B11　3層	不明	23	—	0.6	輪のみ残存	—	107
MC024	B11　3層	不明	—	—	0.6	1/2欠損　錆化顕著　新寛永か	—	107
MC025	B11　3層	寛永通寶（新寛永）	24	6	1.6	一部欠損　錆化顕著	—	107
MC026	G2　3層	紹聖元宝	22	6	1.3	一部欠損　錆化顕著　南宋（1190年初鋳）	128	107
MC027	F9　3a層	寛永通寶（新寛永）	22	6	1.4	一部欠損　錆化顕著	128	107
MC028	1号溝　下部現土	寛永通寶（新寛永）	24	7	1.9	一部欠損　錆化顕著	—	107
MC029	2号溝　埋土1層	寛永通寶（新寛永）	23	6	2.3	完形　「倩頭永」	128	108
MC030	2号溝　埋土2層	寛永通寶（新寛永）	23	—	1.0	1/3欠損	128	108
MC031	2号溝　埋土2層	寛永通寶（新寛永）	24	6	2.3	完形	128	108
MC032	2号溝　埋土2層	寛永通寶（文銭）	25	6	2.1	完形	128	108
MC033	2号溝　南側抜取溝	寛永通寶（新寛永）	25	7	1.4	一部欠損　錆化顕著	128	108
MC034	2号溝　側方埋土	寛永通寶（古寛永）	23	6	2.1	一部欠損	128	108
MC035	9号溝　掘方埋土	渡来銭	24	—	0.8	1/2欠損　宋元通寶（北宋960年初鋳）か	128	108
MC036	不明	寛永通寶（文銭）	25	6	2.1	完形	129	108
MC037	7号土坑　確認面	寛永通寶（古寛永）	25	6	2.1	ごく一部欠損	129	108
MC038	7号土坑　確認面	寛永通寶（新寛永）	24	6	1.4	1/3欠損　錆化顕著	129	108
MC039	7号土坑　確認面	寛永通寶（新寛永）	23	7	1.5	一部欠損　土圧で変形	—	108
MC040	7号土坑　確認面	寛永通寶（古寛永）	24	6	2.8	ごく一部欠損	129	108
MC041	7号土坑　確認面	寛永通寶（新寛永）	24	6	2.0	一部欠損	129	108
MC042	7号土坑　確認面	寛永通寶（新寛永）	23	6	1.7	一部欠損	129	108
MC043	7号土坑　確認面	寛永通寶（新寛永）	23	6	1.4	一部欠損	129	108
MC044	7号土坑　確認面	寛永通寶（新寛永）	23	7	1.9	一部欠損　錆化顕著	—	108
MC045	7号土坑　確認面	寛永通寶（新寛永）	23	6	1.7	1/4欠損　錆化顕著	—	108
MC046	7号土坑　確認面	寛永通寶（新寛永）	24	6	1.5	一部欠損　錆化顕著	—	108
MC047	7号土坑　確認面	寛永通寶（古寛永）	24	6	2.1	一部欠損	129	108
MC048	7号土坑　確認面	寛永通寶（古寛永）	24	6	2.2	ごく一部欠損	129	108
MC049	7号土坑　確認面	寛永通寶（新寛永）	23	6	2.1	一部欠損　「ハネ永」	129	108
MC050	7号土坑　確認面	不明	—	6	0.5	1/4欠損　錆化顕著　文字不明	—	108
MC051	7号土坑　確認面	寛永通寶（新寛永）	—	—	0.7	1/2欠損　錆化顕著	—	108
MC052	14号土坑　検出面	寛永通寶（古寛永）	25	6	1.7	一部欠損	129	108
MC053	14号土坑　掘土3層	寛永通寶（古寛永）	23	5	2.7	完形	129	108
MC054	便槽遺構　埋土	寛永通寶（新寛永）	26	6	3.5	完形　錆化顕著	129	108
MC055	便槽遺構　埋土	寛永通寶（文銭）	26	6	3.3	A群-1　完形	129	109
MC056	便槽遺構　埋土	永楽通寶	22	7	1.1	A等-2　一部欠損	129	109
MC057	便槽遺構　埋土	寛永通寶（古寛永）	24	6	2.9	A群-3　完形	129	109
MC058	便槽遺構　埋土	寛永通寶（古寛永）	25	6	2.8	A群-4　完形	129	109
MC059	便槽遺構　埋土	寛永通寶（古寛永）	25	6	4.0	A群-5　完形	129	109
MC060	便槽遺構　埋土	寛永通寶（文銭）	25	6	3.3	A群-6　完形	129	109
MC061	便槽遺構　埋土	寛永通寶（古寛永）	25	6	4.1	A群-7　完形	129	109
MC062	便槽遺構　埋土	寛永通寶（文銭）	25	6	2.9	A群-8　完形	129	109
MC063	便槽遺構　埋土	寛永通寶（古寛永）	24	5	3.3	A群-9　完形	129	109

表66　二の丸第17地点出土古銭観察表（2）
Tab. 66　Notes on coins at NM17 (2)

登録番号	出土場所	銭名	外形 (mm)	穿形 (mm)	重量 (g)	備考	図	図版
MC064	便槽遺構　埋土	寛永通寶（古寛永）	25	6	3.6	B群-1　完形	129	109
MC065	便槽遺構　埋土	寛永通寶（古寛永）	24	6	3.6	B群-2　完形	130	109
MC066	便槽遺構　埋土	寛永通寶（古寛永）	24	5	3.0	B群-3　完形	130	109
MC067	便槽遺構　埋土	寛永通寶（古寛永）	24	6	1.9	B群-4　一部欠損	130	109
MC068	便槽遺構　埋土	寛永通寶（古寛永）	24	6	3.5	B群-5　完形	130	109
MC069	便槽遺構　埋土	寛永通寶（文銭）	25	5	3.9	B群-6　完形	130	109
MC070	便槽遺構　埋土	寛永通寶（古寛永）	24	5	3.9	B群-7　完形	130	109
MC071	便槽遺構　埋土	寛永通寶（古寛永）	25	6	3.4	B群-8　完形	130	109
MC072	便槽遺構　埋土	寛永通寶（古寛永）	—	—	1.8	B群-9　一部欠損　酸化顕著	—	109
MC073	便槽遺構　埋土	不明	23	7	1.6	B群-10　一部欠損　酸化顕著		109
MC074	便槽遺構　埋土	寛永通寶（文銭）	25	6	3.3	B群-11　完形	130	109
MC075	便槽遺構　埋土	寛永通寶（文銭）	25	6	3.6	B群-12　完形	130	109
MC076	便槽遺構　埋土	寛永通寶（文銭）	25	6	3.2	B群-13　完形	130	110
MC077	便槽遺構　埋土	寛永通寶（古寛永）	25	5	3.6	B群-14　完形	130	110
MC078	便槽遺構　埋土	寛永通寶（文銭）	25	6	3.7	B群-15　完形	130	110
MC079	便槽遺構　埋土	寛永通寶（古寛永）	24	5	2.6	B群-16　完形	130	110
MC080	便槽遺構　埋土	寛永通寶（文銭）	25	6	3.6	B群-17　完形	130	110
MC081	便槽遺構　埋土	寛永通寶（古寛永）	25	6	3.3	B群-18　完形	130	110
MC082	便槽遺構　埋土	寛永通寶（文銭）	25	6	3.3	B群-19　完形	130	110
MC083	便槽遺構　埋土	寛永通寶（文銭）	25	6	3.8	B群-20　完形	130	110
MC084	便槽遺構　埋土	寛永通寶（古寛永）	24	6	3.4	B群-21　完形	130	110
MC085	便槽遺構　埋土	寛永通寶（文銭）	25	6	4.2	B群-22　完形	131	110
MC086	便槽遺構　埋土	寛永通寶（古寛永）	25	6	3.3	B群-23　完形	130	110
MC087	便槽遺構　埋土	寛永通寶（古寛永）	25	6	2.0	B群-24　完形	131	110
MC088	便槽遺構　埋土	寛永通寶（文銭）	25	6	2.3	B群-25　1/2欠損	131	110
MC089	便槽遺構　埋土	寛永通寶（新寛永）	23	6	2.9	B群-26　完形	131	110
MC090	便槽遺構　埋土	寛永通寶（新寛永）	23	7	2.5	B群-27　完形	131	110
MC091	便槽遺構　埋土	寛永通寶（古寛永）	25	6	4.1	B群-28　完形	131	110
MC092	便槽遺構　埋土	寛永通寶（古寛永）	24	6	3.4	B群-29　完形	131	110
MC093	便槽遺構　埋土	寛永通寶（文銭）	25	6	3.4	B群-30　完形	131	110
MC094	便槽遺構　埋土	寛永通寶（文銭）	25	6	3.8	B群-31　完形	131	110
MC095	便槽遺構　埋土	寛永通寶（新寛永）	23	7	2.2	B群-32　完形	131	111
MC096	便槽遺構　埋土	寛永通寶（古寛永）	25	6	3.2	B群-33　完形	131	111
MC097	便槽遺構　埋土	寛永通寶（文銭）	25	6	3.3	B群-34　完形	131	111
MC098	便槽遺構　埋土	寛永通寶（文銭）	25	6	4.0	B群-35　完形	131	111
MC099	便槽遺構　埋土	寛永通寶（古寛永）	24	5	2.7	B群-36　完形	131	111
MC100	便槽遺構　埋土	寛永通寶（古寛永）	24	6	2.5	B群-37　ごく一部欠損	131	111
MC101	便槽遺構　埋土	寛永通寶（古寛永）	25	6	3.0	B群-38　一部欠損	131	111
MC102	便槽遺構　埋土	寛永通寶（文銭）	25	6	3.3	B群-39　完形	131	111
MC103	便槽遺構　埋土	寛永通寶（古寛永）	24	6	2.4	ごく一部欠損	131	111
MC104	便槽遺構　埋土	寛永通寶（古寛永）	25	6	3.1	完形	131	111
MC105	便槽遺構　埋土	寛永通寶（古寛永）	25	6	2.0	ごく一部欠損	131	111

表67　二の丸第17地点出土煙管雁首観察表
Tab. 67　Notes on pipes (stems and bowls) at NM17

登録番号	出土場所	全体形状	火皿形状	接合方法	胴部アワセメ	全長 (mm)	火皿直径 (mm)	ラウ口直径 (mm)	図	図版
MO001	2号溝　青銅板取溝	Ⅱ C	2b	3	上	78.0	16.5	10.0	132	111
MO004	6 号溝　埋土 2 層	Ⅱ B	1b	3	左	62.0	13.5	9.0	132	111
MO005	9 号溝　埋土 2 層	Ⅱ B	1b	2	左	－	15.0	－	132	111
MO006	27号溝　埋土 2 層	Ⅱ B	1b	2	左	51.5	15.0	10.0	132	111
MO007	32号溝　能力埋土	Ⅱ B	1b	2	右上	89.0	13-14	6.0	132	111
MO009	5 号上坑　埋土	Ⅱ B	2b	2	左	48.5	15.0	9.0	132	111
MO013	19号十坑　埋土 5 層	Ⅱ C	1b	2	左	40.0	16	12.0	132	111
MO014	19号上坑　埋土 5 層	Ⅱ B	1b	2	左	54.0	13.0	8.0	132	111
MO015	19号十坑　埋土 5 層	Ⅱ B	1b	2	左	58.0	16.0	10.0	132	111
MO016	14号上坑　埋土 2 層	Ⅱ C	1b	3	上	60.0	17.0	13.0	132	111
MO019	28号上坑　埋土	Ⅱ C	2b	2	上	51.5	14.0	8.0	132	111
MO020	19号杭列　柱2	1	－	－	左	－	－	11.0	132	111

表68　二の丸第17地点出土煙管吸口観察表
Tab. 68　Notes on pipes (mouthpieces) at NM17

登録番号	出土場所	全体形状	全長 (mm)	ラウ口直径 (mm)	吸口直径 (mm)	図	図版
MO002	2 号溝　埋土 2 層	Ⅱ B	－	10.0	－	132	111
MO003	2 号溝　青銅板取溝	Ⅱ B	－	10.0	－	132	111
MO008	69号溝　埋土	Ⅱ B	53.0	10.0	3.0	132	111
MO010	5 号上坑　埋土	Ⅱ B	64.0	11.0	7.0	132	111
MO011	5 号上坑　埋土	Ⅱ B	60.0	11.0	3.5	132	111
MO012	不明	Ⅱ B	62.0	12.0	4.5	132	111
MO017	19号上坑　埋土 5 層	Ⅱ B	58.0	9.0	3.0	132	111
MO018	19号十坑　埋土 5 層	Ⅱ B	61.5	10.0	4.0	132	111

表69　二の丸第17地点その他の金属製品観察表
Tab. 69　Notes on various metal implements at NM17

登録番号	出土場所	種類	材質	備考	図	図版
MO021	B11　2層	巻	銅		133	112
MO022	B11　3層	巻	銅		133	112
MO023	14号上坑　埋十1層	巻	銅		133	112
MO024	14号上坑　埋十2層	巻	銅		133	112
MO025	2号井戸　崩方	水差し把手	銅		133	112
MO026	2号井戸　埋十2層	釘	銅		133	112
MO027	7号十坑　確認面	釘	銅		133	112
MO028	29号上坑　埋十	釘	銅	飾り留め金具か？	133	112
MO029	7号上坑　確認面	板状金具	銅		133	112
MO030	6号溝　埋土2層	飾り金具	銅		133	112
MO031	35号溝　埋十	円形金具	銅		133	112
MO032	19号十坑　埋土5層	水洗	銅		133	112
MO033	11号十坑　埋上	飾り金具	銅		133	112

表70　二の丸第17地点出土ガラス製品観察表
Tab. 70　Notes on glass implements at NM17

登録番号	出土場所	種類	特徴	図	図版
G001	1層・撹乱	巻	幅0.6cm	134	113
G002	1層・撹乱	巻	幅1.0cm	134	113
G003	1号溝　右組板取埋上	巻	幅0.5cm	134	113
G004	1号溝　埋十上部	巻	幅1.5cm	134	113
G005	3層	巻	幅0.8cm	134	113
G006	8号十坑　埋上	巻	幅0.6cm	134	113
G007	3層	棒	—		113

表71　二の丸第17地点出土石器・石製品観察表
Tab. 71　Notes on stone implements at NM17

登録番号	出土場所	種類	石材	特徴	図	図版
S001	1号井戸　埋十上部	剥片	頁岩	微細な剥離がみられる	133	113
S002	4層	剥片	頁岩	二次加工がみられる	134	113
S003	6号上坑　埋土	火打石	メノウ		133	113
S004	1層・撹乱	火打石	メノウ		134	113
S005	2層	火打石	メノウ		134	113
S006	1層・撹乱	碁	蛇紋石	隅の左辺側にくぼみがみられる	134	113
S007	1号溝　右組板取埋十1層	不明	砂岩		134	113
S008	14号十坑　埋上2層	不明	軟石		134	113
S009	1層・撹乱	温石	不明		134	113

6．考察

(1) 検出遺構の検討

第17地点における検出遺構については、大別４段階、細別10期に分けて、本章４．において報告してきた。これらの各期の遺構について、文献記録・絵図との関連で考えられる点について検討し、遺構の変遷についてまとめておきたい。また、遺構の様相から派生する課題について、若干の検討を加えてみたい。

①文献記録等に見える二の丸地区の変遷

最初に、二の丸地区の土地利用や建物配置に大きな変化をもたらしたと考えられる、文献記録などに見える事柄を確認しておきたい。年表風に抜き出すと次のようになる。

慶長５年～慶長末年頃（1600年～1614年頃）

	伝伊達宗泰（初代藩主伊達政宗の四男）の屋敷の造営
元和６年（1620年）	五郎八姫（政宗の長女）の帰仙に伴い、伝宗泰屋敷の北側に西屋敷を造営
寛永15年（1638年）	二代藩主伊達忠宗により、伝宗泰屋敷の区域に二の丸を造営
寛文元年（1661年）	五郎八姫死去、旧西屋敷は大鱗院様元御屋敷と呼ばれるようになる
元禄年間（1688年～1700年）	二の丸改造、旧西屋敷の範囲に中奥が拡大
文化元年（1804年）	落雷による火災のため二の丸全焼・再建
明治２年（1869年）	版籍奉還
明治４年（1871年）	廃藩置県
明治15年（1882年）	火災による旧二の丸建物群全焼

これ以外にも、地震などの天災による被害と、その復旧の記事があるが、二の丸全体に影響を及ぼすほどのものではないと考えられる。また、後に詳述するが、今回の17地点の調査区は、西屋敷が置かれていた区域よりは南側にあたり、伝伊達宗泰の屋敷が関連するものと考えられる。そのため、西屋敷の様相については、直接の関連は考えなくても良いものと思われ、必要な範囲でのみ触れることとする。

これらの文献記録に見られる動向と対比させつつ、次に各期の遺構について検討を加えていきたい。その際、基本層３層が文化元年の火災に伴う整地層、基本層２層が明治15年の火災に伴う整地層であることについては、出土遺物の年代観から確実と考えられることから、これを基準として検討することとしたい。また本章３．(３)で検討したように、Ⅲａ期は元禄年間の二の丸大改造時のもの、Ⅲｂ４期は文化元年の火災直後の一時的な段階、Ⅳｃ期は明治時代に下るものと考えられる。これらの時期については、前述した以上の詳しい検討は難しいため、ここでの検討対象からは除外することとしたい。

②二の丸造営以前の遺構

今回の調査で、寛永15年（1638年）の二の丸造営以前に遡るのは、Ⅰ期である。二の丸造営以前には、伊達政宗の四男である伊達宗泰の屋敷が存在したと伝えられる。伊達宗泰の屋敷については、伝聞に近い記録があるだけで、その真偽は明確でない。また、本丸造営に近い時期からこの区域が使われていたとしても、その全ての期間が伊達宗泰の屋敷であったとは考え難い。そのため、ここでは伝伊達宗泰の屋敷と呼称する。なお、伝伊達宗泰の屋敷の北側には、元和６年（1620年）以降、伊達政宗の長女五郎八姫の西屋敷が置かれている。

二の丸造営以前に遡る遺構は、第９地点の調査において、まとまって発見されている（年報８）。また、第９地点に隣接する第４地点においても、関連する遺構が検出されている（年報５）。これらについては、以前に検討を加えたことがある（年報９）。第９地点で検出された二の丸造営以前に遡る遺構は、Ⅰａ期・Ⅰｂ期・Ⅱ期に細分されているが、それらの詳細な時期は明確にはなっていない。その中でもⅠｂ期が、もっとも様相が明ら

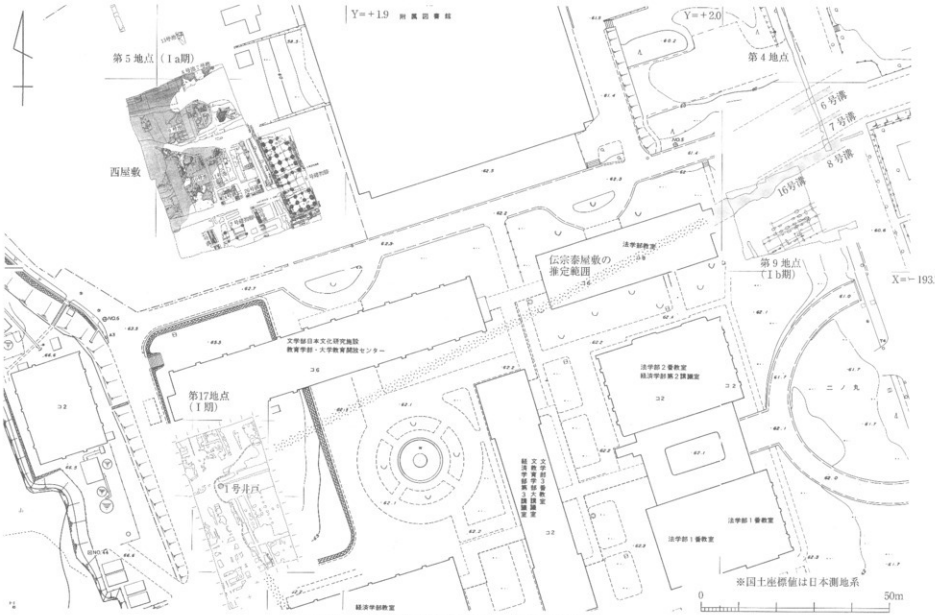


図135　二の丸第17地点Ⅰ期の遺構と周辺の調査区の関係
Fig.135　Distribution of features around NM17(phase Ⅰ)

かで、調査区南よりに掘立柱建物が多数あり、北側には16号溝が存在する。この第９地点で検出された二の丸造営以前に遡る建物などの方向は、北で28～30度西偏している。第９地点の16号溝は、第４地点において検出された８号溝がその延長に相当する。さらに、この８号溝より新しい段階になるが、８号溝の北側に浅い堀状の部分があり、その中に小規模な６号溝と７号溝が並んでいるのが検出されている。これらの溝は、伝伊達宗泰屋敷の北端を区画するものと考えられる。この第９地点の16号溝を、北から約28度西偏した方向で今回の調査区の方へ延ばすと、Ⅰ期の段差の位置とほぼ対応してくる（図135）。この段差は、１号井戸の脇ではほぼ直交する方向に折れ、南に延びている。この段差は、切土を行い、平坦面を作出したものと考えられるが、その範囲が、第９地点で検出された遺構と、何らかの関係を有していると考えることができるであろう。ただし、段差の周辺に、第９地点の16号溝の延長や、他の溝・塀などの区画施設が延びていた痕跡は認められない。切土による整地の外側は、あまり手が入れられない状況であったものと思われる。

以上の点から、今回の調査区で検出された段差に囲まれた区域は、第９地点などで検出された伝伊達宗泰屋敷の範囲に含まれるか、その外側であっても、関連して使われた区域であったと考えられる。しかし、今回の調査区で検出された確実な遺構は、井戸１基だけであった。後世の遺構による破壊も多く、遺構がこれだけと断定できるわけではないが、建物などの施設はあまり造られていなかった区域にあたると考えて良いであろう。

伝伊達宗泰屋敷の北側に、元和６年（1620年）以降存在した西屋敷の遺構は、第５地点の調査におけるⅠａ期が相当する（年報６・７）。東よりの部分で陵石建物が、西よりの部分では複雑につながる池からなる庭園が広がっている。この西屋敷の建物は、後の二の丸と同じ、24～25度西偏した方向で造られている。伝伊達宗泰屋敷と五郎八姫の西屋敷では、造営基準となる方向が異なる。両者で方向に違いがあるため、屋敷の境界部分がどのようになっていたのかは、次の二の丸と西屋敷が併存する時期の境界を考える上で重要であるが、現状では判然としない。少なくとも、今回の調査区の中にまで、西屋敷の施設が延びたり、境界となる施設が延びることはないものと考えられる。

③改造前の二の丸期の遺構

寛永15年に二の丸が造営され、元禄年間に大改造される前の段階は、今回の調査ではⅡ期に相当すると考えられる。二の丸の北側には、五郎八姫の西屋敷が存在し、寛文元年（1661年）の五郎八姫の死去以降は、「天麟院様元御屋敷」と呼ばれ、蔵や作業場など、二の丸に付随する実務的な建物が置かれる。図136には、今回の調査地点はⅡ期、第５地点は「天麟院様元御屋敷」の時期に相当すると考えられるⅠｂ期（年報６・７）、第９地点は改造前の二の丸期と考えられるⅢ期の遺構（年報８）を掲載した。

元禄年間の改造が行われる前の状況を描いた絵図は、「御二丸御指図」「青山公造制木写之略図」が知られている。「御二丸御指図」は、17世紀中頃と推定されるものであるが、二の丸でも表向きの部分を描いた絵図であり、中奥部分は描かれていない。そのため、今回の調査地点を検討するためには使えない。「青山公造制木写之略図」は、仙台城全体を描いたもので、二の丸も中奥を含む全体が描かれている（図137）。ただ本図に関しては、成立の時期やその性格をめぐって、様々な意見が出されている。それぞれの意見についてここで詳細に検討する余裕はないが、存在しなかった本丸天守閣が描かれているなど、実現されなかった計画段階のものを含んでいることは確実である。その一方で、文献記録などと良く対応する部分もあり、ある程度は実態を伝えている可能性はある。しかしその場合でも、細部がどこまで正確かについては別問題であり、慎重に扱う必要がある。

これらの他に、仙台城全体の状況が判るものとして、正保２・３年（1645・46年）の「奥州仙台城絵図」がある。城下全体を描いた絵図だが、仙台城を描いた最古の絵図で、西屋敷が唯一描かれた絵図でもある（図137）。

まず、南北の位置関係を、これらの絵図を参考にしつつ、検討してみたい。二の丸の北辺が、どのように延びていたのかという問題である。

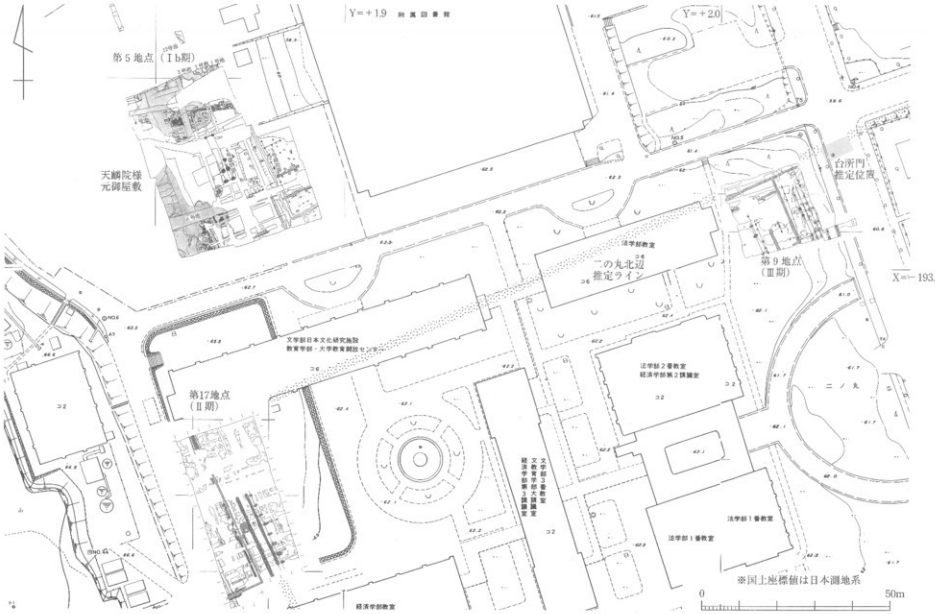
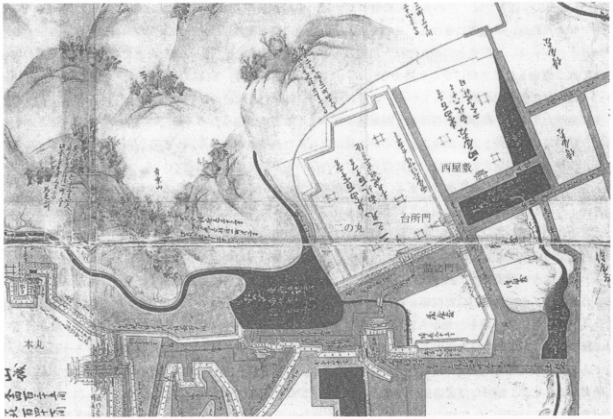
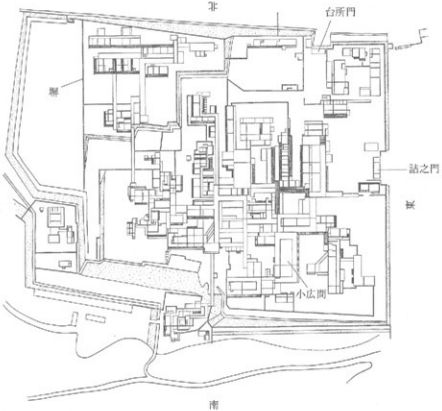


図136　二の丸第17地点Ⅱ期の遺構と周辺の調査区の関係
Fig.136　Distribution of features around NM17(phase Ⅱ)



1．正保２・３年（1645・46年）「奥州仙台城絵図」（『絵図・地図でみる仙台』より）



2．「青山公造制水写之略図」（『近世武士住宅』より）

図137　二の丸第17地点調査区周辺の絵図（1）
Fig.137　The picture maps around NM17(I)

「正保二・三年図」では、二の丸と西屋敷の間には、道路があるものの、それをはさんで両者は接している。両者の間の道路は、一直線に延びる。二の丸正門である詰之門の前の道路と、西屋敷の間の道路は、直交するように描かれている。西屋敷と二の丸では、造営の基準となる方向が、北で24～25度西偏することから、この場合は二の丸の北辺も同じ方向になると考えられる。一方、「木写之略図」では、二の丸北辺の台所門の西側は、途中からやや北に張り出す形となっている。両者の絵図では、二の丸北辺の延び方が異なっている。

先に述べたように、伝伊達宗泰屋敷と西屋敷の基準となる方向が違うため、第三の想定も可能である。すなわち、伝伊達宗泰は北から28～30度西偏するが、後に造られた西屋敷は北から24～25度西偏する。西屋敷を造営した際、伝伊達宗泰屋敷との境界は、先に造られていた伝伊達宗泰屋敷に合わせて、28～30度西偏して造られ、二の丸もそれを踏襲したという想定である。このように、二の丸の北辺が伝伊達宗泰屋敷の北辺を踏襲していたとすると、今回の調査区の北端で検出された便槽遺構が、二の丸の外側に出てしまい、西屋敷との間の道路の付近に位置することとなる。したがって、第三の想定は、検出遺構の様相から見て無理がある。

これまでの調査成果と絵図との対比から、第９地点の北東側に、二の丸の裏門である台所門があったと想定される。第９地点の調査では、調査区の北端近くに、東西に延びる、溝の中に柱を立てた塀と考えられる遺構が検出されている。台所門との位置関係から、この東西方向の塀が、改造以前の二の丸北辺の塀である可能性も考えられる。そこで、この塀を、北から24.5度西偏する方向で延ばしたのが、図136である。この場合、第９地点の塀の延長が、今回の調査区北端のあたりに位置することとなる。便槽遺構が、この北辺の中にかろうじて入る位置である。二の丸の塀は頻繁に造り替えられており、この東西方向の塀が、便槽遺構と同時存在したかどうかは不明である。また、微妙な位置関係のため、基準の方向がわずかにずれると、状況は異なってくる。

一方、「木写之略図」のように、二の丸北辺の塀が途中から北へ張り出していたのならば、便槽遺構は確実に二の丸の範囲内に入ることとなる。しかし、二の丸北辺が張り出すならば、西屋敷が二の丸と同じ方向で造られているのに、なにゆえ両者の境界に異なる方向の部分が造られたのかを説明することが困難となる。

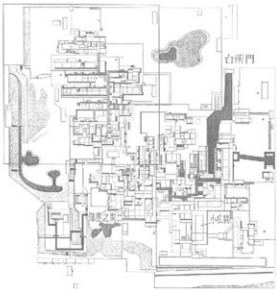
現在知られている情報からは、この両者のいずれが正しいのかを決定することは難しいと言わねばならない。しかし、検出遺構の状況から見て、今回の調査区は二の丸の範囲に含まれているものと考えておきたい。

東西の位置関係を、次に見てみたい。「木写之略図」には、中奥建物の西側に、南北に一直線に伸びる塀と思われる記載がある。図137下段の図に、塀として注記したものである。この塀を南に伸ばすと、鉤の手状に土手が描かれた角に突き当たる。この鉤の手状の土手の南東側には、伊達家の祠堂である「因縁殿」が建てられている。この「因縁殿」の部分は、「正保２・３年図」や、18世紀以降の絵図に、常に同じように描かれている。次に検討する、改造後の二の丸絵図と検出遺構の対比成果では、今回の調査区は中奥西端の塀の部分に相当すると考えられる（図140）。この対比に用いた「文化元年図」で「因縁殿」との位置関係を見ると（図138）、「因縁殿」北東の角は、今回の調査区よりさらに東側になり、「木写之略図」に見られた西端の塀も、今回の調査区よりさらに東側の位置になる。したがって今回の調査区は、「木写之略図」に対比すると、中奥建物西側の塀より、さらに西側の、張り出した部分に相当すると考えられる。先に述べたように、「木写之略図」がどこまで正確であるかについては問題が残る。しかし、元禄期の改造前の段階では、今回の調査区が、建物が多数建てられた範囲より西側にあたることは間違いないであろう。

④改造後の二の丸期の遺構

Ⅲｂ期とⅣ期が、二の丸改造後の時期に相当すると考えられる。この中で、文化元年の火災に伴う、一時的な段階と考えられたⅢｂ４期とⅣａ期、明治以降と考えられるⅣｃ期を除いた時期の遺構について、絵図との対比を試みたい。元禄年間の二の丸大改造後の状況を描いた絵図はいくつか知られているが、その中で「文化元年御造営御絵図写」が、最も詳細なものである。しかも、他の絵図が、建物を中心にして外周の塀まで描かないもの

下図の範囲



「文化元年御造営御絵図写」（1804年）
宮城県図書館蔵
絵図に記された一間ごとの方眼をもとに作成

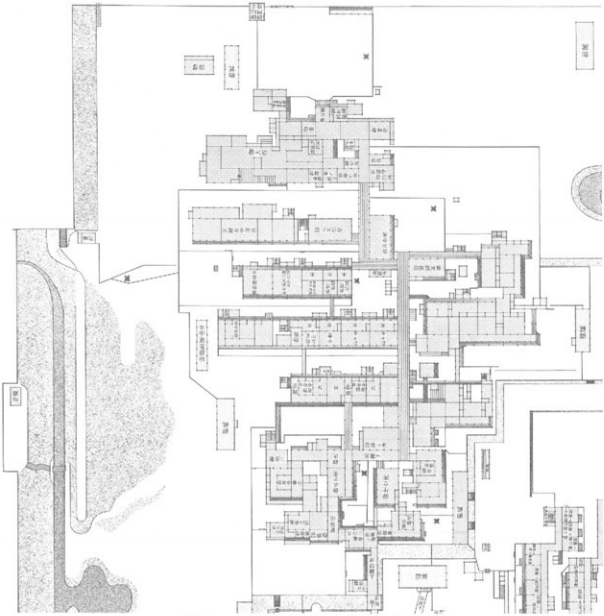
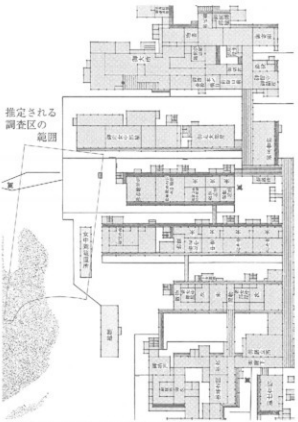
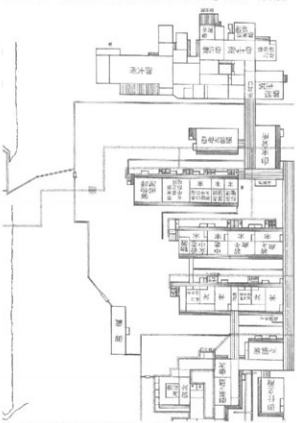


図138　二の丸第17地点調査区周辺の絵図（２）
Fig.138　The picture maps around NM17(2)

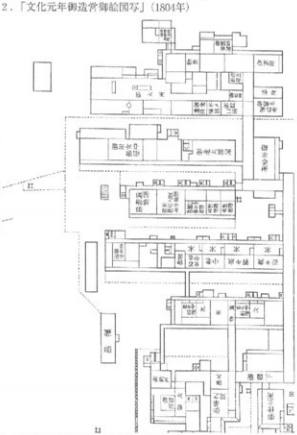
1.「享和二年之御家作御絵図写」(1802年、『仙台城』より、一部改変)



2.「文化元年御造営御絵図写」(1804年)



3.「御二丸御家作水蔵御絵図」(『仙台城』より、一部改変)



4.「御二丸御城中並鍋中奥ヶ水抜諸図絵図」(嘉永6年・1853年、『仙台城』より)

図139　二の丸第17地点調査区周辺の絵図 (3)
Fig.139　The picture maps around NM17(3)

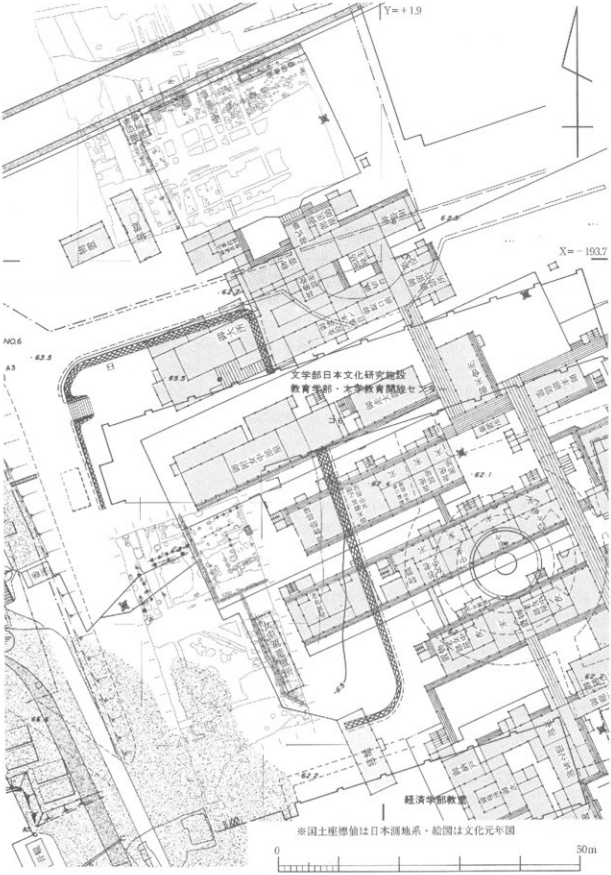


図140　二の丸第２・５・17地点と絵図との対比
Fig.140　Location of NM2, NM5 and NM17 corresponding to a picture map

が多い中で、「文化元年図」では外周の塀まで描かれている。また「文化元年図」は、1間ごとの方眼の上に記されており、それを基準にして、正確な縮尺の図を作成することができる。同様に1間ごとの方眼に描く「享和二年之御家作御絵図写」は、二の丸外周の塀よりも、さらに外側の様相まで描いている点で貴重である。しかし、個々の記載が「文化元年図」より粗く、方眼も途中でずれるなど、細部で問題がある。そのため、「文化元年図」を基本として、検討を加えてみたい。図138～140では、絵図に記された方眼をもとに、建物などの施設の位置関係を写真から読みとり、6尺3すを1間とした500分の1縮尺の上で作図したものを使用した。なお、本書の図版上の縮尺は、図138・139が1,000分の1、図140が500分の1となっている。図139には、「文化元年図」を含む4点の絵図を示した。「文化元年図」以外の3点は、ほぼ同じ縮尺になるように調整して掲載した。

これまでの調査で検出した遺構と絵図との対比は、第2地点の調査区が二の丸の中心的な建物である小広間の裏側にあたり、5地点で発見された門跡が中奥北側の門に相当するという想定をもとにしている（年報9）。1間を6尺3すとして、第2地点と第5地点の遺構と絵図との関係を見ると、南北ではほとんど一致し、東西で2間ほどの違いでおさまることが判っている。より今回の調査区に近い第5地点の中奥北側の門を基準として、北で24.5度程西偏する方向で、「文化元年図」を今回の調査のⅣb期の遺構と対応させたものが図140である。若干のずれはあるものの、中奥西端の塀が、Ⅳb期の1～5号塀の位置に、良く対応すると言って良いであろう。特に塀が斜めに折れる状況は、他に全く見られず、この点からもこの対比の妥当性を示すものであろう。

図139の4．の絵図は、嘉永6年（1853年）のものである。同図の3．は、正確な年代は判らないが、建物の記載が「文化元年図」や「嘉永6年図」と共通することから、これらに近い年代と考えられる。いずれも中奥西端の塀は、ほぼ同じ位置で描かれている。文化元年の火災から再建されて以降の時期は、Ⅳb期に相当するが、1～5号塀を改修して使い続けていた可能性が高い。したがってこれら19世紀の絵図に、描かれた塀が、1～5号塀や、それを改修したものに相当するものと考えられる。

二の丸絵図には、溝を描いたものも存在する。残念ながら「文化元年図」では、溝は描かれていない。図139の1．と3．に、絵図に描かれた溝の位置を、スクリーントーンで追加した。19世紀の状況を、図139の3．で見てみたい。塀を横切り、御の手状に屈曲する溝が描かれ、途中に桝状の施設も描かれている。しかし今回の調査においては、これに相当するような遺構は、Ⅳb期では検出されていない。実際の位置関係が絵図とは違うのか、現状では不明とせざるを得ない。

文化元年の火災以前の状況を示す絵図として、図139の1．の「享和二年図」がある。中奥西端の塀の状況は、19世紀のものと基本的に類似する。しかし、塀が斜めに延びる所から、御の手状に屈曲するまでの距離に違いがあるなど、細部においては異なる部分もある。文化元年の火災以前の状況を示すⅢb1～Ⅲb3期の個々の遺構が、この「享和二年図」に描かれたどの施設と対応するのかを指摘することは難しい。どれかの遺構を対応するものと考えたとしても、他の遺構が合わず、全体が良好に対応する形にはならない。しかしながら、調査区の中を南北に、塀と考えられる柱列が延びている点から見て、中奥西端の塀の付近というおおまかな位置関係は、間違いがないものと考えられる。

⑤文化元年の火災とⅣa期の建物群

文化元年（1804年）の火災は、『稻山公略記』（『仙臺叢書第八巻』仙臺叢書刊行會編纂・伊達家譜抜粋として所収のもの）によると、次のように記録されている。

「文化元年六月廿四日。大雷雨。御國許所々雷落。晝八時御城御座之間へ雷落。當火大風雨にて。詰之御門之内御殿中不殘。御中奥迄御焼失。暮六時鎮る。」

この記録によると、午後2時頃に御座之間に落雷して出火し、中奥まで焼失し、鎮火したのは午後7時頃であった。詰之御門は、二の丸の北門で、東辺に存在する。出火した御座之間は、二の丸の中でも南西端に近い場所

にある（図138）。一方中堀は、北西側に広がっている。二の丸建物群の南端から北端まで、詰之門の内側はほぼ全焼したものと考えて良いであろう。

全焼した二の丸が、ほぼ元の通り再建されることは、これ以降の絵図で明らかである。その際、全体が再建されるまでには一定の時間を要したことが、容易に想像される。『伊達治家記録』には、文化6年（1809年）4月に、「仙台城二丸落成」という記載があり、これが再建工事の完了を示すものと考えられ、5年近くの年月を要している。寛永15年に二の丸が造られて以降、本丸の機能のほぼ全ては二の丸に移っており、再建までの期間、何らかの施設を暫定的に建設することは、避けられないものと思われる。元通りに再建するということは、火災前に建物が存在した区域では、再建工事が行われることを意味する。工事の進捗状況に合わせ、暫定的な施設を移していった可能性も考えられるが、最も簡単な方法は、火災前に建物が存在しなかった区域を利用して暫定的な建物を建てることであろう。今回の調査区は、二の丸西端の塀付近から、その外側と考えられる区域で、建物はほとんど建てられていない。Ⅳａ期に建物が多数建てられていることは、このような再建工事の妨げとならない区域を使って、復興までの暫定的な建物を建設した結果と考えることができる。

このⅣａ期の建物の中でも、1号建物と2号建物については、その様相が比較的良好に判明した。

1号建物は、隣接する第1地点での検出遺構と合わせて検討した結果、その規模が2.5間×7間以上という、細長い建物になることが明らかとなった。方眼が描かれ、建物寸法が判明する絵図を見ると、2間半程度の幅で細長い建物としては蔵や物置がある。1号建物の外周は、溝に根固め石を詰め込んだ上に礎石を据える構造である。極めて堅固な基礎構造と見なすことができ、重量を支えるための工夫と見ることができるであろう。以上の点から見て、1号建物は土蔵のような建物を想定することができるであろう。

報告の際に指摘したが、2号建物には2種類の礎石の据え方が確認できた。両者は規模の大小と根固め石の有無で区別され、前者が建物全体の重量を支える主要な柱の礎石と考えられる。両者の礎石の分布は図58の模式図に示したが、この主要な柱の位置関係から、建物の構造を検討することができる。建築史的検討を加えていないので、確実ではないが、多数の部屋や廊下などが、複雑に連なった建物と考えることができるであろう。

⑥建物の柱間寸法

今回の調査では、Ⅱ期2棟（11・12号）、Ⅲｂ2期2棟（9・10号）、Ⅲｂ3期2棟（4・5号）、Ⅳａ期4棟（1・2・3・8号）、Ⅳｂ期1棟（7号）と、Ⅳｃ期を除くと合計11棟の建物が確認された。これらはいずれも、柱間寸法は1間6尺3寸を基準として造られている。またⅣｂ期の9号柱列も、同様の柱間寸法で建物の可能性がある。なお2号建物には、一部4尺2寸となる部分があるが、これは建物に附属する施設と推定される。

これまでの二の丸地区、二の丸北方武家屋敷地区の調査では、当初1間＝6尺5寸であったものが、6尺3寸へ変わることが確認されている。元和6年（1620年）に造られた五郎八姫の西屋敷では、大規模な礎石建物が検出されており（年報6）、6尺5寸が使われていることは確実である（年報9）。それに対して二の丸期では、良好な事例が少なく、遺構から直接検討することが難しかった。ただ、検出遺構と絵図との対比では、6尺3寸と考えた方が、うまく対応することが判っている（年報9）。しかし6尺3寸であった場合でも、二の丸造営時に遡るのか、元禄の改造時なのかは、明確でない。一方、二の丸北方に広がる武家屋敷地区の、第4地点の調査においては、少なくとも17世紀末までには、6尺3寸へ変化していることが確認されている（年報13）。

このように、元和6年（1620年）までは確実に6尺5寸が使われ、少なくとも17世紀末までに6尺3寸へ変化することが、これまでに判明している。問題は、この間のどの時期に、柱間寸法が変化するのかである。

今回の調査結果では、Ⅱ期の11号・12号建物が6尺3寸と考えられ、17世紀末より遡る可能性が高くなってきたこととなる。しかし、両建物とも検出範囲が狭く、この点で確実性が乏しい。また11号・12号建物の両方とも、切り合い関係から、Ⅱ期の中でも新しい時期に下る可能性が高いことから、元禄年間の改造以前であっても、ど

こまで遡るのか判らない。したがって、元禄年間の改造以降は、1間＝6尺3寸が基準となっていたと考えて良いが、それがどこまで遡るのかについては、なお確実な資料の蓄積をまって検討することが必要であろう。

⑦塀・柱列の柱間寸法と構造

今回の調査で検出した1～7号塀としたものは、溝の中に柱を立てた塀と考えられる。柱列のほとんども、塀と考えられる遺構である。これらには、様々な柱間寸法が見られるので、次に検討してみたい。明治以降に下るⅣc期の1～5号柱列は、検討対象から除外し、それ以外のものの柱間寸法を整理すると次のようになる。なお5号塀は、検出範囲が極めて限定されており、柱間寸法は不明である。

Ⅱ期　4尺6寸：6号塀・7号塀　9尺2寸：25号柱列

Ⅲb1期　4尺2寸：23号柱列　4尺5寸：24号柱列（一部2尺5寸程度）
5尺1寸：21号柱列　約8尺：22号柱列

Ⅲb2期　5尺2寸：20号柱列

Ⅲb3期　4尺2寸：19号柱列（一部3尺5寸）　5尺：16号柱列（一部4尺5寸）
5尺2寸：17号柱列　6尺：18号柱列（控え3尺5寸）

Ⅳb期　3尺8寸：10号柱列
4尺：1号塀・2号塀・3号塀・4号塀・6号柱列・7号柱列・8号柱列・11号柱列
13号柱列（控え3尺5寸）・15号柱列
4尺8寸：14号柱列　5尺：12号柱列

一部、柱間寸法が大きいものがあるが、それらを除くと、4尺から5尺弱のものがほとんどを占める。これが、塀の標準的な柱間寸法であったと考えて大過ないであろう。二の丸北方武家屋敷地区第4地点の調査においても、多数の柱列が検出されているが、おおむね同じ傾向を示す（年報13）。ただ、4尺のように尺単位でまとまる場合は良いが、端数が出る理由については、判然としない。その中で4尺2寸については、合理的な説明が可能である。すなわち、1間＝6尺3寸を基準としていた場合、2間は12尺6寸となる。この2間分を3等分すると4尺2寸となる。実際に、Ⅳa期の2号建物の東端部分に、一部4尺2寸の柱間寸法が採用されている。

補修の可能性がある柱列を除くと、塀や柱列は、いずれも掘立柱式で、柱が深く据えられる傾向がある。建物と異なり、塀のように一本の柱で構造を支える場合には、柱を深く埋設することで自立させる必要がある。たとえ控え柱を伴う場合でも、両側に控え柱を設けない限り、構造上の弱点は克服できない。このような構造上の問題から、塀は掘立柱形式にならざるを得ず、柱を深く埋め込む必要があったと考えられる。

掘立柱形式の場合、柱が腐朽することは免れず、一定期間を経過すると建て替える必要があったものと考えられる。建て替えに際しては、もともと存在した塀を残したまま、少しずれた場所に新しい塀を造った後に、古い塀を取り壊したものと考えるのが自然であろう。二の丸の外郭線は、ほとんどが塀のみで構成されており、このような手順を取らないと、工事中は遮るものが存在しないこととなるからである。塀が微妙に位置をずらしながら、頻繁に建て替えられている場合が多いことは、このような理由によるものと考えられる。

Ⅳb期の　1~4号塀には、柱底面が掘り方底面に接する当初から据えられたと考えられる柱の脇に、掘り方を浅く掘り直して据えられた柱が多数検出されている。これらは、当初据えられた柱をそのままにして、脇に補修のための柱を追加した可能性が考えられる。また、塀に平行して、なおかつ柱の位置を合わせて柱列が検出される場合もあり、これらも補修のための控え柱の可能性を考えて良いだろう。このように補修の痕跡が発見されているのは、Ⅳb期のものに限られている。塀の建て替えが行われなくなり、補修によって維持されるようになったことを示すものであろう。江戸時代後期の、仙台藩の財政的窮乏が反映しているのかもしれない。

(2) 陶磁器・土器の検討—主に18世紀末葉～19世紀初頭の一括資料をめぐって

今回の調査地点では、年代を推定できる遺構内出土の一括資料として、2号溝（Ⅲｂ4期）、14号土坑（Ⅲｂ4期）、B・C－10～12区3層一括（Ⅲｂ4期とⅣa期の間）から、18世紀末葉から19世紀初頭の遺物が比較的まとまって出土した。当該期の資料は、これまでの調査では、仙台城跡二の丸第9地点の2号池からある程度まとまって出土している（年報8）。さらに、これについては『年報9』において、これまでの調査で出土した資料を総括してまとめており、この時期の陶磁器類についても分析が加えられている。しかし、他の時期の資料から比べると、18世紀末葉から19世紀初頭の時期は量的にも少なかったことから、今回出土した資料を用いて再検討を試み、陶磁器類の傾向をとらえていきたい。また、年代としては若干古い18世紀後葉頃にあたるが、9・32号溝（Ⅲｂ2期）についても比較として一緒に検討していく。二の丸地区におけるこれまでの調査との比較には『年報9』、武家屋敷地区では『年報13』でまとめたデータを用いるので、併せて参照されたい。土師質土器皿の検討においては、これらの遺構以外にも、7号土坑（Ⅲｂ2期）、5号遺物（Ⅲｂ3期）、19号土坑（Ⅲｂ3期）からも土師質土器がまとまって出土していることから、比較資料として扱っている。なお、用いている数値は全て接合、同一個体の識別を行なった後の破片数である。

①陶磁器・土器の種類別組成の検討

本調査地点14号土坑、3層一括、9・32号溝、2号溝出土の陶磁器・土器を、磁器、陶器、土師質土器（皿）、土師質土器（皿以外）、瓦質土器、軟質施釉陶器の6種類に分け、それぞれの比率を検討した（図143）。比較対象としたのは、仙台城跡二の丸第5地点、第9地点出土の各時期の一括資料と、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第4地点10号土坑出土資料である。

いずれの時期においても、二の丸跡出土の資料では、土師質土器皿の割合が高いことが挙げられる。特に17世紀末葉以降では全体の半数以上といった高い割合で安定した比率を占め、8割以上を占める場合もある。第17地点出土資料においても、この傾向は変わりなく、9・32号溝では土師質土器皿が7割強を占め、2号溝、14号土坑でも高い割合で出土している。比較的比率の小さかった3層一括でも48.0%と半数弱を占めている。二の丸地区のこれまでの調査においては、18世紀後葉の資料（第9地点15・16号土坑）、あるいは18世紀末葉から19世紀初頭（第9地点2号池）の資料では、それ以前の17世紀末葉、18世紀前葉に比べると、土師質土器皿が約55%と若干低くなる傾向にあった。しかし、今回の資料を加えることによって、18世紀末葉～19世紀初頭の時期においてもかなり高い割合で土師質土器皿が出土していると言える。それぞれの遺構の特徴により、出土遺物にも多少の差がみられることが考えられる。しかし、磁器、陶器、土師質、軟質施釉陶器の割合としては、画期となるような劇的な変化は確認できない。3層一括では陶器が46.0%を示し、土師質土器皿とほぼ同程度の高い割合で存在している。これは、3層一括では陶器の灰釉丸碗や灰釉小碗などの出土が特に多かったことに起因しており、3層一括の特徴と考えられる。

②陶磁器の器種組成の検討

磁器、陶器について、それぞれの器種別の比率を検討した（図144・145）。比較対象として、仙台城跡二の丸第5地点、第9地点出土の各時期の一括資料と、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第4地点10号土坑出土資料を用いている。

磁器では、『年報9』で指摘されているように、18世紀前葉から19世紀初頭にかけては比較的安定した組成を示している。特に碗類については、肥前産の磁器碗が普及したことによって18世紀代には碗類が高い比率で安定している。第9地点の資料においては、18世紀後葉では45.2%、18世紀末葉から19世紀初頭で47.9%を示していた。第17地点出土資料においてもその傾向は変わらず、9・32号溝では40.4%、3層一括では59.4%と、碗類が高い

比率で安定した割合を占めている。碗類のほとんどは、飯碗として使用されたと考えられる丸型の中碗である。18世紀後葉頃から多く見られるようになる広東碗や腰折碗などは、今回のこの時期の資料にはほとんど含まれなかった。また、19世紀中葉になると碗類の占める割合が急激に高くなるが、18世紀末葉から19世紀初頭の時期では、19世紀中葉にみられるような圧倒的増加の傾向は現われていない。皿類に関しては、18世紀前葉頃まではむしろ減少傾向にあったが、18世紀後葉、18世紀末葉から19世紀初頭の資料群では、碗類よりは少ないものの安定した割合を示していた。第17地点資料群では、皿類は約20%程度の割合を示しており、この時期にはある程度の割合を保っていることが確認できる。第17地点資料の皿類では、大皿は見られず、小中皿がほとんどを占め、それに若干の極小皿が加わるといった様相を示している。2号溝では碗類よりも皿類の割合が高くなっているが、これは、2号溝では特に小中皿の出土量が多かったためである。その他の器種では、鉢類、袋物類などはいずれの時期においても数%を占める程度である。特に袋物類としてまとめた瓶類や火入・灰吹などは、9・32号溝で瓶類が数点出土している以外は、磁器製のものは確認できなかった。

陶器においても、17世紀末葉以降、多少の割合の変化はみられるものの、碗類が高い割合で安定している。特に18世紀後葉、18世紀末葉から19世紀初頭にかけては約35～45%を示しており、磁器と同様に碗類の占める比率が高い。第17地点の資料についても、これとほぼ同様の割合を示している。特に14号土坑、3層一括などでは50%前後といった非常に高い比率を示している。14号土坑、3層一括からは、大堀相馬産の灰釉丸碗や灰釉小碗がまとまって出土している。灰釉小碗の増加は、この時期の特徴の一つに挙げられる。また、碗類の比率の最も高かった3層一括では、大堀相馬産とともに、京・信楽産の色絵丸碗の出土も比較的多かった。皿類については、17世紀末葉以降いずれもおおよそ10%以下程度の比率でしか存在しておらず、皿類は磁器製品が主体を占めるようである。第17地点においても、陶器製の皿類は少なく、大堀相馬産の小中皿が数点出土する程度であった。その他の器種では、2号溝で甕類の比率が高く、9・32号溝では鉢類の比率が高くなっている。2号溝では美濃産や東北産と考えられる甕類が比較的まとまって出土しており、9・32号溝では擂鉢の出土がやや多かったためである。これらは、二の丸地区におけるこの時期の一般的な特徴をこれらと言うよりは、むしろそれぞれの遺構の性格による差であると考えられる。また、19世紀中葉では、大堀相馬産の土瓶類が普及し、大量に出土するために、袋物類が急激な増加を示している。しかし、今回の4資料群では土瓶の出土はほとんどなく、この時期にはまだその傾向は現れないものと考えられる。

③陶磁器の産地別組成の検討

当該期の磁器に関しては、肥前産のみで占められており、中国産磁器はみられなかった。また、19世紀になって出現する瀬戸・美濃産や切込や平清水といった東北産の磁器などもまだ含まれていない。このことは、『年報9』で行なった産地別比率の結果とも一致している。

陶器の産地別比率は図146に変遷を示している。陶器に関しても、大まかには、『年報9』で行なった分析にそった傾向を示している。第17地点では、2号溝、14号土坑、3層一括は、細かな差異はあるものの全体として似たような比率を示している。一方、9・32号溝は、大堀相馬産の割合が比較的低く、肥前製品や小野相馬、東北産の割合が高いなど、他に比べて異なった様相を示している。これは、9・32号溝はⅢｂ2期に属しており、他に比べて年代が若干さかのぼることと、他の遺構よりも陶器の出土量が少ないため、1点の割合が高くなる傾向にあること、碗類の出土が少なく、鉢や擂鉢の出土が比較的多いといったこの遺構独自の特徴があることなど、例外的な要素がいくつか考えられる。

第17地点出土資料では、いずれの資料群においても大堀相馬産が高い比率を占めている。全体の半数強を示しており、大堀相馬製品がこの時期の陶器の主体を占めている。一方、肥前や瀬戸・美濃の製品は、9・32号溝を除いては、わずかに数%程度が確認される程度に減少している。特に瀬戸・美濃製品は、大堀相馬の碗皿類や、

小野相馬や東北産の日用雑器類と器種の上で競合しており、大堀相馬産などの増加に伴って流通規模が減少していった可能性が考えられる。京・信楽は、比率の差は認められるものの、他の産地では時代による増減が認められることと比べると、時期に関わらず一定の比率を保っていることが読み取れる。京・信楽製品は、灰釉丸碗や火入・灰吹などといった大堀相馬や瀬戸・美濃製品と同様の器種を中心として出土しているものの、それらとは違った高級品としての需要があったことにより、他の産地の動向にかかわらず常に一定量の流通があったものと考えられる。小野相馬製品は、依然として数%程度は存在するものの、前段階の18世紀後葉頃よりも比率としては減少している。東北産とした資料は、堀や他の東北地方に興った小規模な窯で生産されたと推察されるものであるが、未だ窯跡を指摘できないため、このようにまとめたものである。この東北産とした資料は、小野相馬製品の減少に反比例するように出現してきている。東北産としたものには甕、鉢、擂鉢、灰吹、鬢水入などがあり、これまでに小野相馬製品が得意としていた器種とも重なる部分がある。小野相馬の衰退と東北産と考えられる陶器の増加とには、何らかの関係性があるものと考えられる。

④土師質土器の検討

次に、二の丸第17地点から出土した土器類のうち、量的な検討が加えられる土師質土器皿について検討していく。

法量を検討すると、二の丸第17地点の資料は、大きくは口径10cm以下の小型のもの、10～15cmの中型のもの、15cm以上の大型のものの3つに分けられた。最も多いのは10～15cmの中型のもので、口径15cm以上の大型のものは非常に少なかった。このことは、これまでの調査で出土した土師質土器皿の分析と同じ傾向である（年報9）。今回の調査では、Ⅲｂ２期（18世紀後葉）、Ⅲｂ３期、Ⅲｂ４期、Ⅲb4期～Ⅳa期の間（18世紀末葉～19世紀初頭）の４時期の遺構から土師質土器が比較的まとまって出土している。これらの法量を時期別に比較していきたい（図147－１）。Ⅲｂ２期、Ⅲｂ３期に位置づけられるものは、中型のものの中でも口径、器高のばらつきが大きい。明確な集中は認めがたいものの、口径については11cm前後と13～14cm前後の大まかなピークが読み取れる。Ⅲｂ４期、Ⅲｂ４期～Ⅳa期では、それ以前の時期よりも口径と器高の分布がより一層集約するようになる。器高については、Ⅲｂ２期では、2～４cm前後に散漫な分布を示していたが、Ⅲｂ４期、Ⅲｂ４期～Ⅳa期では２～３cm前後と若干浅いものに集中した分布を示している。口径についても、Ⅲｂ４期、Ⅲｂ４期～Ⅳa期のものでは、12～13cm前後と14cm前後の2つのピークに集中していることがわかる。今回の資料からは、資料点数が多くないために明確ではない部分も残るが、年代が新しくなることによって、土師質土器皿の法量は浅いものに収斂し、大きさはより画一的なものが増えていくという傾向が読み取れる。

次に、底部の糸切り技法について検討していく。回転糸切り技法には2種類確認でき、糸切り痕の中心がどちらか一方に片寄るものを技法ａとし、糸切り痕の中心が底面のほぼ中央に位置するものを技法ｂとした。それぞれ右回転のものと左回転のものが存在する。糸切り技法と回転方向の違いを時期ごとにみていく（図147－２）。当該期の資料では、年代が新しくなるにつれて、技法a左回転が減少している。それと連動するように、技法a右回転と技法ｂ左回転は年代が下がるにつれて増加していくといった傾向が読み取れる。ロクロの回転方向についても、左右どちらかの比率が高くなるといった傾向が現われるわけではなく、むしろ糸切り技法の違いと結びついて変化を示している。この様相は、出土点数がそれほど多くはないため明確ではない部分も残るが、『年報９』での分析結果と基本的には一致している。

次に、土師質土器皿の付着物について検討していく。皿の口縁部には、タール状の付着物が観察されるものが存在する。厚みをもって口縁部全周にわたって付着する場合と、口縁部の数ヵ所に点々と付着している場合がみられる。本調査地点から出土した土師質土器皿のうち、このタール状の付着物は27点のものに認められた。これは、皿全体の22.6%を示す。出土傾向としては、特に集中して出土するような遺構はなく、資料群によって多少

のばらつきはあるものの、9・32号溝では38.8%（18点中7点）、2号溝では16.6%（6点中1点）、14号土坑5.5%（18点中1点）、3層一括8.6%（23点中2点）と、さまざまな遺構から1～数点ずつ出土している程度である。やや多くみられる9号溝でも4割には満たない。武家屋敷地区と比較すると、武家屋敷地区では47.4%にこの付着が観察されており、二の丸地区に比べて灯明皿として使用される率が高いことが指摘されている（年報13）。本調査地点の資料についても、灯明皿として転用されたものは存在するものの、その割合はそれほど大きなものではない。大多数の土師質土器皿は、武家の宴会などの儀礼的な席上で使用され、そのまま廃棄されたものであることが推測できる。

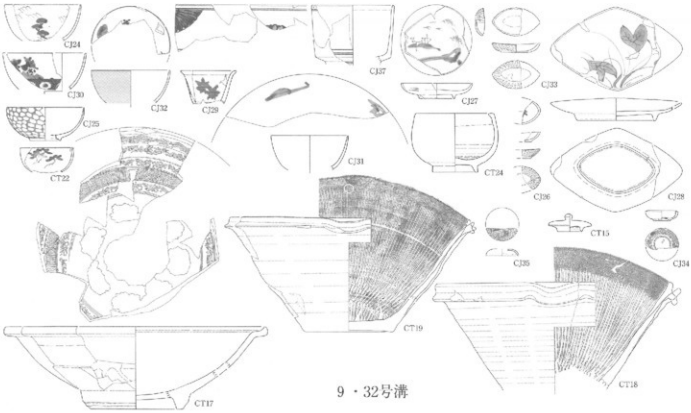
⑤小結

以上、これらをまとめて、二の丸跡第17地点から出土した18世紀末葉から19世紀初頭の陶磁器の特徴をまとめる。

種類別の組成としては、土師質土器皿の占める割合が非常に高いことが挙げられる。これらのことは、同時期の武家屋敷地区の様相と比較すると、二の丸という公的な場の性格がよく現れていると考えられる。その他では、陶器・磁器は、遺構によって違いはあるものの、ある程度安定した割合で出土する傾向があり、瓦質土器、軟質施釉陶器は非常に少ない。また、土師質土器皿については、タール状の付着物の付着する割合が低いことから、灯明皿として利用された割合が少なく、大多数のものは饗宴で使用され、そのまま廃棄されたものと推測される。土師質土器皿の法量は、時期が下るにつれてばらつきが少なくなり収斂する傾向がみられる。

産地では、磁器はすべて肥前で占められている。磁器の種類としては、碗類・皿類が大多数であり、その他としては、鉢、紅皿、瓶類、小坏などがごくわずかみられる程度である。碗類・皿類の割合は、出土した遺構の違いによって左右されるが、碗類はおおまかに4割強程度の割合を占め、皿類は10数～20%弱程度を占めると考えられる。

陶器では、大堀相馬産が多く、7割程度を占めている。その他の産地は、それぞれ数～10%弱程度の割合を占める程度である。大堀相馬産では、灰釉丸碗、小碗の出土が圧倒的に多く、ほかには小・中型の皿類や、数としては少ないが灰吹、火入などの器種が確認できる。瀬戸・美濃産では、大堀相馬と同様に灰釉丸碗や小碗、灰吹などの器種で確認され、肥前産でも灰釉丸碗や大皿などが出土しているが、量としては大堀相馬に比べ圧倒的に少ない。京・信楽産の色絵製品は、丸碗や灰吹、火入、合子など限られた器種ではあるが、高級品として一定の需要があったことが考えられる。小野相馬産は、数としては少ないものの、18世紀末葉から19世紀初頭の時期においても、片口鉢などの器種では依然として確認できる。しかし、小野相馬製品の減少と連動して、擂鉢、甕類やその他の日用雑器類では、仙台周辺の窯で製作された可能性のある陶器がある程度の割合を占めるようになっていくものと考えられる。



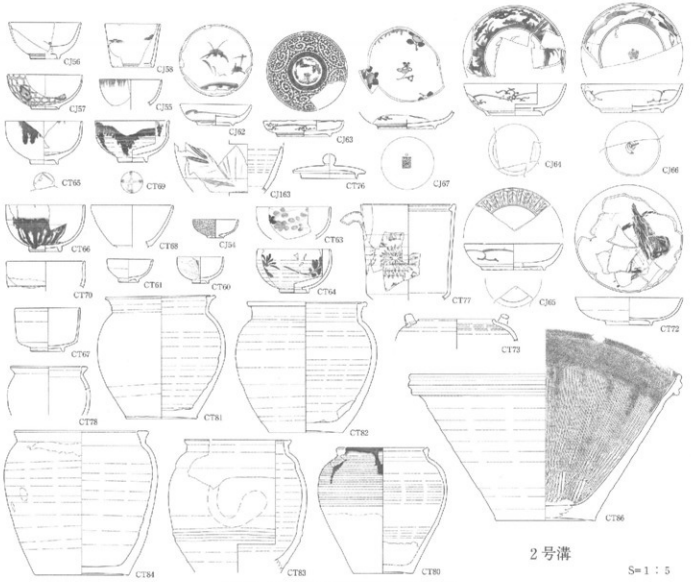


図141　二の丸第17地点出土陶磁器集成図（1）
Fig. 141　Porcelains and glazed ceramics from NM17 (1)

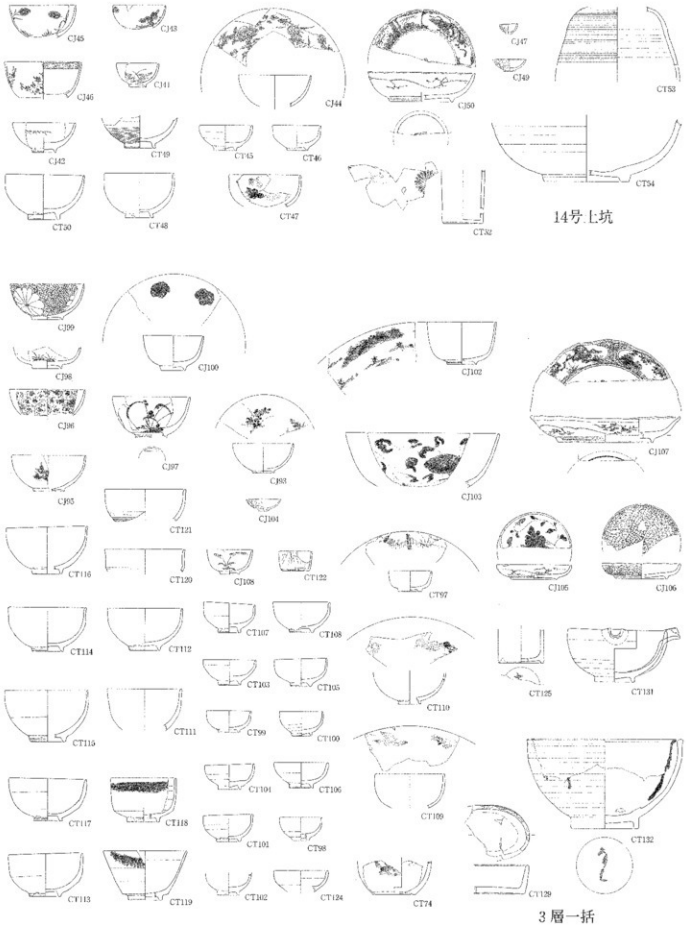
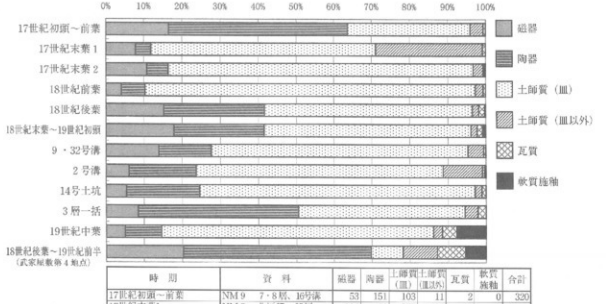


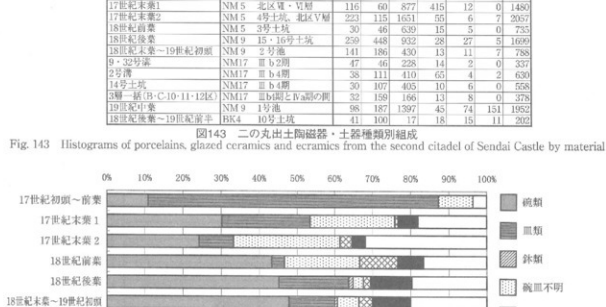
図142　二の丸第17地点出土陶磁器集成図（2）
Fig. 142　Porcelains and glazed ceramics from NM17 (2)



時　期	資　料	磁器	陶器	土師質（皿）	土師質（皿以外）	瓦質	軟質施釉	合計
17世紀初頭～前葉	NM 9　7・8層、16号溝	53	151	103	11	2	0	320
17世紀末葉1	NM 5　北区Ⅶ・Ⅸ層	116	60	877	415	12	0	1480
17世紀末葉2	NM 5　4号土坑、北区Ⅴ層	223	115	1651	55	6	7	2057
18世紀前葉	NM 5　3号土坑	30	46	639	15	5	0	735
18世紀後葉	NM 9　15・16号土坑	259	448	932	28	27	5	1699
18世紀末葉～19世紀初頭	NM 9　2号池	141	186	430	13	11	7	788
9・32号溝	NM17　Ⅲb2層	47	66	228	14	2	0	337
2号溝	NM17　Ⅲb4層	38	111	410	65	4	2	630
14号土坑	NM17　Ⅲb4層	30	107	405	10	6	0	558
3層一括(B・C-10・11・12区)	NM17　Ⅲb層とⅣa層の間	32	159	166	13	8	0	378
19世紀中葉	NM 9　1号池	98	187	1397	45	74	151	1952
18世紀後葉～19世紀前半	BK4　10号土坑	41	100	17	18	15	11	202

図143　二の丸出土陶磁器・土器種類別組成

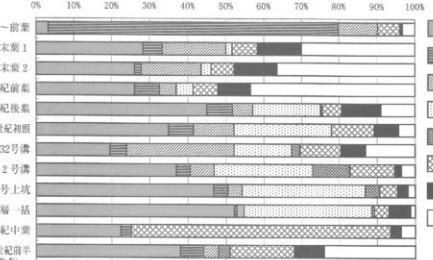
Fig. 143　Histograms of porcelains, glazed ceramics and ecramics from the second citadel of Sendai Castle by material



時　期	資　料	碗類	皿類	鉢類	碗皿不明	袋物類	その他	不明	合計
17世紀初頭～前葉	NM 9　7・8層、16号溝	6	42	0	5	0	0	2	55
17世紀末葉1	NM 5　北区Ⅶ・Ⅸ層	35	27	0	26	1	6	21	116
17世紀末葉2	NM 5　4号土坑、北区Ⅴ層	54	20	0	63	7	8	71	223
18世紀前葉	NM 5　3号土坑	13	1	0	6	3	2	5	30
18世紀後葉	NM 9　15・16号土坑	117	48	3	7	5	28	51	259
18世紀末葉～19世紀初頭	NM 9　2号池	67	17	1	8	5	14	28	140
9・32号溝	NM17　Ⅲb2層	19	8	1	8	4	7	0	47
2号溝	NM17　Ⅲb4層	9	17	0	5	0	6	0	37
14号土坑	NM17　Ⅲb4層	11	6	0	6	0	7	0	30
3層一括(B・C-10・11・12区)	NM17　Ⅲb層とⅣa層の間	19	6	1	1	0	5	0	32
19世紀中葉	NM 9　1号池	83	6	0	0	2	2	5	98
18世紀後葉～19世紀前半	BK4　10号土坑	6	13	0	0	1	5	16	41

図144　二の丸出土磁器の器種組成

Fig. 144　Histograms of porcelains from the second citadel of Sendai Castle by shape



時期	資料	碗類	皿類	鉢類	碗皿不明	甕類	袋物類	その他	不明	合計
17世紀初頭～前葉	NM 9　7・8層、16号溝	5	118	16	0	0	9	1	5	154
17世紀末葉1	NM 5　北区Ⅶ・Ⅵ層	17	3	10	1	0	4	7	18	60
17世紀末葉2	NM 5　4号土坑、北区Ⅴ層	30	2	18	3	0	7	13	42	115
18世紀前葉	NM 5　3号土坑	12	3	2	2	0	3	4	20	46
18世紀後葉	NM 9　15・16号土坑	200	30	24	80	2	23	46	40	445
18世紀末葉～19世紀初頭	NM 9　2号池	65	12	20	48	0	21	12	8	186
9・32号溝	NM17　Ⅲb2期	9	2	13	7	1	5	3	6	46
2号溝	NM17　Ⅲb4期	41	4	7	29	11	13	2	4	111
14号土坑	NM17　Ⅲb4期	50	4	4	35	4	5	3	2	107
3層一括(B・C-10・11・12区)	NM17　Ⅲb4期とⅣa期の間	83	1	3	54	1	6	9	2	159
19世紀中葉	NM 9　1号池	42	5	0	0	0	128	5	7	187
18世紀後葉～19世紀前半	BK4　10号土坑	38	6	4	0	3	17	8	24	100

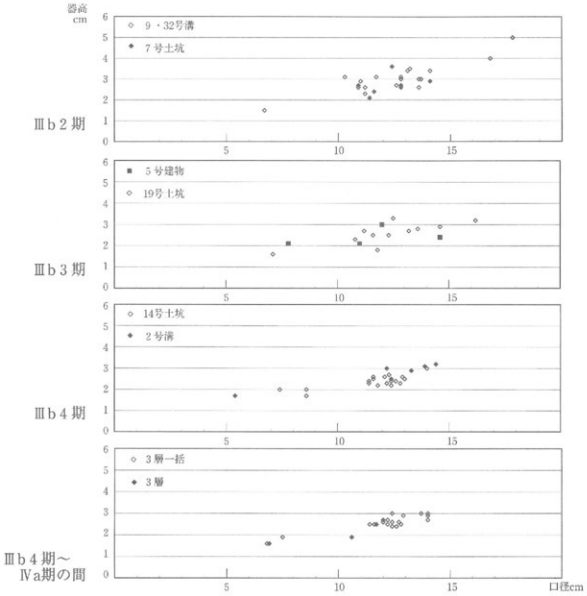
図145　二の丸出土陶器の器種組成

Fig. 145　Histograms of glazed ceramics from the second citadel of Sendai Castle by shape

時期	資料	肥前	瀬戸美濃	京信楽	大堀相馬	小野相馬	東北産	その他	産地不明	合計
17世紀初頭～前葉	NM 9　7・8層、16号溝	80	65	1	0	0	0	1	4	151
17世紀末葉1	NM 5　北区Ⅶ・Ⅵ層	32	6	4	0	0	0	1	17	60
17世紀末葉2	NM 5　4号土坑、北区Ⅴ層	42	17	2	7	0	0	1	36	105
18世紀前葉	NM 5　3号土坑	9	1	2	21	4	0	0	9	46
18世紀後葉1	NM 9　16号土坑埋土層以下	10	18	33	88	13	0	0	11	173
18世紀後葉2	NM 9　15号土坑埋土層以下	4	7	20	62	5	0	0	7	105
18世紀末葉～19世紀初頭	NM 9　2号池	13	23	3	127	3	9	2	9	189
9・32号溝	NM17　Ⅲb2期	9	3	1	10	6	6	0	11	46
2号溝	NM17　Ⅲb4期	0	2	10	66	3	12	0	18	111
14号土坑	NM17　Ⅲb4期	2	2	18	58	3	4	0	20	107
3層一括(B・C-10・11・12区)	NM17　Ⅲb4期とⅣa期の間	5	9	6	100	8	6	0	25	159
19世紀中葉1	NM 9　1・2号池	0	1	0	274	0	3	0	9	287
19世紀中葉2	NM10　2区Ⅲ2b・3c・3・4層	0	0	2	173	0	10	0	2	187
18世紀後葉～19世紀前半	BK4　10号土坑	1	12	3	64	3	2	5	10	100

図146　二の丸出土陶器の産地別組成

Fig. 146　Histograms of glazed ceramics from the second citadel of Sendai Castle by producing district



1　土師質土器皿の法量分布

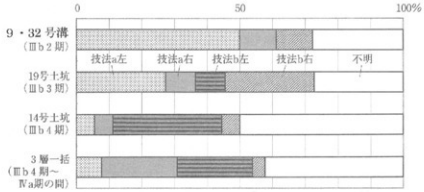


図147　土師質土器皿法量分布と底部糸切り技法比率
Fig. 147　Scatter diagrams of size and histograms by string cut bases

7．まとめ

今回の調査では、大別4段階、細別10期にわたる遺構群が検出され、次のような時期推定ができた。

Ⅰ期　　慶長5年（1600年）頃から寛永15年（1638年）

Ⅱ期　　寛永15年（1638年）から元禄年間（17世紀末）

Ⅲa期　元禄年間（17世紀末）

Ⅲb期　元禄13年（1700年）頃から文化元年（1804年）

Ⅳa期　文化元年（1804年）から文化6年（1809年）頃

Ⅳb期　文化6年（1809年）頃から明治初頭（1868年）頃

Ⅳc期　明治初頭（1868年）頃から明治15年（1882年）

Ⅰ期については、寛永15年（1638年）の二の丸造営以前に当地に置かれていた伝伊達宗泰屋敷に関連するものと考えられる。検出遺構は極めて少なく、この段階ではあまり利用されていない。伝伊達宗泰の屋敷の広がりが、今次調査区より西には延びていないことは、ほぼ間違いないであろう。二の丸造営以前における、土地利用の全体像を考える上で、貴重なデータとなった。

Ⅱ期からⅣb期にかけてが、二の丸が置かれていた時期に相当する。

Ⅱ期は、元禄年間に二の丸が改造される以前にあたる。溝の中に柱を立てた塀・柱列・石組溝・建物などが検出された。塀・柱列は、中奥西端付近の区画施設と考えられる。また、板材を組み合わせた便槽遺構が検出されており、興味深い事例を提供することとなった。

Ⅲa期は、元禄年間の二の丸改造の過程で、一時的に利用されたものと思われ、平行する溝が並んでいた。

Ⅲb期・Ⅳa期・Ⅳb期が、改造後の二の丸に相当する。

この内Ⅳa期は、文化元年（1804年）の火災後、二の丸が再建される文化6年（1809年）の間に、一時的に使われた時期と考えられる。大規模な礎石建物が展開し、礎石建物の様々な様相が明らかとなった。

Ⅲb期・Ⅳb期では、溝の中に柱を立てた塀や、柱列が多数検出された。これらは、中奥の西端を区画する塀と、その付近の施設と考えられる。中でもⅣb期の遺構群は、絵図と対比させたところ、その記載と極めて良く一致する結果となった。検出遺構と絵図との対比は、以前から試みており、今回の成果も基本的な考えを変えるものではない。しかし従来は、検出遺構を検討して絵図と対比させ、矛盾のない推定を行うに留まっていた。今回の調査では、調査前から推定していたのとほぼ同じ場所で、中奥西端の塀を検出できた。このことによって、二の丸の諸施設の推定位置は、若干の調整部分は残るものの、ほぼ確定したと言って良いであろう。

最終末のⅣc期は、明治維新後の時期と考えられる。

出土遺物は多種多様で、膨大な量にのぼる。しかし、17世紀代に遡る遺物は、全般的に少ない。18～19世紀についても、瓦以外では、次に述べる一括資料を除くと、あまりまとまった資料はない。

文化元年（1804年）の火災に関係すると考えられる遺構や層序から、まとまった陶磁器類が出土した。これらは、18世紀末から19世紀初頭の、基準資料となる内容である。この時期の一括資料としては、第9地点2号池のものがあるが、遺物量があまり多くなく、全体の様相が充分判明していた訳ではない。そのため、今回出土した18世紀末から19世紀初頭の陶磁器の様相について、あらためて整理し検討を加えた。陶磁器類の基本的な変化の様相は、従来の知見を大きく変えるものではなかったが、着実に基準となる良好な資料が蓄積できた。

陶磁器類では、幕末から明治初頭にかけてのものも、多数出土している。この時期の資料は、これまでの調査でも、各所で一括資料が出土している。今回の資料も、従来から知られているものと基本的に変わらない。

〈引用・参考文献〉

愛知県陶磁資料館　1984　『近世城館跡出土の陶磁』
阿刀田令造　1936　『仙台城下絵図の研究』斉藤報恩会博物館図書部研究報告4
伊藤正義ほか　1990　『東北の陶磁史』福島県立博物館
伊東信雄　1950　「仙台市内の古代遺跡」『仙台市史3』1～106頁　仙台市
江戸遺跡研究会　1991　『よみがえる江戸』新人物往来社
江戸遺跡研究会　2001　『図説江戸考古学研究事典』
江戸陶磁土器研究グループ　1992　『江戸出土陶磁器・土器の諸問題』シンポジウム資料
大橋康二　1984　「肥前陶磁の変遷と出土分布」『国内出土の肥前陶磁』152～157頁
大橋康二・尾崎薬子　1988　『有田町史　古窯編』有田町教育委員会
大橋康二　1993　『肥前陶磁』ニューサイエンス社
大橋康二　1994　『古伊万里の文様』理工学社
小川啓司　1974　『そば猪口絵柄事典』
関西近世考古学研究会　1994　『近世陶磁器の諸様相』第6回関西近世考古学研究会大会
九州近世陶磁会　2000　『九州陶磁の曙年』
九州陶磁文化館　1984　『国内出土の肥前陶磁』
九州陶磁文化館　1990　『柴田コレクション展（Ⅰ）』
九州陶磁文化館　1991a　『柴田コレクション展（Ⅱ）』
九州陶磁文化館　1991b　『肥前の色絵「その始まりと変遷」展』
九州陶磁文化館　1993　『柴田コレクション展（Ⅲ）』
九州陶磁文化館　1994　『よみがえる江戸の華』
九州陶磁文化館　1995　『柴田コレクション展（Ⅳ）』
九州陶磁文化館　1999　『姉右衛門－その様式の全容』
見城敏子・小井川百合子　1989　『髪人形の美』仙台市博物館
小井川百合子　1996　「堤焼と堤人形」『仙台市史　特別篇3美術工芸』201～209頁　仙台市
佐々木達夫　1985　「物資の流れ－江戸の陶磁器－」『季刊考古学13　江戸時代を掘る』48～50頁
佐々木達夫　1987　「江戸へ流入した陶磁器とその背景」『国立歴史民俗博物館研究報告14』189～230頁
佐藤　巧　1967　「仙台城の建築」『仙台城』仙台市教育委員会
佐藤　巧　1979　『近世武士住宅』
新宿区内藤町遺跡調査会　1992　『内藤町遺跡』
新宿区歴史博物館　1990　『江戸の暮らし－近世考古学の世界－』
鈴木裕子　1990　「江戸の陶磁器」『江戸遺跡研究会第3回大会発表要旨』9～22頁
関根達人　1998　「相馬藩における近世窯業生産の展開」『東北大学埋蔵文化財調査年報10』51～90頁
関根達人　1999　「相馬焼の生産と流通」『江戸の物流－陶磁器・漆器・瓦から－』65～90頁
　　江戸遺跡研究会第12回大会発表要旨
芹沢長介篇　1978　『切込』　東北大学文学部考古学研究会
芹沢長介ほか　1981　『日本やきもの集成1』平凡社
芹沢長介　1983　「東北地方の近世陶磁」『世界陶磁全集9』227～259頁　小学館
仙台市教育委員会　1967　『仙台城』
仙台市教育委員会　1985　『仙台城三の丸跡』仙台市文化財調査報告書76
仙台市教育委員会　1994　『仙台市青葉区文化財分布地図』
仙台市教育委員会　1995　『仙台市太白区文化財分布地図』
仙台市史編さん委員会　1997　『仙台市史　資料編3近世2城下町』
高倉淳ほか編　1994　『絵図・地図で見る仙台』
田口昭二　1983　『美濃焼』ニューサイエンス社

鶴巻康志ほか　1997　『新発田城跡発掘調査報告書Ⅱ』新発田市埋蔵文化財調査報告書第17
東京都埋蔵文化財センター　1997　『汐留遺跡Ⅰ』
東京都埋蔵文化財センター　2000　『汐留遺跡Ⅱ』
東京都埋蔵文化財センター　2003　『汐留遺跡Ⅲ』
東北大学埋蔵文化財調査委員会　1985　『東北大学埋蔵文化財調査年報１』
東北大学埋蔵文化財調査委員会　1990　『東北大学埋蔵文化財調査年報３』
東北大学埋蔵文化財調査委員会　1992　『東北大学埋蔵文化財調査年報４・５』
東北大学埋蔵文化財調査委員会　1993　『東北大学埋蔵文化財調査年報６』
東北大学埋蔵文化財調査委員会　1994　『東北大学埋蔵文化財調査年報７』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1997　『東北大学埋蔵文化財調査年報８』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1998　『東北大学埋蔵文化財調査年報９』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1998　『東北大学埋蔵文化財調査年報10』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1999　『東北大学埋蔵文化財調査年報11』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　2000　『東北大学埋蔵文化財調査年報13』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　2001　『東北大学埋蔵文化財調査年報14』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　2001　『東北大学埋蔵文化財調査年報15』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　2001　『東北大学埋蔵文化財調査年報16』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　2002　『東北大学埋蔵文化財調査年報17』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　2003　「17宮城県仙台市青葉山B　18宮城県仙台市青葉山E」『前・中期旧石器問題の検証』140～152頁　日本考古学協会
東北陶磁文化館　1987　『東北の近世陶磁』
東北歴史資料館　1995　『仙台・堤のやきもの』
土岐市美濃陶磁歴史館　1993　『桃山の華　大坂出土の桃山陶磁』
土岐市美濃陶磁歴史館　1994　『大坂出土の桃山陶磁Ⅱ』
土岐市美濃陶磁歴史館　2002　『織部の流通圏を探る東日本』
土岐市美濃陶磁歴史館　2003　『織部の流通圏を探る西日本』
盛崎彰一ほか　1980　『日本のやきもの集成３』平凡社
浪岡町教育委員会　1986　『浪岡城跡Ⅲ』
日本民具学会　1997　『日本民具辞典』
長谷部楽爾・今井敦　1995　『日本出土の中国陶磁』中国の陶磁12　平凡社
藤沢良祐　1998　『瀬戸市史　陶磁史篇六』瀬戸市史編纂委員会
平凡社編集部編　1984　『やきもの事典』
森本伊知郎　1991　「江戸市中の物資流通と生活用具－遺跡出土の陶磁器から－」『甦る江戸』141～180頁　江戸遺跡研究会

REPORT
OF THE ARCHAEOLOGICAL RESEARCH ON THE CAMPUS OF TOHOKU UNIVERSITY

vol.18, March 2005

The Archaeological Research Center
on the Campus, Tohoku University
1-1, Katahira, 2chome, Aoba Ward, Sendai 980-8577 JAPAN

Summary

On the campus of Tohoku University a lot of archaeological sites are known. Among them, Sendai Castle is the most famous and largest one. Almost all of the south part of Kawauchi campus is located on its secondary citadel area.

In Japan, if existing circumstances need to be changed in the known site area, excavation research on the buried cultural properties must be carried out. According to legal procedures, the commission for research, which was organized in 1983, carried out many salvage excavations for 11 years. It was reorganized into the Center in 1994, to improve conditions of research. The Center mainly carries out salvage excavations of archaeological sites on the campus, analyzes these records and remains and publishes excavation reports. Conservation and exhibition of archaeological heritage, studies about structure of sites, artifacts, techniques of excavation and preservation are also important duties.

This volume carries the report of salvage excavation of NM17 (Loc.17 of Ninomaru, i.e. Secondary Citadel of Sendai Castle), which was conducted by the Archaeological Research Center on the Campus of Tohoku University in 1998 and 2000.

In the excavation of NM17, it is found that features are classified into 4 major stages, and they are subdivided into 10 periods. The phases of features are dated as follows.

Phase Ⅰ from around 5th year of Keichyo (1600) to 15th of Kan'ei (1638)
Phase Ⅱ from 15th year of Kan'ei (1638) to Genroku era (the end of 17th century)
Phase Ⅲa Genroku era (the end of 17th century)
Phase Ⅲb from around 13th year of Genroku (1700) to the first year of Bunka (1804)
Phase Ⅳa from the first year of Bunka (1804) to around 6th year of Bunka (1809)
Phase Ⅳb from around 6th year of Bunka (1809) to around the beginning of Meiji period (1868)
Phase Ⅳc from around the beginning of Meiji (1868) to 15th year of Meiji(1882)

In Phase Ⅰ, archaeological features are considered to be related to buildings that belong to the house of Muneyasu DATE (4th son of Masamune DATE), which was located in this area before Ninomaru began to be built in 1638. Few features are found and there are few indication of use of this area in this phase. It is certain that buildings which belong to the house of Muneyasu did not spread to the west side of this area. It is a valuable data for consideration about the use of this area before the construction of Ninomaru.

From Phase Ⅱ to Phase Ⅳb correspond to the period when Ninomaru was in existence in this area. Phase Ⅱ corresponds to the era before the reorganization of Ninomaru. Fence structure with poles embedded in ditches, lines of poles, ditches lined with stones, and some buildings were found. Fences and lines of poles are considered as facilities around the west side of Nakaoku. Further, we found a feature of toilet that consisted of wooden boards, and it provided a valuable case for the life of the period.

Phase Ⅲa is the period during the reorganization of Ninomaru, which is considered of temporary use and ditches are lined in parallel.

Phase Ⅲb, Ⅳa and Ⅳb correspond to Ninomaru after the reorganization. Phase Ⅳa is considered as the period of temporary use during rebuilding processes after a fire at 1804.

In Phase Ⅲb and Ⅳb, a number of fence structures with poles in ditches, and lines of poles are found. These features are considered to be the fences at the boundary of west side of Nakaoku and the facilities around it. Especially, arrangement of features of Phase Ⅳb are consistent with illustrated historical documents. We have compared between features found in excavations and illustrated historical documents from the past researches, and this comparison supports to the basic idea about the structure of features in Ninomaru. In the present excavation, we find out the fences at the boundary of west side of Nakaoku at expected locations, and it is certain that the location of facilities of Ninomaru is precisely reconstructed.

Phase Ⅳc, that is the latest period, is the era after the Meiji Restoration.

Enormous amount of artifacts and remains are found in this excavation. However, relatively few artifacts and remains belong to the 17th century. Except roof tiles and assemblages, artifacts of the 18th and 19th centuries are also scarce. Assemblages of porcelain and ceramics were found in features and the layer which are considered to relate to a fire of the first year of Bunka (1804). These artifacts will comstitute the type assemblage from the end of 18th century to the beginning of 19th century. For this period, we have the assemblage found in the pond No.2 at NM9 (Loc.9 of Ninomaru). However, this assemblage is insufficient to understand about the whole aspects. Therefore, we analyze artifacts found in this excavation to investigate aspects of porcelain and ceramics from the end of 18th century to the beginning of 19th century. As the result, recognized aspect of changes in porcelain and ceramics turned out close to the knowledge acquired from our past researches, and we further accumulate the type assemblage of good quality.

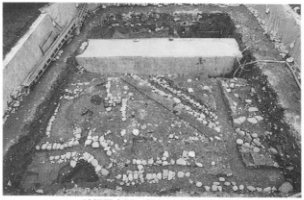
We also found a large amount of porcelain and ceramics from the end of Edo era to the beginning of Meiji period. Artifacts which belong to this period were also found in past researches, and constitue basically the same assemblage patterns.

写　真　図　版

図版１～ 58：仙台城跡二の丸第17地点検出遺構
図版59～113：仙台城跡二の丸第17地点出土遺物

1．調査前全景（南から）

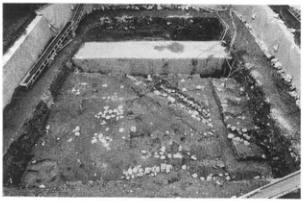
2．試掘調査区全景（南西から）



3．試掘調査区４層上面全景（南から）

4．試掘調査区４層上面全景（東から）

5．試掘調査区北側最終状況（西から）



6．試掘調査区３層上面全景（南から）

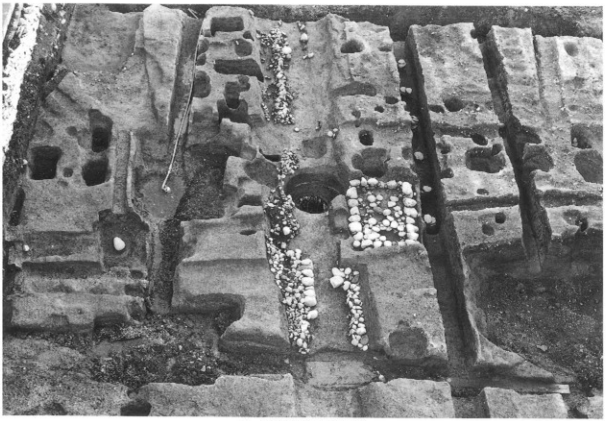
7．調査区南側の削平部分（西から）

図版１　二の丸第17地点全景（1）
Pl.1 Views of NM17(1)

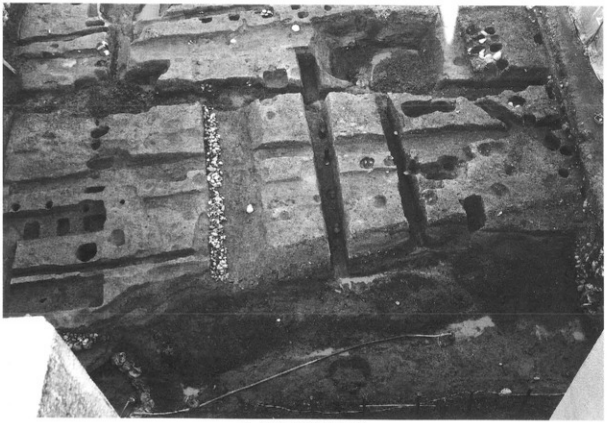
1．中区Ⅰ期全景（南から）

2．南区Ⅰ期全景（南から）

図版２　二の丸第17地点全景（2）
Pl.2 Views of NM17(2)

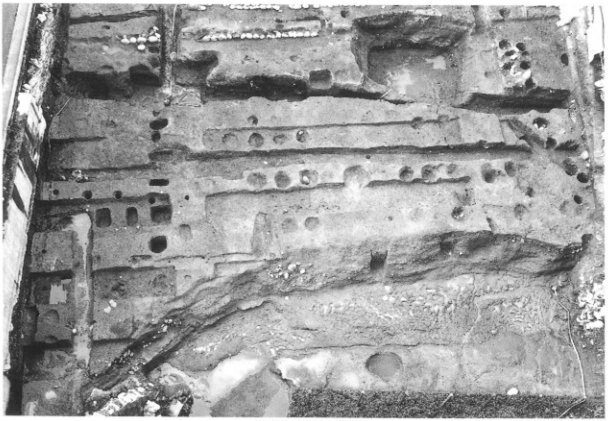


1．中区Ⅱ期全景（南から）

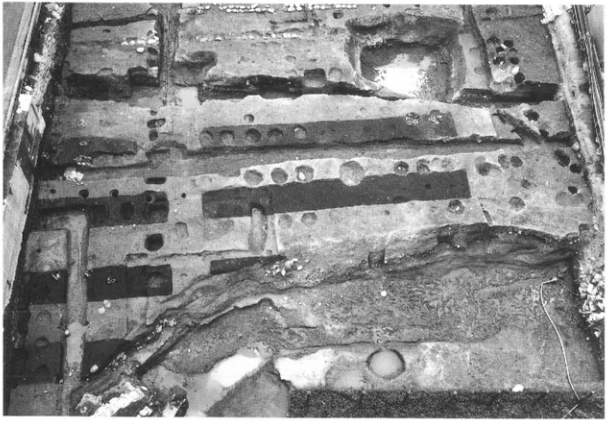


2．南区Ⅱ期全景（南から）

図版３　二の丸第17地点全景（3）
Pl.3 Views of NM17(3)



1．南区Ⅲａ期全景（南から）

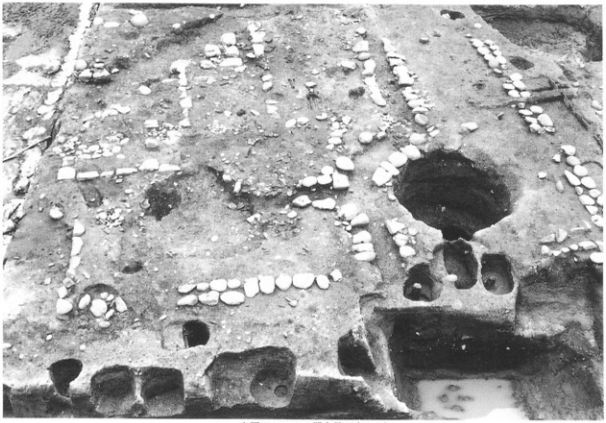


2．南区Ⅲｂ期全景（南から）

図版４　二の丸第17地点全景（4）
Pl.4 Views of NM17(4)

1．中区Ⅲａ～Ⅲｂ１期全景（西から）

2．中区Ⅲｂ２期全景（西から）



3．中区Ⅲｂ３・４期全景（南から）

図版５　二の丸第17地点全景（5）
Pl.5 Views of NM17(5)

1．北区Ⅱ～Ⅳ期全景（北から）

2．中・南区Ⅳ期全景（南から）

図版6　二の丸第17地点全景（6）
Pl.6 Views of NM17(6)

1．B－10～12区３層遺物出土状況（南から）

2．北区Ⅳ期全景（東から）

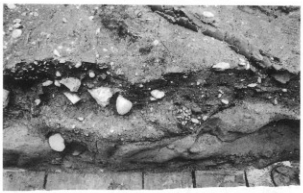
3．北区Ⅳ期全景（西から）

図版７　二の丸第17地点全景（7）
Pl.7 Views of NM17(7)

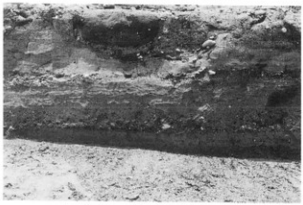
1．D－7区共同溝北壁（南から）

2．E－7区共同溝北壁（南から）

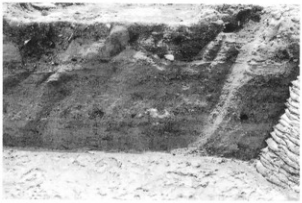
3．D・E－8区共同溝南壁（北から）



4．E・F－8区共同溝南壁（北から）

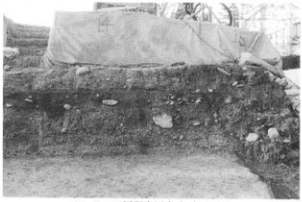


5．C・D－8区共同溝南壁（北から）



6．B・C－8区共同溝南壁（北から）

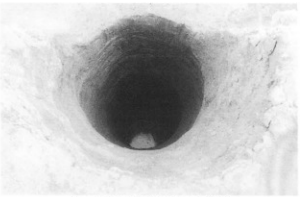
7．H－13区調査区東壁（西から）



8．H－14区調査区東壁（西から）

図版8　二の丸第17地点外周壁セクション
Pl.8 Cross sections of NM17

1．1号井戸（南から）



2．1号井戸内部の状況（北から）

3．1号井戸上部セクション（東から）

4．1号井戸セクション（東から）

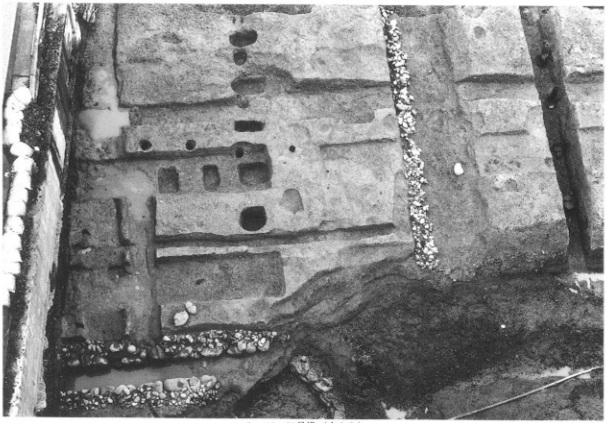
5．1号井戸遺物出土状況（東から）

6．ピット483セクション（北から）

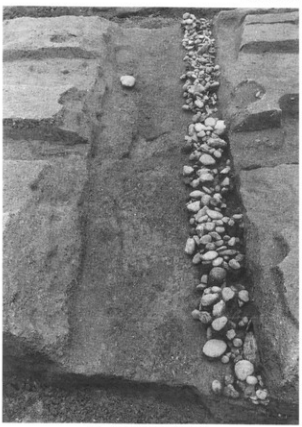
7．F・G－14区4層下部盛土の状況（南から）

8．G・H－14区4層下部盛土の状況（南から）

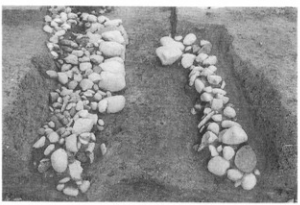
図版9　二の丸第17地点Ⅰ期の遺構
Pl.9 Features of phase Ⅰ at NM17



1．46～50号溝（南から）



2．南区46号溝（北から）



3．中区46号溝（南から）

4．D－11・12区46号溝西岸（東から）

図版10　二の丸第17地点Ⅱ期の遺構（1）
Pl.10 Features of phase Ⅱ at NM17(1)

1．北区46号溝（南から）

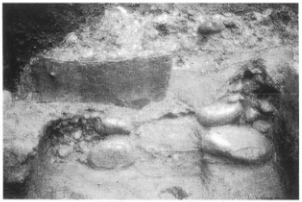
2．D－15区46号溝セクション（南から）

3．47号溝（西から）

4．47号溝北岸（南から）

5．47号溝南岸（北から）

6．47号溝掘り方（東から）



7．47号溝セクション（東から）

図版11　二の丸第17地点Ⅱ期の遺構（2）
Pl.11 Features of phase Ⅱ at NM17(2)

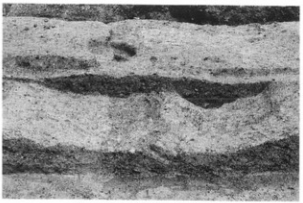
1．48号溝セクション（東から）

2．49号溝セクション（北から）

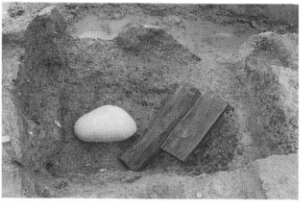
3．49号溝（南から）

4．50号溝セクション（南から）

5．24号土坑（南から）



6．24号土坑セクション（南から）

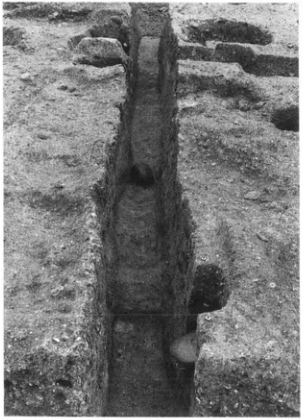


7．ピット495（西から）

図版12　二の丸第17地点Ⅱ期の遺構（3）
Pl.12 Features of phase Ⅱ at NM17(3)

1．中区６号堀（北から）

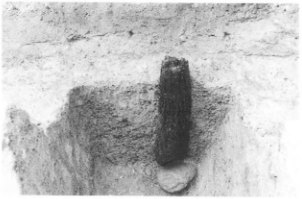
2．南区６号堀（北から）



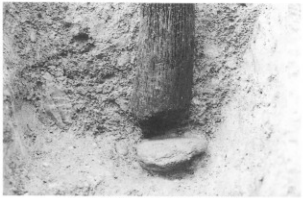
3．中区７号堀（北から）

4．南区７号堀（南から）

図版13　二の丸第17地点Ⅱ期の遺構（4）
Pl.13 Features of phase Ⅱ at NM17(4)



1．6号堀柱5セクション（南から）



2．6号堀柱5下端の状況（南から）

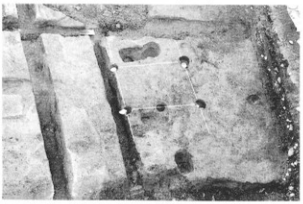
3．6号堀柱6セクション（北から）

4．7号堀・25号柱列・11号建物セクション（南から）

5．11号建物柱3（南から）

6．25号柱列柱2（南から）

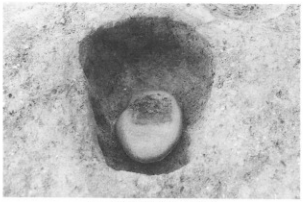
7．25号柱列柱2セクション（南から）



8．12号建物（南から）

図版14　二の丸第17地点Ⅱ期の遺構（5）
PL14 Features of phase Ⅱ at NM17(5)

1．12号建物柱１セクション（西から）



2．12号建物柱３（南から）

3．42号溝瓦出土状況（西から）

4．42号溝完掘（西から）

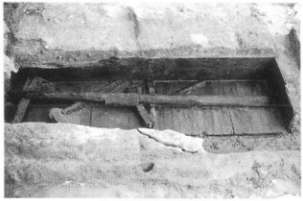
5．２号石敷（東から）

6．２号石敷セクション（南から）

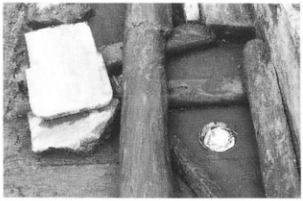
図版15　二の丸第17地点Ⅱ期の遺構（6）
Pl.15 Features of phase Ⅱ at NM17(6)

1．便槽遺構（北から）

2．便槽遺構掘り方（北から）



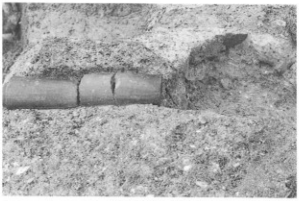
3．便槽遺構（西から）



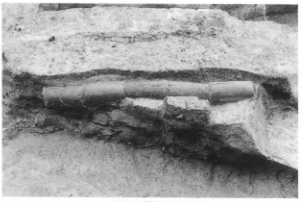
4．便槽遺構遺物出土状況（南から）

5．便槽遺構掘り方セクション（南から）

図版16　二の丸第17地点Ⅱ期の遺構（7）
Pl.16 Features of phase Ⅱ at NM17(7)



1．北区51号溝（東から）



2．中区51号溝（西から）

3．51号溝セクション（南から）

4．54号溝セクション（南から）

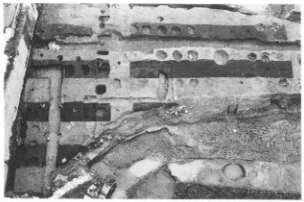
5．66号溝セクション（北から）

6．56号溝セクション（北から）

7．57号溝セクション（北から）

8．61号溝セクション（北から）

図版17　二の丸第17地点Ⅲａ期の遺構（1）
Pl.17 Features of phase Ⅲa at NM17(1)



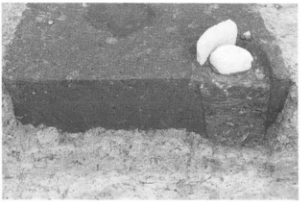
1．南区平行する溝群確認状況（南から）

2．南区平行する溝群完掘（東から）

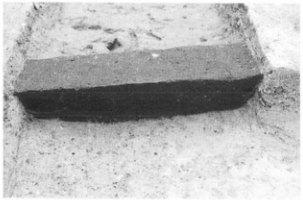
3．39～41号溝（西から）

4．35・36号溝セクション（東から）

5．35号溝セクション（東から）



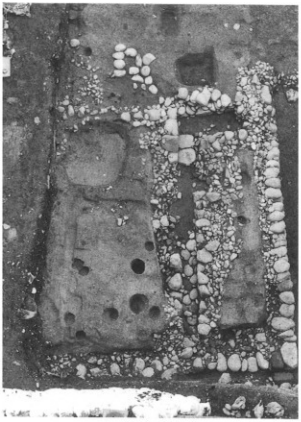
6．36号溝セクション（東から）



7．40号溝セクション（東から）

8．45号溝セクション（西から）

図版18　二の丸第17地点Ⅲａ期の遺構（2）
Pl.18 Features of phase Ⅲa at NM17(2)



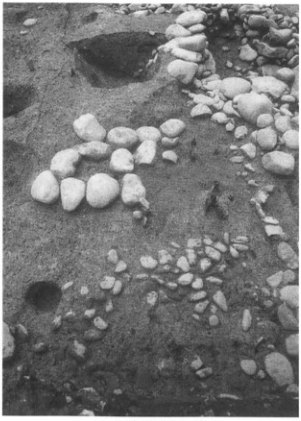
1．70号溝（北から）

2．70号溝屈曲部（北西から）

3．70号溝セクション（北から）

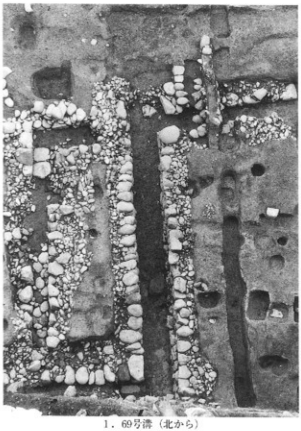
4．70号溝と３号石敷の接続部（北西から）

5．70号溝と３号石敷の接続部（南東から）



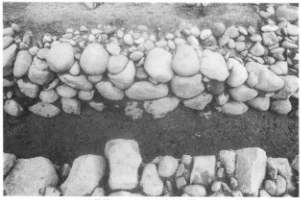
6．３号石敷（東から）

図版19　二の丸第17地点Ⅲｂ１期の遺構（1）
Pl.19 Features of phase Ⅲb1 at NM17(1)



1．69号溝（北から）

2．69号溝F－2区東岸（北西から）



3．69号溝F－3・4区東岸（西から）

4．69号溝F－4区屈曲部（南東から）

5．69号溝F－4区西岸（東から）

6．69号溝F－3区西岸（東から）

7．69号溝F－2区西岸（東から）

図版20　二の丸第17地点Ⅲｂ１期の遺構（2）
Pl.20 Features of phase Ⅲb1 at NM17(2)

1．69号溝西半部（北から）

2．69号溝E－5区北岸（南から）

3．69号溝F－4・5区セクション（東から）

4．69号溝F－3区セクション（南から）

5．69号溝遺物出土状況（南東から）

6．3号井戸（東から）

7．3号井戸（西から）

8．3号井戸セクション（東から）

図版21　二の丸第17地点Ⅲｂ１期の遺構（3）
Pl.21 Features of phase Ⅲb1 at NM17(3)

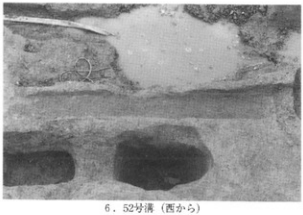
1．33号土坑（北から）

2．33号土坑セクション（西から）

3．21号柱列（西から）

4．21号柱列柱10セクション（南から）

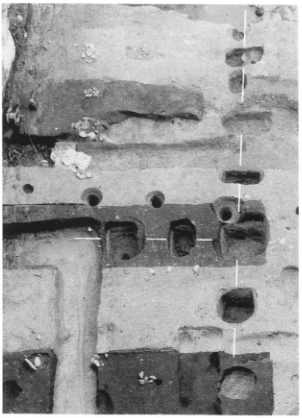
5．65号溝セクション（東から）



6．52号溝（西から）

7．52号溝セクション（南から）

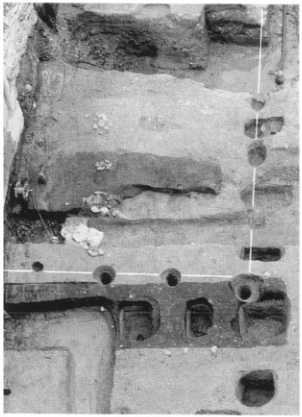
図版22　二の丸第17地点Ⅲｂ１期の遺構（4）
Pl.22 Features of phase Ⅲb1 at NM17(4)



1．24号柱列（南から）

2．24号柱列柱４セクション（北から）

3．24号柱列柱６セクション（北から）



4．23号柱列（南から）

5．23号柱列柱３セクション（東から）

6．22号柱列柱１セクション（南から）

図版23　二の丸第17地点Ⅲｂ１期の遺構（5）
Pl.23 Features of phase Ⅲb1 at NM17(5)

1．32号溝（北から）

2．32号溝B－6区南岸（北から）

3．32号溝C・D－5区南岸（北西から）

4．32号溝E－5区南岸（北から）

5．32号溝E－5区屈曲部（北から）

図版24　二の丸第17地点Ⅲｂ２期の遺構（1）
Pl.24 Features of phase Ⅲb2 at NM17(1)

1．32号溝F－3区東岸（西から）

2．32号溝F－3区西岸（東から）

3．32号溝E－5区北岸（南から）

4．32号溝B－6区溝内に置かれた瓦（東から）

5．32号溝F－3区セクション（南から）

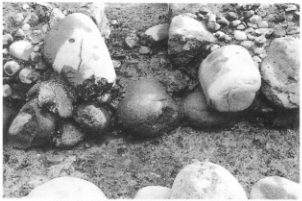
6．32号溝F－5区セクション（東から）

7．32号溝B～E－5・6区掘り方（西から）

図版25　二の丸第17地点Ⅲｂ２期の遺構（2）
Pl.25 Features of phase Ⅲb2 at NM17(2)

1．9号溝（東から）

2．9号溝（西から）



3．9号溝と32号溝の接続部分（北から）

4．9号溝F－9区瓦出土状況（東から）

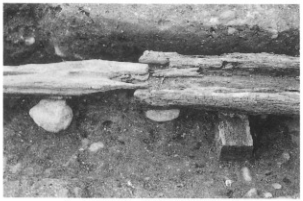
5．9号溝E－8区遺物出土状況（西から）

6．9号溝セクション（南から）

図版26　二の丸第17地点Ⅲb2期の遺構（3）
Pl.26 Features of phase Ⅲb2 at NM17(3)

1．4号木樋（南から）

2．4号木樋（西から）



3．4号木樋E－10区接続部（南から）

4．4号木樋セクション（南から）

5．4号木樋桝部セクション（南から）

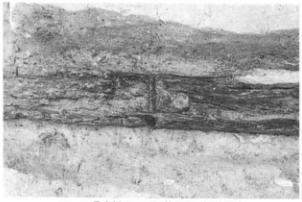
6．4号木樋桝（南から）

7．4号木樋桝掘り方底面の礫（北から）

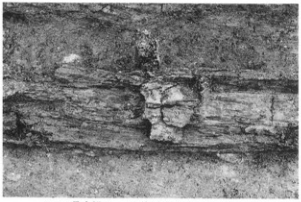
図版27　二の丸第17地点Ⅲｂ２期の遺構（4）
Pl.27 Features of phase Ⅲb2 at NM17(4)

1．3号木樋（東から）

2．3号木樋G－10区樋の形状（西から）



3．3号木樋C－11区接続部（北から）



4．3号木樋E－11区樋を押さえる杭（南から）

5．3号木樋セクション（東から）

6．20号柱列（西から）

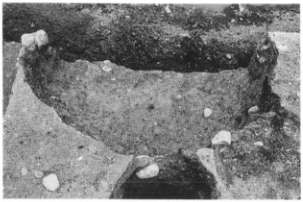
図版28　二の丸第17地点Ⅲｂ２期の遺構（5）
Pl.28 Features of phase Ⅲb2 at NM17(5)

1．2号井戸（北から）

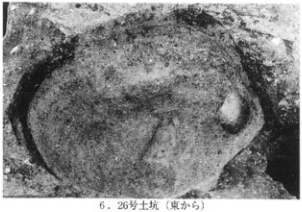
2．2号井戸内部の状況（西から）

3．2号井戸井戸枠の桶（南から）

4．2号井戸セクション（北から）



5．27号土坑（南から）



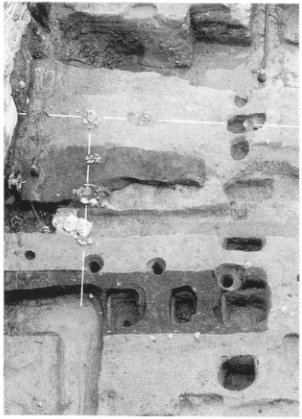
6．26号土坑（東から）

7．26土坑セクション（東から）

図版29　二の丸第17地点Ⅲｂ２期の遺構（6）
Pl.29 Features of phase Ⅲb2 at NM17(6)

1．7号土坑（西から）

2．7号土坑セクション（南から）



3．9号建物（南から）

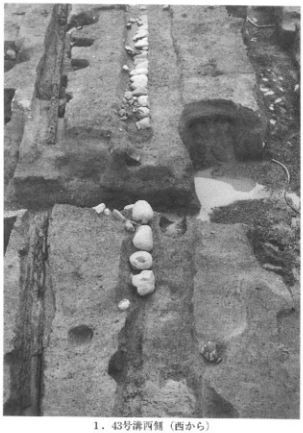
4．9号建物柱2セクション（南から）

5．10号建物（西から）

6．10号建物柱3セクション（東から）

7．瓦敷遺構（東から）

図版30　二の丸第17地点Ⅲｂ２期の遺構（7）
Pl.30 Features of phase Ⅲb2 at NM17(7)



1．43号溝西側（西から）

2．43号溝東側（東から）

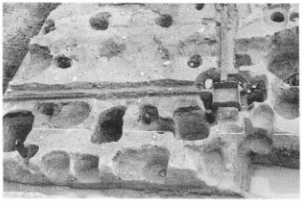
3．43号溝セクション（東から）

4．19号柱列（西から）

5．19号柱列南辺（西から）

図版31　二の丸第17地点Ⅲｂ３期の遺構（1）
Pl.31 Features of phase Ⅲb3 at NM17(1)

1．19号柱列柱５セクション（北から）

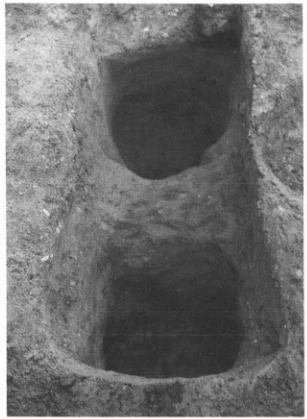


2．中区18号柱列（西から）

3．北区18号柱列（北から）

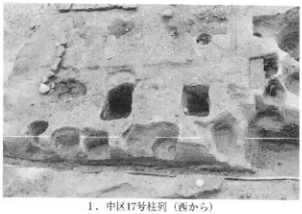
4．18号柱列柱５セクション（西から）

5．29号土坑（北から）



6．30号土坑（西から）

図版32　二の丸第17地点Ⅲｂ３期の遺構（2）
Pl.32 Features of phase Ⅲb3 at NM17(2)

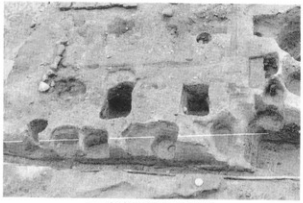


1．中区17号柱列（西から）

2．16・17号柱列セクション（西から）

3．北区17号柱列（北から）

4．北区16号柱列（北から）



5．中区16号柱列（西から）

6．4号建物（西から）

図版33　二の丸第17地点Ⅲｂ３期の遺構（3）
Pl.33 Features of phase Ⅲb3 at NM17(3)

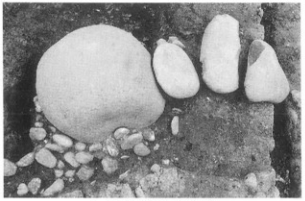
1．4号建物石列5（西から）

2．4号建物セクション（西から）

3．4号建物柱（ピット450、北から）

4．4・5号建物（東から）

5．4・5号建物（西から）



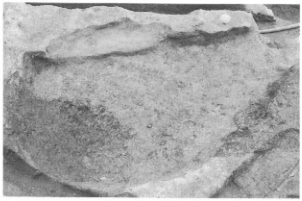
6．5号建物柱1（南から）

図版34　二の丸第17地点Ⅲｂ3期の遺構（4）
Pl.34 Features of phase Ⅲb3 at NM17(4)

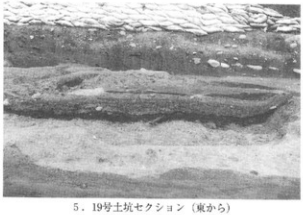
1．5号建物柱1セクション（北から）

2．5号建物柱5セクション（東から）

3．5号建物柱4セクション（南から）



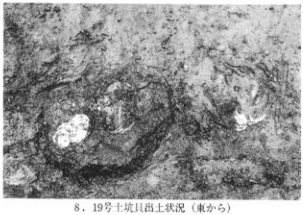
4．19号土坑（西から）



5．19号土坑セクション（東から）

6．19号土坑曝土5層検出状況（西から）

7．19号土坑遺物出土状況（西から）



8．19号土坑貝出土状況（東から）

図版35　二の丸第17地点Ⅲｂ３期の遺構（5）
Pl.35 Features of phase Ⅲb3 at NM17(5)

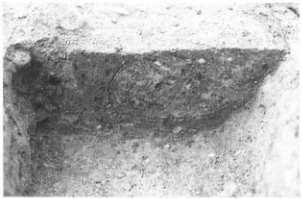
1．15号土坑（東から）

2．22号土坑（東から）

3．22号土坑セクション（東から）

4．23号土坑（北から）

5．23号土坑セクション（東から）



6．44号溝セクション（北西から）

図版36　二の丸第17地点Ⅲｂ３期の遺構（6）
Pl.36 Features of phase Ⅲb3 at NM17(6)

1．2号溝（西から）

2．2号溝E－10区遺物出土状況（西から）

3．2号溝D－10区遺物出土状況（北西から）

4．2号溝セクション（東から）

5．2号溝石抜き取り跡セクション（西から）

図版37　二の丸第17地点Ⅲｂ４期の遺構（1）
Pl.37 Features of phase Ⅲb4 at NM17(1)

1．3号溝（北から）

2．3号溝セクション（北から）

3．6号溝（東から）

4．6号溝（東から）

5．6号溝セクション（北から）

6．4号土坑（西から）

7．4号土坑セクション（北から）

図版38　二の丸第17地点Ⅲｂ4期の遺構（2）
Pl.38 Features of phase Ⅲb4 at NM17(2)

1．14号土坑・27号溝（西から）

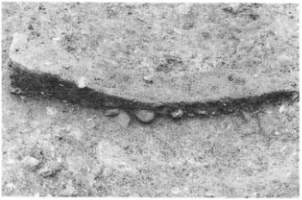
2．14号土坑セクション（東から）

3．14号土坑遺物出土状況（東から）

4．27号溝セクション（北から）

5．20号土坑（東から）

6．20号土坑セクション（北から）

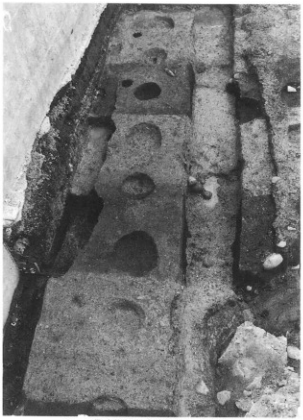


7．16号土坑セクション（東から）

8．21号土坑セクション（南から）

図版39　二の丸第17地点Ⅲｂ４期の遺構（3）・Ⅲｂ期（細分不明）の遺構
Pl.39 Features of phase Ⅲb4 and Ⅲb at NM17

1．1号建物（南から）



2．1号建物掘り方完掘状況（南から）

3．1号建物掘り方完掘状況（北から）

4．1号建物北辺セクション（東から）

5．1号建物柱11セクション（北から）

図版40　二の丸第17地点Ⅳ a 期の遺構（1）
Pl.40 Features of phase Ⅳa at NM17(1)

1．2号建物（南から）

2．2号建物掘り方完掘状況（南から）

3．2号建物石敷（東から）

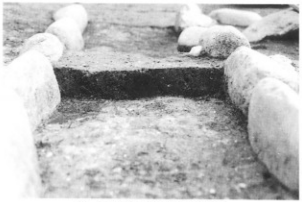
4．2号建物と19・20号溝（北から）

5．2号建物と19・20号溝（南から）

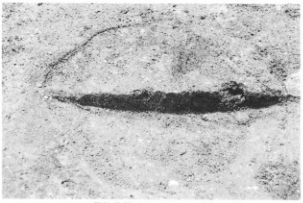
図版41　二の丸第17地点Ⅳａ期の遺構（2）
Pl.41 Features of phase Ⅳa at NM17(2)

1．2号建物と22・23号溝（西から）

2．2号建物と22・23号溝（北から）



3．23号溝セクション（南から）



4．2号建物柱53セクション（東から）

5．2号建物柱20根石（東から）

6．2号建物柱20セクション（東から）

7．2号建物柱57礎石抜き取り跡セクション（東から）

8．2号建物柱57根石セクション（東から）

図版42　二の丸第17地点Ⅳa期の遺構（3）
Pl.42 Features of phase Ⅳa at NM17(3)

1．24号溝（西から）

2．2号建物と24号溝（南から）

3．24号溝セクション（西から）

4．3号建物（西から）

5．3号建物柱7（東から）

6．3号建物西石列（南から）

図版43　二の丸第17地点Ⅳa期の遺構（4）
Pl.43 Features of phase Ⅳa at NM17(4)

1．3号建物南石列（東から）

2．瓦囲遺構（南から）

3．瓦囲遺構セクション（東から）

4．3号建物柱4根石（東から）

5．3号建物柱4セクション（北から）

6．3号建物柱8（南から）

7．3号建物柱14（北から）

図版44　二の丸第17地点Ⅳa期の遺構（5）
Pl.44 Features of phase Ⅳa at NM17(5)

1．30号溝（北から）

2．30号溝セクション（北から）

3．8号建物（南から）

4．8号建物柱6と8の間の穿（北から）

5．8号建物柱1セクション（西から）

6．8号建物柱2セクション（南から）

7．8号建物柱6（東から）

8．8号建物柱6セクション（南から）

図版45　二の丸第17地点Ⅳa期の遺構（6）
Pl.45 Features of phase Ⅳa at NM17(6)

1．31号溝（北西から）

2．17号溝セクション（西から）

3．14・29号溝（北から）

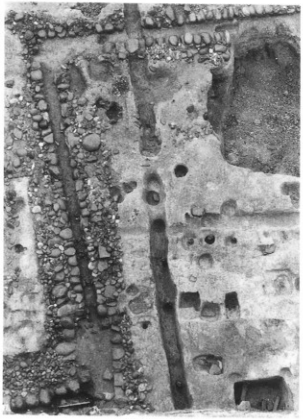
4．14号溝セクション（西から）

5．14号溝（東から）

6．29号溝（北から）

7．29号溝セクション（南から）

図版46　二の丸第17地点Ⅳａ期の遺構（7）
Pl.46 Features of phase Ⅳa at NM17(7)



1．1・2号塀（北から）

2．1号塀（北から）

3．1号塀柱1セクション（南から）

4．1号塀柱5セクション（南から）

5．2号塀柱4セクション（南から）

図版47　二の丸第17地点Ⅳb期の遺構（1）
PL47 Features of phase Ⅳb at NM17(1)

1．3・4号塀（南から）

2．3号塀（南から）

3．3号塀柱1セクション（北から）

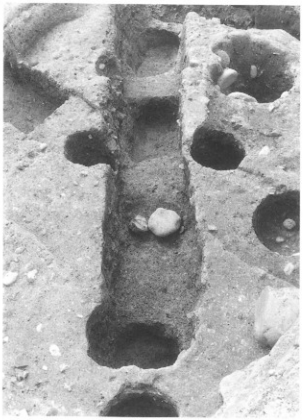
4．3号塀柱2セクション（北から）

5．3号塀柱3（西から）

6．3号塀柱5セクション（南から）

図版48　二の丸第17地点Ⅳb期の遺構（2）
Pl.48 Features of phase Ⅳb at NM17(2)

1．4号塀（南から）



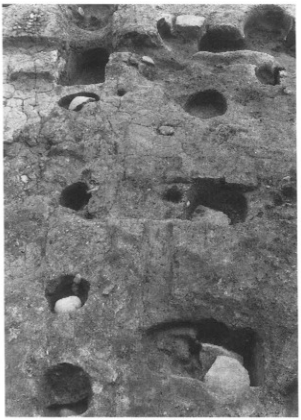
2．4号塀（南東から）

3．4号塀柱2セクション（北から）

4．4号塀柱3セクション（北から）

5．5号塀（東から）

図版49　二の丸第17地点Ⅳb期の遺構（3）
PL49 Features of phase Ⅳb at NM17(3)



1．6号柱列（北から）

2．6号柱列1セクション（南から）

3．7号柱列柱2セクション（北から）

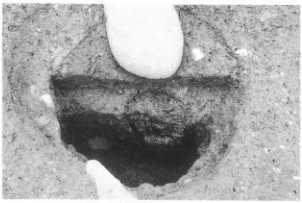
4．3号塀と8号柱列（北から）

5．8号柱列柱4セクション（北から）

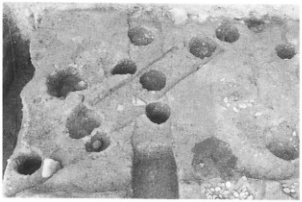
6．4号塀と8・9号柱列（南から）

図版50　二の丸第17地点Ⅳb期の遺構（4）
PL50 Features of phase Ⅳb at NM17(4)

1．9号柱列柱1（北西から）



2．9号柱列柱2（東から）



3．10号柱列（東から）

4．10号柱列柱4セクション（南から）

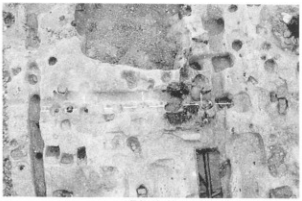
5．11・12号柱列（北から）

6．11号柱列柱2セクション（東から）

7．12号柱列柱1セクション（西から）

8．12号柱列柱3（北から）

図版51　二の丸第17地点Ⅳb類の遺構（5）
Pl.51 Features of phase Ⅳb at NM17(5)



1．13号柱列（北から）

2．13号柱列柱５セクション（南から）

3．13号柱列柱４（南から）

4．13号柱列柱６セクション（南から）

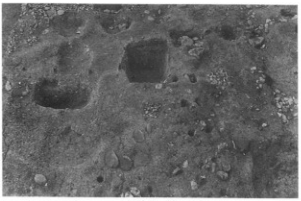
5．13号柱列柱９セクション（西から）

6．14・15号柱列（西から）

7．14号柱列柱２セクション（東から）

8．15号柱列柱２セクション（東から）

図版52　二の丸第17地点Ⅳｂ期の遺構（6）
Pl.52 Peatures of phase Ⅳb at NM17(6)



1．7号建物（東から）

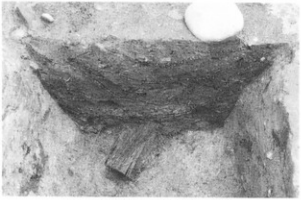
2．7号建物柱3セクション（東から）

3．7号建物柱5セクション（東から）

4．7号建物柱9（南から）

5．7号建物柱11（南から）

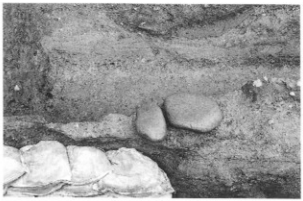
6．6号土坑（南から）



7．6号土坑セクション（西から）

8．6号土坑遺物出土状況（西から）

図版53　二の丸第17地点Ⅳb期の遺構（7）
Pl.53 Features of phase Ⅳb at NM17(7)



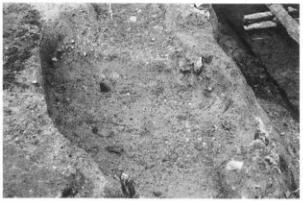
1．1号土坑（南から）

2．8号土坑（東から）

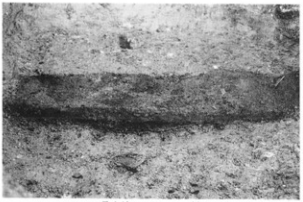
3．11号土坑（南から）

4．18号土坑（東から）

5．18号土坑セクション（南から）



6．32号土坑（南から）

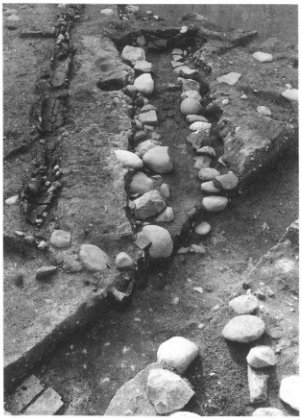


7．32号土坑セクション（南から）

8．32号土坑遺物出土状況（南東から）

図版54　二の丸第17地点Ⅳb期の遺構（8）
Pl.54 Features of phase Ⅳb at NM17(8)

1．1号溝とその周辺（南から）

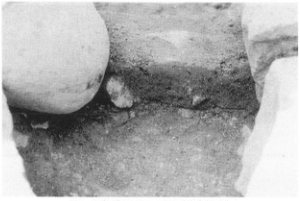


2．1号溝と1号暗渠（南東から）

3．1号溝セクション（北西から）

4．15号溝（東から）

5．1号溝と13号溝（東から）



6．13号溝セクション（北東から）

図版55　二の丸第17地点Ⅳc 期の遺構（1）
Pl.55 Features of phase Ⅳc at NM17(1)

1．12号溝（西から）

2．12号溝セクション（南西から）

3．1号木樋（西から）

4．2号木樋（北から）

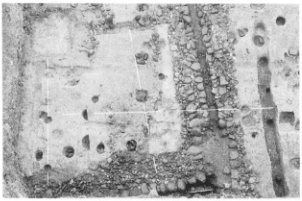
5．2号木樋セクション（南から）

6．1号暗渠の土管（南西から）

図版56　二の丸第17地点Ⅳc期の遺構（2）
Pl.56 Features of phase Ⅳc at NM17(2)

1．6号建物、1・2号柱列（北から）

2．6号建物柱4（北から）



3．3・4・5号柱列（北から）

4．28号土坑（南から）

5．31号土坑（南から）

6．16号溝と5・10号土坑（東から）

図版57　二の丸第17地点Ⅳc期の遺構（3）
PL57 Features of phase Ⅳc at NM17(3)

1．5号土坑（南から）

2．5号土坑セクション（東から）

3．10号土坑セクション（北から）

4．1号石敷（北から）

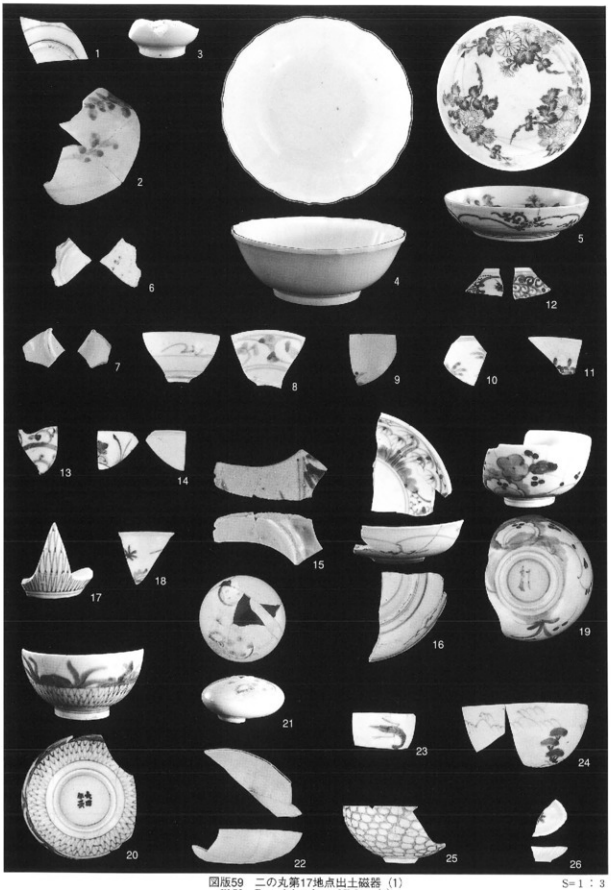
5．12号土坑セクション（南西から）

6．瓦溜セクション（東から）

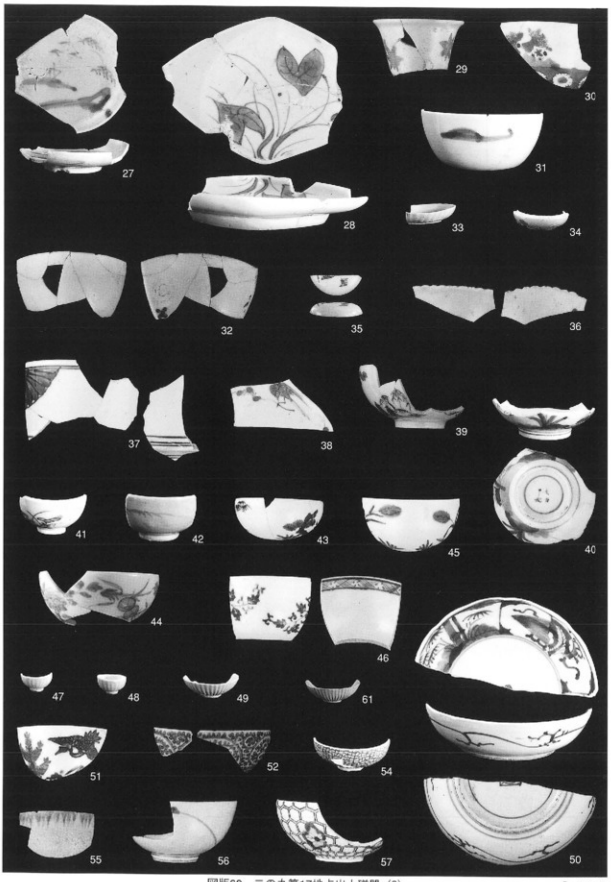
7．9号土坑（北から）

8．13号土坑セクション（北から）

図版58　二の丸第17地点Ⅳc期の遺構（4）
Pl.58 Features of phase Ⅳc at NM17(4)

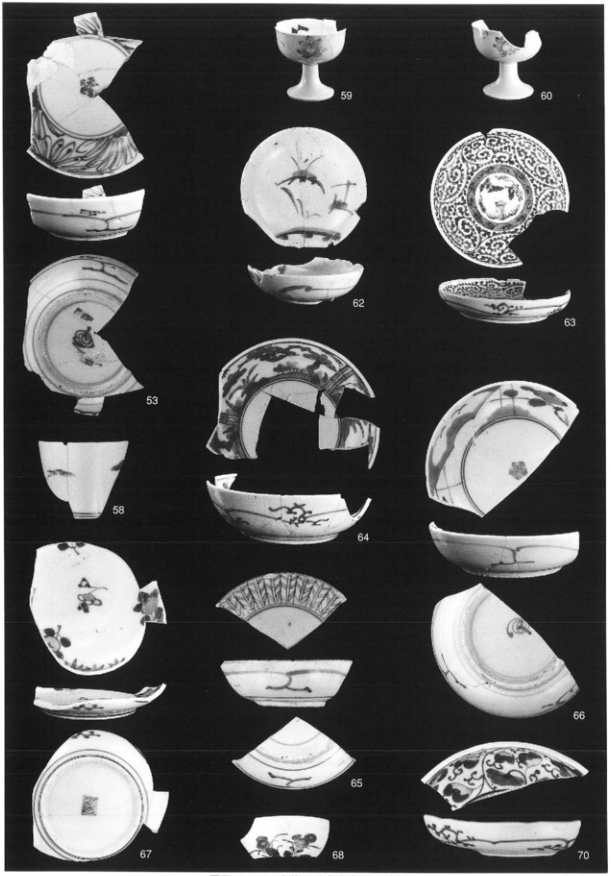


図版59　二の丸第17地点出土磁器（1）　S=1：3
Pl.59　Porcelains from NM17 (1)

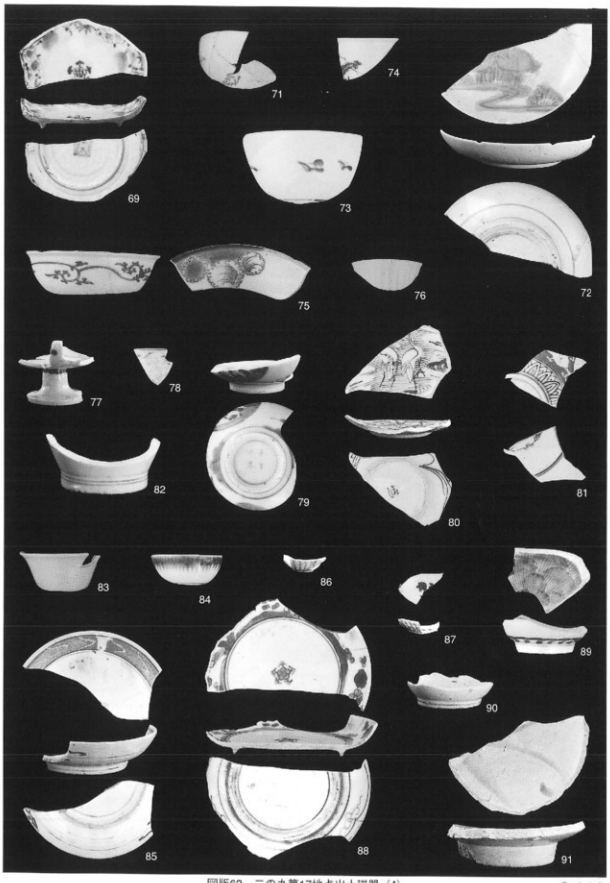


図版60　二の丸第17地点出土磁器（2）
PL60　Porcelains from NM17（2）

S=1：3

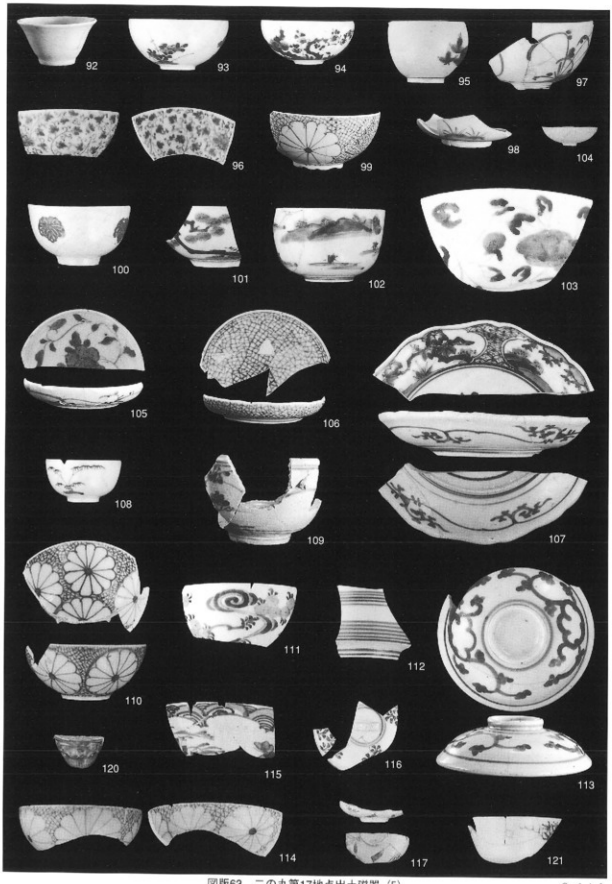


図版61　二の丸第17地点出土磁器（3）　S＝1：3
Pl.61　Porcelains from NM17（3）

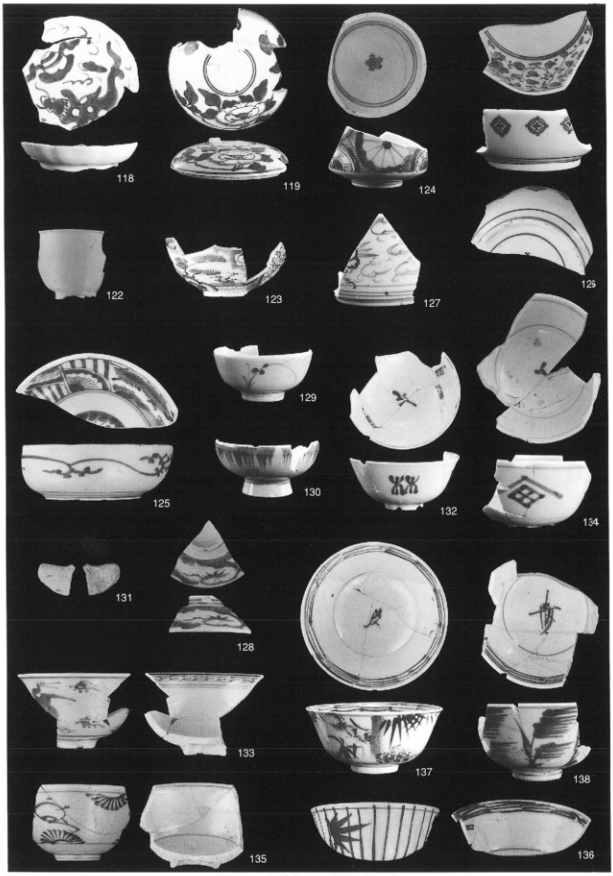


図版62　二の丸第17地点出土磁器（4）
PL62　Porcelains from NM17（4）

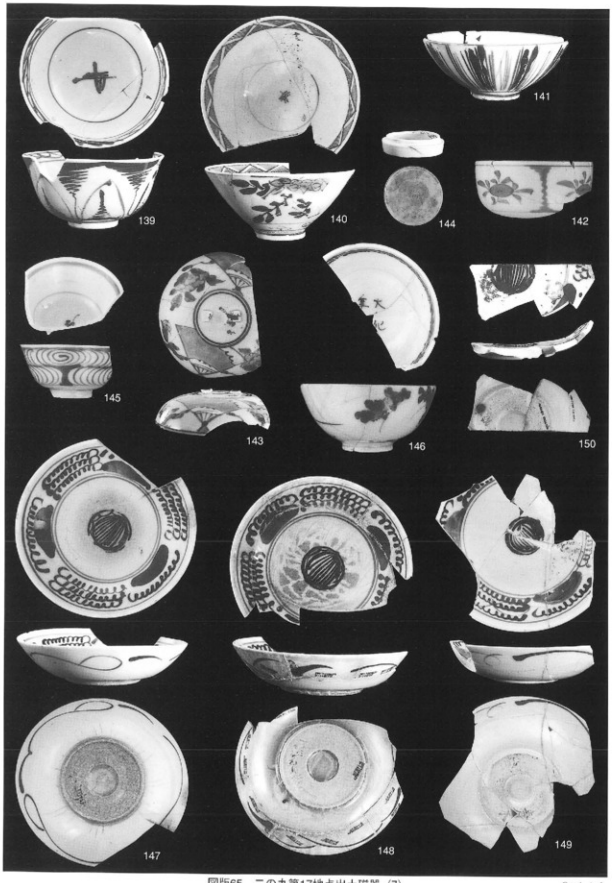
S=1：3



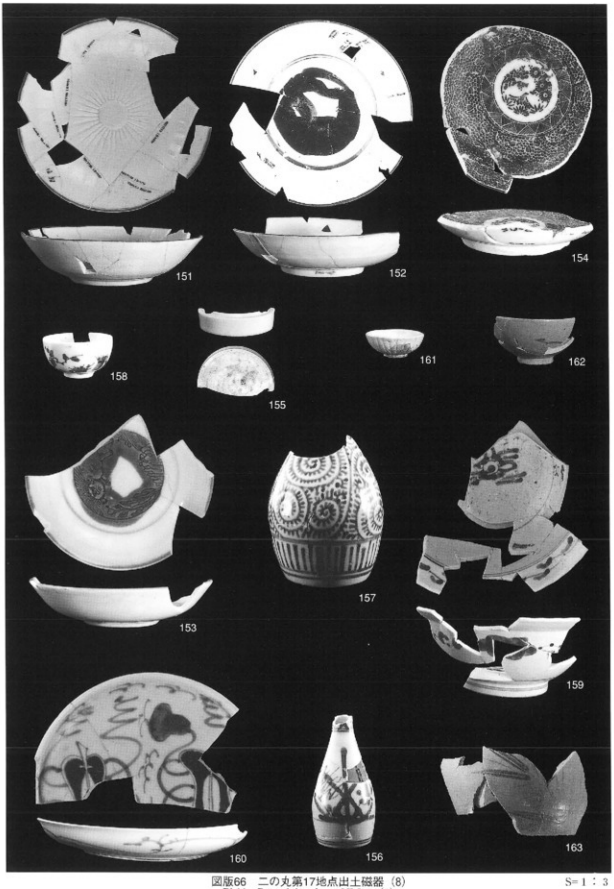
図版63　二の丸第17地点出土磁器（5）　S=1：3
Pl.63　Porcelains from NM17（5）



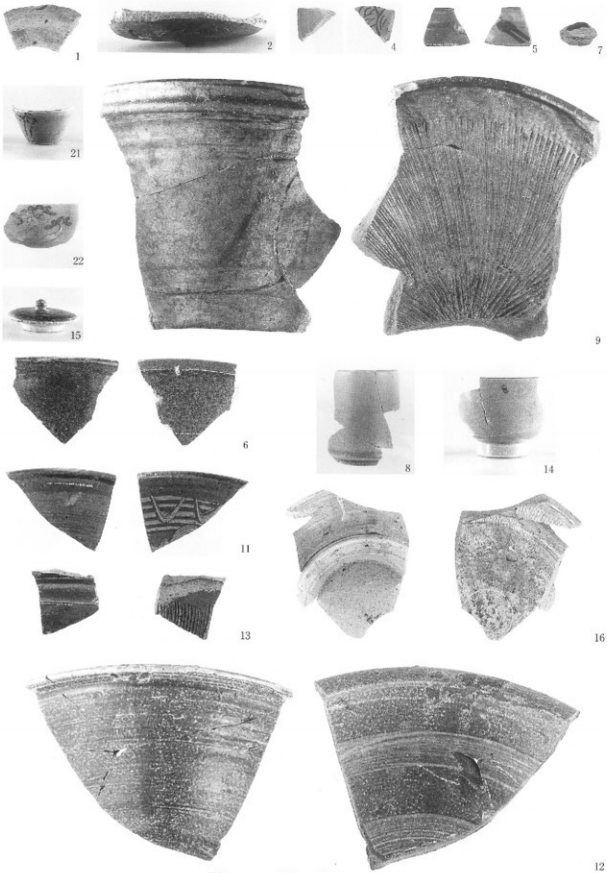
図版64　二の丸第17地点出土磁器（6）　S=1：3
PL64　Porcelains from NM17（6）



図版65　二の丸第17地点出土磁器（7）　S=1：3
Pl.65　Porcelains from NM17（7）



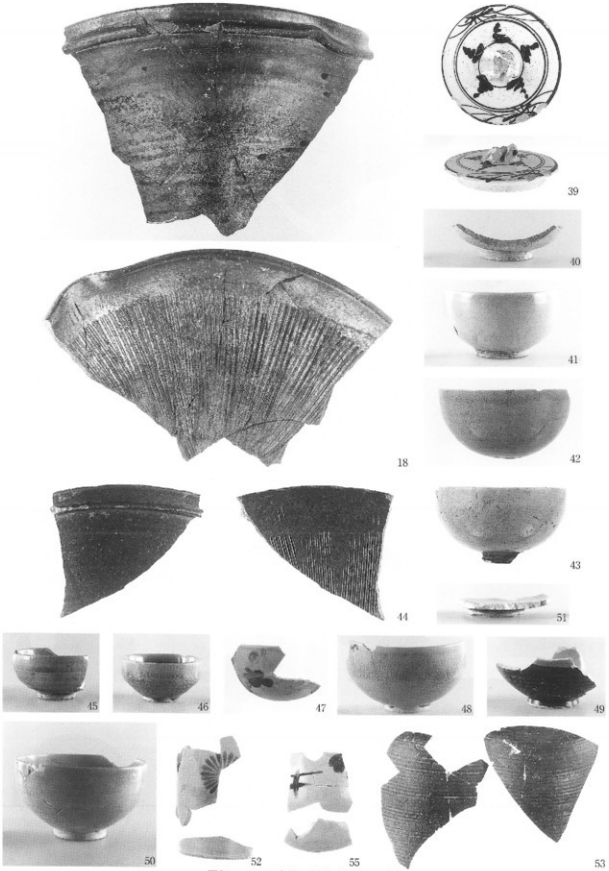
図版66　二の丸第17地点出土磁器（8）　S=1：3
Pl.66　Porcelains from NM17（8）



図版67　二の丸第17地点出土陶器（1）　S=1：3
Pl.67　Glazed ceramics from NM17（1）

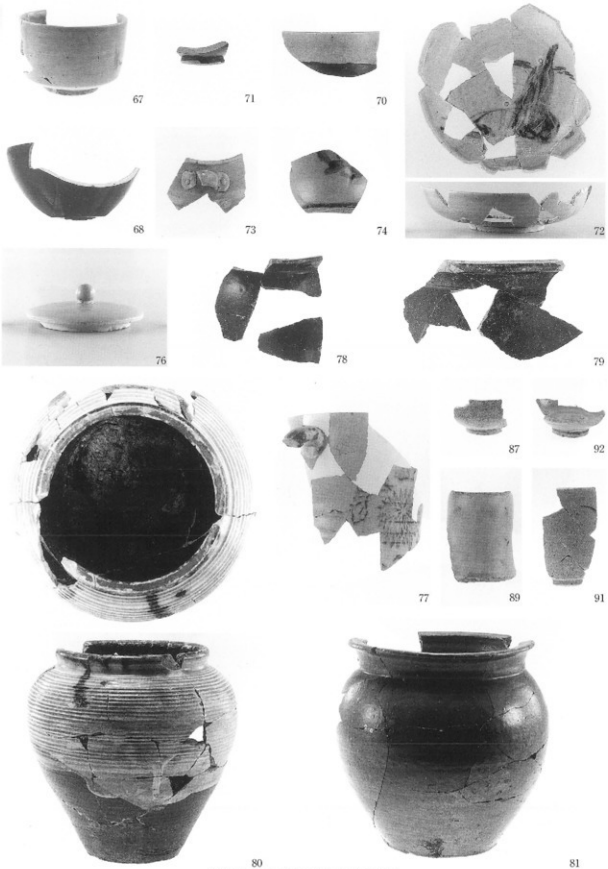
図版68　二の丸第17地点出土陶器（2）
PL68　Glazed ceramics from NM17（2）

S=1：3



図版69　二の丸第17地点出土陶器（3）　S=1：3
Pl.69　Glazed ceramics from NM17 (3)

図版70　二の丸第17地点出土陶器（4）　S=1：3
Pl.70　Glazed ceramics from NM17（4）



図版71　二の丸第17地点出土陶器（5）
Pl.71　Glazed ceramics from NM17（5）

S=1：3

82

86

83

84

85

88

93

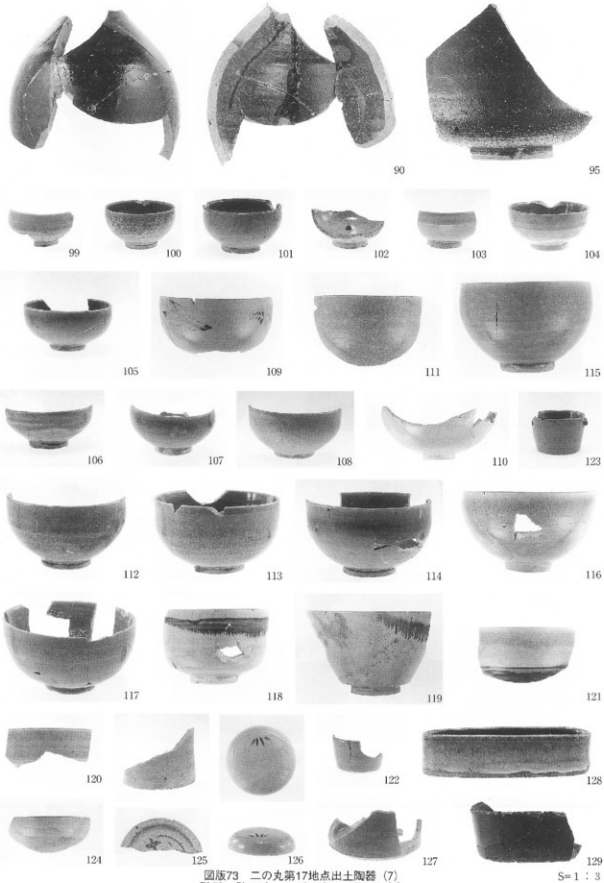
94

96

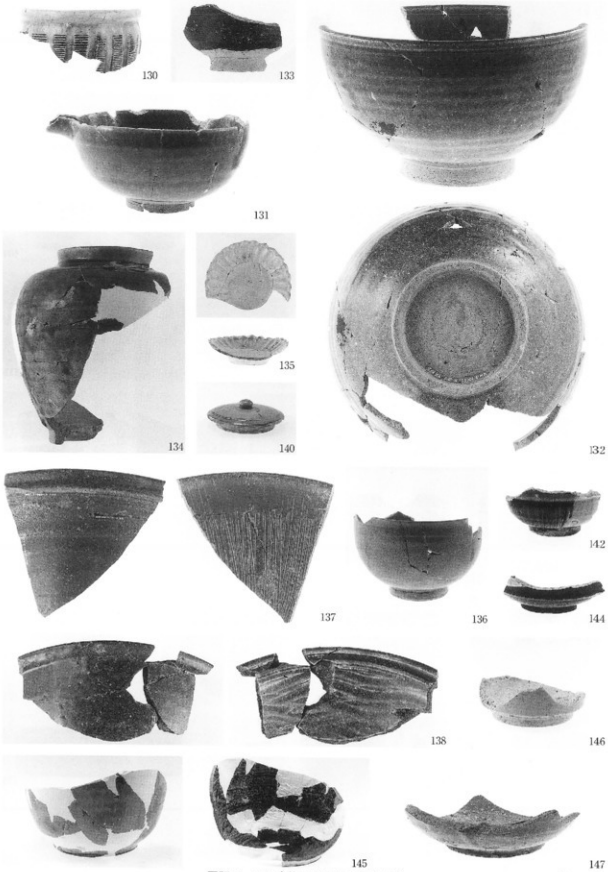
97

98

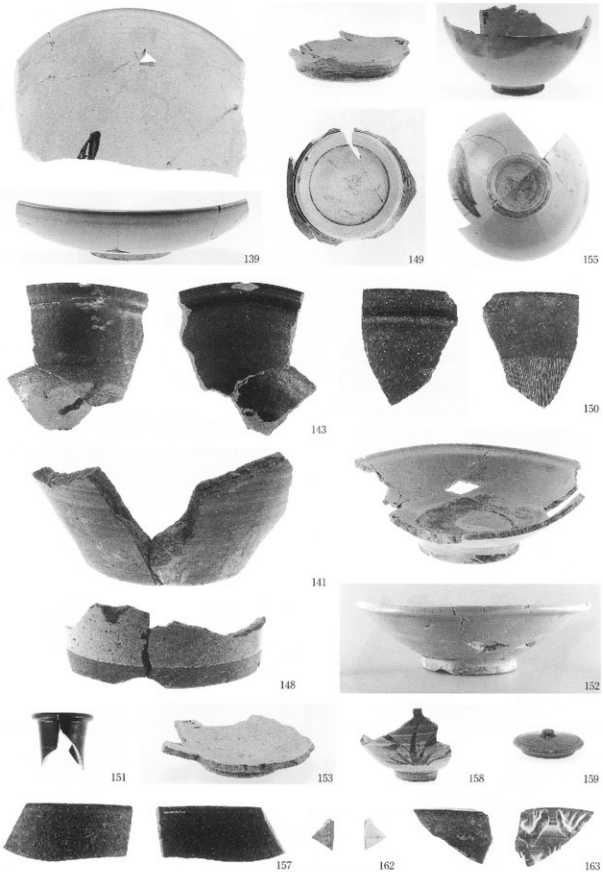
図版72　二の丸第17地点出土陶器（6）　S=1：3
Pl.72　Glazed ceramics from NM17 (6)



図版73　二の丸第17地点出土陶器（7）　S=1：3
PL73　Glazed ceramics from NM17（7）



図版74　二の丸第17地点出土陶器（8）　S=1：3
Pl.74　Glazed ceramics from NM17（8）



図版75　二の丸第17地点出土陶器（9）
Pl.75　Glazed ceramics from NM17（9）

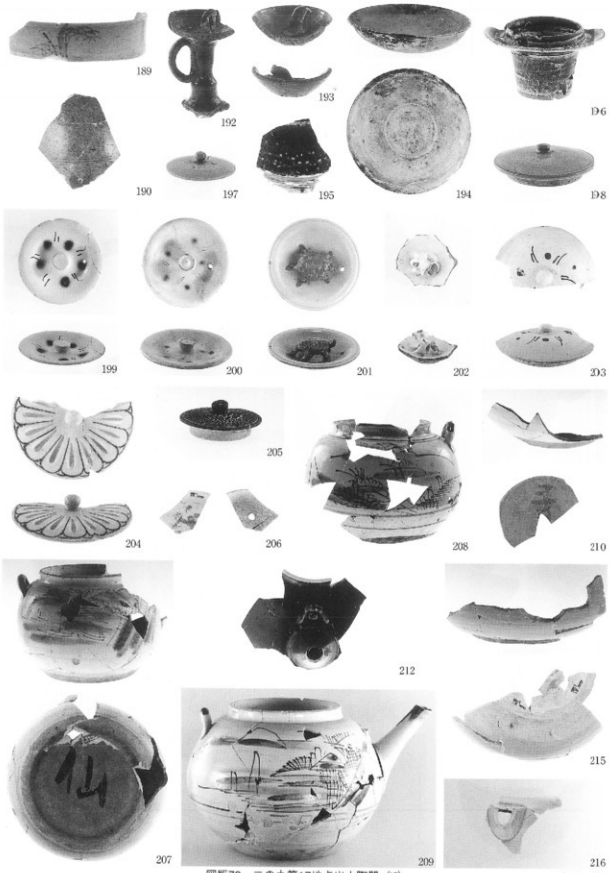
S=1：3

図版76　二の丸第17地点出土陶器（10）
Pl.76　Glazed ceramics from NM17（10）

S=1：3

図版77　二の丸第17地点出土陶器 (11)
Pl.77　Glazed ceramics from NM17 (11)

S=1：3



図版78　二の丸第17地点出土陶器（2）
Pl.78　Glazed ceramics from NM17 (2)

S＝1：3

211

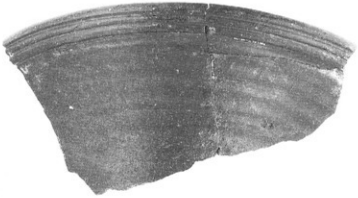
213

217

220

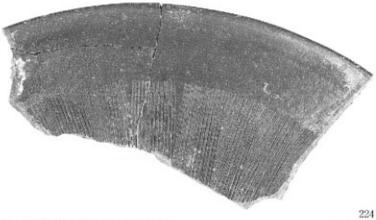
219

214



218

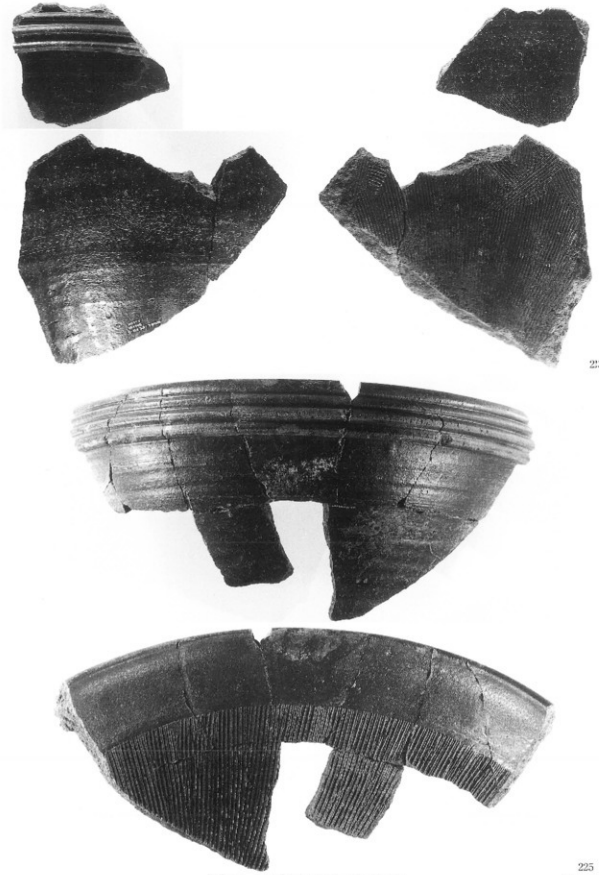
222



224

図版79　二の丸第17地点出土陶器 (13)
Pl.79　Glazed ceramics from NM17 (13)

S=1：3



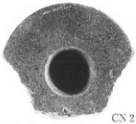
223

225
S=1：3

図版80　二の丸第17地点出土陶器（4）
Pl.80　Glazed ceramics from NM17（4）

226

221

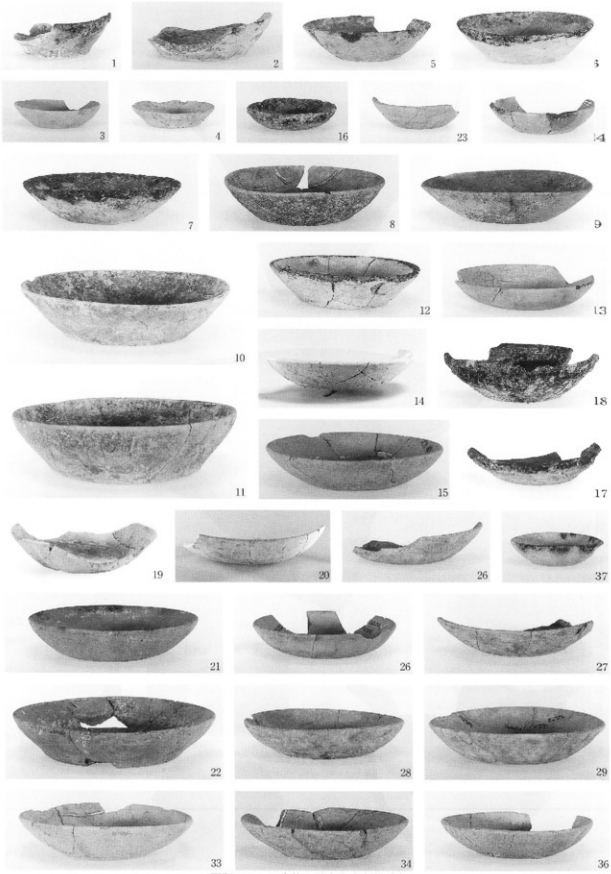


CN 2

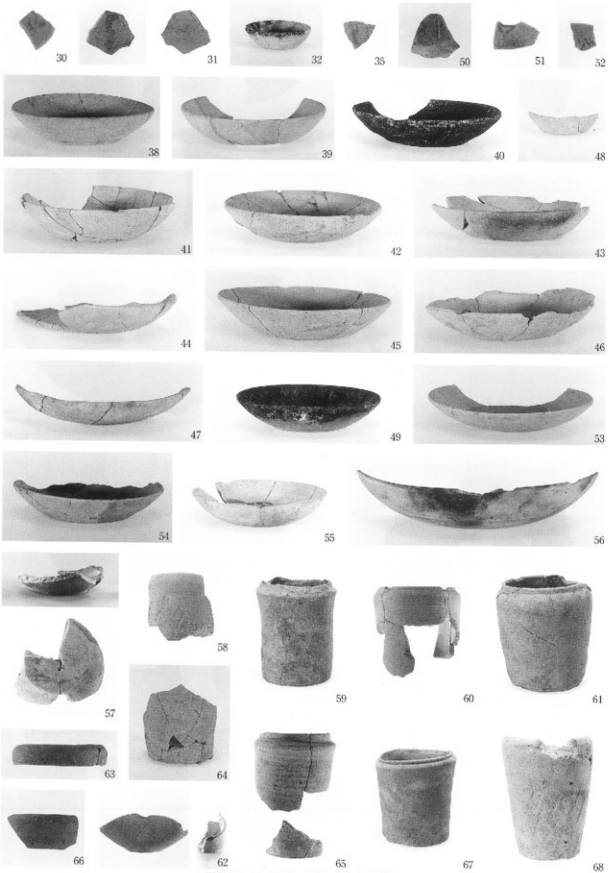
CN 1

図版81　二の丸第17地点出土陶器 (15) ・軟質施釉陶器
Pl.81　Glazed ceramics and lead glazed soft ceramics from NM17

CN 1・2 S=1：2
その他は S=1：3



図版82　二の丸第17地点出土土器（1）　S=1：3
Pl.82　Unglazed ceramics from NM17（1）

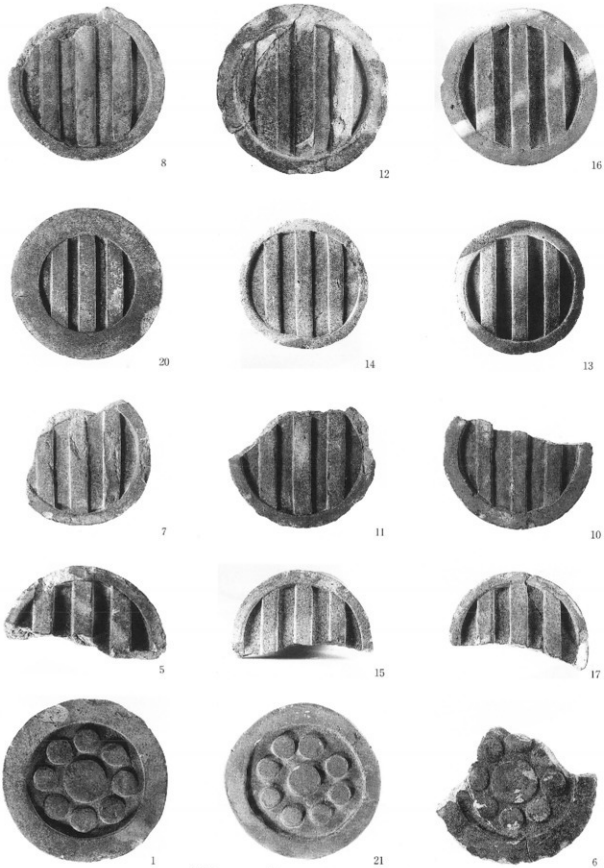


図版83　二の丸第17地点出土土器（2）
PL83　Unglazed ceramics from NM17（2）

S=1：3

図版84　二の丸第17地点出土土器（3）・土製品・人形
Pl.84　Unglazed ceramics, clay objects and figures from NM17

CG 1～13　S＝1：3
CO 1～4　S＝2：3
CG13－1　S＝2：5
CG13－2・3　S＝1：3

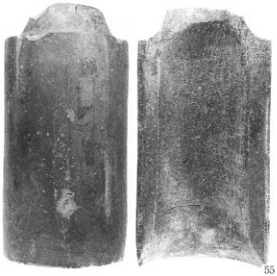


図版85　二の丸第17地点出土軒丸瓦類（1）
PL85　Round eaves tiles from NM17（1）

S=1：4

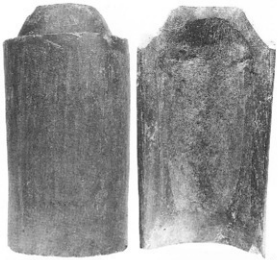
図版86　二の丸第17地点出土軒丸瓦類（2）・軒平瓦類（1）　S=1：4
PL86　Round eaves tiles and flat eaves tiles from NM17

図版87　二の丸第17地点出土軒平瓦類（2）・軒桟瓦　S=1：4
Pl.87　Flat eaves tiles and eaves-pan tiles from NM17

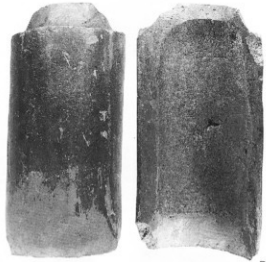


55

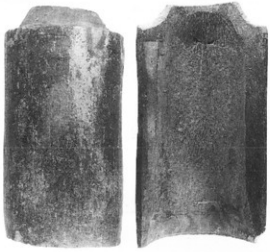
56



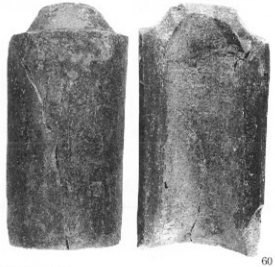
57



58



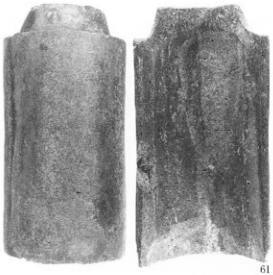
59



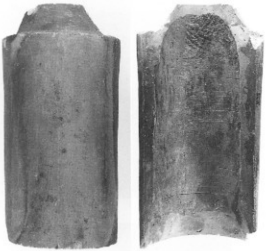
60

図版88　二の丸第17地点出土丸瓦（1）
PL88　Round roof tiles from NM17（1）

S=1：5

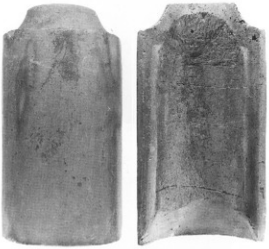


61

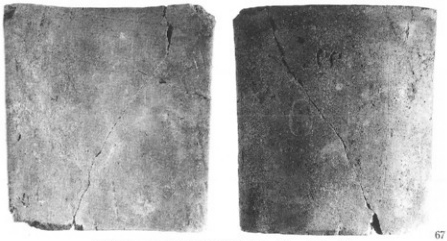


62

63



64



67

図版89　二の丸第17地点出土丸瓦（2）・平瓦（1）　S=1：5
Pl.89　Round roof tiles and flat roof tiles from NM17

68

69

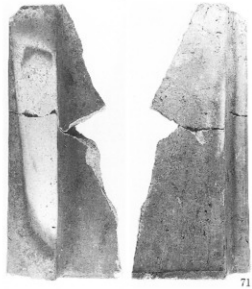
66

70

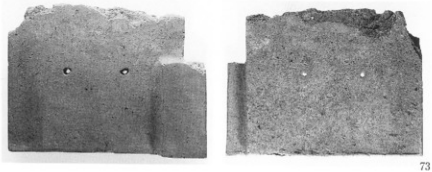
図版90　二の丸第17地点出土平瓦（2）
Pl.90　Flat roof tiles from NM17（2）

S=1：5

65



71

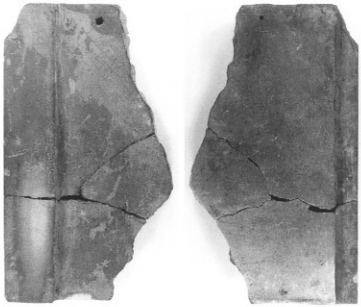


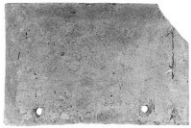
73

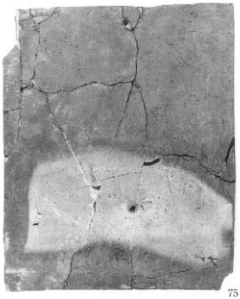
74

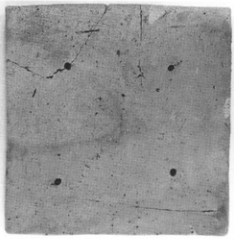
S=1：5

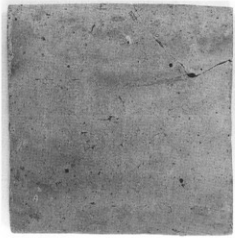
図版91　二の丸第17地点出土平瓦（3）・板塀瓦（1）
Pl.91　Flat roof tiles and pan tiles used for fence from NM17


72


80


75



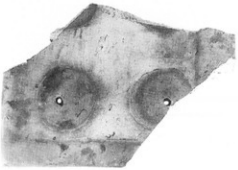

78

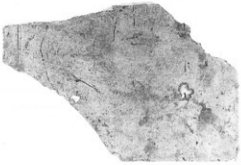
S=1：5

図版92　二の丸第17地点出土板状瓦（2）・板状瓦（1）
Pl.92　Pan tiles used for fence and various roof tiles from NM17

76

77

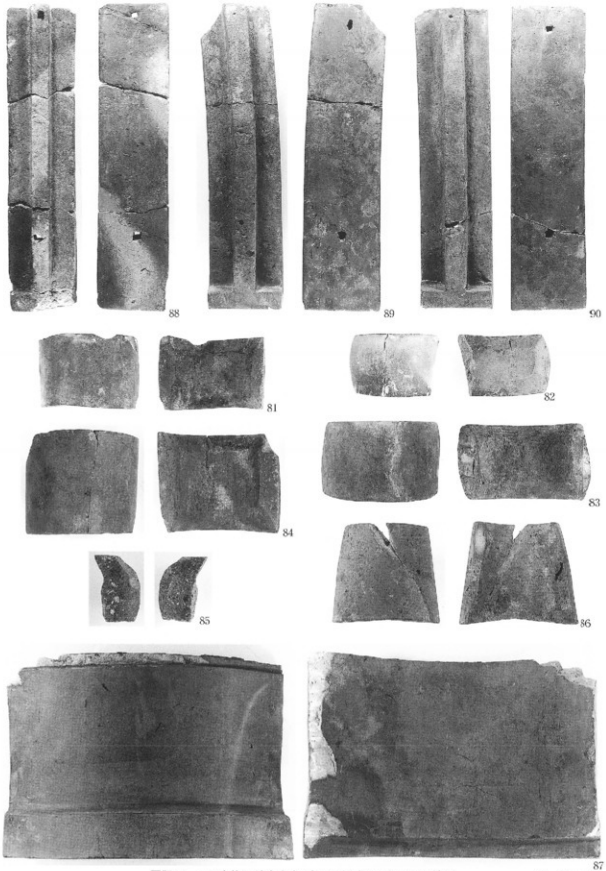




79

S=1：5

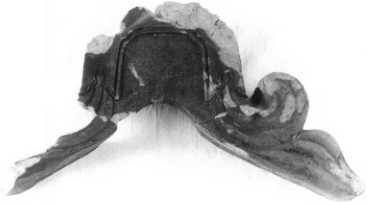
図版93　二の丸第17地点出土板状瓦（2）
Pl.93　Various roof tiles from NM17（2）

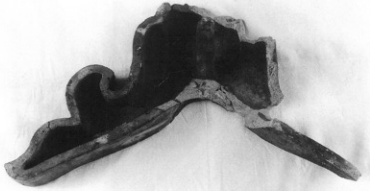


図版94　二の丸第17地点出土T字瓦・輪違い・面戸瓦・棟瓦
Pl.94　Various roof tiles from NM17

87　S＝1：4
他はS＝1：5

91

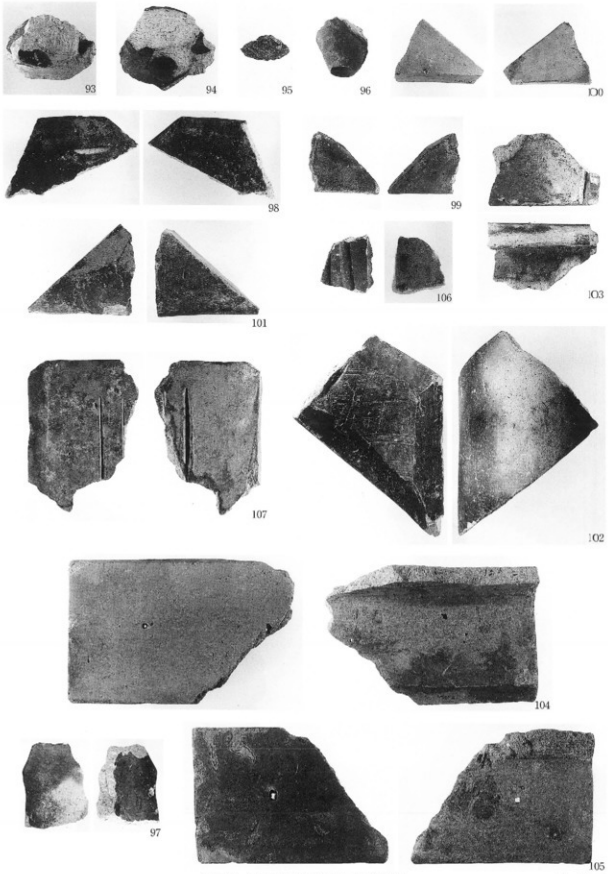




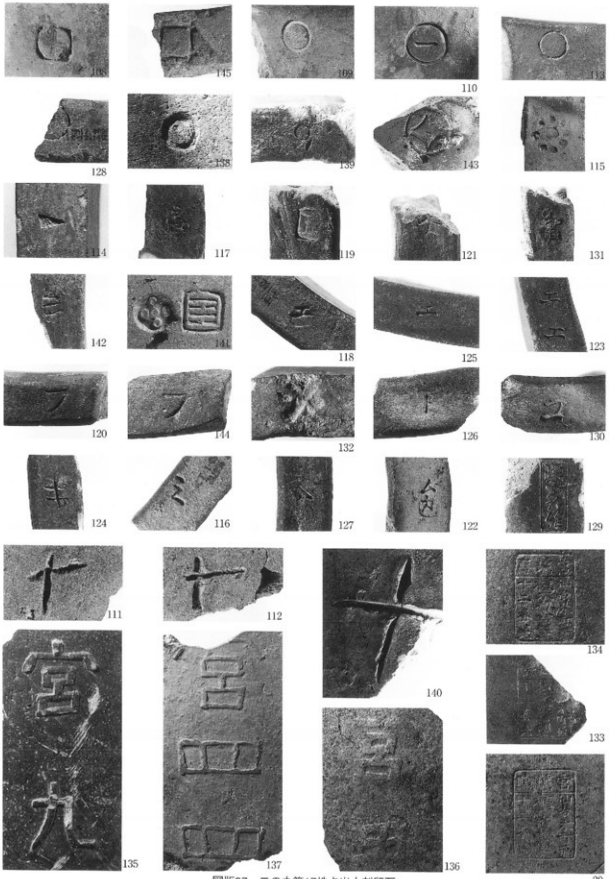
92

S=1：8

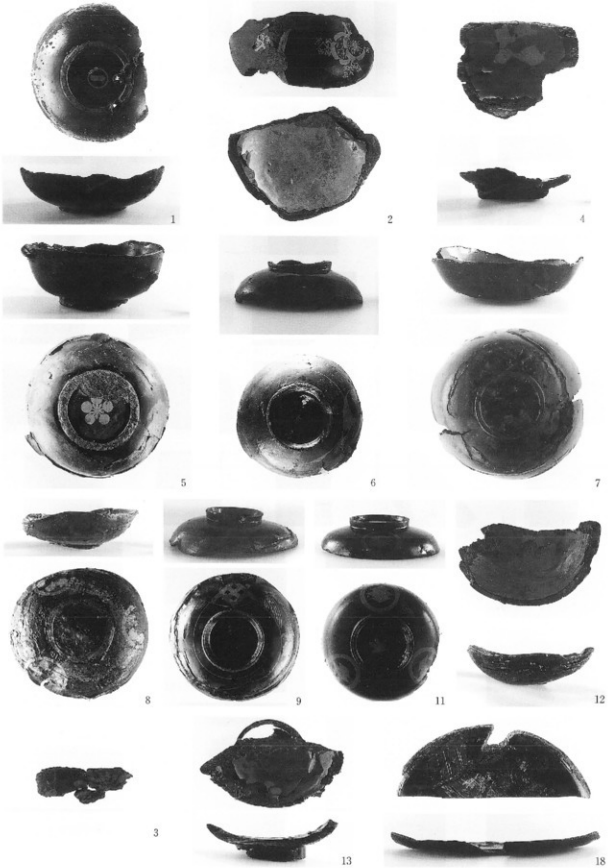
図版95　二の丸第17地点出土鬼瓦
Pl.95　Terminal ridge-end tile from NM17



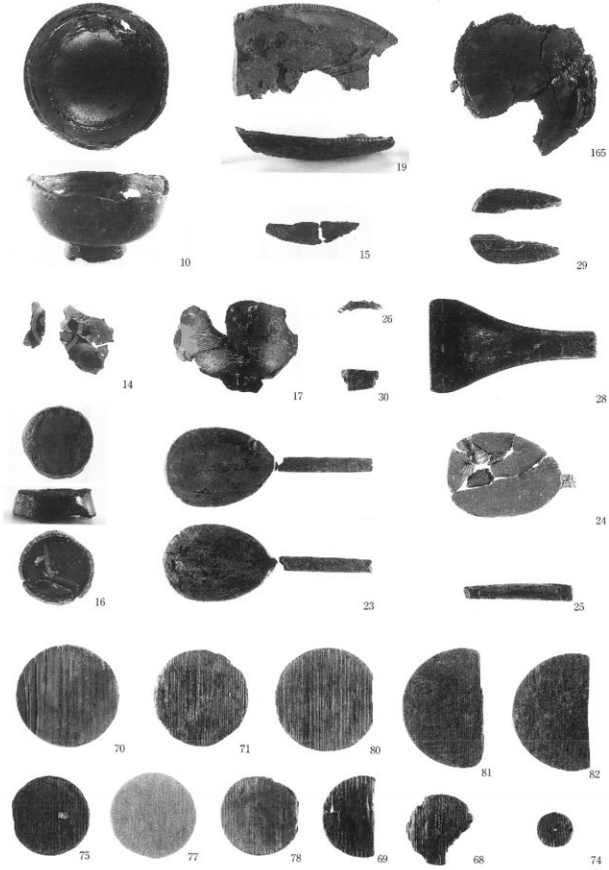
図版96　二の丸第17地点出土その他の瓦　S=1：4
Pl.96　Various roof tiles from NM17



図版97　二の丸第17地点出土刻印瓦
Pl.97　Roof tiles with seal impression from NM17　S=4：5

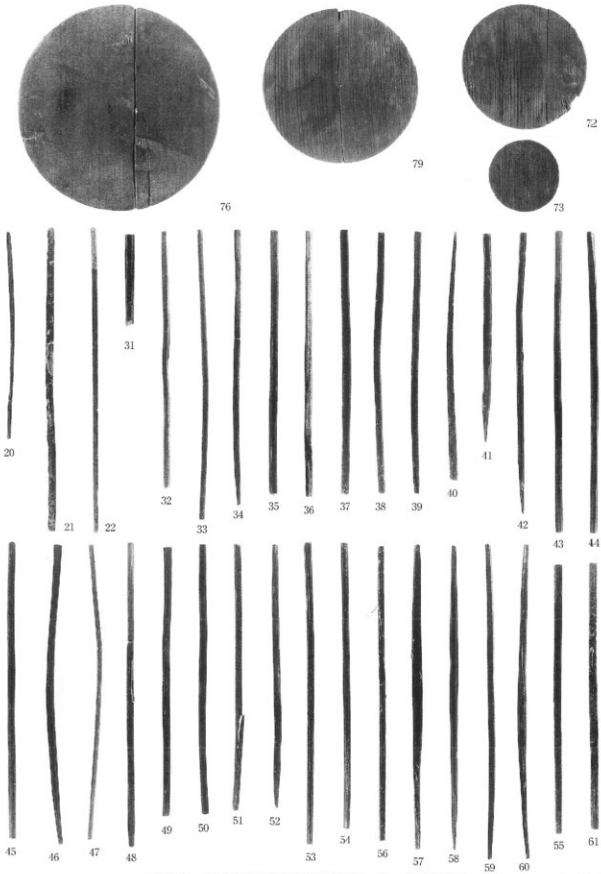


図版98　二の丸第17地点出土漆椀（1）・漆皿　S=1：3
Pl.98　Bowls with lacquer from NM17



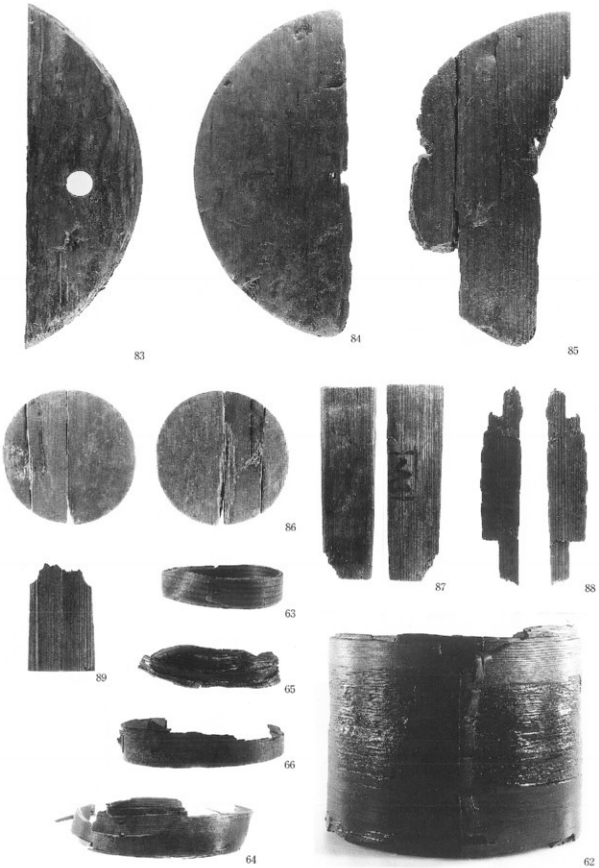
図版99　二の丸第17地点出土漆椀（2）・その他の漆塗製品・円板状木製品（1）　S=1：3

Pl.99　Bowls and various wooden implements with lacquer, wooden implements shaped round plate from NM17



図版100　二の丸第17地点出土円板状木製品（2）・箸状木製品　S＝1：3

Pl.100　Wooden implements shaped round plate and wooden chopsticks from NM17



62～66　S＝1：3
83～89　S＝1：4

図版101　二の丸第17地点出土桶類・曲物（1）

Pl.101　Troughs and round vessels by bending and securing a thin sheet of cypress wood from NM17

図版102　二の丸第17地点出土曲物（2）・楔　S=1：3

PL102　Round vessels by bending and securing a thin sheet of cypress wood, and wooden implements shaped wedge from NM17

164

98

99

27

100

94

95

96

97

90

91

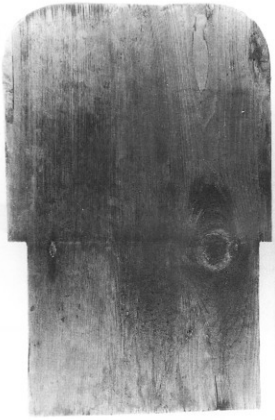
92

93

図版103　二の丸第17地点出土櫛・下駄・栓
Pl.103　Combs, clogs and wooden plugs from NM17

27・98～100・164　S＝1：2
90～93　S＝1：3
94～97　S＝1：4

126



127

101

102

103

105

107

104

110

109

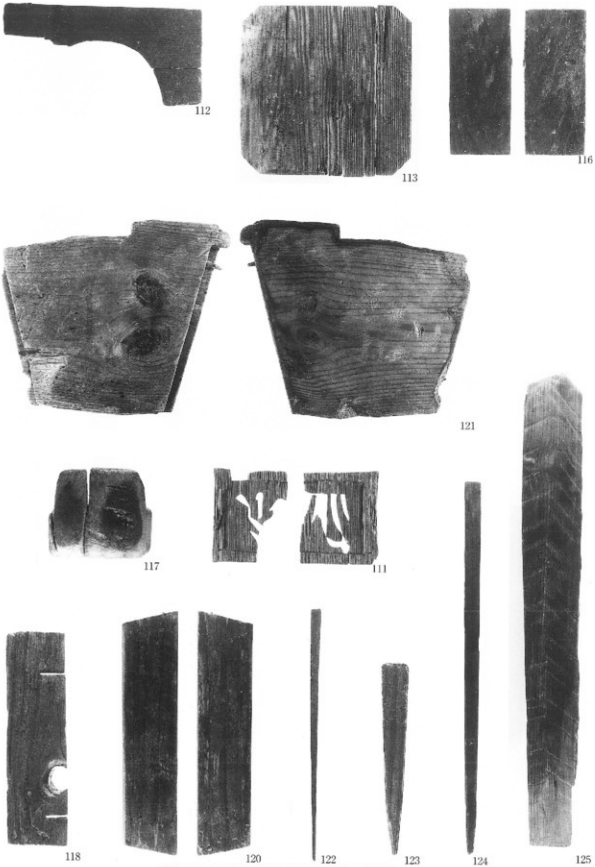
106

115

114

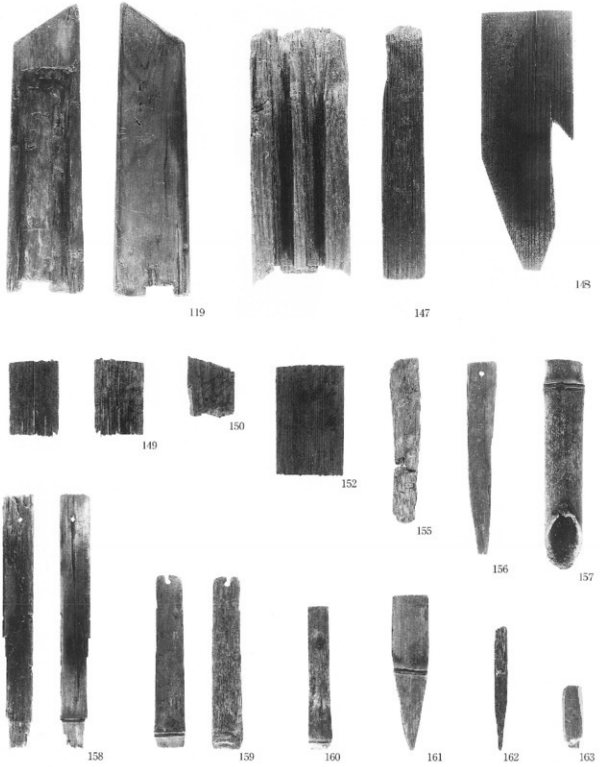
図版104　二の丸第17地点出土その他の木製品（1）
PL104　Various wooden implements from NM17（1）

126・127 S=1：4
その他は S=1：3

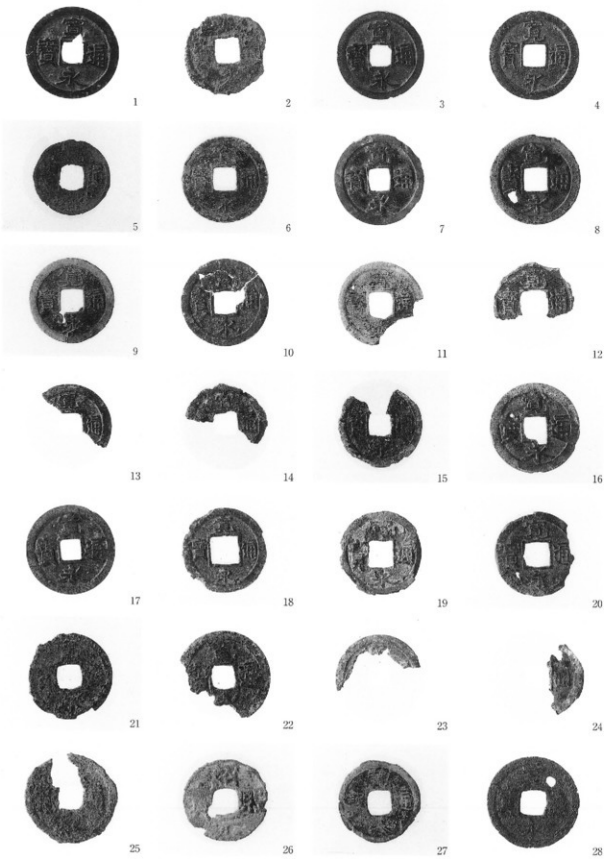


図版105　二の丸第17地点出土その他の木製品（2）
Pl.105　Various wooden implements from NM17（2）

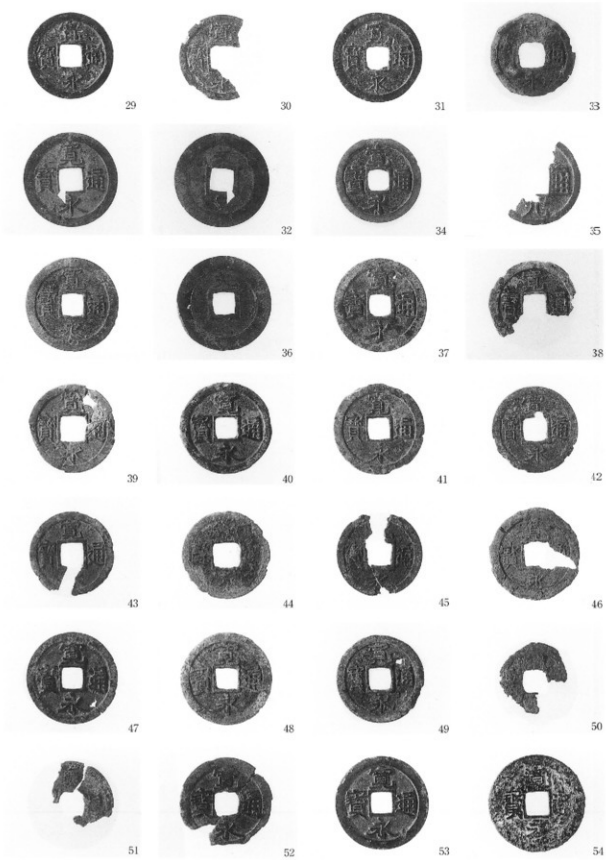
112～123 S=1：3
124・125 S=1：4



図版106　二の丸第17地点出土その他の木製品（3）　S=1：4
Pl.106　Various wooden implements from NM17（3）

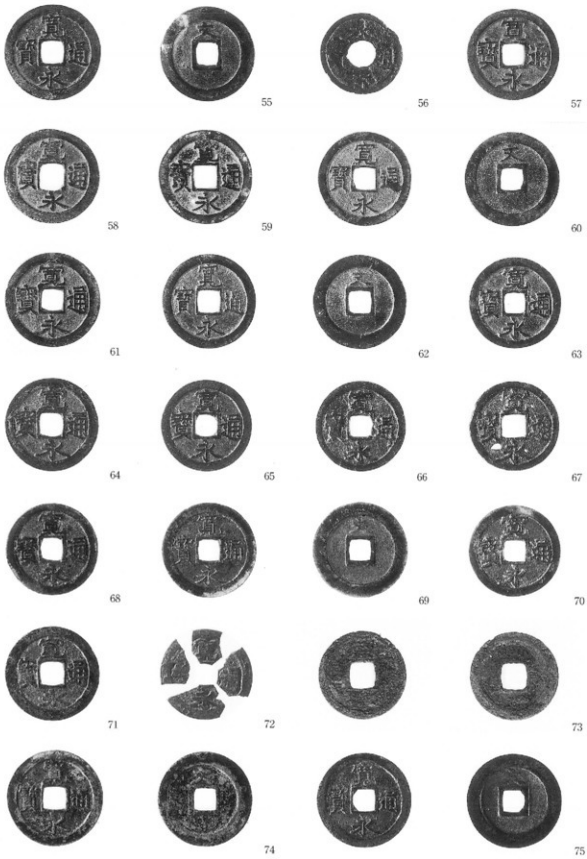


図版107　二の丸第17地点出土古銭（1）　S=1：1
PL107　Coins from NM17（1）



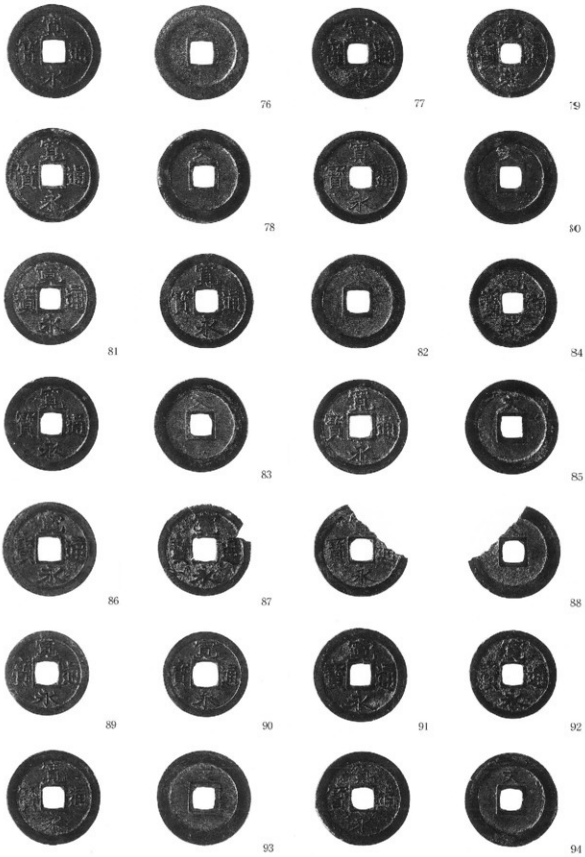
図版108　二の丸第17地点出土古銭（2）
PL108　Coins from NM17（2）

S=1：1



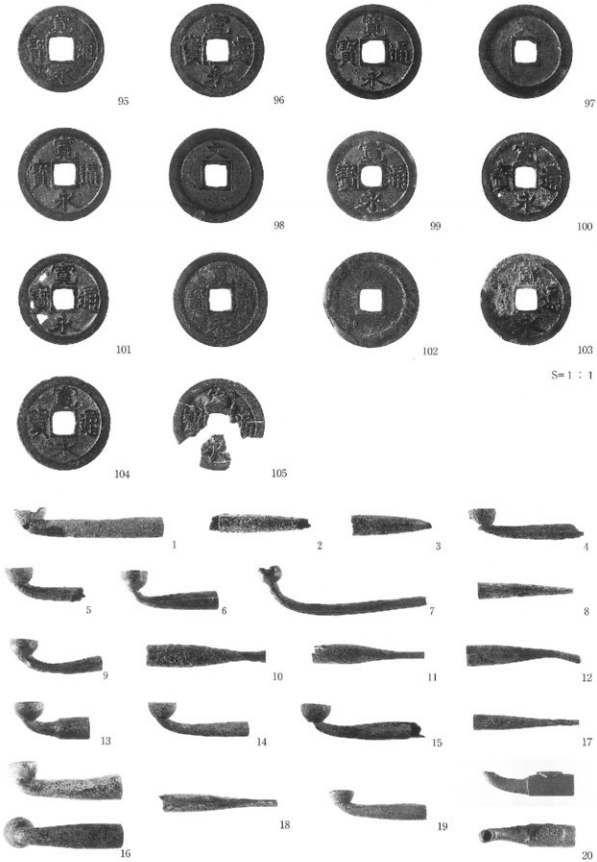
図版109　二の丸第17地点出土古銭（3）
Pl.109　Coins from NM17（3）

S=1：1

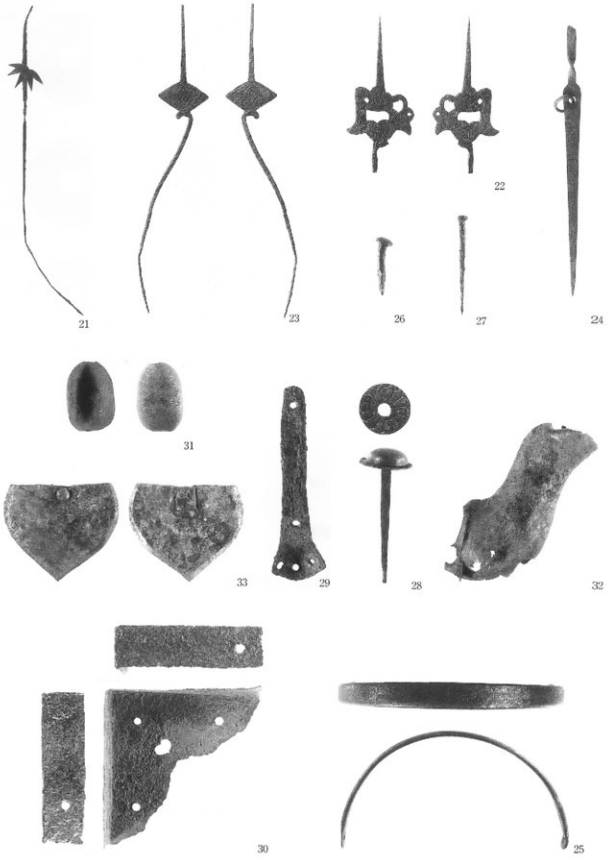


図版110　二の丸第17地点出土古銭（4）
Pl.110　Coins from NM17（4）

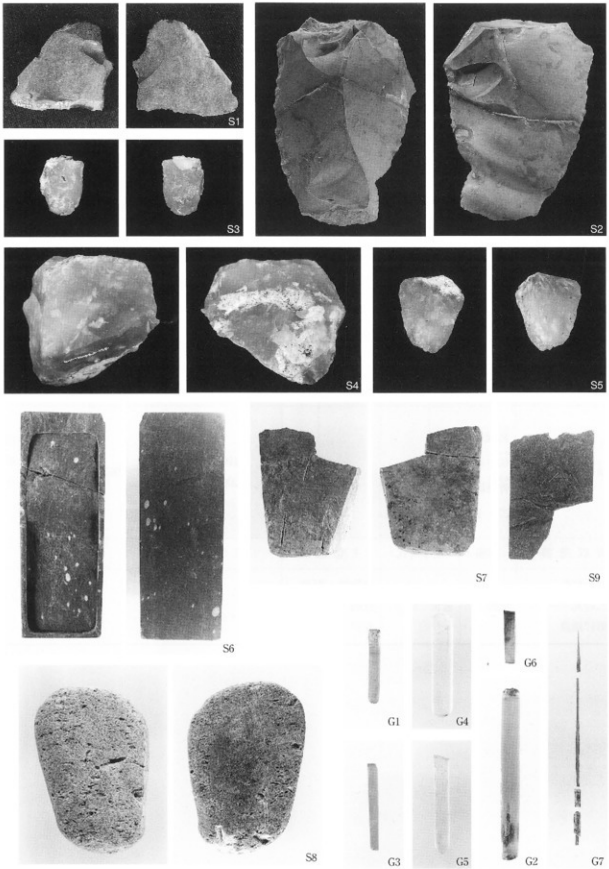
S=1：1



図版111　二の丸第17地点出土古銭（5）・煙管　S=1：4
Pl.111 Coins and pipes from NM17



図版112　二の丸第17地点出土その他の金属製品　S=4：5
Pl.112　Various metal implements from NM17



図版113　二の丸第17地点出土石器・石製品・ガラス製品
PL113　Stone tools, stone-made objects and glass implements from NM17

S1～5　S＝4：5
S6～9　S＝1：3
G1～7　S＝1：2

報告書抄録

ふりがな	とうほくだいがくまいぞうぶんかざいちょうさねんぽう
書名	東北大学埋蔵文化財調査年報
副書名	
巻次	18
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	藤沢　敦・柴田恵子・高木暢亮
編集機関	東北大学埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒980-8577　宮城県仙台市青葉区片平二丁目1－1　TEL022-217-4995
発行年月日	西暦2005年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 (世界測地系)	東経 (世界測地系)	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
せんだいじょうあと 仙台城跡	みやぎけん 宮城県 せんだいし 仙台市 あおばくかわうち 青葉区川内 27－1	04100	01033	38° 15′ 26″	140° 51′ 04″	1998.6.1～8.7 2000.3.1～12.21	957	文科系4学部総合研究棟新営計画に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
仙台城跡 二の丸 第17地点	城館	近世	建物跡・塀跡・柱列・石組溝・井戸・土坑	陶磁器・土器・瓦・木製品・金属製品	

東北大学埋蔵文化財調査年報18

平成17年３月31日

発行　東北大学埋蔵文化財調査研究センター
〒980-8577 仙台市青葉区片平２丁目１－１
東北大学生命科学研究科内
ＴＥＬ　022（217）4995

印刷　株式会社 東　北　プ　リ　ン　ト
ＴＥＬ　022（263）1166